

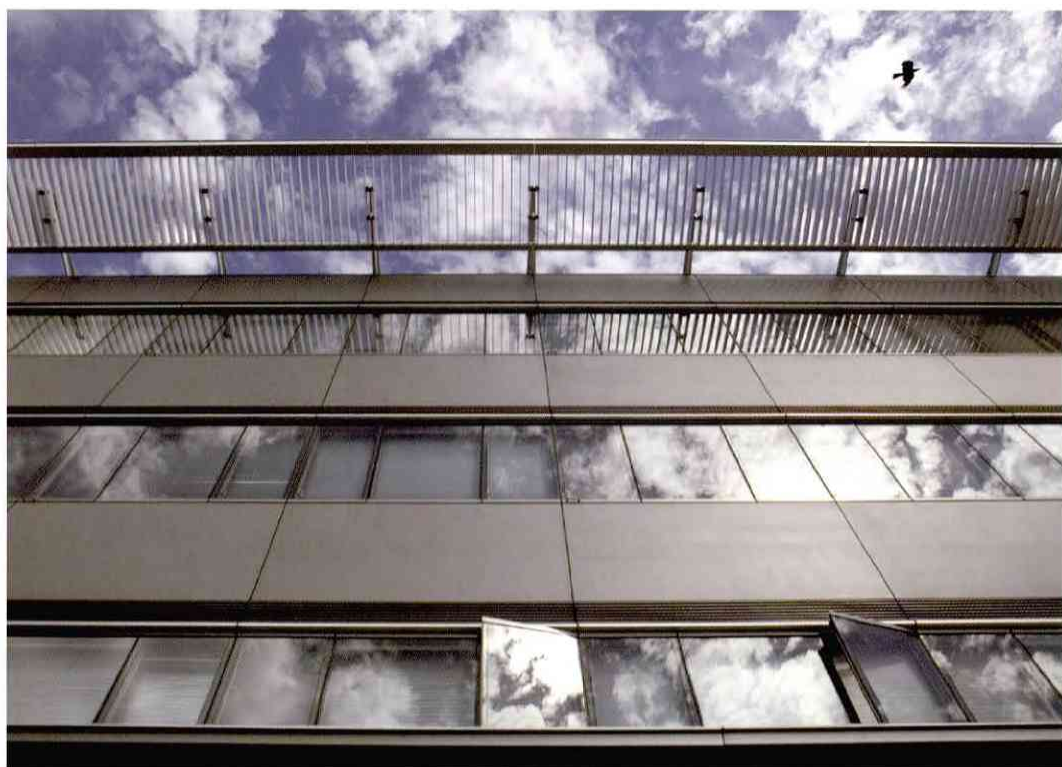
東京文化財研究所七十五年史

本文編

東京文化財研究所編



東京文化財研究所 外観



東京文化財研究所 外観



1階 ロビー



資料閲覧室



地下1階 セミナー室

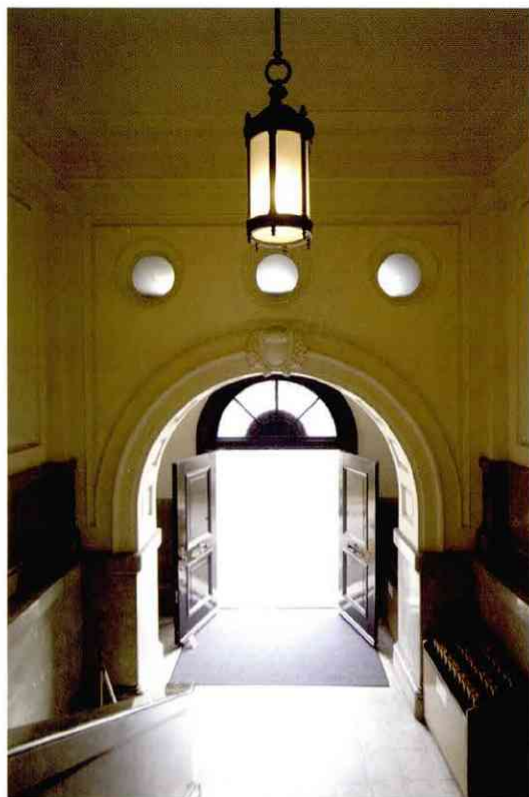


黒田清輝肖像





玄関



玄関ホール



1階研究室入口



館内2階への階段



黒田清輝「湖畔」展示 黒田記念室にて



黒田清輝「智・感・情」展示 黒田記念室にて



復元された美術研究所長室（黒田記念館にて）



旧保存科学部庁舎と旧別館庁舎（1988年撮影）



正木直彦 (初代)



矢代幸雄 (2代・4代・8代)



相田英作 (3代)



田中豊蔵 (5代)



福山敏男 (6代)



松本栄 (7代)



田中一松 (9代)



関野 克 (10代)



伊藤延男 (11代)



渡田 隆 (12代)



西川青太郎 (13代)



渡邊明義 (14代)



鈴木規夫 (15代)



バーミヤン渓谷にて（1932年、左端が美術研究所開設期の職員であった尾高鯨之助）



美術研究所時代に刊行された各種の『美術研究資料』



第21回文化財の保存に関する国際研究集会
The 21st International Symposium on the Preservation of Cultural Property
今、日本の美術史学をふりかえる
The Present, and the Discipline of Art History in Japan

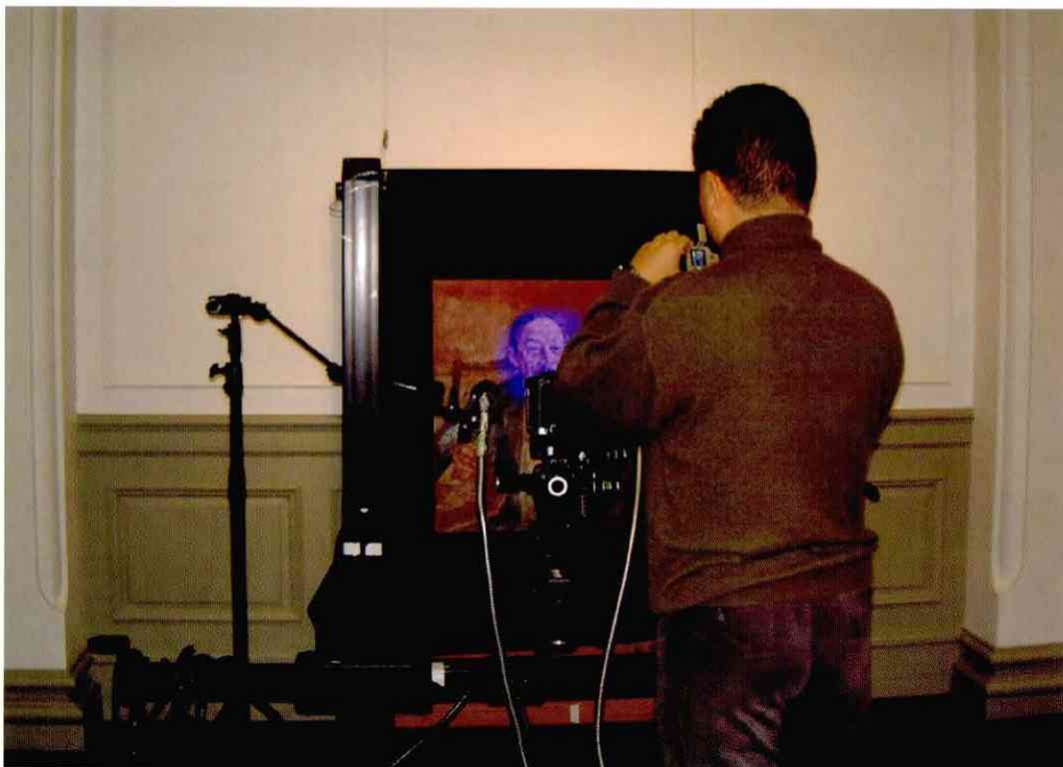
第21回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」(1997年)



『美術研究作品資料』第1冊から第3冊 (2002.03.05年度刊行)



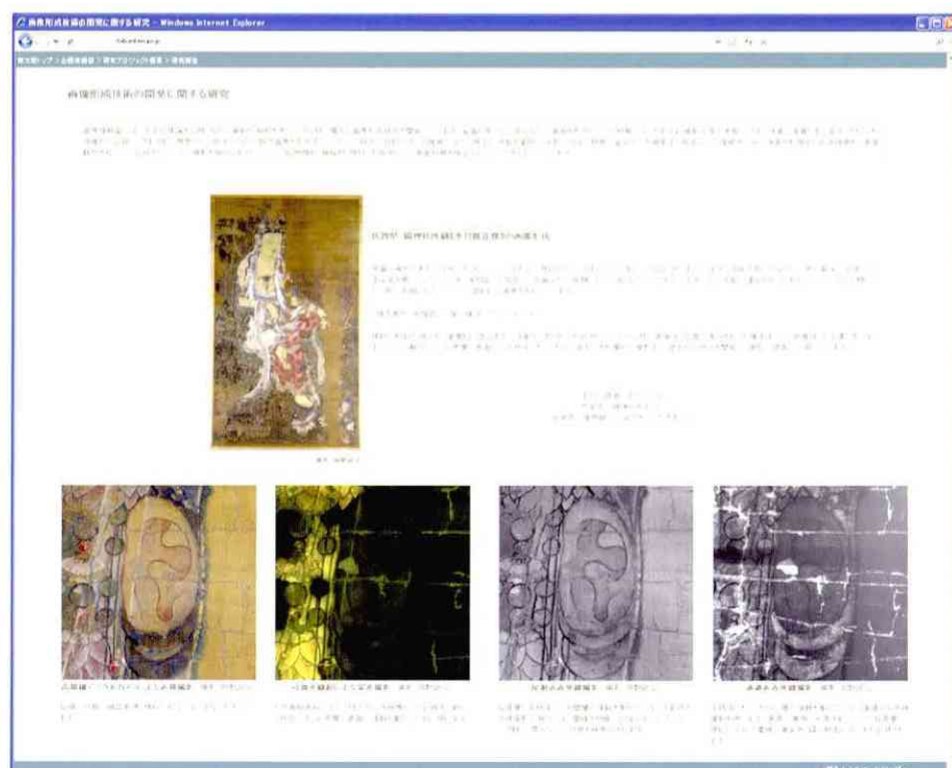
美術研究所時代に作成された作品カード



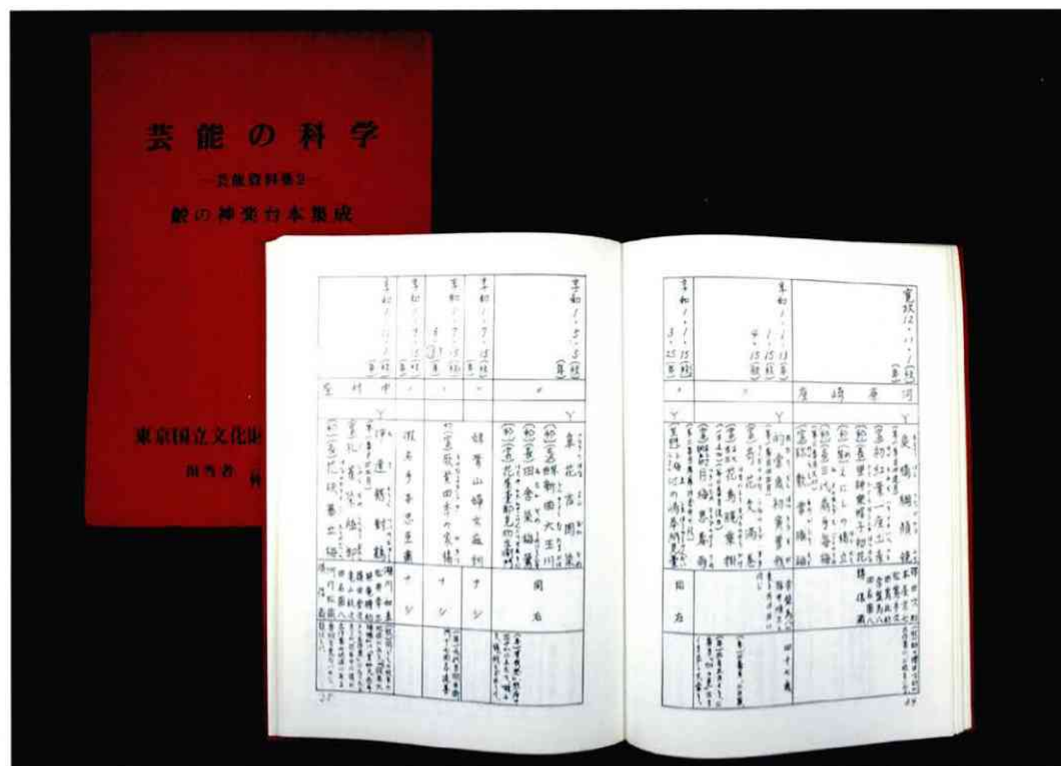
光学調査（2003年）



デジタル画像体験「黒田清輝の目・風景・からだ・顔」展示会場（黒田記念館、2004年）



ホームページによる情報発信の一例（「画像形成技術の開発に関する研究」のページ）



『芸能の科学』創刊号（1967年、以後には毎年発行され33号のあと、『無形文化遺産研究報告』に引き継がれた）



東大寺二月堂修二会の行法
初夜の悔過作法より「散華」
写真：吉越立雄



部内に設置された舞台上、「翁」の技法を収録する
翁：親世流能楽師・浅見貞州氏



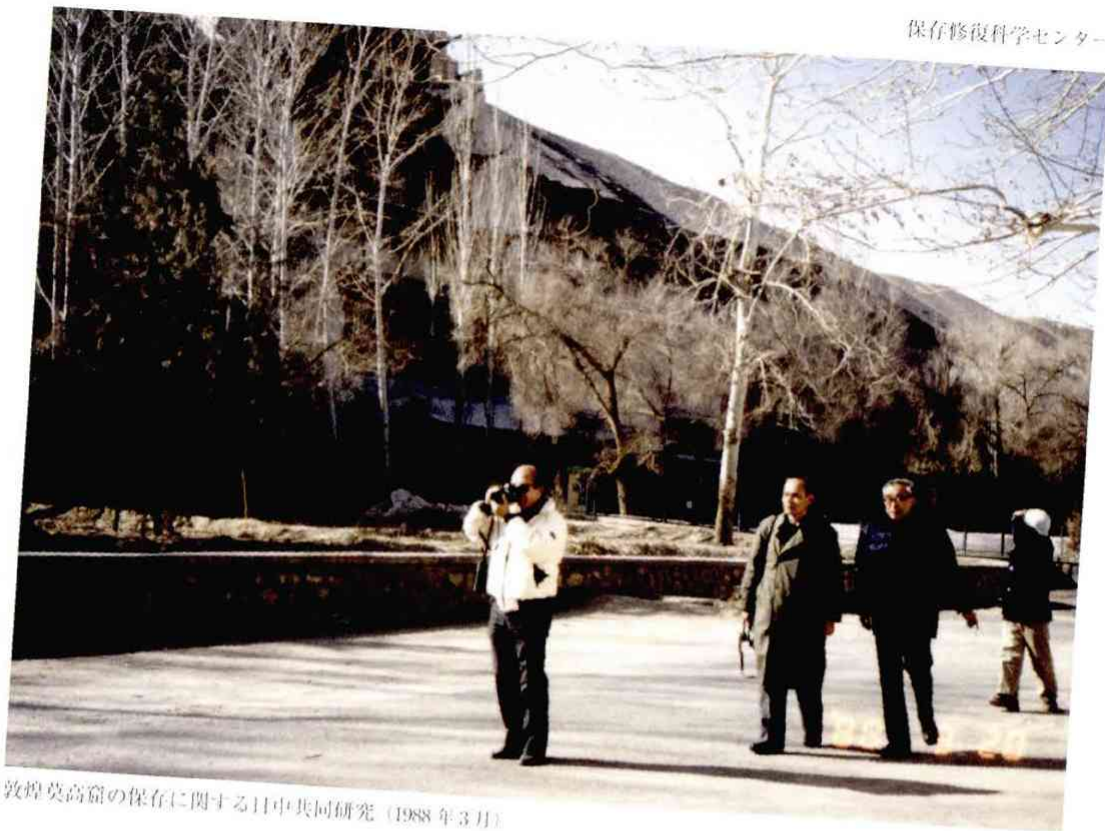
日本民俗舞踊研究会による「綾子舞」第23回芸能部公開学術講座「扇の技法」（1992年12月）での実演



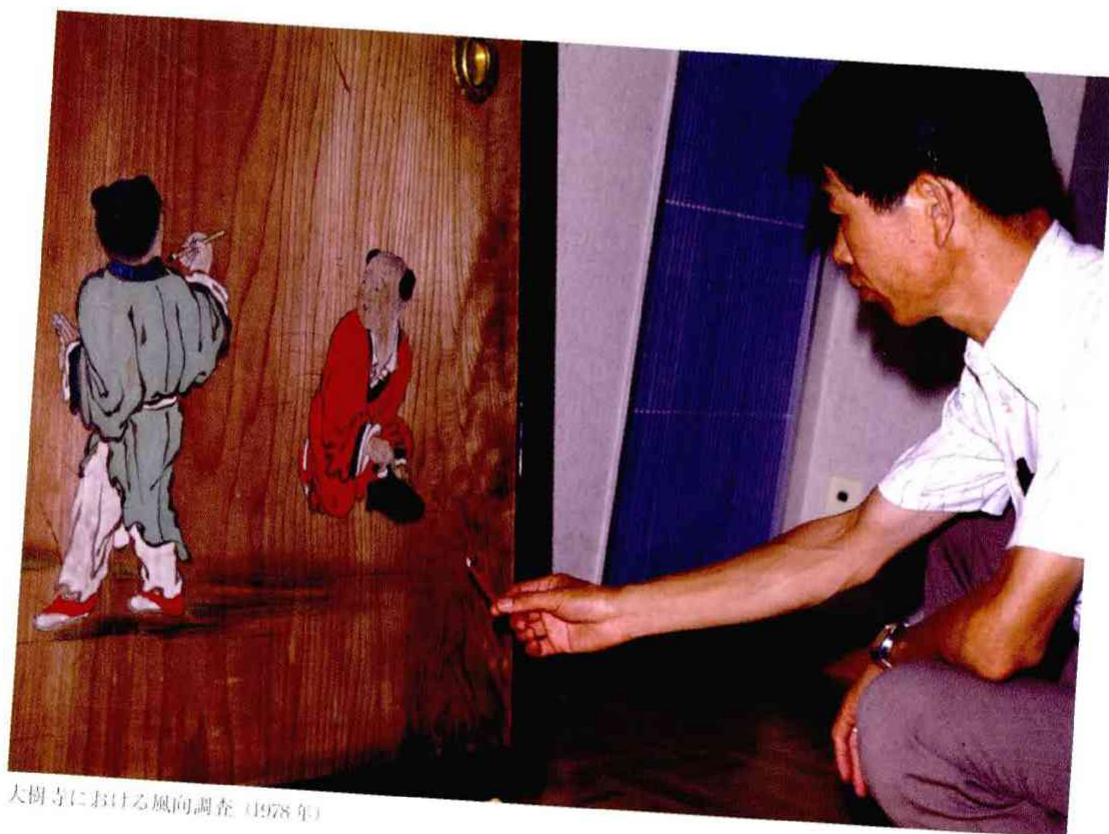
関野 克所長と保存科学部修復技術部職員（1975年3月）



桂離宮のX線透視撮影調査（1980年5月）



敦煌莫高窟の保存に関する日中共同研究（1988年3月）



大樹寺における風向調査（1978年）



国際研修「紙の保存と修復」第1回の研修参加者



「漆の保存と修復」第4回（2005年）の漆修復実習の研修風景



白柱磨崖仏（古園石仏群）



キトラ古墳「白處」取外し作業



第2回アジアセミナー（1991年）



カンボジアでの調査（2001年）



ユネスコ。日本信託基金龍門石窟保護修復事業（2003年）



パーミヤンでの考古資料の保存修復のためのワークショップ（2005年）



75年の間に当研究所より刊行された主な研究誌・報告書等

東京文化財研究所七十五年史

本文編

序

東京文化財研究所は、その前身であった美術研究所が1930（昭和5）年に設立されてから、本年度で79年目を迎えます。戦前、美術に関する調査研究、資料収集・公開を行う帝国美術院附属美術研究所としてその歩みを始め、1952（昭和27）年、保存科学部、芸能部を加え、有形、無形の文化財の広範な調査研究、保存活用に資する国立の文化財研究所となりました。以後、1973（昭和48）年に修復技術部を、1977（昭和52）年に情報資料部を、1990（平成2）年に今日の文化遺産国際協力センターの前身となるアジア文化財保存研究室を加えて、国民共通の資産である文化財を、国民が享受するために必要な基礎的調査研究、保存や活用に適切に供するための修復や環境整備を担い、国の文化財行政において重要な位置を占めてまいりました。

この間、1947（昭和22）年から1950（昭和25）年までは博物館附属、1950（昭和25）年からは文化財保護委員会附属、1954（昭和29）年からは東京国立文化財研究所となりましたが、昨今の独立行政法人化に伴い、2001（平成13）年に奈良文化財研究所との統合によって新たに設置された独立行政法人文化財研究所の一施設である東京文化財研究所へ、2007（平成19）年、さらに同法人が独立行政法人国立博物館と統合され、新たに独立行政法人国立文化財機構が設置されたのに伴い、その一施設となって現在に至っております。

本書は、こうした幾多の変遷を経てきた当研究所の設立から75年目にあたる2006（平成18）年3月末日までの歴史を総括する目的に基づき『本文編』として編集しました。そのため当研究所の前身である美術研究所設立の経緯から今日迄の歴史を「沿革」として記し、管理運営、各研究部門における調査研究、保存修復、国際協力事業等を歴史的に振り返り、あわせて現在の当研究所の業務活動全般をご理解いただくために「現況」を加え、これに「関連資料」を付して構成しました。これにより、昨年刊行しました、今日までの事業の総覧と蓄積された資料の一覧を編集した『資料編』とあわせて、『東京文化財研究所75年史』とするものです。文化財の概念が、文化遺産や文化資源へと変わりつつある今日、これまでの足跡を振り返って自らの足場を見つめるとともに、今後のあるべき姿を考える一助と

して、より一層充実した事業の展開に努めてまいる所存です。本書が、広く国民の皆様にご理解いただく契機となりますよう期待しています。これまで当研究所に賜りました関係各位のご協力、ご指導に感謝申し上げますとともに、さらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2009（平成 21）年 12 月

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
所 長 鈴木 規 夫

目 次

カラー口絵

序

凡 例

I 沿 革……………1

はじめに 3

- 1 美術研究所の開設 1924（大正13）年～1930（昭和5）年 4
- 2 帝国美術院附属美術研究所 1930（昭和5）年～1937（昭和12）年 29
- 3 文部大臣直轄美術研究所 1937（昭和12）年～1947（昭和22）年 41
- 4 国立博物館附属美術研究所 1947（昭和22）年～1950（昭和25）年 65
- 5 文化財保護委員会附属美術研究所から東京文化財研究所へ 69
1950（昭和25）年～1954（昭和29）年
- 6 東京国立文化財研究所 1954（昭和29）年～2000（平成12）年 72
- 7 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所 92
2001（平成13）年～2006（平成18）年

II 管理運営……………107

管理部……………109

- 1 帝国美術院附属美術研究所
 - 2 文部大臣直轄美術研究所
 - 3 国立博物館附属美術研究所
 - 4 文化財保護委員会附属美術研究所
 - 5 東京文化財研究所、東京国立文化財研究所
 - 6 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所
- 管理運営担当職員変遷一覧

III 調査研究……………123

1 企画情報部……………125

美術部……………126

はじめに 126

- 1 戦前の調査研究 1930（昭和5）年～1945（昭和20）年 131

2 戦後から近年までの調査研究	162
1945（昭和20）年～2000（平成12）年	
3 独立行政法人化後の調査研究	212
2001（平成13）年～2006（平成18）年	
むすびにかえて	223
情報資料部・協力調整官—情報調整室	224
はじめに	224
1 開所前の資料収集・作成	224
2 戦前の資料収集・作成・公開	232
1930（昭和5）年～1945（昭和20）年	
3 美術部資料室の資料収集・作成・公開	247
1946（昭和21）年～1976（昭和51）年	
4 情報資料部の調査研究・資料収集・作成・公開	257
1977（昭和52）年～2000（平成12）年	
5 独立行政法人化後の調査研究・資料収集・作成・公開	269
2001（平成13）年～2006（平成18）年	
むすびにかえて	288
新たな企画情報部として	290
2 無形文化遺産部	291
1 沿 革	291
2 調査・研究	293
3 シンポジウムと国際交流、研究会	305
4 科学研究費補助金交付による研究	309
3 保存修復科学センター	311
保存科学部	312
はじめに	312
1 第1期 1952（昭和27）年～1966（昭和41）年	312
2 第2期 1967（昭和42）年～1988（昭和63）年	318
3 第3期 1989（平成元）年～2000（平成12）年	326
4 第4期 2001（平成13）年～2006（平成18）年	335
修復技術部	342
1 沿 革	342

2 調査・研究	342	
3 文化財の保存及び修復に関する国際研究集会	354	
4 科学研究費による研究・受託研究・共同研究	357	
4 文化遺産国際協力センター	361	
はじめに	361	
1 2006(平成18)年までの調査研究	361	
2 シンポジウム、研究会等	382	
3 科学研究費による研究	390	
4 受託、外部資金による研究・事業	394	
IV 現 況	399	
はじめに	401	
組織の概要	402	
1 管理部	2 企画情報部	3 無形文化遺産部
4 保存修復科学センター	5 文化遺産国際協力センター	
職員一覧(2009年10月1日現在)	413	
関連資料	417	
関連団体	419	
「美術懇話会」(「美術懇話会一覧」再録)	420	
「東洋美術国際研究会」	431	
追 想	479	
白畑よしインタビュー	480	
稗田一穂インタビュー	495	
物故研究員等略歴	505	
東京文化財研究所年表	555	
機構変遷図	599	
参考文献一覧	604	
謝 辞	605	
編集後記	606	

凡 例

- 本書は、東京文化財研究所の母体となった美術研究所の設立（1930年）に関する経緯から、2006（平成18）年3月31日までの当研究所の75年間の歴史を、「沿革」、「管理運営」、各部、センターの「調査研究」、「現況」及び「関連資料」等の事項によって構成、編集したものである。
- 本書の記述にあたっては、巻末の「参考文献一覧」に挙げた諸文献をもとにしたほか、すでに刊行されている『東京文化財研究所七十五年史 資料編』（2008年3月刊、以下本書の文中では、『資料編』と表記する）をもとに編纂されている。したがって、本書『本文編』と『資料編』をあわせて、『東京文化財研究所七十五年史』とするものである。
- 当研究所内には多岐にわたる調査研究、業務活動を行う部、センターがあり、設立以来、各時期においてその名称が変更され、また組織の拡大に伴い新たに部署が設けられてきた。さらに業務の合理的な遂行を目的に組織の変更が繰り返され、これに伴い各部センターの名称も変更されてきた。そのため、「沿革」等に挙げられた各部、センターの名称は、各時期の名称とした。また、職員等の所属、役職等についても、各時期のものである。なお、現在（2009年10月）の当研究所における組織については、「沿革」、及「現況」、「機構変遷図」を参照されたい。
- 本文中の引用等の文献資料は、原則として、仮名づかいは原文のままとし、適宜旧漢字は常用漢字に改めている。ただし、人名、作品名等については原則として用いられている漢字とし、敬称を略した。
引用資料は、文書の内容を正確に伝えることを前提に、改行等には変更を加えた。
編者注記は、[] 内に追記した。
- 当研究所として予算計上し実施された調査研究について、本文中で言及のある場合、2000（平成12）年度までの「一般研究」、「特別研究」、「中長期研究計画」等については、各研究課題名にその名称を付した。
2001（平成13）年度からの独立行政法人化後、「中期目標・中期計画」に基づく各研究課題については、「研究プロジェクト」という名称を付した。
また、1952（昭和27）年から2005（平成17）年度までの文部省・文部科学省科学研究費補助金による研究題目については、「科学研究費」と略称した。その他、文化庁、地方公共団体等からの「受託研究」等の外部機関からの調査研究については、原則として、そのつどその名称を付記した。なお、各「科学研究費」、「受託研究」、「特別研究」の期間、代表者、担当等については『資料編』を参照されたい。
- 「沿革」等で引用した資料には、原則として、そのつど典拠を明示した。ただし、（東芸002）等の記号は、本書編集のために調査収集した資料の当研究所における整理番号であることをお断りする。
- 本文中の資料等に、現在では不適切と思われる用語、表現があるが、歴史的検証に則した範囲でこれを使用した。

I 沿 革

はじめに

2007（平成 19）年に行政改革による法人統合により、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となった当研究所は、1930（昭和 5）年に開設された帝国美術院附属美術研究所を母体とする。洋画家黒田清輝の遺言と遺産の一部によって、美術を研究する機関として設置された帝国美術院附属美術研究所は、第二次世界大戦後の 1947（昭和 22）年に国立博物館附属研究所、1950（昭和 25）年に文化財保護委員会の附属機関となった。1952（昭和 27）年東京文化財研究所に改編され、広く文化財全般に関する調査研究を行う機関として位置づけられ、美術部、芸能部、保存科学部、庶務室による組織となり（1984 年より文化庁の施設等機関となる）、1954（昭和 29）年に東京国立文化財研究所となった。1968（昭和 43）年 6 月に文化庁の附属機関となり、1973（昭和 48）年には修復技術部が、1977（昭和 52）年には情報資料部が、1995（平成 7）年には国際文化財保存修復協力センターが設置され、有形・無形の文化財に関する総合的研究機関として活動してきた。2000（平成 12）年、庁舎が新営され、それまで黒田記念館と東京国立博物館敷地内の庁舎に分かれていた部、センターが一つの庁舎内に移転した。翌 2001（平成 13）年、行政改革により独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となり、2007（平成 19）年にはさらなる改革により、独立行政法人文化財研究所は独立行政法人国立博物館と統合し、新たに設置された独立行政法人国立文化財機構の一施設である東京文化財研究所となって、現在に至っている。

1 美術研究所の開設 1924（大正13）年～1930（昭和5）年

1 黒田清輝の逝去と遺言

当研究所の母体となった帝国美術院附属美術研究所は、洋画家黒田清輝の遺言によって設立された。「湖畔」（1897年）などの作品で知られる黒田清輝は、1924（大正13）年7月、不動産の三分の一を美術奨励事業に出捐すること、樺山愛輔〔図1〕、久米桂一郎〔図2〕、打田伝吉を遺言執行人とするよう遺言した。遺言に立ち会ったのは宮田という人物であったと伝えられる。黒田は前年の12月2日、宮内省に出勤中に狭心症の発作を起して病臥し、1924（大正13）年春には一時小康を得るが、6月に喘息を併発して再び病床にあった。遺言執行人となった樺山愛輔は、黒田清輝の養父である黒田清綱の娘千賀子の婚家、橋口家の血縁になる。黒田清輝よりも1年年長で、1880（明治13）年に渡米して同地で大学を卒業しており、生涯、日米交流に尽くした。現在の国際文化会館の創立にも尽力している。久米桂一郎は洋画家、美術教育者であり、黒田の朋友でもあった。久米は、1884（明治17）年に法律学習を目的としてパリに渡った黒田に2年遅れて、画学を学ぶためにパリに留学し、ともにアカデミー・コラロッシ（Academie Colarossi）でラファエル・コラン（Raphael Collin）〔図3〕に師事した。佐賀藩士で『米欧回覧実記』（東京・博聞社、1878年）の編者として著名な久米邦武の嗣子で、黒田と同様、幕末雄藩に生まれた。黒田と同年でもあったことから、出会って間もなくともに行動するようになっていることが、『黒田清輝日記』（中央公論美術出版、1966～68年）、『久米桂一郎日記』（中央公論美術出版、1990年）などにあらわれている。パリ滞在中に共同生活を送っており、1893（明治26）年夏に同じ船で帰国。その後も黒田とともに白馬会を結成し、画家としての活動のみならず美術教育、美術行政においても黒田の同志であり続けた。打田伝吉は弁護士であった。

黒田清輝は7月15日に死去し、青山斎場で神式の葬儀が執り行われた後、養父清綱の墓の隣に、やはり父と同様神式で葬られた（現在、この場所は曹洞宗永平寺別院長谷寺、東京都港区西麻布2-21-34の敷地内となっている）。

遺言執行の過程について述べる前に、黒田清輝が自らの遺産の一部を美術奨励のために役立てるよう遺言した背景を考えたい。

1893（明治26）年夏に9年におよぶフランス留学から帰国し、印象派の光の表現を取り入れた清新な画風で日本の美術界に大きな変化をもたらした黒田清輝は、1924（大正



1 樺山愛輔



2 久米桂一郎



3 ラファエル・コラン

13) 年の逝去まで、洋画壇のみならず美術界に多大な影響力を持った。サロンの画家ラファエル・コランに師事し、19世紀後半期のアカデミックなフランス絵画の教育を受けた黒田は、帰国後間もなく自らの作品である「朝妝」(1893年)がきっかけとなって起こった裸体画論争をはじめ、様々な面で、フランスとは異なる日本の美術に対する考え方や美術を取り巻く環境に驚き、日本美術の近代化の必要性を強く意識するようになったと考えられる。帰国すると明治美術会に参加するが、その封建的性格に不満を抱き、久米がそのリベラルな性格を「社会主義に近い」と評した白馬会を1896(明治29)年に起す。同会は作家各自の自己表現を尊重し、その展覧会で固有色を否定した明るい色調や、作為のない平明な自然描写を紹介して若い画家たちの支持を得た。同年、東京美術学校に新設された西洋画科の教育を任されたことから、黒田の画風が日本近代洋画のアカデミズム形成に大きな働きを持つこととなる。

しかし、朋友久米桂一郎が「一八九九—明治三十三年頃までが、一番氏として油の乗りきった時代であらう」(『仏国修学時代の黒田君と其制作』『中央美術』大正13年12月。『方眼美術論』中央公論美術出版、1984年収録、141頁)とし、「(第二回渡欧からの帰朝)以来、引続いて白馬会には毎年出品してをつたが、其後製作は或る肖像の外は、余り満足される様な製作もなかつたかと思ふ。四十一年に文展が初まつて、三四回は製作を出品された、初めは裸体の半身、これは日英博覧会に持つて行つたもの、二回は肖像、第六回の習作等種々の製作があつた。美術家としての生涯は先づ此時代に終つた」(『黒田清輝君の芸術』『国民美術』大正13年9月。『方眼美術論』前掲、154頁)と記しているように、黒田が制作に没頭できた時間は長くはなく、第2回目の渡欧以降は美術教育・行政、及び文化外交に力を注ぐようになっていく。2度目の渡欧は「欧州の美術行政および美術教育視察」という任務のための文部省からの派遣によった。折りしも、パリ万国博覧会

が開催されており、「智・感・情」(1899年)、「湖畔」を含む黒田の作品5点も出品されていた。前者は日本から出品された油彩画では最高賞の銀賞を受賞するが、第1回目の留学時代の師匠ラファエル・コランは、黒田は日本に帰って絵が下手になったと評したとされる。

1900年のパリ万博に出品された日本洋画を見て「実に顔色なし」として、帰国後、油彩画よりも工芸デザインに傾倒していく浅井忠、この折の渡仏以後、ほとんど制作を行わなくなり、美術教育・行政に向かっている久米桂一郎のように、この万博を機に渡仏し、帰国後、仕事の方向に変化を示す日本の洋画家は少なくない。

黒田もその一人であり1901(明治34)年の帰国後は、1905(明治38)年の美術雑誌『光風』創刊、1907(明治40)年の文部省美術展覧会(文展)開設への尽力、1911(明治44)年の白馬会の解散、1913(大正2)年の国民美術協会設立といったように、美術に関する議論の場を広く開き、美術家全体の社会的位置を確立するために力を注いでいる。白馬会の解散について黒田は、同会が主な目的に掲げた「毎年展覧会を開催して会員相互に研鑽を図る」ということが、文展によって果たされるようになったため、と説明しているが、個々の作品の質が公正に評価される場であるべき文展が、その開設準備段階から審査員の選択をめぐる既成の美術団体の対立を深め、美術界内部での党派性が強まり、また、若手画家たちが文展入選を目指して団体への依存を強めるといった現象が見られたことが背景になっているだろう。その2年後の設立になる国民美術協会は、岩村透と黒田清輝が首謀して結成されたと考えられる超党派の団体で、その趣意書に、「今日ハ実力競争ノ時代」であり、また「物質的文明ノ激甚ナル発展ノ為ニ(略)芸術ハ将ニ社会ヨリ駆逐セラレントスルノ危機ニ迫リツツ」あるため、「芸術全般ノ運命ニ関スル大問題ヲ解決シ、広ク芸術家共通ノ利益ヲ保護シ、社会ニ於ケル芸術ノ功德ヲ普及」することをめざして団体を結成するとある。そしてなすべき事業の筆頭に美術館の建設を図ることを、次に日本美術を世界に紹介し、世界の美術を日本に紹介することを挙げている(『国民美術協会趣意書並定款』大正13年2月改訂印刷)。ここで目指されているのは、アメリカ、フランスで絵を学び1892(明治25)年に帰国した岩村透が『巴里の美術学生』(『芸苑雑稿』平凡社・東洋文庫、1971年)で活写した、パリの持っている「美術生活」を日本にもたらすこととあってよい。それは「常に二、三の展覧会がある。政府の美術館、図書館がある。大家の仕事場を訪問する。美術家の倶楽部に集まる。カフェに美術家の友人と語る。外国の技芸家に逢つて見聞を拓げる。新聞雑誌を読んで技芸上の見識を養う」というような環境の整った生活であった。

周知のように、1926(大正15)年5月に東京府美術館が上野公園に竣工するまで、日

本には博物館はあっても美術館はなかった。政府主催の美術展である文部省美術展覧会ですらも、東京府勧業博覧会の会場として作られた二号館で行われた。同館は、博覧会後、展覧会場として用いられることとなって竹の台陳列館と呼ばれていたが、床も張られておらず、土間で、「たえず水を撒かなければ埃が舞い立つて、画が埃色に曇つちまう」一方、「大雨がふると雨漏がする」（山本鼎「文展に関し文部大臣の背なかに向つて語る」『中外』2巻12号、1918年11月）、美術品展示の場としては甚だ不十分なものであった。美術館設立を望む声は明治40年代になって高まり、1910（明治43）年には文部省によって国立美術館建設費が次年度予算に計上されるが、削除されている。1918（大正7）年3月には衆議院に「帝国美術館建設に関する建議案」が出され、同年に帝室技芸員から文部大臣（以下、文相とする）に建白書を提出、国民美術協会からも文部省に美術館建設の建議書が提出されたが、予算がつかず、実現に至らなかった。1910（明治43）年に洋画家として初めて帝室技芸員となった黒田は、1918（大正7）年に美術館建設の建白を文相に提出した帝室技芸員の一人であり、また国民美術協会の会頭でもあった。美術館設立を政府に期待しても叶わない体験を重ねたまま、逝去の年を迎えている。

晩年の黒田は、作品によって十分に自己表現が出来ていないことへの反省を抱きながら、美術界全体のために働いている靦がある。そうした黒田の内面は、1916（大正5）年秋の次のことばに見ることができるだろう。

「私は当年とつて正に五十歳になるが芸術にかけては一個の学生に過ぎぬ。年の割には画がうまくない。勉強する時間もいろいろのものに裂かれて比較的少なかった。これからまあ大に勉強する所存である。仮に八十歳位になつたら自分は斯う云ふ思想を持つて居ますと人に示すやうな事が出来やうかと思つて居る」（「私は斯う思ふ」『みづゑ』大正5年11月。『絵画の将来』中央公論美術出版、1983年所収、73～74頁）。

しかし、黒田に残された時間はそれから8年に満たなかった。「勉強する時間もいろいろのものに裂かれて比較的少なかった」のは、一人の作家としての制作よりも、公を先んじる姿勢が一因していただろう。しかし、美術館設置問題を初め、裸体画論争、美術における国際交流など、黒田がパリで経験してきた「美術生活」の日本への導入はほとんどなされていなかった。黒田の遺言には、黒田自身のそれまでの努力を継いで、後進にも「美術生活」を目指してほしい、そのために遺していく私財を役立ててほしい、という願いが込められている。

2 黒田清輝の遺言による美術奨励事業の決定と矢代幸雄

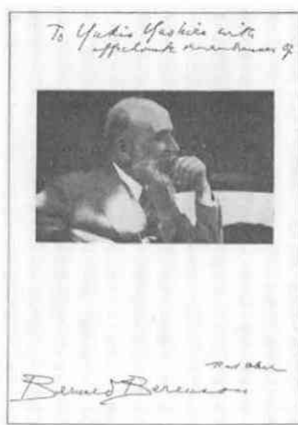
親族関係者で遺言執行について協議した結果、遺言執行は生前に黒田と交友のあった伯爵牧野伸顕〔図4〕の意見に従って行う方針となった。牧野は大久保利通の次男で牧野家の養子となり、1871（明治4）年に岩倉具視らの遣外使節に父利通と共に同行してアメリカに留学し、外交官として活躍した。美術界における牧野の大きな功績は、1906（明治39）年に第一次西園寺内閣の文相を勤めた際、日本で初めての官立美術展となる文展を開設したことである。1900年のパリ万博が開催された折、牧野はオーストリア公使の職にあったが、万博関係の用務で渡欧した正木直彦が、ウィーンに牧野を訪ねた際、日本でもフランスのサロンのようなものを、文部省あたりで主催すべきであるとの意見を述べており（正木直彦『回顧七十年』学校美術協会出版部、1937年）、政府主催の美術展構想をかねてから懐いていた。当時の首相であった西園寺公望は、1871（明治4）年からフランスに留学して法律を学び、自由思想を身に付けて、公家でありながら『東洋自由新聞』を主宰したが、楽琵琶を伝承するなど宮廷文化に造詣の深い西園寺家の養嗣子であることもあって芸術文化を愛し、牧野と相照らすところがあったとされる。渡欧経験のある美術家たちにとって、政府主催の美術展覧会開設は悲願であり、黒田清輝も実現に尽力している。黒田が作家個人としての制作だけでなく、私心を去り、美術界全体を見渡した仕事をしてきたことを知っていた牧野伸顕は、遺産による事業の方針として黒田の作品を陳列すること、美術の研究に資することを提案した。

1925（大正14）年5月27日、共楽倶楽部で黒田子爵記念事業発起会が開かれ、遺言執行にかかる事業を具体化すべく活動が始まった。黒田の作品を陳列することはきわめて具体的な項目であったが、美術の研究に資することとしてどのようなことを行うかが議論となった。そこで浮上したのが、東京美術学校教授で、ヨーロッパに留学し英文の名著『サンドロ・ボッティチェリ』（“Sandro Botticelli” Medici Society, 1925）を刊行して帰国した矢代幸雄の「美術図書館」構想である。

矢代幸雄は1890（明治23）年に横浜に生まれ、旧制第一高等学校英文科を1911（明治44）年に卒業して、翌年東京帝国大学に入学。英文科に学んだ。在学中に大下藤次郎の主宰する水彩画塾に学び、1913（大正2）年第7回文展に水彩画「草原の赤い傘」で入選を果たしている。1915（大正4）年に帝国大学を卒業して東京美術学校講師となり、1917年に同校教授となって西洋美術史を担当した。1921（大正10）年、東京美術学校に籍を置いたまま、ルネサンス美術研究のため私費でロンドンへ留学し、同年秋にイタ



4 牧野伸顕

5 バーナード・ベレンソン
〔私の美術遍歴〕より

6 福原鐘二郎

リアのフィレンツェに移り、当時、ルネサンス研究の第一人者であったバーナード・ベレンソン (Bernard Berenson) [図5] の門下となった。1920年代、ベレンソンはジョヴァンニ・モレリ (Giovanni Morelli) の方法によって、イタリア絵画史の錯誤を着々と改め、それまであまり大きく扱われなかったマソリノ (Masolino da Panicale)、ドメニコ・ヴェネツィアーノ (Domenico Veneziano)、ピエロ・デラ・フランチェスカ (Piero della Francesca)、ウッチェルロ (Paolo Uccello) らの再評価を進めていった。

留学途中に文部省からの給費を受けることとなった矢代は、サンドロ・ボッティチェリ (Sandro Botticelli) を研究対象に選ぶ。20世紀初頭のボッティチェリ研究は、19世紀にウォルター・ペーター (Walter Pater) らによる詩的文学主義的研究によって、この画家の表現の繊細さが評価されていたことへの反動として、ハーバート・ホーン (Harvard Horn) が、作家の同時代文書を論拠として、「男性的風格」をもって賞賛された画家とする説を提示していた。当時主流となっていたこの見方に対し、矢代はボッティチェリの作品に感傷美を見出し、それをこの作家の芸術的特色としてとらえ、これに基づいた自説を展開し、1925年に英語版『サンドロ・ボッティチェリ』を刊行する。同年2月に帰国した矢代は、東京美術学校長正木直彦に復命し、その中で、自らの研究に大変役立ったヨーロッパの美術図書館に言及した。1925(大正14)年7月27日の正木直彦の日記には「矢代幸雄と美術図書館設計のことにつき談話す」とある。正木は、黒田の遺産による美術奨励事業として、「美術図書館」構想に興味を示し、遺言執行の担当者に図ろうとする。8月30日、黒田の遺産処分を一任された牧野伸顕が、黒田の後任として帝国美術院長となった福原鐘二郎 [図6] と正木の意見を徴する旨を正木と福原に伝え、両名から意見が述べられた。9月12日、正木は福原を訪ね、自らの案を示し、9月28日に牧野邸で、牧野、樺山、福原、正木の4名出席のもとに黒田の

寄付金処分の相談会が開催されて、美術図書館建設が決定された。

10月3日、華族会館に牧野、樺山、福原、正木、矢代が集まって、この件についての協議がなされている。こうした経緯について、矢代は次のように記している。

「欧州留学中ロンドンにおいて、あらゆる美術作品の写真を集め、これを分類保存している『写真を主とする美術図書館』というべき中心機関があるのを見、かつそこで私自身も大いに勉強させてもらったのみならず、これが実に驚くほど大きく世の中に貢献している事実を知っていたので、そのために使える黒田さんの遺産の金額をもって、ちょうど適合してやって行けそうであることを考えながら、一つそういう機関を日本につくられたならば、どうですか、と提案したのであった。(略) 私はこのウィット家と知り合いになり、その驚くべき写真のコレクションを利用させてもらって、どのくらい助かったか知れない。(略) さて、私はロンドンにおいてこのサー・ロバート・ウィット家と非常に親しくなり、いかにこの何でもないことのようにして始まった美術品の写真のコレクションなるものが、それほどの数量に達し、かつそれほどよく分類整理されているとなると、とんでもないほど大きな基礎的貢献を美術界全般に及ぼすことを、私自身直接にこれを利用させてもらった経験から痛感させられたのであったから、私が日本に帰り、そこに落着いて学問的の仕事を始めるにあたり、どうかその種の仕事を東洋日本に適する形において実現したい、もし誰も一緒に力を合わせてやる人がなければ、私一人ででもぜひやろうと決心し(略) 美術作品の写真の蒐集とその分類収蔵の仕事をばつばつとやり始めたのであった。私の目立たないこの仕事の将来の意義を早くより見通して、多少の費用を学校より支出して援助して下さった正木校長は、前述の黒田さんの遺産による事業として、黒田さんの作品を蒐集陳列して、画家としての黒田さんの功績を記念し表彰するという一面に加えて、美術界全般が利益し、将来国家予算をもって発展せしめ得る基礎的事業として、この美術品の写真を本格的に集め、これを公衆に利用させるというこの仕事を、適当な案として推薦され、それに対して黒田家および基金関係者一同の賛成、および文部省当局の同意するところとなって、この写真資料蒐集を根幹とする一種の美術図書館である美術研究所が成立したのであった」(『私の美術遍歴』岩波書店、1972年、239～243頁)。

矢代はまた、美術研究所の構想が遺言執行人たちにとって当初は思いがけないものであったが、樺山が、「(黒田は) 日本全体のことを考えていた男で、それ故、彼の残した遺産でやる仕事も、日本全体が将来永く利益を受け、また是から時勢が進むにつれて、益々拡がって行くような仕事が、一番黒田が喜ぶ仕事じゃろうと、我輩はそう思う。これまで出ていた案は、何れも黒田の友人や弟子たちによって提出されたために、個人黒田、画家黒田を記念するような黒田中心の事業で、これは友人や弟子が、黒田を懷って

くれる美しい心もちの現われじゃとは思うが、黒田の志はそんなものではなかったろうと我輩は考える。黒田はもっと大人物じゃったよ」と発言し、一同賛成したと述べている（『樺山さんと美術研究所』『樺山愛輔翁』国際文化会館、1955年、67～68頁）。

先述の文中にあるサー・ロバート・ウィット家のコレクションとは、現在はロンドンのコートールド・インスティテュート（The Courtauld Institute of Art）に属しているウィット・ライブラリー（The Witt Library）を指す。このライブラリーはロバート・ウィット（Robert Witt）と後にロバートの妻になるメアリー（Mary Witt）によって設立された。彼らは1890年代にオクスフォードで歴史、とりわけルネサンス史を専攻した。ロバートは大学時代に、メアリーはイタリア旅行をした機会に写真の蒐集を始め、ふたりの結婚によって両コレクションが統合された。写真は台紙に張って、写真自体に付随しているデータを記入し、作家別ファイルに入れてアルファベット順に整理されていた。当初500点ほどであったコレクションは急成長し、1928年には30万点になる。ロバートは1903年のナショナル・アート・コレクション・ファンド（The National Art Collections Fund）の設立の主要メンバーであり、1920年から1945年までその会頭を務めている。長らくナショナル・ギャラリーのトラステイーでもあり、1930年にはその長であった。1902年に“*How to look at Pictures*”（London, Bell, 1902）、1910年に“*One Hundred Masterpieces of Painting*”（London, Methuen & Co., 1910）を刊行している。

1920年代、イギリスではまだ萌芽状態であった美術史は、ドイツとイタリアでは学問として確立されてきていた。作品の真贋鑑定から発展したイタリアの美術史家ジョヴァンニ・モレリの方法論は、作品の様式と技法の比較によって作品の真贋評価を行い、脚光を浴びていた。この方法のためには、比較材料となる作品の写真が豊富であることが望ましく、写真・複製などを収集・整理・公開するセンター的な施設の必要が認識され始めていた。

1932年、ウィット夫妻はライブラリーをコートールド・インスティテュートに寄贈することとしたが、その後も夫妻は所蔵権を保持しつづけ、1944年に正式な寄贈がなされている。

矢代が自らのルネサンス美術研究に益するところの大きかったウィット・ライブラリーを手本に美術研究所を設立しようとしたのには、日本の美術史学に新しいものをもたらそうという意図も含まれていた。

矢代は、美術研究所の創設を一任委嘱された時、当時、東洋にはまだ一ヶ所も出来ていなかった、美術研究のために不可欠な写真資料の蒐集、整理、保存の設備、及び付属



7 東京美術学校矢代幸雄研究室にて
(左から田中喜作、尾高鮮之助、矢代幸雄、青山新)

の美術図書館的設備をつくることによって「いまだに旧套を脱しきれぬ我国の東洋美術の研究の上にこの新機関を活用して、多少新しい空気を吹き入れようと試みた」と述べ、その新風とは「ベレンソン流の様式批判」をもとにした、東洋美術の新たな研究方法であった、としている（『私の美術遍歴』249～250頁）。

黒田の朋友で遺言執行人となった久米桂一郎と正木直彦との同伴についての協議は、10月3日の後に持たれ、1926（昭和元）年12月、美術研究所設立準備委員会が設置されて、正木直彦が委員長となった。12月25日、美術研究所の事業が以下のように決定されたことが黒田記念館の「落成内披露式記録」（『資料編』241～246頁）にある正木の挨拶によってわかる。

（一）黒田記念館建設

（二）館内ニ黒田子爵記念室ヲ設ケ、故子爵ノ遺作ヲ永久ニ保存陳列ス

（三）館内ニ美術研究所ヲ設置シ、美術ニ関スル基礎的研究資料ヲ蒐集、且ツ調査スルコト

それぞれの事業の実行委員として「建築及設備」に東京美術学校建築学科教授岡田信一郎、「黒田子爵作品陳列」に洋画家久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、及び黒田の親戚にあたる大給近清、^{おぎゅう}「美術研究所事業」に矢代幸雄、会計事務に打田伝吉が選ばれた。遺言どおり、黒田の所有する不動産三分の一を売却した代価が美術奨励費に充てられることとなり、その不動産は1926（昭和元）年中に三井信託に委託し処分された。開設に先立ち1929（昭和4）年に帝国美術院へ提出された寄贈の諸書類によれば、美術研究所費用は黒田記念館建設総経費13万6605円97銭のほか、諸設備や資料を整える為の物品費4万2886円65銭（黒田清輝作品等購入費2550円15銭、備品設備等2万3486円77銭、図書写真等資料費1万6849円73銭）、現金15万円とあり、約33万円（32万9492円62銭）にのぼる。

1927（昭和2）年2月1日、「美術研究所事業」のうち美術に関する基礎的研究資料の蒐集、調査が東京美術学校矢代幸雄教室で開始され、矢代、田中喜作、青山（和田）新がこれにあたった〔図7〕。

3 記念館の建設と所属の決定

黒田記念館の設置場所については、遺言執行人打田伝吉より東京美術学校に対し、1927（昭和2）年2月に同校敷地の一部借用の申請が出されたことが、以下の「東京美術学校敷地借用願」（東芸002）文書によってわかる。

借 用 願

東京市下谷区上野公園元西四軒寺跡

東京美術学校敷地壹万六千五百五拾四坪六四〇ノ内

一実測面積 四百八拾七坪

用 途 黒田記念館建築敷地

借用期間 一年五月 自昭和二年三月一日 至昭和三年七月三十一日

借 料 無 料

右ハ故帝国美術院長東京美術学校教授黒田清輝ノ遺志ニヨリ貴校敷地内ニ黒田記念館ヲ建設シ之ヲ貴校ニ寄附致度候ニ付該建築ニ要スル土地前記ノ通り借用致度建築竣工ノ上ハ更ニ同館ノ維持経営ニ関スル費用寄附可致候条御許可相成度別紙敷地図面、黒田記念館建築図面、同事業計画書相添へ此段相願候也

昭和二年二月 日

遺言執行人 打田傳吉 朱文楯印（打田）

東京美術学校長正木直彦殿

追伸 本文建物建築ノ為取除キノ必要有之候在来物置四棟ハ貴校御指定ノ処ニ移築可致候

これを受けて、1927（昭和2）年2月16日、東京美術学校長、正木直彦から文部大臣岡田良平宛に同校敷地の一部を貸与する件の申請書が出され、3月1日に文部大臣から同校宛に許可が下りた。これによると、東京美術学校敷地内の487坪を1927（昭和2）年3月1日から翌年7月31日まで1年5ヶ月の間、無償で貸し出すとしている。

「東京美術学校敷地借用願」（同前）に添付されている書類により、この事業の初期の段階の構想がわかる。

事業計画書

建物ノ名称ニ就テ

建物ハ之ヲ黒田記念館ト名ク、蓋シ此建物ハ故子爵黒田清輝ノ遺志ニヨル美術奨励事業ヲ経営スルタメ同子爵遺産ノ一部分ニヨリテ建造設備スルモノナルヲ以テ同子爵ヲ記念スル意味

ニ於テ黒田紀念館ト名ク。

事業ニ就テ

黒田紀念館ニ於テハ美術研究所ヲ経営ス

美術研究所ハ美術ニ関スル基礎的研究施設ニシテ左ノ研究の事業ヲ行フ

一、主トシテ写真ニヨル美術品ノ複製ヲ蒐集整理分類シ且ツ之ニ照応シテ美術ニ関スル文献ヲ調査蒐集シ美術研究ノ根本資料ヲ集成ス、マタ美術ニ関スル研究的講演並ニ出版ヲ行フ

二、階上ハ之ヲ陳列室トナス 陳列室ハ二部ニ分レ一部ハ故子爵黒田清輝ノ遺品ヲ陳列スル紀念室、他ハ美術研究ニ必要ナル美術品並ニ美術研究資料ノ展観ニ使用ス

財源並ニ寄附方法ニ就テ

黒田紀念館建築設備及ビ美術研究所経営ノ財源ハ故子爵黒田清輝ノ遺産中美術奨励事業ニアテラル可キ金額約金參拾万円ナリトス 此資産ハ故子爵黒田清輝ノ遺言執行人ニヨリテ東京美術学校ニ寄附スルモノニシテソノ寄附方法左ノ如シ

一、黒田紀念館ハ建設落成ノ後之ヲ東京美術学校ニ寄附ス

二、前記金參拾万円ノ内黒田紀念館建築設備費ヲ控除シタル残額約金拾五万円ヲ美術研究所経営基金トナシ黒田紀念館ノ寄附ト共ニ之ヲ東京美術学校ニ寄附ス

「東京美術学校建物移転上申書」(東芸 001)

東美会第二四号 昭和二年二月二十二日發送済 昭和二年二月 日立案 印
会計事務嘱託 印
会計掛員

校長印(正木)

件名適用 国有財産建物移転之義ニ付上申

所在地	種目	建物番号 及名称	構造	数量	価格	備考
東京市下谷区上野公園 元西四軒寺跡	雑屋建	六十三号 工芸物置	木造 二階建	四〇坪 六〇坪	一、九一一二二〇	移転スルモ数量 価格ニ異動 ナキ見送ナリ
全	全	六十五号 物置	木造 平家建	三〇坪	三、二六八四〇〇	〃
全	雑工作物	物置	木造 平家建	壹箇	四八〇〇〇	〃
全	全	炭置場	全	壹箇	一三四〇〇〇	〃

一、移転ノ事由

前記建物ハ本月十六日付美会第一九号ヲ以テ、土地貸付ノ件ニ付上申に及ビ候黒田紀念館建築用地トシテ貸付出願地内ニ現存セルモノニシテ他ヘ移築ノ不止得モノニシテ移転

ニ関スル経費ハ出願人ニ於テ負担シ当校指定ノケ処ニ移築スル条件ナルニヨリ該移築費
ノ支弁ヲ要セス

右黒田記念館建築ケ処他ニ適當ノケ処ナリ 建物ノ移転ヲ要スルモ移築ニ付テハ他ニ支障無
之候条御認可相成度別紙位置図添付此段及上申候也

昭和二年二月 日

学校長

文部大臣宛

(大学並学校及図書館特別会計所属国有財産管理規定第三条第六号ニヨリ候伺)

第一九号 昭和二年二月十六日 済 昭和二年二月一六日 立案 印

校長正木印 会計掛委員 印

件名摘要 黒田記念館敷地貸付ノ件

故帝国美術院長東京美術学校教授黒田清輝ノ遺言執行人打田傳吉ヨリ黒田記念館敷地借入
方出願有之候ニ付国有財産管理規程第七条ニヨリ別紙経伺致度

昭和二年二月十六日

東京美術学校長 正木直彦

文部大臣岡田良平殿

土地貸付ノ件

東京市下谷区上野公園元西四軒寺跡

東京美術学校敷地 壹万六千五百五拾四坪六四〇ノ内

一、実測面積 四百八拾七坪

用 途 黒田記念館建築敷地

借用期間 一年五箇月 自昭和二年三月一日 至昭和三年七月三十一日

借 料 無料

右ハ今般故帝国美術院長東京美術学校教授子爵黒田清輝ノ遺志ニヨリ当校敷地内ニ黒田紀
念館ヲ建築シ之ヲ当校ニ寄付致度旨ヲ以テ同子爵遺言執行人打田傳吉ヨリ前記ノ通り土地
借入方出願有之候処当校ニ於テハ斯ル建物ノ寄付ヲ受クルコトハ予メ希望スル処ニ有之候
ニ付御認可相成度別紙借用願書及添付書類相添此段及上申候也

基本設計は遺言執行人の一人でもあり美術学校で建築の教鞭をとっていた岡田信一郎
〔図8〕、内部の階段の手すり等の装飾〔図9〕は岡田の弟子である金沢庸治の手によるも
のである。この前後、上野周辺では、岡田が東京府美術館（1926年）や美術学校陳列館
（1929年）、金沢が同校正木記念館（1935年）を手がけている。黒田記念館の建設工事は
岡田指揮のもと入札を行い、竹中工務店が請け負うこととなった。以降、黒田記念館の
改修等に関する諸工事は、一貫して同工務店が行っている。



8 岡田信一郎



9 階段手すりの装飾

1927（昭和2）年10月22日、黒田記念館の起工式が行われた。同日の『国民新聞』に正面見取図及び起工についての以下の記事が掲載されている。

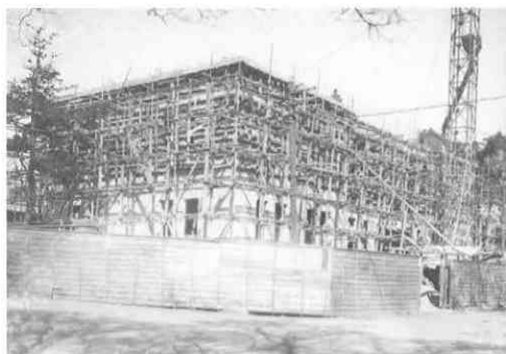
故黒田子記念館
美術校内にけふ起工
去る大正十三年六月

逝去したわが洋画界の泰斗故黒田清輝子が臨終に際し子爵所有の不動産三分の一を美術事業に寄附する旨を遺言したのに基き遺言執行者樺山愛輔伯、久米桂一郎氏、打田弁護士等是不動産の換価処分を三井信託に委託し昨年末全部を処分する事が出来たので今春牧野〔仲顕〕伯を総裁に福原〔鎌二郎〕美術院長、正木〔直彦〕美術学校長、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、岡田信一郎その他の諸氏を委員として種々研究した結果、黒田記念館を建設して故子爵の遺作を陳列し美術並に古典芸術の研究に資する事になった

記念館建設の場所は、美術学校構内 工費は十数万円、総建坪三百六十余坪の不燃質建築とすることになり岡田信一郎氏の手で先月初旬設計も完了したので愈々今二十二日午後二時半地鎮祭を執行の上竹中組の手で工事に著手する事になった

此の工事完成の上は維持費十数万円と共に美術学校に寄附して美術研究に資する筈であると

工事は順調に進み〔図10〕、着工の翌1928（昭和3）年8月に建物（鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1192㎡、建築費13万6161円97銭、植樹費444円70銭）が竣工する（同記念館の平面図については、『資料編』886～888頁参照）〔図11〕。矢代教室における美術研究所事業の準備室は、早速、新営の建物に移ることとなった。研究所開設に必要な備品や諸設備が揃えられ、図書・写真等の資料の収集整理、及び2階の黒田記念室等において黒田清輝作品の展示が開始された。事業準備については矢代、田中喜作、青山（和田）新、及び新しく入所することとなった尾高鮮之助、展示については大給近清が任にあたった。こうした諸準備は1927（昭和2）年2月から進められ、毎月人件費を含めた必要経費が、会計担当の打田より美術研究所開設準備経費として振り込まれた。当初より矢代が力を注いだ写真資料の収集は、整理の為の金属製キャビネット25個をアメリカのヴァンドーン社から取り寄せるなど、設備にも力が傾注されている。こうしたことから、開



10 建設中の黒田記念館



11 竣工時の黒田記念館外観

設に必要な諸設備の購入に関する具体的な検討は、「美術研究所事業」の部門で決定されていたと推測される。また細かい諸備品は尾高が自ら出向いて購入することもあったことが、早世した尾高鮮之助を追悼した著作『亡き鮮之助を偲ぶ』（尾高邦雄、1935年）によってわかる。

先に引いた東京美術学校の土地、建物の借用に関する文書（『土地建物関係書類』東芸002）によれば、黒田記念館は、竣工の後、東京美術学校に寄贈することを明記して、同校の敷地を無償で借用して建設された。しかし、その寄贈先については、その後変更があったことが、正木直彦の『十三松堂日記』2巻（中央公論美術出版、1965年）に見える。1928（昭和3）年5月20日に、和田、正木、矢代が、美術研究所所属問題を協議しており、同年6月13日の項に、矢代氏と共に福原美術院長を学習院に訪ね、黒田記念館を帝国美術院の管理に置くの案を提出し、文部省に提議されるよう乞ひたりとあり、黒田記念館を帝国美術院の管理下に置く案を文部省に提議するようお願い出ている。翌14日の項には、文部省にて、福原美術院長と、専門学務局長に承認を求める。美術研究所の所属を学校か、美術院かとする、美術院の所属のほうが、将来の発展のためによい。また遺産寄付金の利子だけでは事業遂行に不足するにつき、毎年約2万円を政府が負担するよう承認を求めるという主旨のことが記されている。6月20日の項には、美術研究所を美術院の所属とすることを久米桂一郎と協議、同意を得る。岡田、矢代両氏と黒田記念館を検分したことが記されており、美術研究所を帝国美術院所属とすることを久米も同意したことが確認できる。

1928（昭和3）年11月24日、黒田記念館の建物が落成し、12月1日に披露式が行われることとなった（同式の「案内状」は、『資料編』241頁参照）。

同式の案内状によれば、同日1時からの黒田記念館随意観覧、2時から樺山愛輔による挨拶、正木直彦による事業経過報告、久米桂一郎による黒田記念室における陳列についての説明、続いて矢代幸雄による事業計画説明が行われ、その後、再び随意観覧の時

間が設けられていた。列席者は、樺山愛輔、正木直彦、故黒田清輝夫人照子、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、岡田信一郎、打田伝吉、大給近清、矢代幸雄、田中喜作、尾高鮮之助、青山（和田）新の14名で、関係者による式であった。

久米桂一郎の「黒田子爵遺作陳列ニ就テ」の概要筆記（『資料編』244頁）は、黒田記念室の展示についての経緯と久米の考えが示されていて興味深い。久米は記念室の展示物は黒田家に残っていたものが中心となっているが、思いのほか小品が多く、今後、国内所在の作品を集めたりすることによって展示の充実を図りたいと述べている。

本式典で矢代幸雄が述べる予定であった事業計画は、時間の都合で割愛されたが、その資料として「美術研究所事業計画説明要綱」が残っており、1928（昭和3）年末の段階での事業計画案を示している（『資料編』245～246頁）。

この披露式での樺山、正木、久米、岡田、矢代の話には、黒田清輝の遺言の執行、黒田記念館における作品の展示、黒田記念館の建築、そして美術研究所設立についての各々の思いが如実にあらわれている。

1929（昭和4）年5月、正式な開所を待たず打田は逝去するが、同月20日、黒田清輝遺言執行人代表久米桂一郎より、帝国美術院に対し、黒田記念館及び記念館内の物品、美術研究所経営基金を寄贈したい旨の書類が提出された（『資料編』237～241頁）。また、「帝国美術院提出寄附願附属財産目録作製資料」が残されており、このときに寄贈された黒田記念館内の物品の具体的な内容を知ることができる（『資料編』231～236頁）。

1929（昭和4）年6月に作られた「美術研究所案内（稿本）」（『資料編』247～252頁）には、設立趣旨、沿革、事業計画等が述べられ、美術研究所の目ざすところが具体的に示されている（「第一、美術研究資料ノ蒐集」「第二、調査事業」「第三、美術上ノ国際連絡」「第四、編纂事業」（東洋美術総目録等）「第五、出版事業」（美術研究所論叢等）「第六、美術教育的事業」（閲覧室公開等）「第六、展覧事業」「第七、美術教育的事業」）。

「事業計画」に「我国現行ノ美術上ノ国家的施設ノ欠陥ヲ補ヒ」とあるように、美術研究所は、当時まだ実現されていなかった、美術に関する様々な機関の機能を合わせ持とうとしていた。最重要業務とされていた美術図書館、資料館的な機関は勿論のこと、当時の日本の美術館・博物館事情を見れば、東京、京都、奈良の博物館は設立されていたが、1926（昭和元）年に東京府美術館が開館したものの、日本の近代現代美術品や西洋美術品を常設展示する美術館はなかった。また、大学以外に一般の参加が可能な、美術に関する講座を行うところも少なかった。美術研究所は、日本近代洋画の基礎を築いた黒田清輝の作品・素描、及び黒田の師であったフランスの画家ラファエル・コランの

作品を常設し、毎週木曜日という限られた公開ではあったが、これらの作品を鑑賞、研究に供することを事業とした。また、大陳列室における企画展示、講義室での講演会も構想に入っていた。

これと前後する時期のものと思われる、より具体的な構想が矢代のノート（神-1）に見出せる（作成年月日不明）。

美術研究所事業計画 目次

編纂事業

東洋美術総目録編纂
美術館及美術蒐集目録編纂
東洋美術辞典編纂ノ準備
美術史年表作製
美術文献目録編纂
落款印譜集成
美術関係根本史料ノ年代別編輯

出 版

美術研究所彙報
東洋美術研究
MONUMENTA ASIATICA
美術史講義用基本幻燈板編輯及解説
美術遺跡及美術館案内

蒐 集

美術ニ関スル写真複製品
美術図書及雑誌
美術品ノ模写模造品
稀美術図書ノ写本

技術ニ関スル調査

劇場関係芸術調査
欧洲水絵具技術ニ関スル調査
古美術保存ニ関スル調査

美術行政及教育ニ関スル調査

美術館制度調査
美術学校組織及運用ニ関スル調査
普通教育トシテノ図画教育ニ関スル調査

図書目録編纂

一、美術研究所図書目録（中川文庫ヲ含ム）

一、東京美術学校文庫収蔵図書目録

全 建築科図書目録

一、帝室博物館図書目録

一、帝国図書館美術書目録

一、東京帝国大学美術書目録

大学図書館の部

研究室の部（美学、美術史、考古学、史学、言語学、宗教学、建築学等）

史料編纂掛の部

一、東洋文庫目録

一、早稲田大学美術書目録

一、慶應大学美術書目録

一、宮内省図書寮

一、石川県立図書館内李花亭文庫（藤岡東圃収蔵）

一、久原文庫

一、岩崎文庫

一、京都帝国大学図書館

々 研究室

模写模造作製及蒐集計画

一、模写模造蒐集及ビソノ研究的利用ニ就テ海外ノ实例調査

一、現存東洋美術模写模造品ノ目録作製

○是ヲ基礎トシテ将来模写ヲ作製ス可キ東洋美術品ノ目録作製

一、現存西洋美術模写模造品ノ目録作製

○絵画ニ就テハ、以上目録ヲ基礎トシテ将来作製ス可キ西洋名作目録作製

○彫刻及工芸品ニ就テハ、欧米ニ於テ複製ノ器械的製作行ハル、ヲ以テ之ニヨリテ購入

計画ヲ立テルコト

一、美術ニ関スル模写模造陳列館建設ヲ計画ス

○東洋美術ノ既成模写目録編成ノ為メ調査ノ要アルトコロ

東京美術学校、帝室博物館、帝国図書館、史料編纂掛、田中親美氏、東京帝国大学、

京都帝国大学、東北帝国大学、狩野家の安信模本（東京美術学校長保管）

美術教育研究

- 一、美術関係各学校一覧及規定蒐集
- 一、図画教員検定試験調査
- 一、図画教育ニ関スル視学制度調査
- 一、商工省工芸指導所調査
- 一、海外美術学校制度調査

École des Beaux Arts, Prix de Rome, L'Ecole du Louvre, L'École Nationale supérieure
des Bea[ux Arts]

- 一、美術教育世界会議ニ就テ調査

美術行政研究

- 一、現行各国ノ法規蒐集
- 一、日本ニ於ケル現行法規蒐集、及沿革調査
 - 国宝ニ関スルモノ、史跡ニ関スルモノ。
 - 帝国美術院ニ関スルモノ、
 - 帝室博物館ニ関スルモノ、
 - 御物管理ニ関スルモノ
 - 朝鮮ノ美術行政ニ関スルモノ。

- 一、世界主ナルアカデミーノ規定調査
 - Royal Academy (Ricketts へ依頼ノコト)

海外美術界トノ連絡機関

- ・外務省及文部省ヘノ交渉ニ就テ
- ・アカデミー国際会議ヘノ出席如何
- ・世界美術展覧会トノ連絡ニ就テ Pittsburg, Venice
- 世界の定期美術展覧会ノ規定ヲ取り寄セルコト
- ・国際聯盟知の協力本部ヘノ通告
- ・海外ニ日本美術ヲ展覧スル場合ニ国家的協力ヲスルコト
- ・美術史世界会議ニ参加ノコト
- ・国際美術協会ノ規約取ヨセルコト

この構想は、黒田清輝が生前に国民美術協会などを通じて試みた、美術をめぐる環境整備事業と重なり合うものである。黒田一個人の遺産では美術館の設立が困難であったことを踏まえれば、木曜日の午後のみであったが、黒田の作品を常時観覧でき、小規模ながら企画展示も行える展示室を持ち、また、美術作品の文献、画像の収集・整理・公開によって研究環境を整え、一方で東アジア美術の調査研究を行い、その成果を編集・刊行する美術研究所は、黒田の生前の努力を継ぎ、遺志を活かすものであったと言えよう。

「帝国美術院附属美術研究所規程」(日芸 013)によれば、研究所運営のための具体的な予算として、開設準備段階においては美術研究所費 2 万 8350 円(「3 万 3584 円」と追記)、運用については故黒田清輝資金 15 万円の銀行利子(8~9 千円)及び国庫金(2 万円)を合わせた計約 3 万円の年間予算が想定されている。内訳は、諸給与 1 万 3640 円(「1 万 9346 円」と追記)、事業費 1 万 4710 円である。『博物館研究』3 卷 1 号(1930 年 1 月)には「美術研究所の政府移管」として「故子爵黒田清輝画伯の遺言により、その遺産中 卅三万円を以て上野の美術学校内に建設した美術研究所をこの程文部省に献納して来たので、この研究所の維持費として今後年々三万円を支出しようといふのである。もちろん議会の承認を得ねばその献納を受けるかどうか決まらぬ訳であるが、(中略)基金十五万円で美術に関する基礎調査を行ふことになってゐる」と記されている。

1930(昭和 5)年 4 月 9 日及び 10 日に開催された帝国美術院総会において、美術研究所設置の件について協議が行われ、美術院規程内に附属美術研究所の条文を挿入する規程改正案が可決された。1、2 名の会員から「美術研究所」の名称では美術の技術を研究する所のように聞こえ、一般の誤解を招く恐れがないかとの意見があったが、名称は法制局への上申等に関わる事として文部当局へ一任することが決定され、準備当初から用いられていた「美術研究所」が正式名称として採用された(「帝国美術院総会 美術研究所設置について」日芸 05 より)。

開所前から文献、写真資料の収集が始められ、矢代幸雄の交友を通じて、海外研究者との交流やそれに基づく事業も行われた。1929(昭和 4)年 10 月 10 日から 24 日まで、美術研究所で行われた「ビニョン氏招聘委員会主宰英国水彩画展覧会」などは、その例である(出品目録は、『資料編』659~662 頁参照)。ビニョン氏とは、英国の詩人であり、また大英博物館東洋美術部の絵画・版画部長を務めたローレンス・ビニョン(Laurence Binyon)〔図 12〕で、同年 9 月三井・大倉両家の後援によって来日し、日本国内各地で美術品を鑑賞する一方、東京帝国大学で「英国詩歌と美術に於ける風景」と題する 6 回

の連続講演を行った。その講演に関連する作品として、ピニョンが持参していた50点あまりの水彩画を展覧したのが同展で、1929（昭和4）年に『英国水彩画展覧会記念図録』が刊行されている。「公開宝物教育機関一覧」（『博物館研究』3巻8号、1930年8月）によれば、「東京 黒田記念美術研究所」で開催された同展には4506人の観覧者があり、経費は1万5千円であったとされる。



12 ローレンス・ピニョン夫妻（黒田記念館にて）

1930（昭和5）年6月28日、勅令第125号により帝国美術院附属美術研究所が設置された（『資料編』893頁）。当初は所長を置かず、正木直彦が主事となった。同年9月10日に帝国美術院の要請に答えて提出された帝国美術院附属美術研究所名簿には「主事 正木直彦／所員 矢次幸雄 田中喜作 青山新 尾高鮮之助 正木篤三／助手 菅沼貞三 木下龍也 杉田益次郎 中根勝／事務嘱託 大給近清 松原松之助／嘱託 関野貞 田中豊蔵 丸尾彰三郎 熊谷宣夫 富永惣一 堀井三友」とある（『帝国美術院庶務綴』日芸016より）。また同月、「美術研究所規程」及び「美術研究所事務分掌規程」が敷かれ、経理部、資料部及び編輯部が置かれた。経理部には庶務掛、会計掛、陳列掛の三つを置き、事務嘱託の大給近清、松原松之助（1930年のみ）、岩淵幸左衛門（1931年～）が事務業務を執り行うこととなった。

1930（昭和5）年10月17日、東京美術学校講堂で帝国美術院附属美術研究所開所式が行われ、樺山愛輔を初め数十人が出席した。また、開所記念行事として「浮世絵版画展覧会」が、10月17日から19日まで美術研究所で行われている。

1934（昭和9）年10月、開所記念日が10月18日と制定されて各機関へ通知が出され（『美術研究所庶第101号』日芸069）、以降1976（昭和51）年まで、開所記念行事として展覧会や講演会が行われた（『開所記念展覧会』については、『資料編』77～93頁参照）。

4 黒田記念室

黒田清輝の画業を顕彰するために、その作品を常時展示・公開することは、黒田の遺言に具体的には含まれていなかった。黒田本人が、自らの作品を恒久的に展示する場を、遺産によってつくるように明言したわけではなく、この件は遺言執行人によって企図された。そこには友人である久米桂一郎の意向が強く反映されたようである。このことは、



13 黒田記念室（『帝国美術院附属美術研究所一覧』1930年10月より）

1928（昭和3）年12月1日に行われた黒田記念館の披露式の折に、黒田記念室の説明について久米が行った「此ノ建物本来ノ目的トシテ、故人ノ遺作ノ黒田家ニ残ツテ居ルモノヲ中心トシテソレヲ保存スルコトヲ私ハ希望シテ、多少計画ヲ替ヘテ頂イタコトガアル」という言葉から

推測される。

黒田記念室は窓がなく、当時の西欧の美術館がそうであったように、天井から自然光を取り入れる展示室として、黒田記念館設計当初から2階北側に計画されていた。先述の久米の説明にあるように、黒田家にあった黒田清輝の遺作を中心とし、久米や樺山愛輔など、友人知人からの寄贈作品、また、照子夫人が後に買い戻して寄贈した作品などが加わって美術研究所の所蔵品となった。1928（昭和3）年12月1日の披露式の際には、黒田記念室に黒田清輝の作品、中央廊下にコランの作品が展示されていたことが先述の久米の説明によってわかる。久米は2階の全ての部屋の展示状況を説明してはいないため、この時点での他の部屋の展示は不明である。約半年後の1929（昭和4）年6月に作られた「美術研究所案内（稿本）」に掲載された館内説明には、階段を上がって右側の小陳列室に「昔語り」下絵が、その左隣の休憩室に黒田家近親の肖像画が、黒田記念室に油彩画が編年的に、記念室の左隣にあたる中陳列室にデッサンが編年的に、廊下にはコランの作品が、大陳列室には西洋の画家による複製画が展示されていると記されている（『資料編』886～887頁）。同案内には1階の廊下に西洋の画家による作品の複製が、閲覧室に美術品の写真が展示されているとの記載があり、黒田記念館全体が、当時としては稀なほど充実した美術作品に触れる場であったことがうかがえる〔図13〕。

開所当時の観覧規定については、1938（昭和13）年1月の『美術研究所一覧』より「黒田子爵記念室観覧規程」を引用したい。

第一条 本所所蔵故子爵黒田清輝作品及ヒ関係資料ヲ陳列スル黒田子爵記念室ハ本規程ニヨリ之ヲ公衆ノ観覧ニ供ス

第二条 観覧ハ無料トス

第三条 観覧セントスルモノハ掛員ニ申出デ其指示ヲ受クヘシ

第四条 陳列品ヲ摸写又ハ写真撮影セントスルモノハ掛員ニ申出デ其許可ヲ受クヘシ

第五条 観覧者ハ記念室ニ於テ左ノ事項ヲナスコトヲ禁ス

- 一 陳列品ニ手ヲ觸ル、コト
- 二 インク並ニ墨汁ヲ使用スルコト
- 三 飲食及喫煙ヲナスコト

第六条 観覧者本規程ニ違反シ其他不都合ノ行為アリト認ムルトキハ即時退場ヲ命スルコトアルヘシ

第七条 観覧ノ日時左ノ如シ

木曜日午後一時ヨリ同四時マテ

但シ左記ノ日ハ観覧ヲ停止ス

祝祭日

開所記念日（十月十八日）

年始（一月一日ヨリ同六日マテ）

年末（十二月二十五日ヨリ同三十一日マテ）

夏期（七月二十一日ヨリ八月三十一日マテ）

第八条 本所ニ於テ必要アルトキハ前条ノ観覧日時ハ臨時ニ之ヲ変更スルコトアルベシ

但シ此ノ場合ニ於テハ予メ之ヲ揭示ス

ここで定められている観覧日時は、戦中戦後の混乱期などを除き、原則として今日まで守られてきた。2001（平成13年）1月からの改修により2階全体がギャラリーとなり、2002（平成14年）9月からは木曜日に加え土曜日の午後も公開されることとなった。

5 黒田清輝について

黒田清輝（1866～1924）は、近代日本の美術に大きな足跡を残した画家であり、教育者であり、美術行政家であった。ことに明治中期の洋画界を革新していった功績は大きく、その影響は、広く文芸界全般に及んだ。現在の鹿児島県鹿児島市に生まれた黒田は、幼少時に上京、伯父である子爵黒田清綱の養嫡子となった。先述のように18歳で、法律の勉強を目的にフランスに留学したが、2年後には絵画に転向し、ラファエル・コランに師事した〔図14〕。9年間にわたる留学中、アカデミックな教育を基礎に、明るい外光をとりいれた印象派的な表現を学んだ〔図15〕。1893（明治26）年に帰国し、日本に外光表現をもたらし、その背後のリベラルな精神・思想とともに大きな影響を与えた。1896（明治29）年には、美術団体「白馬会」を結成、またこの年創設された東京美術学



14 黒田清輝 (1884 年、パリにて)



15 黒田清輝筆「赤髪の少女」1892 年

校西洋画科の最初の指導者となった。以後、黒田は、この白馬会と東京美術学校において、多くの新しい才能を育てるとともに、やがて美術界の中核となった。また、画家としても、「智・感・

情」、「昔語り」など、ヨーロッパ絵画の底流にあるアカデミズムとしての「構想画」(grand composition) の制作をこころみるなど、本格的な西洋絵画の移植に務めた。後年には、絵画制作のかたわら、貴族院議員や帝国美術院長を歴任し、美術行政家として活躍した。

先述のとおり、没後、その遺言に従い、遺産の一部とともに遺品として油彩画 125 点、デッサン 170 点、写生帖、その他の関係資料が寄贈され、黒田記念室にて公開されることになった。

以下に黒田清輝の略年譜を付しておく。

- | | |
|---------------------|---|
| 1866 (慶応 2) 年 | 6 月 29 日 鹿児島高見馬場に生まれる。幼名新太郎。父は島津藩士 黒田清兼。 |
| 1871 (明治 4) 年 5 歳 | 伯父黒田清綱の養嗣子となる。 |
| 1878 (明治 11) 年 12 歳 | この前年、名を清輝と改める。高橋由一の門人細田季治につき、鉛筆画ならびに水彩画を学ぶ。 |
| 1883 (明治 16) 年 17 歳 | 寺尾寿につき、フランス語を学ぶ。外国語学校フランス語科二年級に編入される。 |
| 1884 (明治 17) 年 18 歳 | 2 月 フランスへ留学。3 月 パリのアンスティテュション・ゴッファールに入塾。 |
| 1885 (明治 18) 年 19 歳 | 8 月 ゴッファール廃校となり、10 月リセ・ジンソン・ド・サイイに入学。 |
| 1886 (明治 19) 年 20 歳 | 法律大学に聴講する。パリ滞在中の山本芳翠、藤雅三、林忠正に画家になることをすすめられ、ラファエル・コランに師事する。夏、ベルギー、オランダへ旅行。 |

- 1887 (明治 20) 年 21 歳 法律学校に入学。夏、北フランス、ベルギーに遊ぶ。10 月 法律大学を退学。アカデミイ・コラロッシのコラン教室において絵画を専修する。
- 1888 (明治 21) 年 22 歳 5 月 はじめてグレーに遊ぶ。夏、ベルギー、オランダに旅行。
- 1890 (明治 23) 年 24 歳 6 月以来、グレーに移り住む。
- 1891 (明治 24) 年 25 歳 3 月 ソシエテ・デザルティスト・フランセのサロンに「読書」入選。
- 1892 (明治 25) 年 26 歳 3 月 明治美術会第 4 回展へ参考品として「読書」出品。
7 月 ベルギー旅行。
- 1893 (明治 26) 年 27 歳 ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールのサロンに「朝妝」入選。
7 月 アメリカ経由で帰国。
- 1894 (明治 27) 年 28 歳 10 月 天真道場を設け、後進を指導する。明治美術会第 6 回展に「朝妝」出品。11 月 日清戦争に従軍。
- 1895 (明治 28) 年 29 歳 2 月 従軍より帰る。3 月 第 4 回内国勸業博覧会審査員となり「朝妝」出品。裸体画問題おこる。
- 1896 (明治 29) 年 30 歳 5 月 東京美術学校講師となり、西洋画科の指導者となる。
6 月 白馬会を創立する。11 月 京都旅行。
- 1897 (明治 30) 年 31 歳 白馬会第 2 回展に「智・感・情」「湖畔」などを出品。
- 1898 (明治 31) 年 32 歳 4 月 東京美術学校教授となる。
- 1899 (明治 32) 年 33 歳 白馬会研究所を溜池におく。
- 1900 (明治 33) 年 34 歳 5 月 渡欧。7 月 パリ着。パリ万国博覧会に「智・感・情」「湖畔」など 5 点出品。銀賞を受賞。
- 1901 (明治 34) 年 35 歳 イタリア、ドイツ、ロンドンに旅行。5 月 15 日 パリより帰国。
- 1905 (明治 38) 年 39 歳 5 月 白馬会機関誌『光風』創刊。
- 1907 (明治 40) 年 41 歳 3 月 東京勸業博覧会審査員。8 月 文展審査委員となる。
10 月 第 1 回文展に「白芙蓉」を出品。
- 1908 (明治 41) 年 42 歳 10 月 第 2 回文展に「春の名残」「テリー氏肖像」「樹かげ」など 3 点出品。
- 1909 (明治 42) 年 43 歳 10 月 第 3 回文展に「鉄砲百合」など 2 点出品。
- 1910 (明治 43) 年 44 歳 4 月 第 2 回東京府美術及美術工芸審査員となる。7 月 文展審査員となる。10 月 第 4 回文展に「荒苑斜陽」を出品。帝室技芸員となる。
- 1911 (明治 44) 年 45 歳 3 月 白馬会解散。8 月 文展審査員となる (以後大正 7 年第 12 回まで毎年委員となる)。10 月 第 5 回文展に「百

		日紅」など3点出品。
1912 (大正1) 年	46 歳	5月 光風会創立。6月 光風会第1回展に「菊花」など2点出品。10月 第6回文展に「習作」「木苺」出品。
1913 (大正2) 年	47 歳	3月 国民美術協会会頭に推される。10月 第7回文展に「菊花」など2点出品。
1914 (大正3) 年	48 歳	1月 鹿児島帰省中、桜島爆発に遭遇する。4月 東京大正博覧会審査員となる。5月 『清輝画集』第1集刊行。 同月 第8回文展へ「其日のはて」「もるる日影」出品。
1915 (大正4) 年	49 歳	10月 第9回文展に「跡見刀自肖像」出品。
1917 (大正6) 年	51 歳	3月 養父清綱逝去、子爵を襲爵。
1919 (大正8) 年	53 歳	6月 国民美術協会会頭に再選。帝国美術院会員となる。 10月第1回帝展に「木村翁肖像」出品。
1920 (大正9) 年	54 歳	貴族員議員に当選。
1921 (大正10) 年	55 歳	3月 ロイヤル・アカデミイ・インスティテュート・オブ・ オイル・ペインターズの会員に推挙。
1922 (大正11) 年	56 歳	2月 フランス政府より、クロワ・デュ・コマンズール・ エトワール・ノワール勲章を贈られる。7月 帝国美術院長 に就任。
1923 (大正12) 年	57 歳	2月 フランス政府より、コマンズール・ド・ロルドル・ ナショナル・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章を贈られる。
1924 (大正13) 年	58 歳	5月 フランス政府より、グラン・クロワ・ドラゴン・ド・ ランナン勲章を贈られる。 7月15日 東京麻布笄町の自宅で逝去。同日、叙従三位勲 二等授旭日重光章。

2 帝国美術院附属美術研究所 1930（昭和5）年～1937（昭和12）年

1 開所期の諸事業

開所した美術研究所は、従来からの事業計画を踏まえて、本格的に諸事業に着手する。開所に際して刊行された『帝国美術院附属美術研究所一覽』（1930年10月）に掲げられた趣旨と事業は以下のようになっている。

帝国美術院附属美術研究所一覽

目 次

沿 革

諸規程

帝国美術院規程抜抄

美術研究所事務分掌規程

美術研究所研究資料閲覧規程

美術研究所特別資料閲覧規程

美術研究所事業ノ概要

沿 革

大正十三年七月、故帝国美術院長東京美術学校教授子爵黒田清輝ハ其ノ薨去ニ際シ、遺産ノ一部ヲ以テ美術奨励事業ノ為ニ出捐スベキ旨ヲ遺言セリ。遺言執行人代表者伯爵樺山愛輔氏ハ故子爵ノ遺志ニ従ヒ遺産ヲ以テ行フベキ適當ナル事業ノ選定ヲ伯爵牧野伸顯氏ニ一任ス。乃チ牧野伯爵ハ帝国美術院長福原鏖二郎氏及東京美術学校長正木直彦氏ノ意見ヲ徴シ、且ツ遺言執行人東京美術学校教授久米桂一郎氏ノ希望ヲ参酌シテ左ノ事業ヲ行フコトヲ裁決ス。

一、美術ニ関スル基礎的調査機関トシテ美術研究所ヲ設クルコト

二、黒田子爵ノ作品ヲ陳列シテ同子爵ノ功績ヲ記念スルコト

三、以上ノ目的ヲ実現スルニ適當ナル建物ヲ造営スルコト

四、以上ノ事業成立ノ上ハ一切之ヲ政府ニ寄附スルコト

昭和元年十二月、右ノ事業ヲ遂行スル為ニ委員会設置セラレ、東京美術学校長正木直彦氏委員長トナリ、美術研究所事業ニ関シテ東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵ノ作品陳列ニ関シテ東京美術学校教授久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、同藤島武二及大給近清、

建築造営ニ関シテ東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務ニ関シテ遺言執行人故打田傳吉ノ諸氏委員トシテ各其ノ任ニ当ル。

昭和二年二月、美術研究所準備事業ヲ開始シ、研究資料ノ蒐集ニ努ム。

同 年十月、東京市下谷区上野公園東京美術学校敷地ノ一部ヲ選ビテ建築ノ工ヲ起シ、翌昭和三年九月竣功シタルヲ以テ之ヲ黒田記念館ト名ケ、館内ニ黒田子爵記念室ヲ設ケテ同子爵ノ作品ヲ陳列スル外、美術研究準備事業ヲ此处ニ移シテ之ガ進捗ヲ計ル。

昭和四年五月、各種ノ準備成リシヲ以テ遺言執行人ハ建物、黒田子爵作品、美術研究所準備ノ為蒐集シタル図書写真其ノ他ノ研究資料、備品等一切ニ、金拾五万円ヲ添ヘ帝国美術院ニ寄附ヲ願出ヅ。

昭和五年四月、福原帝国美術院長ハ同院総会ニ於テ右寄附ヲ受ケタル旨ヲ報告シ、文部省ハ之ヲ帝国美術院附属美術研究所トナシ之ニ対シテ国庫ヨリ経費ヲ支出スルコトヲ決定セリ。

同 年六月、勅令第百二十五号ヲ以テ帝国美術院規程改正セラレテ帝国美術院附属美術研究所成立シ、東京美術学校長正木直彦氏主事ニ補セラル。

帝国美術院規程抜抄（昭和五年六月二十八日公布 勅令第百二十五号改正）

第十条 帝国美術院ニ附属美術研究所ヲ置ク美術研究所ハ美術ニ関スル事項ノ調査研究ヲ掌ル

美術研究所ニ主事一人ヲ置ク文部部内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

主事ハ院長ノ監督ヲ承ケ美術研究所ノ事務ヲ掌ル

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

美術研究所事務分掌規程（昭和五年十月制定）

第一条 美術研究所ニ主任ヲ置ク主任ハ主事ノ命ヲ承ケテ所務ヲ掌理ス

第二条 美術研究所ノ事務ヲ分チテ経理部、資料部及編集部トナス

第三条 経理部ニ庶務掛、会計掛及陳列掛ヲ置ク

庶務係ハ左ノ事項ヲ掌ル

一、職員ノ進退、身分及服務ニ関スル事項

二、職員ノ出張ニ関スル事項

三、官印ノ保管ニ関スル事項

四、文書ノ往復及保管ニ関スル事項

五、諸規則ノ制定及改廃ニ関スル事項

六、事務室ノ管理

会計掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

一、歳入歳出予算決算ニ関スル事項

- 二、金庫及倉庫ノ管理
- 三、物品ノ監守受払ニ関スル事項
- 四、土地建物ノ監守及營繕ニ関スル事項
- 五、電話、電灯、瓦斯、水道及暖房ニ関スル事項
- 六、傭人ノ身分ニ関スル事項

陳列掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、陳列及展覽ニ関スル事項
- 二、陳列室ノ管理
- 三、故黒田子爵関係遺品ノ保管

第四条 資料部ニ整理掛及写真掛ヲ置ク

整理掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、図書写真其ノ他研究資料ノ整理、目録編纂、保管、出納及閲覧ニ関スル事項
- 二、書庫及閲覧室ノ管理

写真掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、写真撮影ニ関スル事項
- 二、写真原板ノ整理及保管
- 三、写真室ノ管理

第五条 編輯部ニ調査掛及出版掛ヲ置ク

調査掛ハ美術ニ関スル諸事項ノ調査及編輯ヲ掌ル

出版掛ハ出版ニ関スル事務ヲ掌ル

美術研究所事業ノ概要

美術研究所ハ美術ニ関スル事項ノ基礎的調査及研究ヲナスコトヲ以テ目的トス。此ノ為ニ行フ事業ノ大要左ノ如シ。

一、研究資料ノ蒐集

- (一) 美術品ノ写真其他複製類
- (二) 模写及模造類
- (三) 図書、雑誌及目録類

研究資料ノ蒐集ハ事業ノ基本タルヲ以テ、絶エズ之ガ拡充ト整理トニ努メ研究調査ノ上ニ遺憾ナカラシメントス。右ノ中、美術品ノ写真其他複製類ノ蒐集ニハ特ニ重キヲ置キ、既ニ製作或ハ出版セラレタルモノヲ購入スル外、当研究所写真掛ニヨリテ原作ヨリ撮影ヲ行ヒ新資料ノ蒐集ニ努ム。参考図書類ニ就テモ亦既刊図書ノ購入ノ外、印刷セラレザルモノハ写本ノ製作ニヨリテ之ヲ集ム。

二、調査及編輯

調査及編輯ノ事項ハ其ノ種類多ク且ツ隨時必要ニ応ジテ項目ヲ加フベキヲ以テ、茲ニ悉ク
列挙シ難キモ其ノ原則的ナルモノヲ挙グレバ左ノ如シ。

- (一) 技法及材料ニ関スル調査 (未着手)
- (二) 美術行政及美術教育ニ関スル調査
- (三) 海外ニ於ケル美術上ノ諸施設及機関ニ関スル調査
- (四) 現代美術ノ趨勢ニ関スル調査
- (五) 「東洋美術総目録」編輯
- (六) 落款印譜集成
- (七) 東洋美術家伝記ノ編輯
- (八) 美術関係根本史料ノ編輯
- (九) 美術関係文献目録ノ編輯

三、出版

出版ハ前記資料ノ蒐集及編輯並ニ美術ニ関スル諸事項ノ調査ノ進捗スルニ從ヒテ逐次之ヲ
行フ。其ノ主要ナル種別左ノ如シ。

- (一) 時報 定期刊行物
- (二) 研究報告 不 定 期
- (三) 研究資料 不 定 期

四、閲覧及展覽

美術研究所ハ其ノ従事スル諸事業ニ支障ナキ範圍ニ於テ、一般研究者ノ為ニ所内ニ蒐集セ
ル諸研究資料ノ閲覧ヲ許ス。又黒田子爵記念室ヲ公開スル外、他ノ展覽室ニ於テ隨時研究的
小展観ヲ行フ。閲覧及展覽ニ関シテハ別ニ規程ヲ設ク。

五、美術上ノ国際連絡

美術研究上ノ国際的連絡ヲ計リ、且ハ海外ニ於ケル日本美術ノ理解ヲ進メ其ノ進出ノ機運
ヲ作ランガ為ニ、美術研究所ハ内外ニ於ケル美術上ノ情報ヲ集メ彼我ノ連絡機関タルコトヲ
期ス。

開館当初は、資料収集、調査研究が精力的に行われ、成果の刊行が順次実現されていっ
た。また、啓明会、美術懇話会など関連団体との連携を行い、諸事業の拡大を図っている。
具体的な活動の内容については「戦前の古美術研究」(本書 131 ~ 146 頁) に詳しい。また、
この間に行われた資料収集については『資料編』の「東京文化財研究所所蔵 拓本総目
録」(462 ~ 545 頁)、「同 龍門石窟造像銘記拓本目録」(546 ~ 608 頁)、「矢代幸雄収集
西洋美術関係図版目録」(635 ~ 658 頁) を、調査研究については「戦前期撮影調査票一
覧」(283 ~ 461 頁)、「和田新調査撮影記録」(609 ~ 615 頁)、「尾高鮮之助調査撮影記録」
(616 ~ 634 頁) を、展覧会については「開所記念展覧会」(77 ~ 93 頁)、「ビニョン氏招

聘委員会主催英国水彩画展覧会」(659～662頁)を、出版刊行については『美術研究』総目次」(702～742頁)、「東京文化財研究所所蔵刊行物一覧」(845～864頁)の各資料をそれぞれ参照されたい。

1930(昭和5)年11月、正木直彦が帝国美術院長に就任したため、美術研究所主事を辞任。矢代幸雄が主事となり、開所以前から美術研究所の具体的構想を担ってきた矢代によって諸事業が牽引されることとなった。

開所以前から、美術研究所事業の遂行のためには黒田清輝の遺産のみでは不足であることが関係者の間で認識されており、政府からの予算が1928(昭和3)年に約されていた。また、1929(昭和4)年9月から翌年5月まで、財団法人啓明会の援助を受け、青山(和田)新が西アジア美術研究のため海外出張し、1931(昭和6)年10月から1年間、尾高鮮之助が文部省在外研究員として南インド、西アジア、欧米への調査出張をするなど、文部省など政府との連携も図られていたが、さらに関連団体として1931(昭和6)年11月21日美術懇話会が設立され、正木直彦が理事長、理事に和田英作、川合玉堂、矢代幸雄が就任する。同会については本書「関連団体」に詳しいが、美術研究所を例会開催の場としたほか、同会主催の展覧会も美術研究所を会場として開催された(展覧会・講演会の一覧及び出品目録は、『資料編』『美術懇話会主催展覧及び講話等』663～696頁、会員一覧は、「美術懇話会会員名簿」697～698頁参照)。

1932(昭和7)年1月1日、美術研究所の編集・刊行になる『美術研究』が創刊される。これは当初から構想にあった「美術研究所論叢」が実現されたもので、矢代幸雄による「美術研究所の設立と美術研究の発刊」を巻頭に、青山新の「ターク・イ・ブスターンの彫刻」「海外彙報」「図版解説」「美術研究所彙報」「等伯画説(校刊)」が掲載された。『美術研究』は、美術研究所の後身である当研究所美術部によって編集刊行が続いており、その体裁、理念も当初のものを引き継いでいる(本書「美術部」の項及び『資料編』『美術研究』総目次」702～742頁参照)。巻頭論文で矢代は、美術研究所設立の経緯について述べ、その事業を説明した後に、美術に関する資料の収集・整理・公開が予算等の制約により十全に行われていない現状を鑑み、「美術に関する基礎的調査に精力を集中して、その結果を社会一般に提供して行く方が、急務と言ふ可きである」と述べている。そして「研究所調査事項の原則的大綱」として、第一に「東洋美術総目録」の編纂、東洋美術家伝記の集成、落款・印譜集成、美術関係根本史料の編纂、第二に美術関係の文献目録の作製、第三に日本美術年鑑の編纂、第四に海外諸機関との連絡協力、第五に美術行政・教育に関する調査、第六に未着手ながら美術に関する技法材料の調査研究事業を挙げている。ここに述べられた方針に従って事業が進められ、1932(昭和7)年には

『美術研究資料第1輯 支那古版画図録』、1934年には『美術研究資料第2輯 吉備大臣入唐絵詞』が刊行され、以後も『美術研究資料』、また1938(昭和13)年に『日本美術資料1』が刊行された。さらに前記の「調査事項の原則的大綱」の第一に挙げられた「東洋美術総目録」の編纂の成果として、『東洋美術文献目録』が1941(昭和16)年に刊行された。同書は、明治、大正、昭和(昭和10年度まで)年間に、国内で刊行された500種を超える定期刊行物に所載された古美術に関する文献を採録、編集したものであり、当研究所ならではの組織的な編纂事業であった(同書の詳細については、「企画情報部」中の美術部及び情報資料部の戦前期の記述を参照されたい)。

1932(昭和7)年1月20日、美術研究所で帝国美術院連絡委員会が開催され、明治大正美術史編纂委員会の提案に全員一致で賛成、編纂委員及び事務を矢代幸雄幹事のもと美術研究所所員が担当することとなる。この事業は、1927(昭和2)年6月に東京府美術館を会場に行われた朝日新聞社主催による「明治大正名作展覧会」の収益が、帝国美術院に寄附されたことに端を発する。1932年6月、同院内に「明治大正美術史編纂委員会」が設置され、美術研究所内に「明治大正美術史編纂部」が設けられ、尾崎夏彦が主任、隈元謙次郎が嘱託となった(同編纂事業の詳細については、「戦前の近代美術研究」中の147～152頁参照)。

この事業と並んで、美術研究所の近現代美術史に関する調査研究、編集刊行事業の重要な部分をなす『日本美術年鑑』の編纂は、1935(昭和10)年に具体化していったことが、同年12月13日付けの書類「昭和10年度美術年鑑編纂計画及び出版計画報告」によってわかる。1年間に行われた展覧会、刊行された美術関係図書及び定期刊行物所載文献、物故した美術家の略歴を掲載し、毎年美術活動を記録する『日本美術年鑑』は、明治末年に美術評論家岩村透の構想によって画報社から刊行されたものを嚆矢とし、1927(昭和2)年から数年間は朝日新聞社編として刊行された。美術研究所編集による『日本美術年鑑』はその流れを汲むものであるが、編集のために収集される資料が研究所資料として整理・公開されるものであり、また、同年鑑に掲載される文献目録が、矢代が研究所の『美術研究』創刊号の巻頭論文に「研究所調査事項の原則的大綱」として挙げた「美術関係の文献目録の作製」に結びつくものであった、というように、それぞれが全体の美術研究所構想に資するものであった(詳細は、「戦前の近代美術研究」中の159～161頁参照)。

この間、研究所の「美術上ノ国際連絡機関トシテ将来職能ヲ發揮」する機能を一身に担って、矢代は頻繁に海外に赴き、海外の美術関連機関との交流を図っている。1932(昭和7年)11月24日、矢代はハーヴァード大学に教授として招聘され日本美術講義のた

め渡米し、1933（昭和8）年7月6日に帰国。1935（昭和10）年5月には渡英し、ロンドン大学コートールド・インスティテュートを中心に英国諸大学で東洋古美術に関する講義を行った（『美術研究』42、1935年6月）。この英国滞在については矢代幸雄の『私の美術遍歴』に詳しい。

美術研究所予算は帝国美術院予算中、文部本省の学術研究及奨励費（美術研究及奨励費）に組み込まれ、通常の事業費・人件費である経常費と、その他建物営繕などのための臨時費に区分されていた。開設時の研究所運営予算は経常費部分にあたる。

「昭和九年度美術研究所概算要求増減額事項別明細書」（「帝国美術院附属美術研究所昭和九年度概算書」日芸047）内の「予算不足補充ニ要スル経費」項目には、「美術研究所ハ昭和五年設置ノ際予算額三〇、〇〇〇円ヲ以テ事業ヲ計画セラレタルモ、昭和六年度以降減額セラレテ現在ニ至リ、昭和八年度予算額ハ二三、五二七円ニシテ三〇、〇〇〇円ニ対シ六、四七三円ヲ減ズ」とあり、運営の困難をうかがわせる。例えば人件費に関しては、1932（昭和7）年は1万6184円で3428円の不足、翌年も1万6184円で3789円の不足となっている。物価や人件費の上昇を考慮すると、運営は目算通りというわけにはいかなかったようである。また研究所運営の上で、恒常的な施設設備の整備は必要不可欠であり、営繕に要する臨時費の要求も行われた。

営繕に関しては、書庫建設が当初から切望されていたところであった。開設当初、書庫には事務室の2室（各室7坪半）が充てられていたが、資料の増加による保管場所の不足及び事業進捗に伴う事務室の不足から、敷地内に書庫一棟の新営が計画されている。1934（昭和9）年の概算要求は、次の通りである（日芸047より）。

臨時費

営繕費 2万5860円増

書庫新営費 2万3860円（建設1万9360円、鉄製書架4500円）

本館修繕費 2千円（各窓サッシ塗料、各窓日覆全般、内部天井及壁面ペンキ塗替等）

翌1935（昭和10）年に、実際に配分された営繕費は、要求していた建設費用には満たなかったものの、計画を幾分変更した上で、書庫を着工、1935（昭和10）年1月28日に黒田記念館に隣接して書庫（鉄筋コンクリート造、二階建、延面積129㎡）が竣工し、美術図書館としての機能の拡充が図られた。工事にあたっては資材置き場等のため、東京美術学校の土地を一部使用するための借用申請をしている。期間は1934（昭和9）年9月3日から1935（昭和10）年1月15日であった（『土地建物関係書類』〔東芸006〕所収書類「美会等100号」より）。この年に増額が認められたのは建設費のみで、経常費自体は増額されず、不足が出た状態のままであった。翌1935（昭和5）年度の概算書では臨



16 資料閲覧室（『帝国美術院附属美術研究所一覽』
1930年10月より）

時費（営繕費）書架設置 2500 円を含め 1 万 1400 円の増額を要求（「帝国美術院附属美術研究所 昭和十年度概算書」日芸 070 より）。当初の計画によると書庫の書架は金属製であったが、同年の概算書には「其ノ中一
双ノミハ現在使用中ノ木製書架ヲ移
シテ当分ノ中使スルコトヲ得ルニ
依リ、本年度ニ於テハ二階ノミニ書

架設備ヲ要ス」とあり、木製の書架に変更されたことがわかる。同年の書架設置費は、要求よりも多少の減額があったことが認められ、書棚は 1、2 階に配された。

2 年にわたる書庫新営における配分額は、神奈川県立近代美術館蔵「昭和 18 年度概算要求増減額事項別参照書」（神 -5）に記載されている「一、在来書庫建物及設備調」によれば以下のものであった。

区 分	構 造	数 量	建築費	建築年月	支弁費目
書 庫	鉄筋コンクリート	四〇、一一四坪	九、七二〇円	昭和十年一月	新営費
渡廊下	同 平家造	一、二五二			
書 架	木 造	延 三〇〇尺 高サ平均八、三 幅 同 一、五	一、九八〇	昭和十年十二月	新営費
合 計			一一、七〇〇		

構想時からの念願であった収集資料の公開は、1936（昭和 11）年 9 月 1 日から、閲覧室で開始される〔図 16〕。

2 帝国美術院改組と美術研究所

周知のように、1935（昭和 10）年は帝国美術院に大きな変化が訪れた年である。その主要な原因は、帝国美術院展覧会（帝展）という展覧会と、それが引き起こす美術の創作上の問題であったが、その変化の波は同院の附属となっていた美術研究所にも及んだ。

1907（明治 40）年に開設された文部省美術展覧会は、1919（大正 8）年に帝国美術院が発足したのに伴い、帝展となったが、官展開設以来 20 年以上経過した 1930 年代にな

ると、官展の社会的権威の確立と並行するように、いわゆる官展風の作風が出来、作家の自由な制作と研鑽を阻害する傾向が著しくなっていた。こうした矛盾に対応する処置を望む声が高まり、いわゆる在野団体を含みこむ総合美術展を目指して、政府は1935（昭和10）年5月28日、帝国美術院官制及び美術研究所官制制定の件を定例閣議で決定し、同日、文部省が内定した院長と会員49名の氏名を発表した。この改組は、時の文相が松田源治であったところから、松田改組と称されるが、和田英作、横山大観など極めて限られた美術家にのみ意見を徴してなされたため、美術界に不満が続出し、議論百出の状況となった。その中で、改組第1回帝展は1936（昭和11）年2月25日から3月25日までと決定されたが、1936（昭和11）年2月1日、松田文相が急性心臓麻痺で死去。第1回展は改組反対の諸団体からの出品がなく、会期中に2.26事件が起きたこともあって、入場者は低迷した。2.26事件後に組閣された廣田弘毅内閣の文相は、平生鈺三郎が就任し、紛糾続く帝国美術院問題に、再改組の方針で取り組み、展覧会を帝国美術院から切り離して文部省主催とする案を打ち出して、1936（昭和11）年8月4日、文部省美術展覧会規則を制定して新文展が開設されることとなる。

この改組に伴って美術研究所には次のような変化があった。1935（昭和10）年6月1日、美術研究所官制（勅令第148号・「関係法規（抜粋）」『資料編』893頁）の制定公布により、所内の体制も次のように変更された。第一に主事を改め所長を置くこととなり、和田英作が美術研究所所長に任命され、新たに所員・助手・書記の増員配置がなされた。経理部に三掛の体制は、この事務分掌規程制定でもほぼ変わらず「庶務会計及び資料展覧ニ関スル事務ヲ掌ル」として業務内容に変更はなかったが、事務嘱託の大給、岩淵の他に、書記一人が正規雇用されることとなり、元助手である木下龍也が登用されている。書記は「上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス」と規程され、経理その他庶務部門を担当したものと推測される。この後書記には、庶務掛の雇員であった今関孝康が一時昇格したのち、下村英時が新たに採用され、戦後の改組まで任にあった。また、書記設置と同時に東京美術学校書記（会計掛長）筒崎謙齋が嘱託となり、諸業務を補助したと思われる。

第二に、この改組に伴い、美術研究所に研究部が設けられた。1930（昭和5）年10月に制定された「美術研究所事務分掌規程」の「第二条 美術研究所ノ事務ヲ分チテ経理部、資料部及編輯部トナス」は、1935（昭和10）年より「第一条 美術研究所ノ事務ヲ分チテ研究部、資料部及経理部トス 研究部ハ之ヲ第一部、第二部及第三部ニ分ツ」と改正されている。従来の編輯部は各々研究部に附属する形で設置され、所属研究部の研究及び成果発表の為の編集を行うこととなった。

1935（昭和10）年度の予算額は総額3万2527円となり、この人員増加や組織改編、

また数年にわたり要求し続けていた美術年鑑事業の開始などにより大幅に増額したものと推測される（「昭和十一年帝国美術院」日芸 080 より）。

1936（昭和 11）年 6 月 22 日、和田英作が東京美術学校長ならびに美術研究所所長を免ぜられ、矢代幸雄が美術研究所長となる。同年に提出された「昭和十二年度美術研究所概算要求増減額事項別表」（日芸 081）によれば、書庫の増設及び写真室、科学研究室の新営が構想されていたことがうかがえる。

昭和十二年度美術研究所概算要求増減額事項別表

一 般 会 計				
事 項	明細書丁数	増減要求額		
		経 常 費	臨時費	計
営繕に関する経費	一	〇円	四二、四五〇円	四二、四五〇円
一 写真室及科学 研究室新営	一	〇	三五、四五〇	三五、四五〇
二 書庫増築 (略)	三	〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇
科学研究部設置ニ 要スル経費	一三	四〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
増加要求額合計		一二四、〇四五	六二、四五〇	一八六、四九五

昭和十二年度美術研究所概算要求増減額事項別明細書

営繕ニ関スル経費

一、写真室及科学研究室新営

科学研究部設置（別項参照）ニ伴ヒ現在ノ建物狭少ニシテ之ガ設備ノ余地無キヲ以テ本館ニ連接スル別棟ノ研究室新営ヲ必要トス而シテ科学研究部ハ写真作業ヲ伴フヲ以テ此ノ建物ニ写真室ヲ併設スルコトヲ必要トス仍テ左記ノ経費ヲ要求ス

新営費 三五、四五〇円

写真室及科学研究室新営費 三五、四五〇円

内 訳	区 分	構 造	延坪数	単 価	金 額
写真室及研究室	鉄筋コンクリート造三階建		一〇八坪	二七五円	二九、七〇〇円
本家取合工事一式					五〇〇円
換気装置工事一式					八五〇円
電気装置工事一式					八〇〇円
瓦斯装置工事一式					三〇〇円
暖房装置工事一式					一、五〇〇円

給水装置工事一式

五〇〇円

地均排水工事一式

一、三〇〇円

一、書庫増築

美術研究所書庫ハ本館ニ隣接スル建坪十九坪余式階建一棟ヲ有スルノミニシテ其ノ収蔵力甚ダ少ク図書研究資料ノ増加ニ伴ヒテ現在既ニ狹溢ヲ告ゲ速ニ之ガ拡張ヲ必要トスル状態ニ在リ而シテ此ノ建物ハ将来第三階ヲ増築シ得ル様設計サレタルモノニシテ現在ノ屋上ヲ第三階ノ床トシ其ノ上ニ簡便ニ増築ヲ為スコトヲ得ルヲ以テ左記経費ヲ要求ス

営繕費

新営費 七、〇〇〇円

書庫増築費 六、〇〇〇円

区 分	構 造	延坪数	単 価	金 額
書庫第三階	鉄筋コンクリート造	一九、五五三坪	二七五円	五三七六円三七
附帯工事換気装置工事電燈工事其他一式				六二三元六三

設備費 一、〇〇〇円

区 分	構 造	延 長	金 額
書架設置	木 製	一五〇尺	九五〇円〇〇
取付工事			五〇円〇〇

(略)

科学研究部設置ニ要スル経費

美術ノ材料技法等ニ関スル科学的研究及ビ古美術調査ニ於ケル科学的方法ノ利用等ハ、古美術研究、美術品ノ永久的保存、現代及ビ将来ニ亘ル我が国美術ノ発達等ノ上ニ有効適切ナル参考ヲ供シ一般美術界ヲ裨益スベキ事業ナルヲ以テ美術研究所ハ従来之ガ実施ヲ計画シ其ノ一試験トシテ赤外線写真ニ依ル古美術研究ノ実験等ニ着手シツツアリト雖モ右ハ僅ニ其ノ一部分ニシテ現在ノ経費ヲ以テハ上述ノ目的ニ適スル事業ハ到底之ヲ実施スルコト能ハズ之ガ為ニハ科学研究部ヲ新設シテ専任ノ技術的職員ヲ置キ実験室機械器具等ノ設備ヲ為スコトヲ必要トス仍テ左記ノ経費ヲ要求ス

区分	金 額	備 考
經常費		
文部本省	四〇、〇〇〇円	
俸 給	四、八五〇円	
内訳	奏任俸給	技師 一人 平均年俸 二、八八〇円 二、八八〇円
	判任俸給	技手 二人 平均年額 九八五円 一、九七〇円
学芸研究及奨励費	三五、一五〇円	

経常費

美術研究及奨励費 三五、一五〇円

内訳	諸給				三、五五〇円
----	----	--	--	--	--------

技術嘱託	一人	年額	一、五〇〇円	一、五〇〇円
------	----	----	--------	--------

雇員	一人	年額	六五〇円	六五〇円
----	----	----	------	------

雇員	二人	一人年額	四二〇円	八四〇円
----	----	------	------	------

給仕	一人			一八〇円
----	----	--	--	------

小使	一人			三八〇円
----	----	--	--	------

庁費				三〇、八〇〇円
----	--	--	--	---------

備品費				五、〇〇〇円
-----	--	--	--	--------

図書購入費				八、〇〇〇円
-------	--	--	--	--------

実験材料費				一五、〇〇〇円
-------	--	--	--	---------

消耗品費				二、八〇〇円
------	--	--	--	--------

雑費				八〇〇円
----	--	--	--	------

臨時費

科学的研究設備費	二〇、〇〇〇円	科学的研究用実験設備、器具其他一式
----------	---------	-------------------

合計	六〇、〇〇〇円
----	---------

ここには、事業構想にあって未着手とされていた「美術上の技法・材料に関する調査研究」を含み、赤外線撮影など光学的手法をも視野に入れた自然科学的調査研究部を実現させようとする意図が見えるが、科学研究部はこの段階では実現を見なかった。

一方、新文展開設により展覧会主催を担わなくなった帝国美術院については事業の見直しが行われており、その動きの中で1937（昭和12）年5月、美術研究所の所属についても、黒田の遺言執行に当たった者を中心に検討されていたことが、正木直彦の日記である『十三松堂日記』に見える。それによると5月12日、華族会館で牧野、樺山、和田英作、赤間信茂が美術研究所独立について協議し、正木より、清水美術院長の了解を求めた後、樺山と一緒に文部当局へ申し込むこととなった。同日記の5月15日の項には、美術研究所官制を改革し、独立させることについて、寄付者（樺山ら遺言執行人）が賛成し、美術院長もその旨了解済みとして、文部当局へ伝え、当局より大体同意のため、正式に美術研究所から官制改正の内申をするよう求められたとある。6月24日、勅令281号（「関係法規（抜粋）」『資料編』893～894頁）をもって帝国美術院を廃止し、帝国芸術院が創設されるに際し、美術研究所は独立して直接に文部大臣の管理に措かれることとなった。

3 文部大臣直轄美術研究所 1937（昭和12）年～1947（昭和22）年

1 新たな事務分掌と諸事業

この時代の美術研究所は、前年に起きた2.26事件以後、戦争へと向かう世相を色濃く反映している。矢代を初めとする所員の中國大陸への出張ほか、アジアとのかかわりを深める一方で、1940（昭和15）年に設立された東洋美術国際研究会との連携を強めている。一方で、1942（昭和17）年、複数の所員が免官となり、美術研究所を構想しその実現にむけて牽引してきた矢代幸雄が辞職するなど、人事面での動きが大きかった。

1937（昭和12）年の改組により、帝国美術院は帝国芸術院となった。1907（明治40）年に文展が開催されて以降、その審査や展覧会の運営に関して紛争が絶えず、帝国美術院の設置及びそれに伴う帝展開催の動機の一つもそこにあった。帝国芸術院の設置も美術界の紛争の禍根を断つために再度、文部省主催で展覧会を行うこととし、美術のみならず、芸術全般にわたって奨励しようとする意図があったとされる。1937（昭和12）年6月24日付官報の勅令第281号（「関係法規（抜粋）」『資料編』893～894頁）により、美術研究所は帝国美術院附属を離れ文部省管轄となった。これにより、予算決算をはじめとする会計その他の事務が、従来よりも所内で独自に処理されるようになった。1937（昭和12）年度より、文部省宛に職員数や事業概要をまとめた「年報」の進達を義務づけられ、毎年度分を翌年5月31日までに提出することとなる。

1937（昭和12）年11月29日、美術研究所長職務規定、美術研究所事務分掌規定が、『美術研究所一覧』（昭和十三年一月）に以下のように制定される。

美術研究所長職務規程（昭和十二年十一月二十九日文部省訓令）

第一条 所長ハ判任官ノ進退ヲ具状シ及高等官ノ進退ニ付意見ヲ具ヘテ文部大臣ニ稟申スルコトヲ得

第二条 所長ハ文部大臣ノ許可ヲ経テ嘱託員ヲ置クコトヲ得

第三条 所長事故アルトキハ文部大臣ノ許可ヲ経テ高等官ヲシテ其事務ヲ代理セシムルコトヲ得

第四条 左ノ事項ハ所長之ヲ専行スヘシ

- 一 事務ノ分課及職員ノ事務担任ヲ定ムルコト
- 二 所務細則ノ制定及改廃

三 俸給月額八拾五円以下ノ雇員ノ進退ニ関スルコト

四 所員以下ノ内国各地出張ニ関スルコト

五 所員以下ノ除服出仕及請暇ニ関スルコト

六 嘱託員ノ解嘱及其手当減額ニ関スルコト

七 展覧会、講演会及講習会ノ開催並ニ其講師依頼ニ関スルコト

前項第六号ノ処分ヲナシタルトキハ遲滞ナクコレヲ文部大臣ニ報告スヘシ

第五条 前条ニ掲ケタル事項ノ外ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ之ヲ施行スヘシ

美術研究所事務分掌規程（昭和十二年十一月二十九日文部省制定）

第一条 美術研究所ノ事務ヲ分チテ研究部、資料部、写真部及経理部トス

研究部ハ之ヲ第一部、第二部及第三部ニ分ツ

第二条 研究第一部ニ於テハ東洋古美術ノ調査及研究ニ関スル事務ヲ掌ル

研究第一部ニ調査掛及編輯掛ヲ置ク

調査掛ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一 東洋美術総目録ノ編纂

二 落款印譜ノ編纂

三 東洋美術家辞典ノ編纂

四 美術関係史料ノ編纂

編輯掛ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一 定期刊行物「美術研究」ノ編纂及出版

二 其他不定期刊行物ノ編纂及出版

第三条 研究第二部ニ於テハ明治以降ノ美術ノ調査及研究ニ関スル事務ヲ掌ル

研究第二部ニ明治大正美術史編纂掛及美術年鑑編纂掛ヲ置ク

明治大正美術史編纂掛ニ於テハ明治大正美術史ノ編纂ニ関スル事務ヲ掌ル

美術年鑑編纂掛ニ於テハ「日本美術年鑑」ノ編輯及出版ニ関スル事務ヲ掌ル

第四条 研究第三部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

一 欧米美術ノ調査及研究ニ関スルコト

二 欧米ニ於ケル東洋美術研究ニ関スル調査

三 美術上ノ国際連絡ニ関スルコト

第五条 資料部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 図書、写真其他研究資料ノ蒐集、整理、目録編纂、保管及出納ニ関スルコト

二 図書、写真其他研究資料ノ閲覧ニ関スルコト

三 図書原簿ノ整理及保管

四 美術関係文献目録ノ編纂

五 書庫及閲覧室ノ管理

第六条 写真部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 写真撮影ニ関スルコト
- 二 写真原板ノ整理及保管
- 三 写真室ノ管理

第七条 経理部ニ庶務掛、会計掛及陳列掛ヲ置ク

庶務掛ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 職員ノ進退、身分及服務ニ関スルコト
- 二 職員ノ出張ニ関スルコト
- 三 官印ノ管守ニ関スルコト
- 四 文書ノ往復、編纂及保管ニ関スルコト
- 五 諸規則ノ制定及改廃ニ関スルコト
- 六 他掛ニ属セザル事務

会計掛ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 歳入、歳出、予算、決算及収支ニ関スルコト
- 二 会計ニ関スル文書、諸帳簿ノ整理及保管ニ関スルコト
- 三 物品ノ購入、保管、受払及修繕ニ関スルコト
- 四 物品ノ売却ニ関スルコト
- 五 土地建物ノ監守、営繕及洒掃ニ関スルコト
- 六 電話、電燈、瓦斯、水道及暖房ニ関スルコト
- 七 傭人ノ進退及取締ニ関スルコト
- 八 寄附及貸借ニ関スルコト

陳列掛ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 陳列及展観ニ関スルコト
- 二 陳列室ノ管理
- 三 黒田清輝関係遺品ノ保管

第八条 各部ニ主任ヲ置ク所長ノ命ヲ承ケ部ノ事務ヲ掌理ス

従来と比較して変更された点として、1935（昭和10）年の規定では「第一部 東洋古美術、第二部 明治以降の美術、第三部 海外関係」となっていた研究部の分掌が、1937（昭和12）年の改正によって以下になったことが挙げられる。

- 第一部 東洋及び日本古美術に関する調査研究・編纂及び出版
- 第二部 日本近代美術に関する調査研究・編纂及び出版
- 第三部 西洋美術に関する調査研究・編纂及び出版

ただし、同年度の『年報』によれば「第三部ノ事業ハ未ダ実施ニ至ラズ」とあり、「西洋美術に関する調査研究・編纂及び出版」事業は、規定はされたものの、未着手であった。

1937（昭和12）年度の予算は、前年の3万円台を大幅に上回る5万8052円となり、飛躍的に伸びた。1937（昭和12）年度の概算要求における「科学研究部設置」及び「写真室及科学研究室新営」に関してその一部が認められ、1938（昭和13）年2月12日、写真室1棟（木造、延面積97㎡）が竣工する。この建設の為、東京美術学校より49坪を追加借用している。また同年3月25日には、本館と写真室を繋ぐ渡り廊下を建設し、行き来の利便性をはかった。「科学研究部」設置に関しては、1939（昭和14）年度の概算要求まで継続して計画し、予算要求を続けているものの、昭和13年度『年報』中に「現下ノ時局ニ鑑ミ一時予算提出ヲ留保ス」とあり、以降予算要求をしていない。この計画に準じた研究部となる保存科学部が改めて計画されるのは、戦後になってからとなる。

同年に提出された「昭和十三年度概算書」（東文研C12）には、従来、朝日新聞社からの寄附によって行ってきた明治大正美術調査を予算化する件とともに、西洋美術史の調査研究、国際連絡及び日本美術の海外宣伝等を視野にいった第三部を新設する構想が以下のように述べられている。

昭和十三年概算書

明治大正美術調査部設置ニ要スル経費

美術研究所ハ帝国美術院ノ委嘱ニヨリ朝日新聞社ノ指定寄附金二五、〇〇〇円（年額五、〇〇〇円五ヶ年継続）ヲ以テ昭和七年度ヨリ明治大正美術史編纂ヲ開始シタリ。然ル所昭和十一年度ヲ以テ右寄附金終了シタルヲ以テ本事業ヲ美術研究所ニ於テ引継キ編纂ニ従事スルト共ニ従来編纂ノ経験ニ鑑ミ此ヲ基礎トシ新ニ明治大正美術資料ノ根本的蒐集及調査研究ヲ遂行スルノ必要アリ仍テコレニ要スル経費左記ヲ要求ス

第三部設置ニ要スル経費

美術研究所ニ於テハ従来第一部及第二部ヲ置キ東洋美術ニ関スル調査研究ヲ分掌セシメタリシガ（一）西洋美術ノ研究（二）西洋ニ於ケル東洋美術研究ノ趨勢ニ関スル調査（三）美術上ノ国際連絡及日本美術ノ海外宣伝其他ノ調査研究ヲ掌ル為新ニ第三部ヲ設置スルノ必要アリ仍テ之ニ要スル経費左記ヲ要求ス

西洋美術や国際連携を分掌する第三部は、組織上すでに成立していたが、『年報』に見られるように未着手であったことから、実質的な稼働を目指して「第三部設置」が記

述されたものと推測される。この構想は次年度にも引き継がれ、また、新たに「日本美術精神宣揚」「支那美術ノ調査研究」「美術研究所設置十周年記念出版」などが構想されていたことが、以下の「昭和十四年度概算関係」(東文研C13～15)の書類に見える。

昭和十四年度概算関係

目次

- 一、書庫増築
- 二、自動車々庫新営
- 三、明治大正美術史編纂ニ要スル経費
- 四、日本美術精神宣揚及指導ニ要スル経費
- 五、美術品写真製作及保存事業ニ要スル経費
- 六、日本美術海外宣揚ニ要スル経費
- 七、支那美術ノ調査及指導ニ要スル経費
- 八、美術研究所設置十週年記念出版ニ要スル経費

三、明治大正美術史編纂

一、明治文化研究ノ趨勢

明治以降ハ我国運ノ世界的躍進時代ニシテ、其史実ヲ今日ニ於テ調査シ置クハ、永ク昭和ヲ後世ニ伝フルト共ニ将来ニ於ケル躍進ニ備フル所以ナリ。故ニ臨時帝室編修局ニ於テ二十年ノ長キニ亘リ明治天皇御紀ノ編纂セラレタルヲ始トシ、官私各方面ニ於テ此ガ調査研究ハ着々トシテ進行シツツアリ、文部省維新史料編纂事務局ノ維新史研究、外務省ノ外交文書公刊、大蔵省ノ財政史編纂、明治工業史、明治文学史等ノ編纂ハソノ顯著ナル数例トス

二、明治大正美術史編纂ノ急務

明治大正時代ノ美術ハ国運ノ躍進ニ伴ヒテ、其隆盛ナルコト殆ド前古ニ比類ナク、日本近世ニ於ル文化進展ノ好個ノ紀念碑タリ。然ルニ此時代ノ美術ニ関シテハ従来信憑スベキ研究ヲ全ク欠キ、片々タル概説ノ二三ヲ算フルニ止レバ、前記一般文化、科学方面ノ研究ノ趨勢ニ鑑ミテ遺憾トスベキハ言ヲ要セザルノミナラズ又将来ニ於ケル文化発展ニ備フベキ重要ナル部門ヲ無視スルノ議ヲ免レザルモノトス。而モ明治初年以來僅カニ七十余年ニシテ其業績ヲ調査スベキ資料早クモ散逸ニ類シ、之ヲ博搜シテ保存ノ完璧ヲ期スルハ刻下ノ急務タリ、仍テ下記ノ方針ニ基キテ資料ノ蒐集及編纂ヲ進メ可及的速ニ之ヲ完成セシムルヲ以テ急トスルモノナリ

三、今後ノ調査及方針

イ、資料ノ蒐集

本調査ニ於テハ左記諸資料ノ蒐集ヲ必要トス

- (一) 図書、図録
- (二) 美術雑誌、目録、新聞其他ノ刊行物
- (三) 未刊資料(手記、書簡、談話筆記)
- (四) 画稿下絵、写生帖等
- (五) 落款印譜
- (六) 写真、複製類

此中(一)(二)等ノ既刊資料ハ従来ヨリ蒐集ニ努メタレドモ(三)以下最モ重要ナル基礎資料ハ未ダ殆ンド蒐集ニ至ラズ、此等ハ時間ノ経過ト共ニ散逸ノ虞アリテ其徹底ノ蒐集ハ刻下ノ急務トス(概算項目中最モ多額ヲ要ス)

ロ、編纂及出版

前項資料ノ蒐集、整理ニ併行シテ美術家伝記、制度、団体、展覧会博覧会等ノ諸事項ニ亘リ調査編纂ヲ進行セシムルモノトシ、編纂完成スルニ随ヒ逐年分冊(年一冊)ヲ以テ出版ニ付シ約二十五分冊ヲ以テ大約左ノ通り稿本明治大正美術史ヲ完成スルモノトス

第一部 明治大正美術通史	分冊数(大約) 二
第二部 明治大正美術各論(伝記及資料)	
一、日本画編	八
二、洋風画編	五
三、彫刻編	四
四、工芸編	二
五、美術関係者等編	三
第三部 総索引	一

右各分冊ハ四六倍版大約図版六〇—七〇枚本文二〇〇頁五〇〇部ヲ印刷ノ予定トス
(製作単価六円出版費合計三、〇〇〇円)

四、日本美術精神宣揚及指導ニ要スル経費

一、事業概要

日本美術精神ノ宣揚ニ当リ最モ有効適切ナル方法トシテ実施スベキ項目左ノ如シ

(一)「日本美術資料」ノ出版拡充

「日本美術資料」ハ日本美術各時代ノ名品ヲ収録シテ解説ヲ加ヘ、国民教養トシテ美術ノ智識ヲ普及シ、ソノ精神ヲ作興スルヲ目的トシ、昭和十二年度以降美術研究所ニ於テ刊行中ニシテ、掲載図版ノ選択及解説ノ適正、複製技術ノ忠実ヲ以テ迎ヘラル、所ナルモ、何分一年間ノ収載図版僅カニ二十種ニ過ギズ、国宝及重要美術品ノミヲ数フルモ約一万点ニ上ル日本美術ノ概観ヲ得シメントスルニ甚ダ

迂遠ナルヲ免レズ、加之現在ハ全額収入金支弁ヲ以テ実施セラレ、為ニ之ヲ最モ有効ニ使用セントスル方面ヘノ普及甚シク困難ナラシメツ、アリ、仍テ本事業ニ於テ別ニ二年八十種ノ編纂ヲ行ヒ現在実施中ノ二十種ト併セテ百種トナシ、之ヲ左記ノ如ク頒布シテ、日本精神涵養ノ根本的資料トシテ活用セシメ、且外国文摘要ヲ附シテ日本美術ノ精華ヲ外国ニ宣揚セシメントスルモノナリ（以下略）

（二）国民ニ美術ニ対スル智識ヲ普及シ其教養ヲ高ムル為ノ教材資料作製並ニ頒布

イ、美術文化映画ノ作製

教育上映画ノ有効ナル特性ヲ利用シテ美術及其母胎タル日本ノ自然、国土、一般文化ニ亘リテ其特質ヲ宣揚シ、国民精神ノ涵養ニ資セントスルモノニシテ一年間二種（約五巻）ノ十六ミリ映画ヲ作製シ、之ヲ美術研究所ニ於テ使用スル外、プリント四十組（二〇〇巻）ヲ頒布（有料）又ハ貸与（無料）セントスルモノナリ

ロ、幻燈板製作及頒布

映画ト同様ノ目的ヲ以テ教授用及講演ニ使用セラル、様編輯シ解説ヲ付シテ頒布ス、一年間ノ製作枚数二千枚（五〇枚一組四十組）トス

（三）美術ノ智識普及ヲ目的トスル諸事業ノ開催

イ、展覧会及講演会ノ開催

一般国民ノ美術鑑識及理解ヲ資助センガ為ニ行フモノニシテ、規模余リニ大ナラズシテ而モ上記ノ趣旨ニ契フベキ展覧会及講演会ヲ年二回開催ス而シテ講師ハ美術研究所職員ノ外斯方面ノ權威者ヲモ委嘱シ、映画、幻燈及「日本美術資料」等ヲ教材トシテ使用スルモノトス

ロ、講習会ノ開催

修身、国史、東洋史、文化史、国語、図画科等担任ノ主トシテ中等学校以上ノ教員ニ日本美術ノ組織的ナル智識ヲ得セシメンガ為ニ大約左記ニヨリ講習ヲ行フモノトス

一、時期及場所 年一回約一週間、主要都市ノ内適當ナル箇所ヲ選ビテ開催ス

二、講師 美術研究所職員及斯方面ノ權威者 五一六名

三、講義時間 各講師約六時間、延三十時間

四、参考資料 映画、幻燈及「日本美術資料」

五、実地見学 博物館、社寺、個人蒐蔵ノ見学臨地講演

六、講習人員 約五拾名

七、講習費 金參円

八、講習修了者ニハ出席日数等ヲ査案シ、修了証書ヲ交附スルモノトス

五、美術品写真ノ製作及保存ニ要スル經費

一、事業概要

(一) 美術品主要作品ノ組織の写真撮影

無数トモ言フベキ我国ノ美術作品、建築、彫刻、絵画、工芸、書蹟等ノ各種ニ亘リテ其面影ヲ永久ニ伝フベキ作品ヲ調査選択シ、之ガ撮影ヲ行フコトハ容易ナラザル大事業ナリト雖モ、美術研究所ノ規模ニ鑑ミテ最モ実行性ニ富ムモノトシテ、毎年約四、四〇〇枚ノ撮影ヲ行フモノトス

撮影スベキ作品ハ全国各地ニ散在スルヲ以テ継続的ニ地方出張撮影ヲ行フ、之ガ為ニハ調査員二名技術員二名計四名ヲ以テスル出張班二組ヲ作り平均一回十日間ノ出張ヲ年十回行ヒ一班一回ノ出張ニ於テ平均二二〇枚ノ撮影ヲナスモノトス

(二) 作製写真、印画ノ整理及原板ノ保存

作製写真ハ遂次増加シテ多大ノ量ニ達スベキヲ以テ之ガ整理並ニ永久保存ノ方法ヲ講ズルヲ最モ必要トナスガ故ニ、之ガ設備ヲナスト共ニ、索引目録、写真台帳等ヲ作製シテ遺憾ナキヲ期ス

(三) 作製写真、印画ノ頒布発売

多数写真ハ常ニ需要ニ応ジ得ル様準備シ、出納専任者ニヨリテ一定ノ価格ヲ以テ頒布スルモノトス

六、日本美術海外宣揚ニ要スル経費

一、事業概要

(一) 日本美術国際研究室 (Seminar of Japanese Arts) ノ設置

日本文化ノ研究ヲ目的トスル来朝者ハ勿論、各国外交使臣、其他ノ日本在留外国人ハ、最モ良キ日本理解者タリ得ルト共ニ、其帰国後ニハ日本関係事業ノ指導的立場ニ立ツベキ者タリトス、従ツテ彼等ヲシテ日本文化ヲ深く且ツ正確ニ認識セシムルハ広ク日本文化ノ海外宣揚上極メテ緊要ナリトス、加之此等在留外人ハ自ラ日本美術ニ対スル興味ヲ有シ、其知識並ニ鑑賞ノ指導ヲ切望スルモ、從來ハ偶々通俗的ナル解説ノ行ハルルノ場合聴講シ得ルニ過ギズシテ、専門的系統的知識ヲ得ベキ機会ノ殆ンド絶無ナル為、其目的ヲ達シ得ザルヲ深く遺憾トス、日本国情酷似セルイタリアニ於テハ、其美術都市フィレンツェ等ニ於テ、在留並ニ来訪外人ニ対シテ美術ニ関スル専門的研究ニ資スル為、外国語ニヨリ講義及研究室等ノ施設ヲナシテ、其要求ヲ充シ、文化宣伝ニ資スル所実ニ多大ナルモノアリ、我国語ノ学習困難ニ鑑ミル時、我国ニ於テ斯ノ如キ必要ハ一層痛感セラルル所ナリ、仍テ左記事項ヲ実施シ在来ノ欠陥ヲ補ハントスルモノナリ

イ、在留及来訪外国人、外国留学生ノ研究指導

ロ、専門的講演及講座ノ開催

講演会 年十回、東京、京都、奈良其他ノ地方都市ニ於テ開催ス

講師ハ美術研究所職員及其他權威者

講座 年十回、三日宛連続トシ、講演会ヨリモ一層専門的系統的ナル講義ヲ行フモノトス

ハ、美術史蹟、美術蒐集家ノ藏品見学及外国語ニヨル指導解説

(二) 日本美術国際聯絡部 (International Bureau of Japanese Arts) ノ設置

日本美術、東洋美術ニ対スル外国ノ興味ハ最近頓ニ昂メラレツツアルニモ拘ラズ、其研究最モ進歩セル我国ニ在リテハ、其学の活動ヲ、海外ニ宣布スベキ出版物其他ノ手段ヲ欠キ、為ニ東洋研究ノ世界的水準ヲ高メ且又日本學術ノ進歩貢獻ヲ世界のナラシムルノ方法ナキハ夙ニ吾人ノ遺憾トスル所ナリ

海外諸美術施設ハ常ニ必ズ月報其他ヲ発行シテ其研究活動ヲ紹介報導スルノ外、研究のナル出版物ヲ出版シテ広く世界ノ關係機關ニ配布シ、其成績ヲ宣揚スルト共ニ、研究及文化連絡ニ資センコトヲ努ム、我美術研究所モ亦之ガ配布ニ接スルコト多ク其最モ効果のナルヲ経験ス

右出版物配布ニヨルノ外、日本美術研究ニ関スル質問若クハ指導ヲ請ヒ来レルニ対シ、之ニ応ジ得ルノ施設ヲ欠クコトハ、我国ノ卓越セル美術文化ノ宣揚上多大ナル障害トナリシ所ニシテ、本研究所ハ從來此事例ニ接セルコト屢次ニシテ、之ヲ実施シ得ルトセバ、其効果ノ著シキモノアルヲ確信スト雖モ、人員、經費ヲ欠キタルガ為ニ空シク放置スルノ已ナキ事態ニアリシガ、国際連絡部ハ即チ此等ノ欠陥ヲ補ヒ、積極的ニ美術ヲ通ジテ海外ニ日本文化及學術ヲ宣揚セントスルモノニシテ之ガ為、左記事項ヲ行フモノトス

イ、外国語ニヨル定期彙報 Bulletin (年四回発行) ノ刊行及頒布

ロ、美術出版物ノ外国文解説出版及頒布、美術研究所出版物及信賴スベキ

他ノ出版物ノ外国語解説ヲ作製頒布スルモノトス

ハ、海外ヨリノ研究の質問ニ対スル解答

七、支那美術ノ調査及指導ニ要スル經費

一、事業概要

(一) 調査班ノ派遣

從來偶々行ハレタル美術上ノ対支文化工作ガ學術上ノ根柢ニ立脚セザリシ為ニ極メテ抽象的ニシテ無效果ニ終リシ 経験ニ鑑ミ、組織的且継続的ニ文化工作ノ基本的方策ヲ樹立スル為、所員一名(調査主任)助手二名写真技手(写真撮影)一名ヨリ成ル調査班二個ヲ編成シ、交互ニ支那大陸ニ派遣シテ左記事項ヲ調査セシムルモノトス

イ、支那美術遺品ノ調査並ニ其保護方策ニ関スル資料蒐集並ニ調査

ロ、現代支那美術工芸ノ趨勢ニ関スル調査

- ハ、支那ニ於ケル美術研究及教育施設ニ関スル調査
- ニ、支那美術ノ奨励及指導ノ方策樹立ニ関スル調査
- ホ、日支美術上ノ連絡方策ニ関スル調査

(二) 出版

前項ノ調査事項ハ内外学界ニ対スル貴重ナル研究資料タルト共ニ、我邦ガ支那ニ対スル美術上ノ連絡並ニ指導ニ関スル有力ナル参考資料ヲ供与スルモノタルヲ以テ其報告ヲ凡ソ左記ニヨリ出版ニ付シテ内外関係方面ニ頒布スルモノトス

内 容

四六倍判網版一五〇頁 本文三〇〇頁 製作単価五円

一、〇〇〇冊（邦語版及外国語版各五〇〇冊印刷）

八、美術研究所設置十週年紀念出版ニ要スル経費

一、事業概要

(一) 黒田清輝作品集ノ刊行

黒田清輝ハ美術研究所建設寄附者タルト同時ニ我国洋画界ノ大先覚ニシテ第一人者ナリ、其作品ハ現時ノ混乱セル美術界ニ一指標ヲ与フベキモノナルヲ以テ、嘗ニ其功績ヲ紀念スルノミナラズ、又我ガ美術界ヲ裨益センガ為、其代表の作品ヲ左記ニヨリ原色版、写真版等ヲ以テ複製出版スルモノトス

内 容

四六四倍判 原色版二〇枚 コロタイプ版一五〇枚 布帙入 五〇〇部印刷

(二) 美術研究所蔵書目録

美術研究所々蔵美術関係図書ハ現在和漢洋書ヲ合セ約五、七〇〇部一四、〇〇〇冊ニ達スルヲ以テ其分類目録ヲ編纂刊行シ、以テ美術研究所事業ノ報告ノ一タラシムルト共ニ、研究者並ニ一般ノ利便ニ供セントスルモノナリ

内 容

四六倍判約三〇〇頁 一、〇〇〇部印刷

(三) 「美術研究」総目次

「美術研究」ハ美術研究所ノ定期報告機関ニシテ昭和七年発刊以来毎月一回発行、昭和十五年四月ヲ以テ第百号ニ達スル予定ナリ。其内容ハ研究論文、調査報告、研究資料ノ外、多数ノ図版ヲ含ミ、美術研究上ノ重要ナル文献並ニ資料ヲ形成ス。仍テ其内容検索ノ便ヲ図リ、併セテ美術研究所成績ノ一報告タラシメンガ為、其総目次及索引ヲ編纂発行ス

2 美術研究所の転機

日本のみならずアジアまでを視野に入れた美術の調査研究、資料の収集・公開は、美術研究所構想の当初からあったものである。先述のように、矢代は、自らがルネサンス美術研究を行った美術史学の方法を東洋美術研究に活かすことを目指しており、美術研究所の事業として「東洋美術総目録」ほか、東洋美術に関するものが列記されている。美術研究所構想がなった頃から、青山（和田）新による西アジア調査、尾高鮮之助による東南アジア、インド等の調査が行われ、国内所在の東洋美術品の調査研究が行われていた。しかし矢代について言えば、海外の類似機関との連携を図るべくしばしば渡航しているが、1930年代半ばまでは欧米が中心であった。1940（昭和15）年前後は、矢代自身が中国に渡ることが多くなっている点、また、当時の戦争へ向かう政治社会状況を反映した内容となっている点が注目される。

また、文部大臣直轄の時代には、東洋美術国際研究会との関連が深くなっていることも指摘できる。同会は1940（昭和15）年2月20日に設立され、華族会館で発会式が行われた。会長に細川護立、理事長に樺山愛輔が就任し、「世界に於ける日本及東洋美術の研究を進め美術上の国際連絡及協力を図り併せて日本文化の海外宣揚及国際親善に貢献せむ」という趣旨で、文部省及び外務省の後援のもとに設置されたもので、同研究会の事務所は美術研究所内に置かれた。この趣旨は、美術研究所設立当初から事業計画にある「美術上の国際連携」と同様のものであり、作品の展観、講演会、“Masterpiece of Eastern Art”（1941～1944年）の刊行、及び美術品の絵葉書作成などを行っている（同研究会については本書「関連団体」参照）。

1940（昭和15）年9月12日から11月13日まで、矢代幸雄、正木篤三、豊岡益人は美術、工芸を視察するために中国へ出張している〔図17〕。翌年、東洋美術国際研究会から矢代幸雄の『対支文化工作ノ目標トソノ方策』が刊行され、1941（昭和16）年6月30日に矢代は中華民国国民政府の囑託となっている。同年9月矢代は中国へ出張し、11月に帰国。1942（昭和17）年にも9月に中国へ渡り11月に帰国している。これについて矢代は、欧米で東洋美術についての講演をする中で、中国



17 矢代幸雄（1940年、北京にて）

大陸に渡った体験なくして東洋や日本の美術について語る資格がない、と気づき、1935（昭和10）年のロンドン出張から帰国後、「中国旅行に出してくれなければ、今後、欧米行きの御用はもうごめんだ、と言い張った。すると因縁は自然につくもので、それ以後、毎年、たいてい秋を中心にして数ヵ月間、私は中国を訪れるようになり、それが六ヵ年も続いた」と述べている（『私の美術遍歴』325頁）。

1942（昭和17）年、美術研究所に転機が訪れる。同年5月28日、矢代とともにしばしば中国へ渡航した助手豊岡益人が辞任。6月27日、美術研究所所員和田（青山）新が免官となり、同月29日、所長の矢代幸雄が辞任する。これについて、矢代は、「戦争とは大変なものである。人の心まで変になってきた」と記しており、これら一連の人の動きについて以下のように述べている。

「平生から私は国際派のごとく見られ、とくに英米派に数えられていたから、私の評判は研究所内でもますますよくないようであった。開戦が昭和十六年十二月八日であったから、その後毎月八日には職場たる研究所内でも宣戦の詔勅を読むことを命令された。それで私が翌年の一月八日にそれを行なった時、職場であるからと思って礼服を着用しなかった。そして詔勅を誤読した由をもって、不敬不忠として詰問され、私を排斥する意味をもって幾人かが辞表を提出した。（略）私としては、こうなった以上、できるだけ研究所をきれいに掃除して、そして一番よい人に後をやってもらおうと決心した。それが研究所を救う道であると信じた。それで出された辞表を受理し、そして私も同時に辞職した。昭和十七年六月のことである」（『私の美術遍歴』334頁）。

同じ時期に免官となった和田（青山）新は1941（昭和16）年、東京美術学校の改革を考え、正木篤三らとともに、上野直昭を校長に推薦したが、細川護立に阻まれており、この時期の美術界に変革の動きがあったことがうかがえる。

矢代は辞職後、大磯の自宅で『日本美術の特質』（岩波書店、1943年）の執筆を行う。矢代の後は、前京城大学教授で日本美術史を専門とする田中豊蔵が、矢代の懇請を受けて所長となった。

1943（昭和18）年の事業は「昭和十八年度概算書」（神-3）及びこれに関連する「昭和十八年度概算新規要求事項中重要事項調」（神-4、以下に全文を掲載）によってその構想をうかがえるが、美術研究所に「東亜研究部」を新設する案が提出されている点が注目される。

昭和十八年度概算新規要求事項中重要事項調

美術研究所

新規事業経費概算

一、日本美術研究資料拡充	四二、二九三円	
俸 給 所員一人	二、八八〇	
助手一人	八九〇	
技手一人	九八五	
賞 与	四六八	五、二二三円
事業費	三七、〇七〇	
二、明治大正美術史編纂	三三、五六三円	
俸 給 所員一人	二、八八〇	
助手一人	八九〇	
書記一人	九八五	
賞 与	四六八	五、二二三円
事業費	二八、三四〇円	
三、東亜研究部設置	一〇〇、〇〇〇円	
俸 給 所員五人	一四、四〇〇	
技師一人	二、八八〇	
助手五人	四、四五〇	
技手二人	一、九七〇	
書記二人	一、九七〇	
賞 与	二、〇九七	二七、七六七円
事業費	七二、二三三円	
四、支出官設置ニ伴フ経費増加	五、一四二円	
俸 給 書記二人	一、九七〇	
賞 与	四九二	二、四六二円
事業費（諸給 嘱託一人 雇四人）	二、六八〇円	
合 計	一八〇、九九八円	

日本美術史料ノ拡充

一、趣 旨

日本美術各時代ノ名品ヲ収録シテ解説ヲ加ヘ、国民教養トシテ美術ノ智識ヲ普及シ、ソノ精神ヲ作興スルヲ目的トシ、昭和十二年度以降美術研究所ニ於テ「日本美術資料」ヲ刊行シツ、アリ。掲載図版ノ選択及解説ノ適正、複製技術ノ忠実ヲ以テ普ク社会ニ迎ヘラレ日本文化ノ宣揚ノ為メ好資料トシテ内外ニ好評ヲ拍シツ、アル実情ニアリ。教学局

マタ之ヲ認メテ諸学校へ推挙スルコロアリ、然ルニ何分一年間収載図版僅カニ二十種ニ過ギズ、日本美術ノ概観ヲ得シメントスルニ甚ダ迂遠ナルヲ免レズ、加之時代ノ欲求及趨勢ニ鑑ミ本資料ノ一部ヲ以テ参照資料トシテ大陸美術ノ紹介ヲ併セテ行フ可キ学術的必要ヲ生ジタリ、サレド現在ハ金額収入金支弁ヲ以テ実施セラル、ヲ以テ之ヲ上記ノ如ク最も有効ニ使用セントスル方向ヘノ普及ヲ甚ダ困難ナラシメツ、アリ、仍テ本事業ニ於テ別ニ年四十種ノ編纂ヲ行ヒ現在実施中ノ二十種ト合セテ年六十種トナシ、之ヲ各方面ニ配布シテ国民精神涵養ノ根本的資料トシテ活用セシメントスルモノナリ

一、事業概要

一、日本美術資料四十種ノ出版及頒布

一、経費総額

四二、二九三円

明治大正美術史編纂ニ要スル経費

一、趣 旨

明治大正時代ノ美術ニ関シテハ従来信憑スベキ研究ヲ全ク欠キタル所、美術研究所ハ昭和七年帝国美術院ノ委嘱ヲ受ケテ、同院ガ朝日新聞社ヨリ明治大正美術史編纂ノ為ニ寄附セラレタル寄附金貳万五千元（年額五千元五ヶ年分割）ヲ以テ之ガ調査ヲ開始セリ然ルニ同寄附金ハ昭和十一年度ヲ以テ終了シ、同時ニ帝国美術院ノ廃止ニヨリテ美術研究所ハ同事業ヲ引継ギ、之ガ経費トシテ文部本省ヨリ臨時費ノ交附ヲ受ケテ之ガ編纂ヲ小規模ニ継続シツ、アルモ、前記ノ通り本事業ハ未開拓ナル分野ニ就テノ調査ニ係ルヲ以テ速カニ資料ノ完全ナル蒐集ヲ計リ以テ編纂ノ完璧ヲ期スルハ新日本ノ文化的発展ノ為緊要不可欠ナルト共ニ本事業ガ上述ノ如キ性質ノ寄附金ニ基キタル経緯ニ鑑ミテ、極力之ガ完成ヲ計ルヲ要ス

一、事業概要

(一) 資料蒐集——図書、雑誌、画稿下絵、落款、印譜、写真等

(二) 編纂及出版

明治大正美術通史

同 各論 計約廿五分冊（一年一回発行）

同 索引

一、経費総額

三三、五六三円

東亜研究部設置ニ伴フ経費

一、趣 旨

東亜共栄圏ヲ確立シ是ガ指導ニ当ラントスル我国ノ国策ヲ実現センガ為メニハ挙国ノ努力ヲ要シ、文化美術上ノ活動ニ於テモ為スベキコト多シ、蓋シ東亜共栄圏ノ確立ノ為メ

ニハ同地域ニ於ケル人心ノ把握ヲ必須トナシ、人心ノ把握ノ為メニハソノ文化及美術ノ研究ヲ進メ之ヲ基礎トシテ精神ノ二働キカケルコト最モ侵透力アル方策タルガ故ナリ。美術研究所ハ茲ニ東亜研究部ヲ設置シ、コノ国策ニ必須ナル研究ヲ遂行シテ国家ニ貢獻スルトコロアラントス。

美術研究所ハ從來日本ヲ主トシタル美術ノ研究ニ従事シ国粹文化宣揚ノ上ノ成績ヲ挙げ来リタレドモ、大東亜戦争ノ勃発以來我國ノ文化的活動モ著シク分野ヲ廣クシタルニ鑑ミ、美術研究所ノ研究分野モ之ニ応ジテ拡張スル国家ノ必要ヲ痛感ス、蓋シ滿州及支那ノ美術ノ実状ヲ知ラザレバ兩國ト真ノ文化的提携ヲナス可カラズ、近時マタ關係密接トナレル仏印、タイ国、ビルマ、蘭印等ニ對シテモ更ニ又將來益々關係密接トナルコトノ国家ノ必要アル印度、アフガニスタン、イラン、回教國諸國及シベリヤニ對シテモ美術ヲ通ジテソノ文化的実状ヲ知ルニ非ザレバ、ヨク精神ノ結合ノ実ヲ挙グ可カラズ、而シテ是等ノ言語、人情、風俗ヲ異ニスル諸國モソノ美術文化ノ上ニ於テハ略同一系統ニ属スルヲ以テ是等ノ諸民族ニ働キカケル為メニハ美術文化ヲ通ズルヲ以テ最モ捷徑ナリトス、是レ美術研究所ガ是等ノ東亜諸國ノ美術ヲ綜合ノ研究シ、ソレニヨリテ文化的ナル働キカケヲナサントスル国策上ノ必要ト確信ニ基キ新シク東亜研究部ヲ設置セントスル所以ナリ。

一、事業概要

一、東亜研究部ニ第一課（滿洲國、支那及シベリヤ美術調査並ニ研究）第二課（仏印泰國、ビルマ、蘭印美術調査並ニ研究）第三課（中央亞細亞、印度、アフガニスタン、イラン及回教國諸國美術調査並ニ研究）ヲ置ク

一、調査及研究ノ結果ハ資料ヲ蓄積シテ文化工作上ノ諸機關ト連絡ヲ図リ、時々報告書ヲ作製シテ内外ニ頒布シ東亜文化宣揚ニ貢獻セントス

一、蓄積シタル資料ハ適當ナル時期及方法ニ依リ學術的研究資料トシテ公開又ハ出版ス

一、經費總額 一〇〇、〇〇〇円

支出官設置ニ伴フ經費増額

美術研究所ハ昭和五年帝國美術院ニ附屬シテ設置セラレ同十年美術研究所官制ノ公布ヲ見タルモ、未ダ支出官ヲ置ザル為事業実施上ノ困難多大ナルヲ以テ支出官設置ヲ緊要トシ、之ニ伴フ會計主任外一名ノ書記ヲ増員スルヲ必要トス

一、經費總額 五、一四二円

營繕ニ要スル臨時費

一、營 繕

一、書庫増築

在来書庫（耐火二階建延坪約四十二坪）ハ既ニ収容力不足シ研究資料ハ其ノ一部ヲ各事務室ニ散在セシムルノ已ナキニ至リ保管及整理ニ極メテ困難ナルノミナラズ貴重図書ノ保存上憂慮スベキ状態ナリ、仍テ現在書庫ニ第三階（延坪約二十一坪）ヲ増築センコトヲ計画シ、昭和十二年度以来之ガ経費要求中ナルモ未ダ実現ニ至ラズ今後可及的速カニ之ガ実現ヲ要スルモノトス

一、経費総額 二七、八〇〇円

二、倉庫新営

在来倉庫ハ極メテ狭隘ニシテ写真撮影用乾板保存保管ニ困難ヲ感ズルノミナラズ現在ニ於テハ既ニ撮影乾板並ニ生乾板ヲ廊下ニ棚ヲ設ケテ保管スル状態ニシテ貴重ナル資料トシテノ既ニ撮影ノ乾板ノ保存整理ニ寔ニ憂慮スベキ現状ナリ仍テ現写真室ニ接近シテ東京美術学校敷地ノ一部ヲ借用シテ新営セントス

一、経費総額 一二、八〇〇円

三、会計主任官舎新営

現在庁舎ハ宿直室ノ設備ヲ欠キ、支出官設置ニ伴フ国有財産管理上会計主任官舎ヲ必要トスルモノナリ

一、経費総額 二〇、一五〇円

新規事業ニヨル職員増加表

事業別 人 員	現 在 定 員				増 加 数				
	所 員	助 手	書 記	計	所 員	助 手	技 師	技 手	書 記
所 長	一			一					
美術年鑑編纂	一	二	一	四					
研究資料編纂	一	一		二					
日本美術資料拡充					一	一		一	
明治大正美術史編纂					一	一			一
東亜研究部設置ニ伴フ増加					五	五	一	二	二
支出官設置ニ伴フ増加									二
合 計	三	三	一	七	七	七	一	三	五

（添付書類）

拝啓陳者今般美術研究所ニ於テ美術思想ノ普及ニ資スル趣旨ヲ以テ日本美術資料ヲ発刊シ江湖ニ頒布セラルルコトト相成リ当局関係方面ヘモ推薦方依頼有之候処右ハ学生生徒ヲシテ日本文化ヲ理解セシムル上ニ極メテ有益ナル資料ト存ジ御紹介申上候就テハ御差支ナキ限り何分ノ御配慮相煩度候

敬 具

昭和十三年九月十六日

教 学 局 印

直轄学校長宛

ここには、「東亜共栄圏ノ確立」という「国策」に寄与し、国家に貢献するといった言葉が見え、戦中の美術研究所を取り巻く状況をうかがわせる。この「東亜研究部」は実現されず、次年度の大東亜美術史編纂と南方美術部の新設構想に反映されていることが、次の「昭和十九年度概算要求増減額事項別参照書」（東文研 C19、朱筆で「訂正本」とされた同参照書を底本とした）に認められる。

昭和十九年度概算要求増減額事項別参照書

目次

- 一、大東亜美術史編纂
- 一、日本美術資料拡充
- 一、近代美術史編纂
- 一、防空施設ニ関スル経費
- 一、支出官設置ニ伴フ経費

大東亜美術史編纂

一、趣旨

大東亜共栄圏ノ確立ノ実現ヲ期スル国策遂行ニ寄与センガため、大東亜各地ノ美術ヲ調査研究シ、更ニ之ヲ総合シテ各民族相互ニ関連スル大東亜美術史ヲ編纂刊行セントスルモノナリ。依是以テ各民族精神ノ把握ノ基礎的資料タラシムルト共ニ諸般ノ文化政策ノ資料トナス外、広ク頒布シテ大東亜共栄圏ノ指導国ノ国民トシテノ教養ニ資セントスルノ意図ヲ有ス。然ルニ従来美術研究所ニ於テハ、専ラ東洋特ニ日本美術ノ研究ニソノ中心ヲ集注シタル状態ナルガ故ニ、研究分野ヲ更ニ拡充強化シ、朝鮮、満洲国、支那ハ勿論南方各地ニ及ボシ特ニ従来殆ンド省ラレザリシ南方諸地域ノ美術ニ関スル研究部ヲ新設シテ以テ所期ノ成果ヲ挙ゲントスルモノナリ。而シテコレガ事業遂行ノため先ヅ第一期事業トシテ大東亜美術史編纂ノ基礎的調査ニ重点ヲ置ク調査期間トシテ五箇年ヲ限リテ実地調査ニ併セテ、資料並ニ参考文献ノ蒐集整理等ヲ行ハントス。コノ期間ニ於ケル研究調査ノ結果ハ逐次調査報告ノ形式ヲ以テ刊行シ、或ハ講演会及展覧会ヲ開催シテ調査或ハ整理ノ成果ヲ報告展示セントス

二、事業概要

大東亜美術史ノ編纂刊行ハ調査員ヲ大東亜圏内各地、殊ニ本邦ニ於ケル研究ノ不足セル南方諸地域ニ派遣シテ調査ヲ行ハシメ、コレヲ基礎トシテ、美術研究所ニ於テ大要左記ノ事業ヲ行フ

- 一、大東亜圏内各地（主トシテ南方各地）ノ美術ニ関スル資料（標本、図書ソノ他）ノ蒐集
- 一、調査報告書ノ刊行
- 一、研究資料ノ製作（写真、映画等）

一、資料ノ整理及公開

一、大東亞圈内美術文化ニ関スル講演、展覧会ノ開催

三、事務分掌

美術研究所事務分掌規定（昭和十二年十一月二十九日制定）ニヨル研究部ノ第一部ヲ拡充シテ特ニ支那、満洲国、朝鮮ニ関スル調査研究ヲ一層活発ナラシムルト共ニ、南方ニ於ケル美術ヲ中心トナシタル文化ノ調査研究ヲ完成セシムルタメニ別ニ南方美術研究部ヲ設置シ左ノ如ク事務ヲ分掌セシム

南方美術研究部

調査掛一、仏領印度支那、泰国、緬甸、ジャワ及ビジャワヲ中心トスル東印度諸島、并ニ印度、錫崙等ノ美術文化ノ調査研究

二、南方美術ニ関係アル支那、中央アジア、西藏、アフガニスタン、イラン及回教圏等ノ美術文化ノ調査研究

技術掛 南方美術文化ノ史蹟ノ写真撮影、実測及製図

総務掛 調査報告書ノ刊行頒布、并ニ南方文化美術ニ関スル講演、展覧会等ノ開催

日本美術資料編纂拡充

一、事業計画

イ、編纂刊行ノ趣旨

従来我が国美術作品ノ複製出版セラレタルモノ其ノ種類及ビ数量少カラズト雖モ、専門的出版物ハ或ハ其ノ形状大ニ過ギ或ハ価格頗ル高価ナル等ニ依リテ普及ニ適セズ。通俗の出版物ハ複製技術ニ於テモ編纂ノ学術的正確サニ於テモ信頼スルニ足ルモノ稀ナリ。而モ原作ヲ彷彿セシムル色刷ヲ以テ美術全般ニ亘リ之ヲ網羅セントスル出版物ハ、未ダ世上ニ行ハレズ。サレド之ガ必要ハ一般ノ文化的發達教養ノ進歩ニ伴ヒ、特ニ日本文化ノ正当ナル認識ガ要望セラル、現代ニ於テ極メテ重視セラル、ニ至ル。然ルニ営利的出版業者等ニ到底成就シ難キハ、非営利的且ツ長期ニ亘ツテ継続ヲ要スル事業ナル故ヲ以テナルベシ。美術研究所ガ研究機関トシテ国家の事業トシテ之ヲ遂行スル職旨ハ右事情ニ鑑ミ、此ノ欠陥ヲ補ハンガ為權威アル標準の出版物トシテ世ヲ補益セントスルニ他ナラズ

ロ、編纂ノ形式

本事業ハ我が国上代ヨリ現代ニ至ル美術上ノ名作品並ニ大東亞圈内ノ美術上ノ名品ヲ併セ選定シテ之ヲ原作ニ能フ限り忠実ナル原色版複製トナシ、一定ノ規格（B列四番）ニ依ル一点一枚宛ノ図版トシテ各図毎ニ簡明正確ナル解説ヲ加ヘ、便宜上二十枚ノ図版ヲ以テ一輯帙入トナシ、逐次編纂シテ毎年三輯（六十枚）ヲ刊行スルモノトス

ハ、編纂拡充ノ必要

日本美術資料ニ収載スベキ美術品ノ種目ハ大別シテ、絵画、彫刻工芸及建築ノ四種ナリ、是等ガ各種毎ニ数多ノ種別流派等ヲ含ミ且ツ上古ヨリ現代ニ至ル各時代毎ニ顯著ナル特色ヲ示シテ、極メテ多様ノ変化ヲ示セルコトハ贅言ヲ要セズ。現代国宝ニ指定セラレ或ハ重要美術品トシテ認定セラレタルモノノミヲ数フルモ約一万点ノ多キニ上レリ。斯ノ如ク広汎ナル美術作品ノ中代表的ナルモノノミヲ網羅セントスル為ニハ少クトモ毎年六十点ヲ選択編纂シ逐年継続スルコトヲ必要トス。現在実施セルモノハ毎年二十種ナルヲ以テ是ヲ拡充シテ四十種ヲ増加シ都合六十種トナサントスルモノナリ

近代（明治以降）美術史編纂

一、事業計画

イ、従前ノ経過

本事業ハ当初朝日新聞社ヨリノ寄附金二万五千円（年額五千円宛五ヶ年継続）ヲ以テ五ヶ年間ニ明治大正美術史概略ノ編纂ヲ了スベキ計画ノ下ニ開始セラレ、美術研究所ハ帝国美術院ノ委嘱ヲ受ケ直チニ之ガ為資料ノ蒐集及ビ調査編纂ノ事務ヲ開始セリ。然ルニ明治大正時代ハ国史上空前ノ盛代ニシテアラユル文化ト共ニ美術モ亦隆昌ヲ見タルコト前後ニ比類ナク、其ノ詳細ナル調査研究ハ短期間ヲ以テハ到底成就スベカラズ。蒐集スベキ資料及ビ調査スベキ事項等、調査ノ進捗ト共ニ愈々多岐ニ亘ルコト判明スルニ至リ、右ノ計画ヲ墨守シ其ノ規模ニ於テ拙速ノニ編纂ヲ終了セシムルハ永久ニ遺憾ヲ止ムベキコト明白トナリタルヲ以テ、寄附者朝日新聞社ノ諒解ヲ得、既定計画ヲ変更シテ更ニ編纂期間ヲ無期延長シ、同時ニ美術研究所ハ本事業ノ重要性ト之ヲ将来ニ亘ツテ完成スベキ必要トヲ認め、上述ノ寄附金終了後及ビ帝国美術院廃止後ハ是ヲ本所ニ於ケル主要ナル事業計画ノ一トシテ引継ギタリ。而シテ時代ノ経過ト共ニ、明治大正時代ニ引続キ、昭和時代ヲモ含メル近代美術史ノ編纂及資料蒐集、調査研究ヲ必要トスルニ至リ、ソノ調査ニ当リツツアリ。茲ニ従来集積セル成績ヲ基礎トシ又其経緯ニ鑑ミ、更メテ将来ニ於ケル調査編纂ノ方針ヲ考究シテ左ノ如キ計画要綱ヲ立テタリ。

ロ、資料ノ蒐集

本事業ハ固ヨリ調査研究ヲ其ノ主体トナスモ、之ガ為ニハ資料ノ博搜蒐集ヲ基礎的の要件トナス、本事業ニ於テ蒐集スベキ資料ハ大略左ノ如シ

- (一) 図書、図録
- (二) 美術雑誌、目録、新聞其ノ他ノ刊行物
- (三) 未刊資料（手記、書簡、談話筆記）
- (四) 画稿下絵、写生帖等
- (五) 落款印譜
- (六) 写真、複製類

是等ノ中（一）、（二）等ノ既刊資料ハ從來ヨリ蒐集ニ務メタレドモ（三）以下ノ最も重要ナル基礎資料ハ經費ノ都合上未ダ殆ド蒐集スルニ至ラズ。特ニ是等ハ時間ノ經過ト共ニ散逸亡失ノ虞アルヲ以テ速カニ其ノ徹底的蒐集保存ノ途ヲ講ズル必要アリ。之ガ為庁費中資料購入費ハ最も多額ヲ要求セリ

ハ、調査及編纂

前記資料ノ蒐集及ビ整理ニ伴ヒ逐次調査編纂ヲ進捗セシム。調査スベキ事項ハ頗ル多種多数ニ及ブベキモ、其ノ要目ヲ例示スレバ左ノ如シ

- （一）美術関係編年記事
- （二）美術家伝記及作品
- （三）美術関係者伝記
- （四）美術関係諸制度及施設
- （五）美術団体及美術運動
- （六）美術展覧会及博覧会

斯ノ如ク事項別ノ調査ヲ進捗セシメツ、他方此等ヲ総合排列シテ美術史の編纂ヲ行フモノトス、編纂ノ順序内容等ハ調査進行ノ程度ニ従フベキヲ以テ予メ決定シ難キモ、出版形式ヲ予定シ之ニ適応セシムル様其ノ都度細目ヲ定ムルモノトス

二、出版

出版ハ編纂完了シタルモノニ付一定量ヲ収載シ、近代美術調査報告トシテ逐年一冊宛ヲ刊行スルモノトス、之ガ完成ハ現在ニ於テ明確ニ予定シ難シト雖モ、大略左ノ如キ形式ヲ予想計画ス

近代美術調査報告

第一部 近代美術通史

第二部 近代美術各論（伝記及資料）

- 一、日本画編
- 二、洋風画編
- 三、彫刻編
- 四、工芸編
- 五、美術関係者等編

第三部 総索引

右各分冊ハA四列四番、図版六〇—七〇枚、本文約二〇〇頁、印刷部数五〇〇部ノ予定トス

大東亜美術史の刊行及び南方美術部の設置は実現を見ていないが、從來から行われていた調査研究は継続しており、戦時下にあっても、「戦前期撮影調査票一覧」（『資料編』

283～461頁)に見えるように、社寺や個人コレクションなどの作品調査が続けられていた。しかし、1944(昭和19)年になるとその活動は極めて限られてくる。職員も召集されて戦地へ向かい、渡邊一らの戦死の報ももたらされた。黒田記念館の建物そのものが戦災にあうことも危惧され、所蔵作品、資料の安全な保管が課題となった。

3 疎開・終戦・新体制への動き

1944(昭和19)年8月10日、戦争激化のため、黒田清輝作品やそれまでに撮影したガラス乾板を東京都西多摩郡小宮村(現、あきる野市)、及び檜原村に疎開する。同年には、近隣の東京美術学校文庫の屋根が木造瓦葺であったため、戦火を怖れて、図書を美術研究所書庫に移動するなど、諸機関で資料の安全を図る作業が行われている。

1945(昭和20)年3月10日の東京大空襲のあと、作品、資料を空襲から守る必要が高まり、4月初めから図書、写真資料等の梱包が行われた。この作業にあたった関千代は「毎朝出勤すると荒縄の束がどさりと投げ込まれ、図書等を適当な大きさに重ね合わせ、角毎に厚く折った新聞紙をあてがってしばってゆくのである。(略)室員は皆応召や病氣帰省で留守ということで、否応なしに私は全くの孤軍奮闘となった。(略)ようやく手馴れてきた頃には、両の掌が赤くはれあがって、どうにも使えず困った」と回想している(「すぎ去った研究所での歳月」『私の美術館』大日本図書、1990年)。

疎開の荷物は5月末から漸次、山形県酒田市に向けて発送され、8月初旬の最終貨車発送までに5両分の資料、備品類が移送された。所長以下、所員から嘱託、雇まで10数名が、資料の搬送とともに疎開地に移り、現地でも若干の職員を迎え、「美術研究所酒田分室」を構成し、玄関には板看板を掲げた。この疎開には、酒田の本間家の全面的な援助を得たとされる。7月には、疎開された荷物は荷解きもされないまま、さらに奥地の牧曾根村、松沢世喜雄家倉庫、観音寺村村上家倉庫、大沢村後藤作之丞家倉庫へ分散疎開された(疎開については「稗田一穂インタビュー」の項参照)。

資料等を疎開させ余裕の出来た研究所の建物には、1945(昭和20)年4月13日の城北大空襲で罹災した滝野川区西ヶ原町の東京外事専門学校(現在の東京外国語大学)の一部が仮移転し、翌5月より2階及び1階の一部を使用することとなった。外事専門学校は、当研究所のほかにも上野公園内美術学校、図書館講習所に分散仮居した。

8月15日に戦争が終わり、9月から酒田滞在の職員が順次帰任。同年11月、疎開した資料を戻す作業に着手し、1946(昭和21)年3月29日に酒田に疎開した荷物の発送が全て完了、4月4日にその荷が東京に到着して、美術研究所への引き上げを完了した。



18 美術研究所復興式（1946年5月、前列左から三人目が当時の田中豊蔵所長）

4月16日には西多摩に疎開していた黒田清輝作品及び資料の引き上げを完了した。5月20日、美術研究所復興式を挙行〔図18〕。戦後の美術研究所が歩みを始める。

この復興式に際し、復興を記念して黒田記念館において5月18、19日に「速水御舟素描展」が開催されている。これについては、隈元謙次郎が『アトリエ』1946年10月

号に掲載した「速水御舟の素描（二）」の末尾で「補記」として「此の稿を進めてゐる間に、五月十八、十九両日、速水家、吉田幸三郎氏の御好意によつて文部省美術研究所に於て、御舟の素描を展覧することとなり、前日の調査以外のものも発表された。茲にそれ等を追記する」と記し、写生帖等出品されたものを記録しており、その展覧の概略がわかる。この頃の隈元の手帳には、同展に関連した記述として以下のようにある。

五月一日 午後所員全員集合、復興式、展覧会計画

五月十日 速水御舟門弟高橋周桑氏来所、御舟画稿展覧につき打合せ。又運送屋来り同運搬打合せ

五月十五日（朝雨） 黒田記念室陳列開始、矢代氏来所

五月十六日 帝室博物館 速水御舟作品撮影 美術研究所に御舟画稿到着

五月十七日 記念室陳列終る。速水御舟画稿陳列準備

五月十八日 疎開記念（復帰）展開催（十時）速水御舟素描及び記念室開放、阿部大臣^{（ママ）}来観 赤曜会 写生風景、小山大月、牛田鶏村〔当時の文部大臣であった安倍能成のことと思われる〕

五月十九日（日曜）晴 展覧会第二日、小林古径、有光教科書局長、谷口午二、菅原安男等の知人来観

五月二十日（月） 研究所復興式（所長式辞、昼餐、写真撮影、職員所感）撮影（御舟）を中根囑託依託す

この記述から、美術研究所復興式にちなんでの展覧会が企画され、短時間のうちに実現を見たことがわかる。黒田記念室への黒田作品展示を終えてすぐに2階陳列室に速水御舟の写生帖等の展示が行われ、5月18日10時から公開された。



19 夏季美術講座の受講生たち（1946年7月25日）

戦後の混乱の中であつたが、1946（昭和21）年7月には、美術研究所2階に

において日本美術に関する公開講座（夏季美術講座）を、日本美術、東洋美術、西洋美術の3回に分けて3日間行い、一般からも多くの聴衆を集めた〔図19〕。

同月、東洋美術国際研究会より写真原板、図書資料、一部備品等の寄贈があつた。同研究会は当研究所内に事務所を持っていたが、同年7月16日に開催した評議会で解散を決定し、7月20日付で、東洋美術国際研究会長細川護立より解散証明願を外務省情報部長宛に提出、同年同月24日に解散が証明された。東洋美術国際研究会の事業の一部は交通公社に引き継がれることとなった。

戦後の新体制に向けた議論の中で美術研究所と博物館との関係が問い直されている。「会議、打合会記録」（当研究所蔵）によれば、1946（昭和21）年12月19日に行われた緊急打合せで、「帝室博物館国立へ移管ニツキ、研究所の対策ニつき協議」がなされ、田中豊蔵より「調査・研究は研究所に於て一本にして、全体が博物館の中に含まれる、博物館は列品・保管を司る」等の意見が挙げられている。1947（昭和22）年2月26日に博物館で行われた文部省関係者を含む帝室博物館・美術研究所の会議では、予算は官制機構が整う5月まで却下され、それまで臨時の運営予算を挙げることに、また美術研究所の今後について話し合われている。田中によれば、初めは解体案もあり、第二案として、美術研究所の移転も考えられたが、「職員の意向によって、博物館の一部としてやってもいいではないか。此の第二案の方が賛成が多かった。陳列・国宝の研究と異なる特殊な研究を担当とする。此の意見が多数を占める」とある。また谷川徹三が「美術部とす、研究所の異議なきや」と発言したとあり、博物館に研究部として位置づけることが決定されている。同年3月4日の項には、博物館で開かれた会議について記述があり、当研究所の熊谷宣夫・谷信一・吉川逸治が「学術研究所として博物館附属美術研究所説」を開陳して谷川及び富士川金二の支持を得、一方安倍能成・大岡実・藤田経世は逆に「研究所独立、現在の状態継続」を提案して意見がまとまらなかった。翌3月5日に当研究

所内で行われた打合せでは、各案・施設面から独立案否決、附属研究所として「一応全部白紙にかへし、新しく研究所を組織す、研究所の必要を力説、俄要られざる場合は、研究所面の保護を官制或は内規に明記して、研究所案に賛成することとす」としたとある。独立案は内々に不可能であるとの連絡があったとされる。同年3月7日、第一～第六の研究分野案が提示されている。

4 国立博物館附属美術研究所

1947（昭和22）年～1950（昭和25）年

1947（昭和22）年5月3日、日本国憲法が施行される。これにともない戦前からの諸制度も改められ、美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定されて、皇室博物館は国有となり、皇室博物館、文部省社会教育局文化課国宝調査室、同保存修理室、美術研究所が合体して、文部省の管轄のもとに国立博物館として発足した。この新機構に際し、従来の皇室博物館における列品課、学芸課、経理課の3課制を廃し、陳列課、事業課、調査課、保存修理課、資料課、監理課、附属美術研究所の6課1所制をとり、奈良皇室博物館を国立博物館奈良分館とした。国立博物館初代館長には前総長安倍能成が、次長には谷川徹三、美術研究所長事務取扱には田中豊蔵がそれぞれ任命された。これにより、美術研究所は国立博物館附属美術研究所となった。

同年4月30日の国立博物館事務分掌規程制定には「第十四条 附属美術研究所に、第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七の各研究室を置く」とあり、それぞれの分掌は、第一研究室（日本美術）、第二研究室（東洋美術）、第三研究室（西洋美術）、第四研究室（近代美術）、第五研究室（考古学）、第六研究室（風俗）、第七研究室（史料）となっている。従来、美術研究所によって編集・刊行されていた『美術研究』『日本美術年鑑』は国立博物館から刊行されることとなった。

この組織改変にともない、配置換えがあったものの、雇用人員が大幅に変わることはなかった。経費は博物館の予算に組みこまれ、福利厚生などの庶務業務の大半も、博物館と一緒に運営された。従来の経理部が行っていた業務は、博物館監理課が担当した。1947（昭和22）年度の国立博物館設置に伴う追加要求書に記載される美術研究所の予算は593万5220円である（『東京国立博物館百年史 資料編』東京国立博物館、1973年、113頁より）。また、1949（昭和24）年の予算配分額は216万9千円であり、大幅な予算の減少があったようにうかがえるが、『美術研究』をはじめとする当研究所の出版費用が博物館事業課費に含有されるなど、一概に同前額のみが研究所運営に関わる予算であったとは断定しがたい（『昭和25年度概算要求書』『東京国立博物館百年史 資料編』113頁より）。

「国立博物館官制」、「国立博物館事務分掌規程について」の美術研究所に関わる部分には以下のようにある（『東京国立博物館百年史 資料編』111～112頁、115～116頁より）。

国立博物館官制

(中略)

第六条 国立博物館に、附属美術研究所を置く。

附属美術研究所長は、一級の文部技官を以て、これに充てる。

所長は、館長の命を受けて、研究所に関することを掌る。

(中略)

附則

この政令は、公布の日から、これを施行する。

美術研究所官制は、これを廃止する。

(下略)

国立博物館事務分掌規程について

(中略)

第十一条 保存修理課に修理係、管理係、保存技術研究室及技術者養成係を置く

修理係は建造物、美術工芸品、歴史考古資料等の保存修理に関するを行う

管理係は国宝及重要美術品等の管理に関するを行う

保存技術研究室は建造物、美術工芸品及歴史考古資料等の保存技術の研究を行う

技術者養成係は建造物、美術工芸品及歴考古資料等の保存修理技術者養成に関することを行う

(中略)

第十四条 附属美術研究所に第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七の各研究室を置く

第一研究室は日本美術の研究及編纂に関するを行う

第二研究室は東洋美術の研究及編纂に関するを行う

第三研究室は西洋美術の研究及編纂に関するを行う

第四研究室は近代美術の研究編纂及黒田清輝の作品並関係資料の展観保管に関することを行う

第五研究室は考古学の研究及編纂に関するを行う

第六研究室は風俗史の研究及編纂に関するを行う

第七研究室は文献を主とする美術史料の研究及編纂に関するを行う

附 則

本規程は昭和二十二年五月三日より之を施行する

この資料に見えるように、1947（昭和22）年に国立博物館に保存修理課が発足し、同課内に保存技術研究室が置かれた。

1948（昭和23）年度より同課に専任の職員を配置し、国立博物館本館地下の修理室の一室で研究が始められた。これが後の東京国立文化財研究所保存科学部の前身である。

博物館附属の時代には、美術研究所担当の文部事務官2名が、予算執行をはじめ研究所関連の諸事務にあたった。事務部門は人員・場所とも博物館内部に移管され、出勤簿押印をはじめとして会計処理、事務通知、福利厚生等諸々の庶務手続きは、東京国立博物館監理課において行われたが、研究体制は半独立を保っていたものと思われる。また各所の連絡をとる意味もあり、館長主催の課長会議が週一回あり、当初所長の田中豊蔵及び福山敏男の両名が出席していたが、のちに福山が所長代理として出席、帰所後に所員会議を開き諸事の報告をすることが慣例となった（藤田経世「事業課のころ」『博物館ノ思出』東京国立博物館、1972年より）。

国立博物館事務分掌規程第十四条にある通り、黒田清輝作品の展示は一貫して当研究所で行われた。ただし、当研究所が国立博物館の附属になるにあたり、絵画及び彫刻の466点が博物館の列品台帳へ移管された（東京国立博物館蔵「昭和26年度列品録 購入寄贈絵画区」東博-レ0167より）。

この新組織が発足した1947（昭和22）年当時は、未だ戦後の混乱が続く時代であり、住居を失った研究所員や博物館員などが、敷地内の建物に居住しており、電気料等がその住居の広さに応じて徴収された。また新しく発足した職員組合の活動も活発で研究所員の多くも参加しており、組合主催のレクリエーションなどの所外活動も活発に行われた。

1948（昭和23）年4月26日、所長の田中豊蔵が急逝した。田中は、京城帝国大学で日本及び東洋美術史を講じていたが、同大学退官後の1942（昭和17）年6月、矢代の所長辞職を受けて所長事務取扱となった。戦中期には、自宅を空襲により失ったため、美術研究所の疎開を指揮しながら、所員とともに疎開地（山形県酒田市）に移った。戦後の1946（昭和21）年5月、疎開からの引き上げを終えて、当研究所の復興式に臨んだ。1947（昭和22）年8月16日、正式に所長に就任し、研究業務を再開したばかりでの逝去であった。

田中の死後、1948（昭和23）年5月11日から翌年8月30日まで、福山敏男が所長代理としてその任にあたった。福山は、戦時中、文部省宗教局勤務を経て、1947（昭和22）年に当研究所に異動しており、代理を解かれた後には、資料部長、美術部長を務めた。建築史を専門とする福山は、古代の寺院、神社建築の研究を深め、その研究の成果（『福山敏男著作集』中央公論美術出版、1982～84年）によって、1987（昭和62）年に日本学士院恩賜賞を受けている。

1949（昭和24）年8月31日、松本栄一が所長となった。松本は、1952（昭和27）年3月31日までその任にあったが、同年4月、当研究所が「美術研究所」から「東京文化財研究所」に改組されてからは、美術部長を務めた。松本は東洋美術史を専門とし、戦前からヨーロッパ各地の図書館等に保存されていた中央アジア及び敦煌の資料調査を進めた。その研究成果である『敦煌画の研究』（東方文化学院東京研究所、1937年）により、1938（昭和13）年帝国学士院恩賜賞を受けた。なお、松本が所長を辞した後、1952（昭和27）年4月1日から翌年10月31日まで、矢代幸雄が所長代理として務めた。矢代を継いで所長となった田中一松については、88頁を参照されたい。

5 文化財保護委員会附属美術研究所から東京文化財研究所へ

1950（昭和25）年～1954（昭和29）年

人々の生活も落ち着かぬ中、文化財を巡る状況も混乱していた。1944（昭和19）年に戦火によって停止されていた文化財の認定事務は、1946（昭和21）年8月から再開され、1929（昭和4）年に制定された国宝保存法など戦前の保護政策による文化財保護行政が動き出してはいた。しかし、文化財の損壊や海外流出に対して十分な保護措置がなされていたとはいえない。こうした中、1949（昭和24）年1月26日に法隆寺金堂壁画が火災により損傷を受け、新たな文化財保護のための施策を求める世論が高まった。

1950（昭和25）年5月30日、文化財保護法が公布され、文化財保護委員会が、文部省の外局として誕生した。高橋誠一郎が、国立博物館長と文化財保護委員会長を兼務し、付属機関として、文化財専門審議会、国立博物館、研究所が置かれることとなった。また従来の国立博物館保存修理課と調査課は、文化財保護委員会事務局保存部建造物課に8月29日に移った。

同年8月29日付で美術研究所は国立博物館附属を離れ、新設された文化財保護委員会附属機関となった。翌年1月31日には国立博物館組織規程と同時に、文化財保護委員会規則第5号により「美術研究所組織規程」が公布され、第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。これにより文部大臣直轄の時代と同じ組織構成となった。同規定の適用は遡って前年の8月29日からとなっている。

このときの美術研究所組織について「昭和二十五年八月二十九日 例規録 国立博物館」と題された冊子中の「文化財保護委員会規則第五号」では次のように記している。

昭和二十五年八月二十九日

例規録

国立博物館

◎文化財保護委員会規則第五号

文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第二十三条第四項の規程に基き、及び同法第二百二十四条第二項の規程を実施するため、美術研究所組織規程を次のように定める。

昭和二十六年一月三十一日

文化財保護委員会委員長 高橋誠一郎

美術研究所組織規程

(美術研究所の組織)

第一条 美術研究所の所掌事務を分掌せしめるために左の三部及び一室を置く。

第一研究部

第二研究部

資料部

庶務室

(第一研究部の所掌事務)

第二条 第一研究部においては、わが国上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその精果の公表に関する事務をつかさどる。

(第二研究部の所掌事務)

第三条 第二研究部においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(資料部の所掌事務)

第四条 資料部においては、左の事務をつかさどる。

- 一 美術研究資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧に関すること。
- 二 美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管に関すること。
- 三 エックス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究に関すること。

(庶務室の所掌事務)

第五条 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

- 一 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の人事に関すること。
- 二 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 三 経費及び収入の予算、決算その他会計に関すること。
- 四 行政財産及び物品の管理に関すること。
- 五 職員の福利厚生に関すること。
- 六 黒田記念室に関すること。

(所長)

第六条 美術研究所に所長を置く。

所長は、所務を〔管〕理する。

附 則

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十五年八月二十九日から適用する。

これに従い1951(昭和26)年1月31日、美術研究所組織規定によって、第一研究部、第二研究部、資料部、庶務室による構成となった。

1952（昭和27）年4月1日、文化財保護法の一部が改正され、東京文化財研究所が設置されることになり、従来文化財保護委員会の附属機関であった美術研究所は、東京文化財研究所の美術部となった。東京文化財研究所には芸能部・保存科学部が新設された。所長事務代理として文化財保護委員会委員矢代幸雄の兼務、美術部長松本栄一、芸能部長事務代理犬丸秀雄、保存科学部長事務代理関野克が4月1日に発令され、同研究所組織規定により、美術部（第一研究室、第二研究室、資料室）、芸能部（演劇研究室、音楽舞踊研究室、郷土芸能研究室）、保存科学部（化学研究室、物理研究室、生物研究室）、庶務室の3部1室を置くこととなった。

なお、従来美術研究所で行っていた調査研究及び刊行物の出版については、「美術研究所」の名称を使用することが出来た。その経緯について、矢代幸雄は、美術研究所が文化財研究所美術部となったことは「考えようによれば、美術研究所が拡大に向かいつつある証拠に相違ないが、同時に、斯くの如き同一研究所に於ける別部門の並設は、仕事の上の集中性を欠くようになる憂いなきにしもあらず、且つ創立以来既に二十数年、幾多の研究報告書を出版して、単に日本国内のみならず、世界的に知れ渡っている美術研究所の名称が、徒らに消滅するのはいかにも惜しく、かつは黒田さんの遺産による寄附事業が無になるのも、黒田さんの厚志に対して相済まないことと惜しまれた。それで勿論私も働き、また樺山さんにもご出馬を願って、文部大臣及び国会に対して、黒田記念事業としての美術研究所の設立、並びにその政府に対する条件つき寄附の顛末を説明していただき、この条件を承認して寄附を受け取った政府としては、寄附の趣意を没却せざるよう義務を負っている所以に、強く注意を喚起した」（『樺山さんと美術研究所』『樺山愛輔翁』国際文化会館、1955年、73頁）と述べている。これによって、文化財保護法中に但書一項が加えられ、文化財研究所美術部は従来どおり美術研究所と称することを得たという。

美術研究所の名称を残そうとした背景について、矢代は次のように言葉を継いでいる。

「一体我国には諸制度の変革が頻繁に行われ、永久に存続するように見える国家機構すら、いつの間にか名称を変え、名称が変ればまたその性質も違ったものになること、真に驚くべくまた歎ずべく、（略）斯くの如き我国であれば、今後美術研究所の将来も果してどうなるか、はっきりした見通しをつけることは困難であるが、一度不用意に消されかけた名称を、設立の由来を想起せしめ法律上に存続させたことは、将来またそういう場合の勸戒に資するに相違なく、既に名称が残れば、またその由来も記憶されるであろうし、将来の変革に備える道に役立つかも知れない」（同前 73～74頁）。

6 東京国立文化財研究所 1954（昭和29）年～2000（平成12）年

1 東京国立文化財研究所として 1954（昭和29）年～1968（昭和43）年

1954（昭和29）年7月1日から2001（平成13）年3月31に至る東京国立文化財研究所の時期は、当研究所が飛躍をとげた時期であった。この時期に、当研究所は組織を拡充し、調査・研究を活発的に推進し、研究成果の蓄積を積極的に社会に還元した。また地方公共団体や地方の研究機関、美術館、博物館に対し、研修や助言を行うことによって、わが国の文化財保護の意識向上に努めた。さらに、文化財保護の面で、アジア諸国をはじめとする世界の国々と積極的な国際交流を行った。

先の章で述べた通り、1950（昭和25）年8月29日施行の文化財保護法により、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関として位置づけられ、有形文化財及び無形文化財に関する調査研究、資料の作成及びその成果の公表を担ってきた。しかし、1952（昭和27）年4月1日、文化財保護法の一部改正により、東京文化財研究所の組織規定が定められ、当研究所は東京文化財研究所と称するとともに、組織とその事業内容を著しく変更した。美術研究所は美術部となり、これまでの研究業務を引き継いだ。また、文化財保護委員会建造物課の保存修復部門と伝統芸能・郷土芸能研究部門を当研究所に移し、新たに、保存科学部と芸能部を設置した。その他に庶務室を置き、3部1室体制で、有形と無形の文化財を後世に伝えるために、調査、研究を行った。なお、この時に、奈良市に奈良文化財研究所が設置されている。

以下、当研究所の組織と業務の概要について記しておきたい。

この時、美術部には第一研究室、第二研究室、資料室を置いた。第一研究室は、わが国の上代、中世及び近世の美術、ならびに東洋美術に関する調査、研究を行い、その成果の公表を行った。第二研究室は、わが国の近代及び現代の美術、ならびに西洋美術に関する調査、研究を行い、その成果の公表を行うとともに、黒田記念室に関する業務を担当した。資料室は、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧を行うとともに、光学的方法による美術の研究を行った。

芸能部は、1952（昭和27）年7月1日、東京藝術大学音楽学部邦楽科教室の2室を同大学から借用し、研究を開始した。芸能部には演劇研究室、音楽舞踊研究室、郷土芸能研究室を置いた。演劇研究室は、演劇及びその保存に関する研究を行い、音楽舞踊研究室は、音楽及び舞踊、ならびにそれらの保存に関する調査、研究を行い、郷土芸能研究

室は、郷土芸能及びその保存に関する調査、研究を行い、各々の研究室がそれぞれの調査、研究結果の公表を行った。

保存科学部には化学研究室、物理研究室、生物研究部の3室を置いた。化学研究室は、文化財及びその保存に関して、分析化学的調査、研究をふくむ科学的調査、研究を行い、その結果の公表を行った。物理研究室は、文化財及びその保存に関して、物理学



20 旧保存科学部庁舎（『東京国立文化財研究所 20 年のあゆみ』1973 年 3 月より）

的調査、研究を行い、その結果の公表を行った。生物研究室は、文化財及びその保存に関して、生物学的調査、研究を行い、その結果の公表を行った。1953（昭和 28）年、保存科学部は、東京国立博物館内の倉庫 132m²を改造し、ここに研究室を移転した〔図 20〕。

1954（昭和 29）年 7 月 1 日、文化財保護法の一部、東京文化財研究所組織規定の一部が改正され、名称を東京国立文化財研究所と改めた。以後、この名称は、2001（平成 13）年 4 月に独立行政法人文化財研究所の東京文化財研究所となるまで、継続して使用された。

1955（昭和 30）年より、『東京国立文化財研究所要覧』（以下、『要覧』とする）の発行を始めた。『要覧』は、(1)研究所の沿革、(2)機構、(3)研究活動、(4)施設、(5)刊行図書、(6)職員、(7)関係法規・規程の 7 項目に分けられ、研究活動については個人研究・共同研究・総合研究・機関研究などを詳しく解説している。研究部門の増加に伴い、内容は部門ごとに研究活動をまとめることになった。同『要覧』は、1958（昭和 33）～1965（昭和 40）年度、1966（昭和 41）～67（昭和 42）年度、1968（昭和 43）～1969（昭和 44）年度のみ合冊で刊行したが、これ以降は基本的に 1 年 1 冊を刊行した。1975（昭和 50）年度より、当該年度を統括する所長の前言「はじめに」が掲載されるようになる。

1957（昭和 32）年 3 月 22 日、東京国立博物館構内に保存科学部の薬品庫（木造、外部鉄鋼モルタル塗、平屋建 8m²）が竣工。同年 11 月 30 日には黒田記念館に併設されていた書庫が手狭になったため、従来の 2 階建書庫の上に 1 階分（延 71m²）を増築して 3 階建とする工事が竣工した。これは 1937（昭和 12）年度の概算要求時より希望していた念願のものであった。

1959（昭和 34）年には、東京国立文化財研究所受託規程を定め、この年度から受託研究を開始した。受託研究とは、当研究所が、外部からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する研究経費を委託者が負担するものを言う。国の機関や地方公共団体



21 旧庶務課・保存科学部庁舎（1962年竣工、『東京国立文化財研究所20年のあゆみ』1973年3月より）



22 旧芸能部・保存科学部庁舎（1970年竣工、『東京国立文化財研究所20年のあゆみ』1973年3月より）

などからの受託研究も多く、当研究所の文化財に関する調査、研究には有益であり、今日もなお継続して行っている（『資料編』「受託研究一覧」27～34頁参照）。

1961（昭和36）年9月16日、東京国立文化財研究所の組織規定の一部改正により、従来の庶務室は庶務課となった。庶務課は、(1) 職員の人事に関する事務、(2) 職員の福利厚生に関する事務、(3) 公文書類の接受、公印の看守、その他の庶務、(4) 経費及び収入の予算、決算、その他会計に関する事務、(5) 行政財産及び物品に関する事務、(6) 庁内の取締りに関すること、(7) 他の所掌に関しない事務の処理、をつかさどった。

1962（昭和37）年3月31日、東京国立博物館敷地内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）が竣工した。鉄筋コンクリート造、2階建て、延面積は663㎡であった〔図21〕。また、同年7月20日、この保存科学部庁舎の竣工、保存科学部の移転を受けて、芸能部が旧保存科学部の庁舎に移転した。庁舎に関しては、その後、保存科学部庁舎に隣接して別館庁舎を新営することになり、1969（昭和44）年8月23日に起工式を行った。1970（昭和45）年3月25日、延面積1950.41㎡の別館庁舎が竣工し、5月26日に竣工式を行った。これらの庁舎には、保存科学部、芸能部、庶務課が入った〔図22〕。この時、別館庁舎に対し、黒田記念館を本館と呼ぶことになった。

また、1978（昭和53）年3月20日、本館（黒田記念館）構内に、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95㎡の情報資料部研究棟が竣工、5月17日竣工式を行った〔図23〕。この本館、別館、情報資料部研究棟の庁舎は、2000（平成12）年に新営の庁舎が完成するまで使用された（施設については、『資料編』「土地建物の変遷」885～892頁参照）。

1962（昭和37）年7月1日、組織規程の一部改正により、保存科学部に修理技術研究室が設置された。修理技術研究室は、文化財の修理に関する科学的、技術的な調査、研究を行い、その結果の公表を行った。その後、修復技術関連の研究室も一層拡充され

ることになった。また1971(昭和46)年より、年度末に保存科学部において「文化財保存科学懇談会」が開催され、庶務課長はじめ保存科学部長、3室長、担当官、所外関係者(文化庁文化財部長等)が出席し、翌年度の調査研究等の方針について意見交換をした。



23 旧情報資料部研究棟(1978年竣工、黒田記念館に隣接して建設された)

1960年代には、当研究所の研究成果を、社会に発信するための新たな試みが始められた。その試みとして挙げられるのが、2種の定期刊行物の創刊である。一つは、1964(昭和39)年に創刊された『保存科学』である。同誌は、1950(昭和35)年に創刊された『保存科学部受託研究報告』を発展させたものである(なお、それ以前は、古文化資料自然科学研究会〔現、文化財保存修復学会〕の機関誌『古文化財之科学』〔現、『文化財保存修復学会誌』〕に公表していた)。もう一つは1967(昭和42)年に創刊された『芸能の科学』である。『芸能の科学』は、2006(平成14)年に『無形文化遺産研究報告』と名を改めたが、両誌とも今日まで継続して刊行をつづけ、斯界をリードする研究誌としての位置を保ち続けている(『保存科学』、『芸能の科学』の総目次については、『資料編』815～833頁、834～838頁参照)。また、美術部と芸能部による「公開学術講座」も、やはり一般の人々を対象に研究成果を発表することを目的に設けられたものであり、美術部では、1966(昭和41)年から、また芸能部では翌67年から毎年1回開催されるようになった(両部による同講座の各回のプログラムについては、『資料編』111～121頁、122～126頁参照)。さらに、1971(昭和46)年より、保存科学部が文化財の保存と修復に関わる研究テーマの公開・発表及び討論の場を提供することを目的とした文化財保存修復研究協議会を開催した(同研究会は、1973年より修復技術部と合同で開催された。各研究会のテーマについては、『資料編』187～202頁参照)。

また、文化財保護における国際協力も、1960年代から活発に行われるようになった。1967(昭和42)年12月に、日本は文化財保存修復国際研究センター(ユネスコの機関で本部はイタリアのローマ、英語名称は、International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property 略称: ICCROM イクロム、以下本文中ではICCROMとする)に加入した。その際、当研究所の保存修復部門から、わが国の代表が選出された。それ以降も、当研究所は、保存修復分野における国際協力の窓口的な役割を果たし続けている。

2 文化庁附属機関、施設等機関として 1968（昭和43）年～80年代

1968（昭和43）年6月15日、文化財保護法、文部省設置法の一部改正によって、文化庁が発足した。これにともない、当研究所は文化庁の附属機関となった。さらに、1984（昭和59）年6月28日、文部省組織令が改正され、当研究所は、文化庁の附属機関から施設等機関に変わり、文化財に関する調査、研究、資料の作成及びその公表を行う機関として位置づけられ、かつ法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とされた。以下、文化庁のもとでの当研究所の70年代から80年代にかけての沿革を述べていきたい。

この時期の研究活動において、特記すべき事項としては「特別研究」と称する制度が設けられたことである。同研究は、国の文化財の調査研究、保存修復の動向に鑑みて、各部において研究職員の個別的な専門分野を超えて総合的に行う目的から新設され、これ以後、各部の調査研究活動の主要な部分を形成することとなった。予算面でも、それまでの「一般研究」の枠内で行われてきた個人研究、共同研究とも一部重なっていたが、そのための予算配分も行われるようになった。1968（昭和43）年度から着手され、保存科学部が担当した「陳列室並びに収蔵庫内の温湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究」を初めとして、1998（平成10）年度まで、各部においてそれぞれの研究課題のもとに継続された（『資料編』『特別研究一覧』35～36頁参照）。

1973（昭和48）年3月、当研究所は、1952（昭和27）年の設置以来20年を迎えたことを記念して『東京国立文化財研究所20年のあゆみ』を刊行した〔図24〕。同書は、所長関野克による「はじめに」が巻頭に掲載され、刊行の目的を次のように記している。



24 『東京国立文化財研究所
20年のあゆみ』（1973年3月）

「この間に文化財に関する調査研究と資料の作成は、基礎と総合、短期と長期などの各種に亘って引きつぎ行なわれ、その成果は機関誌をもって報告され、或は個々の出版に付せられた。これらの詳細は既刊の要覧に譲り、本冊子の目的は研究部毎に調査研究の沿革と意義を尋ね、その成果と評価を鳥瞰して今後の発展に資することを期した。」

同書は、「I 総説」をはじめとして、「II 美術部」、「III 芸能部」、「IV 保存科学部」、「V 附録」から構成され、各研究部門の沿革と調査研究活動が具体的に記されてまとめられている。

なお同年4月12日、保存科学部の修復技術研究室を廃止し、修復技術部を設置した。修復技術部には第一修復技術研究室と第二修復技術研究室を置いた。第一修復技術研究室は、木、漆を材料とする文化財、紙、布、革以外のものを材料とする文化財の修理に関する科学的、技術的な調査、研究を行い、その結果を公表した。第二修復技術研究室は、紙、布、革を材料とする文化財の修理に関する科学的、技術的な調査、研究を行い、その結果を公表した。さらに、1978（昭和53）年4月5日、文部省設置法施行規則の一部が改正され、修復技術部に新たに第三修復技術研究室を設置した。第三修復技術研究室は、石、土及び金属を材料とする文化財の修理に関する科学的、技術的な調査、研究を行い、その結果を公表した。

また1976（昭和51）年、芸能部は、郷土芸能研究室の名称を民俗芸能研究室に改めた。民俗芸能研究室は、民俗芸能及びその保存に関する調査、研究を行い、その成果の公表を行った。

一方、研究業務の遂行と組織の拡大にあたり、所内には1970（昭和45）年1月23日付けの所長裁定・施行の「東京国立文化財研究所部室長会議運営規則」が設けられ、「第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる」によって、運営方針等の重要な決定の際に行われる「部室長会議」（のち組織改変にともない「部長等会議」となる）が位置づけられた。その実質的な事務処理は、庶務課が担当した。また、1976（昭和51）年度、『東京国立文化財研究所所内報』として1975（昭和50）、1976（昭和51）年度の研究活動について詳しい資料を作成した。これは第1号のみの刊行となったが、こうした詳細な研究報告は、後述するように1980（昭和55）年より『概要』に引き継がれることとなる。

1970年代は、研究者の関心が資料の作成、保管、公開に向けられた時期であった。当研究所も、長年蓄積してきた資料類をより積極的に公開するように求められた。その要求に応えるべき組織改編として、1977（昭和52）年4月18日、文部省設置法施行規則の一部が改正され、従来の美術部資料室を廃止し、新たに情報資料部を設置した。情報資料部には文献資料研究室と写真資料研究室を置いた。文献資料研究室は、各部が所掌する文献資料、写真資料を除くその他の資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査、研究を行った。写真資料研究室は、各部が所掌する写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査、研究を行った。



25 第1回文化財の保存及び修復に関する
国際研究集会 (1977年)



26 「黒田清輝展」図録 (鹿児島市立美術館、
1977年11月)

この頃、研究成果の公表・発信に関して、更に新たな試みが行われた。その一つが1977(昭和52)年から開始された「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」の開催である〔図25〕。同国際研究集会は、従来、展覧会や講演会を開催していた開所記念の行事を発展的に引き継いで企画したものである。以後、毎年、有形文化財もしくは無形文化財の保存、修復を中心的なテーマに据えて、国内外の研究者と活発な議論を交わし、研究交流を行っている(同国際研究集会における発表者、発表題名については、『資料編』「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」127～185頁参照)。

同じく、1977(昭和52)年に「黒田清輝展」の巡回が始まった〔図26〕。これは、黒田清輝の業績の顕彰を目指すことは当然ながら、併せて、研究成果の社会への還元と、地方の文化振興に資すること目的とした事業である。各地で大変好意的に迎えられ、現在まで毎年一度、各地の美術館等との共催で継続されている(『資料編』「黒田清輝展巡回記録」94～96頁)。また、1984(昭和59)年に博物館・美術館等保存担当学芸員研修が始まった。この頃、各地に美術館・博物館・文化財関連施設が急速に増加したことを背景に、文化財の保存・修復に関して、研究所の保存・修復部門が長年蓄積してきた研究成果を、研修という形を通して、各地の文化財保存担当者に伝達しようとしたものである。毎年、多くの受講希望者があり、当研究所を代表する事業となっている(『資料編』「保存担当学芸員研修」224～227頁)。

1978(昭和53)年、伊藤延男が所長に就任したこの年には、所長裁定による所内制度の整備が行われた。即ち「招聘研究員規程」と「名誉研究員に関する内規」である。実際には1977(昭和52)年度より発足した招聘研究員制度は、国内外から優れた研究者を当研究所に招聘し共同研究をなす目的のもので、当年の規程整備は制度の円滑な実施のために定めたものであり、8月1日に裁定し10日から施行された。9月26日に裁定

され10月1日より施行されることとなった「名誉研究員」に関する内規は、研究所発展に寄与した旧職員達の功に報いる趣旨から出たもので、勤続年数や功績などによって名誉研究員を発令した（歴代の名誉研究員については、『資料編』865～866頁参照）。

1979（昭和54）年6月13日、皇太子（今上天皇）が行啓し、研究状況の視察が行わ



27 皇太子殿下行啓（1979年6月）

れた〔図27〕。また同年より「調査員」が正式に配置されるようになった。調査員とは、専門的な知識・技術をもって、当研究所の各調査研究を共同で行う所外の専門家を言う。

1980（昭和55）年度より、従来の『要覧』の内容を改め、調査研究・諸事業の詳しい報告や研究施設・設備等の状況を紹介し、各方面の研究者の参加に供するものとなる『東京国立文化財研究所概要』（以下、『概要』とする）の作成を始めた。これにともない一般的事項は『要覧』に掲載することとなった。

1982（昭和57）年、政府が最重要視していた行政改革の流れの中、臨時行政制度調査会の最終答申へ向けて具体的な審議が行われ、その過程で当研究所の活動についても質問が寄せられた。当時の所長伊藤延男によると、「当研究所のあり方の基本」として、「思うに研究所は二つの面を持っている。ひとつは文化財を総括した学術研究の中心的機関となるべきことであり、もうひとつはそこで得られた成果を国や地方公共団体ばかりでなく、民間をも含めた幅広い層に還元することである」（「はじめに」『要覧』昭和57年度）として、当研究所の将来にわたる方向性を明確にしている。1983（昭和58）年度には、行政管理庁による行政監察を受け、研究所の意義と業績について評価を受けた。

こうした行政の流れの中で、当研究所内でも、新たな取り組みが始まった。その一つとして記録しておきたいのは、1981（昭和56）年度から始まった総合研究会である。これは、各研究部門、及び各研究員の専門性が深まるに従い、それぞれの研究活動に対して全所をあげて透明性を保つようにし、また専門性の異なる対場から自由に討議をかさねる目的から始められたものであった。これによって、研究員相互に、それぞれの業務に対する認識を深め、さらに活発化を促すことになった。初めは当研究所内の会議室を会場に、年2回程度開催されていたが、1984（昭和59）年以降は、各部持ち回りで、年に4回から5回、研究員の発表が行われていった（なお、この総合研究会は、所内研究員等に対象を限定しているが、今日まで継続している活動である。また1997年度の『年報』から各回の発表者と題目が掲載され、記録されるようになった）。



28 庶務課（1984年頃）



29 美術部、美術部長室にて（1984年頃）



30 芸能部、メログラフ（音声測定器）を用いた演歌歌唱法の分析（1984年頃）



31 保存科学部、文化財のカビを研究する生物研究室にて（1984年頃）



32 修復技術部、漆の修復アトリエにおける修復作業（1984年頃）



33 情報資料部、文献資料研究室にて（1984年頃）

一方、この頃すでに本館（黒田記念館）の老朽化は年々進んでおり、1985（昭和60）年2月に本館棟暗室の取付工事を行い、また1987（昭和62）年には収蔵庫等の改修工事を行うなど、建物利用にあたっては小さな補修を積み重ねた。また、1988（昭和63）年度より、本館建物の老朽化及び研究部が拡大した保存科学部・修復技術部・芸能部庁舎が手狭になったため、新庁舎の準備計画を練り、第1回建物新営整備委員会が所内に設けられた。建設予定地（東京国立博物館敷地内）の発掘等を行ったが、翌年の実施設計は

認められず、その準備費として認められた予算により、予定地内の試掘及び小規模発掘調査を実施し、遺跡等の確認を行うにとどめざるを得なかった。また、この新営準備作業を優先させるため、1987（昭和62）、1988（昭和63）年度の『要覧』は合冊で刊行された〔図28～33〕。

1988（昭和63）年、組織と業務の見直しがはかられた。翌年度から研究活動の面では、各部において複数年にわたる「中長期研究計画」を策定し、これに基づいて調査研究が進められ、毎年、当該年度の実績を報告することになった。これをもとに、「文化財の保存に関する懇談会」において外部の専門家による評価を毎年度末に受けることになった。この「文化財の保存に関する懇談会」は、1970（昭和45）年度より当研究所及び文化庁間で、文化財保存研究関係の情報交換や円滑化を図る目的で開催されていた「文化財保存科学懇談会」を前身とし、1985（昭和60）年度に名称を改めたものである。それまで、同懇談会では文化財保存に関する研究成果の概要報告を行っていたが、これを機に研究評価が中心的な課題となった。『要覧』は懇談会で研究評価を受けるための説明資料に拠りながら、後に刊行されることになる『年報』と同様の内容を持つように編集され、この当時は庶務課が編集を担当した（各部の「中長期研究計画」に基づいて実施した研究課題、研究期間等は、本章末に掲載した「中長期研究計画一覧」参照）。

3 文化財保護における国際協力と新庁舎完成

1990年代～2000（平成12）年

1990年頃から、文化財保護における国際協力が活発に行われるようになった。当研究所も、その流れに呼応して国際協力を専門に行う部門を新たに設置した。1990（平成2）年10月1日、文部省設置法施行規則の一部改正によって設置されたアジア文化財保存研究室である。アジア文化財保存研究室は、アジアの文化財及びその保存に関する資料の収集、調査、研究、結果の公表を担った〔図34〕。また1993（平成5）年に文部省設置法施行規則の一部改正によって、アジア文化財保存研究室を国際文化財保存修復協力室に改めた。国際文化財保存修復協力室は、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料の収集、調査、研究、結果の公表を行った〔図35〕。

さらに、1995（平成7）年4月1日、文部省設置法施行規則の一部改正により、国際文化財保存修復協力センターの設置が認められ、これによって、当時所長の任にあった西川杏太郎の記すところによれば「国内外関係機関との連携もますます強化され、一層充実した国際的な文化財保護研究機関となることをめざす」（『概要』1995年度）ことと



34 日中共同研究、岩石の成分を分析し、その状態を調べるための試料採取（敦煌莫高窟にて）、アジア文化財保存研究室（1991年）



35 敦煌研究院における日中共同研究の会議、国際文化財保存修復協力室（1994年）

なった。国際文化財保存修復協力センターには企画室と環境解析研究指導室を置いた。企画室は、世界の文化財の保存修復に関する国際協力や研修の企画、実施に関する事務を担当した。環境解析研究指導室は、世界の文化財の保存環境解析に関する資料収集、調査、研究、結果の公表、ならびに専門的、技術的な研修を行った。1997（平成9）年には、文部省設置法施行規則の一部改正によって、国際文化財保存修復協力センターにさらに保存計画研究指導室を置いた。保存計画研究指導室は、世界の文化財の保存計画に関する資料収集、調査、研究、成果の公表、ならびに専門的、技術的な研修を行った。

国際文化財保存修復協力センターが実施する国際的な研修の他に、修復技術部が行う「紙の保存修復国際研修」がある。この研修は、1992（平成4）年に、ICCROM との共催で開始され、日本が文化面での国際協力を様々な場面で果たす中、とりわけ、紙を材料とする文化財の保存修復という日本の優れた技術を海外に普及することになった。1999（平成11）年からは、「漆の保存修復国際研修」が始まり、以後は、「紙の保存修復国際研修」と「漆の保存修復国際研修」を、毎年、交互に開催している。これらの研修は、有形文化財の保存修復分野において、当研究所の名を高めることになった〔図36〕（漆及び紙を対象とした同研修の詳細については、『資料編』『漆の保存修復国際研修』207～209頁、『紙の保存修復国際研修』210～215頁参照）。

1991（平成3）年度から、海外文化交流の一環として位置づけられた事業として、文化庁の要請により「在外日本古美術品保存修復協力事業」が開始された。この事業は、海外の博物館や美術館が所蔵している、修復を必要とする日本古美術品に対して、国の予算で保存修復を行うもので、当研究所がその窓口となり、あわせてマネジメントの役



36 日本の道具や材料を使用した実習、「紙の保存修復国際研修」(1996年度)にて



37 絵の状態を調査する職員、「在外日本古美術品保存修復事業」(1996年度)にて

割を担うことになった。この事業では、研究者による海外出張に、当初は庶務等の事務官も同行し、現場において関係機関との折衝や研究内容を体験することも多かった。このため、事務部門における研究部門への理解とそれに伴う予算執行、諸手続等の重要性に対する認識を深めることとなった。1997(平成9)年度からは、絵画に加え工芸品などへも分野を広げ、現在まで継続されている〔図37〕(同事業の対象作品の一覧については、『資料編』「在外日本古美術品保存修復協力事業」67～76頁参照)。

国内では、大学、大学院教育にも協力している。1995(平成7)年に、東京藝術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学選考の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」を交わし、連携併任分野として、独立専攻大学院文化財保存学専攻(システム保存学)を設置し、連携大学院教育を開始した(同連携大学院教育における講座名、併任教員名については、『資料編』「連携大学院教育」218～221頁参照)。

1994(平成5)年、施設費が認められ、かねてより望まれていた新庁舎建設が決定した。予定地の発掘を経て、1996(平成7)年8月2日、新営建物建築工事着工式を行った。新庁舎完成をみるまでの間、本館では、1992(平成4)年に屋根の改修などを行い、また1995(平成7)年度には本館高圧ケーブルの改修、1996(平成8)年度には電気設備・給排水衛生換気設備等の改修を行って業務を続けた。

また新庁舎建設決定から実際に着工に入るまでの間、1996(平成8)年4月1日には所長の交代があり、西川杏太郎に代わって渡邊明義がその任についた。その後、1998(平成10)年より、政府が進める行政改革の一環として、国の所属機関等の独立行政法人化に向けた準備が進められた。当研究所は、奈良国立文化財研究所と一つの組織になることが予定されており、そのための準備段階として諸協議が進められ、両研究所間の交流が活発になっていった。

研究活動に対する評価については、独立行政法人化を前に、1999(平成11)年12月10日、

1998（平成10）年度の研究活動を対象に、外部評価委員を招き研究評価委員会を開催した。同委員会は、1997（平成9）年度まで関係各課との連絡調整をはかる懇談会として行われてきたが、この年より研究評価の充実をはかるために分離して行うことにしたのであった。初年度は部門別に研究報告を行ったが、部門を横断する研究プロジェクトには不都合があることから、翌年度から研究単位に責任者が発表説明を行い、これを基に外部評価を受けるように改められた。

また同年度より、従来の『要覧』を改め、『年報』を刊行することとなった。当時の所長渡邊明義は、『年報』刊行の目的をつぎのように明言している（『年報の発刊にあたって』『年報』1997年度）。

「当研究所の研究活動は文化財保護行政と深く関係していることから、文化財の保存修復に直接関係する技術指導や調査協力が少なくなく、また文化財の保存の国際的連携を進めるため、研究活動は世界に向けて展開しており、この現況を社会に伝えることも必要だからである。研究所の研究活動を明らかにすることは研究所の研究活動を強化することにつながり、将来への展望を開くことにもなるはずである。これが『要覧』を改めて『年報』として刊行する理由である。」

以後この『年報』は、当該年度の当研究所の調査研究等の業務の全容を示す刊行物として毎年刊行されている。編集にあたっては、各部からの編集委員によって構成された編集委員会制をとり、各年担当編集責任者が編集するようになった。



38 『TOBUNKEN NEWS』no.1
(2000年3月)

また、2000（平成12）年度より、国内外にかかわらず当研究所において行われる日々の調査研究の活動を情報発信する媒体として『TOBUNKEN NEWS（東文研ニュース）』（年4回刊行）の発行を始めた〔図38〕。これは、1997（平成13）度より国際文化財保存修復協力センターが刊行していた『ニュースレター』を発展的に引き継いだものであり、編集は情報調整室の広報担当者があたり、当研究所全体の広報誌として位置づけられている。

2000（平成12）年2月、新庁舎が竣工した。鉄筋コンクリート造、地上4階、地下1階、延面積10557.99㎡である。これまで本館（黒田記念館）と東京国立博

博物館敷地内の別館に別れていた各部門が一つの庁舎に集まることになった。同年2月21日に別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）の移転を開始し、庶務課及びセンター企画室は新庁舎1階で業務を開始した。ついで同年3月6日、本館（美術部・情報資料部）の移転が始まり、3月22日に建設省関東



39 新庁舎竣工式典(2000年5月11日、地下1階セミナー室にて)

地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、工事を完了した。これにより、所在地は「台東区上野公園13番27号」より「13番43号」へ変更された。移転完了後、庶務課・保存科学部庁舎及び芸能部・保存科学部庁舎は取り壊され、敷地も東京国立博物館へ移された。5月11日に、省庁や工事の関係者約200名の出席を得て、新館竣工記念式典を執り行った〔図39〕。式典の概要は以下の通りである。

新館開所記念式典（於セミナー室）

テープカット

プロモーションビデオ放映

1. 式辞 渡邊明義東京国立文化財研究所長
2. 祝辞 林田英樹文化庁長官、高田邦彦建設省関東地方建設局局长
3. 事業報告 滝口信二同省同局営繕部長
4. 祝電披露 深谷隆司通商産業大臣、鳩山邦夫元文部大臣、
(財)元興寺文化財研究所、中国敦煌研究院
5. 感謝状授与 渡邊所長より設計業者・施工業者へ

記念祝賀会（於地階ホール）

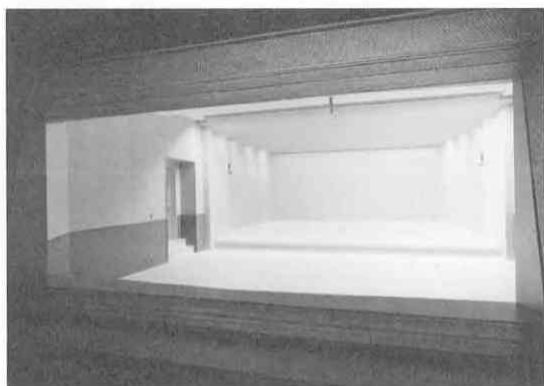
濱田隆元所長発声による祝賀会

記念撮影

公共の公園内に建設されたため、公開施設の設置が義務づけられ、玄関ロビーには公開用のスペースが設けられた。開所にあわせ各部署の研究活動を紹介するパネル展示が行われたが、それ以降は約半年ごとに、各部、センターの研究活動を発表する展示が行われている。また新庁舎は第42回建築業協会賞（BCS賞）を受賞し、2001（平成13）



40 新庁舎外観



41 実演記録室 新庁舎地下1階



42 調査室・写場 新庁舎1階



43 資料閲覧室 新庁舎2階



44 第1修復実験室 新庁舎3階



45 研修生・大学院生室 新庁舎4階

年11月14日に東京都千代田区のパレスホテルで表彰式が行われた。この他に、2000（平成12）年度建設省営繕工事設計コンクールにおいて建築大臣賞も受賞している。

この新庁舎の完成と移転により、有形と無形の文化財を、人文的な観点と自然科学的な観点の両方から調査、研究し、その成果を国内外に発信、還元するという総合的な研究所としての姿がようやく実現したと言えよう〔図40～45〕。



46 改修工事後の黒田記念館
2階廊下より黒田記念室を見る

新庁舎への移転後、黒田記念館の改修工事に着手し、2001（平成13）年3月29日に竣工した。改修の目的は、同記念館の黒田記念室を中心に、2階の全体を創建当初の姿に復元すること、及び、作品展示のためのスペースの拡張であった。そのため、独自の空調設備が設けられ、記念室等の天井は、当初自然光を取り入れていたガラス天井を復元し、さらに移転以前まで会議等に使用されていた旧陳列室も、展示室として使用するよう改修され、また旧美術研究所長室も公開されるようになった。これによって、同館は昭和初年の美術館建築の遺構として蘇ることが出来、同時に展示の充実がかなった。また、2002（平成14）年度より、それまで毎週木曜日に加えて土曜日も一般公開するようになり、来館者の大幅な増加がみられた。その後も、改修工事が加えられ、2003（平成15）年には、エレベーター、リフトが設置されてバリアフリー化を進め、展示施設としての充実がはかられた〔図46〕。

2000（平成12）年3月28日及び翌2001（平成13）年3月27日の2度にわたり、運営諮問委員会を開催した。これは評議会のように議決権は持たないものの、当研究所における研究以外の諸活動（文化財行政支援事業や専門家養成、国際協力事業等）や次年度の研究などに対して外部の専門家や有識者の意見を聞くものである。組織改変中の当研究所において今後の方針を検討する様々な意見が交わされたが、独立行政法人化にともない終会となった。運営諮問委員会の委員は以下の通りである。

青柳正規（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授）

石井米雄（神田外国語大学長）

菴谷利夫（全日本郷土芸能協会理事長）

北野 康（名古屋大学名誉教授）

澄川喜一（東京藝術大学長）

関口正之（遠山記念館長）

田邊三郎助（武蔵野美術大学教授）

谷 久光（文化財保護新興財団専務理事）

永井多恵子（日本放送協会解説委員）

中嶋春洋（国際交流基金常務理事）

野村 萬（日本芸術実演家団体協議会会長）

町田 章（奈良国立文化財研究所長）

4 所長について

1952（昭和27）年の東京文化財研究所誕生後、所長田中一松は、研究部の拡大に伴う設備整備など研究環境の強化に力を入れた。特に文部省科学研究費補助金等の積極的な研究費の取得により、マイクロフィルム撮影機材を一括して導入するなど、研究基礎設備の充実に努め、自身の研究面では1966（昭和41）年度からの科学研究費「日本仏画の図像様式技法等の展開に関する総合的研究」の研究代表者ともなっている。また田中は、書庫の増築や保存科学部新庁舎の建設に貢献している。

1965（昭和40）年4月1日付で、保存科学部長関野克が所長事務取扱に任命され、1971（昭和46）年6月、兼任をかけられていた保存科学部長職を解かれ所長職に専任となった。1970（昭和45）年に保存科学部庁舎横に別館を建築、1978（昭和53）年3月に本館（黒田記念館）に併設して情報資料棟の建設がなされるが、後者は建築家でもあった関野の設計によるものである。

1978（昭和53）年4月1日には、伊藤延男が所長に任じられた。在職中、伊藤は当研究所の業務のなかに「国際交流」をあげ、積極的に取り組んだ。その象徴的な事業の一つが、それまで各部の主催で行っていた「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」を、初めて当研究所と ICCROM の共同主催としたことである。同国際研究集会では「各種文化財に関する専門家の養成」をテーマに掲げ、有形無形を問わず国内外の文化財保存あるいは修復の技術者の養成についての討議発表を行った（1985年11月18～21日）。また、建築史を専門とする伊藤は、調査研究の面において、(1) 日本建築史の研究、(2) 日本建築構造技法の研究、(3) 文化財保護制度史研究、(4) 年輪年代測定法の基礎研究の4つをその課題とした。特に(2)において科学研究費「建造物・美術工芸品の劣化現象と保存・修復に関する研究」を進めた。

1987（昭和62）年4月1日、濱田隆が所長となる。在職中、濱田は、前所長が目指

した「国際交流」のさらなる具体化を図った。その一つが、1986（昭和61）年度から継続して実施されていた特別研究「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」において、訪中団を派遣したことである。また、敦煌研究院との間で共同研究を開始するとともに、1991（平成3）年度には、「スミソニアン研究機構との国際研究交流」のための交流委員会を発足させた。また、老朽化の進む本館（黒田記念館）や手狭になった別館を改善すべく、新庁舎建設計画に着手した。在職中の濱田の調査研究は、1986（昭和61）年度からの科学研究費「非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究」を引き継ぐとともに、科学研究費「東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究」の代表者を務めた。

1991（平成3）年4月1日、西川杏太郎が所長となる。当研究所は、1990（平成2）年度に敦煌研究院と合意書を取り交わした後、西川のもとで5ケ年にわたる本格的な日中共同研究を推進することとなった。この共同研究に関連して、1990（平成2）年10月に設立されたアジア文化財保存研究室をはじめ、国際的な文化財研究機関としての体制を築くとともに、その運営に努めた。また、在職中には、新庁舎の建設が決定し、その具体案の策定を進めた。その他にも、東京藝術大学と共同の文化財保存学における大学院教育を開始している。調査研究の面では、1992（平成4）年度からの科学研究費「科学技術を利用した文化財研究法の開発」、1995（平成7）年度「美術工芸品等の防災に関する調査研究」の代表者を務めた。

1996（平成8）年4月1日、渡邊明義が所長となる。積年の願いであった新庁舎が竣工したことにあわせ、2001（平成13）年度からの独立行政法人化に向けての準備をすすめた。独立行政法人化後も、所長の任にあたった（95～96頁参照）。

5 資料：中長期研究計画一覧

中長期研究計画とは、各部・センターにおいて研究課題を設定し、計画的に調査研究を実施するものである。外部の専門家によってその成果の評価を受け、透明性を高めるようにしていた。以下にその一覧を示す。

研究題目が変更したものは→で示し、担当が変更したものは括弧内に→で示した。なお、*は特別研究を引き継いだ研究、**は特別研究としても行われた研究を示す（特別研究については、『資料編』35～36頁参照）。

美術部

期間（年度）	研究題目
平成元、2、5	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流
平成元～5	美術における地域性及び社会性の研究
平成元～12	美術に関する基礎資料の研究—絵巻史料、明治後半期美術資料及び関東所在墨画資料を中心として—→—絵画資料、明治後半期美術資料、関東所在水墨画資料、日本絵画史年記資料集成 15 世紀→日本絵画史年記資料集成 15 世紀、絵画に見る武装資料、室町時代水墨画資料、明治後期～昭和前期美術資料→日本絵画史年記資料集成 15 世紀、室町水墨画資料、鎌倉後期彫刻の基準作品資料→中国日本拓本資料、室町時代水墨画→中国日本拓本資料、室町時代水墨画、未公開仏教美術原典史料→中国日本拓本資料、室町時代水墨画、未公開仏教美術原典史料、指定関係文書（美術部・情報資料部）
平成 3	来迎を中心とする浄土教美術の研究
平成 4～5	近百年來中国絵画史研究
平成 4～9	**中国仏教美術に関する基礎資料の研究→中国仏教美術基準作品調査研究
平成 6～10	東アジアにおける造形と社会
平成 8～11	明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究
平成 9～12	日本における美術史学の成立と展開（美術部・情報資料部）
平成 10～12	日本における外來の美術の受容についての研究（美術部・情報資料部）
平成 11	美術コレクションの収集・展示に関する歴史的比較研究（美術部・情報資料部）
平成 11～12	木彫仏像の調査研究（美術部・情報資料部）
平成 12	昭和期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究

情報資料部

期間（年度）	研究題目
平成元～5	日本・東洋美術史文献データベースの開発
平成元～5	美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究
平成元～12	美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—
平成 6～10	デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究
平成 6～10	検索辞書システムの研究→美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）
平成 11、12	デジタル画像情報の多重化に関する研究
平成 11、12	文化財に関する研究文献情報の活用

芸能部

期間（年度）	研究題目
平成元～4	採り物の研究→民俗芸能における採り物の研究
平成元～3	寺院行事の研究
平成元～5	日本音楽各種目間の相互影響の研究→日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究
平成元～3	仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究
平成 2～6	能楽の芸能学的調査研究
平成 3～5	絵画資料による近世演劇の研究
平成 5～9	芸能に用いられる武器の研究
平成 5～9	伝統的唱歌の研究
平成 6～12	「翁」の技法集成
平成 6～9	元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究

平成 6～9	日本音楽の伝承に関する研究
平成 7～9	近現代における能楽技法の伝承に関する研究
平成 8～10	近代歌舞伎の伝承に関する研究
平成 10	伝統芸能の形象方法に関する調査研究
平成 11～12	無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究
平成 12	日本伝統楽器の変遷研究

保存科学部

期間（年度）	研究題目
平成元～5	フォクシングの保存科学的研究
平成元～5	特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討
平成元～6	有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立
平成 4、5	古代鉄器材質の歴史的変遷→鉄器材質の歴史的変遷に関する研究
平成 5、6	文化財施設内における保存展示条件の検討
平成 6～8	新しい文化財防虫防霉法の研究
平成 7～11	古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究
平成 7～12	*文化財施設の保存（収蔵・展示）環境の研究
平成 9～12	無公害な文化財生物劣化防除法の研究
平成 12	古代東アジアにおける金属文化財の自然科学的研究

修復技術部

期間（年度）	研究題目
平成元～3	屋外文化財の劣化過程と修復法の開発
平成元～8	*文化財の伝統的修復材料の研究（第2期）
平成 4～12	*文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究
平成 8	敦煌文化財保存修復に関する調査研究（第2期）
平成 9～12	近世輸出工芸品の実証的研究
平成 9	焼付漆の研究
平成 10～12	近代の文化遺産の修復に関する調査研究
平成 10～12	漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査研究

国際文化財保存修復協力センター

期間（年度）	研究題目
平成 3～12	アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集→世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集（アジア文化財保存研究室→国際文化財保存修復協力センター）
平成 3～8	屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究（アジア文化財保存研究室→国際文化財保存修復協力センター）
平成 7～12	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究（国際文化財保存修復協力センター→全所）
平成 9～12	屋外石造（レンガ）文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 国内／海外
平成 11、12	文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査

7 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所

2001（平成13）年～2006（平成18）年

1 独立行政法人としての研究業務

2001（平成13）年4月1日、政府の行政改革により、当研究所と奈良国立文化財研究所は統合し、独立行政法人文化財研究所となり、それぞれ東京文化財研究所、奈良文化財研究所と名を改めた。独立行政法人化により、当研究所の諸活動は文部科学大臣から指示された中期目標を達成すべく行わなければならないこととなった。そのために当研究所の活動全般にわたり、事務管理的な部分を含めて中期目標に対応した5ケ年を単位とする中期計画を立て、文部科学大臣は文部科学省の下に設置された評価委員会の意見を聴いた上でこれを認可し、当研究所は認可された中期計画に対応する年度計画を立てて、その年度計画については文部科学省に届出するという手続きをとることになった。

また、その活動の結果は文部科学省に設置された評価委員会の評価を得ること、その前段階として自己点検評価を行い、これを公正化する外部評価を受けることが義務化された。

当研究所は、これまでも多年度にわたる研究計画を立てて活動してきたが、この新制度に対応すべく諸活動を点検し、研究計画を立案し直した。同時に、組織の見直しを行った。予算面でも当研究所の研究、業務活動全般の運営は、国からの運営交付金によって賄われることになり、そこに経営的な観点が導入されることになった点も大きな変化と言ってよいであろう（2001年度から5ケ年にわたる独立行政法人文化財研究所の「中期目標・中期計画」は、本章末に掲載したので参照されたい）。

まず、この独立行政法人化による組織の改編から記しておきたい。

当研究所は、情報資料部を廃止し、協力調整官を設置し、その下に情報調整室を置き、また従来の庶務課を管理部に改めた。その結果、当研究所の体制は、管理部、協力調整官、美術部、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターとなった。

管理部は、(1) 職員の人事に関すること、(2) 職員の衛生、医療、その他の福利厚生に関すること、(3) 機密に関すること、(4) 所長の官印及び所印の保管に関すること、(5) 公文書類の接受、発送、編修及び保存に関すること、(6) 研究所の所掌事務に関する連絡調整に関すること、(7) 経費及び収入の予算、決算及び会計ならびに会計の監査に関すること、(8) 国際協力、研究交流に係わる企画及び立案に関すること、(9) 研修及び国際

研究集会の実施に関すること、(10) 研究所の所掌事務で、他の所掌に属しないものに関する、をつかさどった。

協力調整官は、文化財の所有者から、保存修復に係わる科学的調査・研究について依頼があった場合に、調整及び成果のとりまとめを行い、また研究所の各研究部における文化財情報管理の統括を行った。その下に置いた情報調整室は、所内の情報システムの管理運用、ホームページや刊行物による各研究部門の研究成果の発信、研究資料の作成・保存・公開及び画像光学やデジタル技術を応用した最先端の画像形成を行った。

美術部は、美術に関する調査、研究を行うとともに、それに基づく資料の作成と公表を行った。美術部には日本東洋美術研究室、黒田記念近代現代美術研究室、広領域研究室を置いた。日本東洋美術研究室は、主として、日本、東洋の古代、中世、近世の美術に関する研究を行った。黒田記念近代現代美術研究室は、日本、東洋の近代の美術、現代及び西洋の美術の研究を行うとともに、黒田記念室に関する事務を担当した。広領域研究室は、日本、東洋美術に関して、人文科学と自然科学にわたる広領域的課題を担当した。

芸能部には演劇研究室、音楽舞踊研究室、民俗芸能研究室を置いた。演劇研究室は演劇に関する研究、音楽舞踊研究室は音楽と舞踊に関する研究、民俗芸能研究室は民俗芸能に関する研究を担当した。

保存科学部は、文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、文化財の保存や美術史・考古学など歴史研究に役立つ調査研究とその成果公表を行った。保存科学部には化学研究室、物理研究室、生物科学研究室を置いた。化学研究室は文化財の材質や彩色を、ポータブル分析機器を含むさまざまな分析手法によって調査し、文化財の化学的な特徴を明らかにするための研究を担当した。物理研究室は温湿度、空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と X 線、赤外線などを用いた非接触調査手法の開発研究を担当した。生物科学研究室は、生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ防除する研究を進め、特に、環境に与える負荷の少ない防除法の開発研究を担当した。

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的な調査、研究を行うとともに、文化財の修復のための技術に関する調査、研究を行い、その調査、研究に基づく資料の作成と公表を行った。ただし、上記のうち、後述する国際文化財保存修復協力センターが所掌するものは除かれる。修復技術部には、修復材料研究室、伝統技術研究室、応用技術研究室を置いた。修復材料研究室は、文化財の修復に関わる新材料、伝統的材料に関する研究を担当した。伝統技術研究室は、絵画、工芸、建築などにおける伝統的技法に関する

研究を担当した。応用技術研究室は、新材料及び新技術を応用した修復方法に関する研究を担当した。

国際文化財保存修復協力センターは、文化財の保存修復に関する国際協力、それに関する調査、研究、それらの成果に基づく資料の作成とその公表を担当した。国際文化財保存修復協力センターには国際情報研究室、保存計画研究室、地域環境研究室を置いた。国際情報研究室は、文化財研究所が行う国際交流、協力等の専門的事項について、連絡調整や企画、実施を行うとともに、国際社会における文化財に関する理念、法理論・条約・規約・憲章・指針等、諸外国の法制度、保護の状況、ならびに文化財と政治、宗教、民族との関わりに関する研究を行った。保存計画研究室は、世界各国、地域の文化財の保存、整備、修復計画、及び活用計画に関するもの、さらに地域開発、観光開発と文化財の関わりに関するものを担当した。地域環境研究室は、世界各国、地域の文化財の保存に関わる自然環境、歴史的、人文的環境、及び経済的環境について研究した。

この他、各部門は、地方公共団体、文化財に関する調査、研究を行う研究所、その他これに類する施設の職員に対して研修を行うとともに、地方公共団体に対して指導、助言を行った。なお独立行政法人化にあわせ、当研究所のシンボルマークを作成した。デザインは東京藝術大学教授でデザイナーの蓮見智幸に依頼し、「一本の線を『人』および東京の頭文字『T』という文字を重ね合わせた、文化財を未来の人々に継承する様を多面的な立体感をもった造形で表現」したシンボルマークとなっている。

以上の機構によって、2001（平成13）年から2006（平成18）年3月31日までの中期目標期間中、順調に事業を遂行することが出来、中期目標期間の終了にあたっては高い評価を得た。

2006（平成18）年4月1日からの次期中期目標期間の開始に際して、機構改革が行われた。協力調整官と情報調整室は新たに企画情報部となり、情報システム研究室と文化財アーカイブズ研究室を置いた。企画情報部は、各研究部における文化財情報の管理の統括を行うとともに、文化財所有者から調査研究について依頼があった場合に、その調整と成果の取りまとめを行った。情報システム研究室は、情報システムの管理、運営、研究成果の公開に係わるものを担当した。文化財アーカイブズ研究室は、文化財に関する情報及び資料の収集、整理、公開に関するもの、ならびに先述した文化財所有者から依頼に係わる調整と成果の取りまとめを担当した。

芸能部は無形文化遺産部と名称を変え、無形文化財研究室、無形民俗文化財研究室、音声・映像記録研究室を置いた。無形文化遺産部は、わが国の無形文化財、無形民俗文化財、文化財保存技術の保存・継承に関する調査研究を行い、それらの調査、研究に基

づく資料の作成と公表を行った。無形文化財研究室は、無形文化財及び文化財保存技術に関するものを、無形民俗文化財研究室は無形民俗文化財に関するものを、音声・映像記録研究室は、音声及び映像記録に関する手法を担当した。

保存科学部は、3室の研究業務に大きな変化はない。修復技術部は、応用技術研究室を廃止し、新たに近代文化遺産研究室を置いたが、近代文化遺産研究室の研究業務は、前の応用技術研究室のそれを継承している。

国際文化財研究センターは、名称を文化遺産国際協力センターにあらため、企画情報研究室も国際企画情報研究室と名を改めたが、それぞれが所掌する研究業務に変わりはない。

2007（平成19年）年4月1日、法人統合により、独立行政法人文化財研究所は、独立行政法人国立博物館と統合し、新たに独立行政法人国立文化財機構となった。これにともない、機構改革が行われ、美術部は廃止され、企画情報部に統合された。そのため、企画情報部は、情報システム研究室、文化財アーカイブズ研究室、文化形成研究室、近・現代視覚芸術研究室、広領域研究室の5室構成となった。また、保存科学部と修復技術部が統合し、保存修復科学センターとなった。保存修復科学センターは、保存科学研究室、分析科学研究室、生物科学研究室、修復材料研究室、伝統技術研究室、近代文化遺産研究室の6室から構成された。

法人統合によるもっとも大きな変化は、これまで当財研究所が管理してきた黒田記念館及び黒田清輝作品が東京国立博物館に移管となったことである。しかし、黒田記念館の管理、運営、平常展示等の企画に関しては、いまなお、当研究所が東京国立博物館に協力して、積極的に関与している。

2 所長について

独立行政法人化にあたり、法人理事長に任命された渡邊明義は、国宝高松塚古墳の保存対策にとりくむ一方、国外ではアフガニスタンの文化遺産、とりわけバーミヤーン遺跡の保存問題、また中国の敦煌や龍門の各研究院との研究交流など、文化遺産保護における国際交流においても当研究所と世界を繋ぐ役目を担った。また高精細デジタル撮影による画像形成など新しい研究分野も積極的に推し進めた。1999（平成11）年度より科学研究費「彩色文化財の材料と技法に関する科学的研究」の代表者となり、特にドイツと日本における彩色についての研究の総括を行った。在職中、「文化財とその保存の研究については“国内問題は国際問題”であると認識し、今後も活動していきたい」（『概

要』2003年度)と記し、当研究所の活動を牽引した。

2004(平成16)年4月、鈴木規夫が所長となった。就任当時、はじめに喫緊の問題となっていたキトラ古墳、高松塚古墳の保存問題に、文化庁や奈良文化財研究所との連携協力のもとに取り組んだ。また西アジアの文化遺産保存支援のための協力、研修事業等の国際交流事業の拡大に努めた。同年の文化財保護法の改正にともない新たに「文化的景観」と「民俗技術」が保護の対象となり、さらに2003(平成15)年に、日本が、ユネスコで採択された「無形文化遺産の保護に関する条約」の条約締結国となると、当研究所においても、無形文化遺産に関する行政施策に資するよう、具体的な調査研究が求められるようになった。このような事業の拡大に際し、その中軸にあって遂行している。2005(平成17)年は、独立行政法人となって5ケ年の中期目標を達成するために定められた中期計画に最終年にあたり、その成果の取り纏めをはかるとともに、あわせて次期中期計画の策定を進めなければならない年でもあった。当該年度にあたり鈴木は、「今年は、当研究所の創設75年の節目に当たる年」(『概要』2005年度)であると指摘し、まさに本書刊行の意義にも注目をしている(2006年4月以降から現在までは、「IV 現況」参照)。

3 資料：中期目標・中期計画

2001(平成13)年4月1日～2006(平成18)年3月31日

独立行政法人文化財研究所の中期目標

(序文)

独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三号)第二十九条の規定に基づき、独立行政法人文化財研究所(以下「文化財研究所」という)が達成すべき業務運営の目標(以下「中期目標」という)を定める。

(前文)

我が国の長い歴史の中で、生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた国民の貴重な財産である文化財は、我が国の歴史、伝統、文化等の理解のために欠かすことのできないものであり、将来の文化の向上発展の基礎となるものである。我が国の優れた伝統文化を守り、伝え、発展させていくことは、文化政策の重要な課題であり、文化財に関する調査・研究の成果を生かしながら、文化財を大切に保存し次世代に継承するとともに、積極的に公開・活用を図り、多くの国民が文化財に対する理解を深め、親しめるようにしていくことが重要である。文化財研究所は、我が国の文化財研究の中核的研究機関として、貴重な文化財を未来の人々に適切に継承していくために必要な知識・技術の基盤を形成する重要な役割を担っている。このため、文化財研究所は、国内外における文化財研究の拠点として、

- ①文化財を適切に保存し、効果的に活用するための調査・研究
- ②国内外の諸機関との研究者交流、共同調査・研究
- ③国民が文化財に触れ、身近に親しむことのできる魅力的な展示や情報・資料の提供
- ④文化財の保存・活用を支える多様な人材の養成・確保
- ⑤文化財の調査・保存・修復に関する国際協力・支援

等の業務を行うこととする。

このような役割を果たすため、文化財研究所の中期目標は、以下のとおりとする。

I 中期目標の期間

文化財研究所が実施する業務は、多種多様な文化財の特質の解明や文化財に関する膨大な資料の収集・整理・分析等に多大の労力と時間を必要とするため、成果が得られるまでに長期間を要するものが多いことから、中期目標の期間は、平成13年4月1日から平成18年3月31日までの5年間とする。

II 業務運営の効率化に関する事項

職員の意識改革を図るとともに、事務、事業、組織等の見直し、外部委託の推進等により、経費の合理化を図ること。具体的には、運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。

III 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

1 文化財に関する調査・研究

我が国における文化財及びその関連資料は膨大であり、その調査・研究と実態の解明には多大の時間を必要とするが、緊急度や重要性等を勘案し、主として下記の事項について計画的に調査・研究を進めること。その際、最終的な結論を導き出すために長期にわたる調査・研究の蓄積が必要な場合は、一定の期間で客観的事実や中間的な成果が得られるよう課題を設定し、その成果を適時適切に国民に公表すること。

(1) 文化財に関する基礎的な調査・研究の推進

以下の課題に取り組み、文化財に関する基礎的な調査・研究の推進を図ること。

- ①美術、演劇、音楽、民俗芸能等の文化財の伝播、継承及び発展の解明を進め、特に、大正期及び昭和前期の美術展覧会に出品された作品とその作家の美術史的な評価を行い、成果として総合的な目録を完成すること。
- ②平城宮跡、飛鳥、藤原官跡の発掘調査等により、古代都城や国家の形成過程、当時の生活環境等の実態の解明を進め、本期間中に13ヶ所程度の発掘調査を行い、研究成果を得るよう努めること。
- ③寺院等が所蔵する歴史資料、書跡資料等の調査・記録・分析により、日本の歴史・文化

の源流の解明を進め、本期間中に5ヶ所程度の調査・研究を行い、成果を得るよう努めること。

(2) 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する実践的な調査・研究の推進

以下の課題に取り組み、文化財に関する基礎的な調査・研究を基に、文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する実践的な調査・研究を進め、その成果を文化財施策の向上に資するよう提供すること。

- ①文化財の材料や技術的構造を明らかにし、それら文化財を生み出した文化的・歴史的背景の解明を進め、発掘調査の迅速化や美術品、出土品に関する科学的調査の発展を図ること。特に、遺構の科学分析等による遺跡調査法、年輪から年代や当時の気象を分析する年輪年代測定法及び動植物遺存体を用いた環境分析法を開発すること。
- ②科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発を進め、特に、文化財の彩色材料の非破壊測定法、臭化メチル全廃に対応するための文化財の生物劣化防除法、屋外文化財（臼杵磨崖仏・厳島神社）に対し環境が及ぼす影響とその技術的対策、大型木製品の保存処理法、有機質遺物の保存処理法及び無機質遺物の非破壊構造調査法を開発すること。
- ③国民に親しまれる遺跡の公開・展示の在り方と保存方法の開発を進めること。特に、遺跡の露出展示法を開発すること。

(3) 文化財に係る調査・研究に関する国際交流・協力等の推進

文化財の調査・保存・修復に関する国際機関、諸外国との調査・研究協力、情報交換、専門家の養成支援等を積極的に実施することにより、文化財に関する国際交流を推進すること。また、外国の文化財保存修復に関する技術的指導・援助等を行うことにより、文化財に関する国際貢献・協力を推進すること。

さらに、大学、研究機関等関係機関との共同調査・研究、研究者交流等を積極的に推進し、調査・研究の質の向上を図ること。

2 調査・研究に基づく資料の作成・公表

文化財に関する調査・研究に基づく成果について、速やかに報告書等を作成し、適切な時期・方法により積極的に公表すること。その際、文化財研究者等だけでなく、多くの国民が容易に研究成果を入手できるよう、情報通信技術の活用や再現模型・複製品の作成等多様な手法を用いて、資料の作成・公表を推進すること。なお、刊行物等の発行及び黒田記念館、飛鳥資料館、平城官跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室の入館者数は、毎年度平均で平成12年度の実績以上を確保するよう努めること。

3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供

文化財に関する情報・資料を計画的に収集・整理し、積極的に公開・提供すること。その際、多くの国民が文化財に関する情報・資料に容易に接することができるよう、情報通信技術を活用して情報提供を行うなど、多様な手法を用いて、情報・資料の収集・整理・

提供を推進すること。なお、情報・資料の収集及びホームページのアクセス件数は毎年度平均で平成12年度の実績以上を達成すること。

4 文化財に関する研修等

文化財の保存、活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体、博物館、美術館等関係機関の職員の資質向上を目的とする研修等を計画的に実施すること。なお、文化財研究所が主催する研修事業に参加した者のうち、平均80%以上の者から「有意義だった」、「役に立った」と回答してもらえるよう研修内容の充実を図ること。また、連携大学院制度により大学院生を積極的に受入れるなど、文化財の保存・活用を支える人材の養成・確保に努めること。

5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言

調査・研究の成果を活用し、国・地方公共団体等に対して、文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する専門的・技術的な援助・助言を積極的に実施することにより文化財保護の質の向上を図ること。

6 前各項の業務に附帯する業務

- (1) 国の文化財に関する公開・活用事業を促進するため、文化財研究所の業務に密接な関係を有する遺跡地の公開・活用に協力・支援すること。
- (2) 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡等の解説、環境保全等を行うボランティア活動を積極的に支援し、ボランティアの文化財に対する学習需要にも適切に対応するとともに、毎年度平均で平成12年度実績以上のボランティアの確保を図り、来訪者に対するサービスを充実すること。

IV 財務内容の改善に関する事項

自己収入の確保、予算の効率的な執行に努め、適切な財務内容の実現を図ること。

- (1) 積極的に外部研究資金、施設使用料等、自己収入の増加に努めること。また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。
- (2) 固定的経費の節減
管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減を図ること。

V その他業務運営に関する重要事項

- 1 人事管理(定員管理、給与管理、意識改革等)、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。
- 2 長期的な展望のもとに施設・設備整備計画を作成し、整備を推進すること。

独立行政法人文化財研究所の中期計画

(序文)

独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三十三号）第三十条の規定により、独立行政法人文化財研究所が中期目標を達成するための中期計画を次のとおり定める。

(基本方針)

独立行政法人文化財研究所は、我が国の貴重な文化財の恒久的な保存・活用を図るため、文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する調査・研究を総合的に実施するとともに、調査・研究成果の国民に対する迅速な公開、文化財の調査及び修復等に従事する専門的技術者の養成・研修、地方公共団体及びその他の団体等に対する専門的・技術的な援助・助言等の業務を行う。

さらに、国際機関及び諸外国との文化財に関する共同研究・調査及び専門家養成に対する支援等、文化財を通じた国際協力を積極的に推進する。

これらの目的達成のため、東京文化財研究所及び奈良文化財研究所において、それぞれ下記のとおり調査・研究及び業務を遂行するものである。

(東京文化財研究所)

日本及び東洋の美術、伝統芸能と民俗芸能の調査・研究、文化財一般の保存に関する科学的調査・研究と文化財の修復に関する技術的調査・研究を行うとともに、全国各地の博物館・美術館或いは文化財の保存と修復現場からの要請に応じた専門的指導・助言及び研修を実施する。

また、文化財の保存・修復に関する国際協力を推進するための諸活動を積極的に行う。

これらの調査・研究及び諸活動の成果の公開等を積極的に推進する。

(奈良文化財研究所)

遺跡・建造物・庭園等大地に結びついた文化財及び南都諸大寺及び近畿周辺の古社寺における文化財の調査・研究を行うとともに、発掘調査・遺跡の整備に関する国際協力を積極的に行う。

また、全国各地の発掘調査等に対する指導・助言及び発掘調査専門職員等に対する研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における調査・研究成果の公表、文化財に関する情報・資料の収集・公開等の業務を積極的に推進する。

I 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。

具体的には、下記の措置を講ずる。

1 国際協力、国際共同研究について「国際文化財保存修復協力センター」への一元化に

による業務の効率化

- 2 両文化財研究所の共通業務の効率化
 - 3 両文化財研究所の組織の見直しによる経費の削減
 - 4 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - 5 セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - 6 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - 7 業務の外部委託、事務のOA化の推進等による効率的な事務の執行
 - 8 法人の自己点検評価のあり方について検討し、適切な自己点検評価を実施するとともに、今後の法人運営の改善に反映させる。
- II 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 文化財に関する調査・研究

次に掲げる調査・研究及びそれに関連する国際交流・協力等を計画的に推進するとともに、外部機関との共同研究を実施する。

また、客員研究員の積極的な活用等により、調査・研究の推進を図る。

(1) 文化財に関する基礎的な調査・研究を推進するため、以下の研究課題に取り組む。

①我が国及び諸外国の美術及び美術史、演劇、音楽、民俗芸能に関する調査・研究を実施する。

ア 東アジア地域における美術交流の歴史や日本美術に及ぼした影響について解明するため、美術に関する資料を収集し、分析、研究を行い、得られた成果を報告書として刊行する。

イ 我が国の近代美術の発達に関して、時代ごとに調査・研究を進めるとともに黒田清輝に関する研究を進める。資料収集、分析、研究を通じて得られた成果を「大正期美術展覧会出品目録」、「昭和前期美術資料集成」(仮称)、「黒田清輝油彩画総目録」等の目録として刊行する。

ウ 伝統芸能に関する調査及び外国との比較研究のため、現地調査及び記録作成、を行い、得られた成果を報告書として刊行する。

エ 伝統楽器の変遷に関する資料収集・調査・研究を行い、得られた成果を所蔵目録及び報告書として刊行する。

オ 民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史的変遷に関する調査研究を行い、民俗芸能の本来の意義を明らかにし、報告書として刊行する。

②国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査及び出土品・遺構に関する調査研究、文化財建造物に関する基礎的調査を実施する。

ア 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡について、以下の発掘調査を実施し、古代都城の実態

解明のための調査・研究を行い、得られた成果を報告書として刊行する。

(平城宮跡) 第一次大極殿地区、第二次朝堂院地区、東院地区

(藤原宮跡) 宮朝堂院跡、京内条坊街区

- イ 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡以外の遺跡で上記アと密接な関係を有する以下の遺跡の発掘調査を実施し、比較研究を行う。

(平城宮跡地区) 興福寺中心伽藍、興福寺大乘院、興福寺一乗院、東大寺中心伽藍、法華寺阿弥陀浄土院、平城宮東院南方遺跡

(飛鳥・藤原宮跡地区) 石神・水落遺跡、飛鳥寺跡

- ウ 上記発掘調査による出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、得られた成果を報告書として刊行する。また、古代飛鳥のイメージ再現研究として、模型、コンピュータグラフィック、出土品のレプリカを作成する。

- エ 文化財建造物の保存及び修復に必要な基礎データを蓄積し、分析・研究を行う。得られた成果により全国各地で行われている文化財建造物の保存のための指標となる研究報告書を作成する。

- オ 文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿復原に関して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、設計及び施工に関する実践的な研究を実施する。

- カ 古代庭園に関する資料収集を行い、分析・検討の結果、報告書を作成する。また、これまでに蓄積してきた発掘庭園に関するデータベースを質、量の両面から充実させ、逐次公開する。

- キ 飛鳥地域の歴史に関する調査・研究を実施し、飛鳥地域の歴史を解明するとともに飛鳥資料館の展示を通して有効に活用する方法を検討する。

- ③下記の古社寺所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査及び記録作成等を行い、文献の面から日本の歴史、文化の源流等の実態を探る。得られた成果により、報告書及びデータベースを作成する。

(調査対象) 興福寺、東大寺、薬師寺、法隆寺、西大寺

- (2) 文化財に関する基礎的研究を基に、文化財の保存・活用の充実を図るために必要な調査・保存・修復・整備・活用に関する実践的な調査・研究を実施する。

- ①文化財の調査・研究方法の開発等に関する調査・研究を進め、文化財を生み出した文化的・歴史的背景を明らかにする。得られた成果により、データベース及び報告書を作成し、文化財施策の向上に資するよう提供する。

- ア 発掘調査及びそれらに関連する作業の手法・技術の開発・改良に関する調査・研究を行い、遺跡発掘の迅速化を図るとともに、深層遺構探査法や官衙遺跡発掘調査法の開発を進める。

- イ 年輪から建築や美術の年代測定、自然災害の発生の確認を行う年輪年代測定法を開

発する。

- ウ 研究のための資料となる考古資料、出土品、動植物遺存体等を全国各地から収集し、整理・分析することにより、遺物の分布状況、分類、編年及び当時の生活環境を解明する環境分析法を開発する。
- エ 保存科学及び考古科学に関する国際会議の開催により、「考古科学の総合的研究(COE)」のまとめを行い、研究報告書を作成する。

②科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発のための調査研究を実施する。

- ア 文化財の彩色材料に関する非破壊測定法の実用化のための基礎研究を行い、得られた成果により、報告書を作成する。
- イ 臭化メチル燻蒸代替法及び殺菌・防カビ法の開発に関する研究を行い、得られた成果により報告書を作成する。
- ウ 文化財施設の保存環境に関する状況調査及び厳島神社や白杵磨崖仏等の劣化調査と環境計測を行い、周辺環境が文化財に及ぼす影響について調査・研究を進め得られた成果により報告書を作成する。
- エ 大型木製品の劣化、有機質遺物の材質分析、無機質遺物の非破壊構造調査に関する研究を行い、それぞれの保存処理法及び調査法を開発する。
- オ 古糊などの伝統的な修復材料の素材の物性の解明を行い、文化財修復の新たな素材と技法の開発研究を行うとともに、レーザーによる文化財クリーニング法の開発のための研究を行う。
- カ 古代遺跡の保存科学的研究を行い、保存修復指針及びデータベースを作成・公開する。
- キ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究を行い、得られた成果により報告書を作成する。

③文化財の活用手法に関する調査・研究を実施する。

- ア 平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、「宮跡整備構想」に基づく具体的整備方針を再検討するとともに、全国各地の大規模な遺跡の整備及び管理状況について、情報収集を行い、調査・分析の結果について報告書を作成する。
- イ 出土遺構及び遺物の公開・活用に資するため、遺跡の公開のための新たな保存法として、遺跡の露出展示法を開発する。

(3) 文化財に係る調査・研究に関する国際交流・協力等を推進する。

①次に掲げる文化財の調査・保存・修復に関する国際機関及び諸外国との研究協力・国際共同研究・情報交換・専門家養成等の支援を行う。

- ア 諸外国の文化財の保護制度に関する調査・研究
- イ 東南アジアの文化財を取り巻く自然環境とレンガ等材料の劣化原因に関する共同研究
- ウ 中国及び中南米諸国との文化財の保存修復に関する調査・研究と技術移転・人材育

成の実施

- エ 地理情報システムを利用した文化財の防災計画に関する共同研究
- オ 在外日本古美術品修復についての諸外国の博物館・美術館との協力事業及び研究機関・専門家との学術交流
- カ 環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究
- キ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究及び研究協力

②文化財保存修復に関する国際研修等を行う。

- ア 文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）と共同で国際修復研修事業を実施する。
- イ 文化財の保存・修復に関する国際シンポジウムを実施する。
- ウ アジア文化財保存セミナーを実施する。
- エ 国際文化財保存修復研究会を実施する。
- オ 国際協力事業団、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所等が実施する研修への協力を行う。

③職員を外国に派遣し、文化財保存修復に関する指導・助言・協力及び国際研究交流を実施する。

④国内においても文化財の保存科学等の分野において、各種研究機関・民間企業等との共同で調査・研究を行う。

⑤外部機関等からの求めに応じて、文化財の保存・修復に関する実践的研究を実施する。

⑥地方公共団体との共同による発掘調査を実施する。

2 調査・研究に基づく資料の作成・公表

①次のとおり、調査・研究に基づく資料を作成するとともに定期的な刊行物の発行、講演会・シンポジウムの開催等により積極的に公表し、国民が容易に研究成果を入手できるよう努める。

- ア 研究報告書、年報、研究論文集、図録等を12年度の実績以上刊行する。
- イ 14年度に奈良文化財研究所の創立50周年事業としてこれまでの研究成果を総括し、特別展示・出版事業を行い、国際シンポジウムを開催するとともに、巡回展を開催する。
- ウ 公開学術講座、公開講演会、現地説明会を開催する。
- エ 調査・研究の成果としてのデータベースを順次公開する。
- オ 黒田記念館、飛鳥資料館、平城宮跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室における展示・公開を充実させ、入館者数を12年度の実績以上確保するよう努める。
- カ 研究成果の公表の結果に関して、適宜アンケート調査等を実施し、常に国民の評価

を得るよう努める。

②文化財に関する協議会、研究集会等を開催し、研究成果の質の向上を図る。

- ア 民俗芸能研究協議会
- イ 文化財保存修復研究協議会
- ウ 近代の文化遺産の保存研究会
- エ 保存科学研究集会
- オ 在外日本古美術品修復技術研究会

3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供

①文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供

- ア 毎年、前年度実績を上回るよう文化財関係の資料・図書の収集・整理・公開・提供を充実する。
- イ これまでの実績や蓄積したデータを活用し、文化財関係資料等に関するデータベースの作成を継続・充実し、順次公開する。

②文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究の成果を活かし文化財情報基地としての基盤を整備・充実する。それにより、国民に対して円滑な情報提供を行う。また、両研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を毎年度平均で12年度実績以上を確保する。

4 文化財に関する研修等

次のとおり、文化財に関する研修等を行う。なお、研修事業に参加した者のうち、平均80%以上の者から「有意義だった」、「役に立った」と評価してもらえるよう研修内容の充実を図る。

①文化財に関する研修

- ア 埋蔵文化財発掘技術者等研修
年14回(種類)、のべ200名程度に対し研修を実施する。
- イ 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
年1回、25名程度に対して研修を実施する。

②連携大学院教育の推進等

- ア 東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を推進する。
- イ 東京と奈良において各々年間10名程度の博物館学実習生の受入れを行う。

5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言

次のとおり、文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関して、国・地方公共団体等に対して専門的・技術的な援助・助言を行う。

①文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に対する専門的・技術的な援助・助言

②地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業等に対する専門的・技術的な援助・助言

③地方公共団体等が設置する文化財の收藏・公開施設に対する専門的・技術的な援助・助言

6 前各項の業務に附帯する業務

前各項の業務に附帯する次の業務を推進する。

(1) 平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力・積極的支援を実施する。また、文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に積極的に協力する。

(2) 平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対するサービスを充実するため、次のことを実施する。

①解説ボランティア事業を運営する。

②各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等の支援を行う。

③ミュージアムショップを委託により運営する。

④平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対する満足度を調査し、サービス充実の目安とする。

Ⅲ 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画

収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。

また、管理業務の効率化を進める観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。

II 管理運営

管 理 部

管理部については、すでに「沿革」において言及されているので、本章では同部門の変遷の概略を記すこととする。また、本章末尾に掲載した「管理運営担当職員変遷一覧」もあわせて参照されたい。

1 帝国美術院附属美術研究所

同時代における当研究所の管理運営は、1930（昭和5）年6月に改正された「帝国美術院規程」（勅令125号）及び同年10月に制定された「美術研究所事務分掌規程」によって、主事及び経理部が行うこととなった。経理部には、庶務掛・会計掛・陳列掛が置かれた。経理部では様々な事務の他、出張費や資料収集のための会計事務、さらには陳列室における黒田清輝作品の展示などを行った。当時の諸記録から、庶務掛と会計掛を松原松之丞と岩淵幸左衛門が、展示掛を黒田の義弟であった大給近清が担当したとされる。

1935（昭和10）年5月28日、帝国美術院の改組が発表される。これを受けて、1935（昭和10）年6月1日、「美術研究所官制」（勅令第148号）が公布・施行され、主事は所長となり、新たに書記が置かれることとなった。書記には、木下龍也が採用された。庶務掛・会計掛・陳列掛の事務分掌規程に大幅な変更は認められないが、庶務掛には出版に関する事項、会計掛には物品の購入処理や寄附及賃貸に関する事項が新たに加えられている。

2 文部大臣直轄美術研究所

1937（昭和12）年6月24日、官制改正（勅令第281号）により、帝国美術院は帝国芸術院となった。これに伴い、同院の附属であった美術研究所は、勅令により文部大臣の直轄となる。当研究所の管理運営は、引き続き所長及び経理部の庶務係・会計掛・陳列掛が担った。また、1937（昭和12）年11月29日に制定された「美術研究所事務分掌規程」の「第八条 各部ニ主任ヲ置ク 所長ノ命ヲ承ケ部ノ事務を掌理ス」によって、経理部に主任が置かれることとなる。

1937（昭和12）年及び1938（昭和13）年度の概算要求によると、「会計事務に関しては現在支出官を置かざる為、嘱託一人及雇一人を以て之に充つるに過ぎざるも事務連絡進捗上会計独立を急務とし、之が為に専任書記の増員を必要とす」とあり、本格化した研究業務を支えるため、会計掛の増員が求められている。しかし、この要求は長らく認

められることはなかった。人員不足の状況は、1943（昭和18）年に根本新助及び橋本道胤を採用したことにより、若干改善されたが、彼らもまた嘱託であり、政府の財政が逼迫する戦時下において、それ以上の人員増加をはかることは容易ではなかった。文部大臣直轄の時代、当研究所の管理運営業務は、林真彦、根本新助、橋本道胤、南川正雄らの嘱託や雇がその一端を担った。

3 国立博物館附属美術研究所

1947（昭和22）年5月3日、新憲法施行により、美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。これにより当研究所は、国立博物館の附属機関となった。この時代、当研究所の運営は博物館の予算によってまかなわれ、また、事務業務も一括して、国立博物館監理課の庶務係・会計係・用度係・警備係・営繕係が担当した。当研究所の諸事務には、文部事務官の2名があたった。なお、この時代、従来の陳列掛が行っていた業務は、美術研究所第四研究室が行っている。

4 文化財保護委員会附属美術研究所

1950（昭和25）年5月30日、文化財保護法が施行された。これに伴い、美術研究所は8月29日付で国立博物館附属を離れ、新しく設立された文化財保護委員会の附属機関となった。「文化財保護委員会規則第5号」（1950年8月29日）により、庶務室がおかれ、「職員の人事」「庶務」「会計」「行政財産及び物品の管理」「職員の福利厚生」「黒田記念室」に関する業務を行うこととなった。庶務室は研究所1階の事務室内におかれ、藤江金治が事務官として正式に採用された。

5 東京文化財研究所、東京国立文化財研究所

1952（昭和27）年4月1日、文化財保護法の一部改正を受けて、美術研究所は東京文化財研究所と改称、同日制定された「東京文化財研究所組織規定」により、庶務室が置かれる。庶務室では、「職員の人事」「庶務」「会計」「行政財産及び物品の管理」「職員の福利厚生」に関する業務を行った。庶務室の担当であった「黒田記念室に関する」業務は、美術部が行うこととなった。

1954（昭和29）年7月1日、東京文化財研究所は東京国立文化財研究所と改称、庶務室には庶務係と会計係が置かれた。庶務室長は小島忠二が勤めた。『東京国立文化財研究所要覧 1955年』によれば、庶務室における定員及び現員（1955年12月1日現在）は、それぞれ事務官4、事務雇1、雑務手2、臨時筆生1とあり、合計8名の人員が確保さ

れている。当研究所の管理運営体制は、東京国立文化財研究所時代になってようやく確立されたと言える（各時代の定員については、『資料編』「定員構成の変遷」881～882頁参照）。

1961（昭和36）年9月16日、「東京国立文化財研究所組織規程」の一部改正により、庶務室は庶務課へと拡大し、庶務課の下に庶務係・会計係が置かれた。これに伴い、小島忠二は庶務室長から庶務課長に昇進、翌1963（昭和38）年より課長補佐職が設けられ、守谷安知が任じられた。これ以降、2000（平成12）年度まで、庶務課では「職員の人事」「庶務」「会計」「行政財産及び物品の管理」「職員の福利厚生」「庁内の取締り」「他の所掌に属しない事務を処理する」業務を担当することとなる。

また、1992（平成4）年には、当研究所が海外で行う調査研究や国際交流など海外に関わる事務を専門的につかさどる国際交流主幹がおかれ、貫志辰夫がその任についた。同職は、1995（平成7）年の国際文化財保存修復センターの設置にともない廃止され、貫志辰夫は同センターの企画室長となり、その職務を担った。

6 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所

2001（平成13）年4月1日、東京国立文化財研究所は独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となった。独立行政法人化にともない、当研究所の組織は大幅に改編され、庶務課は管理部管理課となった。従来の会計係は、予算係と経理係に分かれ、国際文化財保存修復センターの企画室が廃止され、企画渉外係となって管理部におかれることとなった。管理部管理課には、庶務係を加えた4係がおかれた。

また、「独立行政法人文化財研究所組織規定」（2001年4月1日、文化財研究所組織規定第1号）によって、新たに協力調整官をおき、文化財の所有者からの保存修復に係る科学的調査研究についての依頼の調整及び成果のとりまとめ、及び各研究部における文化財情報の管理の統括を行うこととなった。

管理部では、管理部長、管理課長、課長補佐のもと、庶務係・企画渉外係・予算係・経理係が「庶務」「人事」「会計」「施設管理」「国際交流」「研究支援」の業務を行った。また、独立行政法人化にともない、当研究所の運営経費が、従来の国の予算から独立行政法人運営費交付金へと変更されると、会計法も企業会計を原則とした独立行政法人会計へと移行した。同時に当研究所の業務全般に対して、一層の合理化が求められたが、管理部では一般管理費の経費削減、及び業務の外部委託・事務のOA化を推進し、効率化を積極的に図った。

管理運営担当職員変遷一覧

凡 例

- ・当研究所の管理運営を担当した職員名を一覧に示した。職員名は、「文部省職員録」、「国立博物館職員名簿」（東博レ 0077）・「国立博物館職員録」（東博レ 0121）及び当研究所発行の「一覧」「要覧」「年報」に記載された氏名に従い、各出典を年次とともに記載した。
- ・年度中に職員の異動があった場合は、→で示した。
- ・1950（昭和 25）年に庶務室が置かれる以前は、嘱託職員や文部技官が経理・庶務の業務に携わっていた可能性があるため、全職員名を記載した。

開 所 前

年	会計	
～ 1929	打田伝吉	

帝国美術院附属美術研究所

年		主事	所員	助手	嘱託	事務嘱託
1930	文部省職員録	正木直彦	矢代幸雄（主任）／田中喜作／青山新／尾高鮮之助／正木篤三	菅沼貞三／木下龍也／杉田益次郎／中根勝	関野貞／田中豊蔵／丸尾彰三郎／熊谷宣夫／富永惣一／堀井三友	大給近清／松原松之丞
1931	文部省職員録	正木直彦	矢代幸雄（主任）／田中喜作／青山新／尾高鮮之助／正木篤三	菅沼貞三／木下龍也／杉田益次郎／中根勝	関野貞／田中豊蔵／丸尾彰三郎／熊谷宣夫／富永惣一／堀井三友／望月信成	大給近清／岩淵幸左衛門
1932	文部省職員録	矢代幸雄	青山新（主任）／田中喜作／尾高鮮之助／正木篤三／菅沼貞三	木下龍也／杉田益次郎／中根勝	関野貞／田中豊蔵／丸尾彰三郎／富永惣一／堀井三友／望月信成／渡邊一／尾崎夏彦／隈元謙次郎／福井利吉郎／兒島喜久雄／脇本十九郎	大給近清／岩淵幸左衛門
1933	文部省職員録	矢代幸雄	青山新（主任）／田中喜作／正木篤三／菅沼貞三／渡邊一		関野貞／田中豊蔵／丸尾彰三郎／富永惣一／堀井三友／望月信成／尾崎夏彦／隈元謙次郎／福井利吉郎／兒島喜久雄／脇本十九郎／熊谷宣夫／木下龍也／杉田益次郎／中根勝	大給近清／岩淵幸左衛門
1934	文部省職員録に記載なし・研究所一覧なし					
年		所長	所員	助手	書記	嘱託
1935	文部省職員録	和田英作（所長事務取扱）	矢代幸雄／田中喜作	中川千咲／豊岡益人	木下龍也	青山新／正木篤三／菅沼貞三／渡邊一／中根勝／大給近清／岩淵幸左衛門／隈元謙次郎／西村敬二郎／山田智三郎／梅津次郎／美澄政博／富田美彦／倉田平吉／小高根太郎／田中豊蔵／丸尾彰三郎／富永惣一／堀井三友／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／須賀利雄／筒崎謙斎

年		所長	所員	助手	嘱託
1936	文部省職員録	矢代幸雄	矢代幸雄／田中喜作	中川千咲／豊岡益人／木下龍也	和田新／正木篤三／菅沼貞三／渡邊一／中根勝／大給近清／岩淵幸左衛門／隈元謙次郎／西村敬二郎／山田智三郎／梅津次郎／美澄政博／富田美彦／倉田平吉／小高根太郎／田中豊蔵／丸尾彰三郎／富永惣一／堀井三友／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／須賀利雄／筒崎謙斎

文部大臣直轄美術研究所

年		所長	所員	助手	書記	嘱託	雇
1937	文部省職員録	矢代幸雄	矢代幸雄／和田新／正木篤三	中川千咲／豊岡益人／倉田平吉	木下龍也	田中喜作／菅沼貞三／渡邊一／中根勝／大給近清／岩淵幸左衛門／隈元謙次郎／梅津次郎／美澄政博／富田美彦／小高根太郎／白畑よし／西村敬二郎／山田智三郎／須賀利雄／望月信成／堀井三友／福井利吉郎／田中豊蔵／兒島喜久雄／丸尾彰三郎／富永惣一／筒崎謙斎	
年		所長	所員	助手	書記	嘱託	雇
1938	文部省職員録・研究所一覽	矢代幸雄	正木篤三（研究第一部）／和田新（研究第二部）／矢代幸雄（研究第三部）	中川千咲・豊岡益人（研究第一部）／倉田平吉（研究第二部）／中川千咲（資料部）	木下龍也（経理部）	田中喜作・菅沼貞三・渡邊一・梅津次郎（研究第一部）／隈元謙次郎・小高根太郎（研究第二部）／兒島喜久雄・山田智三郎（研究第三部）／白畑よし（資料部）／中根勝（写真部）／大給近清・岩淵幸左衛門・林真彦・丸尾彰三郎・富永惣一・堀井三友・田中豊蔵・望月信成・福井利吉郎・西村敬二郎・須賀利雄・筒崎謙斎（経理部）／美澄政博・富田美彦	浦崎久一／佐藤キミ／高山貞子／山本政太郎／於保佐代子／矢吹光子／能島重市／伊藤のぶ子／根岸郁郎／小野貞子
1939	文部省職員録	矢代幸雄	正木篤三（研究第一部）／和田新（研究第二部・研究第三部）／矢代幸雄（研究第三部）／正木篤三（写真部）	中川千咲（研究第一部・資料部）／豊岡益人（研究第一部）／倉田平吉（研究第二部）／豊岡益人（研究第三部）	木下龍也（経理部）	田中喜作・菅沼貞三・渡邊一・梅津次郎（研究第一部）／隈元謙次郎・小高根太郎（研究第二部）／兒島喜久雄・山田智三郎（研究第三部）／渡邊一・白畑よし（資料部）／中根勝（写真部）／大給近清・岩淵幸左衛門・林真彦（経理部）／丸尾彰三郎・富永惣一・堀井三友・田中豊蔵・望月信成・福井利吉郎・西村敬二郎・須賀利雄・筒崎謙斎（嘱託）	於保佐代子（研究第一部）／高山貞子・矢吹光子・根岸郁郎（研究第二部）／小野貞子（研究第三部）／伊藤のぶ子（資料部）／中根得江（写真部）／佐藤キミ・南川正雄（経理部）
年		所長	所員	助手	書記	嘱託	
1940	文部省職員録	矢代幸雄	矢代幸雄／和田新／	中川千咲／豊岡益人／	木下龍也	菅沼貞三／渡邊一／中根勝／岩淵幸左衛門／隈元謙次郎／梅津次郎／小高根太郎／	

			正木篤三	倉田平吉		林真彦／白畑よし／田中喜作／大給近清／丸尾彰三郎／堀井三友／田中豊蔵／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／山田智三郎／富永惣一／須賀利雄／筒崎謙斎／吉川逸治		
1941	文部省職員録	矢代幸雄	矢代幸雄／和田新／隈元謙次郎	中川千咲／豊岡益人／倉田平吉	木下龍也	田中喜作／菅沼貞三／渡邊一／中根勝／大給近清／岩淵幸左衛門／梅津次郎／小高根太郎／白畑よし／林真彦／丸尾彰三郎／堀井三友／田中豊蔵／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／山田智三郎／富永惣一／須賀利雄／筒崎謙斎／吉川逸治／守中裕幸／大串純夫／秋山光和		
1942	文部省職員録	田中豊蔵（所長事務取扱）	田澤坦／隈元謙次郎	中川千咲／倉田平吉	木下龍也	田中豊蔵／田中喜作／菅沼貞三／渡邊一／中根勝／石澤正男／大給近清／岩淵幸左衛門／梅津次郎／白畑よし／丸尾彰三郎／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／山田智三郎／富永惣一／須賀利雄／筒崎謙斎／吉川逸治／守中裕幸／大串純夫／秋山光和		
年		所長	所員	助手	書記	嘱託	文部省嘱託	雇
1943	文部省職員録・研究所一覧	田中豊蔵（所長事務取扱）	田澤坦／隈元謙次郎／菅沼貞三	中川千咲／河北倫明／黒川光朝	今関孝康	田中豊蔵／田中喜作／渡邊一／中根勝／大給近清／梅津次郎／白畑よし／山西英夫／南川正雄／菊池明夫／沢柳大五郎／丸尾彰三郎／望月信成／福井利吉郎／兒島喜久雄／富永惣一／矢代幸雄／山田智三郎／須賀利雄／石澤正男／吉川逸治／守中裕幸／大串純夫／秋山光和／小山富士夫	根本新助／橋本道胤	矢吹光子／南川正雄／鎌田通吉／仲田美佐登／森敏子／阿部ゆき／清水美幸
1944	文部省職員録・研究所一覧共になし							
1945	文部省職員録・研究所一覧共になし							
1946	文部省職員録・研究所一覧共になし							

国立博物館附属美術研究所

年									
1947	文部省職員録・研究所一覧共になし								
年		一級技官（所長）	二級技官	三級技官	二級嘱託・三級嘱託	雇員	技術員	備人	給仕
1948	国立博物館職員名簿（昭和23年1月現在）	田中豊蔵	福山敏男／菅沼貞三／隈元謙次郎／熊谷宣夫	伊東卓治／澤柳大五郎／河北倫明／川上涇／岡畏三郎／久野健	白畑ヨシ（二級嘱託）・下村英時／松下隆章／中村傳三郎／秋山光和／持丸一夫／高柳博也／上野アキ／関千代（三級嘱託）	橋本弘次	毛利朝江／宮沢みつ／柳澤孝／古谷涼子／田村悦子／猪川和子	吉野茂七／諸星ハル	田中常雄

年		一級技官 (所長)	二級技官	三級技官	事務員	技術員	雑仕
1949	国立博物館職員録(昭和24年11月1日現在)	松本栄一	伊東卓治/松下隆章/白畑よし(第一研究室)・熊谷宣夫/島田修二郎(第二研究室)・隈元謙次郎(第四研究室)・福山敏男(第七研究室)	久野健/持丸一夫/上野アキ(第一研究室)・川上涇(第二研究室)・河北倫明/岡畏三郎/中村傳三郎/関千代(第四研究室)・秋山光和(第七研究室)	橋本弘次	毛利朝江/猪川和子/田村悦子/永尾ミエ(第一研究室)・神谷栄子(第二研究室)・古谷涼子(第四研究室)	吉野茂七/諸星ハル
年		所長	技 官		事務官		
1950	文部省職員録	松本栄一	福山敏男/隈元謙次郎/熊谷宣夫/伊東卓治/島田修二郎/白畑ヨシ/中川千咲/河北倫明/岡畏三郎/秋山光和/川上涇/中村傳三郎/持丸一夫/久野健/上野アキ/関千代・新規矩男(兼)/吉川逸治(兼)		藤江金治		

文化財保護委員会附属美術研究所

年	
1951	文部省職員録・研究所一覧共になし

東京文化財研究所

年						
1952	文部省職員録に記載なし・研究所一覧なし					
年		庶務室長		庶務係長		会計係長
1953	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治

東京国立文化財研究所

年		庶務室長		庶務係長		会計係長
1954	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1955	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1956	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1957	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1958	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1959	文部省職員録	小島忠二		加藤輝之		藤江金治
1960	文部省職員録	小島忠二		安岡 潤		藤江金治
1961	文部省職員録	小島忠二		安岡 潤		藤江金治
1962	文部省職員録	小島忠二		鬼山光義		藤江金治
年		庶務課長	庶務課長補佐	庶務係長		会計係長
1963	文部省職員録	小島忠二	守谷安知	羽田吉一		藤江金治
1964	文部省職員録	小島忠二	守谷安知	羽田吉一		藤江金治
1965	文部省職員録	本間春次	守谷安知	羽田吉一		藤江金治
1966	文部省職員録	野島弥三郎	音川啓太郎	羽田吉一		藤江金治

年		庶務課文部 事務官課長	庶務課文部事 務官課長補佐	庶務係文部 事務官係長	庶務係文部 事務官	会計係文部 事務官係長	会計係文部 事務官	会計係事務員	
1967	要覧	野島弥三郎	音川啓太郎	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也	本村伝一	角田友子	
1968	文部省 職員録	野島弥三郎	音川啓太郎	羽田吉一		大釜一也			
年		庶務課文部 事務官課長	庶務課文部事 務官課長補佐	庶務係文部 事務官係長	庶務事務官	会計係文部 事務官係長	会計係文部 事務官	会計係事務官	会計係事務 補佐員
1969	要覧	岩田守夫	音川啓太郎	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也	本村伝一	角田友子	高橋雄二
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係文部 事務官	会計係係長	会計係主任	会計係文部 事務官	会計係事務 補佐員
1970	要覧	鬼山光義	音川啓太郎	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也		木村伝一／ 角田友子	高橋雄二
1971	要覧	鬼山光義	音川啓太郎	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也		木村伝一／ 角田友子	高橋雄二
1972	要覧	鬼山光義	五十嵐春雄	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也	本村伝一	中里友子	高橋雄二
1973	要覧	鬼山光義	五十嵐春雄	羽田吉一	松本多賀子	大釜一也	本村伝一		根本久美子 ／山下房子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係文部事 務官	会計係係長	会計係主任	会計係文部事 務官	会計係事務補 佐員
1974	要覧	幸文雄	五十嵐春雄	若井明	松本多賀子	大釜一也	本村伝一	正藤隆生	高橋久美子
年		庶務課文部事 務官庶務課長	庶務課文部事 務官庶務課長補佐	庶務係文部事 務官庶務係長	庶務係文部事 務官庶務係員	会計係文部事 務官会計係長	会計係文部事 務官会計主任	会計係文部事 務官会計係員	会計係事務 補佐員
1975	要覧	幸文雄	鶴見茂	若井明	松本多賀子	本村伝一	鈴木吉彦	正藤隆生	関口富子／ 杉浦みどり
1976	要覧	松原尚躬	鶴見茂	若井明	松本多賀子	斎藤朗	鈴木吉彦	正藤隆生	杉浦みどり
年		庶務課文部事 務官庶務課長	庶務課文部事 務官庶務課長補佐	庶務係文部事 務官庶務係長	庶務係文部事 務官庶務係員	会計係文部事 務官会計係長	会計係文部事 務官会計主任	会計係文部事 務官会計係員	会計係事務 補佐員
1977	要覧	松原尚躬	鶴見茂	本田耕二	松本多賀子	斎藤朗	鈴木吉彦	正藤隆生	杉浦みどり ／伊藤ひろ 代
1978	要覧	松原尚躬	西山博	出口小太郎	松本多賀子	斎藤朗	花岡忠義	正藤隆生	中村ひろ代
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係係員	会計係係長	会計係主任	会計係係員	会計係事務 補佐員
1979	要覧	守谷安知	西山博	出口小太郎	松本多賀子	斎藤朗	花岡忠義	正藤隆生	中島恵美子
1980	要覧	守谷安知	西山博	出口小太郎	松本多賀子	斎藤朗	花岡忠義		吉川久美子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係係員	会計係係長	会計係主任	会計係係員	会計係事務 補佐員
1981	要覧	守谷安知	西山博	能村浩次	松本多賀子	斎藤朗	花岡忠義		吉川久美子 ／鎌田祥子
1982	要覧	守谷安知	西山博	能村浩次	松本多賀子	斎藤朗		相沢昇	鎌田祥子／ 秦恵子
1983	要覧	久保庭伊佐男	西山博	能村浩次	松本多賀子	斎藤朗	相沢昇		鎌田祥子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係庶務主任	会計係係長		会計係係員	会計係事務 補佐員
1984	要覧	笹山保美	西山博	斎藤朗	松本多賀子	相澤昇		山下登	鎌田祥子／ 年代直美
1985	要覧	笹山保美	西山博	斎藤朗	松本多賀子	相澤昇		山下登	鎌田祥子／ 山西恵美

				庶務課文部 事務官専門員	庶務係文部 事務官警務員	庶務係用務員	
				藤江金治	友田薫	高谷たま	
				藤江金治	友田薫	高谷たま	
				庶務課文部 事務官専門員	庶務係文部 事務官警務員	庶務係文部 事務官用務員	庶務係文部事務 官作業補佐員
				藤江金治	友田薫	高谷たま	大塚正司
庶務係事務補佐員			会計係技能 補佐員	庶務課専門員	庶務係警務員	会計係作業員	会計係作業 補佐員
早川ツル子／河原裕子			三次ヨシ	藤江金治	友田薫	高谷たま	大塚正司
河原裕子／斉藤靖子			早川ツル子	藤江金治		高谷たま	大塚正司
斉藤靖子／根本久美子			早川ツル子	藤江金治		高谷たま	大塚正司
斉藤靖子						高谷たま	大塚正司
庶務係事務補佐員						会計係作業員	会計係作業 補佐員
斉藤靖子						高谷たま	大塚正司
			会計係技能 補佐員			会計係用務員 作業員	会計係作業 補佐員
						小澤たま	大塚正司
			豊田三智子			小澤たま	大塚正司
			会計係技能 補佐員			会計係文部 技官作業員	会計係作業 補佐員
			豊田三智子			小澤たま	大塚正司
			平林喜多江 ／高成一雄				大塚正司
庶務係事務補佐員		庶務係技能 補佐員	会計係技能 補佐員				会計係作業 補佐員
高橋節子／宮崎真澄		平林喜多江	高成一雄				大塚正司
中村節子／宮崎真澄／ 小木喜代子		平林喜多江	高成一雄				
庶務係事務補佐員	会計係業務 補佐員	庶務係技能 補佐員	会計係技能 補佐員		庶務係調査員 (非)		
中村節子／宮崎真澄／ 小木喜代子	松田ツキ	松良佳美	高成一雄		竹中弥生		
中村節子／大田有喜子 ／小木喜代子	松田ツキ	薄井祥子	高成一雄		竹中弥生		
中村節子／大田有喜子 ／小木喜代子	松田ツキ	薄井祥子	高成一雄		竹中弥生		
庶務係事務補佐員	会計係業務 補佐員		会計係技能 補佐員		庶務係調査員 (非)		
中村節子／太田有喜子 ／滝澤真由美	松田ツキ		佐々木忠雄		松原美智子		
中村節子／太田有喜子 ／滝澤真由美／小野美 佐子	松田ツキ		佐々木忠雄		松原美智子		

年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係庶務主任	会計係係長		会計係係員	会計係事務補佐員
1986	要覧	笹山保美	西山博	斎藤朗	松本多賀子	相澤昇		山下登	鎌田祥子／ 山西恵美
1987	要覧	笹山保美	西山博	斎藤朗	松本多賀子	相澤昇		山下登	鎌田祥子／ 山西恵美
1988	要覧	池田義春	西山博	江原勉	松本多賀子	長谷川憲康		山下登	鎌田祥子／ 志村浩美
1989	要覧	最所親志		江原勉	大堀岳満	長谷川憲康		相澤かず子 ／鈴木秀樹	志村浩美／ 宮崎章子
1990	要覧	最所親志	長谷川憲康	江原勉	大堀岳満	長谷川憲康 (併)		相澤かず子 ／鈴木秀樹	志村浩美／ 宮崎章子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係係員	会計係係長		会計係係員	会計係事務補佐員
1991	要覧	赤羽鉦一	長谷川憲康	大堀岳満	相澤かず子	篠原一夫		鈴木秀樹	山田文子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係係員	会計係係長	会計係主任	会計係係員	会計係事務補佐員
1992	要覧	富澤邦明	長谷川憲康	大堀岳満	相澤かず子	篠原一夫		日高信二	山田文子／ 渡邊和子
1993	要覧	富澤邦明	長谷川憲康	大堀岳満	相澤かず子	篠原一夫		日高信二／ 宮腰香代子	山田文子／ 小菅陶子
1994	要覧	山代文雄	篠原一夫	浅見清	宮腰香代子	大堀岳満	日高信二	渡邊重夫	時田真理／ 瀧澤桂子
年		庶務課課長	庶務課課長補佐	庶務係係長	庶務係係員	会計係係長	会計係係員	会計係事務補佐員	
1995	要覧	山代文雄	篠原一夫	浅見清	宮腰香代子	大堀岳満	渡邊重夫	時田真理／瀧澤桂子／ 後藤由希子	
1996	要覧	山代文雄	篠原一夫	小関仁志	宮腰香代子	横山直樹	本澤英伸	時田真理／後藤由希子 ／村上浩子	
年		庶務課長	庶務課長補佐	庶務係長	庶務主任	会計係長	会計係員	会計事務補佐員	
1997	年報	與那原進	長谷川洋一	小関仁志	飯田猛継	横山直樹	真鍋浩二	時田真理／後藤由希子 ／村上浩子／塚本麗	
1998	年報	與那原進	長谷川洋一	小関仁志	飯田猛継	庄司義則	真鍋浩二	村上浩子／堀江祐子／ 工藤幸	
1999	年報	白井国明	長谷川洋一	小関仁志	飯田猛継	庄司義則	真鍋浩二	村上浩子／工藤幸／堀 江祐子／田島由紀子	
2000	年報	白井国明	長谷川洋一	小関仁志	森田健一	庄司義則	坂巻信宏	堀江祐子／工藤幸／堀 内朋美／田島由紀子	

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所

年		協力調整官	管理部長	管理課長	課長補佐	庶務係長	予算係長	経理係長	企画渉外係長
2001	年報	大塚英明	岡本親宣	白井国明	川柳成巳 (兼)	川柳成巳 (兼)	布野秀雄	篠原和宏	山岸智幸
2002	年報	大塚英明	岡本親宣→ 萩原寿郁	川尻秀行	川柳成巳 (兼)	川柳成巳 (兼)	村岡俊	篠原和宏	渡邊仁之

庶務係事務補佐員		庶務係技能補佐員	会計係技能補佐員		庶務係調査員（非）	会計係事務補佐員	
中村節子／太田有喜子 ／滝澤真由美／小野美佐子			佐々木忠雄		松原美智子	中山ツセ子 ／竹之内たみ	
中村節子／太田有喜子 ／滝澤真由美／東紀子		薄井祥子	遠田由太郎		松原美智子	竹之内たみ	
中村節子／滝澤真由美 ／白井久美子		浅井美由紀	遠田由太郎		松原美智子	菊地廣吉	
中村節子／伊藤百合子 ／白井久美子		浅井美由紀	遠田由太郎		松原美智子	菊地廣吉	
中村節子／伊藤百合子 ／白井久美子		堺良子	遠田由太郎		松原美智子	菊地廣吉	
庶務係事務補佐員		庶務係技能補佐員			庶務係調査員（非）	会計係事務補佐員	
中村節子／内藤百合子 ／勝木なほ子		堺良子			松原美智子	菊地廣吉	
庶務係事務補佐員		庶務係技能補佐員			庶務係調査員（非）	会計係事務補佐員	庶務課国際交流主幹
望月紀子／勝木なほ子		堺良子			松原美智子	菊地廣吉	貴志辰夫
望月紀子／勝木なほ子		堺良子			大江佐知子	菊地廣吉	貴志辰夫
中村節子／武田知子／ 勝木なほ子／鈴木紀枝					大江佐知子	菊地廣吉	貴志辰夫

庶務係事務補佐員	会計係事務補佐員	国際文化財保存修復協力センター企画室長	国際文化財保存修復協力センター企画室係長	国際文化財保存修復協力センター企画室係員	国際文化財保存修復協力センター企画室調査員（非）
武田知子／鈴木紀枝	菊地廣吉	貴志辰夫	松下冬樹	吉野貴子（併任）	大江佐和子
鈴木紀枝／武田知子	菊地廣吉	中島健次	松下冬樹	吉野貴子（併任）	大江佐和子／松原美智子
庶務事務補佐員	労務補佐員	国際文化財保存修復協力センター企画室長	国際文化財保存修復協力センター企画室係長	国際文化財保存修復協力センター企画室係員	国際文化財保存修復協力センター企画室調査員（非）
松本洋子／小林芽生／ 武田知子／中道文子	菊地廣吉	中島健次	松下冬樹	吉野貴子（併任）	大江佐和子／松原美智子
松本洋子／小林芽生／ 竹岡祐子	菊地廣吉	大久保政博	松下冬樹	吉野貴子（併任）	大江佐和子／松原美智子
松本洋子／小林芽生／ 竹岡祐子／堀内朋美	菊地廣吉	大久保政博 →河原脩	山岸智幸	吉野貴子（併任）	松原美智子
岩戸滋子／古川恵子／ 竹岡祐子		河原脩	山岸智幸	吉野貴子（併任）	松原美智子

庶務主任	経理係員	庶務係事務補佐員	予算係事務補佐員	経理係事務補佐員	企画渉外係事務補佐員
森田健一	坂巻信宏	岩戸滋子／古川恵子／ 田口雅代	町井範子／井上さやか	堀内朋美／田島由紀子	
森田健一	坂巻信宏	岩戸滋子／古川恵子／ 田口雅代	町井範子／井上さやか	堀内朋美→川井理恵／ 田島由紀子	橋本佳代子

年		協力調整官	管理部長	管理課長	課長補佐	庶務係長	予算係長	経理係長	企画渉外係長
2003	年報	三浦定俊	萩原寿郁	川尻秀行→ 伊藤義雄	川柳成己	若月雄二	村岡俊	篠原和宏	渡邊仁之
2004	年報	三浦定俊	萩原寿郁	伊藤義雄	池田広美	若月雄二	村岡俊	菊地昌弘	渡邊仁之
2005	年報	三浦定俊	永井義美	伊藤義雄	池田広美	若月雄二	松本康男	菊地昌弘	佐野智典

庶務主任	経理係員	庶務係事務補佐員	予算係事務補佐員	経理係事務補佐員	企画渉外係事務補佐員
	蛭川聖二	田口雅代／緑川明日香 ／小泉朋	町井範子／井上さやか ／神谷顕子	川井理恵	橋本佳代子
	蛭川聖二	安本（緑川）明日香 ／小泉朋／大西加奈子	山内奈菜子／神谷顕子 ／丸山智子	川井理恵	橋本佳代子
	蛭川聖二	安本（緑川）明日香 ／小泉朋／大西加奈子	山内奈菜子／神谷顕子 ／藤田恭平	奥田（市川）麻文	小川美穂

Ⅲ 調査研究

凡 例

- 東京文化財研究所の組織は、現在（2009年10月1日）、管理部、企画情報部、無形文化遺産部、保存修復科学センター、文化遺産国際協力センターから構成されている。本章における各部、センターの研究部門の配列は、独立行政法人国立文化財機構文化財研究所組織規定に基づいた。
- 2007（平成19）年4月1日、美術部と企画情報部が統合し、新たな企画情報部となったが、本章では、記述に関してはその歴史を反映して、2006（平成18）年3月31日の時点での美術部、情報調整室等の名称を使用した。
- 無形文化遺産部は、2006（平成18）年4月1日に芸能部から名称を改めたが、同様の理由から文中では芸能部の名称を使用した。
- 保存修復科学センターは、2007（平成19）年4月1日に、保存科学部と修復技術部が統合して同センターとなったが、同様の理由から文中では保存科学部、修復技術部の名称を使用した。
- 文化遺産国際協力センターは、2006（平成18）年4月1日に国際文化財保存修復協力センターから名を改めたが、同様の理由から文中では発足当初の名称から国際文化財保存修復協力センターの名称までを使用した。
- 各部、センターに関する「調査研究」は、原則として2006（平成18）年3月31日までの内容である。しかしながら、各調査研究の継続性に鑑み、上記の日付以降の記述も部分的に含まれていることをお断わりする。
- 2009（平成21）年10月1日現在の組織、及び各部、センターの業務については、「現況」を参照されたい。

1 企画情報部

2006（平成18）年4月1日に、協力調整官—情報調整室は企画情報部となった。さらに翌2007（平成19）年4月1日に、美術部と統合し現在に至っている。当部は、文化財に関する文献、画像等の資料の収集・蓄積・整理・公開を行い、文化財研究のためのアーカイブを形成するとともに、それらを総合して効果的に外部に発信することに努めている。同時に当研究所の情報システムを管理し、併せて研究所の広報活動を担当している。また、旧美術部が行っていた美術史学の立場に立った文化財研究を継承しつつ、基礎的研究とともに、新しい研究方法の開発、「資料学」の確立などを目指している。

以下、本章では「美術部」、「情報資料部・協力調整官—情報調整室」の2部構成で記述する。まず「美術部」として、1930（昭和5）年に設立された帝国美術院附属美術研究所の時代から、2006（平成18）年3月31日までの75年間に行われた美術史研究を、『東洋美術文献目録』編纂等の資料集成事業を含めて、3節にわたり記すことにする。

ついで「情報資料部・協力調整官—情報調整室」として、美術研究所内における資料担当業務から、美術部資料室、情報資料部、協力調整官—情報調整室まで、各時期に美術史研究者による調査研究と密接に連携、協同しながら進められてきた図書、写真等の資料に関する広範な業務と、近年の情報化の飛躍的な進展の経緯、ならびにデジタル画像形成技術の開発に関する調査研究等について、同じく75年間にわたる歴史を5節にわたり記すことにする。

なお、1977（昭和52）年に情報資料部が開設されてから30年間、美術部と並立した経緯もあり、本章を上記のような2部構成としたが、両部ともに1930年に発足した美術研究所を母体とするものであり、また2部となって以後も美術史研究を核としながら、部員も業務も不即不離の関係にあった。そのため内容に重複する部分もあるが、この点をご了承願いたい。

美術部

はじめに

当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所は、1930（昭和5）年10月に開設した。第1章の「沿革」で詳述されていることだが、この「美術研究所」は、その名称が示すように、わが国で最初の、かつ組織的に「美術」に関する調査研究を行う研究機関として誕生したのである。

そして「美術部」という名称は、当研究所が東京文化財研究所として組織が拡大した1952（昭和27）年に、「芸能部」、「保存科学部」とともに、生まれたものである。ただ、創設以来、一貫して業務の中心は「美術」の研究であり、さらに言えば「美術史」研究が中心であり、それに関連した調査研究を継続し、今日に至っている。

ここで言う調査研究とは、美術に関する個人研究、共同研究を通じて、資料の収集と整理保存、それに基づく「基礎的」な研究と、光学的調査の手法等を積極的に活用し、また従来美術史研究に新たな視点、もしくは課題を提示しながら実践する「先端的」な研究という二つの研究姿勢に基づくものである。その基本的な姿勢は、これまでの諸先学の成果を継承しながら、今日まで継続しており、同時に将来にわたってもこの姿勢を堅持するものである。

そこで「美術研究所」創設から75年後の2006（平成18）年3月まで、「美術研究所」時代における調査研究から、「美術部」となってから今日までの調査研究の概要を、はじめに記すことにする。

美術専門の図書館を兼ねた「美術研究所」の創設にあたっての構想は、「沿革」中で記されているとおりであり、その任にあった矢代幸雄の言葉で明らかにされている。その構想を具体的にするにあたり、開設期から戦中、戦後期にかけての調査研究では、各時期に挙げられた研究課題と密接に関連しながら下記に挙げる基本的な業務事項が計画され、実施されてきた。

- (1) 機関誌『美術研究』の刊行
- (2) 東洋美術総目録編纂事業
- (3) 文献目録編纂
- (4) 光学的手法による調査

- (5) 美術研究資料
- (6) 明治大正美術史編纂事業
- (7) 『日本美術年鑑』刊行
- (8) 研究成果の公開としての展覧会、講演等の開催

これらの事項は、『東京国立文化財研究所 20 年のあゆみ』（1973 年）の美術部の「沿革」に挙げられたものを参照したのであるが、当研究所開設時から現在まで、これらの業務事項との関連をふまえて当部の調査研究の概要を記しておきたい（上記の調査研究と業務の一部は、1977 年に美術部資料室から情報資料部となった同部と共同して遂行したもの、もしくは関連、重複するものがあることを断っておく）。

第一に挙げた『美術研究』は、美術部等の職員を中心に各研究者の専門性に基づく研究成果を公表する刊行物として、論文、図版解説、資料紹介等が毎号掲載され、2006（平成 18）年 3 月までに 388 号を刊行している。同誌は、創刊以来、高い専門性をもった学術誌として継続刊行されており、斯界の研究に寄与するところが少なくないと自負している。2003（平成 15）年度の 380 号からは所内の編集委員に加え、新たに石守謙（国立故宮博物院副院長・国立台湾大学教授）、洪善杓（韓国美術研究所所長・梨花女子大学大学院教授）に海外編集委員を依頼、中国語、韓国語を中心に日本語以外の言語で書かれた東アジア美術に関する原著論文の中から、海外編集委員の推薦する論文を翻訳して随時掲載することで、日本における美術史研究の立場を相対化しながら、今後の研究の可能性を探るよう努めている。

第二の「東洋美術総目録編纂事業」と第三の「文献目録編纂」は、情報資料部との共同の基礎的な、継続的な研究業務であり、美術研究所創設時からの大きな事業としてとらえられていた。「東洋美術総目録編纂事業」については本文でも言及されているが、特に「文献目録編纂」は、1941（昭和 16）年に刊行された『東洋美術文献目録 定期刊行物所載古美術文献』から、2005（平成 17）年に刊行された『日本東洋古美術文献目録 1966～2000 年』まで数度にわたり刊行され、美術史研究の基礎資料として広く活用されている。

第四に挙げた「光学的手法による調査」は、戦前期から着目されながら、設備等の関係から戦後本格的に着手され、1955（昭和 30）年には『光学的方法による古美術品の研究』として、その成果が刊行されている。この光学的な手法は、近年のデジタル技術と画像光学の成果をふまえた研究として、情報調整室から現在の企画情報部の「画像形成技術の開発に関する研究」に引継がれ、より高度な専門性と学術性をもつ研究領域に発展しつつある。

第五の「美術研究資料」とは、重要な美術作品について、質の高い複製を作成、提供する目的で始められたもので、1932(昭和7)年の『美術研究資料第1輯 支那古版画図録』をはじめとして、戦後にわたり各種の画像資料集が当研究所から刊行されてきた。近年でも、先述の情報調整室の「画像形成技術の開発に関する研究」で得られた光学的調査の手法を活用して、2002(平成14)年に『美術研究作品資料1 黒田清輝《智・感・情》』を刊行し、当初の趣旨を継承している。

第六の「明治大正美術史編纂事業」は、本文の「戦前の近代美術研究」で詳述するところであるが、本事業開始以来、収集蓄積された資料は、他機関では求められないものであり、現在まで保存、公開され近代日本美術の研究の基礎資料となっている。その資料を編集して1975(昭和50)年には、『明治美術基礎資料集 内国勸業博覧会・内国絵画共進会(第1、2回)』を刊行した。その後の近代日本美術に関する基礎資料集成刊行は、コンピュータによるデータベース化によってまとめられるようになり、2006(平成18)年刊行の『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』まで続けられている。

なお、近代日本美術の研究では、当研究所創設の礎となった黒田清輝に関する研究も含まれるであろう。黒田清輝研究については、1929(昭和4)年に『黒田清輝作品収蔵目録』刊行を嚆矢とし、その業績を顕彰する意義から始められたが、実証的な研究が進むにつれ、戦前期から戦後、そして今日まで展覧会、画集、日記、著述集等の刊行物、さらにホームページ上での研究成果の公開まで行われるようになり、これほどまでに一人の作家研究が深められている点では他に類例がなく、特筆すべきことである。

第七の『日本美術年鑑』は1936(昭和11)年に創刊されている。やはり本文中でも一項を設けて解説されているが、当該年におこった国内の美術に関する事象の情報を収集編集したもので、美術に関する限り、本年鑑によってのみ同時代の動向を知りえるものとして重要な刊行事業であり、創刊以来61冊目になる『2004(平成16)年版 日本美術年鑑』を2006(平成18)年3月に刊行した。

最後に、第八に挙げた「研究成果の公開としての展覧会、講演等の開催」について記しておきたい。もとより各調査研究は、個人研究の側面が強いものであれば、先述の機関誌『美術研究』において成果を公表し、また共同研究であれば大部な報告書等の刊行として公表してきた。そのほかにも美術部は、後に情報資料部との共同開催となるが、毎年一度、一般にむけて、1966(昭和41)年から「公開学術講座」を開催し、さらに2001(平成13)年から現在まで「オープンレクチャー」として継続、2006(平成18)年には40回を数えている。また、1977(昭和52)年から始められた「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」は、当研究所内の各部、センターが年毎に担当するもの

で、1981（昭和56）年の第5回の同集会を美術部と情報資料部とが担当し、「東アジアにおける美術交流」と題して開催した。近年では2002（平成14）年の第26回にあたり、美術部が担当して「うごく モノ—時間・空間・コンテクスト」を開催した。美術部と情報資料部が担当してきた同国際研究集会では、つねに美術史研究に新たな課題を提示し、斯界の研究者に注目されることとなった。また、同報告書も、一部市販され、多くの研究者をはじめとして、広く読まれてきた。

また、黒田清輝の作品を多く所蔵する当研究所では、1977（昭和52）年以来、当部が担当して、「地域文化の振興に役立つ」ことを目的に、毎年1回、国内各地の美術館等において「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を共催している。黒田記念館においても、新庁舎移転後の改修工事により、展示室が拡張されたことから、研究成果の展示として、たとえば、情報調整室の「画像形成技術の開発に関する研究」との共同研究として「黒田清輝の目—風景・からだ・顔」（会期：2004年6月～11月）を開催し、注目された。また博物館相当施設として博物館学教育に資するべく、首都圏の大学生・大学院生を対象に2005（平成17）年度まで博物館学実習を行っていた。実習は美術部以外の部員も指導に当たり、文化財の調査・研究・保存・修復の各分野の専門家を擁する当研究所の特質を活かしたカリキュラムで実施された。

上記のように当部の調査研究の業務は、「美術研究所」創設当初から各研究者の専門性に基づきながら、論文や講演といった個人研究や基礎資料の編纂や研究集会の開催といった共同研究のかたちをとって進められてきた。ただそうした個人研究にせよ共同研究にせよ、忌憚なく議論を交わし一層の充実を図る研鑽の場となっているのが、月例で行われる部内の研究会である。記録上確認される限りでは1954（昭和29）年以降開催されており、発表テーマに応じて所外の研究者も交えながら、とかく個人単位に終始しがちな部内の調査研究を活性化する場として今日も続けられている。

比較的規模の大きな共同研究については、戦前期においては、他団体、機関等からの助成、寄付金等によって進められ、また戦後は科学研究費補助金、あるいは受託研究費を得て進められた。これは、当研究所の他部においても同様であるが、予算的にも一般研究費に加えて特別研究費が設けられた1968（昭和43）年頃から、一つの研究課題のもとに複数の研究者による共同研究が行われるようになった。この傾向は、1989（平成元）年から、中長期研究計画を策定し、これに基づく調査研究の実施と、あわせて研究成果の外部評価をうけるようになると、つねに組織的な研究が中心となっていった。さらに、独立行政法人化後は、成果進行型の調査研究となり、中期目標・中期計画に基づく研究課題に対して、年度ごとに自己点検評価を行い、外部評価をうけ、計画的に研究成果を

上げることが求められ、またその成果がさらに客観的に評価されるようになった。

以上の概要をもとに、これまで当部において75年間に行われてきた各調査研究について、その課題名及び概要と成果を、戦前期、戦後期、独立行政法人化後の3時期に分けて、以下3章にわたって時代順に記していくことにする。

1 戦前の調査研究 1930（昭和5）年～1945（昭和20）年

「沿革」でも述べられているように、創設当初の美術研究所には、研究を担う部として「編集部」と「資料部」とが置かれていた。1937（昭和12）年から1946（昭和21）年までの文部大臣直轄時代には、「研究第一部」が置かれ、ここに「調査掛」と「編輯掛」があり、「研究第二部」には、「明治大正美術史編纂掛」と「美術年鑑編纂掛」があり、さらに「研究第三部」が置かれた。この「第三部」では、「欧米美術ノ調査及研究」と「欧米ニ於ケル東洋美術研究ニ関スル調査」等にあたることになっていた。その他に、「資料部」と「写真部」が置かれていた。こうした組織の変遷を前提に、本章において戦前における調査研究を記すにあたり、調査研究の実態に則して、大きく二つに分けて記述することにする。一つは、日本東洋に関する「古美術研究」であり、いま一つは西洋美術を含めた日本の「近代美術研究」である。

(1) 戦前の古美術研究

現在の東京文化財研究所の前身である美術研究所は、1930（昭和5）年10月17日に開所式を行ったが、その開所のための準備は、既に1927（昭和2）年2月に始まっていた。黒田清輝の遺産によって計画された事業のうち、美術研究所に関する仕事を託された矢代幸雄は、当時教授として奉職していた東京美術学校（現、東京藝術大学）の自身の研究室において、美術作品の写真の収集とその分類、整理に着手した。その手伝いを、後に美術研究所や京都国立博物館に奉職した白畑よしが務めた。黒田記念館の建物が1928（昭和3）年9月に竣工するとともに、研究所職員は、その建物の中に図書や写真の研究資料を設備し、黒田清輝の作品を陳列して、実質的な美術研究所の活動を開始した。当時の職員には田中喜作、青山新、尾高鮮之助がいた。当時、職員たちが熱意をもって仕事に取り組もうとしていた様子は、1928（昭和3）年6月に、当時28歳であった尾高鮮之助が兄朝雄に宛てた手紙からも充分にうかがえる。

「殊に僕にとつて何より嬉しいのはStaffのいづれもが、実に親しき友である事です。田中氏は四十三、矢代氏は三十九、青山氏は三十二、僕は一番若いのですが、これから我々でしつかりとした研究をつみ、それを世界的に発表して行く事は、確かに愉快な事だと思ひました。」（尾高邦雄編『亡き鮮之助を偲ぶ』1935年3月、非売品）

黒田の遺言の執行人代表である樺山愛輔は、1929（昭和4）年5月に、建物、設備、研究資料に15万円を添えて、帝国美術院長に寄付を申し出た。帝国美術院はそれを受け、翌1930（昭和5）年6月28日に、附属美術研究所を付置した。開所式当初の主事は正木直彦、主任は矢代幸雄であった。開所直後から、一般の研究者たちは、研究所の資料を盛んに利用した。

「五年秋から公開された時には、大抽斗に分類収蔵されたる美術の写真資料の総数は、まだほんの僅かな数万枚にすぎず、ロンドンのウィット・ライブラリーの二、三十万枚に比しては、比較にならないが、それでもその調法さは誰の眼にもよくわかり、学者の利用率は急に上昇した。」（矢代幸雄『私の美術遍歴』、1972年、岩波書店）

矢代の指導のもとに、研究所の仕事は着々と進んだ。尾高鮮之助が、1931（昭和6）年8月10日付けで友人の富永惣一に宛てた手紙には次のように記されている。

「研究所の仕事は着々進んで居る。主任も七月二十六日に帰朝されたのでいそがしくなつて、この秋から出版物も出す計画が進められて居る。これから本式の仕事が出来たらう。美術に関する資料を出来得る限りシステムティックな方法によって集めて、それに基いた研究調査をやつていかねばならない。兎に角研究所と云ふ所は美術の作品を本当によく見て来た人がそれに関する研究をまとめるのに当つて最も便宜な機関となる事を以て使命としなければならぬと思ふ。」（『故 尾高鮮之助君の手紙』ガリ版刷り、発行年不詳）

1931（昭和6）年11月25日に正木直彦が帝国美術院長に転じたために、矢代幸雄が主事となった。

1935（昭和10）年に美術研究所官制が公布され、1年間、東京美術学校長の和田英作が所長事務を務めた後、1936（昭和11）年6月から矢代幸雄が所長となった。1937（昭和12）年6月24日にさらに官制が改正され、文部大臣が美術研究所を直轄することになった。

美術研究所の調査や研究に関わる事業は、矢代幸雄が構想したものである。その構想のあらましと、彼がその実現に向けて傾けた情熱については、『美術研究』創刊号（1932年1月）に掲載された矢代幸雄「美術研究所の設立と『美術研究』の発刊」や、矢代幸雄著『私の美術遍歴』に詳しく述べられている。美術研究所が行うべき事業の概要は、開所後約7年余を経た1938（昭和13）年1月に発行された『美術研究所一覧』に記載された「事業概要」によれば、以下の通りである。

事業概要

美術研究所ガ行フ事業ハ大要左ノ如シ。

- 一 研究資料ノ蒐集製作及整備
- 二 調査研究
- 三 編纂及出版
- 四 閲覧展覽及講演
- 五 美術上ノ国際連絡

一 研究資料ノ蒐集製作及整備

内外ノ美術ニ関スル研究資料ヲ蒐集及製作シ之ヲ整備スルコトハ調査及研究ノ基礎タルヲ以テ、本研究所ノ最モ努力スルトコロナリ。研究資料ノ主ナル種類ヲ挙グルコト左ノ如シ。

- 一 美術品ノ写真其他複製類
右ノ内、写真ハ近代的研究ノ基礎資料ヲナスヲ以テ銳意之ガ充実ヲ計リツツアリ
- 二 模写模造其他標本類
- 三 図書雑誌目録其他文書類
- 四 美術ノ材料類

二 調査研究

調査研究ハ美術ニ関スル諸般ノ事項ニ亘ルヲ以テ其ノ範圍極メテ廣ク、且ツ時勢ノ必要ニ応ジテ隨時新項目ヲ加フベキ予定ナリト雖モ、我国目下ノ事情ニ鑑ミ適切緊急ナリト認メ、既ニ着手シ又ハ着手セントスル調査研究概ネ左ノ如シ。

- 一 東洋古美術ニ関スル調査研究
- 二 日本近代及現代美術ニ関スル調査研究
- 三 欧米美術ニ関スル調査研究
- 四 海外ニ於ケル東洋美術研究ノ趨勢ニ関スル調査
- 五 美術行政及教育ニ関スル調査研究
- 六 技法及材料ニ関スル調査研究

三 編纂及出版

編纂及出版ハ前記調査研究ニ伴ヒ進捗セシムヘキモノニシテ現在着手シツツアル編纂及出版項目左ノ如シ。

- 一 東洋古美術ニ関スルモノ
イ 「東洋美術総目録」ノ編纂

- ロ 落款印譜ノ編纂
- ハ 東洋美術家辞典ノ編纂
- ニ 美術関係史料ノ編纂
- 二 近代及現代美術ニ関スルモノ
 - イ 「明治大正美術史」ノ編纂
 - ロ 「日本美術年鑑」ノ編纂及出版
毎年一回本邦美術界ノ全般ニ亘ル情勢ヲ調査シ之ヲ編纂出版スルモノトシ、昭和十一年ヨリ之ヲ実施ス
- 三 美術関係文献目録ノ編纂
- 四 イ 「美術研究」ノ編纂及出版
主トシテ東洋美術ニ関スル研究業績、内外ノ報道、新資料紹介史料文献等ヲ掲載シテ、美術研究所ノ東洋美術研究ニ関スル定期的報告機関ヲナスモノトス、昭和七年一月ヨリ発行シテ現在第七十二号ニ及ブ
 - ロ 美術研究資料並報告ノ編纂及出版 美術研究上枢要ナル資料ヲ集成出版シ又ハ特殊ナル項目ニ就キ調査ノ完成シタルモノヲ逐次編纂シ、不定期ニ出版スルモノトス。現在迄ニ研究資料計五輯ヲ発行シタリ。
 - ハ 日本美術資料ノ編纂及出版
美術其他一般教育上ニ資センガ為日本美術各時代ノ代表的作品ヲ主トシテ原色ニ複製シ之ニ解説ヲ加ヘテ出版スルモノトシ昭和十二年度ヨリ実施ス。

四 閲覧展覽及講演

一 閲覧

美術研究所ノ蒐集スル研究資料ハ研究上貴重ナル蒐集ヲ形成スベキヲ以テ、美術研究所ハ之ヲ一般研究者ノ為ニモ公開シテ其研究ニ利用セシメンコトヲ努ム、之ガ為ニ研究資料閲覧規程ヲ定メ閲覧室ヲ設備シタリ。

二 展覽

- イ 黒田子爵記念室ニハ故子爵黒田清輝ノ遺作油絵二三七点、素描一六八点、写生帖二〇冊、画稿類七五点其他ヲ収蔵ス、コノ中適宜陳列換ヲ行ヒテ定時公開ス。
- ロ 陳列室ニ於テハ隨時研究のナル小展覽ヲ行ヒテ研究者ノ観覧ニ供シ、又毎年数回公開展覽会ヲ開催ス。

三 講演

講演ハ美術ニ関シ適當ナル講演者及題目ヲ選定シテ隨時之ヲ開催ス。

五 美術上ノ国際連絡

美術研究所ハ海外ニ於ケル美術上ノ情報ヲ蒐メ、内外連絡ノ便多キヲ以テ、海外ニ於ケル日本美術ノ理解ヲ進メ其ノ世界的進出ノ機運ヲ助成スルコトニ努ム。美術研究所出版物ハ月刊「美術研究」ヲ初メトシテ、欧文解説ヲ添付スルヲ本則トシ、以テ研究上ノ国際協力及連絡ニ寄与ス。

これらの事業概要は、開所当時の事業計画と大きく変わるものではないが、編纂出版事業などに新たな計画が加わっている。以下において、それぞれの項目を、もう少し詳細に概観することとする。

一 研究資料の収集、制作及び整備

美術研究所は、ロンドンのウィット・ライブラリーの写真資料収集や、ニューヨークのフリック・ギャラリー（Frick Gallery）に隣接するアート・レファランス・ライブラリー（Art Reference Library）の写真資料収集の例に倣って構想された「写真資料蒐集を根幹とする一種の美術図書館」（矢代幸雄『私の美術遍歴』）である。内外の美術に関する研究資料を収集、作成、整備することは、調査研究の基礎であるため、美術研究所が最も力を注いだ仕事である。とりわけ、東洋の古美術、日本の近代及び現代の美術、そしてこれらに関連する西洋美術について、研究資料としての写真資料を作成、収集、整備することに努めた。写真資料については、自ら制作したもののみならず、印刷物などの複製類も加え、それらをカード化し、分類整理して充実を計っている。図書、雑誌、目録やその他の文書類についても、積極的に収集、整理、管理、活用を行った。古社寺保存会委員の中川忠順が収集した東洋美術に関する図書を購入し、また売立目録を積極的に収集するなど、開所前から図書資料の積極的な収集に努めている。

「美術図書の蒐集も、研究所の創設日尚は浅きが故に、未だ充分とは行かず、目下その補給に腐心して居るのであるが、然し既に相当に基本的材料の集まって居ることは事実である。特に故古社寺保存会委員中川忠順氏が蒐集秘蔵せられたる図書標本全部を美術研究所が引受けることの出来たのは、単に東洋美術に関するこの一世の碩学を記念する為めに有意義であつたばかりでなく、美術研究所としても、大震災後、美術図書の発見購入の非常に困難になりたる今日、幸ひに、得難き資料を所蔵することになった訳である。而してまた別に、美術研究所が苦心して蒐集して居る図書類として特色あるものに、売立目録類のあることを紹介して置き度い。売立目録が民間に移動する美術品の貴重なる記録であり、特に価格表が之に附随する時には経済史的資料として最も興味あるもので、この事情は、英国のグリープス

その他各国の人々が、売立目録に関する大集成を、国別に年鑑的に出版して居るのでも解る。」
(矢代幸雄「美術研究所の設立と『美術研究』の発刊」『美術研究』創刊号、1932年1月)

その他には、模写、模造、標本類、美術の材料類なども収集した。資料の収集・整理・保管・公開をめぐる具体的な経緯については、次の情報資料部・協力調整官・情報調整室の項を参照されたい。

二 調査研究

当時、美術研究所が行うべき適切な調査研究、かつ緊急に行うべきであると認められた調査研究は、東洋古美術に関する調査研究、日本近代及び現代美術に関する調査研究、欧米美術に関する調査研究、海外における東洋美術研究の趨勢に関する調査、美術行政及び教育に関する調査研究、技法及び材料に関する調査研究、根本的な文献史料の搜索や集成などであった。それぞれの項目は、上記の研究資料の収集、作成、整備と密接に関わっている。現在、欧米美術に関する研究こそ、日本の近代や現代の美術に関わるものに限定して行っているが、他の事業は今もなお継続して行っている。

また、発足以来の調査研究の一つに、材料、技術等に関する研究、あるいは保存処置などの研究も含まれていたが、設備等の関係もあって、積極的に進め得なかった。1932(昭和7)年頃より、古美術品鑑識の方法として、光学的方法を、当時の写真部を中心に、設備などが整わぬままに試みた。以来、時に応じて、赤外線、紫外線、X線等による実験、研究を行った。1937(昭和12)年には『美術研究』72号にその結果が報告され、この種の方法が東洋美術に対しても有効であると認められるようになっていたが、戦争のために中断を余儀なくされた。

戦前期においても海外への調査旅行は積極的に行われた。中国・朝鮮半島における主な調査旅行は以下の通りである。

1929(昭和4)年9～11月、慶尚北道商品陳列所展観で、工芸品などを中心に調査。

1930(昭和5)年11～12月、尾高鯨之助による朝鮮半島の遺跡及び古美術品等の調査。尾高は京城の李王家博物館や総督府博物館での調査や、平壤での古蹟や発掘現場の見学を経て、旅順まで足を延ばし、旅順関東庁博物館で太谷探検隊による中央アジアの発掘品を目にしている(『亡き鯨之助を偲ぶ』279～290頁)。

同時期の日本人研究者による中国・朝鮮調査では、関野貞によりほぼ毎年行われた朝鮮古蹟調査・中国建築及び陵墓調査、水野清一を中心として1938(昭和8)年から1945(昭和20)年にかけて行われた京都大学の雲崗石窟の考古学的調査がある。関野は1930(昭

和5)年より美術研究所嘱託に任ぜられている。1934(昭和9)年12月15日の美術懇話会(同会の活動については、本書「関連資料」中の「美術懇話会」参照)では、同年9月の中国遼金建築及び熱河調査に関連した幻燈板上映、講演「熱河、興安両省における遼金古蹟に関して」、及び同行調査した竹島工学士撮影の16mmフィルムの上映を行っている(関野貞・竹島卓一『遼金時代ノ建築ト其仏像』、東方文化学院東京研究所、1934年)。

これら中国・朝鮮半島における調査は、各個人研究などでは一部発表されたものの(正木篤三が1941年9月30日に精神文化研究所に移ってのち、講義や講演などで「大東亜芸術政策」を扱った例がみられる)、戦争の激化による中断もあり、まとまった形での研究成果発表には至らなかった。

一方その他のアジア諸地域についても、青山(和田)新と尾高鮮之助が調査旅行を行っている。青山は財団法人啓明会の援助を受け、1929(昭和4)年9月から翌年5月まで、西アジア美術研究のためヨーロッパ、ソ連、中東地域、エジプト、トルコなどを訪れた。最も力を注いだのはイランでの調査・撮影で、その成果は『美術研究』創刊号(1932年1月)及び3号(1932年3月)掲載の論考「ターク・イ・ブスターンの彫刻」として発表、その後単著『イーラーン芸術遺跡』(美術書院、1945年)として刊行された(その折の撮影記録については、『資料編』「和田新調査撮影記録」609～615頁参照)。

青山と競い合うかのように、尾高鮮之助は1931(昭和6)年10月16日から翌年10月14日まで文部省在外研究員として東南アジア、インド、パキスタン、アフガニスタン、エジプト、ヨーロッパなどを訪れた。とくにアフガニスタンのバーミヤン石窟では日本人研究者として初めて踏査を行うなど、日本における東洋美術研究に新たな一歩をもたらした(口絵掲載)。しかし尾高は帰国後間もない1933(昭和8)年3月23日に急逝、調査旅行の成果は没後の1939(昭和14)年に『印度日記』(刀江書院)や『美術研究資料』第7輯「印度及南部アジア美術資料」(美術研究所)として公刊された(この尾高の調査については、『資料編』「尾高鮮之助調査撮影記録」616～634頁、及び本書239～240頁参照)。

三 編纂及び出版

調査研究の進捗に伴って、以下の出版が企画された。東洋美術に関するものは、東洋美術総目録の編纂、落款・印譜の編纂、東洋美術家辞典の編纂、美術関係史料の編纂、図版目録の作成等である。現在の時点から見れば、これらの企画が当初の構想通りに十全に実現したとは言いが、各事業においてしかるべき成果を上げ得たことは否定出来ない。

東洋美術総目録編纂事業は、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュー

ジウム (Victoria and Albert Museum) のナショナル・アート・ライブラリー (The National Art Library) の題目別目録や、ウィット・ライブラリーの写真ファイルから発想を得た矢代の提唱で計画されたもので、設立当初より着手しており、正木直彦が事業遂行のバックアップを務めた。正木は、開所以前の1928(昭和3)年6月に編纂事業の一つである文献目録編纂について、帝国図書館長松本喜一に便宜を図るよう依頼しており、まだ整理された状態ではないものの事業計画は動き出していた。

編纂方式については1931(昭和6)年8月31日より渡邊一が専任担当者となり、所員間で何回も検討を行った模様で、各自の私案や草稿が残っている。概要は以下のとおりである。

1. 作品カード 一作家ごとに作品を網羅してカード化する
2. 史料収録 作家に関する根本史料を抜粋整理し、加えて作家伝をまとめる
3. 文献目録 明治以降の図書及び雑誌に掲載された文献を列挙する
4. 年表 作成に足る史料がある作家については作成する
5. 落款及印章 旧来の印譜だけでなく、新たに撮影する作品から収集する

このうち東洋美術総目録事業の主体である作品カードの作成については、情報資料部の243頁を参照されたい。これら一連の調査が完了すると、担当者は資料を論考にまとめ、史料、落款及印章、図版索引、文献、補遺をあわせて綴じた。

画家別のファイルの場合は、未定稿を含めて、以下25名分の画家の資料がまとめられた。

栄賀付松谿、応挙、皐山、勝以、吉山明兆、玉畹梵芳、乾山、光琳、周文、祥啓、昭乗宗達、大雅、為恭、竹田、椿山、等伯、蕪村、文晁、抱一、法常、正信、元信、師宣、友松

専任の渡邊は、業務遂行に非常に厳密で、担当者に進捗状況の報告を毎月提出することを義務づけた。その邁進ぶりに、「タンク」(=戦車)という渾名がつけられたという。そしてその補佐として活躍したのは、美術研究所開所以前より矢代幸雄のもとで美術写真の収集・整理を手伝っていた白畑よしであった。矢代幸雄『私の美術遍歴』によれば、次第に、所員が基礎的な整理作業より個々の研究へと比重を移すに従い、計画は中断に近いものとなるなか、渡邊は一人黙々と作業を続けた。『美術研究』には東洋美術総目録の名称がついた論考が8編あるが、そのいずれもが渡邊の担当した項目であった(「黙菴靈淵 東洋美術総目録1」『美術研究』70、「無等周位 東洋美術総目録2」同75、「如拙 東洋美術総目録3」同77、「文清 東洋美術総目録4」同77、「周文 東洋美術総目録5」同80、「秀文 東洋美術総目録6」同83、「靈彩 東洋美術総目録7」同87。渡邊は東洋美術総目録8

として「狩野正信」、その他未定稿として、「榮賀付松谿」〈図版索引未〉、「可翁・良詮」、「吉山明兆」〈図版索引未〉〔図1〕、「玉畹梵芳」〈図版索引未〉を提出。「狩野正信」は、戦後141号に掲載）。これらは矢代幸雄の「東洋美術総目録事業に就て」〔『美術研究』70〕でも断わってい



1 東洋美術総目録の「吉山明兆」草稿

るように、作品のカード式整理を主体とした同事業の総体を成すものではないが、各作家に関する史料を集成した基礎文献として、後の研究に大きく資することとなるのである。

1939（昭和14）年6月25日付の中外商業新報には「〔東洋美術総目録〕第一期事業として足利以降の水墨画総目録約4万枚を完成、近く附属的な諸調査をまとめて出版することになった」との紹介記事が載った。これは、単行本化が計画されていたが、責任者である渡邊は1940（昭和15）年応召し、1944（昭和19）年に戦死したため実現に至らなかったと思われる。

1948（昭和23）年、かつての同僚達により東洋美術総目録全8編をまとめた渡邊の遺稿集『東山水墨画の研究』（座右宝刊行会、1948年）が刊行され、その年の毎日出版文化賞を受賞した。また仏画担当としても、多くの論文を美術研究誌上に発表していることから、それらも加えて1985（昭和60）年には、『東山水墨画の研究 増補版』（中央公論美術出版、1985年）が刊行された。また辻惟雄は、連載した「狩野元信（一）～（五）」〔『美術研究』246・249・270・271・272、1967年3・10月・1971年11・12月1971年3月〕の凡例で、渡邊の東洋美術総目録の形式を踏襲したと記している。スタイルは異なるが、菅沼貞三が後年刊行した『崋山の研究』は、東洋美術総目録編纂の成果の一つであろう。

開所後数年を経て、さらに資料の整備が進み、調査研究が進展するに伴い、美術研究所は、美術の研究の手法やその成果において、基礎的かつ先駆的な役割を果たすに至った。これらの調査研究の成果を発表するために、『美術関係文献目録』の編纂、『美術研究』の編纂と刊行、『美術研究資料』の編纂と刊行、『日本美術資料』の編纂と次々に出版が構想された。

日本東洋美術に関する文献採録事業は、現在も企画情報部の主要業務であるが、開所当時は、新着の雑誌に掲載された古美術文献を採録していた。1932（昭和7）年7月には、最初の文献目録「東洋美術研究文献目録 昭和6年」を『美術研究』7号に掲載し、そ

の後1936(昭和11)年度分までを計6回を『美術研究』(19・31・43・57・67)に掲載した。この頃は英・仏・独語で書かれた外国語文献や、単行図書も採録対象としていた。1936(昭和11)年から毎年『日本美術年鑑』を発刊するようになると、古美術・近現代美術ともに同書へ文献目録の掲載を始めることとなった。

古美術文献は、画報社や朝日新聞社刊行の『日本美術年鑑』にも掲載されていたが、まとまった目録はなかったため、明治期から、『日本美術年鑑』刊行前にあたる1935(昭和10)年までの逐次刊行物(一部の図書を含む)を対象とした文献採録を開始した。未所蔵雑誌は他の機関(帝国図書館、大橋図書館、慶應義塾図書館、大正大学図書館、東京美術学校文庫、京都府立図書館、大谷大学図書館、龍谷大学図書館)へ出向き採録作業を行った。豊岡益人を主任として、林真彦、久野真自を中心に、杉田益次郎、白畑よし、斎木秀子、佐原敦子、飯村艶子らが従事し約6年の歳月をかけ、1941(昭和16)年12月、549種約3万件的の東洋古美術に関する日本語文献を収録した『東洋美術文献目録』を刊行した。本書には利用者の便を図るため、採録対象誌のうち287種について所蔵先を明記した「定期刊行物調査表」を付録としてつけた。なお本書は戦時の出版で入手困難な状況が続いたため、1967(昭和42)年に再版された。

戦局が深刻化するにつれて、用紙統制や言論統制が厳しさをまし、美術雑誌の統廃合もかなりの頻度で行われ、採録対象誌も『東洋美術文献目録』編纂時代のおよそ3分の1に減ったが、文献採録は続けられた。しかし編集を終えた『日本美術年鑑 昭和18年度版』は戦災で組版を焼失し、戦後まで刊行を中断せざるを得なかった。

定期刊行物である『美術研究』は、1932(昭和7)年1月に機関誌として創刊した〔図2〕。所内の研究員を中心に、論文、研究資料、史料の校刊、図版解説等を古美術・近代美術



2 『美術研究』創刊号表紙

の別なく掲載し、今日もなお刊行を継続している『美術研究』は、創刊号掲載の矢代幸雄「美術研究の設立と『美術研究』の発刊」によれば、後述する『美術研究資料』が単行本の形で不定期に出版されるのに対し、「美術研究所の時報にして、美術研究所機能全部の経常的報告」を旨とするものであった。今日では『日本美術年鑑』に採録される古美術文献目録が当初『美術研究』に掲載され、また東洋美術総目録事業の一環として、渡邊一の東山水墨画に関する論考が同誌に連載されたことは既に見たとおりである。また同時に矢代の発刊の辞は、『美術研究』が外部の研究論文をも登

載しながら「兎角沈黙勝なる我が美術研究界に、自由討究の気運を醸成し、潑瀾たる新研究の出現を促して、我が東洋美術の製作鑑賞並びに世界的理解を進むる上に、新生命を鼓吹する」学術発表の場である、という根本方針を掲げていた。そのような真摯な姿勢は当然所員にも求められたのであり、隈元謙次郎の回想によれば、研究所の公刊物以外の執筆は一切禁じられ、「そんな時間があったら研究に励み、『美術研究』に発表し給え」と言われるのが常であった（隈元謙次郎「矢代先生を偲ぶ—先生と美術研究所」『日伊文化研究』14、1976年3月）という。所員も互いに切磋琢磨し、矢代の求めによく応えていたようだ。矢代の鞭撻に続けて、隈元の回想は同僚であった渡邊一との交わりを次のように伝えている。

「私自身にとっても、渡辺君は再び得がたい学友であり親友であった。約十年足らずの交際であったが、夜を徹して飲み、学問を語り、はげまし合ったことがしばしばであった。殊に、彼が東山水墨画の研究にはげみ、私が明治初期に來日したイタリア美術家の調査に熱中している頃は、毎夜のように研究所の帰途近くの居酒屋に立ち寄り、お互いの鞆の中の論文草稿を見せ合って、論議したが、「おい、貴様のやりかけの論文を見せろ」と、先ず切り出すのは彼であった。」

なお『美術研究』の体裁について、脇本楽之軒は1889（明治22）年創刊の美術雑誌『国華』に比肩する大きさ、美装、リボン綴じに倣うことを主張したが、矢代幸雄の案により現行の白表紙、サイズに決まり、いかにも名残惜しそうだったという（丸尾彰三郎・藤岡由夫・泉宏尚『脇本楽之軒の小伝と追憶』風涛社、1971年、123頁）。

『美術研究資料』は単行の図書の形で公表するもので、特定の作品あるいは作品群について、豊富な図版を中心に構成された研究資料として編集された。また、海外にある東洋絵画の優品の複製などもこのシリーズに含まれ、貴重な研究資料を提供した。前者の代表としては、1935（昭和10）年頃から行った桃山時代障屏画、鳳凰堂の雲中供養仏の調査研究があり、それぞれの成果を、『美術研究資料第5輯 桃山時代金碧障壁画』（1937年）、『美術研究資料第4輯 鳳凰堂雲中供養仏』（1936年）として刊行した。後者の代表としては、『伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖』（1939年）などがある。1932（昭和7）年より1941（昭和16）年まではほぼ毎年刊行し、その後は、1943（昭和18）年と1949（昭和24）年に刊行し、合計で12冊を刊行した（口絵掲載）。

とくに美術研究資料第8輯として刊行された『伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖』が扱う「光悦色紙」（36枚）は京都の福田浅次郎旧蔵で、1908（明治41）年にベルリン国立博物館（Staatliche Museen zu Berlin）の所蔵となった。矢代は国内の研究者のために以

前から作品の写真を、ベルリンのオットー・キュンメル (Otto Kummel) 館長に依頼しており、「日本古美術展覧会」(1939年2月ベルリンで開催)の打ち合わせのため、1936(昭和11)年に来日したキュンメルが写真を持参した。日本古美術展覧会については、日本国内でも関連行事が行われ矢代も講演をしているが、このとき持参した写真を末延財団の補助金によって美術資料として150冊公刊したもので、矢代は『美術研究』でも論文を発表している(「伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖」『美術研究』85、1939年1月)。

また尾高鮮之助が1931(昭和6)年、美術の研究を目的として、東南アジア、インド、パキスタン、アフガニスタン、スリランカなどを訪れた際に作成した写真資料も、『美術研究資料第7輯 印度及南部アジア美術資料』(1939年)として刊行されている。1933(昭和8)年3月23日に肺炎のために33歳で亡くなった彼の七回忌に合わせての出版となったが、矢代が「序」に記した言葉は、公的な刊行物であるためか、冷静である。

「この写真集には、個々の遺品についての厳密な学術的な選択や、美術史的配列などはなされていない。一人の若い研究者が、所在に於て興味と注意とをひかれたものを、旅行した大体の道順に従って配列した程度にとゞまるのである。その意味で印度及び南部アジア美術資料として、完備したものでないことはこゝに断っておく必要があらう。それにも拘わらずこれを出版する理由は、その豊富な素材としての利用価値が、決して少くないことを信ずるからである。」(矢代幸雄「序」、『美術研究資料第7輯 印度及南部アジア美術資料』)

しかし、同じく七回忌の折に、親族によって刊行された『印度日記』の方には、極めて情のこもった言葉を寄せている。

「最後に、研究者としての尾高君を述べたいのであるが、それは大成を期して、小まとまりにまとめて行く流儀でなく、また余の奨励もさういふ方向に在つたから、総てが文字通りの夭折に畢り、若竹が雪に折れたやうな愛惜の情を催すやうな未完成であつた。(中略)彼は最後には、「美術研究」に支那仏教彫刻のことなどを書いて、彼の興味の方向を示し、そしていよいよ印度支那・ジャヴァ・印度・アフガニスタン等に大旅行を果して、仏教美術の源流から東西文化交流、次いで最も大物の支那といふ工合に研究を進めて行く心算であつたらしく、研究所に於ても此方面の専門家に欠いて居るので、特に嘱望されたのであつたが、不幸にして雄図半ばに死んで了つた。無常迅速、是ればかりは仕方ないと思ふけれども、惜しみてもお余りがある。」(矢代幸雄「尾高君の追憶—序に代へて—」尾高鮮之助『印度日記—仏教美術の源流を訪ねて—』刀江書院、1939年)

先に引用した尾高の言葉に見られる職場への期待感、高揚感と、志半ばで逝った職員に対する矢代の労りの言葉を対置させると、職員たちがまさに心をつにして、新しい仕事に共同で邁進していたことが素直に伝わってくる。

その他、日本美術の優品を紹介することを目的に、1938（昭和13）年から1942（昭和17）年までの毎年、『日本美術資料』を5冊刊行した。毎冊20作程度の日本美術の「優品」のカラー図版（2図以上掲載される作品に関しては2図目以降、モノクロ図版が用いられる）に解説を付したものである。第1輯は絵画のみ、2輯以降は彫刻、工芸、染織等が数点ずつ加わるが、掲載作品の大半は絵画作品である。時代は正倉院御物から狩野芳崖、菱田春草、黒田清輝まで、主題・ジャンルも幅広く採られている。ただし、今日の「日本美術史」の語りに比べ、全体に近世文人画が多いような印象も受けるが、作品の選択にどのような判断基準があったのかは不明である（掲載作品一覧については、本書「関連資料」中の「東洋美術国際研究会」452～453頁参照）。

本書刊行の目的を、矢代幸雄は序文の中で「永年に互つて日本美術の優品を網羅し、能ふ限り精確にして信頼し得る複製を弘く世に頒ち、日本美術に関する一般的教養を増進せんことを以て目的とする」と述べている。また、「国史の精華に触れ、国民精神の涵養に資する」美術を「時代の要求に従つて一般社会にその向ふ所を知らしむる目的」をもって出された本書は、「専門的に偏倚することを避けて美術一般の立場より日本美術の特色を闡明することを主眼」としたとも述べている。

本書の最終輯となった第5輯の序には、例年通り「今後毎年一輯宛之を刊行する予定であり」と記されている。第1輯から4輯まで、本書は1冊2円5銭、組価で14円（5輯ではそれぞれ3円、18円）の定価が表示されることから、少なくとも第6輯までは刊行を予定していたと考えられる。また、『美術研究所昭和十八年度概算書』他、同年度の予算書には「日本美術資料編纂拡充」の項目が立てられ、1942（昭和17）年度の段階では、掲載作品を年間60点に拡大した新『日本美術資料』の編集が目指されたようだが、以後本書が刊行されることはなかった。この「昭和十八年度概算書」には、「時代ノ欲求及趨勢ニ鑑ミ本資料ノ一部ヲ以テ参照資料トシテ大陸美術ノ紹介ヲ併セ行フベキ学的必要ヲ生ジタリ」という興味深い一文が確認でき、実際には刊行されなかったものの、「大陸」美術へと対象を拡大して美術資料を編むという構想が美術研究所内でもたれていたことは留意されてよい（後述の『東洋美術資料』〈英訳本『日本美術資料』〉の細川護立による「英語版のための序」にも、大陸美術の資料集編纂が研究所内で持ち上がっているとの言及がある。446～447頁）。

さて、本書は第1～4輯までは毎年3月付で刊行されているのに対し、第5輯は1942（昭

和17)年11月刊行、矢代の序文も例年の3月付とは異なり5月付となっている。本書第1輯から4輯までの編集と解説執筆は所員の正木篤三が当たったが、第5輯に関しては、「所内職員をして分担せしめ、監修は余〔矢代〕自ら之に当つた」と記されるように、編集方針に変更があったと知られる。この点で興味深いのは、当研究所内の人事の問題である。本書編集に携わった正木は同年5月に、また矢代は同年6月に当研究所を退職しており、両者の退職と本書の刊行とは何らかの関係があったと推察されようか。なお、第5輯にて解説を担当したのは、豊岡益人、大串純夫、梅津次郎、小高根太郎、菅沼貞三、石澤正男であり、正木も一作品(為恭筆鏡売図)のみ解説を付している。

なお『日本美術資料』は1941(昭和16)年から1944(昭和19)年にわたり、その英訳が“Masterpieces of Eastern Art”(『東洋美術資料』)として、東洋美術国際研究会から刊行された(この英訳書については、445～451頁参照)。

四 閲覧、展観及び講演

蓄積した写真、図書資料などを一般研究者に対して公開する閲覧事業も早くから行った。資料室を設け、資料閲覧規定を定めて公開したが、研究者、美術関係者、学生など、資料室を利用するものは多く、海外から当研究所を目ざして留学して来るものもあった。なお、閲覧については情報資料部の項で後述することにする。設立目的の一つであった黒田清輝の作品を陳列し、彼の功績を顕彰する事業として、黒田記念室において、黒田家やその他から寄贈された作品及び関係資料を陳列し、毎週木曜日に一般公開した。また、同記念館2階の陳列室においても、小展覧や公開展覧会を開催し、その折には展観目録を公刊した。講演会は随時開催した。

開所から戦前期における同記念室の公開について、ここで記録しておきたい人物がいる。それは、嘱託として公開業務を担当していた大給近清である〔図3〕。大給は、1926(昭和2)年に設置された「美術研究所設立準備委員会」における、「黒田子爵作品陳列」の実行委員の一人であった。大給は、子爵^{おぎゅう}大給近道の次男であり、東京美術学校西洋画科の出身で、卒業後黒田清輝の異母妹^{すみ}純と結婚していた。したがって大給の言葉によれば、「私に取つて黒田先生は、半分は先生であつて半分は義理の兄であると云ふ訳であつたが、私は実の兄以上の思ひをしてをつたのである」(『黒田先生の嗜好』『国民美術』1-9、1924年9月)という関係であった。黒田の生前から図4に挙げた戯画による「はがき」を交換するほど、頻繁に、そして親しく交際していた。設立時からの職員であった白畑よしは、「大給さん、とってもいい人で、何でも話してくれるんですよ。随分親切に教えてくださいました。すごくまじめないい方で、忘れられない人です。いつも袴



3 大給近清「自画像」

4 黒田清輝より大給近清宛はがき
(1921年12月1日付)

蘭俄鬼若菜野手堀公舌辛
一升雞目乳画緒飾五片事
差上双轡
(ハガキワカナイノデヘ
イコウシタカラ イッショ
ウケンメ チエラフルイ
ゴヘンジ サシアゲソウ
ロー)

をきちんとはいてね。背の高い、風貌が立派な方だった」と回想している（白畑の言葉は、1996年に行われたインタビューによるものである）。そうした人物が、自らの創作活動をつづける中、毎週木曜日に研究所を訪れ、記念室公開にあたっていた。大給の黒田清輝に対する敬愛の念から、晩年まで記念室公開と作品の管理にあたっていたという。

ここで美術研究所における展覧の一例として、1939（昭和14）年に行われた「阿部幸次郎氏所蔵支那絵画展覧」の経緯を見てみよう。1938（昭和13）年8月、元東京美術学校校長の正木直彦は、東洋紡の阿部幸次郎より、中国絵画のコレクターとして著名だった父房次郎の遺言による、東京帝室博物館への所蔵作品寄贈の意向を聞き、博物館への仲介を買って出た。11月に作品は調査を兼ねて当研究所で預かることとなった。美術研究所では、1939（昭和14）年2月以降に調査が行われた。

その後、一括受入を希望する阿部家と部分的な受入を希望する博物館とで調整がつかず、1939（昭和14）年6月に寄贈は取りやめとなった。しかし蒐集品のうち最も代表的な34点を選び、1939（昭和14）年11月11日美術研究所で「阿部幸次郎氏所蔵支那絵画展覧」を行った。美術懇話会及び一般に公開したもので、「五星二十八宿真形図巻」、「伏生授経図」等現存中国絵画中有数の遺品をはじめ、宋元明清各時代における代表的な画家の名品が陳列された。その後作品は1943（昭和18）年に大阪市立美術館に収蔵され、「阿部コレクション」は、我が国でも有数な中国絵画コレクションとなった（『阿部房次郎氏寄贈 中国絵画目録』、大阪市立美術館、1953年）。なお大阪へ発送する直前の1943（昭和18）年1月にも展示を行った。

美術研究所における展観・講演に関して、大きな役割を果たしたのが1931（昭和6）年11月に設立された美術懇話会である。これは、美術や文化を愛好する人々による民間の友好団体であるが、社会における美術の理解と普及を計るのを目的に、毎月例会を開催して、展観と講話を行った。会費は5円であった。同会は当研究所の組織ではないが、その活動は、美術の奨励を事業の目的とする美術研究所の活動趣旨に添い、理事長や理事を当研究所の関係者が務めたことから、初期には、展観と講話は美術研究所で行われた。展観のための作品調査や写真撮影を研究所職員が行った例も多く、美術研究所と美術懇話会とは、互いにその事業を援け合った。出版事業にも共同で携わったこともある。

五 美術上の国際連絡

美術研究所は、海外における美術情報を収集するとともに、海外における日本美術の理解の促進に努めた。また、1940（昭和15）年12月に、文部省と外務省の後援のもとに、世界における日本及び東洋美術の研究を推進し、美術上の国際連絡、協力を計ることを趣旨として、東洋美術国際研究会が設けられたが、美術研究所内にこの事務局が置かれた。外国人のための展覧会、講演会、出版、海外機関との連絡などの事業を行った。

こうして戦前の事業を概観すると、戦後の美術部を経て今日の企画情報部が行っている研究や事業のほとんどが、美術研究所創設当時に企画されたものであることがわかる。なお調査研究に際しては、啓明会、末延財団、雨潤会といった団体からの助成も得ていた（「情報資料部」234頁参照）。東洋美術総目録事業について言えば、1929（昭和4）年4月には同事業への補助を啓明会へ要請し、1930（昭和5）年度より1933（昭和8）年度まで「東洋美術総目録の編纂」に8千円（春と秋の2回各1千円）の補助を受けている。残された書類からはその後、1936（昭和11）年と1938（昭和13）年に計2千円の追加補助を受けたことがわかる。1934（昭和9）年度から1942（昭和17）年度までは、末延財団の援助を受けた。1939（昭和14）年度から1944（昭和19）年度までは絵巻物研究を目的として雨潤会から補助も受け、業務を遂行していたことがみてとれる。

神奈川県立近代美術館が所蔵する矢代幸雄資料の中には「末延財団補助金ニヨル『光琳派美術ノ研究』昭和十四年度事業及会計報告」が残されており、1939（昭和14）年10月より矢代幸雄・中川千咲を担当者として琳派に関する調査研究が行われ、矢代幸雄「宗達筆伊勢物語帖に就いて」（『美術研究』98、1940年2月）といった成果に結実したことが記されている。前述の『美術研究資料第8輯 伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖』もまた同財団の補助金を受けて刊行されたものであった。

(2) 戦前の近代美術研究

戦前の美術研究所における日本の近代、現代美術の研究については、特筆すべき二つの事業が挙げられる。一つは、「明治大正美術史編纂事業」であり、二つめは『日本美術年鑑』刊行である。本項では、まず「明治大正美術史編纂事業」を当時の資料を紹介しながら述べ、ついでこの事業によって収集された資料にもとづいた実証的な調査研究をもとにした論文等の発表を『美術研究』誌上で概観し、ついで矢代幸雄以後の戦前における美術研究所での西洋美術史研究、そして現在まで継続されている『日本美術年鑑』刊行について、4章にわたって解説することとする。

「明治大正美術史編纂事業」

1926（大正15）年5月1日に、東京の上野公園内に東京府美術館が開館した。その翌年6月、朝日新聞社主催により東京府美術館を会場に「明治大正名作展覧会」が開催された（会期：6月1日から30日）。同展は、久邇宮邦彦王殿下を総裁に、牧野伸顕内大臣、岡田良平文部大臣等の政官学界から顧問をむかえ、正木直彦を会長に官展、在野団体の重鎮、中堅作家35名を加えた評議会を設置して、展覧会の企画構成をしたものであった。内容は、明治、大正の時代に描かれた「名作」として、日本画192点、洋画165点、彫刻103点、計460点からなる大規模な展覧会であった。「昭和」と改元される以前ながら、「明治」「大正」という時代の美術を歴史として振りかえろうとする画期的な企画であった。同展は、同新聞による連日にわたる報道もあって、17万8千余人という当時としては記録的な入場者数となった。同展終了後の1937（昭和7）年、同新聞社は、その収益金を帝国美術院に寄附することを申し出たことから、本事業が美術研究所において始められた。

第二研究室において保管されていた「明治大正美術史編纂事業ノ経過及将来ノ方針」（作成時不詳）、「明治大正美術史編纂事業経過報告概要」（昭和10年12月）、「明治大正美術史編纂事業沿革要」（昭和13年2月）の3件の資料をもとに、この事業の概要を見ていくことにしたい。

まず、最初にB5判4ページ孔版刷の「明治大正美術史編纂事業ノ経過及将来ノ方針」は、作成時期が明記されていないが、事業が開始されてから蒐集された資料数等がわかり、また調査研究の範囲、方法、その成果として「明治大正美術史」の内容の概略をうかがうことができる。内容は下記のとおりである。

- 一、従来購入シタル単行図書概数ハ約一千部ニシテ尚継続購入ノ予定ナリ
- 一、従来購入シタル雑誌ノ種類概数ハ二百八十種ニシテ略ソノ種類ヲ悉シタルモ今後ハソノ欠本ノ補充ニ努ムル予定ナリ
- 一、未刊資料ノ蒐集ハ今後最モ努力ヲ要スベキモノナリ
- 一、明治大正時代日本画家ノ落款印譜蒐集ハ予定数約百五十名中蒐集済ミノモノ約三十名ニ過ギザルヲ以テソノ補充ニハ今後一段ノ努力ヲナス予定ナリ
- 一、今後ハ諸家訪問ニ努力シ且毎月一回宛ニ座談会ヲ開催スル予定ナリ
- 一、蒐集セラレタル資料ハ日本画家 洋風画家 彫刻家 工芸家 版画家 美術関係者、展覧会 美術団体 ソノ他美術ニ関スル施設等ニ大別シ、ソノ中ヲ人名別、項目別トシテ整理ス。目下此ノ人名、項目総数ハ約六百五十項ニシテ尚将来多少増加ノ見込ナリ
- 一、編纂ノ方法ヲ次ノ如ク予定ス
 - 本史。
 - 列伝。重要ナル作家、美術関係者ニ止メ伝記、年譜、作品目録ヲ含ムモノトシ他ハ人名辞典ノ如キ形式ヲトル
 - 紀事本末。重要ナル事項ニ就キ
 - 年表
 - 文献目録
 - 資料集録
- 一、完成ノ形式ハ上記ノ編纂ニ依リテ編纂セラレタル本史、列伝、紀事本末ヲ総論、美術行政、日本画、洋風画、工芸等ノ部門ニ分類シテ編ヲナシ
- 年表、文献目録ヲ別ニ編纂ス
- 資料集録ハ本事業ノ副産物トシテ別ニ編纂ヲ計画スルモ可ナリ

以上

この「経過及将来」からは、作成時期が明確でないものの、「従来購入シタル雑誌ノ種類概数ハ二百八十種」など、同事業が始められてからの資料蒐集の状況がわかる。また、最後に目指されるべき「明治大正美術史」の内容も、具体的に構想されていたことがわかる。

つぎに同じく B5 判 10 ページ孔版刷による「明治大正美術史編纂事業経過報告概要」(表紙に表記の題名と「昭和十年十二月現在」とある)がある。これは、その内容から同事業の正規な「中間報告」としての性格を持つものと推察され、同概要からこの事業の経過を見るために、次に引用したい。

本事業成立ノ顛末ハ昭和七年四月事業ノ成立ニ際シ^(ママ)帝国美術幹事矢代幸雄ト朝日新聞社営業

局長石井光次郎トノ間ニ交換セル覚書ニ明カナルヲ以テ左ニ之ヲ抄録ス

一、朝日新聞社ハ昭和二年ニ開催セル明治大正名作展覧会ノ利益金貳万五千元ヲ（中略）年額金五千元宛五ケ年間ノ継続ヲ以テ帝国美術院ニ寄附スルコト、ナレリ

一、帝国美術院ハコノ寄附ヲ受ケコノ事業ヲ五ケ年間ニ遂行スル為ニ左ノ委員ヲ設ク（後略）

一、完成セラレタル美術史或ハ編纂セラレタル資料ハ（中略）帝国美術院之ヲ適当ナル方法ニヨリ発表スル予定ナリ（後略）

昭和七年四月十五日 朝日新聞社ヨリ帝国美術院長宛前項ノ寄附申出アリタリ

同年五月廿六日 帝国美術院明治大正美術史編纂委員会規定制定

同年六月 三日 左ノ如ク委員発令アリタリ

委員長	院長	正木直彦
委員	会員	結城貞松
同	同	和田英作
同	同	高村光雲
同	同	香取秀治郎
同	朝日新聞社副社長	下村 宏
同	美術研究所主事	矢代幸雄
幹事		矢代幸雄

昭和七年六月 美術研究所内ニ臨時明治大正美術史編纂部ヲ設ケ専任編輯員トシテ尾崎夏彦（主任）隈元謙次郎ヲ囑託ス

同年九月十五日 編纂委員会開催

昭和八年十月 尾崎囑託健康ヲ害シ欠勤尔後応急ノ策トシテ研究所職員二名ソノ事務ニ従事セシム

昭和九年四月 尾崎夏彦依願解囑同時ニ美術研究所囑託正木篤三ニ当部勤務ヲ命ジ編纂事務主任トス又西村敬二郎山田智三郎ニ勤務ヲ命ジ編輯員四名ヲ以テ事務ニ専任セシム

昭和九年六月十一日 編纂委員会開催

昭和十年四月 山田囑託ニ代リ美澄政博小高根太郎ヲ囑託シ現在ニ至ル現在掛員ノ事務分担左ノ如シ

分担事務		氏 名	手当支給費目
作成原稿ノ綜合 編年記述ノ作成	囑託	正木 篤三	美術研究所
各個項目調査 日表作成	同	隈元謙次郎	編纂費
同	同	西村敬二郎	美術研究所
同	同	美澄 政博	編纂費
同	同	小高根太郎	同

雇 二名 同
昭和十年十月 帝国美術院明治大正美術史編纂委員会規定改正
委員左ノ如ク発令アリタリ
委員長 正木直彦 委員（各通） 横山秀麿 結城貞松 和田英作
石井満吉 香取秀治郎 下村宏 矢代幸雄
幹事 美術研究所長事務取扱 和田英作

今日ニ至ルマデ資料蒐集ノ一助トシテ座談会ヲ開催スルコト四回 掛員ノ地方出張調査（東京近接地ヲ除ク）五回ナリ

同概要では、続いて1932（昭和7）年から1934（昭和9）年までの3年間にわたる「編纂費調書」を挙げている。「受高 一五〇四二円、四五」に対して「支出高 一四六二二円、一二」であり、「支出内訳」のうち高額なものは「人件費 八二八五円、五九」と「図書購入費 三一三六円、六〇」であった。さらに、「目下資料ノ調査ヲ終ヘ第一稿ノ作成ヲ了シタル項目左ノ如シ」として、その時点までの調査を次のように列記し、また最後に構成の異なる「明治大正美術史」の2種類の試案が示されていることが注目される。

明治六年維也納万国博覧会参同ニ就テ

起立工商会社ニ就テ 東京美術学校ノ創立

帝室技芸員制度ノ制定 細川潤次郎伝

佐野常民伝

幸野棹嶺伝

奥原晴湖伝 野口幽谷伝 山名貫義伝

田崎草雲伝 塩川文麟伝 森 寛斎伝

岸 竹堂伝 瀧 和亭伝 橋本雅邦伝

菱田春草伝 日本美術院史前期 青年絵画協会ト日本絵画協会

山本芳翠伝 五姓田芳柳伝 五姓田義松伝

高橋由一伝 久米桂一郎伝 工部美術学校ニ就テ

明治美術会史

柴田是真伝 加納夏雄伝 川之邊一朝伝

池田泰真伝

日表 明治十五年以前及自明治四十一年至大正四年 期間ヲ除ク外全部

編年記述 明治三十一年度

明治大正美術史編纂試案 一

編纂ノ実体ヲ明治大正美術史資料編年集成トス

日表ヲ基礎トシテ日本画洋風画彫刻工芸ヲ綜合記述ス

完成年度ヲ昭和十二年三月迄トス 但シ多少完成ノ延引スル場合ハ一部ノ出版ヲナシツ、アル期間ヲ利用シソノ補充整備ニカム

原稿作成予定 約六千枚

備考 伝記及記事本末ノ類ハ別ニ其等ノ集成トシテ出版ヲ企図スルモ可ナリ

明治大正美術史編纂試案 二

編纂ノ実体ハ美術史トシ 編年史 伝記 記事本末ヲ綜合スルモノトス

左ノ五部ニ分チテ編纂ヲ進捗セシム

第一部 日本画編 昭和十二年三月 完成

第二部 洋風画編
第三部 彫刻編 } 昭和十三年三月 完成

第四部 工芸編 昭和十四年三月 完成

第五部 日表、索引 昭和十五年三月 完成

原稿作製予定約六千五百枚

同事業が開始されて3年を経た後の成果報告であり、具体的に「資料ノ調査ヲ終ヘ第一稿ノ作成ヲ了シタル」「伝記」等が挙げられている。「伝記」に挙げられた人物たちの多くが、いずれも幕末明治期の作家、関係者であったことも同事業草創期において「美術史」を基礎から築き上げていこうという意欲がうかがわれる（この第一稿というのは、いずれも保存されていないが、上記に挙げられた作家等の日記などの複写、書き起こし等は部分的に美術部において保管されており、同事業の中で行われた調査に基づくものであったことがわかる）。また、集大成としての「明治大正美術史」については、「試案」として2案示され、いずれも原稿枚数6千枚という大部な刊行物が構想されていたことがわかる。

しかしながら同事業に関わる5年間にわたる寄附が終ったのは1936（昭和11）年度である。その後に作成されたのであろう、執筆者は不詳ながら、「美術研究所」として「明治大正美術史編纂事業沿革要」を作成している。この「沿革要」は、「美術研究所」の用箋に和文タイプされたB5判サイズで4ページにわたるものである。以下はその全文である。

近年明治時代文化研究ノ重要性ハ学界及ビ社会各方面ニ認識セラレ、之ガ研究並ニ資料編

纂等ノ事業ハ文化ノ各分野ニ亘ツテ実施若クハ着手セラレツ、アル所ナリ。美術ノ部門ニ於テモ明治大正時代ノ研究、資料ノ蒐集調査並ニ同美術史編纂ノ急務ハ予テヨリ痛感サル所ナリシガ、昭和七年六月帝国美術院ハ此ノ目的ノ為ニ株式会社朝日新聞社ヨリ年額五千円宛五箇年継続ヲ以テ総額貳万五千円ノ寄附ヲ受ケ、之ヲ以テ同事業ノ遂行ヲ計画シ直ニ之ニ着手セリ。即チ其ノ方法トシテ帝国美術院ニ明治大正美術史編纂委員会ヲ設ケテ編纂ノ要綱ヲ審議セシメ之ニ基キテ資料蒐集、美術史編纂ノ実務ニハ同院附属美術研究所ヲシテ当ラシムルコトトセリ。

爾來美術研究所ハ銳意此ノ事業ノ進捗ニ努メ、未刊資料（日記、書簡類）既刊資料（単行図書、美術関係雑誌、新聞、目録小冊子類）作品写真及ビ複製等ノ蒐集整理ニ併行シテ、美術家及ビ美術関係者伝記、美術制度、美術団体、内外博覧会及ビ展覧会、年表等ノ諸項目ニ亘リ調査編纂ニ従事シ來レリ。

昭和十一年度ヲ以テ朝日新聞社寄附金ハ終了シ、又同十二年六月帝国芸術院設置ニ伴ヒ帝国美術院廃止サレ、同時ニ美術研究所ハ独立官制ニ依ル文部大臣直轄ノ施設トナリタルヲ以テ、本事業ハ自ラ美術研究所ノ事業トシテ之ヲ引継ギ将来ニ亘ツテ完成セシムル計画ヲ立テ、美術研究所ハ昭和十二年度以降其ノ編纂費ヲ政府支出予算トシテ要求セリ。文部当局亦之ガ必要ヲ認め正式予算成立迄ハ臨時ニ若干ノ經費ヲ支弁シテ目下同事業ヲ継続セシメツツアリ。

斯クシテ美術研究所ニ於テ編纂シツツアル明治大正美術史ハ将来適當ナル形式ヲ以テ刊行セントスル予定ナレドモ、部分的ニ調査ヲ終了セル事項ニ関シテハ昭和十一年以降美術研究所定期刊行物「美術研究」誌上ニ論文或ハ資料トシテ隨時之ヲ發表シツツアリ。

昭和十三年二月

この事業に関する「沿革要」に記されているように、朝日新聞社の経済的な支援のもとに始められた「明治大正美術史」編纂は、帝国美術院から文部省管轄になった美術研究所において継続されることになったが、戦時色を強めていった時局の変遷の中で、ついに刊行されることはなかった。しかし、組織的に収集された膨大な資料に基づき、「部分的ニ」とは言え、1940（昭和15）年に刊行された『美術研究資料第9輯 菱田春草』のほか、「調査ヲ終了セル事項ニ関シテハ昭和十一年以降美術研究所定期刊行物『美術研究』誌上」に発表されるようになった。つまり、美術研究所内における日本の近代美術研究の基礎を作ったことには違いない。そこで、次に戦前期における『美術研究』誌上での近代美術研究の動向を次に概観することにしたい。

『美術研究』誌上にみる近代美術研究

1932（昭和7）年に創刊された『美術研究』において、日本の近代美術を主題とした

研究は、その創刊当初はいたってすくない。杉田益次郎「黒田清輝筆『昔語り』図」(24号、1933年12月)が目にとまる程度である。それが本格化するの、先述の通り『昭和十一年以降』である。そして論文等を積極的に執筆するのは、前記の事業のスタッフであった隈元謙次郎と小高根太郎であった。隈元は、「高橋由一の生涯と作品」(59号、1936年11月)、「ラゲーザに就て」(68号、1937年8月)、「川上冬崖と洋風画」(79号、1938年7月)等を発表している。また、隈元は、当時のイタリア中亜極東協会に「明治初期に來朝せる伊太利亜美術家と其の功績」と題する論文を応募し、1938(昭和13)年度の第1回レオナルド・ダ・ヴィンチ賞を受賞した。その後、『美術研究』にも、同論文の一部から「エドアルド・キヨソーネに就て」(91・92号、1939年7・8月)、「アントニオ・フォンタネージに就て」(94号、1939年10月)等を発表している。なお、前述の隈元の応募論文は、日伊文化協定の締結を背景に、1940(昭和15)年に『明治初期來朝伊太利亜美術家の研究』(三省堂)として刊行された。一方の小高根太郎は、『研究資料』富岡鉄斎『公私事歴録』(65号、1937年5月)をはじめとする富岡鉄斎研究をはじめ、「從軍画家としての寺崎廣業」(75号、1938年3月)、「アーネスト・エフ・フエノロサの美術運動1～3」(110・111・112号、1941年2・3・4月)を発表している。

ところで、その遺言と遺産によって創設された美術研究所にとって黒田清輝の芸術の調査研究と顕彰は、一つの大きな使命でもあった。そのための企画の一つが、矢代幸雄が所長であった時代からあったもので、「画伯の遺作を集大成した作品集の刊行」(田中一松「序」『黒田清輝作品集』美術出版社、1954年)であった。そのために黒田清輝の調査研究にあたったのが、先述の事業開始の折りに嘱託となった隈元謙次郎であった。隈元は、上記の明治期の美術研究と並行して、「黒田清輝と日清戦役」(88号、1939年4月)をはじめとして、「滯仏中の黒田清輝 (上・下)」(101・102号、1940年5・6月)、「黒田清輝の中期の業績と作品に就て (上・中・下)」(113・115・118号、1941年5・7・10月)、「黒田清輝後期の業績と作品 (上・中・下)」(130・132・133号、1943年7・11・12月)というように論文を発表し、実証的な調査研究を重ねていった。しかしながら、念願の「作品集」は、「すでに準備も整って上梓の最中に今次大戦の勃発となり、原色の写真原板等もすべて焼失してしまった」(田中一松、同前)という。作品集は、戦後、黒田清輝没後30周年を記念した展覧会(1954年)が国立近代美術館で開催された折に、新たに刊行されたのだが、同書に掲載された隈元の評伝「黒田清輝の業績と作品」は、先述の戦前の調査研究が基礎になっていたことは言うまでもない。また、隈元による広く資料を精査し、実証性を重視した黒田清輝研究は、今日までその基礎研究としての価値を失ってはならず、貴重な業績である。ほかに1941(昭和16)年に職員となった河北倫明は、「青

本繁の生涯 (上) (中) の上、(中) の下、(下)」(134・136・138・140号、1944年2・5・10月・1947年3月)を發表し、戦中期から戦後にかけて青木繁研究を完成させた(なお同研究は、1948年に『青木繁』として養徳社より刊行された)。

このように『美術研究』誌上での論文等の公表は、戦前の近代美術研究にかぎらず、美術史研究者として個人的な関心からの成果である。一方で組織的に行う調査に基づく事業も併行して始められた。一つは、所長であり西洋美術史研究者であった矢代幸雄の意向を継ぐ翻訳事業と、いま一つが現在まで継続されている『日本美術年鑑』の刊行事業である。

「西洋美術」研究

戦前期における日本の近代美術研究とともに、ここで西洋美術史研究についてもふれておきたい。美術研究所創設にあたった矢代幸雄は、言うまでもなく西洋美術史研究者であったが、矢代自身、研究所開所以後、次第に日本、東洋の美術に関心を寄せていったことは広く知られるとおりである。しかし、1932(昭和7)年6月25日から28日までの4日間、研究所陳列室を会場に「西洋近代絵画展覧会」を開催したことは、当研究所の「西洋美術」研究の嚆矢として記録されるべきであろう。同展は、美術懇話会の協力のもと、会員中にいた収集家のコレクション、及び会員の斡旋によって借用された「西洋近代絵画」によって構成されていた。セザンヌ〔図5〕、ドガ、ゴーギャン、モネ、ピサロ、ルノアール等の作品39点が出品された(出品作品の内容は、『資料編』672～673頁参照)。わずか4日間の展覧会であったが、来館者は4200人を超えたと記録されている。同展にあわせて、『美術研究』の9号(1932年9月)は、特輯として「西洋近代絵画展覧会図録」として編集された。同号では、矢代幸雄「西洋近代絵画展覧会に就いて」、兒島喜久雄「西洋近代絵画展覧会管見」の寄稿があり、出品作品の全図版が掲載された。今日から見ても、優れた作品が出品されており、それ故に上記のような多数の来館者を迎えることになったのであろう。また、矢代自身も、上記の一文の中で、「この展覧会を見て、恐らく誰もが一様に感じたことは、日本に、このやうな美術館が一つ、常置されてあつて然る可きだといふことでつた」と指摘するように、日本の「美術教育」、「美術館問題」として、その課題を提起していた。

次に西洋美術史研究に関して、矢代以外にも戦前期の美術研究所には専門とする研究者が在職しており、入所時期の早いものから順にその主な人名を挙げると、下記のようなになる。

富永惣一(在職1930年～43年)

兒島喜久雄（在職 1932 年～43 年）

山田智三郎（在職 1934 年 7 月～44 年）

吉川逸治（在職 1939 年～43 年、47 年～65 年）

澤柳大五郎（在職 1942 年～49 年）

新規矩男（在職 1943 年 9 月～44 年 6 月、47 年～59 年）

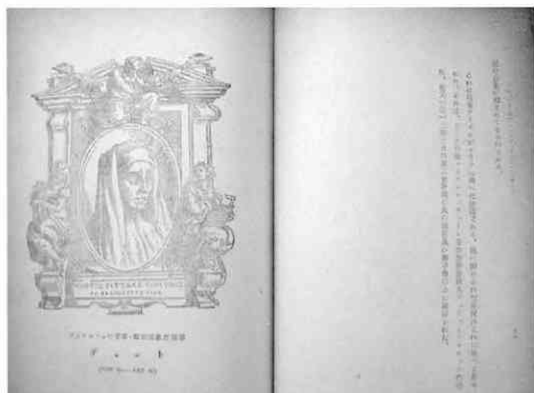
上記の研究者は、いずれもがむしろ戦後から 1970 年代頃までの国内における西洋美術史研究の泰斗と言える人々である。戦前では、矢代幸雄の言葉によれば「少壮学者」として、主にヨーロッパの美術書の翻訳を中心とする業績を残している。上記の彼らによって戦前期に刊行された書名を挙げると、富永は『希臘彫刻』（アトリエ社、1939 年）、吉川逸治との共訳『スタンダール イタリア絵画史 第一巻』（河出書房、1943 年）を刊行している。兒島は、『西洋美術館めぐり』（座右宝刊行会、1935 年）、『美術概論—其他』（小山書店、1936 年）、『希臘の鋏』（道統社、1942 年）がある。山田には、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』（アトリエ社、1939 年）、『十七・八世紀に於けるヨーロッパ美術と東亜の影響』（蘆谷瑞世訳、アトリエ社、1942 年、原文は“Die Chinamonde des Spatbarock”であり、邦訳にあたり原著者である山田が「日本版補注」を加えた）、フォン・デュルクハイム著・山田訳『独逸精神の造形的表現』（アトリエ社、1942 年）、ローデンワルト著・山田訳『希臘羅馬の芸術』（青木書店、1943 年）がある。澤柳には、ヴィンケルマン著・澤柳訳『希臘芸術模倣論』（座右宝刊行会、1943 年）がある。ただし澤柳の場合は、日本彫刻史にも研究分野をひろげ、戦後になるが論文として「御物辛亥年銘今銅像 飛鳥彫刻ノオト其 1」（『美術研究』142、1947 年 8 月）などを残している。新には、入所前であるが、『英国芸術史』（研究社出版、1941 年）がある。

こうした個別の業績以外に、矢代の意向を汲んで、組織的とも言うべき翻訳書が刊行されている。それが、富永惣一・隈元謙次郎・新規矩男・山田智三郎訳『ヴァザリ美術家伝（一）』（青木書店、1943 年）〔図 6〕である。同書の巻頭には、兒島喜久雄による序文が挙げられ、原著の歴史的価値について詳述されている。続いて前年に同研究所を退いた矢代幸雄も、冒頭に次のように記した序文を寄せている。



5 「西洋近代絵画展覧会」出品作より
セザンヌ「自画像」（当時細川護立蔵）

「この度、ヴァザリの伊太利亚名匠伝の翻訳が、富永惣一、隈元謙次郎、新規矩男、山田



6 『ヴァザリ美術家伝（一）』

智三郎の諸君の努力によって刊行されるに到つたことは、余にとつて感慨無量である。その欲びは他人事とは思はれない。」

矢代の抱いた「感慨無量」の思いは、前年に美術研究所を退いたとはいえ、まさに「他人事」ではなかったにちがいない。この序文では、以下に引用するよう

に、自身の留学時代から原書に寄せた熱い思いと、翻訳にあたつた経緯がつづられており、刊行によって矢代にとっての多年にわたる念願がかなつたことへの「感慨」の深さが伝わってくる。

「もう二十年以上の昔になるが、余は伊太利亚に在りし日以来、永い間、ヴァザリの研究に夢中になつて居た。日本で西洋美術史を学ぶ者は、余などもそうであつたが、実物より遠く離れて居るので原作は見る事が出来ず、また根本史料とは殆ど絶縁状態に在るので、勢ひ、或は文化史的、或は藝術学的なる概念的取扱に傾き抽象論に陥るのが、常規であつた。然るに西洋美術史も、その研究の本場へ行つて見ると、決してそういふものではない。（中略）

かくて余のフィレンツェに住んで居た五年に互る歳月は、明け暮れ、ヴァザリを耽読することによつて過ぎた。初めはヴァザリを史料捜査のつもりで努めて読むのであつたが、やがてヴァザリの持つ伝記作者として比類稀なる文才は、余をすっかり魅了して、余は史料捜査の学術的興味などを打ち忘れ、彼の描き出す文藝復興期伊太利亚の古き時代に余自ら浸り込んで、その陰影に動く名匠とその周囲を取巻く法王や王侯や詩人や美女や乃至は権謀術数家、不逞なるならず者等に到るまでと、余自ら現に出会し交際する思ひがあつた。ダンテもミケルアンジェエロも埋葬されて居る聖クロッチェ大寺の鐘を朝夕に窓外に聴いて暮らした余のフィレンツェの生活は、ヴァザリの御蔭で、現代離れがして、主として文芸復興期に生きたとも言へるのである。（中略）

ヴァザリに対してそういふ打ち込み方であつたから、その一番良い版を買ひ度いと苦心した。乏しい留学費より工面して有名なミラネージ Gaetano Milanesi の註の一杯ある九冊本を買つた時は、伊太利亚絵画史の本職になつたやうな気持がして安心した。伊太利亚語の原著のほかには英、独、仏等の浩瀚なる翻訳書を集めて得意になつたりした。一つヴァザリ伝の近代研究による註をつけて見たいなどといふ望みを起して、大きな計画を立てたこともあつた。」

もとより矢代自身によれば、「ヴァザリに註をつけて見たいといふ希望は、大抵の伊太利亜美術の研究者は一度は抱く学的野心である」と言い、矢代も試みようとしていたところ、「帰朝後の余の仕事も、大分長い間ヴァザリ中心に考へられて居た。(中略)然しそのうちに美術研究所設立の事業が余に託されて余の身边は急に多忙になり、また追々東洋美術に対する余の興味は深くなつて、ヴァザリの翻訳には到底著手出来そうもなくなつて来た」という事情があった。そうしたところ、知己であったある実業家からの援助をうけることが出来るようになったことから、この翻訳事業が進められるようになったという。その経緯を同じく矢代は、続けて次のように記している。

「其所に出現したのが、今は故人となつた城崎祥蔵君であつた。君は一つ橋出身の実業家であつたが、非常に美術好きで、余の著書なども読んで居られたそうで、或る人に紹介されて逢つた。樸茂なる人柄で甚だ気持がよかつた。城崎君も後には南画などを稽古して東洋美術に打ち込むやうになつたが、当時はヨーロッパ旅行より帰られて間もない頃で、伊太利亜美術が好きで仕様がなといふ容子であつた。(中略)その城崎君が何か美術に関して有益な仕事があれば補助してもよいと申し出されたので、余は一も二もなくヴァザリ翻訳事業を提案し、そして監督は余自ら当るとして、翻訳の実務は隈元謙次郎君に委嘱することにした。それで当時まだ若かつた隈元君は毎日美術研究所の閲覧室に通つて来て、余の所蔵本よりヴァザリを翻訳し、また城崎君とは、隈元君と三人で時々会合して、伊太利亜美術の雑談に花を咲かせたり、或はヴァザリ翻訳の進捗の模様を聴取したりして、愉快な時を過ごした。

隈元君の翻訳は著々と進んだが、それを原文に照り合せて見直そうといふ余の監督の仕事は一向に著手することも出来なかつた。その間に余の外遊も幾度かはさまり、また隈元君が美術研究所に就職して前の様に翻訳に専念することも出来なくなり、そんなこんなのうちについ幾年か経つた。そして丈夫そうに見えた城崎君は昭和十二年突然亡くなつた。余は驚愕して己が怠慢を悔いた。城崎君の生前にヴァザリの翻訳が一卷でも出て居たら、如何に喜ばれたであらう。城崎君の補助は、こちらにその義務を感じさせないほど気持ちのよいやり方であつた。それをよいことにしたつもりは無いが、事実、出版にまで到著しないうちに、君の死に出逢つたことは、何としても相済まない。それを思ふと胸が痛い。」

ここからは先述の隈元謙次郎が、その翻訳にあたつたことが記されており、隈元が「明治大正美術史編纂事業」に参画する以前から、西洋美術史研究者としてその役にあつたことがわかる。しかし、隈元も当研究所の職員として前記事業に従事するようになると、翻訳の事業は中断しかねない状況であつたらしい。そこに加わつたのが、矢代が同書の「序文」で言うところの「少壮学者」たちであつた。

「それにしても、ヴァザリは出てくれないと困ると思つて、爾来余は常にそれを苦勞にした。城崎君の特志も消えないやうにと心潜かに祈る者は、余一人ではなく、同君の恩顧を受けた隈元君もそうであつたに相違ない。そこに富永、新、山田の三君の協力による出版計画が立てられ、余の許に齎らされたことは、余にとつて実に大なる喜びと安心とであつた。何となれば、この四君は現在日本の持つ西洋美術史専攻家のうちで最も信頼の置ける少壮学者であり、この人々が本気でかかつてくれるのであれば、ヴァザリの翻訳は相当の形に於いて必ず完成するに相違ないと確信されたからである。」

ところで、同書の翻訳の意義については、矢代は西洋美術史研究というよりも、次に記しているように、「文学価値、傳記文学の傑作」として啓蒙的な価値にあることを冷静に強調することも忘れてはいない。

「ヴァザリの持つ根本史料としての価値は強いて日本語で解説して出す必要もないのである。それを必要とする程の専門家は何れにしても原典に拠らなければならないからである。

即ちヴァザリを翻訳する意義は主として伊太利亚美術の巨人群を知り彼等に親しませる為の文学価値、傳記文学の傑作としての文学価値に在りと言へるであらう。英、独、仏の大規模なる翻訳の狙ひ所も貢献も、大体そういふところに在つたと言へるであらう。ヴァザリを現代日本の読書界に生かすといふ意味に於ける翻訳及び註釈としては、この四君の協力は完璧に近きものを成すことを余は確信するのである。」

そして、長文にわたる矢代の「序文」は、次の言葉で締めくくられている。

「今やヴァザリの研究そのものから遠ざかつた老兵の心境を以て、余は茲にヴァザリ中心に思ひ出すいろいろを書きつけた。(中略) それほどに余の若き心に纏ひ付いて居たヴァザリが、余に親しき四君の協力によつて、今回出版されることになつたのは、余自身の夢を若き人々が実現してくれるやうなものである。余は欲びといふにはあまりに深い氣持を以て之を迎へまたその成功を祈る。」

また、巻末には、隈元によると思われる「訳者緒言」が掲載されており、そこで原著については、次のように記されている。

「本書は、Giorgio Vasari : Le Vite de' piu eccellenti Pittori, Scultori ed Archiettori の翻訳である。その表題は正しくは『最も卓越せる画家、彫刻家及び建築家の伝記』とすべきであるが、長きに失するので単に『美術家伝』とした」と断っている。そして、「底

本」は、「ガエターノミラネージ Gaetano Milanesi が校訂し、註釈を加へ、一八七八年より八五年に互つてフィレンツェに於いて刊行した9冊本 *Le Vite de' piu eccellenti Pittori, Scultori ed Archiettori, scritte da Giorgio Vasari, pittore arentino ; con nuove annotazioni e commenti di Gaetano Milanesi. Firenze, G.C. Sansoni* を用ひ、専らこれに拠つた」としている。なお、外にも独英語版等を参照しながら、続けて次のように本書の第1巻刊行にあたって、原書自体が大部であるために、その中から作家を選定し、さらに将来にわたる全体の構想も明らかにされている。

「美術家伝はその第二版によれば、表題を掲げて採録した作家は二百余人に達する。併し今日これ等の凡てを邦訳として刊行することは多大の歳月を要する大事業であり、又吾が国に於ける最初の出版に於いては必ずしも必要と思はれないので、その完訳は将来に譲り、主要作家凡そ五十人を選び、これに吾が国に於いて必要と思はれる程度の注釈を加へ、四巻に分ち逐次刊行する予定である。先づその第一巻たる本書には作家十七人の伝記が挙げられた。各作家伝巻頭の扉に掲げた肖像は、第二版に於いて新しく加へられたものであり、ベッキアイ本より複製転載した。又同じ扉に記入した各作家の生歿年は、必ずしも原本に依らず、今日の研究により妥当と思はれる年に改めた。」

また、訳者は4名連名になっているが、その訳出作業の分担も、次のように行われたことが付記されている。

「最初この翻訳事業は昭和五年秋実業家にして伊太利亜美術愛好家であつた故城崎祥蔵氏の援助と、矢代幸雄氏の指導のもとに隈元が著手したものであるが、その草稿全般に互つて改めて新が伊太利亜文に依る再検討を加へ、富永は邦訳としての文辞に修正を施し、又一部を訳出し、山田は註釈の執筆を担当した。」

同書は、日本で初めての翻訳書であり、個人による助成から始められたものながら、戦前期における当研究所の西洋美術史研究の一つの成果と言える。なお、戦中期の出版であつたため、どれほどの学術的寄与、あるいは反響があつたかは不詳ながら、戦後の1948（昭和23）年に「部分的訂正」を加えて萬里閣から出版されたことを加えておきたい。次に、『日本美術年鑑』刊行事業について述べたい。

『日本美術年鑑』の刊行

国内美術界の網羅的な「便覧」的な要素をもつ「日本美術年鑑」は、当研究所の刊行

以前にもあった。1911（明治44）年に『明治43年度 日本美術年鑑』が、画報社から刊行され、大正元年度まで同社から3巻刊行されている。その後、1927（昭和2）年から1933（昭和8）年まで、朝日新聞社編として『日本美術年鑑』が8巻刊行されていた。同年鑑の場合は、「便覧」としての要素に加えて、前半部分の主要な紙面を割いて、当該年に開催された主要な展覧会の出品作品の写真掲載に力点がおかれていた。

その後に刊行された美術研究所の『日本美術年鑑』は、おのずと公的な視点から、その意図と編集も異なっていた。1936（昭和11）年に創刊された折、所長であった矢代幸雄は、その「序」において、明治以来の「美術」隆盛を背景にした時代において、「美術研究所」が「現代美術」の動向に対しても関心を向け、その調査を集成した「美術年鑑」の意義を次のように記している。

「明治以降、時代を劃して急速の發展を遂げ來つた現代我が美術の興隆は、史上に之を徵するも例を見ること稀なる迄の、複雑なる内容と、技巧的發達と、個性的特質の伸張等を示し、我が国運の發展に伴ふ文化隆昌の現れとして、寔に壯觀と云ふも過言ではない。

而して又、現代の美術は、興隆時代に伴ふ潑刺たる氣力と共に、新時代創造の試みと悩みとを藏し、過渡期的なる一種の混雜をも示すことは否めないが、同時に是等の中には、將來の我が美術を完成に導くべき力強き萌芽をも認め得るのである。（中略）

美術研究所は美術に関する事項の調査研究を使命として居る。美術に関する調査研究と云へば多くは古美術が其の対象とされる傾がある。現代に対しては多くの困難を感じるからでもあらう。併しながら、上述の如き見地から現代美術に対しても力を致すことは、本研究の最も重要な使命の一と考へるのである。嚴密なる意味で甚だ困難ではあるが而も能ふ限り正確公平なる調査を遂げ、其の結果を美術年鑑として刊行することは、現代に於て美術界並に一般社会に対し直接の貢獻たり得ると共に、將來に互つて永く、我が美術史上に最も信頼し得べき資料を蓄積して行くことに他ならぬものと信ずるのである。」

しかしながら、一方で矢代自身が研究所として組織的に当該年の「美術界全般の活動」に目を向け、調査し情報を集成するものであっても、そこに「個人」もしくは「主観」の入らざるを得ないという編集作業上の困難さと危うさに対する緊張がつねにつきまとうことをも認識していたことがわかる。

「年鑑の使命は、能ふ限り正確忠実なる記録の輯成に努めることに依つて、大部分果し得るものと信ずるから、編纂の方針としては此に主眼を置いたことは言を俟たない。併しながら此の場合にも、当事者は常に若干の批判を持ちつゝ、為すにあらざれば、編纂を行ふことは

不可能である。而も芸術に関する批判程個人的なるはなく、主観に従つて見解の相違を來すことは何人も之を避け得ない性質のものである。個人事業ならざる本研究所が美術年鑑を編纂する困難は、実に此に点に在つた。編輯員は能ふ限り其の妥当ならんことに努めたが、決して此の結果を以て完全なりと自負するものではない。」

この矢代の認識は、現在における編輯上の問題でもあり、「美術年鑑」としての公共性、客観性、同時に批評性をはらむものである。さて、その内容と構成であるが、創刊号では、「現代美術」、「古美術」の展覧会、彙報記事ならびに前項においては「物故作家及美術関係者」の記事が含まれ、次に「美術行政」、「美術市場」、「昭和十年度美術文献目録」、「挿絵」によって「本欄」が構成されている。次に「便覧」として、「美術関係法規」、「美術奨励施設一覧」、「美術研究施設一覧」、「美術教育施設一覧」、「美術観覧施設一覧」、「美術団体一覧」、「展覧会場一覧」、「美術関係定期刊行物一覧」、「美術家及美術関係者名簿」という順に構成されている。「本欄」の部分の古美術、現代美術の展覧会情報、文献情報、彙報、美術家等の物故者記事などは、現在でも受け継がれている。「便覧」の部分は、戦前までは継承されていたが、戦後、「本欄」にあたる情報量の圧倒的な急増によって、割愛されている。創刊時から戦前の「美術年鑑」を手にするにつけ、実に幅広く目を配り、丹念に、労力を惜しまずに編集を継続していたことが実感される。そして今日も、その1年間の美術界の記録（情報）として、後世に残すべきものを厳選しながら編集を進める姿勢は継承されている。そうした意義と認識にたって以後、『日本美術年鑑』は、戦中期の中断をはさんで、ほぼ毎年刊行され続け、現在に至っている。

2 戦後から近年までの調査研究 1945（昭和20）年～2000（平成12）年

戦後、1947（昭和22）年5月に美術研究所が国立博物館附属となり、7研究室体制をとる時期もあったが、1950（昭和25）年8月より文化財保護委員会の附属となり、下記の3部体制をとることとなった。

- 第一研究部 上代中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその成果の公表
- 第二研究部 近代及び現代美術並びにその結果の公表
- 資料部 1. 美術研究資料作成収集整理保管公表及び閲覧に関する事 2. 美術研究資料に関する写真の作成及び原板保管 3. エックス線写真、赤外線写真、紫外線写真 その他特殊写真による美術の研究に関する事

（『東京国立文化財研究所 20年のあゆみ』11頁）

その後1952（昭和27）年4月には文化財保護法の改訂に伴い、美術研究所は新たに芸能、保存科学の部門と合し、東京文化財研究所（1954年より東京国立文化財研究所）の美術部として発足した。これに伴い、上記の3部は第一研究室、第二研究室、資料室と部から室へと変わり、3室体制となった。その後、1977（昭和52）年に美術部資料室は廃止、新たに情報資料部が設置されることとなるが、基本的に美術部の調査研究は情報資料部と協同するかたちで継続された。

本項では戦後、2001（平成13）年に当研究所が独立行政法人となるまでの期間に行われた調査研究を、(1) 1960年代前半まで各室（部）ごとに、(2) 1960年代後半から1988（昭和63）年までに行われた科学研究費や特別研究、一般研究等の共同研究を各研究ごとに、(3) 1989（平成元）年から2000（平成12）年まで、大学にならって中長期計画に基づき行われた研究を各計画ごとに見ていくことにする。本項で取り上げる各研究の細目は下記の通りである。

(1) 1945（昭和20）年～1960年代前半の調査研究

第一研究室の調査研究 1945（昭和20）年～1960年代前半

第二研究室の調査研究 1945（昭和20）年～1960年代前半

資料室の調査研究 1945（昭和20）～1960年代前半

(2) 1960年代後半～1988（昭和63）年の調査研究

科学研究費「明治以降日本、東洋美術史学の発達に関する研究」

科学研究費「近世初期日本洋風美術の実証的研究」

- 科学研究費「平安時代における浄土教美術の総合的研究」
- 科学研究費「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」
- 特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究」
- 科学研究費「日本16・7世紀における絵画と工芸との相関性の検討」
- 科学研究費「日本美術の主要作品に関する基礎的研究」
- 科学研究費「院政前期より後期への様式展開に関する研究」
- 科学研究費「法華経絵の研究」
- 「中国絵画史の研究」
- 「中央アジア古代絵画史研究」
- 「朝鮮仏画の研究」
- 「日本古代中世絵画史の研究」
- 「近世絵画資料の収集と研究」
- 「日本彫刻史の研究」
- 「日本工芸史の研究」
- 「和漢書道史の研究」
- 「近代日本美術史の研究」
- 「日本古代中世の料紙に施された絵画の研究」
- 「日本古代文様の様式的、形式的研究」
- 「近世絵画史（江戸時代洋風画）の研究」
- 「日本近代絵画史の研究」
- 「科学的方法による材料と技法の研究」
- 「作家・流派及び美術団体の研究」
- 「美術基準作品の研究」
- 「美術様式と伝播の研究」

(3) 1989（平成元）年～2000（平成12）年の中長期研究計画に基づく調査研究

- 「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」
- 「美術に関する基礎資料の研究」
- 「美術における地域性及び社会性の研究」
- 「来迎図を中心とする浄土教美術の研究」
- 「中国仏教美術基準作品調査研究」
- 「近百年来中国絵画史研究」

「東アジア美術における造形と社会」

「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究」

「日本における美術史学の成立と展開」

「日本における外来の美術の受容についての研究」

「木彫仏像の調査研究」

「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」

(1) 1945（昭和20）年～1960年代前半の調査研究

第一研究室の調査研究 1945（昭和20）年～1960年代前半

1947（昭和22）年5月に当研究所が国立博物館附属となる前後から若干の人員増加を見、建築・書蹟などへ研究分野を拡げて、内部的に7研究室体制をとった。1950（昭和25）年8月より文化財保護委員会附属となつて、上代中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその成果の公表を担う部門は第一研究部として再編される。

この時期の代表的な事業としては、画家索引作成の基礎的整理事業、仏教図像の基礎資料整備事業が挙げられる。このほか、「源氏物語絵巻」、栄山寺八角堂、墨蹟などに関する研究を行い、『美術研究資料 益田家本 源氏物語絵巻』（1949年）、『栄山寺八角堂』（1950年）、『栄山寺八角堂の研究』（1951年）、『墨蹟資料集一～三輯』（1949～51年）を刊行したほか、機関誌『美術研究』をほぼ年6冊刊行した。また、後述するように光学的手法を援用した研究を再開したことも特記される。

1952（昭和27）年の文化財保護法改訂にともなつた機構替えがあつたが、第一研究部は第一研究室として従前の業務を継続した。研究範囲として従来の絵画・彫刻に、建築・工芸・書蹟が加わり、文献的研究と基準作品調査の両面から活発な研究が進められた。諸分野が共同して研究する色彩が濃厚であつたことは、この時期の活動を通じて特徴的であつた。

実作品の調査は各分野で鋭意進められた。大規模なものとしては、法隆寺金堂焼損時における調査研究と醍醐寺五重塔の解体修理に際した調査研究が挙げられる。その成果として『法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究』（1953年）及び、高田修編『醍醐寺五重塔の壁画』（吉川弘文館、1959年）が刊行された。特に後者は、絵画史のみならず、書道史、国語国文学史上の重要性を総合的に明らかにした点で瞠目すべき成果であり、1960（昭和35）年には第50回日本学士院賞恩賜賞を受賞した〔図7〕。多角的な分析と、外部との共同研究はこの時期の研究に共通する特徴である。

平安・鎌倉絵画についての研究はめざましく、『美術研究』や各種美術全集等に多数の論考・解説が発表されたほか、秋山光和『平安時代世俗画の研究』（吉川弘文館、1964年。1968年第57回日本学士院賞受賞）などが刊行された。また両界曼荼羅についての研究成果は後に『高雄曼荼羅』（吉川弘文館、1967年）として結実し、そ



7 日本学士院賞第50回授賞式にて
前列左より宮次男、上野アキ、伊藤卓治、高田修、山崎一雄、柳澤孝

こには染織工芸の分野における成果も含まれた。絵巻物の研究も書蹟の分野と共同で行われている。これらの平安・鎌倉絵画研究が、絵巻物などに描かれる建築や障壁画の研究へつながっていったことも見逃せない。1961（昭和36）年以降には、絵巻物に関する文献資料をカード化して整理・蓄積する作業が継続的行われ、いわゆるやまと絵肖像画全般にわたる資料収集とカード化も進められた。

南北朝・室町絵画については、上記の画中障壁画研究と、やまと絵屏風研究の先鞭を付けたことが注目される。一方、戦前に始まり渡邊一『東山水墨画の研究』（座右宝刊行会、1948年、増補版は中央公論美術出版、1985年）にまとめられた「東洋美術総目録」の手法が引き継がれ、熊谷宣夫『雪舟等楊』（東京大学出版会、1958年）、辻惟雄「狩野元信（一）～（五）」（『美術研究』246・249・270・271・272、1967年3・10月・1970年11・12月・1971年3月）という成果を得た。

桃山・江戸絵画については、後に『障壁画全集』（美術出版社、1961～72年）に結実する障壁画研究（外部との共同研究）、ならびに初期風俗画と浮世絵の研究に積極的に取り組んだほか、所員が中心となって編集された図録研究書『光琳』（日本経済新聞社、1959年）、所員が編集委員の一人となった『池大雅画譜』（中央公論美術出版、1957～59年）等の成果を上げている。

彫刻に関してはX線透過撮影を援用した内部構造や造像技法に注目した調査研究が進められたほか、解体修理等に際した銘文の確認、地域別（とくに平安仏は東北地方、鎌倉仏は関東地方）・尊像別による研究を推進した。三条仏師や円派等、南北朝時代彫刻研究に着手したことも特記される。やはり『美術研究』誌上等に成果が続々と発表され、単行書としても久野健『関東彫刻の研究』（学生社、1964年）などがある。

工芸では、近世の陶磁器と染織に重点を置いて、基礎資料の収集・分析に努めている。

戦前はほぼ未開拓であった近代陶磁及び染織史研究に着手したことは特筆される。書蹟・建築の分野でも基礎資料の収集・集成をそれぞれ進め、『美術研究』誌上などにその成果が発表されると同時に、福山敏男『大極殿の研究』（平安神宮、1955年）、福山敏男・久野健『薬師寺』（東京大学出版会、1960年）等の成果物を生んだ。

中国・西域・インドを中心とする東アジア美術の研究も盛況で、中国絵画では『梁楷』（便利堂、1957年）、インド彫刻では高田修『仏像の起源』（岩波書店、1967年。1967年度朝日賞受賞）に代表される業績を上げたほか、『美術研究』誌上その他に、研究論文や基礎資料紹介など多数が精力的に発表されている。西域関係でも熊谷宣夫が大谷コレクションの研究を一貫して行っている。これらの膨大な研究活動の中でも、明清ならびに中華民国期の絵画に関する基礎的研究や、朝鮮半島の絵画の研究といった、いわば日本における新分野の開拓を主導したことは銘記すべきことであろう。

第二研究室の調査研究 1945（昭和20）年～1960年代前半

戦後、1947（昭和22）年5月より当研究所が国立博物館の附属となる中で、その日本近代美術研究の成果として『近代日本美術資料』第1～3輯（美術出版社、1948年～1951年）と『黒田清輝素描集』（1949年3月）が残されている。『近代日本美術資料集』は、戦前、主に古美術を対象に美術研究所が刊行した『日本美術資料』をうけて、日本近代美術を鳥瞰すべく編纂されたもので、原色図版を含む計60点の図版に所内研究者（隈元謙次郎・河北倫明・岡畏三郎・中村伝三郎）による解説を付している。そのうち第1輯は1947（昭和22）年7月1日から8月20日に国立博物館で開催された「近代日本洋画展」、第2・3輯は1948（昭和23）年10月15日から11月30日に同館で開催された「近代日本美術総合展」の出品作より収載された。『黒田清輝素描集』については、当研究所の創設に大きく寄与した黒田清輝の作品集を戦前より企図するも、戦災により原色写真原板を焼



8 黒田清輝 30周年記念展絵葉書

失したため上梓を延期、ひとまずその姉妹篇として刊行されたものである。編集並びに解説の執筆は、戦前よりその画業についての論考を随時発表してきた隈元謙次郎が当たった。

1950（昭和25）年8月に当研究所は国立博物館から分離、そして東京国立文化財研究所と名

称を改めた1954（昭和29）年は黒田清輝の没後30年にあたり、これを機によく『黒田清輝作品集』（美術出版社、1954年）が刊行されることとなる。また同年7月7日から27日には、国立近代美術館と共同主催により「黒田清輝30周年記念展覧会」を開催した〔図8〕。その後黒田生誕100年にあたる1966（昭和41）年には作品集と隈元謙次郎による詳細な伝記を備えた『黒田清輝』（日本経済新聞社）を、また1966（昭和41）年から1968（昭和43）年には黒田の日記及び書簡を活字化した『黒田清輝日記』全4巻（中央公論美術出版）を刊行、当研究所の言わば創設者としての功績を顕彰すべく研究資料の充実に努めてきた。



9 『日本美術年鑑』昭和18年版から昭和28年版まで

黒田清輝研究に大きく貢献した隈元謙次郎は、戦前の明治大正美術史編纂事業より日本近代美術研究に関わっており、黒田の他にも高橋由一や藤島武二といった洋画家、また狩野芳崖、速水御舟といった日本画家についても論考を試み、1964（昭和39）年にはそれらを『近代日本美術の研究』（大蔵省印刷局）にまとめている。

他の研究員も、荻原守衛・小出植重・上村松園といった作家研究に取り組み、成果を『美術研究』誌上に発表しているが、同時に下記のような美術団体の活動についての研究を行い、それらは今日でも基本的文献としての価値を失っていない。

河北倫明「紅児会略史」（『美術研究』160、1951年3月）

中村伝三郎「明治時代の彫塑団体青年彫塑会について」（『美術研究』184、1956年3月）

岡畏三郎「フェウザン会」（『美術研究』185、1956年9月）

中村伝三郎「日本彫刻会小史—岡倉天心と日本近代彫刻」（『美術研究』190、1957年3月）

関千代「烏合会について」（『美術研究』209、1960年6月）

関千代「黒猫会・仮面会等覚書—明治末年における京都画壇の一動向」（『美術研究』232、1964年10月）

なお河北倫明の「紅児会略史」は、紅児会の中心的存在だった安田靉彦に非常に喜ばれ、やはり同会の中心だった今村紫紅の色紙を贈られたというエピソードが、河北倫明『美心遊歴』（西日本新聞社、1992年）に紹介されている。

1936（昭和11）年より当研究所で編集を続けていた『日本美術年鑑』については、戦中戦後の混乱期にあって昭和18年版の組版を焼失して以降刊行が途絶えていたが、1946（昭和21）年に昭和18年版を、1949（昭和24）年に昭和19年から21年版を（出版は国立博物館事業課が担当）、1952（昭和27）年に昭和22年から26年版を刊行、そして1953（昭和28）年より1年1冊という本来のペースで、第二研究室が中心となり編集・刊行を続けていくこととなった〔図9〕。

資料室の調査研究 1945（昭和20）年～1960年代前半

資料室は、美術研究資料の作成、収集、整理、保管、公表、及び閲覧、ならびに美術研究資料に関する写真の作成、その原版の保管（「情報資料部」の項参照）、ならびにX線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真に関する美術の研究を行った。さらに、1941（昭和16）年に刊行をみた『東洋古美術文献目録』の後続を刊行すべく編集を継続して行ってきた。

このうち特筆すべきは光学的手法による作品研究である。この研究は秋山光和を研究担当者とし、中川千咲、岡畏三郎、久野健を所内の協力者とし、所外からは中山秀太郎（東京大学）、山崎一雄（名古屋大学）の協力を得て研究班を組織。1949（昭和24）年度から翌年、1951（昭和26）年度（この年の担当者は中川千咲）に科学研究費（個人研究）の交付を受け、また、当研究所の予算にも機械設備の購入が認められて、研究着手の運びとなった。これと前後して秋山は、1950（昭和25）年より翌年に亘るヨーロッパ留学中、諸国各研究機関・美術館において既に実用化されつつある光学的鑑識設備を見学し、その資料収集に努めた。1952（昭和27）年度には、これまでの成果を基礎として一層根本的な研究設備とそれによる基礎的研究を行うために機関研究費の交付を受け（「光学的方法による美術品の鑑識に関する研究」）、光学研究に必要な最新の機器類を整備するに至った。1953（昭和28）年度より1955（昭和30）年度にわたり継続的に研究費の交付を受け（「光学的方法等による東洋美術品の材料構造の鑑識及びその年代判定等に対する適用の研究」）、研究領域を更に拡大し研究陣容を整えた。すなわち「作品の鑑識及び美術史的研究」については秋山光和・田中一松（絵画）、久野健（彫刻）、中川千咲（工芸）、伊東卓治（書跡）が、「物理化学的鑑識技術の研究」については中山秀太郎（X線）、登石健三・平田穰（ガンマ線、紫外線）、山崎一雄・山崎文男（化学分析、ベータ線後方散乱による判定）が、「写真技術の研究」については小沢健志・橋本弘次（赤外線、顕微鏡、カラーフィルムほか）が担当した。このプロジェクトにより絵画、彫刻、工芸の各分野に新しい研究問題と多くの成果を得ることとなった。殊に、彫刻では8世紀に流行した木

芯乾漆彫刻の造像法、寄木造の発生の諸要因等、絵画では古代顔料の性質、年代判定等、工芸においては顕微鏡写真撮影による焼物の窯の判定や、織物の織り方等、書跡においては運筆、筆の性質等を究明することが出来、従来、肉眼により判断を下していたものに対して、客観的な新資料をもたらした。ちなみに、1949（昭和24）年度より1954（昭和29）年度までの研究成果については『美術研究』誌上において公表されている。すなわち159号（1951年3月）に秋山光和「光学的方法による美術品の鑑識 前言」、中山秀太郎「X線透過法による仏像の研究」、久野健「X線による彫刻の実験」、山崎一雄「紫外線による絵画の調査」、163号（1951年11月）に久野健「X

レイによる彫刻の調査」、166号（1952年8月）に久野健「東大寺の塑像」、168号（1953年3月）に秋山光和「光学的方法による絵画研究—ヨーロッパに於ける研究の現状と東洋絵画への適用—」、中山秀太郎「日本画顔料のX線透過に関する実験」、秋山光和「絵因果経・紫式部日記絵巻・金棺出現図のX線による鑑識」、中川千咲「紫外線による古陶磁の実験」、171号（1953年11月）に久野健「木心乾漆像について」、172・173号（1954年2・3月）に秋山光和「巖島神社所蔵小形檜扇絵について」、174号（1954年3月）に秋山光和「源氏物語絵巻についての新知見」中山秀太郎・山崎一雄「源氏物語絵巻の顔料について」、179号（1955年3月）に秋山光和「教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画」、182号（1955年12月）に秋山光和「鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪及び蓮台の構造と彩色文様」、伊東卓治「鳳凰堂胎内納置の阿弥陀大小呪月輪台座の楽書」、久野健「鳳凰堂本尊納入物の透過撮影」、山崎一雄「鳳凰堂本尊胎内納入物中のガラス破片について」が掲載されている。さらに、1954（昭和29）年度文部省研究成果刊行費補助金の交付を受けて1955（昭和30）年3月には上述の光学研究班により『光学的方法による古美術品の研究』として研究成果の総合的報告書が刊行された〔図10〕。これらの研究が示すように、光学的研究はほとんど東洋美術品の全分野に適用することが可能となり、それらの諸方法と全機能を発揮して1955（昭和30）年度には科学研究費「光学的方法による法隆寺宝物の総合的研究」が立ち上げられた。以後、この手法を用いての成果は『醍醐寺五重塔の壁画』（吉川弘文館、1959年）、『平安時代世俗画の研究』（吉川弘文館、1964年）、『高雄曼荼羅』（吉川弘文館、1967年）などに結実してゆく。



10 『光学的方法による古美術品の研究』
刊行パンフレット

なお、この光学的手法が華々しく斯界の耳目を集める一方で、資料室では、美術資料の収集、作成に関して地道な努力を惜しまず、図書のほか、膨大な数量におよぶ作品写真、関係資料の蓄積を行い、広く内外の研究者のために、あるいは、文化財の指定、展示その他の文化財関係の事業に大きく寄与することとなった。そして、1941（昭和16）年に刊行をみた『東洋古美術文献目録』を承け、その続編の刊行を目指して採録が積み重ねられ、用紙不足の中、『東洋古美術文献目録 自昭和11年～至昭和20年』（1948年）と、『東洋古美術文献目録 自昭和21年～至昭和25年』（1954年）2冊の文献目録を刊行した。

（2）1960年代後半～1988（昭和63）年の調査研究

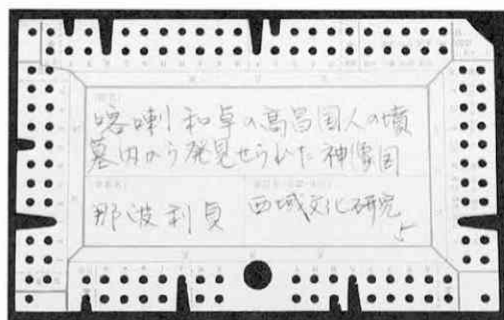
科学研究費「明治以降日本、東洋美術史学の発達に関する研究」

1962（昭和37）年以降、資料室の所員の間で、美術史研究に資する基礎資料の集成への気運が高まる中、辻惟雄から、『東洋美術文献目録』に次ぐ目録の編纂刊行が提案された。当初美術部長高田修は、研究と平行して遂行するには相当の覚悟が必要であることを説いた。しかし翌年、高田は科学研究費を申請し支援体制を整え、編纂事業が始まった。上野アキ、永雄ミエ、辻惟雄、江上綏、関口正之らが担当して採録・編集作業を行った。戦時中の刊行物は欠号も多かったため、1936（昭和11）年以降の文献をすべて再調査することとし、1965（昭和40）年から1967（昭和42）年は大学紛争のため大学図書館の利用が限られていたが、国立国会図書館、都立中央図書館、名古屋市鶴舞中央図書館など相当数の機関へ出向き文献採録に努めた。1969（昭和44）年3月には、逐次刊行物1200種（採録対象はうち900種）から約4万件を収録した『日本東洋古美術文献目録 昭和11年～40年』を刊行した。本書は版を重ね、1997（平成9）年11月刊行の第5版には、新たに著者名索引を出版元の中央公論美術出版の編集部が作成し付け加えた。

その後も日常業務としての文献採録は後任の鶴田武良、河野元昭らも加わって継続していくこととなる。『日本東洋古美術文献目録 昭和11年～40年』の編集以降使用されたのはパンチ式の図書カード〔図11〕で、パンチカードに棒をさして分類するものだったが、1976（昭和51）年にマーカーによって仕分けするマルチカードセクター（シャープ製）〔図12〕を導入し、機械による分類作業を開始した。

現在、学問の発達に伴う各分野の多面化と細分化は加速する一方であり、特定の図書館・研究機関ですらそれぞれの関係専門図書雑誌を完備することは容易ではないという状況はますます深刻化している。このような中、先学の積み上げてきた研究成果を容易に検索し一覧しうる基礎的資料としての文献目録の重要性と必要性は、現在でもまった

く失われていない。したがって文献目録の編纂は現在においても当研究所の根幹の一つをなすユニークな事業であり続けており、当目録の採録範囲以降（1966年以降）の文献、あるいは古美術の範疇を超える近代・現代美術関係の文献についても『日本美術年鑑』への採録を継続することで順次情報を追加・蓄積し、現在はその一部をデータベースとしても運用しているところである。このうち古美術文献情報については、やはり再点検と新規採録を経たうえで、2005（平成17）年度に『日本東洋古美術文献目録（1966年～2000年定期刊行物所載）』として刊行されている（215～216頁参照）。



11 パンチ式の図書カード



12 マルチカードセクター

科学研究費「近世初期日本洋風美術の実証的研究」

明治以前の日本で描かれた西洋風の絵画は、桃山時代にキリスト教の伝播に伴い普及した第1期洋風画と、江戸時代中期以後に蘭学の輸入とともに展開をみせた第2期洋風画に大別される。当研究所では1967（昭和42）・1968（昭和43）年度に科学研究費による助成を受けながら、両期の洋風画を研究対象とし、その成果を上げている。

第1期洋風画については、主に美術部第二研究室の坂本満によって研究が進められた。「マニエリスムと洋風画」（『世界美術全集』8、角川書店、1965年）では、第1期洋風画の重要な担い手であったセミナリオ出身画家によって制作された世俗画と、ヨーロッパ・マニエリスムの作品とを比較して、風景における北方的要素、牧歌趣味と古代崇拜、王侯賛美、人物の形にはまった肉付けと陰影法など、両者に共通する要素が多い事実を挙げ、セミナリオ作品は全体として後期マニエリスムに近いものであり、これらの原図の大部分はフランドル製の版画である可能性を指摘した。セミナリオ作品は、統一的合理的遠近法の欠如によりマニエリスムを更に硬化形式化させたが、日本的工夫を加えて桃山装飾画の優れた一側面を形成したとも言える。「レパント戦闘図屏風について（上）―日本初期洋風画とヨーロッパにおけるその背景―」（『美術研究』246、1967年3月）、及び「南蛮美術」（『原色日本の美術』25、小学館、1970年）ではこうした見解を、新資料の追加によってさらに説得力の強いものとしている。

第2期洋風画に関しては同じく第二研究室の陰里鉄郎が主に担当し、江戸を中心に活躍した司馬江漢・石川大浪・垂欧堂田善等の作品研究を行っている。中でも1969（昭和44）年、上記科学研究費を受けて組織された研究班により平戸市松浦資料博物館の洋書を中心とする所蔵品の調査を実施し、江漢の「異国人物風景図」や「食器工場図」（いずれも神戸市立博物館蔵）といった人物画の原図（ルイケン父子「人の営み」）発見への端緒となった（この資料発掘の経緯については、陰里鉄郎「司馬江漢の洋風作品とルイケンの銅版画—江戸洋風画とヨーロッパ版画 二」『ミュージアム』286、1975年1月を参照）。

科学研究費「平安時代における浄土教美術の総合的研究」

（1）浄土教思想と美術、（2）浄土変相及び来迎図の展開、（3）彫刻における定朝様の成立と変遷、（4）大陸における浄土教関係の彫刻及び敦煌莫高窟の浄土変相図の研究を柱に、昭和20年代後半から本格的に研究開発された光学的手法を用いて主要作品の調査が次々と実施され、平安時代後期浄土教壁画の基礎資料が提示されることとなった。

1968（昭和43）年には、平安時代後期を代表する建築である大分・富貴寺大堂壁画の調査が行われた。富貴寺大堂壁画については、早くも1937（昭和12）年に、当研究所による調査が行われ、翌年には『富貴寺壁画』（美術研究資料第6輯）が刊行されていた。この総合研究を契機に、ふたたび同寺仏後壁のX線撮影などが実施され、さらなる資料収集が行われた。また、奈良・法華寺阿弥陀三尊及童子像の光学的調査が行われ、制作年代に諸説あった本像について、画絹や技法の実証的な検討から新たな結論を提示した（柳澤孝「法華寺阿弥陀三尊及び童子像」解説、高田修・柳澤孝『ブックオブブックス 日本の美術9』小学館、1974年）。

1969（昭和44）年には、奈良国立博物館「伝清海曼荼羅」、石川・心蓮社「阿弥陀来迎図」、奈良・興福院「阿弥陀二十五菩薩来迎図」などに対しても、光学的手法を用いた調査研究が進められた。また、京都・三千院「往生極楽院壁画」及び阿弥陀三尊像の調査を行い、従来知られていなかった同像の構造を明らかにした。

引き続き1970（昭和45）年には、来迎図、浄土変相図の調査が進められ、京都国立博物館「山越阿弥陀図」、京都・知恩院に所蔵される「阿弥陀来迎図（早来迎）」、同寺所蔵阿弥陀変相、観経変相などの浄土変相図の調査・撮影が行われた。

科学研究費「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」

中国及び日本の墨蹟・絵画を多数収蔵する正木美術館（1968年開館）の調査を中心とし、そのほかにもMOA美術館が現在所蔵している「断橋妙倫墨蹟」、笠置寺「笠置寺縁起」

などの調査が行われた。1970（昭和45）年度末に研究班が解散したため、まとまった成果は公表されていないが、田村悦子「断橋妙倫の墨蹟について」（『美術研究』261、1969年12月）がある。

特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究」

当時、文化財保護法による美術品の指定も明治時代の遺品が対象となり、また明治維新より百年をむかえ美術資料収集を見直す必要が生じてきたことを受けての研究である。新聞・雑誌その他の基礎資料をもとに、明治初年から編年的に美術関係の教育施設・博覧会・研究団体等の調査、並びに書簡・日記・作品等についての調査を行い、当研究所に既存するものも含めて基礎的資料を集成する広範なものであった。

その成果である『明治美術基礎資料集』（1975年）は、明治維新以後に西洋文化の強い影響をうけ、日本文化が伝統の上に近代化されていく過程を探究するため、収集した資料の中から最も基礎的な内国勸業博覧会（第1・2回）、及び内国絵画共進会の美術関係資料を集成・復刻したものである。内国勸業博覧会（第1・2回）については、1873（明治6）年のウィーン万国博覧会で伝統工芸の出品が好評を博したことを受け、富国政策の一環として伝統美術復興の足がかりとなった博覧会であり、くわえて各地の作家が一堂に会し、互いに技術向上の機会を得ることとなった。またそうした気運の中で、とくに伝統絵画の復活を目指したのが内国絵画共進会であり、これも各流派の交流によって新たな日本画創造の契機となったと位置づけられる。復刻にあたっては当研究所の既存資料の他、国立公文書館及び東京国立博物館所蔵の資料を用いた。また解説は以下の研究者によって分担された。

内国勸業博覧会

沿革 岡畏三郎

工芸・彫刻 中村伝三郎

洋画 陰里鉄郎

日本画 関 千代

内国絵画共進会 関 千代

西欧の美術展と博覧会 坂本 満

なお本研究に先立ち、明治宮殿の杉戸絵について関千代が調査研究を進めており、その成果は「皇居杉戸絵について」（『美術研究』264、1970年3月）にまとめられているが、上記資料集の解説でも造営事業と内国絵画共進会との関連が示唆されている。また坂本満は本研究を経て「近代の胎動」（『原色現代日本の美術』小学館、1980年）で明治初期の

美術をめぐる混沌とした状況を総覧、90年代における美術概念の再検討に先駆けるものとして高く評価されよう。

科学研究費「日本 16・7 世紀における絵画と工芸との相関性の検討」

(1) 画家と工芸家の生活環境の比較及び交渉の文献的考察、(2) 金碧障壁画と蒔絵の手法・デザインにおける関連性、(3) 宗達派における絵画と工芸、(4) 風俗画に見られる染織その他の工芸作品の研究、(5) 絵画及び工芸の各分野に見られる南蛮モチーフの比較などの分担課題のもとに調査研究を進めた。

1970(昭和45)年度には、日光東照宮、高台寺霊屋、都久夫須麻神社本殿などの蒔絵を中心とした工芸建築装飾の調査を行った。また東京藝術大学「光悦筆宗達派下絵謄本」、株式会社松坂屋その他に所蔵される小袖雛形、徳川美術館所蔵の染織品、神戸市南蛮美術館その他に所蔵される初期洋風画や工芸品など、それぞれの課題による調査・撮影を行い、絵画と工芸の意匠性及びその主題の解明にむけた調査研究を進めた。

1971(昭和46)年度には、文献的考察として「土佐家文書」「後藤家文書」「晴豊公記」等から工芸に関する事項を多数見出し、重要な資料を蒐集した。大崎八幡神社、薬師堂、瑞巖寺等の調査では蒔絵を中心とする工芸建築装飾に多くの知見を得た。宗達派の料紙装飾にみる工芸的手法の調査からは、蒔絵などの文様との関連について新たな資料を得た。東京国立博物館所蔵の小袖雛形の調査、及び宮城県白石市片倉家等に所蔵される桃山から江戸前期の染織品の調査によってモチーフとデザインとの関連について研究を進めた。また石川県立美術館、中村記念館等に所蔵される陶磁器の調査、古九谷窯跡及び発掘破片の調査を行ったほか、有田にて柿右衛門関係の諸資料及び柿右衛門窯、今右衛門窯における伝統的窯技についての調査を行った。さらに神戸市南蛮美術館その他に所蔵される初期洋風画や工芸品の調査では主題の解明にむけた資料の蒐集を行い、これら未開拓分野の研究に重要な資料を収集することが出来た。

これらの研究成果のうち陶磁器に関するものは、中川千咲「江戸時代陶芸の流れ」(『MUSEUM』235、1970年10月)、「陶芸」(『ブック・オブ・ブックス日本の美術27』小学館、1971年)、「赤絵」(『日本の美術』71、至文堂、1972年)、「九谷焼」(『日本の美術』103、至文堂、1974年)年などに報告されている。

科学研究費「日本美術の主要作品に関する基礎的研究」

日本美術史上、重要な作品について、美術部に所属する絵画・彫刻・工芸各分野の研究者、及び他部の建築史・物理学等の研究者が協力して、作品の様式的分析及び光学的・

科学的調査を行った。本研究は、各作品の様式・技法・材料などの徹底的な解明と精密な資料の収集を目的としたものであった。1年間という短期間ではあるが、調査対象は、各研究者の専門分野に基づき、特定のジャンル・分野に集中しており、それぞれにまとまった資料群を作り上げている。

その調査対象としては、京都・曼殊院「黄不動像」、京都・神護寺「釈迦如来像」、京都・高山寺「仏眼仏母像」などの仏画をはじめとして、「餓鬼草紙」、「地獄草紙」、「法然上人絵伝」等の絵巻物、京都・万福寺などの黄檗宗に関連する画像、大阪・南蛮文化館、神戸市立南蛮美術館（現、神戸市立博物館）の南蛮関係作品、高橋由一・荻原守衛など明治期の絵画や彫刻、奈良・新薬師寺薬師如来坐像をはじめとする平安時代初期の彫刻、奈良・当麻曼茶羅厨子等の漆芸作品、山形・上杉神社、徳川美術館所蔵の染織品などについて調査が行われた。

科学研究費「院政前期より後期への様式展開に関する研究」

院政前期より後期にかけては、平安時代の伝統の変容と新時代の諸要素の萌芽の時期として見なされ、歴史の転換期として極めて重要な時期と見なされてきた。そのため、本研究においては、歴史、美術史のそれぞれの専門家が連繫することによって、この時期の美術史上の問題点に取り組んだ。

彫刻班は、基準作例である奈良・円成寺大日如来像（運慶作、1176〈安元2〉年）や奈良・長岳寺阿弥陀三尊像（1151〈仁平元〉年）、京都・峰定寺千手観音像（1154〈仁平4〉年）等を調査した。絵画・仏画班は、11世紀から12世紀にかけての基準作である岐阜・来振寺「五大尊像」（1088〈寛治2〉年～1090〈寛治4〉年）、東寺旧蔵で、現在京都国立博物館に所蔵される「十二天画像」（1127〈大治2〉年）、京都・神護寺「釈迦如来像」等多くの作品を調査した。また、絵画・世俗画班では、愛知・徳川美術館、東京・五島美術館「源氏物語絵巻」、東京・出光美術館「伴大納言絵詞」、京都・高山寺「鳥獣戯画及び残欠」、「年中行事絵巻」の調査を行った。装飾文様としては、京都・西本願寺「三十六人集」、守屋コレクション（現京都国立博物館所蔵）装飾経の文様の分類整理を行った。各分野においては、作家などにまつわる諸史料を収集整理した。中でも、この研究を通じて整理された諸資料、特に造像銘記、納入品から、院政期から鎌倉時代初期にかけての仏師の制作者としての意識のありようを読み解いた水野敬三郎「院政期の造像銘記をめぐる二、三の問題」（『美術研究』295、1975年2月）は、施主と仏師の関係、ひいては像内の構造と納入品との関係に説き及び重要である。

この研究を通じて得た知見は、『美術研究』等を通じて発表され、その代表的なものに、

柳澤孝「日野原家本大仏頂曼荼羅について」(285号、1973年3月)、有賀祥隆「〔図版解説〕来振寺本五大尊像」(293号、1974年11月)、江上綏「山水表紙絵のある藤原経の一遺例」(295号、1975年2月)等がある。

科学研究費「法華経絵の研究」

法華経は日本において広く受け入れられた。法華経が大乘の根本的な經典であり、護国のための主要な經典であるという重要性もさることながら、經典の中に豊富な美術的なイメージが盛り込まれていることも、その人気の理由であろう。法華経絵については、古くから宮次男が研究を続けていた(宮次男「談山神社蔵法華経曼荼羅について(上・中・下)」『美術研究』221・222・223、1962年11月・1963年2・3月)。また1972(昭和47)年には、当研究所の監修により、現存する扇面法華経冊子のすべてを網羅した原色図版と研究篇とからなる大冊の『扇面法華経』が鹿島出版会から刊行されている。

1973(昭和48)年に、宮次男を研究代表者として、「法華経絵の研究」の題目で科学研究費を獲得した。この折に、法華経関係經典の見返絵や法華経变相図を中心に、多数の写真資料を収集した。またこの年に、大阪市立博物館で「法華経の美術」展が開催され、その出品作品の調査も行った。

この研究で調査した主な作品は次の通りである。

- (1) 法華経見返絵: 大山祇神社蔵、八杵神社蔵、善通寺蔵、金剛峯寺蔵一品経、中尊寺蔵、本興寺蔵、唐招提寺蔵、百済寺蔵、颯川美術館蔵、東北大学図書館蔵
- (2) 法華経曼荼羅(法華経变相図): 本法寺蔵、海住山寺蔵、西明寺三重塔初層内部壁画、宇佐神宮の神輿障子に描かれた法華経絵
- (3) 今光明経最勝王経金字宝塔曼荼羅
- (4) 中国の作例: 宮城国分寺蔵法華経、宋版細字法華経見返絵(伝香寺蔵、善通寺蔵、保国寺蔵)

この間の主な研究成果は以下の通りである。

宮次男『金字宝塔曼荼羅』(吉川弘文館、1976年)

江上綏「延暦寺蔵金銀交書法華経の荘厳画」(『美術研究』309、1979年2月)

宮次男「金字法華経絵について」(『金沢文庫研究』25-3、1979年5月)

宮次男「法華経絵について」(『新修日本絵巻全集』25、角川書店、1979年)

宮次男「法華経美術の特質」(『法華経の美術』佼成出版社、1981年9月)

「中国絵画史の研究」

1956（昭和31）年から1981（昭和56）年までの長期にわたって行われた研究で、美術部における中国絵画研究の根幹をなす事業であった。時代的には唐・宋・元・明・清のみならず民国期や現代、地域的には来舶画家までを対象として、広く作品並びに画家資料の収集と調査を継続的に行ったことに特色があった。主な調査先（対象、年度）は、香港の個人コレクション（明清画・民国期及び現代絵画、1975）、台北故宫博物院（宋画、1975）、白鶴美術館・大英博物館・ギメ美術館・アメリカ諸施設（敦煌絵画、1976）、大阪市立博物館（明清画、1976）、台北故宫博物院（元画、1977）、台北個人コレクション（明清画・近現代絵画、1978）、国立中央図書館及び台湾大学図書館（民国期画家資料、1978）、長崎県立長崎図書館及び東北大学狩野文庫（来舶画家資料、1978）、大阪の個人コレクション（来舶画家作品、1978）、上海・洛陽・西安・蘭州・ウルムチの各博物館（館蔵資料、1979）、ギメ美術館・パリ国立図書館・大英博物館（敦煌将来絹絵・紙絵、1979）、台北故宫博物院（元明画、1979）、国泰美術館（明清画・近現代絵画、1979）、国立国会図書館・東京都立中央図書館・蓬左文庫・名古屋市舞鶴中央図書館（来舶画家資料、1979）、大阪の個人コレクション（来舶画家作品、1979）、福岡市美術館（「近代アジアの美術」展出品の近代中国絵画作品及び資料、1979）、台北故宫博物院（明画、1980）、カリフォルニア大学美術館（館蔵中国画、1980）、デ・ヤング美術館（館蔵中国画、1980）、クリーヴランド美術館（館蔵中国画、1980）、フリーア美術館（館蔵中国画、1980）、メトロポリタン美術館（館蔵中国画、1980）、大阪及び兵庫の個人コレクション（来舶画家作品、1980）、カリフォルニア大学バークレー校（近現代画家資料、1980～81）、ハーバード大学（近現代画家資料、1981）、フォッグ美術館（近現代画家資料、1981）、フリーア美術館（近現代画家資料、1981）、メトロポリタン美術館（近現代画家資料、1981）がある。成果は川上涇、鶴田武良、関口正之、上野アキ、柳澤孝により、『美術研究』誌上ほか順次発表され、それらは現在でも基礎資料としての重要性を失っていない。

「中央アジア古代絵画史研究」

美術部は、西域美術の研究を積極的に行ってきた。その中で、もっとも中心となったのは、大谷探検隊の収集した西域美術遺品の研究であった。大谷探検隊の収集品は、探検隊の帰国後に刊行された『西域考古図譜』（1915年）や『新西域記』（1937年）などで紹介されたが、発見地についての詳細な記述に欠け、さらに学術的な考察が不足するなど、種々の問題をかかえていた。加えて、遺品の多くについて、戦後しばらくの間、その所在がつかめない状況にあった。現在東京国立博物館や龍谷大学などが所蔵する大谷

探検隊収集品を調査したのは、熊谷宣夫と上野アキであった。熊谷は、戦前、朝鮮総督府博物館において大谷探検隊収集品の整理、研究に携わったのをきっかけに、戦後もこの分野の研究をリードした。ミーラン、コートン、キジル、クムトラ、ベゼクリクなどの遺蹟から収集された様々な遺品について、実物に即した調査を行い、写真撮影による資料収集に努めた。大谷探検隊員らが残した記録類を丹念に調べ、さらに諸外国の探検隊の収集品に関する図録類や報告書を参照して、遺品の詳細な研究を行い、多くの論文を発表した（熊谷宣夫「ベゼクリク第20窟寺将来楽人図」『美術研究』218、1962年3月等）。

一方で美術部は、諸外国の関連機関との間で、この分野の国際的な交流を強力にすすめた。1953（昭和28）年には、パリのギメ東洋美術館と資料の交換を行い、ペリオが撮影した原板より焼き付けた敦煌莫高窟の写真346枚、トゥムシュック、キジル、クムトラ、ドゥルドルアクール、スバシなどの遺蹟関連の写真243枚を受け入れた。また、1967（昭和42）年には、レニングラードのエルミタージュ博物館より、西トルキスタン、東トルキスタン、カラホト、敦煌などの写真149枚を寄贈された。ペリオの収集品についての研究は、主として秋山光和が行った（秋山光和「ペリオ調査団の中央アジア旅程と其の考古学的成果（上・下）」『仏教芸術』19・20、1953年10・12月）。エルミタージュ博物館の作品については、上野アキが中心となって研究を進めた（上野アキ「エルミタージュ博物館所蔵ベゼクリク壁画誓願図について」『美術研究』279、1972年4月）。

さらに、美術部は秋山光和、柳澤孝、上野アキらが中心となって、敦煌莫高窟についての研究にも早くから着手した。石窟の編年、変文と絵解きの問題（秋山光和「敦煌本降魔変（牢度叉闍梨変）画卷について（附載）牢度叉変相色紙形文字」『美術研究』187、1957年3月）、説法表現の図像的解釈（秋山光和「弥勒下生経変白描粉本と敦煌壁画の制作」『西域文化研究第六』法蔵館、1963年）、アメリカ所在の敦煌壁画の研究と紹介（秋山光和「唐代の敦煌壁画—フォッグ美術館所蔵の断片を中心に」『仏教芸術』71、1969年6月）などについて研究を進めた。

「中央アジア古代絵画史研究」と名付けた研究は、上野アキが行ったものである。先にも述べた通り、上野は大谷探検隊の収集品について研究を進めるとともに、新疆ウイグル自治区トルファン地区の遺蹟出土品の研究を、ヨーロッパや中国の報告書をもとに行った。1968（昭和43）年に東京国立博物館に東洋館が開館し、大谷探検隊収集品が収蔵、展示されたことによって、上野は、大谷探検隊収集品の調査をより積極的に、かつ継続的に行った。1973（昭和48）年には、科学研究費「中央アジア絵画における東方要素とその浸透についての検討」を受け、国内に所在する中央アジア絵画と模本類の調査を進め、かつ敦煌絵画研究の成果を踏まえて、中央アジア絵画にみられる東方の要素に

について考察した。また、龍谷大学や天理参考館が所蔵する「伏羲女媧図」について、外国に所在する類品との比較を通して、墓葬画として特質を抽出した（上野アキ「アスタナ出土の伏羲女媧図について（上・下）」『美術研究』292・293、1974年3・11月）。

上野は、海外の美術館、博物館に収蔵される中央アジア関連の遺品や現地遺蹟の調査も積極的に行った。1966（昭和41）年7月から9月にかけて、ヨーロッパでは大英博物館、ギメ東洋美術館、ベルリン国立博物館（インド美術館）の中央アジア関連遺品を、インドではニューデリー国立博物館のスタイン収集品の調査を行った。1976（昭和51）年10月から12月にかけて、文部省の在外研究員としてアメリカとヨーロッパの美術館や博物館を訪ね、中央アジアの遺品を調査した。さらに、1979（昭和54）年にはトルファンを、1980（昭和55）年には敦煌を訪ねた。1976（昭和51）年の欧米調査以降は、ドイツ探検隊のル・コックが収集した壁画断片について、実物調査の成果に基づいて、詳細な研究を発表した（上野アキ「キジル日本人洞の壁画—ル・コック収集西域壁画調査（1）」『美術研究』308、1978年10月等）。1980（昭和55）年以降は、「東洋絵画史研究」あるいは「東洋古代絵画史研究」の一環として、中央アジア絵画の研究を続けた。

「朝鮮仏画の研究」

1976（昭和51）年度から翌年度にかけて科学研究費「朝鮮の9～16世紀の仏教美術に就ての総合的研究—特に日本国内の所蔵品調査を中心として—」の絵画部門担当として上野アキ、江上綏により行われた。この分野では先行研究として熊谷宣夫「朝鮮仏画徴」（『朝鮮学報』44、1967年7月）が知られていたが、作品を目にする機会もほとんどない状況で、上野は高麗時代の仏画を重点的に調査し、カラー撮影により高麗独特の細部の技法の解明に努めた。これらについては美術部研究会で「朝鮮仏画の種々相」として研究発表を行い、また1977（昭和52）年10月韓国芸術院で開催された第6回アジア芸術シンポジウムに参加し、「日本所在の韓国仏画」と題して発表を行った。当時韓国には高麗仏画の現存作品がほとんど無かったため大きな関心と呼んだ。これらはその後『高麗仏画』（朝日新聞社、1981年）収録の論文に発展した。また直接の成果ではないが、当研究に関わった江上綏もその後『南禅寺所蔵「秘藏詮」の木版画』（山川出版社、1994年）の執筆者に加わっている。

「日本古代中世絵画史の研究」

この研究テーマは、日本の古代及び中世の絵画について、様々な角度から研究を行うために設定された。1975（昭和50）年に美術部の一般研究として始まり、1977（昭和

52) 年に情報資料部が発足してからは、美術部と情報資料部の両部にまたがる研究テーマとなった。1982(昭和57)年からは、美術部の一般研究からこのテーマが消えており、もっぱら情報資料部の研究テーマとなり、1983(昭和58)年まで実施された。1984(昭和59)年からは、情報資料部の一般研究は「日本中世美術の研究」と名を改めた。研究の細目は時期によって異なるが、次の諸テーマによって、研究が行われた。

(1) 高松塚古墳壁画の研究

文化庁の依頼により、双眼実体顕微鏡による観察と写真撮影を実施し、壁画細部の図様と彩色技法について検討を加えた。

(2) 日本仏教絵画史の研究

平安時代の絵画関係資料について記録や文献を渉猟し、その収集に努めるとともに、光学的手法による「真言八祖行状図」の実証的な研究を行い、その関連資料として、永久寺関係の資料や東寺伝来の「山水屏風」を調査した。また栄山寺八角堂の莊嚴画、東寺「西院曼荼羅」などの調査を行った。

(3) 経絵の研究

中尊寺、談山神社、立本寺に所蔵される金宝塔曼荼羅の研究をまとめるとともに、金剛証寺蔵法華経や延暦寺蔵金銀交書法華経の表紙と見返絵、根津美術館「十二因縁絵巻」、畠山美術館「法華経絵巻」、台北故宮博物院蔵の宋代から明代の版経挿絵などの調査を実施した。

(4) 絵巻物の研究

「平治物語絵巻」の画面構成と制作年代、東寺本「弘法大師行状絵巻」の成立に関する諸問題を考察し、遊行上人縁起絵諸本の系統に関する研究を行った。武藤家「歓喜天靈驗記」、「天狗草紙」、安楽寿院「高祖大師秘密縁起」などの調査を行った。

(5) 肖像画の研究

藤原隆信に関する「松雲寺文書」など、鎌倉時代の肖像画に関する基礎資料の収集を行い、藤原隆信・信実と「似絵」に関わる研究をすすめ、さらに信実の末裔の画家たちに関わる基礎資料を収集し、検討した。またアメリカの美術館や個人が所蔵する絵巻物の調査を行った。

(6) 日本古代文様の様式的、形式的研究

天神社蔵法華経料紙の文様、正倉院関係の文様、関連ある大陸の文様等について研究した。

(7) 仏涅槃図の研究

尾道の浄土寺、耕三寺、岡山の自性院、安養院、常念寺、橘寺などの涅槃図及び釈迦

八相図の調査と撮影を行った。

(8) 密教絵画の研究

各種の密教尊像画、両界曼荼羅、白描図像の調査研究と資料収集を行い、浄土寺「両界曼荼羅図」、西明寺三重塔柱絵金剛界三十二尊、靈雲寺「五秘密像」、日野原家本「十一面観音像」などを研究し、紹介した。

(9) 垂迹画の研究

千葉県福善寺「四社明神像」等の調査を行った。

(10) 科学的方法による古代絵画の材質・技法に関する研究

科学研究費「科学的方法による東洋古代中世絵画の材質・技法に関する研究」(特定研究)の一環として、東寺「五大尊像」、「金棺出現図」(当時は松永記念館蔵)、山梨県大善寺「不動明王像」、東寺「十二天屏風」などを調査した。

(11) 仏画に施された彩色文様及び截金文様の研究

上記の東寺「五大尊像」、「金棺出現図」を対象に彩色文様と截金文様の研究を行った。

(12) 厳島神社五重塔初層壁画の研究

壁画及び柱銘文に関する調査を行った。

(13) 浄土経絵画の研究

法華寺「阿弥陀三尊三尊及び童子像」、清涼寺「迎接曼荼羅図」などを調査した。

(14) 料紙装飾を中心とする古代中世絵画の研究

アメリカ西海岸の美術館等に所在する遺品の調査を行い、カリフォルニア大学と共同研究を行った。また国内では、東京国立博物館法隆寺宝物館の梵網経見返し、金剛証寺「紺紙金字莊嚴経」などを調査した。

(15) 法然上人絵伝(掛幅本)の研究

三重県西導寺蔵の「法然上人絵伝」の調査を実施し、先行する伝記のテキストと伝記絵との比較研究を進め、伝記絵諸本における掛幅本の位置付けを試みた。また、そのほか、妙定院本、増上寺本、東博本、光照寺本、妙源寺本、岡山県博本などの「法然上人絵伝」を調査し、その系統的な研究を行った。

(16) 鎌倉時代絵画の作家研究

中世絵画作家の研究の一部として、法隆寺「堯尊筆聖徳太子勝鬘経講讃図」及び「蓮池図」などを調査した。

(17) 在米日本仏画の研究

ローゼンフィールド(ハーバード大学教授)らと共同して、アメリカ各地の美術館や個人所有の作品を調査した。

(18) 鎌倉時代仏教絵画研究

薬師寺板絵神像などを調査した。

(19) 仏教説話画の研究

聖衆来迎寺「六道絵」、広島県持光寺「釈迦八相図」などを調査した。

(20) 鎌倉時代高僧伝絵の研究

東寺「弘法大師行状絵巻」などの調査、研究を行った。

(21) 古代・中世やまと絵の研究

フリーア美術館が所蔵する平安・鎌倉時代やまと絵の調査を行った。

(22) 経典莊嚴画研究

善導寺「観普賢經」をはじめとする莊嚴画を調査、研究した。

(23) 中世絵画史研究

科学研究費による研究に関連して、京都泉涌寺の寺宝などの調査を行った。また、鎌倉時代の年紀をもつ絵画作品に関する資料収集を行った。

(24) 年紀資料研究

10世紀から14世紀にいたる絵画作品の中で、制作年代が明記されている作品の奥書、賛、銘記などを解説し、翻字した。

(25) 山水・景物画の研究

日本、中国の山水表現の資料を収集した。また、日本中世絵画に見られる景観表現の特殊性を、地図、絵図、説話画を対象に、検証した。

テーマが多岐にわたることから、その成果は数限りないが、主なものを挙げるならば、次の通りである。柳澤孝「真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵(1～5)」(『美術研究』300・302・304・332・337、1976年1・3月・1977年3月・1985年6月・1987年2月)、宮次男『金字宝塔曼荼羅』(吉川弘文館、1976年3月)、米倉迪夫「藤原信実考」(『美術研究』305、1977年3月)、江上綏「延暦寺藏金銀交書法華經の莊嚴画」(『美術研究』309、1979年2月)など。

「近世絵画資料の収集と研究」

国内外に所蔵される近世諸画派の作品調査及び文献調査を行い、江戸時代に数多く輩出された画家についての伝記や画業を詳らかにする資料の収集と研究を行った。

1975(昭和50)年度は河野元昭によって宗達光琳派の研究として、フリーア美術館、ボストン美術館、心遠館(エツコ&ジョー・プライスコレクション)等の在米宗達光琳派作品の調査・撮影を行い、この調査による成果は美術部研究会及び美術史学会東京支

部例会などで報告したほか、「光琳水墨画の展開と源泉」(『水墨美術大系』10、講談社、1975年10月)などにまとめ、国内ではあまり知られていなかった絵画資料を広く紹介した。また河野は狩野派・雲谷派の研究の一環として「探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画(上・下)」(『美術研究』298・299、1975年3・11月)に研究論文を発表したほか、科学研究費「瀬戸内海沿岸諸地域における近世絵画資料の調査研究」(研究代表者・吉澤忠)、及び「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」(研究代表者・山根有三)に参加し、狩野派及び雲谷派の絵画作品の調査・撮影を行った。

また江戸洋風画についての研究が陰里鉄郎によって進められ、オランダ国立ライデン民族学博物館等に所蔵される川原慶賀作品に関する調査研究を行い、その成果を「川原慶賀筆西洋人物図」(『季刊美術』48、1975年6月)、「川原慶賀を中心に」(『シーボルトを中心とした浮世絵展目録』1976年3月)等に発表した。また1975(昭和50)年12月6日に東京国立博物館講堂で行われた開所記念講演会において「長崎と洋風画」という題目で、長崎で活躍した洋風画家の作品とその制作状況について講演を行った。

1976(昭和51)年度には、引き続き河野によって宗達光琳派の研究が推進され、仁和寺「御室御記」などの文献資料調査を行ったほか、これまでの作品及び文献資料の調査研究成果を『尾形光琳』(『日本美術絵画全集』17、集英社、1976年)にまとめ、広く紹介し、その後の光琳研究に寄与した。また円山派の研究として、円満院所蔵円山応挙関係資料の準備調査を行ったほか、復古大和絵派の研究として科学研究費「江戸時代障壁画の研究」(研究代表者・辻惟雄)に参加し、岡田為恭筆「大樹寺障壁画」などを調査した。

また前年度に引き続き陰里によって江戸洋風画の研究が進められ、海外所蔵作品の調査を継続することに並行して国内の川原慶賀作品の調査研究を行い、さらに長崎派の他の画家をも研究対象に拡大し、その成果は「長崎洋風画」(『江戸時代図誌』25、筑摩書房、1976年)、「川原慶賀考」(『美術研究』306、1977年3月)などに発表した。

「日本彫刻史の研究」

当研究所においては、彫刻作品を系統的に理解するのに必要な材料、構造、技法に関する基礎的情報を取得することを目的として実地調査を行い、なおかつ、比較例として必要な海外の作品や作品の史的裏付けに必要な造像銘や文献資料などの文字史料の蒐集を併せ行ってきた。

昭和20年代よりX線やガンマ線を用いた光学的方法を利用して、彫刻作品の内部構造や技法を明らかにすることを試み、構造の不明であった金銅仏、塑像、乾漆像などの構造解明に寄与してきた。また、これらの光学的手法は構造の解明ばかりではなく、像

内納入品の発見による制作者の同定に大いに有効であった。例えば、従来運慶作であることを否定されていた静岡・願成就院阿弥陀如来坐像、不動三尊像、毘沙門天像が、X線撮影による像内納入品の確認により運慶作であることが明確になったことは、運慶に対する見方に大幅な変更を迫るものであり、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての彫刻史に多大な影響を与えた。

このような光学的方法を利用した彫刻の基礎的調査・研究は、(1) 古代彫刻史の研究、(2) 平安鎌倉時代彫刻史の研究、(3) 尊像別分類による彫刻の研究の3テーマに基づき、作品調査と文献資料の収集を両輪として進められた。

1976(昭和51)年には、法隆寺戊子年銘釈迦及び脇侍像、野中寺弥勒菩薩半跏像の銘文の撮影、浄瑠璃寺四天王像の透過X線撮影、塑造である奈良・岡寺如意輪観音像の調査が行われた。1977(昭和52)年には、引き続き岡寺・如意輪観音坐像の調査が行われるとともに、従来構造や鑄造技法が不明であった京都・蟹満寺釈迦如来像、奈良・飛鳥寺釈迦如来像の像内をファイバースコープにより撮影、福島・能満寺の木心乾漆造虚空蔵菩薩像のX線撮影、京都・浄瑠璃寺四天王像のガンマ線撮影、東京藝術大学所蔵の金銅仏のガンマ線撮影を行うなど多くの調査を行った。1978(昭和53)年には、やはり木心乾漆像である奈良・興福院阿弥陀三尊像、奈良・額安寺虚空蔵菩薩像の調査を行い、乾漆像の構造解明に努めるとともに、神奈川・荏柄天神像や京都・仲禅寺仁王像などの在銘作品の調査を行った。1979(昭和54)年には、日本の古代彫刻の源流の一つとして中国の作品調査を始め、日本に所在する石造仏を中心としたコレクション及び中国での実地調査、また、宮城・船形山神社菩薩立像などをはじめとする朝鮮半島製の金銅仏の調査を行った。また、奈良国立博物館の在銘舞楽面など、作家資料収集に努めた。1980(昭和55)年には引き続き、中国彫刻の研究として敦煌莫高窟、炳靈寺石窟、甘肅省博物館などの石造仏の調査を行った。また、保存科学部との共同研究として、X線透過撮影の技術をさらに修理や保存の現場で応用するために、仏像の内部に使われている釘などの寸法と位置を、X線立体写真の実態視による観察と一対の写真画像から計算処理によって定量的に求める方法を研究した。その手法を、後補の彩色により構造が不明であった、運慶作との伝承のある愛知・滝山寺帝釈天立像に応用し構造に関して新たな知見を得た。1981(昭和56)年には、朝鮮半島製と見られる金銅仏の鑄造技法を理解するために、遺品の調査を行い、そこで得た知見に基づいて鑄型の制作と鑄造を行った。また、体系的な把握がなされていなかった神像彫刻の調査が開始された。

これらの実地調査と平行して、文献史料からの作品研究としては、仏師及びその系譜に関して造像銘などの資料を収集し年代順に整理を行う作家資料の研究が挙げられる。

仏像の像内銘や納入物に記された作家名及びその伝記の収集を行い、あるいは、京都における院派仏師の在銘彫刻をはじめ、新たな銘文資料を見出すための現地調査が行われた。作家資料に関する成果は、『美術研究』等に逐次報告されるとともに、資料集『造像銘記集成』（東京堂出版、1985年）として出版され、学界の大いに裨益するところとなった。また、尊格ごとに形式の変遷や図像学上の問題を時系列的に明確にすることを目的とし、関連資料を収集・整理を行った尊像別分類による研究も継続的に行われた。

「日本工芸史の研究」

(1) 近世初期染織品の研究、(2) 小袖の研究、(3) 伝統的染織技術の調査・研究、(4) 上代裂の研究、などの題目で神谷栄子により調査研究が行われた。

近世初期染織品の研究については、米沢市上杉神社所蔵の上杉謙信所用袴類及びビロード洋套、宮城県白石市の片倉家伝来胴服・陣羽織類、紀州東照宮伝来服飾類、徳川黎明会所蔵の尾張徳川家第三代綱誠所用縞麻羽織などの調査研究を行った。このうち、紀州東照宮の染織品については『美術研究』（306・310・311、1977年3月・1979年6・10月）に発表した論考にさらにのちの調査研究を加えて『紀州東照宮の染織品』（芸艸堂、1980年）にまとめた。

小袖の研究については、紀州東照宮所蔵の家康所用小袖4領の調査研究、徳川美術館所蔵作品及び石見・益田家伝来綾小袖などの調査を行ったほか、白石市片倉家伝来黒縞子小袖の研究を修復技術部と共同で行った。

伝統的染織技術の調査・研究については型染、絞り染、緋、花織、紬、緞通、縮、麻織物、芭蕉布などの技法について、沖縄本島及び八重山・宮古群島・久米島地方、福岡、佐賀、長崎、京都、名古屋、新潟、長野、新潟、富山、石川などで現地調査を行った。これらの調査結果は『日本染織芸術叢書 型染』（芸艸堂、1975年）、「舶載の染織」（神谷栄子・山辺知行『日本の染織 4』中央公論社、1983年）などにまとめられた。また日本工芸会で1978（昭和53）年度から4ケ年の計画で行われた東京国立博物館「白地風景模様茶屋染帷子」の復元メンバーになり、調査研究記録を担当した。1980（昭和55）年度には、科学研究費「近代日本における画卷の研究」において風俗・服装関係について研究を担当した。

上代裂の研究は東京国立博物館所蔵の法隆寺裂や正倉院裂、京都国立博物館所蔵作品などの調査を行い、1980（昭和55）年度からは東京国立博物館の特定研究の分担者として研究を行い、また併せて毎年秋には正倉院展出陳染織品の調査を通じて進めた。

以上、継続して基礎的調査を進め、染織作品資料の収集及び伝統的技術の体系的な研

究を行うことにより、日本染織史研究に寄与した。

「和漢書道史の研究」

本研究は田村悦子が進めた。1975（昭和50）年から翌年にかけては（1）「日本書道の歴史的研究」と（2）「異体字の歴史的研究」を二大テーマに掲げ、（1）では日本書道の最高峰である平安時代書道を代表する三蹟（小野道風、藤原佐理、藤原行成）について、基礎的研究として各遺品の釈文・釈義より始める再検討を行うとともに、和読解義等の基礎にいろいろ難問のある『去夏帖』の調査研究を行い考察に至っている。（2）では、多年にわたって収集した異体字資料を体系化し、中国の異体字文献（碑別字等）を参照して日本資料から収集に入らなかった形体等を補充した。さらに、1976（昭和51）年には「惰性的になっていた江戸時代の書道を立ち直らせる努力は同末期から始まるが、明治に入って政治・社会の一大変革とともに心ある書家の識見をまっぴら見るべきものに至った」と評価し「この注目すべき現象に対していささか考察を」（『要覧』1976年度）行っている。

1977（昭和52）年から1980（昭和55）年にかけては、（1）「日本書道の美術史学的研究—日本書道の遺品の精査研究—」、（2）「基準古筆切の集録研究」、（3）「日本書道の文字学的研究—特に異体字の研究—」の3テーマで調査研究が行われた。（1）では、日本書道の最高峰である平安時代書道を代表する三蹟（小野道風、藤原佐理、藤原行成）の作品ならびに伝記を実証的に研究し、日本書道史における三蹟の歴史的意義を明らかにしている。（2）では、古筆切の採訪整理が本筋の書道史研究の重要な資料であるのみならず、文学・史学にも貴重な材料を提供することから、諸所に蔵される手鑑その他に収められる古筆切の撮影に始まり、その時代・筆者・品名を明らかにして分類・整理し、研究者への便宜をはかろうとした。特に絵巻絵詞を切った古筆切が絵画史研究に不可欠のものであるとの認識のもと、これに注意を向けている。（3）は1975（昭和50）年から行われてきた研究を継承・展開させるもので、研究は中世に及び、宋風の書の感化にみられる親鸞の書籍中の異体字研究に向かう。

そして、1981（昭和56）年には、（1）「仏教書道史の研究」として親鸞の坂東本『教行信証』の成立改訂の段階を明らかにし、さらに、（2）「文芸と書道との干渉の研究」として和歌の書式を整理しつつ口誦文芸と書道の相互展開や意義を考究、（3）漆に漬けられ硬化して土中に残存した文書類である「漆紙文書の研究」にまでテーマを拡げている。

その成果には、「〔図版解説〕天理・旧松永本『源氏物語絵巻』詞書（桐壺）断簡—熱海美術館蔵国宝手鑑「翰墨城」所収」（『美術研究』307、1978年9月）、「藤原佐理書状

去夏帖について一搏の単位は材か村か—」(『美術研究』308、1978年10月)、「法然寺本地蔵菩薩靈驗絵巻の逸出した詞書—古筆栗田口切について」(『新修日本絵巻物全集』29、1980年)、「散文(物語・草子類)中における和歌の書式について」(『美術研究』317、1981年7月)、「親鸞の、特に坂東本『教行信証』の筆蹟について(上・下)」(『美術研究』318・320、1982年1・6月)、などがある。

「近代日本美術史の研究」

本研究は、美術部第二研究室において岡畏三郎、中村伝三郎、関千代、陰里鉄郎、三輪英夫、これに東京国立近代美術館の三木多聞が参加して進められた。幕末明治初期から昭和期にいたるまでの日本画、洋画、彫刻を対象に、総合的に研究が行われた。ただし、1975(昭和50)年の調査研究について、下記に挙げるように各研究員が個別的にテーマをもち進められていた。

(1) 幕末明治初期の画家のうち主として日本画家の作品、伝記資料についての調査研究(関千代)。

(2) 黒田清輝、青木繁、古賀春江などの書簡文献資料の調査、特に橋口家収蔵黒田清輝書簡289点について調査整理、梅野家収蔵青木繁書簡、松田家収蔵古賀春江書簡の調査。大正期における二科会、院展洋画部、草土社などの新興美術団体の調査、作品・文献資料の調査(陰里鉄郎)。

(3) 大正・昭和期の彫塑界の動勢について、特に北村西望の業績に関する諸資料の収集調査、評伝作成(中村伝三郎)。

(4) 版画史の研究—浮世絵版画及び明治以降新版画運動に関する調査(岡畏三郎)。

なお、このように継続された各種の調査研究の成果の一部は、下記に挙げる『美術研究』に掲載され、公表された。

岡畏三郎「山下りんの伝記と作品」(『美術研究』279、1972年4月)

岡畏三郎「草土社の創立について」(『美術研究』297、1975年3月)

関千代「〔研究資料〕狩野芳崖の書状—十一月六日(安政四)年付—」(『美術研究』311、1979年10月)

陰里鉄郎「川原慶賀考1」(『美術研究』306、1977年3月)

陰里鉄郎「〔図版解説〕五姓田義松筆『人形の着物』」(『美術研究』313、1980年3月)

陰里鉄郎「〔図版解説〕関根正二筆『死を思ふ日』」(『美術研究』315、1980年12月)

三輪英夫「洋風画法による達磨図について」(『美術研究』311、1979年10月)

また以上の他に、この研究に関連した主な単行書等は下記のとおりである。

岡畏三郎監修・鹿島卯女編『山下りん 黎明期の聖像画家』（鹿島出版会、1976年）

中村伝三郎編著『北村西望彫塑大成』（講談社、1976年）

中村伝三郎編著『近代の美術 39 荻原守衛とその周辺』（至文堂、1977年）

関千代編著『現代日本美人画全集 6 中村貞以』（集英社、1978年）

関千代編著『近代の美術 60 近代の肖像画』（至文堂、1980年）

関千代編著『皇居杉戸絵』（京都書院、1982年）

陰里鉄郎編著『近代の美術 29 萬鉄五郎』（至文堂、1975年）

陰里鉄郎編著『巨匠の名画 10 青木繁』（学習研究社、1976年）

陰里鉄郎編著『原色現代日本の美術 5 日本の印象派』（小学館、1977年）

陰里鉄郎編著『近代の美術 50 村山槐多と関根正二』（至文堂、1979年）

陰里鉄郎編著『夏目漱石・美術批評』（講談社、1980年）

三輪英夫『近代の美術 53 百武兼行』（至文堂、1979年）

「日本古代中世の料紙に施された絵画の研究」

本研究は、江上綏が推進したものであった。經典見返し絵や料紙に施された絵画などの小画面絵画の研究は、小画面絵画としての歴史的展開、描線の様式的展開、大画面絵画との影響関係を含む図像学的問題など、様々な側面から深められてきた。とりわけ、この類の絵画作品は、作品点数が多く網羅的な調査が必要とされると同時に、小画面絵画の中での歴史的・様式的変遷を明らかにするだけでなく、この小画面絵画を絵画史全体の上で、どのように位置づけるかは重要な問題であった。また、小画面絵画に施された文様についても、大陸の文様表現との比較に基づき、形式的・様式的研究が進められた。

1968（昭和43）年より西本願寺「三十六人家集」の料紙装飾の調査が行われた。見返し絵のX線写真を撮影し、表紙絵や青紙が貼られて見ることの出来ない文様を確認した。同年には静嘉堂美術館「和漢朗詠集」の調査も行われた。1971（昭和46）年には、絵画的様式的見地から「三十六人家集」と制作年代の近い奈良・興福寺「紺紙金地成唯識論」の調査を行い、従来紹介のなかった同作品の報告を行った（江上綏「興福寺蔵紺紙金字成唯識論の莊嚴画」『美術研究』277、1972年2月）。1973（昭和48）年からは、滋賀・西明寺三重塔の法華経変相図等の大画面壁画の共同調査（「法華経絵の研究」）により、描かれた文様や自然物の描写についての研究が深められた。同時に静岡「本興寺法華経」、和歌山「金剛峯寺法華経（中尊寺経）」、滋賀「百済寺法華経」など、平安時代の紺紙金地法華経經典の調査が並行して行われており、法華経絵画に描かれたモチーフなどの比

較研究が進められた。

1974（昭和49）年には、引き続き、共同研究「法華経絵の研究」の一環として、法華経經典の見返し絵や法華経变相図などの写真資料の収集を行った。研究対象としては、欧米の美術館博物館所蔵の作品にも視野を広げて精力的な実地調査を行い、また平安時代の書跡資料に施された絵画的装飾について絵画史的見地から検討を加えた。

これらの成果は、逐次『美術研究』に報告され、「山水表紙絵のある藤原経の一遺例」（295号、1975年2月）、「神光院藏紫紙銀字心経莊嚴画の山水表現」（301号、1976年2月）、「延暦寺藏金銀交書法華経の莊嚴画」（309号、1979年2月）、「〔研究資料〕法隆寺伝来紺紙金字梵網経の表紙絵」（312号、1980年2月）、「新出の金剛証寺藏紺紙金字莊嚴経」（314号、1980年9月）、「芦手朗詠集の下絵について」（320号、1982年6月）等がある。

「日本古代文様の様式的、形式的研究」

江上綏は、古代より日本において用いられた文様を対象に、様式上の展開に関する研究を進めてきた。とくに1973（昭和48）年から1980（昭和55）年にかけて、様々な文様や意匠の源流を大陸に求め、日本における文様の展開を大陸との関係から捉えようとしていた。

中でも装飾古墳などに見られる直弧文は従来、日本独特の文様だと考えられてきたが1973（昭和48）年10月に、「東亜文様・意匠の源流と展開／10直弧文」（『日本美術工芸』42）を發表し、青海波、七宝つなぎ、亀甲、渦巻水波文、唐鏡背文のベルシア風構成、魚子地、植物的装飾のある動物と並んで、直弧文もまた大陸との関係から位置づけ直した。さらに1976（昭和51）年9月に、「直弧文鏡背の源流について」（『日本美術工芸』456）を發表し、やはり直弧文の源流が大陸に求められることを論じた。

「近世絵画史（江戸時代洋風画）の研究」

1977（昭和52）年度から4ケ年にかけて、陰里鉄郎、三輪英夫によって江戸時代洋風画を中心とする研究が行われた。これ以前に行われていた研究を継続し、陰里によって国内の川原慶賀作品の調査、さらに長崎派の他の画家を研究対象に拡大して調査を進めた。新資料の紹介として、三輪英夫「若杉五十八の新資料『鷹匠図』」（『MUSEUM』325、1978年4月）等にその成果の一部を報告した。

1979（昭和54）年度には、若杉五十八、荒木如元をはじめとする長崎系洋風画の調査を行い、また重欧堂田善の作品と文献資料について調査を行った。継続的に行われた江戸時代洋風画の研究の成果の一部として、三輪英夫「洋風画法による達磨図について」

(『美術研究』311、1979年10月)では、17世紀から18世紀にかけて多数制作された洋風画法による仏教人物画についての論考を発表し、17世紀初頭に制作された南蛮美術など初期洋風画と、司馬江漢らに代表される18世紀後半以降に盛んに制作された洋風画とを、画風・技法の点で橋渡しし、結びつける作品群として位置付け、江戸洋風画研究の進展に寄与した。また、陰里は江戸派における写生画法の成立過程についての調査の共同研究(代表者・山川武)に参加した。

1980(昭和55)年度には、オランダ所在川原慶賀作品の来日を機に陰里が作品調査を行い、継続的に行ってきた研究の成果の一部を「川原慶賀について」(『川原慶賀展』目録、西武美術館、1980年)にまとめた。また東京藝術大学芸術資料館所蔵の洋風絵画の調査を行い、町田市立博物館で開催された「亜欧堂田善展—我国における銅版画風俗画の先駆者」に関連した「亜欧堂田善と江戸洋風画」と題する講演を1980(昭和55)年10月に行った。さらに江戸後期の洋風画家の作品、ことに長崎派の絵画を中心に調査を継続して行い、その成果の一部は、三輪英夫「江戸時代後期の絵画・長崎の洋風画」(『週刊朝日百科 世界の美術』128、1980年9月)に発表した。

1981(昭和56)年度には、陰里・三輪の両名により、小田野直武、佐竹曙山をはじめ、江戸時代後期洋風画家による花鳥画を中心に調査を行い、江戸時代洋風画についての資料収集に努めた。

「日本近代絵画史の研究」

本研究は、下記の3項にわたって進められた。

- (1) 研究所が所蔵する黒田清輝の作品を中心に主題と図像表現についての研究の継続。
- (2) 大正期において極度に個性的な画家とその作品について調査した。
- (3) 明治初期の洋画家百武兼行の画歴の調査をした。

これらの3項がいずれも「日本近代絵画」を対象とした調査研究であったことは、同年に、日本近代彫刻史を専門とし、それまで同研究室長であった中村伝三郎の退官の影響だと推察される。第1項の黒田清輝の作品の図像表現に注目した研究は、陰里鉄郎編著『現代日本美術5 日本の印象派』(小学館、1977年)において、著者が、黒田清輝の「智・感・情」の図像解釈において、ヨーロッパ世紀末の象徴主義からの影響を示唆する見解をもとにしたものであった。同作品の図像解釈の問題については、その後、三輪英夫が引き継ぎ、その研究成果を「黒田清輝筆『智・感・情』をめぐる」(『美術研究』328、1984年6月)に発表した。また同じく黒田清輝に関しては、その後、東京国立文化財研究所編『黒田清輝素描集』(日動 出版部、1982年)が刊行され、同書に掲載され

た論文である陰里鉄郎「黒田清輝の素描」において、素描作品の面からこの研究は深められ、また同書に収められた三輪英夫編「黒田清輝年譜」も、これまでの研究成果を見直して作成されたもので、最も詳細なものとして現在でも基準となる年譜となっている。

第2項については、陰里鉄郎による関根正二、村山槐多を中心とする調査研究を言う。この研究成果は、陰里鉄郎編著『近代の美術 50 村山槐多と関根正二』（至文堂、1979年1月）にまとめられ、また調査の過程で発見された作品をもとに同「〔図版解説〕関根正二筆『死を思ふ日』」（『美術研究』315、1980年12月）として発表された。これに関連した陰里による大正期美術に対する調査研究は、夏目漱石の第6回文展評「文展と芸術」をテキストにして、これに詳細な分析と解説を加えた『夏目漱石・美術批評』（講談社、1980年）としてまとめられ、成果として刊行された。

第3項については、三輪英夫を中心に明治初期の洋画家百武兼行についての実証的な調査研究が進められ、その成果は『近代の美術 53 百武兼行』（至文堂、1979年7月）としてまとめられた。その後、三輪による明治初期洋画に対する調査研究は、「国沢新九郎の画歴と作品」（『美術研究』321、1982年9月）、「〔図版解説〕岩橋教章筆鴨図」（『美術研究』同前）として発表された。

なお、この間に関千代による狩野芳崖研究も深められ、「芳崖の写生帳（上・下）」（『美術研究』286・316、1973年3月・1981年3月）等に成果がまとめられた。また、『近代の美術 60 近代の肖像画』（至文堂、1980年9月）においては、長年にわたる「近代日本絵画」研究の成果がまとめられている。

「科学的方法による材料と技法の研究」

本研究はX線透過法、赤外線写真、紫外線蛍光法、双眼実体顕微鏡、赤外テレビ等を用いた科学的方法により、わが国美術工芸品の材料・技法・構造などを明らかにすることを目的として行われた研究である。この研究プロジェクトが始まった1982（昭和57）年度は、(1)「古代中世絵画の材質技法に関する研究」（柳澤孝）、(2)「古代書蹟資料の材質技法に関する研究」（田村悦子）、(3)「伝統的染織技術の調査研究」（神谷栄子）の3本柱でスタートした。

(1)では、科学研究費「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」（特定研究）の研究絵画班の一員として柳澤孝が参画し、赤外線テレビを用い法界寺阿弥陀堂柱絵の調査を行った。その成果の一端は三浦定俊と共著の「科学的調査法による日本古代中世絵画の実証的研究」（特定研究「古文化財」昭和57年度年次報告書）に示されている。



13 双眼実体顕微鏡による「真言八祖行状図」の調査

(2) では、茨城・鹿ノ子遺跡から出土した漆で固まった漆紙文書を赤外線テレビで解読し成果を上げた。

(3) では、片倉家伝来の小紋胴服（重要文化財）の復元に応用し、染織の解明に役立てたほか、日光・輪王寺伝来の胴着や東京国立博物館「白地風景模様茶屋染帷子」の復元のための調査研究にも応用した。

1983（昭和58）年度年以降は（1）と（3）の調査研究が継続したが、ことに（1）に関しては、1983（昭和58）年度からは「真言八祖行状図」の調査研究〔図13〕に、1984（昭和59）年度以降はこれに加えて鶴林寺太子堂壁画と四天柱絵の調査研究にも活用。その成果は柳澤孝・三浦定俊「赤外線テレビカメラによる堂塔莊嚴画の調査研究」（『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書』1984年）ほか、「真言八祖行状図と廃寺内山永久寺真言堂障子絵（一～五）」（『美術研究』300・302・304・332・337、1976年1・3月、1977年3月・1985年6月・1987年2月）にも反映されている。柳澤孝が1987（昭和62）年3月に退官すると、関口正之がこの手法による仏画調査を引き継ぎ1987（昭和62）年度から1988（昭和63）年度にかけて、広島県内所在の「仏伝図」、出光美術館「不動明王画像」、京都・個人蔵「大日如来像」の調査研究を行っている。

これとは別に1984（昭和59）年度には三宅久雄が「金銅仏の材質技法に関する研究」を研究テーマに掲げ、東京国立博物館の法隆寺献納宝物特別総合調査の一環として、材質・鑄造技法等を解明するべくガンマ線透視撮影等を四十八体仏に行い、翌年度から1988（昭和63）年度まで「仏像彫刻の材質技法に関する研究」の一環として、和歌山・遍照光院、大阪・北十萬、大心寺、長泉寺の各阿弥陀如来像、長崎・宝円寺旧藏降三世明王像、京都・清水寺観音・勢至菩薩像、神奈川・燈明寺観音・勢至菩薩像、石川・尾忒白山社阿弥陀如来像、栃木・真教寺阿弥陀如来像、地藏院諸像、奈良・法隆寺百済観音像などのX線透視撮影を行い、構造・技法の把握に役立てている。

「作家・流派及び美術団体の研究」

日本・東洋の近代美術史を語る際に欠くことの出来ない作家、流派、美術団体について基礎的調査研究を行い、各分野の研究基盤の充実を目指して本研究は行われた。こうした基礎的研究は1930（昭和5）年の開所以来、継続して行ってきたものであるが、明

治百年を迎えて以降、1970年代に入って本格的に歴史的研究が盛んになった近代美術史の分野で、その基礎資料整備が急務となった。1982（昭和57）年から1984（昭和59）年においては、(1) 黒田清輝とともに日本近代洋画を主導する位置にあった久米桂一郎の日記、文献資料の調査（三輪）、(2) 黒田清輝宛書簡の調査（三輪）、(3) 橋本雅邦、菱田春草、下村観山、吉川霊華などの画家についての調査（関、佐藤）、(4) 明治期に活躍した美術商林忠正宛書簡の調査（三輪、米倉、鈴木）、(5) 中国近現代画家資料の収集及び現代中国絵画の動向についての調査（鶴田）を行った。このうち林忠正宛書簡の調査は2001（平成13）年に『林忠正宛書簡集』の刊行へと結実することとなる（『明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究』205～206頁参照）。1986（昭和61）年から1988（昭和63）年には上記の調査研究を継続したほか、日本近代美術については明治期から昭和戦前期の美術雑誌の目次、彙報を網羅的に収集し、編年的に編集して作家や美術団体研究の基盤を形成した。この研究の当該年度の成果として以下のものがある。

三輪英夫「岩橋教章筆「鴨図」」（『美術研究』321、1982年9月）

三輪英夫「国沢新九郎の画歴と作品」（『美術研究』321、1982年9月）

佐藤道信「狩野芳崖筆「岩石図」」（『美術研究』325、1983年9月）

三輪英夫『方眼美術論』（中央公論美術出版、1984年）

鶴田武良「当代中国刊行美術関係期刊解題1」（『美術研究』332、1985年6月）

鶴田武良「当代中国刊行美術関係期刊解題2」（『美術研究』333、1985年9月）

佐藤道信「鑑画会再考」（『美術研究』340、1987年11月）

また、この研究を踏まえ、当該年度以降に発表された成果に以下のものがある。

山梨絵美子「鹿子木孟郎滞欧書簡1～3」（『美術研究』344・345・346、1989年3・11月・1990年3月）

三輪英夫『久米桂一郎日記』（中央公論美術出版、1990年）

鶴田武良「民国期における全国規模の美術展覧会 近百年来中国絵画史研究1」（『美術研究』349、1991年3月）

「美術基準作品の研究」

本調査研究は、わが国古代中世の美術工芸品のうち、国宝・重要文化財あるいはそれに準じる優作で、年紀があって製作年代の明らかなものや、作家・様式等を代表するもの等の美術史上の基準作品について詳細に研究し、あわせて、文献史料の検討も加え、美術工芸遺品の体系づけに役立てることを目的として専ら美術部の研究テーマとして進

められた。1982（昭和 57）年度の開始時は、(1)「古代中世絵画基準作品の調査研究」（柳澤孝・真保亨）、(2)「基準在銘彫像の研究」（猪川和子）、(3)「尊像別分類による彫像の研究」（猪川）、(4)「書蹟基準作品の研究」（田村悦子）、(5)「染織品の研究」（神谷栄子）、(6)「日本近代美術基礎資料の研究」（関千代・佐藤道信）で構成されていたが、1983（昭和 58）年度には、(1)の研究細目であった「仏教絵画史研究」（関口正之）と「やまと絵研究」（真保）が項目独立を果たし、(4)は「絵巻物における書道調査研究」（田村）に展開した。

その成果として『美術研究』に以下のように発表された。柳澤孝「異色ある孔雀明王画像」（322号、1982年12月）、真保亨「三十六歌仙絵（書伝為相筆）」（323号、1983年3月）、同「兼平本三十六歌仙絵」（325号、1983年9月）、猪川和子「西国の清涼寺式釈迦如来像（上・下）」（324・327号、1983年6月・1984年3月）、同「愛媛の清涼寺式釈迦如来像」（330号、1984年12月）、田村悦子「尹大納言絵巻に関する若干の考察」（326号、1983年12月）、神谷栄子「〔研究資料〕片倉家伝来小紋胴服の修理及び復元構造について」（332号、1985年6月）、同「日光輪王寺伝来の胴着三領並びにそれらの修理及び復元構造について（上・下）」（334・336号、1986年1・8月）、同「片倉家伝来陣羽織二領（上）」（341号、1988年2月）、関口正之「〔図版解説〕泉涌寺蔵韋駄天画像」（330号、1984年12月）、三宅久雄「仏師行快の事績」（336号、1986年8月）、同「玉桂寺阿弥陀如来像とその周辺」（334号、1986年1月）、同「〔研究資料〕快慶作光台院蔵阿弥陀三尊像」（351号、1992年1月）、井上一稔「螺髪宝冠阿弥陀如来像について」（343号、1989年2月）、等である。

「美術様式と伝播の研究」

わが国の美術、工芸にみられる様式の展開とその系統について、インド・中国・朝鮮や西洋の諸地域など、諸外国にその源流を探り、その影響と受容の様相を明らかに位置づけるとともに、国内における史的な展開を体系化し、一方で、日本以外の外国各地の美術に関してもそれぞれの様式的な検討を行うことを目的に、1982（昭和 57）年から1988（昭和 63）年にかけて一般研究として実施し、次の諸テーマによって、研究が行われた。

(1) 江戸後期洋風画の研究

佐竹曙山、小田野直武、司馬江漢を中心に、江戸後期洋風画の作品を花鳥画、風景画、風俗画の題材別に調査し、研究した。

(2) 明治初期洋風画の研究

国沢新九郎、岩橋教章など、明治初期の洋画家の作品及び文献を調査した。

(3) 水彩画の研究

近代画家の水彩画に関する文献の調査を行った。

(4) 日本古代彫刻並びに源流としての東洋彫刻の研究

正倉院の厨子押出仏、大阪大將軍寺や壺井寺の金銅仏、日本古代彫刻の源流をなす中国、韓国の諸作品を調査した。

(5) 東洋仏教絵画史の研究—バーミヤーン壁画の研究

ギメ東洋美術館所蔵のバーミヤーン壁画断片や塑像を調査するとともに、先に成城大学調査隊が行ったバーミヤーン壁画調査に参加した折に作成した調書と写真を整理し、共同研究を実施して、報告書作成の準備をした。

(6) 東洋仏教絵画史の研究—敦煌絵画の研究

ギメ東洋美術館、大英博物館が所蔵する敦煌将来の絹絵の調査を実施した。

(7) 大陸画の影響と受容に関する研究

日中絵画交流史の研究の一環として、来舶画人の作品の調査と研究を行った。

(8) 仏画における大陸影響に関する研究

科学研究費「中世美術における伝統と大陸影響とに関する実証的研究」の一環として、鹿児島・竜巖寺「涅槃図」を調査し、その様式的な検討を行った。また、鎌倉時代仏教絵画の様式研究に資するために、アメリカボストン美術館所蔵陸信忠筆「十六羅漢図」の調査を行った。

(9) 中国書道の日本書道に与えた影響の資料的研究（後に、来舶書画の研究に改名）

日本に舶載され、日本の書家によって鑑賞、研究された書蹟の実体を明らかにするため、江戸時代の学者、趣味人が筆記した書画記、経眼録、銘心録（例えば、当研究所「墨華塾書画銘心録・附 本朝書画銘心録」）などを調査、研究した。

(10) 現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外における補足的調査

東京大学東洋文化研究所の戸田禎佑を代表とする共同研究に参加し、写真資料によって検討を加えた。

成果には、三輪英夫「国沢新九郎の画歴と作品」（『美術研究』321、1982年9月）、田村悦子「梅堂浅野長祚自筆稿本『墨華塾書画銘心録・同本朝書画銘心録』の研究」（『美術研究』331、1985年3月）等がある。

(3) 1989（平成元）年～2000（平成12）年の中長期研究計画に基づく調査研究

「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」

美術部では従来の東洋美術総目録編纂事業などによる作家研究の蓄積から、作品を主

題、様式等によってあるまとまりとして捉え得るという認識は共有されていた。1980年代には「美術様式とその伝播の研究」に見られるように、それをある原初を持ち、「伝播」「影響」によって広がりをもったものとする語りが行われた。本研究では、絵画・彫刻・工芸各分野の様々な側面での相互関係が、その史的展開に大きく反映されていることが日本美術のあり方の重要な一面であるとの認識から、そこにモチーフという具体的な視点を設け、総合的な解明を試みた。古代中世研究班・第一班は古代中世の彫刻を中心に、同・第二班は絵画工芸を中心に、近世近代研究班は近世近代絵画を中心に調査研究を行った。1988（昭和63）年度は、第一班は（1）日本彫刻の着衣形式、（2）十一面観音—経典と表現の関係、（3）仏伝図・忿怒形尊像—図像学的展開、第二班は（1）浄土宗高僧伝絵—テキストと絵画、（2）頂相における図像の伝播と変容、（3）漆工・金工・扇面のモチーフ伝播、近世近代研究班は（1）宗達派古典モチーフの典拠と表現、（2）近代日本画における画題と技法、（3）近代絵画史における歴史画と構想画、をテーマに調査研究に着手し、次年度からは全体に共通する視点として、時代やジャンルによってあるまとまりを設定する作業に何が伴うか、それによって見失われがちなものはなにかという問題を設け、かたちや主題が時代やジャンルを超えて「共有」されることに着目し、さらに「共有」という現象を、その源泉を探りあて、その伝播による「影響」という枠組みでとらえることからの脱却を試みた。

その成果として、三輪英夫「黒田清輝と構想画—『昔語り』を中心に」（『美術研究』350、1991年3月）、山梨絵美子「黒田清輝の作品と西洋文学」（『美術研究』349、1991年3月）、及び科学研究費成果報告書（1990年）がある。報告書は以下の論考を掲載している。

島尾新「『影響』から『共有』へ—『モチーフの交流』についての覚書—」

関口正之「三面大黒天画像について—モチーフ転用の一例として—」

井手誠之輔「十三・四世紀の仏涅槃図にみる中国と日本」

長岡龍作「〔来迎美術研究〕初期観経変相図における来迎表現の諸相」

井上一稔「〔来迎美術研究〕天台浄土教（十世紀）における来迎表現—真正極楽寺像を中心に—」

三宅久雄「〔来迎美術研究〕来迎三尊形式の展開」

米倉迪夫「法然上人伝絵における法然忠通邂逅図をめぐるノート」

鈴木廣之「歌のころ、絵のころ—瀟湘八景モチーフの交流—」

佐藤道信「『絵』『画』『図』の歴史的意義—明治前期の絵画と意匠—」

三輪英夫「黒田清輝と構想画—『昔語り』を中心に」（『美術研究』350、1991年3月）

要旨

山梨絵美子「黒田清輝の作品と西洋文学」(『美術研究』349、1991年3月)要旨

「美術に関する基礎資料の研究」

本研究は大きく1989(平成元)年から1993(平成5)年までの5ケ年と1994(平成6)年から1998(平成8)年までの5ケ年、及びそれ以後の3期に大きく分かれる。1989(平成元)年からの5ケ年においては、(1)「絵巻資料」の調査研究、(2)「明治後半期美術資料」の調査研究、(3)「関東所在墨画資料」の調査研究をテーマに進められた。(1)は梅津次郎旧蔵の絵巻資料についての研究で、米倉迪夫が中心となって行い、『梅津次郎氏撮影作品リスト(稿)』を作成している(『美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用』東京国立文化財研究所、1992年収載)。(2)は、三輪英夫を中心に佐藤道信、山梨絵美子が参画。明治後半期の内国勸業博覧会及び美術展覧会等に関する資料の収集・整理と目録化を目的とし、明治美術会、白馬会、日本絵画協会など明治期の5美術団体出品目録を集成した『明治期美術展覧会出品目録』(1994年)などに結実している。(3)は、島尾新を中心に井手誠之輔が参画。所外からは河合正朝、横田忠司、相澤正彦、大石利雄、山下裕二、小川知二、坂口薫、救仁郷秀明が参加して行われた室町水墨画及び関連資料の調査研究で、関東所在の水墨画に重点が置かれた。1991(平成3)年からはこの枠組みのなかで13世紀から16世紀における水墨画家(約60名)に関する基礎資料の収集と研究史の整理にも着手している。

1992(平成4)年からは鈴木廣之が中心となり、『日本絵画史年記資料集成十世紀～十四世紀』(1984年)刊行を承けて「日本絵画史年記資料集成15世紀」の研究を推進。研究は1997(平成9)年まで継続した。1401(応永8)年から1500(明応9)年に作られた作品・落款・奥書・賛文・銘記などに年記を有する作品を集めてその資料を収集することを目的とした。推敲を重ね『一五世紀絵画史年表』の増補改訂第一稿を作成(絵画287件、彫刻166件、工芸58件、書跡17件、の合計528件を収録)、絵画を中心に1430年代初頭までの銘文・奥書・賛文などの翻刻と解説作業を終えた。1994(平成6)年から1998(平成10)年までの5ケ年では、(1)「絵画に見る武装資料」の調査研究、(2)「室町水墨画に関する基礎資料」の調査研究、(3)「明治後期～昭和前期美術資料」の調査研究がテーマに設定。これに「日本絵画史年記資料集成15世紀」の研究が併走する。

このうち(1)は、廣井雄一が行う。成果の一端は、廣井雄一「兵庫鎖・長覆輪太刀の制作年代について―嚴島神社伝来の太刀を中心に―」(『美術研究』361、1995年3月)に結実をみた。ただし、1996(平成8)年3月の、廣井雄一の退官とともに研究が継続されることはなかった。(2)は、前年までの「関東所在墨画資料」の研究を継続的に展

開させたものである（島尾新を中心に共同研究者はそのまま）。室町時代の水墨画作品の調査研究と併行して画家別関係資料の収集と研究史の整理を中心に行い、収集資料の整理・データベース化を行った。(3)は、前年までの「明治後半期美術資料」の調査研究を展開させたもので、三輪英夫を中心に山梨絵美子、田中淳が参画。引き続き美術団体、内外博覧会等に関する資料の収集と整理を行い、データベース化を行った。その一環としてシカゴ・コロンプス万国博覧会（1893年）、パリ万国博覧会（1900年）、セントルイス万国博覧会（1904年）の出品目録をデータベース化し、光風会、ヒューザン会、草土社、紅児会、无声会、日本彫刻会、国民美術協会等の出品目録を収集整理。あわせて、これらの団体に出品した作家に関する資料を調査。1995（平成7）年には、国画創作協会展、春陽会展、1930年協会展覧の出品目録を収集整理し、既に出品目録の収集整理を終えていた明治期主要団体展について新聞・雑誌掲載の展覧会批評、関連記事を調査・収集。また1996（平成8）年には『内国勸業博覧会美術品出品目録』、翌1997（平成9）年には『明治期万国博覧会美術品出品目録』を刊行した。この研究は1996（平成8）年以降、美術部の中長期研究計画の枠に推移して調査研究が新たに進められた。

なお、(1)に代わるものとして1996（平成8）年、松島健が情報資料部長として着任したことにともない5ヶ年の初年度として「鎌倉後期彫刻の基準作品資料」の調査研究が始まった。①在銘作品及び納入品所在作品の調査、②作品及び仏師関連資料の収集、1997（平成9）年度には③国宝指定彫刻作品の資料収集をこれに加え展開させようとした。この過程で円派仏師の朝円の作例（京都・正覚院毘沙門天像）を新たに見出し、長野・仏法紹隆寺不動明王像が運慶一門に関わる作例として注目。後者の知見は1997（平成9）年度秋の第31回美術部・情報資料部公開学術講座で公表された。ただし、松島健が1998（平成10）年2月に病没して以後、研究は継続されなかった。

1998（平成10）年度からは、(1)「中国日本拓本資料」の研究、(2)「室町時代水墨画資料」の研究が行われ、1999（平成11）年度には(3)「未公開仏教美術原典史料」の研究、2000（平成12）年度には(4)「国宝重文指定関係文書」の研究が加わった。(1)は、岡田健が行い、当研究所が所蔵する明治・大正・昭和期に収集された中国・韓半島・日本の金石文・工芸品等に関する全拓本約4700枚について点検・整理を進めた。この調査研究の成果は『資料編』に「東京文化財研究所所蔵 拓本総目録」（462～545頁）及び「東京文化財研究所所蔵 龍門石窟造像銘記拓本目録」（546～608頁）として公表されるに至っている。(2)は、前年までの「室町水墨画に関する基礎資料」の調査研究を継続的に展開させたもので、島尾新が牽引した。(3)は、津田徹英が行ったもので、未翻刻の仏教美術史料、活字化されているものの改めて原本との照合が必要と思われる重要

史料について調査を行った。東寺所蔵の仁海自筆「密教師資付法次第」、未翻刻の心覚撰「不動集」(文永3年写)ほかの調査を行っている。(4)は、情報資料部保管の1963(昭和38)年までの国宝・特別保護建造物・重要文化財の指定関係及び修理関係の文書類(366件)を岡田健が整理を行い完了させている。

「美術における地域性及び社会性の研究」

本研究は地域固有の社会的ないし文化的側面における特殊性を重視し、地域間における交流の様態と、その伝播・受容の結果として行われる各地域内での変容の固有な形態を明らかにすることを目的とし、中世近世研究班と近代現代研究班の2班によって進められた。

中世近世研究班は美術の伝播の様態を作者と享受者の双方の視点に立ちながら、以下のようなテーマを立て、具体的問題点を探った。

(1) 外来の視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異

請来仏画作品に関する調査と基礎資料の収集を行い、日本における中国仏画受容の過程を明確化しようと試みた。論考に井手誠之輔「陸信忠考—涅槃表現の変容(上・下)」(『美術研究』354・355、1992年9月・1993年1月)がある。

(2) 芸術家の社会的地位

雪舟のイメージ形成や五山文学に現れた画家イメージの研究を行い、島尾新「雪舟等楊の研究(一)—雪舟のイメージ戦略—」(『美術研究』351、1992年1月)、同「雪舟等楊の研究(二)—「五山文学」のなかの画家たち—」(『美術研究』356、1993年3月)にその成果を発表した。

(3) 15・16世紀における絵画マーケット

室町時代の絵画の価格及び画師の雇用形態等について研究を進め、鈴木廣之「絵の価値・絵の見方—室町時代相国寺松泉軒の障子絵制作から—」(『美術研究』352、1992年2月)を発表、また建築史・日本史の各分野で発表された番匠の生産形態、雇用の社会機構に関する文献、及び当該時期における鑑識・代付関係の史料を収集した。

(4) 画像と言語—東洋美術史における比較研究—

科学研究費の助成を得、個々の作例・作品群にもとづいて視覚像の成立・展開の過程を言語表現(伝承・文芸・芸能など)との関連から明らかにし、あわせて美術史における視覚像・言葉の比較研究のための一般的問題・理論の提示を試みた。

近代現代研究班は欧米と日本における日本美術観の相違をテーマに、欧米の美術理念

の導入、美術行政との関連、及び外国文化受容の方法論といった視点から考察を進めた。その成果として、以下の論考が発表されている。

佐藤道信「明治美術と美術行政」(『美術研究』350、1991年3月)

佐藤道信「絵画と言語(一)「画」と漢字」(『美術研究』353、1992年3月)

佐藤道信「野間コレクションと大衆社会：時代史・個人史のタイムカプセル」(新潟県立近代美術館『野間コレクションとその時代』展』図録、1993年9月)

佐藤道信「歴史史料としてのコレクション」(『近代画説』2、1993年12月)

山梨絵美子「渡辺幽香のシカゴ万国博覧会婦人館出品作について」(『近代画説』2、1993年12月)

「来迎図を中心とする浄土教美術の研究」

研究代表者の三宅久雄は、浄土教美術について、それまでも鎌倉時代の来迎像を中心に精力的に基礎調査を進めていた。さらに、本研究においては、(1) 8世紀から9世紀における日本・中国の浄土教美術の比較、(2) 平安時代における密教系と浄土教阿弥陀如来の関連、(3) 平安後期から鎌倉初期における阿弥陀来迎美術、及びその中国・朝鮮美術との比較、(4) 宋代江南地方を中心とする浄土教美術と西域地方・朝鮮・日本等周辺諸地域における浄土教美術との比較、の4テーマを柱にすることで、東アジア地域における浄土教美術の総合的な研究に着手することとなった(三宅久雄・井上一稔・井手誠之輔・長岡龍作)。

研究成果は、1991(平成3)年12月7日に開催された第25回美術部・情報資料部公開学術講座において公表された。井手は「中国寧波地方の仏教絵画」と題した報告を行い、寧波の天台寺院・延慶寺を中心に盛んであった浄土教信仰と仏画との関係について言及した。また三宅は、本研究の基礎調査をもとにした研究成果を、「多彩な来迎の造形」と題して報告した。

本研究は、研究代表者の三宅と井上が職場を移ったため、結果的に1年で終了してしまった。しかし、本研究で掲げられたテーマは、その後メンバーそれぞれのテーマとして深められ、論文などで公表されている。

「中国仏教美術基準作品調査研究」

1992(平成4)年度から1997(平成9)年度の6ケ年計画で進められた美術部の研究プロジェクトであった。本研究は日本伝来品及び新資料を対象に、基礎的な資料を収集し、中国仏教美術の体系を見直すとともに、図像・様式・技法の面からその特質を明ら

かにすることを目的とした。なお本研究は1998(平成10)年度より中長期研究計画「美術に関する基礎資料の研究」に引き継がれた。

(1) 研究会(研究協力者会議)の開催

1992(平成4)年度には国内所在の中国仏教美術、また日本における中国仏教美術の受容の諸相について研究を重ねてきた研究者を招き、今後の調査研究の方法等を討議した。そして1993(平成5)年度には稲本泰生、井手誠之輔、石松日奈子、井筒信隆、曾布川寛、河田昌之の6名が、1994(平成6)年度には松田誠一郎、宮崎法子、加須屋誠、山本泰一、井手誠之輔の5名が、1995(平成7)年度には西上実、井手誠之輔、藤岡穰、岡田健の4名が、1996(平成8)年度には肥田路美、岡田健、松浦正昭、長岡龍作、武田和昭、泉武夫の6名が、そして1997(平成9)年度には勝木言一郎、山名伸生、菊竹淳一、佐藤智水の4名がそれぞれ研究発表を行った。

(2) 基礎資料の収集

制作年次、制作地、制作の発願者、画師などの明らかな中国仏教美術作品について、そのデータの収集を行った。1992(平成4)年度にはフィラデルフィア美術館所蔵の宋代木彫像について基礎データを収集し、1993(平成5)年度にはアメリカ所在の中国仏教美術関連資料を、1994(平成6)年度から1995(平成7)年度にはアメリカ及びヨーロッパ所在の中国仏教美術作品の写真約6千枚を、1996(平成8)年度から1997(平成9)年度には情報資料部が保管する拓本約4700枚の整理を進めた。

(3) 現地調査

年紀を有する中国仏教美術作品を中心に、写真撮影やX線透過撮影による調査を行った。1993(平成5)年度には関西・九州方面、1994(平成6)年度には東寺・奈良国立博物館等、1995(平成7)年度には大阪市立美術館・京都国立博物館・根津美術館等、中国の陝西省・山東省・河北省・河南省・浙江省・江蘇省・四川省の石窟寺院及び博物館、さらに欧米6ヶ国の美術館・博物館、1996(平成8)年度と1997(平成9)年度には東寺蔵木造兜跋毘沙門天像、同観智院蔵木造五大虚空蔵菩薩像、大徳寺「五百羅漢像」(京博・奈良博寄託分)等の調査をそれぞれ実施した。

(4) データベースの作成

中国仏教美術研究のための各種データベースを作成した。1994(平成6)年度は大正新脩大藏經収載の請来目録類、『宋高僧伝』(中華書局刊)の入力(1995年度まで)、1996(平成8)年度は『(梁)高僧伝』、『龍門石窟の研究』及び『龍門石窟碑刻題記彙録』所載の石刻録の入力を行った。

(5) 研究成果の公表

主な研究成果は下記の通りである。

井手誠之輔「陸信忠考—涅槃表現の変容—（上・下）」（『美術研究』354・355、1992年9月・1993年1月）

岡田健・石松日名子「中国南北朝時代の如来像着衣の研究（上・下）」（『美術研究』356・357、1993年3・7月）

宮崎法子「中国花鳥画の意味（上・下）—藻魚図・蓮池水禽図・草虫図の寓意と受容について」（『美術研究』363・364、1996年1・3月）

井手誠之輔「〔図版解説〕長野・定勝寺所蔵補陀洛山聖境図」（『美術研究』365、1996年10月）

岡田健「〔研究資料〕山東歷城黃石崖造像」（『美術研究』366、1997年2月）

肥田路美「法隆寺金堂壁画に画かれた山岳景の意義」（『仏教芸術』230、1997年1月）

岡田健「東寺毘沙門天像—羅城門安置説と造立年代に関する一考察—（上）」（『美術研究』370、1998年3月）

松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」（『美術研究』370、1998年3月）

なお上記論文のうち、宮崎法子「中国花鳥画の意味—藻魚図・蓮池水禽図・草虫図の寓意と受容について」は第9回国華賞を、岡田健「東寺毘沙門天像—羅城門安置説と造立年代に関する一考察—」は第12回国華賞を受賞している。

「近百年来中国絵画史研究」

本研究は、中国の近現代美術に関する資料が、戦争や文化大革命等によって収集が難しく、調査・研究の支障となってきたことに鑑み、鶴田武良が1970年代から行ってきた中国の近代（1840～1918）及び現代（1919年以後）の美術に関する基礎資料の収集をもとに、それらを系統立てて公開するとともに、基礎資料集成を作成すること、及び美術の近代化に関わる諸問題についての研究を行うことを目指したものである。具体的には、(1) 国内所在の関係未調査資料の調査収集、(2) 収集済の資料から近百年来画人カードの作成を継続、(3) 民国初期における美術教育の研究、(4) 民国期美術運動の研究、(5) 民国期における人体表現の研究、(6) 近百年来中国美術年表の作成、(7) 中国期美術学校卒業同学録・美術団体会員録集成の作成、(8) 民国期美術展覧会出品目録集成の作成が目標に掲げられ、作業としては1990（平成2）年度には資料の点検、1991（平成3）年度には展覧会の研究、卒業同学録会員録集成の作成、1992（平成4）年度には美術年表の作成、1993（平成5）年度には出品目録集成の作成、1994（平成6）年度と1997（平成9）年度には画人カードの作成及び各テーマの研究が目指されていた。

端緒となる成果は『美術研究』349号（1991年3月）に「民国期における全国規模の

美術展覧会—近百年來中国絵画史研究1」として掲載され、全国児童芸術展覧会、第1次から第4次までの全国教育展覧会、教育部第1次全国美術展覧会、全国児童絵画展覧会の開催経緯、出品規定、展覧会組織等の関連資料及び出品目録が明らかにされた。続いて『美術研究』350号（1991年3月）に「解放後の全国美術展覧会—近百年來中国絵画史研究2」が発表され、第1次から第4次までの全国美術展覧会について、当時の美術雑誌上に掲載された記事などをもとに会期、関連行事等の基礎的事実が明らかにされるとともに、第1次全国美術展覧会出品目録を掲載し、『美術研究』351号（1992年1月）に「近百年來中国絵画史研究2・附1」として第2次同展出品目録が、同352号（1992年2月）に「附・二」として第3次同展の出品目録が公開された。1992（平成4）年度には中国近代における人体表現の研究、近百年來中国美術年表の作成が行われた。その成果の一部として、1992（平成4）年に開催された第16回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「東アジア美術における人の〈かたち〉」において鶴田が「民国期中国における裸体画論争」と題して発表を行った。同発表は同研究集会の報告書に掲載されている。1993（平成5）年度には近百年來中国美術年表の作成を継続して行うとともに、民国初期における美術教育の研究を行い、存命中に高く評価されながら、中国近代絵画史上には名を残していない陶冷月に関する論考「陶冷月について—近百年來中国絵画史研究3」が『美術研究』358号（1993年12月）に掲載された。美術教育についての調査研究成果は『美術研究』365号（1996年10月）に「清末・民国初期の美術教育—近百年來中国絵画史研究4」として「清国・民国赴任日本人美術教員一覧ほか」と題する資料とともに掲載された。

本研究は1990年代以降、これをライフワークとした鶴田によって担われ、当研究所の研究プロジェクトとして項目が立てられなくなって以降も地道に継続され、その成果は『美術研究』に発表されつづけた。また、本研究をもとに『中国近代美術大事年表』（鶴田武良編『和泉市久保惣記念美術館・久保惣記念文化財団東洋美術研究所紀要』7・8・9、1997年3月）が刊行されている。

「東アジア美術における造形と社会」

1993（平成5）年まで行われた「美術における地域性及び社会性の研究」を継承した研究であり、東京国立文化財研究所時代の1994（平成6）年から1998（平成10）年に実施された。当時、美術史研究において、造形がそれ自体で自律的に発展するという旧来の考え方が見直され、美術を社会的なコンテクストの中で再評価しようとする姿勢が強まりつつあったが、本研究は、まさに、個々の美術作品及び美術に関わる諸現象を、社

会や文化、人間の営為の中に置き直し、両者の間に生じた創造的な関係に着目して、美術の持つ諸問題を具体的に捉えようとして企画された。参加者が共同して一つのテーマに取り組むというよりは、個々人がそれぞれ得意とする分野で各自のテーマを設定し、美術と社会的なコンテクストとの関連を究めようとしたものである。研究テーマは大きく三つに分けられていた。

その第一は、制作と享受の場についての研究である。(1) 古代の空間意識と彫像の機能に関する研究は、長岡龍作「神護寺薬師如来像の位相 ―平安時代初期の山と薬師―」(『美術研究』359、1994年3月。第8回国華賞受賞)の研究成果のうえに企画されたものである。9世紀に整備された各寺院の立地条件、その場で行われた法会、安置された彫像の相互関係について考察を深めた。具体的には、神宮寺所在像と神像、8世紀から9世紀の障礙神信仰、武装神のかたちと機能、彫像の安置のあり方とその機能などを考察した。(2) 寧波、杭州における寺院信仰と絵画に関する研究では、寧波における浄土信仰に関わる絵画、杭州上天竺寺と千手観音信仰、妙行寺と祖師像との関係、普陀山信仰などを研究した。成果は、井手誠之輔「〔図版解説〕 長野・常勝寺所蔵 補陀洛山聖境図」(『美術研究』365、1996年10月)。(3) 絵画の享受に関わる研究では、室町時代の絵画や文学にみられる「なぞらえ」の表現技法の背景を考察した。成果は、鈴木廣之「類似の発見―室町の〈擬〉、江戸の〈見立て〉―」(『日本の美学』24、1996年4月)。

その第二は、流通と交流についての研究である。(1) 15、6世紀の唐絵とやまと絵の研究では、日明間の交渉に関連して、当時の唐絵が果たした役割について考察し、成果を鈴木廣之「往還する絵画―十五世紀漢字文化圏のなかの『唐絵』の意義―」(『美術研究』361、1995年3月)としてまとめた。また東アジア交流史における屏風絵の役割について研究し、その成果は、鈴木廣之「絵画のアルケオロジー―室町時代における屏風絵の意義―」(『国華』1200、1995年11月)として発表した。(2) 室町時代における美術の流通と価値観の形成では、唐物を中心に、美術品の価値観が形成される場、流通や売買について考察した。また、『室町行幸御飾記』をもとに、室町殿会所に飾られた唐物のデータベースを作成した。(3) 唐本、宋本画像の意味と画像の研究では、日本に請来された画像の思想的背景や日本の同類の絵画との差異を明らかにした。また高麗、朝鮮の仏画の請来事情についても考察した。成果は、井手誠之輔「高麗の阿弥陀画像と普賢行願品」(『美術研究』362、1995年3月)、井手誠之輔「『境界』美術のアイデンティティー―請来仏画研究の立場から―」(文化財の保存に関する国際研究集会『今、日本の美術史学をふりかえる』1999年3月)などがある。(4) 入明画僧の旅の実態について、資料の収集を行った。第三は、技術と素材についての史的研究である。この部分は、基本的に資料の収集にと

どまったが、中国と日本の仏像霊驗譚から仏像の素材に関わる資料を収集し、黒川道祐の著作から当時の技術に関する分類意識を考察するなどして、その後の研究の礎をつくった。

「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究」

本研究は1996（平成8）年度より美術部第二研究室の中長期研究計画として始められ、2000（平成12）年度に「昭和期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及び作家の研究」としてこれを継続、翌2001（平成13）年度には当研究所の独立行政法人化に伴い黒田記念近代現代美術研究室の研究プロジェクト「昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究」へと受け継がれた。

全国各地の美術館で日本近・現代美術の展覧会が開催、充実したカタログが刊行され、大学でも日本近代美術に関する講座が開設、研究者が続出する状況下で、同分野の研究は以前にも増してその実証性が求められるようになる。これを受けて本研究は、当研究所に蓄積された資料をベースに、なによりも基礎データの集成を第一として遂行された。

なかでもその主軸として進められたのが、『大正期美術展覧会出品目録』（2002年刊行）及び『昭和期美術展覧会出品目録〔戦前篇〕』（2006年刊行）の編集である。これは出品目録の集成という点で、既刊の『明治期美術展覧会出品目録』（1994年刊行）、『内国勸業博覧会美術品出品目録』（1996年刊行）、『明治期万国博覧会美術品出品目録』（1997年刊行）に連なるものであったが（「美術に関する基礎資料の研究」197～199頁参照）、明治末から昭和戦前期という、官展が確固とした地位を占める一方で在野の団体展が勃興し、さらには幾多ものグループが発表の場を設けて研鑽を積んだ時代を対象としたため、収録した展覧会はその内容や規模において多岐にわたることとなった。基本的にはそれらの出品目録を典拠とするも、目録を制作しなかった、もしくは現在見出し得ない展覧会も多く、その場合は当時の展覧会評等から出品作をリスト化し、言わば目録の再構成を行ってその欠を補っている。

展覧会という組織的な動向に着目するのと並行して、本研究では近代美術を支えた個々の作家・美術関係者についての基礎調査・研究も行った。その成果として特筆すべきは、『林忠正宛書簡集』（2001年）、『木村莊八日記〔明治篇〕校註と研究』（2003年）の編集だろう。『林忠正宛書簡集』は明治期に日仏間で活動した美術商として知られる林忠正に宛てられた欧文書簡を公刊した資料集で、1980年代にジャポニズム研究が盛んになる中で始められた調査研究（「作家・流派及び美術団体の研究」192～193頁参照）が実を結んだものである。また『木村莊八日記〔明治篇〕校註と研究』は洋画家木村莊

八の1911（明治44）年1月から1913（大正2）年3月までの日記を翻刻し、註を付したもので、その広範な関心をカヴァーすべく美術史のみならず文学・芸能の研究者の協力を得て、校註を行っている。

『林忠正宛書簡集』及び『木村莊八日記〔明治篇〕校註と研究』では資料の翻刻のみならず研究篇も設け、校註にたずさわった研究者による論考を載せているが、こうした基礎研究を土台とした考察は、上記『大正期美術展覧会出品目録』の研究篇として2005（平成17）年に刊行された『大正期美術展覧会の研究』でもなされた。所内外の研究者による論文34編とインタビュー、資料で構成される同書は、絵画・彫刻をはじめとして工芸や写真、漫画に至るまで大正期の美術をほぼ網羅した内容となった。

その他の研究成果としては、『美術研究』に5度（368・369・372・374・390号、1997年12月・1998年3月・1999年3月・2002年2月・2006年12月）にわたって掲載された田中淳「後期印象派・考—1912年前後を中心に」が挙げられよう。日本における後期印象派の受容を、フュウザン会を中心とする人的ネットワークから読み解こうとする試みには、たとえば『木村莊八日記〔明治篇〕校註と研究』にみるような地道な資料の掘り起こしと、美術史の枠にとどまらない学際的な姿勢が反映されていると言ってよいだろう。

「日本における美術史学の成立と展開」

1990年代、近代美術史の分野が先導するかたちで、日本における「美術」概念の成立に関する議論が活発に交わされるようになった。そこでは西洋近代の学を範に1887（明治20）年前後より始まった日本の美術史学が、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、日本の文化的アイデンティティの構築に寄与してきたことが明らかにされ、さらに今日用いられる美術史の言葉や思考も、こうした美術史学の歴史の中で形成されてきたことが、美術史研究者にとって広く認識すべき問題となった。

本研究はこのような問題意識に立ち、明治以来の美術史学の歴史を振り返ることを通じて、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とし、一部科学研究費による助成も受けながら行われた。主な成果は、以下の通りである。

（1）国際研究集会の開催

1997（平成9）年12月3日から5日に第21回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」を開催し、研究発表と討議を行った（口絵掲載）。これまでの美術史学への問い直しは、東京国立文化財研究所という公的機関で試みられたことで大きな反響を呼ぶ集会となった。1999（平成11）年3月には、報告書

として『語る現在、語られる過去—日本の美術史学 100 年』を平凡社より刊行している。

(2) 研究会の開催

上記の国際研究集会が絵画・彫刻を専門とする研究者に限られていたという反省をふまえ、美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討を加えるべく、建築史・工芸・書道・考古学の分野から研究者を招聘し、研究会と討議を行った。各発表者・内容は次の通り。

1999(平成 11)年 3 月 10 日 青井哲人「明治期の“建築史”とアジア」／中谷礼仁「日本建築における近世と近代」

1999(平成 11)年 7 月 28 日 山崎剛「明治時代の工芸品を見る—その地域性に留意して」／大熊敏之「絵画性と彫刻性の相克—近代工芸にみられるレリーフ表現の位相をめぐって」

2000(平成 12)年 2 月 9 日 筒井茂徳「書は芸術かⅠ」／名兎耶明「書は芸術かⅡ」

2000(平成 12)年 7 月 26 日 広瀬繁明「明治期における〈文化財〉保護行政の展開—美術史から建築史そして考古学」／内田好昭「日本考古学の形成」

(3) 資料収集

「美術」という外来の観念が日本に確立される以前に製作された物品が「美術」として位置づけられる過程を跡づけるべく、明治期の博覧会・展覧会の出品目録に注目し、データ収集を行った。本調査は 2001(平成 13)年度から 2003(平成 15)年度の研究プロジェクト「明治期博覧会出品目録に関する調査研究」に引き継がれ、『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』（中央公論美術出版）に結実している。

「日本における外来の美術の受容についての研究」

本研究は、「外来美術の受容」という問題を、近代以降の国家の境界・領域にとらわれることなく、伝えられたものや、その媒体の具体的な様相を明らかにすることを目的とした。その上で、これらが同時代的な状況の中でどのような位置づけにあったのか、造形の連鎖を生み出す環境がどのようなものだったのかを、造形における「他者」と「自己」の認識、及び両者の関係形成の実態について構造的に把握することを最終的な目標として設定した。

プロジェクトの立ち上げにあたっては、1997(平成 9)年に開催された第 21 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」が大きな理論的背景となっている。本シンポジウムでの検討課題を踏まえ、これまでの日本美術史学の研究とその叙述について、歴史的なコンテキストの中での造形の具体相を客観的に

見直していくことの必要性が認識された。そのテーマとして設定されたのが「外来美術の受容」という問題であった。

プロジェクト期間中には、墨蹟資料（『禪林墨蹟』、『続禪林墨蹟』など）のデータ収集、林忠正宛書簡（当研究所保管）の整理を行い、それぞれデータベース化をはかった。また、請来宋元仏画・高麗仏画、ラファエル・コラン作品、アントニオ・フォンタネージ作品の調査を行い、基礎資料の収集に努めた。

研究会は、各年度に折々行ったが、2001（平成13）年3月14日には、「水陸画の受容」と題するミニシンポジウムを開催した。

本研究に関連して、以下の論考が発表された。

井手誠之輔「元時代の釈迦三尊像・雑感—東福寺旧蔵本をめぐる—」（『仏画の美術』 静嘉堂文庫美術館、1999年10月）

山梨絵美子「日本近代洋画とフランスの出会い（ラファエル・コラン展展評）」（『美術手帖』 779、1999年11月）

井手誠之輔「〔研究資料〕見心来復編『澹游集』編目一覧 附、見心来復略年譜」（『美術研究』 373、2000年3月）

山梨絵美子「明治期の洋画界における林忠正の位置づけをめぐる」、二つの『林忠正蒐集西洋絵画図録』について」（『林忠正コレクション』別冊、ゆまに書房、2000年）
井手誠之輔「日本の宋元仏画」（『日本の美術』 418、至文堂、2001年3月。第13回国華賞受賞）

なお、本研究テーマは、当研究所の独立行政法人化に伴い、「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」として発展的に継承された。

「木彫仏像の調査研究」

木彫仏像に関する彫刻史研究は多年の研究蓄積によってめざましい進展を遂げてきた。ただし、その進展とともに改めて各時代の重要作品の詳細な基礎データの不足が克服されるべき課題として再浮上し、同時に、飛鳥時代以来およそ鎌倉時代に至るまでの間に日本へもたらされて日本の木彫に多大な影響を与えたであろう中国木彫像についての系統的な研究の必要性が痛感されるに至った。その一端は飛鳥時代の作例において、その出自が日本であるのか、中国からもたらされたものであるのか、その判別に課題を残すものがある点に示されている。そのような状況にかんがみ、本研究では中国の木彫仏像、ならびに、平安時代の重要木彫作品に焦点をあてつつ日本における木彫発展の状況を把握しようとすべく進められた。

すなわち、1999（平成 11）年度は岡山・大通寺不空罽索観音坐像、奈良・室生寺金堂諸像ならびに弥勒堂釈迦如来坐像、伝弥勒菩薩立像、千葉・東光院伝七仏薬師坐像の調査を行い、2000（平成 12）年度は京都・福田寺薬師如来立像、地藏菩薩立像、京都・大將軍八神社蔵神像群、京都・行住院宝冠阿弥陀坐像、京都国立博物館（東寺旧蔵）十二天面などの調査を行っている。

なお、この調査研究は 5 年計画のうち 2 年が終えたところで、独立行政法人化にともない、美術部の研究プロジェクト「重要美術作品資料集成に関する研究」に吸収され発展的に解消した。2 年間の成果としては津田徹英の口頭発表「室生寺金堂諸仏私見」（彫刻史研究会、東京国立博物館、1999 年 6 月 5 日）、同「千葉氏の妙見信仰をめぐる二、三の問題」（『房総の神と仏（千葉市美術館秋季特別展）』シンポジウム、千葉市美術館、1999 年 11 月 13 日）があり、また、津田徹英・早川泰弘「ポータブル蛍光 X 線分析装置による大將軍八神社所蔵神像群の彩色材料」（『MUSEUM』582、東京国立博物館、2003 年 2 月）に結実してゆくこととなった。

「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」

本研究は、国内外において美術史研究者の間で基礎データを共有し、研究交流を促進するために、アメリカ所在の日本美術作品について、基礎データを収集し、そのデータベースを日本語と英語で作成し、併せてカタログとして刊行することを目指した。なお本研究は美術部の中長期研究計画に基づく調査研究ではないが、時期的にも重なり、当部が大きく関与した共同研究ということもあり、ここに特記することにした。

1988（昭和 63）年に、科学研究費「在外日本美術作品の調査研究と内外の研究交流の促進」に着手した。アメリカ国内の 46 の美術館、博物館、大学に対してアンケート調査を行い、このうち 16 の機関についてはインタビュー調査も行った。大方の賛同を得たが、一方で、日本にあるコレクションについてすら包括的な目録が完成していないにもかかわらず、なぜ海外所在のコレクションの調査や目録化を先行させねばならないのかという疑問も寄せられた。ニューヨークのメトロポリタン美術館において予備調査を行い、同美術館が所蔵する絵画作品 580 点について、そのアクセッション・カードをコピーし、既存の写真原板から焼き付けを作成し、一部の作品を調査した。研究成果は、1988（昭和 63）年度科学研究費補助金（海外学術研究）研究成果報告書にまとめられた。

科学研究費の申請では、予備調査費しか認められず、継続的な予算の措置ができなかったため、プロジェクトを維持していくための窮余の策として、1989（平成元）年に財団法人鹿島美術財団から助成金を得た。同財団の「美術に関する国際交流の援助（2）海

外派遣」により、「メトロポリタン美術館所蔵日本美術作品の調査研究」という課題で、島尾新、井手誠之輔、井上一稔、長岡龍作が助成を受けた。メトロポリタン美術館所蔵の絵画、彫刻の本格的な調査とデータベースの作成を行うとともに、内外研究者とともにデータの形式及びデータ共有化の手法について協議をした。

1990（平成2）年から、この研究プロジェクトの遂行の仕方が大きく変わった。古文化財科学研究会（1996年度に文化財保存修復学会と改名）が日本芸術文化振興会から芸術文化振興基金助成金を受けてこのプロジェクトを遂行し、当研究所が委嘱を受けて、対象機関との協議や現地調査、資料の収集、整理、公開、データベースの作成と公開、目録の刊行を行うことになった。助成金の課題は、「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」である。メトロポリタン美術館所蔵の絵画と彫刻を調査し、さらに予備調査として、ニューヨークのバーク・コレクション、バーク・ファウンデーションにおいて、絵画と彫刻を調査した。研究成果として、『海外所在日本美術品調査報告1 ニューヨーク メトロポリタン美術館 絵画・彫刻』（古文化財科学研究会、1991年）を刊行し、絵画428件、彫刻31件を収録した。この目録は、調査対象機関に50部進呈し、国内の諸機関等に約190件、国外の諸機関に約110件を配布した。目録の発送については、この後の目録刊行時にも、この原則を踏襲した。

1991（平成3）年、バーク・コレクション、バーク・ファウンデーションの絵画、彫刻を調査し、フィラデルフィア美術館において予備調査を行った。成果として、『海外所在日本美術品調査報告2 ニューヨーク バーク・コレクション バーク・ファウンデーション 絵画・彫刻』（古文化財科学研究会、1992年）を刊行し、絵画396件、彫刻22件を収載した。この年から、奈良国立博物館がこのプロジェクトに参画し、ヨーロッパ方面の調査研究等を担当した。

1992（平成4）年、フィラデルフィア美術館において本格的な調査を行い、カリフォルニア州コロナ・デル・マールの財団法人心遠館及びロサンジェルス・カウンティ・ミュージアムにおいてプライス・コレクションの予備調査を行った。成果として、『海外所在日本美術品調査報告3 フィラデルフィア美術館 絵画・彫刻』（古文化財科学研究会、1993年）を刊行し、絵画141件、彫刻39件を収載した。

1993（平成5）年、プライス・コレクションの本格的な調査を行い、サンフランシスコ・アジア美術館において予備調査を行った。成果として、『海外所在日本美術品調査報告4 プライス・コレクション 絵画』（古文化財科学研究会、1994年）を刊行し、絵画255件を収録した。

1994（平成6）年、サンフランシスコ・アジア美術館において、絵画と彫刻を調査し、

成果として『海外所在日本美術品調査報告5 サンフランシスコ・アジア美術館 絵画・彫刻』（古文化財科学研究会、1995年）を刊行し、絵画225件、彫刻68件を収録した。この年11月30日に日本芸術文化振興会の監査があり、その折に、日本芸術文化振興会側から、財政事情が厳しいために、第1次5ヶ年計画が終了する1994(平成6)年度をもって本プロジェクトを終了させて欲しいとの申し入れがあった。古文化財科学研究会はその申し出を基本的に了承し、当研究所が担当するアメリカ所在の美術品の調査は1994(平成6)年度をもって、奈良国立博物館が担当するヨーロッパ方面の調査は、ギメ東洋美術館の調査が終了する1995(平成7)年度をもって終了させる意向であると回答した。その後、文化庁文化財保護部美術工芸課長の三輪嘉六より、文化庁が本プロジェクトを支援し、日本芸術文化振興会にも助成の継続を申し入れる旨の表明があり、古文化財科学研究会、当研究所、奈良国立博物館は、プロジェクトを継続する方向で合意した。このため、この年度には予備調査を行っていない。

1995(平成7)年、ブルックリン美術館において予備調査を行った。1996(平成8)年1月16日、古文化財科学研究会は日本芸術文化振興会から、継続して助成を受けている活動の必要性について、検討し、対処したいとして、再度資料の提出を求められた。

1996(平成8)年、ブルックリン美術館において本格的な調査を予定していたが、美術館から、175周年記念展覧会の準備に着手したため、当分の間調査を受け入れることが出来ないとの申し出があったため、急遽、調査対象をハーバード大学サックラー美術館に改めた。ブルックリン美術館に関しては、1995(平成7)年度の調査に基づき、所蔵作品の基礎データを整理して、日本語と英語を併記した『海外所在日本古美術品調査概報 ブルックリン美術館 絵画・彫刻』（文化財保存修復学会、1997年）を刊行し、絵画342件、彫刻37件のデータを収録して、今後の調査や資料の活用に備えた。古文化財科学研究会は日本芸術文化振興会から、過去の実績と将来の年次計画の提出を求められ、本プロジェクトをすみやかに終了させて欲しい旨の申し入れがあった。

1997(平成9)年は、ハーバード大学サックラー美術館において本格的な調査を行った。1996(平成8)年度の日本芸術文化振興会からの申し入れを受け、文化財保存修復学会と当研究所は協議し、1997(平成9)年度をもってアメリカ所在の美術品の調査研究を終了することとした。しかし、奈良国立博物館は、1997(平成9)年度以降も当分の間、ヨーロッパ方面の調査を継続することになった。

3 独立行政法人化後の調査研究 2001（平成13）年～2006（平成18）年

2001（平成13）年の独立行政法人化に伴い、美術部は下記の3室から構成されることとなった。

- 日本東洋美術研究室 江戸時代までの日本美術と東アジアの美術を研究する。
- 黒田記念近代現代美術研究室 明治以降の日本美術の研究を主に、現代美術の動向をも調査する。
- 広領域研究室 美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、人文科学の他の領域や、自然科学、社会科学の諸分野と連携して広い視野から美術を研究する。各室が中心となって行った研究プロジェクトは、下記の通りである。

○日本東洋美術研究室

- 「重要美術作品資料集成に関する研究」
- 「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」
- 「日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究」
- 「中国壁画の研究」

○黒田記念近代現代美術研究室

- 「明治期博覧会出品目録に関する調査・研究」
- 「昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究」
- 「現代美術資料の調査・研究—資料収集・整理法の確立のための研究」
- 「黒田清輝の再評価に関する調査研究」

○広領域研究室

- 「光学的手法による美術工芸品の彩色についての調査研究」

○日本東洋美術研究室

- 「重要美術作品資料集成に関する研究」

第1期中期計画「東アジア地域における美術交流の研究」の一環として進めてきた研究プロジェクトであった。

この研究プロジェクトが立案された背景には、個々の造形物を対象とする美術の研究にとって様々な形の資料を蓄積する意義と重要性が大きいこと、さらに近年、歴史学な

どの分野においても美術への関心が多様化し、質の高い資料を幅広く提供することがあらためて求められるようになってきたことがあった。

したがってこの研究プロジェクトは新しい美術資料の可能性を探り、その実現を目的にしており、具体的には、(1) 記録媒体、分析手法などの新たな技術に対応し、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たす資料の在り方を研究し、(2) それを例示する資料の収集と蓄積を実践し、成果を報告書として公表することを企図していた。

研究目的の実現に向け、例えば在外日本古美術品保存修復協力事業との関わりから調査を行うなど、様々な試行が繰り返された中で生み出された研究成果のうち、最も特筆すべきは「美術研究作品資料」“Artwork Archives for Art Studies”というシリーズ名を冠した報告書3冊であった(口絵掲載)。以下、各報告書について概要を示す。

(1) 『黒田清輝《智・感・情》—美術研究作品資料—第1冊』(2001年度)

渡邊明義「はじめに」

山梨絵美子「表紙解説」

城野誠治「デジタル撮影・処理の記録」

山梨絵美子「赤外線的眼で見る黒田清輝《智・感・情》」

「研究文献」

本書は、当時、当研究所が所蔵していた黒田清輝「智・感・情」に対する光学調査の報告書である。このときの光学調査では、情報調整室が研究プロジェクト「画像形成技術の開発に関する研究」の下に開発した高精細デジタル画像による撮影技術が駆使された。論文(山梨)では光学調査から得られた知見に基づいて作品制作の過程や変更の意図などが考察された。

(2) 『東寺観智院蔵五大虚空蔵菩薩像—美術研究作品資料第2冊—』(2003年度)

渡邊明義「はじめに」

岡田健「東寺観智院蔵五大虚空蔵菩薩像」

岡田健「【調書】五大虚空蔵菩薩像五躰」

本書は京都の東寺観智院に所蔵される五大虚空蔵菩薩像5尊(唐代、木彫像)に対する調査報告書である。この報告書に掲載された図版は、1996(平成8年度)7月に特別研究「中国仏教美術基準作品調査研究」の一環として、本作例を調査した際に撮影された写真資料が使用された。それらは4×5インチ・サイズのモノクローム・ネガフィルムとカラー・ポジフィルムによる撮影、半切大の専用フィルムを用いたX線透過撮影からなったが、これらから今日の水準に照らしてすぐれた画質の図版を作成することが確認出来た。



14 青木繁「海の幸」と調査スタッフ

(3)『青木繁《海の幸》—美術研究作品
資料第3冊一』（2004年度）

鈴木規夫「はじめに」

平野実「《海の幸》100周年に寄せて」

田中淳「《海の幸》誕生まで」

植野健造「名作ものがたり：青木繁《海
の幸》の100年」

城野誠治「デジタル画像の制作につい
て」

石井亨「《海の幸》再考：ものとしての絵画」

森山秀子編「白馬会第9回展出品時の批評」

植野健造編「青木繁《海の幸》関連年表」

植野健造編「青木繁年表」

青木繁「海の幸」について、当研究所と石橋財団石橋美術館の間で研究協力が行われ〔図14〕、青木繁の生地である福岡県久留米市、「海の幸」の制作地である千葉県館山市布良等で、関係者のインタビューを含む現地調査、撮影が行われるとともに、高精細デジタル画像、近赤外線撮影による「海の幸」の光学調査が実施された。

上述の報告書3冊のほかに、非売品ながら、2002（平成14）年度に『重要美術作品資料集成に関する研究 平成14（2002）年度報告書』、2005（平成17）年度に『重要美術作品資料集成に関する研究』をそれぞれ刊行した。前者はこの研究プロジェクトの中間報告、後者は総括としての役割を担ったと言える。

「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」

本研究は、前年度までの研究プロジェクト「日本における外来の美術の受容についての研究」の成果を引き継ぎ、開始された。前プロジェクトをうけて本プロジェクトが目指したのは、外来美術を「受容」や「影響」といった一面のみならず、制作地での状況や、日本側での選択や拒絶、転用などを視野に入れつつ、その時々での異文化理解の諸相から究明するということにあった。

とりわけ、以下の四つの具体的な視点の下、研究は推進された。(1) 作品の移動に注目する、(2) 一つのモチーフの形体が変容していく様を詳細に追跡する、(3) 一人の作家をめぐる言説を詳細に収集し、その作家がどのように受容されたのかを言説の面から跡づける、(4) 受容されたものが、本来どの場でどのような位置づけにあったのかを

新たな資料によって検証し、それとの比較において、その受容のされ方を再検討する、である。

研究推進にあたっては、前プロジェクトの際に行われたミニシンポジウム「水陸画の受容」が大きな刺激となり、一つのテーマについて複数の研究者が発表を行い、意見交換をするシンポジウム形式の研究会を行った。「異文化受容と美術」



15 「異文化受容と美術」第1回ミニシンポジウム
「鎌倉・南北朝時代における外来美術の受容—『宋風』の問題を中心に」島尾新の発表

と題されたミニシンポジウムは、毎年1、2回、計6回開催され〔図15〕、国内外から広く専門家を招聘し、積極的な学術交流がはかられた。また、毎年秋に開かれるオープンレクチャーの総合テーマを「外来美術の受容」に設定し、所内外の研究者の発表の場とした。各月の研究会でも、本研究に関わるテーマでの研究発表が行われた。

2003（平成15）年には本研究の中間報告（『日本における外来美術の受容に関する調査・研究』）がまとめられ、中間報告刊行段階での研究成果と今後の課題、そして、第1回から第3回目までのミニシンポジウムでの討議がまとめられた。

また、最終年度の2006（平成18）年3月には、『日本における外来美術の受容に関する調査・研究 報告書』を刊行し、ミニシンポジウムとオープンレクチャーで行われた研究発表を掲載した。報告書は蓄積された個々の発表内容を、研究の発表順や時代順ではなく、「人の往来」、「モノの往来」、「メディアの役割」、「新旧の出会いと葛藤」、「近代美術史への眼」の五つのグループに分類し、本プロジェクト全体の流れがわかるような構成を目指した。

「日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究」

美術部は、日本及びその他のアジア諸地域の古美術に関する文献を収録した目録として、帝国美術院附属美術研究所時代の1941（昭和16）年に『東洋美術文献目録 定期刊行物所載古美術文献』を、東京国立文化財研究所時代の1969（昭和44）年に『日本東洋古美術文献目録 昭和11～40年定期刊行物所載』を刊行した。前者には、明治時代から1935（昭和10）年までの間に発行された定期刊行物に掲載された文献を、後者には、1936（昭和11）年から1965（昭和40）年までの文献を収録した。本研究は、これらの続編にあたる『日本東洋古美術文献目録 一九六六～二〇〇〇年定期刊行物所載』を刊行することを最終的な目標として行った研究である。独立行政法人となった2001



16 『東洋美術文献目録』及び『日本東洋古美術文献目録』

(平成13)年から2004(平成16)年に年度計画に掲げ、研究を行ったが、これは、前著を刊行した以降も、定期刊行物所載の古美術文献を継続的に収集、整理し、データ化して、美術部が刊行する『日本美術年鑑』に掲載するという情報資料部、その後身である情報調

整室(現、企画情報部文化財アーカイブズ研究室)の地道な仕事の実績のうえに成り立っている。

1966(昭和41)年から2000(平成12)年までの35年間に、日本国内で発行された定期刊行物に掲載され、『日本美術年鑑』に収録された文献40766件をもれなく対象とし、これに様々な理由から年鑑に収録されていなかった美術・工芸関係の文献2576件を増補し、総数は43342件となった。採録の範囲とした地域は、日本、中国、朝鮮の東アジアをはじめ、東南アジア、南アジア、中央アジア、北アジア、西アジアの諸国、諸地域である。また、これらの地域に関連する内容をもつ文献については、その他の地域のものであっても対象とした。時代については、日本は江戸時代、中国は清時代、朝鮮は朝鮮時代を下限とし、他の地域についても概ねこれに準じた。近、現代の事象であっても、これらの時代に関連する内容をもつ文献は対象とした。ジャンルについては、美術、工芸、建築を主たる対象とし、これに美術等に深く関わる内容をもつ考古、文化史の文献を加えた。

対象としたすべての文献について原誌に当たり直し、掲載記事と照合、校正を行って、正確を期した。原誌の照合等に関しては、多くの大学や図書館の協力を得た。文献の分類と配列、大見出しの付与については、『日本美術年鑑』の現行のそれに準拠したが、さらにその中を細分して、中見出しと小見出しを加える努力をした。また、前著には無かった定期刊行物の発行年月を文献毎に付し、さらに検索の便宜を考慮して、著者名索引を加える工夫も行った。

これらの研究成果として、2005(平成17)年3月に『日本東洋古美術文献目録一九六六～二〇〇〇年定期刊行物所載』を刊行した〔図16〕。

「中国壁画の研究」

中期計画「東アジア地域における美術交流の研究」の一環として進めてきた研究プロジェクトであった。

研究目的は、中国に所在する古墳、寺観、石窟寺院などの壁画について、現地調査を踏まえながら、(1) 壁画の技法、材料、とくに顔料や色料に関する分析と考察、(2) 顔料、色料の変色、退色に関する資料の収集、想定される原因の考察、(3) 壁画の主題や図像構成、様式的特徴の記録及びその解釈と比較研究、(4) 修復すべき作品の選定及びその美術史的価値付け、(5) 技法や材料等に関する文献資料の読解及び現存する壁画と文献資料との比較等を通じて、中国壁画研究のための基本資料を整備するとともに、その保存と修復に対して美術史の面から協力することにあつた。

研究成果は現地調査、関連作品の調査、研究交流、データベースの構築、そして報告書の刊行が挙げられる。

現地調査については、中野が2001(平成13)年から2003(平成15)年まで毎年1回、ユネスコのクムトラ石窟保存修復事業の一環として、新疆ウイグル自治区クムトラ石窟の調査を行った。また中野は2004(平成16)年に、トルファン地区を代表するベゼクリク石窟及びトユク石窟を調査した。新疆ウイグル自治区をフィールドとした調査以外には、勝木が2002(平成14)年に南京地区における石窟壁画の調査、2004(平成16)年に山西省の寺観壁画の調査、2005(平成17)年に中国西北部の寺観壁画の調査、そして北京市の法海寺壁画の調査を行った。

関連作品の調査については、情報調整室、保存科学部の協力の下、光学的な調査が進められた。調査対象は2001(平成15)年度に東京国立博物館保管の地藏菩薩像幡(敦煌出土、ペリオ将来、TA158)、2002(平成14)年度に東京国立博物館保管の壁画断片(大谷探検隊将来のクチャ出土断片3点、将来者不詳のクムトラ出土断片1点)、2003(平成15)年度に東京国立博物館保管の壁画断片3点(大谷探検隊将来、ベゼクリク石窟出土)と紙本着色樹下人物図(トルファン・アスターナ墓出土)、2004(平成16)年度に東京国立博物館保管の壁画断片2点(大谷探検隊将来、ミーラン出土とベゼクリク石窟出土)と塑造菩薩頭部(クチャ・クムトラ出土)であった。

研究交流については2002(平成14)年度に研究協議会を1回、2002(平成14)年度に研究協議会を2回、研究会を1回行い、調査・研究の成果を公表するとともに、今後検討すべき問題の共有化を目指した。

中国壁画のデータベースの作成については、河南省、吉林省、湖南省、広東省、青海省に所在する壁画のデータ約3千件を5年間にわたって入力した。研究成果報告書はこのデータベースをもとに編集・刊行された。

○黒田記念近代現代美術研究室

「明治期博覧会出品目録に関する調査・研究」

1980年代に欧米でポストモダニズムに関する議論が盛んになり、近代を相対化する動きが起きたのに呼応して、日本の学問の諸分野において、近代の学としての成り立ちと今日までの歩みを跡づける作業が行われた。美術史学においても1990年代に入って「美術」という言葉の誕生とその制度の確立過程、美術館に先立つ展覧制度としての近代以前からあった見世物や書画会などの研究があらわれ、美術史を語る用語の歴史など、日本の美術史学史への興味が高まった。

当研究所でも1988（昭和63）年度から4年計画で特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」の一環として、内国勸業博覧会、万国博覧会の要綱、目録及び関連資料の調査研究を行い、博覧会研究の基盤を築き、1997（平成9）年に第21回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」を開催し、その報告書『今、日本の美術史学をふりかえる』を1999（平成11）年に刊行した。また、それを踏まえて1997（平成9）年から2000（平成12）年に科学研究費「日本における美術史学の成立と展開」を受けて日本の美術史学史の調査研究を継続した。「明治期博覧会出品目録に関する調査・研究」はその一課題として開始されている。博覧会は西洋の展覧制度として明治期にもたらされ、同じく西洋からもたらされた「美術」の概念が成立し社会に浸透していく過程で重要な役割を果たした。政府による内国勸業博覧会、万国博覧会については先述の特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」の成果の一つとしてその出品目録の復刻も含め、すでに当研究所が行って報告書も刊行したが、本研究ではこれまで対象とされてこなかった府県博覧会に注目し、先行研究のある政府による内国勸業博覧会等との比較を通じて、その特色や役割を明らかにしようとするものであった。鈴木廣之を中心として、美術部員及び小林純子（沖縄県立芸術大学）の協力を得、展覧会の名称、内容、分類、種別、出品者、数量など具体的観点からの考察を目指して、各府県博覧会の出品要綱、出品目録を収集、整理し、2000（平成11）年にはその成果として、鈴木廣之・小林純子「〈研究報告〉明治期府県博覧会一附・明治期府県博覧会調査資料目録、明治期博覧会一覧（稿）一」が先述の科学研究費による報告書『日本における美術史学の成立と展開』（2000年3月）に発表された。

研究プロジェクトとしては2003（平成15）年度まで行われたが、この成果を踏まえ、翌年からは科学研究費「日本近代の造形分野における「もの」と「わざ」の分類の変遷

に関する調査研究」によって各博覧会の要綱、目録の収集整理を継続し、データベース化する作業を行い、本プロジェクトの目的であった『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』（2004年3月）の刊行を果たした。この報告書が1876（明治9）年までを対象としたのは、収集資料が大部になり、一卷にまとめるのが困難であったのを主な理由とするが、このまともりは、1877（明治10）年に政府による内国勸業博覧会が開催されて西洋的博覧会の制度が本格的に受容され始め、江戸期までの展覧システムが大きな変遷を遂げる画期をなしたのと呼応する。本研究で収集・整理された資料は1877（明治10）年以降にも及んでおり、その公開、発表は今後の課題として残されている。

「昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究」

本研究については、「(3) 1989（平成元）年～2000（平成12）年の中長期研究計画に基づく調査研究」中、「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及びその作家の研究」（205～206頁）を参照。

「現代美術資料の調査・研究—資料収集・整理法の確立のための研究」

本研究は、研究プロジェクト「我が国の近代美術の発達に関する調査・研究」の一環として、田中淳、塩谷純、小林未央子を中心に進められた。これは、戦後から今日にいたる日本の現代美術を対象に、展覧会図録、目録等の印刷物を中心とする資料を収集・調査し、多様化する現代美術の動向を研究し、あわせて日本の近現代美術の保存記録のあり方と公開の方法について研究することを目的としたものであった。

とくに本研究は、1997（平成9）年度に笹木繁男主宰現代美術資料センターからの寄贈を契機に同センターの資料を中心に進められた。寄贈時には、下記のように各報道機関にも取り上げられ、話題となった。

個人収集の現代美術資料 国立文化財研究所に寄贈

東京都中野区の現代美術資料センターが収蔵する戦中、戦後の美術に関する資料の全点が、東京文化財研究所に寄贈されることになった。

同センターは、元銀行員の笹木繁男氏〔図17〕が60年代から個人的に収集してきた資料を研究者向けに公開するため、3年前に自宅に開いた。限られたスペースでの保管が難しくなり、当研究所への移管が決まった。

段ボール箱にして約450箱に及ぶ資料には戦争記録画、戦後の主だった美術運動、グループに関する書籍や展覧会図録、パンフレット、はがき、ビデオなどが含まれており、美術



17 笹木繁男氏

雑誌や作家の個人資料もそろっている。

すべて笹木氏が私的な興味から足で歩いて集めたものだが、同研究所の田中淳・美術部第二研究室長は、「充実した収集で、研究所でカバーしきれなかった現代美術の分野を補完する内容」と評価する。

東京文化財研究所では、段ボール箱百七十箱分の資料を六月に受け入れ、二〇〇〇年までにすべてを搬入する。この

年に完成予定の新しい建物に移転した後、笹木氏の協力もえて、公開に向けて整理作業と目録作りを始める。」(『日本経済新聞』日刊、1997年7月17日)

上記の新聞記事の他にも、寄贈時には各種の新聞、雑誌に下記のように取り上げられた。
「戦後現代美術の貴重な資料、東京国立文化財研究所へ寄贈決定」(『月刊ギャラリー』、1997年7月号)

「人らんだむ 東京国立文化財研究所に美術資料を寄贈した 笹木繁男さん 資料の開放を願って」(『新美術新聞』809、1997年9月21日)

「笹木さんの仕事をつなぐ数奇な糸(笹木繁男)」(『あいだ』24、1997年12月)

田中淳「特集アート・アーカイヴ 近代美術アーカイヴとダンボール箱」(『現代の眼』523、2000年8月)

また、これに関連して笹木氏は、すでに閉じられた画廊の資料を中心にしたドキュメントの展覧会を企画公開し、その折りにも各新聞等に取り上げられ、当研究所への寄贈が話題となった。

「疾駆けたギャラリーの記録(軌跡)展」(ギャラリー川船、1998年8月24日から9月12日)

「インタビュー 私財を投じて美術資料収集 笹木繁男さん 疾駆けたギャラリーの記録展 画廊の原点見直しを」(菅) (『読売新聞』夕刊、1998年9月2日)

三田晴夫「現代アート考 記録と芸術 時代の鼓動鮮やかに(笹木繁男)」(『毎日新聞』夕刊、1998年8月20日)

この寄贈資料の特徴は、戦後及び現代までの画廊資料、作家資料だけでなく、日中戦争、太平洋戦争を中心とする戦中期美術資料、戦後の「具体美術協会」資料が充実していることである。また作家別では、とりわけ久隅守景、本多天城、藤田嗣治、李禹煥、草間彌生、中村正義、山下菊二、中川幸夫、大野一雄、菅木志雄、川俣正、村上隆等の文献資料等がほぼ網羅的に収集されていることである。そして、美術部では前述の資料整理

とデータ化をすすめ、CD-ROM 版として「笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録」(2002 年 3 月)、「笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録 画廊関連データ」(2006 年 3 月)を刊行することが出来た。なお、笹木氏との間では、研究者への公開をすすめる一方で、資料の補填をすることを条件に寄贈を受け入れており、日比野克彦、高山良策、上前智佑、中村宏、ジェセフ・ラブらが所蔵していた資料も寄贈され、それは現在も継続されている。

「黒田清輝の再評価に関する調査研究」

日本近代を代表する洋画家の黒田清輝、及び関連美術家の作品や資料等の総合的な調査研究として 2001 (平成 13) 年度から 2005 (平成 17) 年度まで行われた。当研究所はその前身である美術研究所が黒田の遺産によって設立されたこともあり、黒田の作品を多数所蔵し (2007 年に東京国立博物館へ移管)、関連資料も蓄積されている。本研究はそれらを改めて調査・整理することで、作家研究の一つのあり方を示そうとするものであった。

まず作品については、情報調整室の城野誠治の協力のもと、最新のデジタル技術を応用した光学的調査を推し進めた。その成果は研究プロジェクト「重要美術作品資料集成に関する研究」の一環でもある『黒田清輝《智・感・情》—美術研究作品資料第 1 冊』(2002 年刊)に報告された他、2004 (平成 16) 年には情報調整室の研究プロジェクト「画像形成技術の開発に関する研究」との共同研究として、黒田記念館で「黒田清輝の目—風景・からだ・顔」と題して展示公開を行っている。この展示では黒田清輝の「湖畔」「智・感・情」「松方公肖像下絵」「婦人肖像」及び青木繁の「高取伊好像」を対象に、風景・身体・顔の 3 テーマで構成し、高精細デジタル画像、可視域内励起光による蛍光画像、反射近赤外線画像、透過近赤外線画像等を実作品と比較出来るように展示した。

資料に関しては、当研究所が保管する黒田清輝宛書簡の整理を行い、7 千件にのぼる書簡の差出人や日付を入力したデータベースを 2002 (平成 14) 年度に作成した。同データベースは個人情報を含むため原則として非公開であるが、田中淳が 2005 (平成 17) 年に刊行した『画家がいる「場所」—近代日本美術の基層から』ではそれらの書簡が随所に活用され、また 2004 (平成 16) 年度にはフランス語書簡 253 通が小山ブリジット、奥田勝彦により翻訳、2009 (平成 21) 年度にこれを刊行する予定である。

本研究では書簡をはじめとする未公開資料の整理に加えて、公刊図書や新聞雑誌等に掲載された黒田清輝関連文献の収集を行った。2003 (平成 15) 年に和歌山県立近代美術館で開催した黒田清輝展のカタログ編集に際し、それまでの文献目録の見直しを図り、

これを更新した。そのうち、とくに黒田清輝の署名のある文章・談話・座談会等の記事については、1983（昭和58）年に刊行された『絵画の将来』（中央公論美術出版）に収録されたものを除いて編集、適宜注釈を施し『黒田清輝著述集』として2007（平成19）年に刊行されている。

その他にも、黒田が1900（明治33）年から翌年にかけて渡欧した折に関わったパンテオン会についての研究協議会を、他機関の研究者を交え2001（平成13）、2002（平成14）年度に開催、2002（平成14）年度にはその会誌である『パンテオン会雑誌』の撮影調査を行うなど、黒田周辺の美術家も視野に入れた調査研究を行った。その成果は『パンテオン会雑誌』研究会編『パリ1900年・日本人留学生の交遊—『パンテオン会雑誌』資料と研究』（2004年刊）に反映されている。

○広領域研究室

「光学的手法による美術工芸品の彩色についての調査研究」

本研究は、「画像形成技法の開発に関する研究」（情報調整室）、非破壊測定法の改良研究及び新手法の研究で開発された分析及び画像形成技術を、美術工芸品に適用し、美術史等人文科学の分野を含むより総合的な研究のための基礎を築くことを目的とし、X線透過撮影、エミシオグラフィ、蛍光X線分析・赤外線撮影、蛍光撮影、顕微鏡撮影などの光学手法を用い、絵画や彫刻・工芸の彩色顔料の材質・技法を分析し、そこで得られたデータをもとに、美術工芸品が本来どのような表現をもっていたのか、それを実現するためにどのような材料や技術が用いられていたのかなどの問題を追及し、作品が生まれてから現在に至るまで生きてきた歴史を考えることを目指した。

研究対象には、それ以前の受託研究を含め過去3年間行ってきた五島美術館・徳川美術館「源氏物語絵巻」の調査研究をこのプロジェクトで継続し、蓄積データの整理を行うとともに、データ解析のための研究会等を開催し後掲の報告書を刊行した。また、2002（平成14）年度には国宝平等院鳳凰堂南面側壁の壁画調査を行い、2003（平成15）年度からは彩色関係資料のデータベース（語彙・資料編）の構築とホームページにおける公開、木彫像の彩色調査などにも対象を拡大した。

成果として、第30回文化財保存修復研究協議会『光学的方法の明日』報告書（2002年）、早川泰弘・津田徹英「ポータブル蛍光X線分析装置による京都・大將軍八神社神像群の彩色材料調査」（『MUSEUM』582、東京国立博物館、2003年2月）、『光学的手法による国宝源氏物語絵巻報告書』（2004年）、Yasuhiro Hayakawa, Tetsuei Tsuda, Sadatoshi

Miura, The Analysis of Pigments with a Portable X ray Fluorecence Sectometer, Historical Polychromy: polychrome Sculpture in Gerrman and Japan (Munich,04)、早川泰弘・津田徹英「蛍光 X 線分析を用いた平等院鳳凰堂中品中生図の彩色材料調査」(『鳳翔学叢』2、平等院、2005 年 12 月)、早川泰弘編『国宝源氏物語絵巻蛍光 X 線分析結果』(2008 年)などに結実してゆくとともに、美術部の研究プロジェクト「美術の材料・技法に関する広領域的研究」に発展継承されていくこととなる。

むすびにかえて

これまで 75 年の間に行われた調査研究の概要を記してきた。それぞれの研究を概観していくと、当部の業務が、教育・研究機関である大学、展示・研究機関である博物館、美術館とは、おのずと異なる特色と職責があることは明白であると思う。それは、総合的、基礎的な研究の継続と、先端的な調査・研究方法、手法の開発とそれを援用した新たな課題に取り組むことであり、その研究成果を積極的に公開していくことである。いずれの場合も、同じ研究課題に向かって当部の研究者が組織的に、なおかつ時間をかけて計画的に遂行しなければ成果を上げることが出来ないことは言うまでもない。だからこそ、今後とも文化財、美術作品を対象に、当研究所内外の他分野の専門家との協力、連携を深めながら、業務としての調査研究を不断に進めなければならないであろう。また、こうした継続があればこそ、当部の調査研究活動に対して国内外から厚い信頼を得るとともに、その成果がこれまでの文化財行政に少なからず寄与することが出来たと自負している。

情報資料部・協力調整官—情報調整室

はじめに

1930（昭和5）年10月17日、美術研究所の開所により、資料部が誕生した。1947（昭和22）年、当研究所は国立博物館の附属となり部局名は第七研究室と変更されたが、1950（昭和25）年、文化財保護委員会の附属となって1951（昭和26）年には資料部の名称に戻った。1952（昭和27）年4月1日、東京文化財研究所と改称するにあたり美術部資料室となり、1977（昭和52）年4月までこの名称が続いた。

1977（昭和52）年4月18日、従来美術部資料室が果たしてきた美術に関する研究資料の作成・収集・整理・保管・公開等、美術史研究における資料センター的役割を更に発展させて、当研究所各部の所掌にかかるすべての資料を対象とする部署として、新たに情報資料部が発足した。同部には、文献資料研究室及び写真資料研究室の2室が置かれた。

2001（平成13）年4月1日、東京国立文化財研究所が独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となったのに伴い、協力調整官—情報調整室と改組された。

2006（平成18）年4月1日、情報システム研究室と文化財アーカイブズ研究室の2室構成の企画情報部となる。

部室員の調査研究については、美術部の項で述べることとし、ここでは職掌である、研究資料の作成・収集・整理・保管・公開、情報処理システム、画像形成に焦点をあて、蔵書の紹介とあわせて、当研究所の設立準備の時代を含めて開設後から75年にわたる歴史を、以下5節に分けて順次記していくことにする。

1 開所前の資料収集・作成

始めに情報資料部の前身（以下、本文中では「資料室」と記述することにする）からふり返ることにする。美術研究所は、「沿革」に記されたように黒田清輝の遺産を元に計画された美術奨励事業に、矢代幸雄の美術図書館建設案が採用されたことから誕生した。近年、日本でも美術館・博物館内に図書室を併設することは珍しくないが、欧米各国では、矢代が訪れた1920年代には、すでに地方都市においても美術館と図書館が並



1 大英博物館図書館



2 ナショナル・アート・ライブラリー

存している例が多くみられ、矢代は日本でも同様の施設が必要だと強く感じ、調査研究で利用したいいくつかの機関をモデルに、美術図書館を構想していた（『美術研究所の設立と「美術研究」の発刊』『美術研究』1、1932年1月、及び「美術図書館に就て」『図書館雑誌』209、1937年4月）。その関心の高さは、矢代が持ち帰った英国の大英博物館（British Museum）〔図1〕、ロイヤル・スコティッシュ・ミュージアム（Royal Scottish Museum）、アシュモリアン博物館（Ashmolean Museum）や、ドイツのライプツィヒ・ドイツ図書館（Leipzig Deutsche Bucherei）、ベルリン国立図書館（Preussische Staatsbibliothek Berlin）などの図書館の図面や写真からもうかがうことが出来る。

1925（大正14）年、美術図書館と研究所を兼ねた施設である美術研究所の建設が決定し、1927（昭和2）年より東京美術学校の矢代研究室で準備作業が始まり、所員は美術の研究に必要な諸資料の作成・収集・整理に着手した。1929（昭和4）年5月に帝国美術院へ提出した寄附願には、開設時の設備について「（一）写真室設備 器械及器具ヲ含ム （三）閲覧室設備 研究資料収蔵用鋼鉄家具ヲ含ム （四）書庫設備」（『資料編』231頁）とあり、構想の実現に向かって諸準備が整いつつあった。以下、（1）図書、（2）写真の資料収集と整理について記すことにする。

（1）図書

図書の収集は、矢代が外遊中に見聞したロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムのナショナル・アート・ライブラリー〔図2〕や1934年にハンブルグからロンドンへ移ったワルブルグ文庫（Bibliothek Warburg）、ベルリン美術図書館（Staatliche Kunstbibliothek）などを参考に、開所前の1927（昭和2）年より開始し、1929（昭和4）年4月末の段階で「図書 約二千四百部、写真其他複製品 約三萬八千四百枚」（『資料編』239頁）を数えた。この時期の受け入れは所員による寄贈が数冊あるのみで、大部分は購入した洋書であった。



3 中川忠順

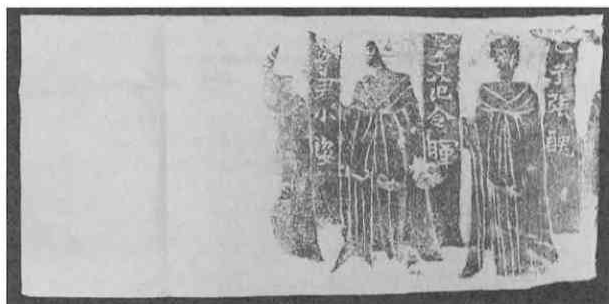
残された資料によれば、黒田の遺産のうち図書購入費に当てられた経費をもとに、矢代は外遊先の欧米 18 ケ国 92 都市で西洋美術に関する図書、展覧会カタログ、雑誌、写真、絵葉書等の収集に努め、また訪問先の美術館や大学では刊行物の寄贈を依頼した。雑誌は受け入れの経緯について記録が残っていないものの、“The Illustrated London News”（1842 年 5 月創刊）や、“The Burlington Magazine”（1903 年 3 月創刊）は、矢代がまとめて購入してきたものであろう。また “Berliner Museen : Berichte aus

den Preussischen Kunstsammlungen”、“Bulletin of the Museum of Fine Arts, Boston”、“The British Museum Quarterly”などは寄贈されたもので、中には現在も寄贈を受けている雑誌もある。欧米での洋書の購入は、登録台帳によると 1933（昭和 8）年までに集中している。

一方、国内の刊行物については、1928（昭和 3）年 3 月 22 日に亡くなった美術史家ただより中川忠順〔図 3〕の蔵書（以下、本文中では「中川文庫」と記述することにする）を、本郷の漢籍専門書店文求堂の主人田中慶太郎の仲介で購入し、日本東洋美術図書の柱とした。中川は 1873（明治 6）年 2 月 1 日、金沢に生まれた。号は潜光。第四高等学校から 1896（明治 29）年東京帝国大学国史学科へ入学、1899（明治 32）年大学院に進むが、翌年内務省に入り、終生古社寺保存会の仕事に従事した美術史家で、岡倉天心と親交があり、ボストン美術館東洋部監査顧問や、東京帝国大学の講師を務めた。中川文庫の中の 1 冊 “The Ideals of Indian Art”（E. B. Havell, London, 1911）は、天心の旧蔵本である。中川は第 1 回文部省美術展覧会の第一部（日本画）の審査委員を務め、展覧会評を数多く雑誌に寄せるなど、当時の美術界とも深い関わりがあった。ボストン美術館の富田幸次郎によれば、中川が行う蔵品の整理は、天心の見方とは異なり非常に丁寧であり、国宝保存法（1931 年）が成立するまで、個人の所蔵品が指定の対象外だったのは、中川の意見が反映されたためであったという。また伊東忠太は、中川が「書は芸術に非ず」と断言して国宝保存会内で論争になったなどの逸話を伝えている。ただ残念ながら中川の著作集は刊行されていない。大学で中川の薫陶を受けた田中一松、熊谷宣夫等、また国宝保存会で中川のもとで働いた脇本楽之軒は、後に当研究所の職員となり活躍した。また忠順の子息で陶磁史研究家の中川千咲は、1934（昭和 9）年 4 月に当研究所に入り資料室長、美術部長を務め、当研究所とは二代にわたる縁となった（「序—中川忠順と研究

所の蔵書一」『東京文化財研究所蔵書目録 3』2004年、18～19頁）。

美術史研究者の少ない時代にあつて、中川の蔵書は、美術だけでなく歴史、文学、宗教等広範囲にわたり、良質の稀覯本や漢籍も多く、当研究所の蔵書の母胎とす



4 龍門石窟造像銘記拓本

るに相応しい内容で、愛読したと思われるものには「潜光過眼」あるいは「月在天心」の印が押されていた。忠順の旧宅は戦災にあったが、焼失をまぬがれた中川の蔵書は1835種約5千冊を数え、当研究所蔵書の約1割を占めている。

中川文庫の拓本2310枚のうち約1700枚を占める龍門石窟の造像銘記〔図4〕（『資料編』「東京文化財研究所蔵 龍門石窟造像銘記拓本目録」546～608頁参照）は、拓殖大学図書館の佐藤安之助文庫（550余点）や、京都大学人文科学研究所が所蔵する「龍門石窟」の拓本と同様に、資料的価値が高いが、これらも開所前に購入したものである（『資料編』「開設期の公文書」236頁参照）。中川が拓本を収集した経緯は不明だが、龍門石窟への関心は強かったことが残された文章にうかがわれる。

『新海竹太郎伝』（新海竹蔵撰、非売品、1981年）や、中川の旅行談（『支那旅行余談』『美術月報』219、1921年9月）などによると、彫刻家の新海竹太郎（中川が主宰した集まり「原町会」のメンバーで、中川の親友であつた。「原町会」には、脇本楽之軒、平子鐸嶺、田中慶太郎、雑誌『新仏教』を創刊した高島米峰、東洋史学者の稲葉君山、仏教学者の島地大等、歴史学者沼田頼輔らが参加していた）と中川は東京帝国大学より命じられ1921（大正10）年4月25日に中国へ出発し、5月14日に雲崗石窟、24日に龍門石窟、31日に棲霞寺、6月1日に金山寺を訪れて、帰路には九州で別府の磨崖仏や竹田等を観て14日に帰京している。中川は旅行談の中で「龍門の千仏洞に親しく出入して千古の芸術に親炙することが出来た」と述べている。

この旅行の目的は、雲崗石窟と龍門石窟の石仏を観ることであつたが、雲崗へは北京の山本照像館（明治憲法発布の際に御真影を撮影、後に北京に渡って清朝末期の同地を撮影した写真集を出版した山本讃七郎が始めた写真館）の山本明と岸正勝の2名が同行して撮影を行った。帰国後、中川と新海の両名は雲崗石窟を広く世に紹介するため、画報社に働きかけて、伊東忠太や常盤大定らの文章を収めた「雲崗石窟号」（『美術画報』531、1921年9月）を出版した他、図版200枚を掲載した『雲崗石窟』（文求堂、1921年）を刊行している。本書は当研究所の中川文庫の1冊であるが、国内において写真で雲崗石窟



5 『新海竹太郎遺作写真集』

を紹介した最初のものである。ちなみに本書で使用されたと思われるガラス乾板は、その後、山本家より東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターへ寄贈された（詳細は『東洋学研究情報センター叢刊6 東京大学東洋文化研究所所蔵古写真資料目録Ⅰ—明治の営業写真家山本讃七郎写真資料目録そ

の1』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2006年を参照）。

また『新海竹太郎伝』については当研究所と関わるエピソードがあるので、ここで記録しておきたい。帝国美術院は物故会員の伝記編纂に着手していたが、当研究所が「明治大正美術史編纂事業」を行うこととなり、対象となる作家の中には新海竹太郎も含まれていた（同事業については、「美術部」中の「戦前の調査研究」参照）。1927（昭和2）年3月12日に新海が亡くなった折、中川の推薦で脇本楽之軒が「新海竹太郎伝」を書くことになったが完成をみず、事情を知る甥の竹蔵を『新海竹太郎伝』の執筆へと駆り立てた。そのようにして編まれた伝記は作品の写真とあわせて、1937（昭和12）年5月に当研究所に提出された。作品集にあたる『新海竹太郎遺作写真集』（焼付写真133枚、1帙）〔図5〕は1938（昭和13）年2月に登録手続きを行ったが、伝記は戦禍が拡大するなかで公刊する時期を逸した。戦後になっても手書き資料の整理は、遅々として進まず、竹太郎の伝記も手つかずであったが、1974（昭和49）年に中村伝三郎が原本を確認し、新海家の協力のもと『新海竹太郎伝』の刊行が実現した。なお前述の写真集には、戦争で供出された『南部利祥像』（伊東忠太設計の台座のみが盛岡市内岩手公園内に現存している）の石膏雛形や『九代目市川団十郎「暫」像』（現在は再建されて台東区浅草公園にある）などの写真も含まれており、新海の作品集としては唯一のものである。

中川文庫の他に図書の収集については、矢代が外遊中も資料の購入を指示していた。『十三松堂日記』2巻（中央公論美術出版、1965年）の1928（昭和3）年3月23日の記述には「田中喜作 青山新両氏より在羅馬矢代教授よりの来信により至急、国華全部を研究所に購入しておくべきやう申越したりと告ぐ」とあり、その指示に従って既刊分の『国華』445部を2300円で購入した。『国華』は、1937（昭和12）年まで、雑誌の登録用と掲載図版を切り抜くための写真資料用として各号2部ずつ購入した。

なお開所前から矢代幸雄の命により、図書整理の任にあたったのは尾高鮮之助であった。矢代の指示は、将来の美術図書館の発展を念頭に、専門に偏り過ぎず、一般図書館

の整理法も参考にしつつ、研究所独自の図書整理を行うというもので、尾高は帝国図書館や東京帝国大学図書館、東洋文庫などを見学し、現在にいたる整理原則をつくった（「序文」『印度日記』刀江書院、1939年）。分類はまず形態（図書、雑誌、展覧会カタログ）によって分け、雑誌は和・中・韓・欧文別に台帳を作り、それ



6 ウィット・ライブラリーの書架

ぞれ雑誌名別に発行年月日と通号・巻号を記入し、号数順に製本配架、展覧カタログは開催年月日順に配架、図書のみ分類してラベルを貼り配架した。分類方法はNDC（日本十進分類法、1928年発表）の普及以前だったことや矢代の指示もあり、当研究所独自の規則により、アルファベットで始まる記号を用いて分類した。開所前は図書台帳に仮登録をし、その後正式な和漢書台帳、洋書台帳の2冊に書き写した。分類表はその後数回、部分的な改訂を行い、現在も下記に挙げるような「分類表」を使用している。

〔美術関係図書分類表〕

A 叢書、B 美術総記、C 絵画、D 彫刻、E 工芸、F 建築、G 書跡、H 諸芸、I 考古、J 歴史、K 文学、L 宗教、M 自然科学、N 漢籍、P 複製、S 拓本、T 近代日本美術、U 西洋美術

(2) 写真

写真資料の収集は、ロンドンの写真図書館ウィット・ライブラリー〔図6〕、アメリカのフリック図書館をモデルとして設立当初より力を注ぎ、「日本のウィット・ライブラリー」を目指した。

矢代が購入し欧米から持ち帰った西洋美術の紙焼き写真や印刷図版については、戦後に作成された「西洋美術関係図版リスト」により、その全貌を知ることが出来る。収集した写真の中には、アリナリ社（Alinari）やブロージ社（Brogi）ほか数社の美術写真会社による複製写真も含まれ、それ自体の資料的価値も高い。

内容は、矢代の専門であるイタリア・ルネサンス期の作品が多く、約4千枚近くのものがある。戦前に収集されたこれらの資料には、第二次大戦により各地に分散された祭壇画の全貌を知ることが出来るものも含まれている。分類は、古代ギリシアに始まり、時代・項目・作家のアルファベット順になされるが、レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonard da Vinci）とサンドロ・ボッティチェリに関しては、一項目立てられているのが特徴である。さらにボッティチェリは、「古典関係」「宗教画」「聖母画」「その他」の項目に加え、「肖

像画」「素描」「研究資料」「疑問になっているもの」などに細分化された。またフィレンツェ、ローマといったいわゆる中心都市のみならず、地方の画家についても広範囲にわたり収集される一方で、たとえばイタリア・バロック期の画家であるカラヴァッジョ (Michelangelo Merisi da Caravaggio) の作品が少ないのも興味深い。

矢代購入分に加えて、その後も所員により精力的に資料収集がなされたが、その内容は、古代ギリシアからロシア、ハンガリーの現代彫刻に至るまで多岐にわたっている。さらに、絵画・彫刻に加え建築に使用された釘に至るまで撮影された写真や印刷資料は、作品の実見が困難であった時代、貴重な研究資料となった。その網羅性は、美術図書館設立のために「美術に関するあらゆるもの」を収集しようとした熱意の結果であった (『資料編』『矢代幸雄収集西洋美術関係図版目録』635～658頁参照)。

写真資料のもう一つの柱は図書同様、中川忠順旧蔵の写真である。ジャンルは絵画・彫刻・工芸・書蹟等多岐にわたるもので、主だった焼付写真は台紙に貼り、図書同様「中川文庫」と押印した。総数は定かではないが、1928 (昭和3) 年5月の購入時に「写真 一、一〇〇円」とあり、「図書 二、五〇〇円」(5千冊以上) ということに鑑み、写真が廉価に流通する以前のものとはいえ、相当数であったと推測される。同資料の中には、明治から大正期に撮影されたとみられる大型焼付写真 (中川忠順も所属した古社寺保存会が出版に関わった『国宝帖』に使用されたもの) もある。また、1921 (大正10) 年に中川と新海が行った中国旅行の写真も複数存在し、旅行に同行した山本照像館の山本明と岸正勝によって撮影されたものであることが、東洋文化研究所蔵「山本讃七郎写真資料目録その1」や『震旦旧蹟図彙』(山本明写真場、1933年) から確認出来る。また、大同上華嚴寺など中川自身が撮影した可能性のある写真も含まれており、当時の彼等の関心がうかがわれる。これらの中でまとまった数をほこるのは、雲崗石窟を写したものであり、石窟の外観や石窟内部の写真を掲載した『雲崗石窟』(前述) が刊行された。なお同書に使用されたものと未掲載の撮影写真約30枚及び刊行本を出す際の校正図版である20枚が現存している。

写真類の具体的な整理法は、大きさ別に台紙に貼り、裏には作品名、作者名、所蔵者、法量などの情報を書き込み、閲覧室の壁面に設置したアメリカ・クリーヴランドのヴァン・ドーン社 (The Van Dorn Iron Works) 製のスチールキャビネット25台に収納した。キャビネットはB4判サイズ用とそれ以上の大型写真にあわせた2タイプがあり、所員は「バンドーン」と呼んでいた〔図7〕。大型写真は、通常のキャビネットに大型函番号を記入したカードを入れ、利用の便を図った。

キャビネットに配架された写真は、切り抜き図版、撮影あるいは購入・寄贈された焼



7 ヴェンドーン社製のスティール
キャビネット



8 矢代教授の研究室（前列左から矢代・田中喜作・
尾高鮮之助・後列雨宮幸男）

付写真の別を問わず、被写体である美術作品を東洋・西洋に大別して整理された。日本・東洋美術作品は国別に分類した後、ウィット・ライブラリーにおける整理法（作家別）に加え、作家を特定し難い室町以前の古美術品に関しては、まず大分類として形状別（絵画、彫刻、工芸、建築、書蹟、その他〈考古学〉）に区分し、その中で主題別や材質別に小項目をたて、さらに所蔵者ごとに分けた。作家別に分類されたのは主として絵画作品で、特に写真図版数の多い作家に関しては更に山水・花鳥・人物画等に小ファイルをたてた。1作品の配架区分が2ヶ所以上にまたがる場合は、より適当だと思われる方に寄せて配架し、その旨カードで誘導している例も見られる。作品名、作者名いずれもアルファベット順に並べられ、これら日本・東洋美術作品の整理区分は、その後も当研究所における基準となり、カード目録などへと踏襲された。

写真同様収集の対象とした絵葉書は、(1) 矢代が欧米で収集した美術館・博物館の所蔵品や遺跡、建造物を中心としたもの、(2) 満州・朝鮮の美術館・博物館の所蔵品、遺跡、建造物、風俗などを含めたものであり、いずれも絵葉書を収集した地域・国に大別した後、所在地あるいは所蔵美術館別に細分化して整理し、絵葉書専用の木製カードケースに収めた。その他、一部ではあるが、矢代と交流のあった人々との郵便絵葉書も加えられている。

資料の整理は、東京美術学校の矢代の研究室〔図8〕で開始され、黒田記念館竣工後の1928（昭和3）年9月からは、同館1階の資料室にて行われた。整理作業に当たったのは、後に女性美術史家の草分けとなった白畑よしのほかに、雨宮幸男、浅野正俊、今日出海などであった。白畑は、矢代が海外で購入した西洋美術書の図版を切り抜き、コ

ンスターチを煮た糊で1枚ずつ台紙に貼る作業を行った。また田中喜作より引き継いだ『国華』の図版切り抜き作業はほとんど毎日継続され、それが自身を美術史研究へ導いたと述べている（白畑よし「女流美術史家の回想」『芸術新潮』237～242、1969年9月～1970年2月）。今によれば、午前は西洋美術の研究に、午後は写真整理にあてていたという（今日出海「芸術放浪3」『芸術新潮』2～5、1951年5月）。また浅野は毛筆で史料を筆写する仕事をしていた。美術研究所の罫紙に書写された『本朝画図品目』は、「脇本十九郎氏蔵本書写昭和四年七月二十二日校合之畢」とあり、浅野による筆写と推察される。当時はコピー機もなく、未刊の史料類や、購入が難しいものは、東京大学史料編纂所などの所蔵先へおもむき、借り出すなどして書写した。この作業は梅津次郎、高山久子、田澤坦、渡邊一らも行い、戦後は田村悦子、辻惟雄らが引き継いだ。現在は美術史料抄録として98冊が紐で綴じられ配架されている。

2 戦前の資料収集・作成・公開 1930（昭和5）年～1945（昭和20）年

1930（昭和5）年6月28日に帝国美術院附属美術研究所として正式に開所し、「美術研究所事業ノ概要」として以下の文章が掲げられた。

美術研究所ハ美術ニ関スル事項ノ基礎的調査及研究ヲナスコトヲ以テ目的トス。此ノ為ニ行フ事業ノ大要左ノ如シ。

一、研究資料ノ蒐集

（一）美術品ノ写真其他複製類

（二）模写及模造類

（三）図書、雑誌及目録類

研究資料ノ蒐集ハ事業ノ基本タルヲ以テ、絶エズ之ガ拡充ト整理トニ努メ研究調査ノ上ニ遺憾ナカラシメントス。右ノ中、美術品ノ写真其他複製類ノ蒐集ニハ特ニ重キヲ置キ、既ニ製作或ハ出版セラレタルモノヲ購入スル外、当研究所写真掛ニヨリテ原作ヨリ撮影ヲ行ヒ新資料ノ蒐集ニ努ム。参考図書類ニ就テモ亦既刊図書ノ購入ノ外、印刷セラレザルモノハ写本ノ製作ニヨリテ之ヲ集ム。（「沿革」中の「開所期の諸事業」31頁参照）

当初、部署名は資料部の下に整理掛と写真掛の2室だったが、その後文部省の機関となり資料部と写真部の2部体制となり、美術史研究の資料収集の基幹として活動した。設立当初から現在まで当研究所には機構上「図書室」は存在しない。しかしながら、図書のほか写真資料や文献情報なども収集に努めた為、後の資料センター的發展につな

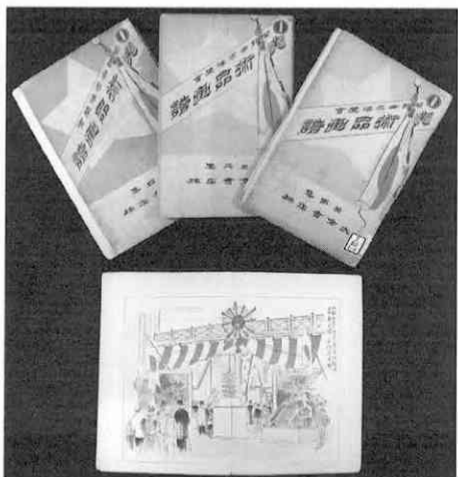
がったのであろう。太平洋戦争中は、所員の出征や資料の酒田・奥多摩などへの疎開といった多難な時期もあったが、幸いにして資料の損失もなく1945（昭和20）年8月に終戦を迎えた。9月からは所員の帰京が、また11月からは資料類の東京への返送の梱包が始まり、翌1946（昭和21）年4月4日に酒田からの引き揚げが完了した。同じく東京都下の小宮村へ疎開したガラス乾板等は、同月16日に輸送が完了し、当研究所で5月20日に復興式を行った（「沿革」61～62頁）。以下、本節では、当研究所開設時から終戦時までの資料部及び写真部の業務を、(1) 図書、(2) 写真、(3) 東洋美術総目録編纂事業に伴う資料作成、(4) 閲覧の4項にわたって記すことにする。

(1) 図書

美術研究所の活動が徐々に認知されるに従い、国内外の大学、博物館、出版社などの諸機関から図書の寄贈が増加した。1931（昭和6）年に当研究所の後援団体として発足した美術懇話会の会員からは日本画家の結城素明、国宝監査官の荻野仲三郎、コレクターであり実業家の松永安左衛門、倉橋藤治郎、団伊能らが蔵書を寄贈した。

また1927（昭和2）年6月に朝日新聞社が主催し東京府美術館で開催された「明治大正名作展覧会」の収益をもとに、1932（昭和7）年から始まった「明治大正美術史編纂事業」（本書「沿革」ならびに「美術部」中の「戦前の近代美術研究」参照）では、朝日新聞社の指定寄付金で、明治以降の美術に関する図書約2千冊及び雑誌を購入した。

図書は「明治大正美術史編纂用」の図書台帳に仮登録し、当初は明治大正美術史編纂室専用として使用した。収集した1873年ウィーン万国博覧会の『澳国博覧会賞状及賞牌頒与表』（元澳国博覧会事務局、1875年）、1893年のコロンブス世界博覧会（於シカゴ）に記者として渡米した久保田米僊が制作した『閣龍世界博覧会美術品画譜』（大倉書店、1893年）〔図9〕などの博覧会関係図書や、第1回から10回までの『太平洋画会カタログ』（画報社ほか、1902～1912年）〔図10〕、『白馬会創立十年記念絵画展覧会出品目録』（白馬会、1905年）などの展覧会出品目録は、その後、美術部の博覧会研究や『明治期美術展覧会出品目録』（1994年6月）、『内国勸業博覧会美術品出品目録』（1996年2月）、『明治期万国博覧会美術品出品目録』（1997年5月）等の刊行へと繋がっていく。そ



9 『閣龍世界博覧会美術品画譜』
（大倉書店、1893年）



10 『太平洋画会カタログ』（画報社ほか、1902～1912年）



11 『黒田清輝先生遺作展覧会目録』（黒田清輝先生遺作展覧会出版委員、1924年）

のほか『黒田清輝先生遺作展覧会目録』（黒田清輝先生遺作展覧会出版委員、1924年）〔図11〕や、小林清親が挿絵を描いた『薰兮東風英軍記』（歌舞伎新報社、1882年）などの稀書も含まれている。

当研究所が所蔵する、明治から大正期にかけて刊行された雑誌は、国内で有数の冊数を誇り利用率も高いが、これらはこの時期にバックナンバーをまとめて購入したものである。文献採録用に『臥遊席珍』（1880年創刊）、『みづゑ』（1905年創刊）、『アトリエ』（1924年創刊）、『美之国』（1925年創刊）など主要な美術雑誌を中心に、『白樺』（1910年創刊）、『史学雑誌』（1892年創刊）、『考古学雑誌』（1910年創刊）、『四明餘霞』（1888年創刊）など他分野の雑誌を含め500種ほどにのぼり、そのうちの2割はほかには所蔵が見つからず、当研究所の蔵書が唯一その存在を証明している。白畑によれば、神保町古書店に行き棚板ごとを買ったという。博覧会資料にしても雑誌にしても、その後このようにまとまった入手は不可能であつたろう。

また図書購入費の不足は、各種財団が運営する助成金により補った。啓明会（実業家赤星鉄馬が父弥之助の収集した美術品を売却し、そのうちの100万円を奨学資金として国に寄付し、文部省管下の最初の財団法人として設立された。顧問に牧野伸顕、関係者には樺山愛輔等がいた）の資金では『日本随筆大成』（吉川弘文館）などの新刊本を購入した他、末延財団（東大法学部教授末延三次が父の遺産を元に設立し、学術研究費として帝国学士院や、研究者、学生に給費した財団）の助成金は、蔵書家として有名だった林若樹の蔵書「若樹文庫」が没後売り立てられた際、『油絵開業規則 高橋由一自筆 明治四年辛未三月』（図12）と『図絵宗彙』（版本、享保20年）を入手したのをはじめ、『鈍画早稽古』（享和2年）などの古書の購入に用いられた。雨潤会（陸奥宗光の長男廣吉が、弟の古河潤吉を記念する目的で、1917年2月に設立した基金。協議員には黒田清輝の名もある）の助成金では、1940（昭和15）年から1941（昭和16）年にわたり、『親鸞聖人絵詞伝』（版本、1801年）

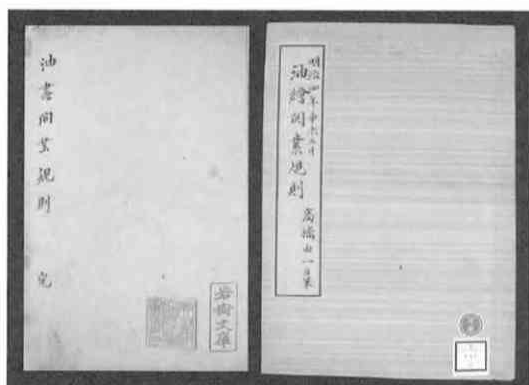
など絵巻関係の資料を購入した。

また正木直彦の蔵書であった「十三松堂文庫」は、正木が帝国美術院長を退官した1935（昭和10）年の12月20日に当研究所に運び込まれ、逝去後の1940（昭和15）年11月6日に寄託本として「十三松堂文庫」の図書台帳に登録された。正木の蔵書は生前の寄贈も含め1020種1300冊余りを数えるが、その中には『日本見在支那名画目録』（全14冊内2冊欠）〔図13〕、『続日本見在支那名画目録』（全7冊）、『続日本見在支那法書目録』（全3冊、172件）、『読画雑記』（全3冊）などの稀覯本も含まれている。3種の目録は「日本見在支那法書名画目録

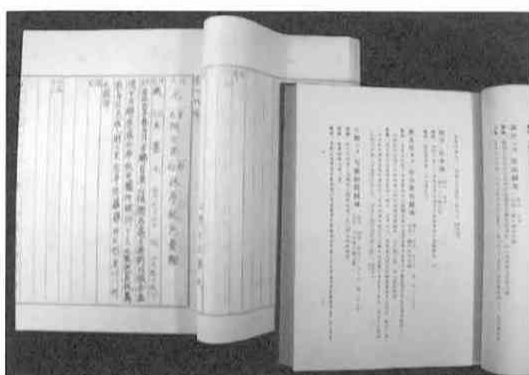
国華倶楽部」あるいは「日本見在支那法書名画目録索引 国華倶楽部」という

柱題のある原稿用紙にそれぞれ連番をふり、作品の時代、筆者、命題、材質、様式、法量、落款、題跋、収蔵印記、著録、伝来、筆者伝記、備考、所在の14項目について記載している。雑記は「読画雑記 向日軒」という柱題のある用箋に、所蔵家宅や展覧会で見た作品を書き留めたものであり、1928（昭和3）年10月7日に神戸市の川崎男爵邸を訪れた際の記録から始まっている。その目的は、11日に大阪美術倶楽部で行われる入札に向けた下見であった。

これらの稀書は、正木が会長を務めた美術工芸の親睦団体「国華倶楽部」（1907年設立）が、1928（昭和3）年から4年間、外務省の対支文化事業費の助成を受けて行った「支那古書画現在目録作成事業」の記録である。報告書の作成は、東京美術学校本科漆工科出身の南画家で中国美術研究者の原田尾山が行った。国立公文書館の史料によれば、原田は5400円の助成金で、4年間にわたって調査した1300件の作品についての報告を、目録全13冊、索引1冊、読画雑記3巻にまとめ、1930（昭和5）年末に外務省へ提出している。当研究所の『日本見在支那名画目録』と『読画雑記』の冊数と合致することから、この2種については、原田が外務省へ提出した報告書の副本を国華倶楽部へも提出し、それが「十三松堂文庫」に納められたと考えられる。『日本見在支那名画目録』は



12 『油絵開業規則 高橋由一自筆 明治四年辛未三月』



13 『日本見在支那名画目録』

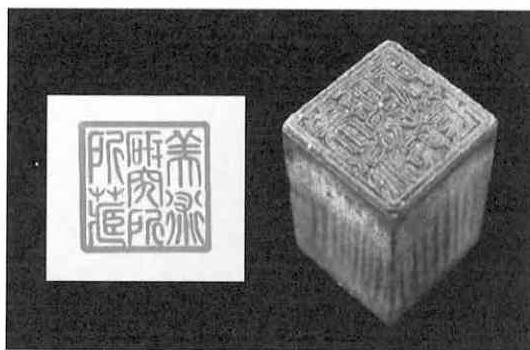
その後『続日本見在支那名画目録』の541件を合わせ、『日本現在支那名画目録』（大塚巧芸社、1938年7月）として公刊されたが、2種の報告書にはない作品の掲載や、2種の目録にあるが公刊本では未掲載などと、内容にはかなり異同がある。

この公刊本は新たに外務省の助成を受け、中国大陆の関係機関へ100部寄贈されている。同書は『中国絵画総合図録』（東京大学東洋文化研究所、1982～2001年）の先例とも言える。また原田は、「支那画論ノ研究事業」でも、1932（昭和7）年より5年にわたって、外務省から1万2260円の助成を受け、その成果を『支那画学書解題』（大塚巧芸社、1938年8月）、『支那画学総論1』（大塚巧芸社、1938年8月）として公刊した。この2冊は、原田家より当研究所へ寄贈された。なお『日本見在支那法書目録』の所在と、その公刊については不明である。

また矢代は、洋書を主として683種約800冊を寄贈しているが、その中には1925（大正14）年にロンドンのメデイチ・ソサエティから刊行した『サンドロ・ボッティチェリ』3巻本も含まれていた。この著書は、関東大震災で父を失い、家も焼けた矢代に、英国に留まりボッティチェリ研究を完成させるよう、英国の友人達が様々な援助をさしおべて実現したものであった。この本にまつわる話は、『私の美術遍歴』（岩波書店、1972年）に詳しい。寄贈図書の中には、“Venetian Painting in America”（New York, 1916）や“*Il Gusto dei Primitivi*”（Bologna, 1927）など、見返しに著者のバーナード・ベレンソン（Bernard Berenson）やリオネッロ・ヴェントゥーリ（Lionello Venturi）の献辞が書かれているものもある。またラングドン・ウォーナー（Langdon Warner）からは、著作の“*Buddhist Wall-Paintings*”（Cambridge, 1938）や蔵書の『観古図説 陶器之部』（蜷川式胤、1876～1877年）が矢代に贈られており、矢代文庫の書籍に書かれた献辞によって、矢代の広い交友関係を知ることが出来る。矢代は『日本美術の恩人たち』（文芸春秋新社、1961年）の中で、それらの交流の一端を記している。

当研究所創設期に矢代から直接指導を受け、将来を期待されながらも、1933（昭和8）年3月23日急性肺炎により急逝した尾高鮮之助の蔵書は、1937（昭和12）年7月に遺族より「尾高文庫」として寄贈された（中野照男「序—尾高鮮之助について—」『東京文化財研究所蔵書目録 4』2004年、12～13頁）。尾高が本の収集に熱心であったことは残された手紙からも明らかだが、寄贈された158種500冊余りの書籍のジャンルは、自身に関心を持っていた浮世絵関係から、業務で担当した中国とインドの絵画彫刻に関するものまで幅広いものであった。そのほか寄託台帳には、田中喜作（主に洋書を約60冊）、兄の田中豊蔵（洋書を50冊弱）らの名前も記載されており、蔵書構成が不十分な分野を補充すべく各自が寄託本として提供したことがわかる。

なお受け入れ作業は、登録台帳（和書、洋書の2種）に記入し、カードを作成した。カードは手書きの和書（書名、分類の2種）・漢籍（同2種）、タイプライター使用の洋書（書名、分類、著者名の3種）に区別した。図書には朱色の蔵書印〔図14〕を押し、ラベルを貼ったが、一般図書館と異なり、背表紙の文字を活かすた



14 美術研究所「蔵書印」

めか、ラベルの位置は様々である。そのため書架に並べると雑然とした印象だが、所員が本を検索するには有効であった。

一方雑誌は、ゴムの蔵書印を押し、縦軸に年、横軸に月を格子状に印刷した雑誌台帳（和、洋、中韓の3種）に号数を書き込んだ。和雑誌も含め、誌名の読みを Bijutsu Kenkyu のように欧文表記し ABC 順で配架したのは、矢代の指示であろう。雑誌台帳の型式は、文献目録を編纂する上でも、重要だったと思われる。

分類した図書・雑誌は、閲覧室の開架棚に配架する辞書類などの参考図書をのぞき、1935（昭和10）年1月に竣工した資料室に隣接する2階建ての書庫に収納した。

そのほか矢代が集めた各国の「美術館・博物館整備」と題された資料、展覧会の出品目録、小冊子、国内の絵葉書、地図、抜刷などは、ウィット・ライブラリーに倣い、2サイズの木製ファイルボックスの背にジャンルを書き、それぞれを箱に収め、書棚に並べた。

（2）写真

竣工時にはレフレックス写真器械、引伸用レンズ、引伸器械、焼付器械などを備えた撮影室及び現像室が黒田記念館の地下に完備された。設立当初の図面では「写場」が描かれているが、実際は、1938（昭和13）年2月に、本館脇に木造平屋建て延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

所員も増加し本格的な調査研究が始まるとともに、作品の撮影も増えていった。社寺、展覧会場、所蔵家宅などでの撮影の一方、所内の写場における撮影も頻繁に行われた。当時の状況は戦前の撮影記録に詳しい（『資料編』『戦前期撮影調査票一覧』283～461頁参照）。ここでは、同時期に行われた調査研究によって作成、もしくは収集された写真資料について、①光学的調査、②海外調査写真、③美術懇話会の活動と調査写真、④その他の写真資料の4項にわたって記しておくことにする。

①光学的調査

矢代は早くから、美術の研究材料として写真を位置づけ、国レベルで撮影、保管をしているドイツのシュタートトリッヘ・ビルドシュテーレ (Staatliche Bildstelle) やフランスのアルシーヴ・フォトグラフィーク (Archives Photographiques) などの施設を目標とされていた。またX線、紫外線、赤外線など光学的手法による撮影も提唱した。そのような状況の中、1930 (昭和5) 年にカメラマンとして中根勝が入所する。

美術研究所開設前後に矢代が渡欧した際の欧米では、既に美術品の鑑識に科学的方法が用いられ始めていた。1929年10月には、フランスのルーヴル美術館内にフェルナン・ペレス (Fernando Perez、アルゼンチン在ローマ大使。斜光線を用いる Pinacope を発明)、カルロス・マイニーニ (Carlos Mainini、ブエノスアイレス大学教授) の寄付によりマイニーニ研究所 (Institute Carlos Mainini、後のルーヴル美術館・フランス美術館修復研究センター) が設立され、絵画の物理学並びに光学的方法による調査研究が開始されている (『古文化財之科学』2、1951年10月)。また、1930年10月13日から17日には博物館国際事務局により美術品科学的研究の専門家国際会議がローマで開催され、科学的方法 (顕微鏡写真、X線、紫外線、色彩の化学的分析等) による美術品の鑑別の実演及び討論に関する諸問題が討議された (『博物館研究』3-10~11、1930年10~11月)。

国内における光学的方法を用いた撮影の早期の例には、1935 (昭和10) 年に便利堂が行った法隆寺金堂壁画の赤外線及び4色の原色分解写真撮影があるが、当研究所ではそれに先んじて、1932 (昭和7) 年から中根勝が実験的に撮影を行っていた。赤外線撮影は、絵画作品 (東京美術学校「如意輪観音像」、同「十王図厨子扉絵」など)、彫刻作品 (弘明寺「十一面観音像」、長尾欽弥「薬師如来像」など) 双方に用いられ、いずれも目視不可能な眉や眼や鬚の墨線の撮影に成功した。使用された素材を浮きだたせる蛍光撮影は、工芸作品 (守屋孝蔵「彩絵人物図鏡」、下村仙「三彩婦女像」、東京美術学校「擬宝珠」など) を中心に、立体物の内部構造を明らかに出来るX線は彫刻作品 (東京美術学校「木彫観音像」、守屋孝蔵「塑造婦人像」〈伝法隆寺五重塔塑造〉など)、顕微鏡撮影は絹本作品の布地例を複数収集して並列比較するといったように、撮影は光学的手法が効果的な対象に絞られた。

当研究所以外でも光学的調査は進められ、1935 (昭和10) 年12月には奈良帝室博物館において一乗寺「天台高僧像」の赤外線撮影が試みられている。なお紫外線撮影に関して、中根は「古美術品鑑識の光学的研究に就いて」 (『美術研究』72、1937年12月) の中で、研究所に設備がなく実験を行うことが出来ないため、古美術作品の調査研究には有効ではないかと示唆するにとどめている。中根は、1935 (昭和10) 年まで東京美術学

校でも囑託を努めていた（『東京芸術大学百年史 東京美術学校編3』698頁）。

その後、光学的研究は太平洋戦争によって中断し、戦後、秋山光和らによる新たな光学的研究の着手まで空白となった（『美術部資料室の資料収集・作成・公開』中の「(2) 写真」のうち253～254頁参照）。

②海外調査写真

海外調査では、青山（和田）新、尾高鮮之助、矢代幸雄らによるアジアを中心とした撮影が行われた。啓明会の助成を受けた青山新は、西アジア美術の研究を目的として、1929（昭和4）年8月から翌年5月にかけてイランを中心にヨーロッパ諸国、ソ連、イラク、シリア、レバノン、パレスタイン（パレスチナ）、エジプト、トルコなどを歴訪し、手持ちのカメラ Zeiss Ikon（Tessar F4.5）により、フィルム（AGFA 社製）約1600枚（大判手札型約1千枚、名刺板600枚）を撮影、研究対象である建築や遺跡のみならず市街地や人々の様子なども写した。当初はシベリア鉄道を利用する予定であったが対露情勢の悪化から海路をとることとなり、8月1日神戸より伏見丸にて出発した（『東京芸術大学百年史 東京美術学校編3』415～416頁、428～429頁）。帰国後、青山は助成金を得た啓明会のもとで講演会を行っている（講演内容については、『啓明会講演集39 ペルシアを中心とした西方アジアの美術』啓明会事務所、1931年5月を参照されたい）。また、撮影フィルムは帰国後現像され、特に力を注いだイランの遺跡を主眼として、『イーラーン芸術遺蹟』（美術書院、1945年2月）にまとめられた。本調査についての出張命令は東京美術学校から出たものであったが、青山が主として当研究所で研究を続けたこと、また青山が後進の研究のために役立ててほしいと望んだことから、後年当研究所に一括して調査フィルムが寄贈された。

青山新の西アジア歴訪に刺激を受けた尾高鮮之助は、1931（昭和6）年10月16日から1932（昭和7）年10月14日にかけて、当時仏領であったインドシナをはじめとする東南アジア、インド、セイロン島、パキスタン、アフガニスタン、エジプト、ヨーロッパなどへの調査旅行を行い、日記5冊、調査ノート1冊、フィルム約2千枚弱、16ミリフィルム数千フィートを残している。カメラは青山同様 Zeiss Ikon（Tessar F4.5）の熱帯用大判手札写真機、16ミリフィルム撮影機は Cine-Kodak、Model K（F3.5）を利用して、フィルムはイーストマン社（Eastman）製をはじめ、無くなれば現地で調達しつつ調査旅行を行った。『故 尾高鮮之助君の手紙』に収録された1932（昭和7）年1月8日付の富永惣一に宛てた手紙によれば、文部省の命を受けた無償の在外研究員としての出張であったと思われる。撮影されたフィルムは旅先で現像され、簡単な報告と

共に数度にわたり当研究所宛に送付された。この調査旅行の成果は1932（昭和7）年11月18日、1933（昭和8）年1月28日の2回の美術懇話会で講話として披露された（『資料編』『美術懇話会主催展覧及び講話等』663頁）。尾高は帰国の翌年急逝したため、自身による研究は途絶したが、遺族より刊行された尾高邦雄編『亡き鮮之助を偲ぶ』（1935年10月、私家版）には、尾高の日記、書簡等が収められ、写真資料は尾高の遺志をついだ青山らにより美術研究所編『美術研究資料第7輯、印度及南部アジア美術資料』（美術研究所、1939年3月）として、調査日記は遺族により『印度日記』（尾高鮮之助、刀江書院、1939年7月）として上梓された。

日本人美術史研究者で初めてバーミヤン石窟を訪れた尾高と青山両名が撮影した写真は、1930年代当時の西アジア・南部アジアにおける遺跡などの状況を知る上で貴重な資料として近年注目されることとなり、文化遺産国際協力センターと企画情報部（情報資料部の後身）が共同でデジタル化とデータベース化を進めている。また尾高鮮之助の調査活動については、2004（平成16）年11月に開催した第38回美術部オープンレクチャー「日本における外来美術の受容」において、中野照男が「若き美術史研究者の夢 尾高鮮之助の旅と仕事」と題した発表を行い、彼がどのような研究の構想をいだいたかを検証、再評価した。

中国・朝鮮半島における調査・撮影は、矢代幸雄を中心に主に1945（昭和20）年以前に行われた。当研究所独自の予算ではなく、東洋美術国際研究会の活動の一環として、外務省より助成を受けて行った調査もある。調査は、遺跡や建築物等と現代支那工芸の2種に大別され、後者については朝鮮総督府博物館や旅順関東庁博物館、あるいは個人コレクターなどの所蔵品を中心に撮影している。これら中国・朝鮮半島における調査は開所当時から行われたが、1938（昭和13）年頃より特に重点がおかれた。『昭和13年度美術研究所年報』の概況には「五、支那美術ノ調査及指導」の項目がみられ、また1939（昭和14）年7月に、矢代は輸出工芸振興委員会委員に任命されている（外務省外交資料館公文書『東方文化事業部関係人事雑件第六巻』による）。

中国・朝鮮半島における主な調査旅行は以下の通りである。

1940（昭和15）年9月12日から11月14日、当研究所長矢代幸雄・正木篤三・豊岡益人らによる、東洋美術国際研究会名義で助成金を受けた「支那美術及美術工芸調査研究事業」調査（同調査については、「関連団体」中の「東洋美術国際研究会」のうち468～474頁を参照）。

1941（昭和16）年9月26日から11月11日、矢代幸雄・豊岡益人・小高根太郎が中

国満州各地において調査撮影を行った（『美術研究所年報 昭和 15、16 年度』、『東洋美術国際研究会日記』、『東京芸術大学百年史 東京美術学校編 3』842 頁）。

特に 1940（昭和 15）年の調査では、1）美術上の文化施設の観察、2）古美術保存の状況観察、3）地方美術工芸の観察（土産美術工芸）、4）現地側・支那側要人との意見交換、を 4 本柱とした。訪問地は旅順博物館や故宮博物院をはじめとする中国満州各地の博物館のほか、北京大学や燕京大学などの各大学、満鉄図書館、済南の金石保存所、天津の染織工場、熱河遺跡、大同雲崗石窟、蘇州や南京などの各文化施設と幅広い。資料収集費のほか写真材料費として 1 千円を計上し、手札板フィルム 50 ダース、ブローニ形フィルム及びライカ用 35 ミリ各 100 本の他に、接写用レンズ及レンズフード、現像用薬品、印画紙などを購入した。本調査の成果は、1940（昭和 15）年 12 月 21 日、日本工業倶楽部で開催された美術懇話会において展示され（[支那工芸標本陳列]）、矢代幸雄「対支文化政策と美術」、正木篤三「現代支那工芸」の講演とともに紹介された。また収集された各遺跡や建築物、工芸品の写真類は、同研究会から当研究所へ寄贈され、写真資料の一部に加えられた。雲崗石窟の写真は 180 枚前後撮影された。水野清一を中心に 1938（昭和 13）年から 1945（昭和 20）年にかけて行われた考古学調査のような本格的なものではなかったが、膝下を土に埋めたままの露座大仏など、当時の状況が見てとれる。

③美術懇話会の活動と調査撮影

戦前の写真資料収集の一役を担ったのが美術懇話会の存在である。これは美術愛好者の友好団体として創設された組織であるが、主催関係者や運営方針など当研究所の調査研究と深く関わりがあった。特に美術懇話会主催の展覧がほぼ毎月のように当研究所で行われた関係から、同展覧に伴った撮影調査を行うことが多く、新たな資料紹介や研究成果へと直結することも少なくなかった（同会については、『資料編』「美術懇話会主催展覧及び講話等」「美術懇話会会員名簿」663～698 頁、本書「関連資料」中の「関連団体」の項参照）。1932（昭和 7）年 6 月 25 日に行われた「西洋近代絵画展覧会」の出品作品は、『美術研究』9 号（1932 年 9 月）において特集号を組んで紹介している。また 1935（昭和 10）年 3 月 23 日の「武藤金太所蔵光琳関係資料展覧」の場合は、まず事前の 2 月 3 日に、正木直彦と田中喜作が当時の所蔵者斎藤利助宅へ「武藤氏旧蔵光琳資料」を確認しに行き（『十三松堂日記』3 巻、中央公論美術出版、1966 年）、展覧後の 25 日に田中喜作が資料の調査撮影を行い、1936（昭和 11）年 8 月から 12 月にかけて『美術研究』56 号から 60 号（1936 年 8～12 月）において資料の紹介を行った（「[研究資料] 小西家旧蔵光琳関係資料」）。また、尾高鮮之助の海外調査のように、所員による調査研究が美術懇話会の展

観において発表されるケースもあった。大規模な展覧調査は、「長崎系洋風画展覧」、「職人尽絵展覧」、「桜間青厓作品展覧」、「香取秀真氏所蔵懸仏」等その分野も様々であり、得られた写真は分類され閲覧に供せられた。

④その他の写真資料

海外への調査旅行をのぞき、国内各所における写真撮影には半切から手札判まで各サイズのガラス乾板が用いられた。ガラス乾板の原板はサイズ毎に番号を付して登録し、2、3枚の紙焼き写真を作成した。それらのうち1枚はキャビネ判から四ツ切程度に焼き、閲覧用キャビネットに配架するための写真に、もう1枚はキャビネ判大に揃えて焼いたものをB4判台紙に貼り付け、焼付写真目録台帳を作成した。また同台帳の他に、撮影目録も作成し、番号順に原板検索が出来るように整備した。閲覧用キャビネット写真の裏面に記述された項目は、調査の際に作成された「撮影調査票」を元としている。

絵巻など通巻撮影をした写真類は、キャビネットにおける分類とは別に、それぞれ資料毎に帙をつくり、図書資料的扱いをした。「等伯画説」(『美術研究』1、1932年1月)や「男衾三郎絵詞」(『美術研究』38、1935年2月)は、当研究所で撮影したものである。また28日に「文晁筆公余探勝その他山水写生図類展覧」(美術懇話会)に出品した「谷文晁筆公余探勝図」(『美術研究』47、1935年11月)などは、今日では翻刻や画集などで容易に目にすることが出来るが、当時、画卷を一覧出来る写真資料はこれら以外にはなかったものである。

中国・朝鮮半島調査の際に収集された絵葉書や遺跡案内等のパンフレットも、当時の状況を知ることの出来る貴重な資料であり、これらについては、2001(平成13)年2月から3月に「満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議」を開催し、内田好昭(京都市埋蔵文化財研究所)・広瀬繁明(真陽社)・中谷礼仁(大阪市立大学講師)・青井哲人・西澤泰彦(名古屋大学助教授)らを招いて協議を行った。

(3) 東洋美術総目録編纂事業に伴う資料作成

開所時の1930(昭和5)年より開始された東洋美術総目録編纂事業(137～139頁参照)では、1936(昭和11)年の段階で、売立目録1800種4千部に掲載された4万6千枚の図版の切り抜き、作品写真及び印章写真6500枚、約600種の図録掲載図版分類カード、国宝所在別、題目別分類カード、画家索引カード8千枚を作成していた(「東洋美術総目録関係書類」による)。ここでは、この事業に関連した資料の作成過程を、①作品カード、②抄録、③『東洋美術文献目録』、④年表、⑤落款及印章、⑥関連写真資料収集調査の6項にわたり振り返ってみたい。

①作品カード

作品カードは、『真美大観』などの大型図録、『文晁遺墨展図録』など展覧会の豪華図録、『野山霊宝集』など寺社の蔵品図録、『浮世絵派画集』などの流派の図録、『元信画集』などの作家の図録などから、掲載図版を一作品ずつカード化し、ジャンルや作家名、作品名で分類したものである。同じように530種余りの画集の図版一覧を罫紙に書き写し、1冊ごとに綴じた総目次も作成した。これらを繰ることによって、一つの作品が刊行物に紹介された初出をある程度推測することが出来、現在でも利用価値は高い。また切り抜き図版は、購入・撮影した写真の他『国華』や売立目録などの図版を切り抜き、所在、あるいは題目別に分類した。

矢代の話では、売立目録の収集は当時パリ大学に移管された、オークションカタログの収集を行っていたドゥーセ文庫をモデルとした。現在、ジャック・ドゥーセ美術考古学図書館(Bibliothèque d'art et d'archéologie Jacques Doucet)は図書館の再編で国立美術史研究所(Institut national d'histoire de l'art)の中に移管されている。ジャック・ドゥーセ(Jacques Doucet)は老舗オートクチュリエの経営者で、美術品や書籍のコレクターでもあり、日本の美術品も所蔵していた。彼の死後に売立が行われ、その折りのオークションカタログ“Collection Jacques Doucet”(Galerie Georges, Paris, 1930)は、当研究所の蔵書にある。

明治から昭和にかけて日本各地の美術倶楽部で開催されたオークションのカタログ(売立目録)は、現在、主な国内機関86ヶ所に約4300種が所蔵されているが、当研究所はその5割の2231種を所蔵している。そのうちの約半数は2部あるいは3部を入手し、その中から2部を解体し図版カード(口絵掲載)に貼り、残りの1部を登録用とした。そのほとんどは購入によったが、啓明会をはじめ、正木直彦や、尾高鮮之助など所員や関係者からの寄贈も少なくない。売立目録の解体作業は戦後の1960年代まで続き、3部を購入した258種のうち191種はカード化が完了している。この作業は、B6サイズほどのカードに解体した図版を1作ずつ貼って売立会名を捺印し、裏に作品情報を書き込み、作家別あるいはジャンル別に配架している。カードにところどころ“A”“B”“C”などの書き込みが見られるが、これは作品のレベルを判断したもので、渡邊一を中心に集まった研究員が議論した結果を書き込んだもので、“A”は真作、“B”は工房作を意味した(白畑よし「女流美術史家の回想」による)。なお目録の切り抜きカードは、東洋美術総目録編纂事業の柱の一つであったが、現在も内外を問わず展覧会開催準備の参考に、また作品の来歴を調べる資料として頻繁に利用されている。

②抄録

史料収録は、『看聞御記』、『古画備考』などの日記や記録類、『本朝画史』などの画史画論、『近世畸人伝』といった伝記などから作家あるいは作品に関する記述を用紙に抜粋し、画家史料、あるいは絵巻資料としてファイルキャビネットに収めている。

③『東洋美術文献目録』（同目録については、「美術部」中の「戦前の調査研究」参照）。

④年表

年表は作家ごとに所定の用紙に年代、事項を書き込み、作家についての論考執筆の材料とした。そのためか、最終的に綴じられた作家別のファイルには、年表は省かれている。

⑤落款及印章

落款及印章は『芸苑叢書』の印譜や、『華山印譜』など作家個人の印譜帖や、作品を撮影して、作家別に分類した。

⑥関連写真資料収集調査

「東洋美術総目録」編纂事業に付随した調査にともなって撮影された写真資料も多数存在する。第一は1934（昭和9）年度から1935（昭和10）年度にかけ、末延財団の補助金を受けてなされた「襖絵調査」である。菅沼貞三、田中喜作、カメラマンの中根勝の3人が中心となり、大安寺を皮切りに前後11回にわたって各寺院で調査を行い、写真の撮影・購入をはかった。その成果は1936（昭和11）年から1937（昭和12）年の繰越金に出版補助費を補充し、『美術研究資料第5輯 桃山時代金碧障壁画』（1937年）として刊行された。本調査で撮影した原板は、キャビネ判約900点の他、襖絵を個別に撮影し実際の配置順に組み直した版下用の半切124点などであり、ガラス乾板資料の中核の一端をなしている。焼付写真は寺院毎にまとめられた。

また同じく末延財団の援助により、名古屋市公園課の協力を得て名古屋城本丸御殿障壁画の撮影が行われた。1938（昭和13）年6月21日から30日、8月16日から17日の2回にわたる撮影では、菅沼貞三、田中喜作、浦崎久一が調査を行い、中根勝が富士パシクロ中板を使用して撮影を行った。また名古屋市の近藤銀治郎及び服部忠治郎が撮影補助として雇われた（『昭和14年4月起末延財団会計書類』）。1945（昭和20）年5月の空襲で焼失する以前の本丸御殿が撮影されており、当時の姿をとどめる貴重な写真資料である。戦前に名古屋城を大々的に調査撮影した例としては、(1)1930（昭和5）年に宮内庁から名古屋市へ下賜される際、帝室博物館が行った調査撮影（『名古屋離宮障壁画大観』聚楽社、1930年）、(2)1941（昭和16）年に名古屋市役所が記録として建築学的調査も含め行った撮影（『国宝史蹟名古屋城』名古屋市、1942年）の二つが知られている。当研究所に現存するガラス乾板は四ツ切判85枚、キャビネ判440枚にのぼり、(1)(2)の撮影と構図等が重なるものも多いが、「対面所納戸次之間」のような焼失した障壁画

の写真もあり、また美術史的観点から、より鮮明に障壁画の図様をとらえようとした努力がうかがえる。従来、場所から外されている杉戸絵や廊下に見学コース用の低い柵があるなど、一般に公開されていた様子も見てとれ、(1)(2)の調査の間を埋める資料として高い価値があるものと言える。この撮影は「東洋美術総目録」の障壁画部門の調査に随従するものと考えられるが、戦争によって調査が困難となり、成果の公表には至らなかった調査研究の一つである。

絵巻物研究は、1939(昭和14)年4月1日より、図書の購入と同様に雨潤会の援助を仰ぎ、「絵巻物総覧」の編纂として開始した。担当責任者は渡邊一の薫陶をうけた梅津次郎だった。絵巻物の撮影には、中根と梅津がガラス乾板を携え所蔵先をまわり、詞書の書写を伊藤のぶ子、小野貞子、白畑よし、中根得江、森敏子らが行い、渡邊、梅津の両名が校閲した。その他、史料類から関係事項の抽出、売立目録から絵巻物図版カードや文献目録なども作成した。出版の準備が整い、1945(昭和20)年2月12日に座右宝へ「絵巻物総覧」第1巻の原稿を引き渡したが、3月10日の東京大空襲により原稿は灰燼に帰した(梅津『絵巻物総覧関係日記』による)。日記によれば、同月19日には京都の所蔵家宅で「伊勢物語絵巻」の縮図調査に入っており、調査は続行された。また戦後も宮次男らによって史料の抜き書きが続けられた。現在も当研究所には「梅津資料」と名付けられた絵巻資料群がある。

(4) 閲覧

開所時には「美術研究所研究資料閲覧規程」、「美術研究所特別資料閲覧規程」を定め、資料室〔図15〕にて月、火、水、金の週4回、閲覧を開始した。利用者には閲覧票を発行した。記念館の廊下や資料室の壁には複製画が架けられ、矢代が欧米で見聞した美術館や図書館のイメージを彷彿とさせる趣のある室内であった。

閲覧業務は主に白畑が担当した。当時の閲覧名簿が残っていないため詳細は不明だが、当時の所員の話によれば、松方正義の孫でライシャワー駐日アメリカ大使夫人となった松方ハルが戦争のため留学先のアメリカから帰国し、親米派と目され監視が厳しい中、美術史の勉強に通っていたという。

また『私の美術遍歴』の中で矢代は、



15 資料室(黒田記念館1階)

開所間もない頃の写真資料の利用について、「五年秋から公開された時には、(中略)、比較にならないが、それでもその調法さは誰の眼にもよくわかり、学者の利用率は急上昇した。かくのごとき多数の写真は常によく整理しておかなくてはすぐ乱雑になり、職員の尠い小研究所としては、自由公開ということは事実上制限せざるをえなくなった。それでも(中略)、たとえばこの研究所の設備を常に利用して仕事をしている研究所職員の論文は、その出来不出来は別として、この設備を利用しないで仕事をしている他所の学者の論文とは、使った材料の程度が断然違っていることが、じきに誰にでも明瞭になってきた。これは私としては予期した通りで、本懐至極であった。(中略) ウィット卿の家庭内設備の時代から、その価値を最も大きく認識した当時の私が、初めは自分自身のボティチェリ研究のために利用させてもらい、また後にはこれをお手本として東洋美術研究の基礎的施設として東京に美術研究所をつくったことは、私としても、大いに愉快に感ずるところである」(246～247頁)と書いて、自らの美術図書館構想に自信を見せている。が、それから10年も経たない1937(昭和12)年には、「次に今申上げた美術研究所であります、これは美術学校文庫の図書本位なるに対して写真の蒐集本位として互に補ひ合つて居り、研究所としては、日本に缺けて居る美術図書館的発達をしたいと思つてをるのであります、何分建物が閲覧に適せず、また研究所の職責が調査研究に在って閲覧は第一目的ではないのでありますから容易に手の廻りかねるのを残念に思ふて居ります」(『図書館雑誌』209、1937年4月、103頁)と語っており、思い描いた美術図書館の理想と現実の違いにとまどう様子が感じられる。

その5年後、矢代は研究所を去り、矢代時代は終わりをむかえた。当研究所開設時の「資料閲覧規程」を下記に資料として挙げておく。

美術研究所研究資料閲覧規程(昭和五年十月制定)

- 第一条 美術研究所所蔵ノ図書、写真、模本、複製等ノ研究資料ハ美術研究所ノ事務ニ差支ナキ限り其ノ閲覧ヲ許可ス但シ所外貸出ハ之ヲ為サス
- 第二条 閲覧ハ美術ニ関スル専門的研究者ニ限り之ヲ許可ス
閲覧希望者ニ対シテハ責任アル紹介者ヲ要求スルコトアルヘシ
- 第三条 閲覧ヲ許可セラレタル者ニハ研究事項ニヨリ一定期間有効ノ閲覧票ヲ交付ス
- 第四条 閲覧ハ無料トス
- 第五条 閲覧人員ハ一時ニ「十名」以内トス
- 第六条 閲覧者ハ所定ノ用紙ニ必要ナル事項ヲ記入シ閲覧票ヲ添ヘテ掛員ニ提出スヘシ
- 第七条 閲覧済ノ研究資料ハ掛員之ヲ査収シ引換ニ閲覧票ヲ返付ス

第八条 閲覧者ハ指定以外ノ場所ニ於テ研究資料ヲ閲覧スルコトヲ得ス

第九条 一人一時ニ閲覧シ得ル研究資料ハ左ノ如シ

写真、複製類	一種
図書	一部

但シ特別ニ許可ヲ得タル場合ハ此ノ限ニアラス

第十条 閲覧者ハ特ニ閲覧資料ノ取扱ニ注意スヘシ之ヲ毀損汚染又ハ紛失シタルトキハ閲覧者又ハ紹介者ヲシテ相当ノ賠償ヲ為サシムルコトアルヘシ

第十一条 閲覧者本規程ニ違反シ又ハ不都合ノ行為アリタルトキハ閲覧許可ヲ取消シ閲覧票ヲ回収ス

第十二条 左記ノ日ハ閲覧室ヲ閉鎖ス

日曜日 木曜日 祝祭日 年末年始（十二月二十五日より一月五日マテ）

臨時ニ閲覧室ヲ閉鎖スル場合ハ予メ之ヲ揭示ス

第十三条 閲覧時間ハ別ニ之ヲ定ム

美術研究所特別資料閲覧規程（昭和五年十月制定）

第一条 美術研究所所蔵ノ研究資料中特別資料ハ本規程ニ拠リテ閲覧ヲ許可ス

特別資料ハ其ノ目録ニ「特別」ノ記号ヲ附ス

第二条 特別資料ノ閲覧ハ一時ニ一種限トス

第三条 特別資料ハ閲覧室中特ニ指定セル場所ニ於テ閲覧スルモノトス

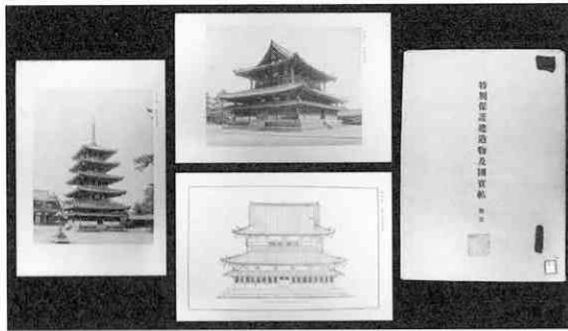
第四条 以上ノ外総テ研究資料閲覧規程ニ拠ル

3 美術部資料室の資料収集・作成・公開

1946（昭和21）年～1976（昭和51）年

所員の復員や新採用により職員も増える中、1947（昭和22）年5月に国立博物館官制が制定され、組織は国立博物館の附属となった。業務は従来通り黒田記念館で行われた。

1951（昭和26）年1月31日、東京国立博物館から文化財保護委員会の附属へとかわり、1952（昭和27）年4月1日東京文化財研究所として独立し、美術部資料室となった。1957（昭和32）年11月には、長年の懸案であった書庫の増築が完成し、3階部分が建て増しされた。以下、戦後の資料部、資料室等の業務を（1）図書、（2）写真、（3）閲覧の3項にわたり記すことにする。



16 『特別保護建造物及国宝帖1～3』
(審美書院、1910年、1915年再版)

(1) 図書

1947（昭和22）年から1950（昭和25）年、国立博物館附属美術研究所時代の3年間に購入した書籍（829冊）は、すべて東京国立博物館資料課の原簿に登録したのち、当研究所へ貸与する形式をとった。貸与

ではあったが、当研究所の図書台帳へも登録し、その後書庫に納められた。購入資料には、「国立博物館蔵書」の印が捺されたが、その後文化財保護委員会の附属となり、これらの資料は管理換を行い、正式に当研究所の蔵書となった。

所員が欧米留学や海外展への随行などで相手機関と新たな関係を築いたことで、海外からの寄贈が増加した。1950年代には秋山光和が留学したフランスから、パリ国立図書館（Bibliothèque Nationale, Paris）、ギメ美術館、フランス国立極東学院（Ecole Française d'Extrême-Orient）、また大串純夫が随行した「アメリカ巡回日本古美術展覧会」に関連して、シカゴ美術研究所（Art Institute of Chicago）などの寄贈が急増した。

戦後の混乱も落ち着き高度成長期に入ると、どちらかと言えば特権的な狭い世界の中で守られてきた「美術」が、徐々に一般のものへと広がり、「美術」を取り巻く環境は変化していった。1950（昭和25）年の文化財保護法の施行以後、文化財に関する刊行物も増大する。この頃から書名に「文化財」という文字が使用され始め、重要文化財や国宝をまとめた全集や、建造物の修理工事報告書、戦災で失われた美術品の目録などが続々と刊行された。戦前の目録は、古社寺保存会の調査成果をもとに編纂された『特別保護建造物及国宝帖1～3』（審美書院、1910年、1915年再版）〔図16〕や文部省編『日本国宝全集』（日本国宝全集刊行会、1923～1938年）が主なものであったが、戦後になると、文化財保護委員会（のち文化庁）関係の刊行物が寄贈されるようになり、『重要文化財』全31巻（毎日新聞社、1972～1978年）や数年ごとに文化庁が編纂する『指定文化財総合目録』が、重要文化財の手がかりを得る基本書となった。

また戦前には難しかった社寺や華族・財閥などが所蔵する美術品の調査が許されるようになり、また外地から帰還した研究者たちの熱気も手伝い、次々と新知見が発表され、美術書の刊行も相次いだ。社寺に関する蔵書は、戦前のものでは東京美術学校が編纂した図版を主とした『南都七大寺大鏡』（南都七大寺大鏡発行所、1921～1929年）、『南都十大寺大鏡』（大塚巧芸社、1932～1938年）があったが、戦後になると『奈良六大寺大観』

(岩波書店、1968～1973年)、『奈良の寺』(岩波書店、1973～1975年)、『大和古寺大観』(岩波書店、1976～1978年)などが刊行され、図版解説と論考が充実していることから、その後の改訂版も含め利用者は多い。独立した図書購入費の予算化がない資料室ではあった



17 「香取秀真日記」

が、写真資料の提供や執筆協力などによる献本がその不足を補っていた。そこで、この時期に寄贈された「香取文庫」、「織田文庫」等について、その内容と特色を記しておくことにする。

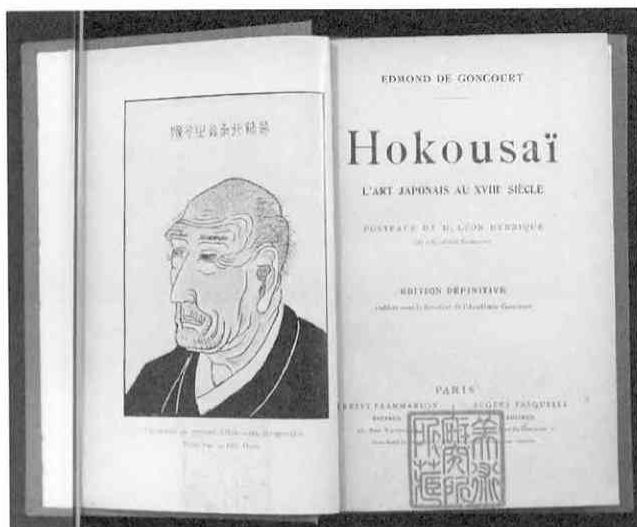
①「香取文庫」

1969(昭和44)年11月11日、鍔金家で歌人の香取秀真の蔵書(未刊調査録、拓本、製作品の意匠図案、日記[図17]、訂補書入自著及び美術図書167冊など)が遺族より寄贈され、「香取文庫」と名付けられ、図書は蔵書として登録し、諸資料は「作家資料」の中の「香取資料」として分類された。香取も中川同様、1945(昭和20)年4月13日の戦災で田端の自宅を焼失しているが、疎開先の信州へ運ばれ難を逃れたものや戦後の資料類は、没後整理され、その一部(他に東京藝術大学、千葉県立美術館)が寄贈された。

香取は1932(昭和7)年5月と1935(昭和10)年10月の2回、当研究所より明治大正美術史編纂の委嘱を受けている。美術懇話会の設立当初からの会員でもあり、例会では4回の講演を行い、その内の3回は講演録も刊行された。また1934(昭和9)年11月には当研究所が実施した龍角寺(千葉県)調査に加わり、論文を執筆している(『龍角寺の薬師銅像』『美術研究』37、1935年1月)。また香取の三男立田三朗は、1942(昭和17)年に東洋美術国際研究会の事務嘱託となり、東京国立博物館、文化財保護委員会を経て1969(昭和44)年には当研究所修復技術室長の職にあった。これらの事柄にみられるように当研究所との様々な関係が、後に資料を寄贈するきっかけになったと考えられる。

香取は、東京美術学校在職中に脇本楽之軒らと「左右会」と称する『君台観左右帳記』の研究会を行っており(嶋本久寿弥太『香取秀真の芸術と生涯(資料篇)』1955年)、文庫中の『座敷飾次第』(香取秀真、1936年)は美術学校所蔵の永正16年版の複製で同会が作成したものであり、万治3(1660)年の版本『玩貨名物記』や『御飾記』などは同会のための資料であろう。

著作の『還暦以後』(香取秀真先生古稀記念会、1947年)の見返しには、占領下の1947



18 “Hokusai : l'Art Japonais au XVIIIe Siècle”
(Eugene Fasquelle, Paris, 1895)



19 北斎の自画像が掲載された
『竜將軍勘略巻』

(昭和22)年3月11日に民事検閲局長の検閲を受けたことを書き付けるなど、香取は多くの著作に朱の書き込みをしている。日記を何回も清書したり、随筆に詳細な索引を付けるなど、資料には几帳面な性格が現れており興味深い。『随筆ふいご祭』(学芸書院、1935年)の「採集と和鏡の研究」の項には、中川忠順が「糸印」を約300点珍藏していたこと、没後関西の富豪の手に帰したとの話が出ているが、これは、巻末の索引からたどって知り得た情報である。

②「織田文庫」

1970(昭和45)年3月16日には明治から昭和にかけて活躍した石版画家織田一磨が収集した葛飾北斎の絵入版本を中心としたコレクション136種327冊が遺族より寄贈され、「織田文庫」として登録された。

織田は北斎など浮世絵の研究者としても知られ、「北斎絵本解題 1～5」(『アルト』8～12、1928年12月～1929年5月)で、北斎の絵入版本35冊について紹介している。うち23冊は、現在織田文庫に収蔵されているものである。織田の絵本収集に際しては、フランスの作家で日本美術コレクターのエドモンド・ゴンクール(Edmond de Goncourt)の著書“Hokusai : l'Art Japonais au XVIIIe Siècle”(Eugene Fasquelle, Paris, 1895)〔図18〕をもとに永井荷風が作成した「北斎年譜」(『三田文学』4-10、1913年)等を参考にしている。例えば、『光悦正流盆画独稽古 初篇』に関しては、「ゴンクウルの年譜に記載してあるので、私も求めたが、これは北斎の筆かどうか、研究の餘地がある」(「解題1」『アルト』8、1928年12月)と述べている。

織田文庫は、当研究所の通例の分類を用いず、織田独自の分類をそのまま引き継いで

いる。時太郎可候と名乗っていた北斎の自画像が巻末に掲載された『竈將軍勘略巻』〔図19〕をはじめ、出版物や「北斎展」などの展示に利用されている。

そのほか、1976（昭和51）年3月15日には、白畑よしの後任として、長く資料室の業務に携わった永雄ミエの遺族より寄付を受け、24種の書籍を購入し「永雄ミエ文庫」とした。

（2）写真

ガラス乾板からフィルムへの使用転換期にあたる。ガラス乾板の撮影には撮影機材や乾板原板などの運搬でかなりの労力が必要であった為、海外調査などでは戦前よりフィルムが使用されていたが、調査写真としてフィルム撮影を開始したのは1950（昭和25）年前後からであり、本格的にフィルムに切り替え始めたのは1957（昭和32）年頃からであった。

また前章の「美術部」中の「戦後から近年までの調査研究」の項でも触れ、またその具体的な手法等については後述するとおり、当研究所における戦後の光学的調査が本格化し、X線・赤外線・ガンマ線撮影など特殊撮影による写真資料が増加していった。撮影フィルムはガラス乾板の整理法にならって、各サイズ・各撮影種類により番号を付与し登録を開始した。同資料の中には、エミシオグラフィ撮影、顕微鏡撮影、赤外線テレビ撮影など、実験的な撮影と推測されうるフィルムもある。特殊撮影写真は、1952（昭和27）年に設立された保存科学部及び山崎一雄、中山秀太郎等の所外の研究者との共同調査によるもので、修復技術部にも特殊撮影フィルムや調査記録が保管されている。なお、当研究所では『X線フィルム目録』Ⅰ、Ⅱ（1998、2002年）を刊行している。

写真室に所属する小沢健志、橋本弘次の各カメラマンは、研究者と同行して撮影を担当し、調査後、現像及び焼付写真を作成した。フィルムの登録、保存、公開は研究者の責で行われた。しかしながら限られた予算内での調査であったため、撮影フィルムの全てを現像、焼付することは困難であり、研究上より有用となり得るフィルムを選択して焼付（プリント）を作成する方法がとられていた。また、焼付写真台帳やキャビネット配架用焼付写真はモノクロ撮影のフィルムのみが作成され、モノクロネガフィルムより若干遅れて使用が始まったカラーポジフィルムによる撮影写真は、経年による変色等の問題からキャビネット配架用の資料作成を控えていた。

キャビネット配架用写真は、戦前同様に収集・整理されていたが、大型写真、図版切抜、また西洋美術の複製図版等の収集は次第に減少していった。日本・東洋美術関係画像については、フィルムの使用によってガラス乾板を用いた時代よりも撮影が簡易とな

り、大幅な資料の増加をみた。報告書等に使用した図版の焼付写真は、分類せずにまとめてキャビネットへ追加した。その他にも、各研究者が自身の研究用として他機関所蔵の原板から焼付けたものや他機関との共同調査等によって撮影した写真も増えた。また同時期には春山武松が撮影した岩佐又兵衛関係の写真資料や、大塚稔（大塚巧芸社）、国華社からも焼付写真の寄贈を受けている。各種の焼付写真は、「写真受入簿」に記載の上整理した。

大型写真の目録は、1952（昭和27）年までに総計約4千種、8台分が作成された。「バンドン目録」と称される目録の分類は以下の通りである。通常のキャビネット配架用写真や図版カードに比べ数は少ないが、美術作品を実物大あるいはそれ以上の大画面で詳細にとらえた大型写真の収集は、顕微鏡写真等と並んで、後年の高精細画像の撮影へと繋がる研究への興味を少なからず示している。

- 第1函 仏画（如来部～菩薩部） 尊像別
- 第2函 仏画（明王部～天部） 尊像別
- 第3函 仏画（声聞・羅漢部～厨子絵板絵） 尊像別・その他材質別
- 第4函 仏画（曼荼羅部～壁扉画板画） 尊像別・その他材質別
- 第5函 神像・肖像 職種別・人名順
- 第6函 絵巻物 画題A－J
- 第7函 絵巻物 画題K－M
- 第8函 絵巻物 画題N－Z

次に、この時期に収集された写真資料ならびに調査によって作成された写真資料について、①ギメ美術館寄贈写真、②光学的方法による古美術品の研究、③マイクロフィルム資料の作成の3項にわたり記しておきたい。

①ギメ美術館寄贈写真〔図20〕



20 ギメ美術館寄贈写真

当研究所は、1906年から1909年にかけてポール・ペリオ（Paul Pelliot）が率いる中央アジア調査隊が撮影した6種類の遺跡写真（ギメ美術館所蔵原版）を所蔵している。

トゥムシュク遺跡及遺物写真 62枚

1906年10月30日～12月15日

（以下調査日程）

クムトラ石窟写真 57枚

1907年1月2日～9月3日

ドルドル・アクル遺跡写真 24 枚	1907 年 1 月 2 日～9 月 3 日
キジル石窟写真 70 枚	1907 年 1 月 2 日～9 月 3 日
スバシ遺跡写真 28 枚	1907 年 1 月 2 日～9 月 3 日
敦煌石窟写真 346 枚	1908 年 2 月 11 日～5 月 28 日

1950（昭和 25）年 8 月、秋山光和は、戦後最初のフランス政府招聘留学生として、1952（昭和 27）年 1 月までの 1 年半渡欧し、パリでは、ギメ美術館やパリ国立図書館が所蔵するペリオの資料を調査した。これらの資料（絵画類、ペリオが書いた日記、発掘記録、調査ノート等）は、当時様々な理由で公刊されず、存在自体も一部にしか知られていなかったが、秋山は幸いにも閲覧を許され、敦煌莫高窟の壁画などの撮影写真と諸記録を照合しつつ調査を進めた。帰国後その成果を「ペリオ調査団の中央アジア旅程とその考古学的成果」（『仏教芸術』19・20、1953 年 10・12 月）として発表した。これはペリオの調査報告についての世界で最初の論考である。秋山は、ペリオが撮影した写真の複製を当研究所が所蔵出来るようギメ美術館に申し入れ、その後、当研究所へ寄贈された。

後年秋山は、ギメ国立東洋美術館長との共同監修で、ペリオ調査団が将来した敦煌絵画と中央アジアの遺物を紹介する大型図録『西域美術 ギメ美術館ペリオ・コレクション 1、2』（日本語版、講談社、1994・1995 年）の刊行にも関わり、長年にわたりペリオ資料の日本紹介に尽力した。

② 光学的方法による古美術品の研究

戦後の光学的方法による調査の中核をなしたのが秋山光和である。1941（昭和 16）年 7 月嘱託として入所した秋山は、光学調査を主導した中根勝より、調査開始時の抱負や戦時下において調査が次第に困難となっていくことの「嘆き」を聞いていた。そのため、戦後復員した秋山は、美術史研究の一つの軸として、光学的鑑識法を組織的に推し進めることを望み、光学的手法を取り入れた撮影・調査を再開した（秋山光和「（資料）日本絵画研究に対する科学的鑑識法実施の経緯と方法上の諸問題」『古文化財の科学』30、1985 年 12 月）。

1949（昭和 24）年、当研究所内外の研究者を集めた光学調査班が結成された（「美術部」中の「戦後から近年までの調査研究」の「（1）1945（昭和 20）年～1960 年代前半の調査研究」のうち、「資料室の調査研究」参照）。この光学的調査では、秋山が学生時代から研究対象としていた「平等院鳳凰堂障壁画」の X 線撮影をはじめ、「過去現在因果経」、「伴大納言絵巻」、「天台高僧像」、「富貴寺板絵残欠」など古代中世の絵画を中心に撮影を試みた。1949（昭和 24）年 12 月には徳川美術館において、四ツ切原寸写真・赤外線・X 線・コダック社 4×5 カラーフィルムなどを駆使して「源氏物語絵巻」を調査した。調査には

橋本弘次、小沢健志の他に、写真担当の嘱託であり、美術写真を専門として高名であった坂本万七が関わり、ほかに所外の専門家である山崎一雄、中山秀太郎、所内から田中一松、白畑よしなども調査に加わった。なお光学的調査開始時にはまだ入手困難であった赤外線乾板は、山崎自らが手製し、X線撮影には、中山が設計にあたり理学電機（株）に製作を依頼した美術品撮影用初の可搬式X線発生装置（タングステン対陰極、最大プレート電圧 90kV、電流 10mA）を使用した。翌年の 1950（昭和 25）年春には、国立博物館小講堂での公開研究発表会と原色版X線透過撮影による写真の展示を行い成果を公表をした。その他『美術研究』及び報告書等の刊行物における研究成果の公表については、同じく前章を参照されたい。

さらに長波長X線専用フィルムをいち早く絵画撮影用にとりいれ、高感度 HS・低感度 FG の専用フィルムを使いわけ顔料の性質や彩色技法の推定に用いた。また保存科学部の三浦定俊が元々工業用として用いられていたものを改良して、初めて古文化財の分析に用いた赤外線リフレクトグラフィ（赤外線テレビ）や、エミシオグラフィ撮影により、鶴林寺太子堂壁画・法界寺阿弥陀堂柱絵などを調査している。また、遠隔操作が可能な高所調査用移動架台を特製し、高解像度モニターテレビによって観察し、肉眼では見ることの出来なかった線像や、従来鑑別が困難であった岩緑青・岩群青を濃淡の差でとらえることに成功した（三浦定俊・柳澤孝「赤外線テレビによる堂塔莊嚴画の調査研究—主として法界寺阿弥陀堂四天柱絵について」、『特定研究・古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書』、1982 年）。

久野健、猪川和子による仏像の光学的調査は、木彫、金銅と材質によって方法を替え試みられた。前者はX線や赤外線などの特殊撮影により、仏像の内部構造及び表面に残る彩色を鑑別する一方、後者では、1958（昭和 33）年頃より保存科学部の登石健三、石川陸郎が新たに Co60 を用いたガンマ線撮影を開始し、法隆寺献納宝物四十八体仏などの金銅仏の透視研究により内部構造を明らかにした。

これら光学調査班が撮影した各種フィルムは、例えば神護寺「高雄曼荼羅」を撮影したものはX線 76 点、4×5 モノクロネガフィルム 188 点等にのぼり、写真資料の新たな蓄積へと繋がっている。

③マイクロフィルム資料の作成

1961（昭和 36）年度から 1962（昭和 37）年度には、科学研究費「基礎資料の蒐集整理に基く古文化財の実証的研究」によって、マイクロ写真撮影及び閲覧の環境を整えた。これは当時閲覧が困難であった文書や絵巻などの諸資料を撮影し、独自にマイクロフィルムを作成、研究に活用する目的のものであった。購入した機材は、マイクロ写真撮影

装置（付自動現像機、プリンター、引伸機、乾燥機等）1式、マイクロ閲読機（ルーモ社製）3台、リーダープリンターである。マイクロ写真撮影機は組み立て式で、撮影台となるケースに一式が収められており、簡易な撮影が可能である。撮影フィルムはネガ・ポジ2種の35ミリロール式マイクロリールに作成した。これらマイクロ資料は1961（昭和36）年から1967（昭和42）年にかけて集中的に作成され、秋山光和、柳澤孝、宮次男らは「源氏物語絵巻」など、隈元謙次郎、岡畏三郎らは岡倉天心や近代作家の資料を撮影した。そのほか『劇場節用集』や謡本などの古典芸能に関する資料は、芸能部と共同で撮影し、後にマイクロフィルムは芸能部の資料に加えられている。今日ではほぼ刊行物に収録されるものではあるが、「黒田家系図」（「黒田清輝系図1～4巻」「黒田清輝系図（巻物）」の2種）など、黒田清輝に関する未刊行の資料も含まれる他、刊行物等の撮影も行われた。当時NEベースで作成されたマイクロフィルムは、経年による劣化が進んでいるため、フィルムのクリーニング及びリールやケースの入替（フィルムは金属製からプラスチック製の芯にまきとり、中性紙による箱に保管）を行い保存している。

（3）『日本東洋古美術文献目録』編集

同目録の編集については、前章「美術部」中の「戦後から近年までの調査研究」の「（1）1945（昭和20）年～1960年代前半の調査研究」のうち、「資料室の調査研究」において、詳述されているので参照願いたい。

（4）閲覧

資料室にて月、火、木、金の週4回、閲覧業務にあたった。担当はおもに上野アキ、永雄ミエがあたった。閲覧希望者は、学生の場合、指導教官の紹介状が必要であったが、国内各地から利用者が訪れた。また海外からは、戦前からの呼称であった“*Institute of Art Research*”が浸透していたため、戦争が終わると早い時期から来所する研究者が多かった。アメリカのシャーマン・リー（Sherman Lee）、ヒューゴー・ミュンスターバーグ（Hugo Münsterberg）、マニー・ヒックマン（Money Hickman）、ジェームス・ケーヒル（James Cahill）、イギリスのバーナード・リーチ（Bernard Leach）、スウェーデンのオズワルド・シーレン（Osvald Siren）、ドイツのローゼ・ヘンペル（Rose Hempel）、ベアトリクス・フォン・ラゲー（Beatrix von Rague）、ローター・レダローゼ（Lothar Ledderose）、ステファン・シュミット（Stephan Schmidt）、フランスのマドレーヌ・ダヴィッド（Madeleine David）、ベルナール・フランク（Bernard Frank）ら美術史研究者が閲覧室を利用していた。

なお、「閲覧」の「所内規程」を下記の通り、資料として掲載しておきたい。

所内規程

1 研究資料閲覧規程

第一条 本研究所の図書及び研究資料（以下単に「資料」という）の閲覧は、この規程の定めるところによる。

第二条 資料の閲覧は無料とする。

第三条 資料の本研究所外の持出しは禁止する。

2 一部の重要な資料は公開しないことがある。

第四条 閲覧者は、本研究所において適当と認めた者の紹介がなければならない。

第五条 閲覧者は、所定の申込票に必要事項を記入し提出しなければならない。

第六条 閲覧者は、研究上資料の閲覧が長期にわたるときは、一定期間有効の閲覧票を交付する。

2 期間を経過した閲覧票は返還しなければならない。

第七条 閲覧者は、所定の借出票に必要事項を記入し、閲覧票を添えて提出しなければならない。

2 閲覧終了後資料は掛員が検収し、引換えに閲覧票を返還する。

第八条 閲覧人員は、一時に概ね十名以内とし、一人一回に貸出しする資料は左の通りとする。

図書 三部十冊以内

写真 三種以内

2 閲覧中の資料であっても本研究所において必要があるときは返還させることがある。

第九条 閲覧は本研究所閲覧室以外で行ってはならない。

2 閲覧室においては、インク、墨汁等の使用並に飲食喫煙を禁止する。

第十条 閲覧者は、資料を鄭重に取扱わなければならない。

2 閲覧者が資料を滅失、毀損及び汚損したときは本研究所で定める損害の賠償をなさなければならない。

第十一条 閲覧者がこの規程に反すると認めるときは、閲覧許可を取消すことがある。

第十二条 閲覧時間は、午前十時より午後三時三十分までとし、閲覧停止日時は左の通りとする。

毎週、水、土、日曜日

祝日

開所記念日（十月十八日）

年末年始（十二月二十五日より翌年一月七日まで）

夏期（八月一日より八月三十一日まで）

第十三条 本研究所において必要があるときは、前条の閲覧時間及び日時を随時変更することがある。但しこの場合には予め揭示する。

4 情報資料部の調査研究・資料収集・作成・公開

1977（昭和52）年～2000（平成12）年

1977（昭和52）年4月18日、文部省設置法施行規則の一部が改正され、美術部資料室を発展させた形で、文献資料研究室及び写真資料研究室の2室構成の情報資料部が新設された。情報資料部は資料室の業務を引き継ぎ、加えて対象とする研究資料は、美術だけでなく各部の様々な研究領域の情報を扱うことになった。

1978（昭和53）年3月20日、旧写場を取り壊し、その跡地に、関野克が設計したスタジオ、暗室などが備えられた地下1階地上3階の情報資料部研究棟が竣工し、地下1階の書庫をのぞき、主に写真関係の業務に使用した。新棟建設中は東京国立博物館敷地内にあった保存科学部棟の暗室や黒田記念室をスタジオとして使用した。

1984（昭和59）年のコンピュータの導入により、所蔵情報はデータベース化されることとなった。国内でも徐々に文化財情報の処理システムに取り組む機関が増え、研究会などで、「情報システム」や「共有化」が話題となっていった。

所内の処理システムについては、既に保存科学部と芸能部にそれぞれ書庫が設置されていたことや、建物が別棟だったことなどの諸般の都合から、各分野の研究情報を統括して外部へ発信する役割は、ほとんど果たせずにいた。

1994（平成6）年に当研究所の新庁舎建築が決定し、1996（平成8）年に着工、各室の設計プランは室員にゆだねられ、検討を重ねた新庁舎は、2000（平成12）年3月に竣工した。情報資料部は地下1階地上4階建ての1階にスタジオと写真資料研究室、2階に文献資料研究室、閲覧室（約246㎡）、書庫（約620㎡一部3階）等が配置された。新庁舎の書庫には保存科学部と芸能部の蔵書もおさめ、文化財に関する研究資料センターとしての環境が徐々に整えられた。

しかしながら1999（平成11）年下半期から2000（平成12）年上半期まで、新庁舎移転にともなう作業で実質的な研究や活動は休止した状態が続いた。

また2001（平成13）年度からの独立行政法人化に際し、情報資料部の廃止が決定していたことから、従来情報資料部が行ってきた業務をどのように継承していくのかという点について議論を重ね、当研究所全体の情報発信を担当する部署との認識にたち、なおかつ単なる情報の発信だけではなく、知的情報、すなわち質の高い研究情報の発信を



21 情報資料部研究棟と2階写真場

目指した。

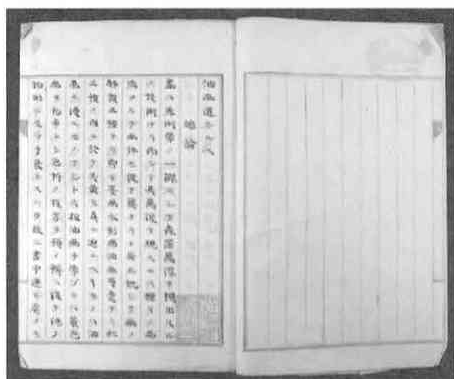
以下、情報資料部として業務を、(1) 図書、(2) 写真、(3) 目録作成、(4) 閲覧、(5) 情報処理の5節にわたり記すことにする。

(1) 図書

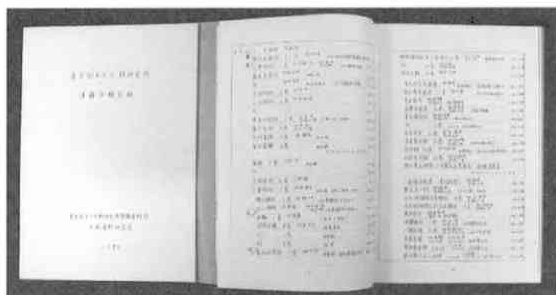
1978(昭和53)年3月情報資料部研究棟〔図21〕が竣工し、地下1階の書庫へ漢籍と近現代関係美術図書を移動するにあたり、蔵書の整理を行った。和雑誌の配架はABC順から50音順へと変更し、製本機をつかった簡易製本などを行った。漢籍は京都大学人文科学研究所の漢籍目録の分類にならいDからN分類へ、また近現代関係美術図書については、無分類から古美術分類にならってT分類とし、分類表の見直しも含め、大がかりな書庫整理を行った。

同年11月17日、隈元謙次郎の蔵書488種500冊余と諸資料が、遺族より寄贈され「隈元文庫」と名付けられた。隈元は在職中も当研究所の収書に気をくばり『帝国銅像鑑』(大日本帝国史跡研究会出版部、1935年)や写本『油絵道知辺』〔図22〕などの稀書を寄贈している。隈元は1963(昭和38)年から翌年にかけて日本美術院の岡倉天心関係資料を調査し、マイクロフィルム43リールに撮影しているが、それをすべて紙焼きして整理しており、これらも蔵書に含まれていた。これらは「天心資料」として別に保管している。その後、隈元は平凡社版の『岡倉天心全集』(全9巻、1979～1981年)の編集委員を務めている。

1980(昭和55)年3月、漢籍(線装本689種8419冊、洋装本92部1097冊、うち6割を中川文庫が占める)を再整理し仮目録『東京国立文化財研究所漢籍分類目録』(1983年改訂)〔図23〕を刊行した。また正木の寄託本「十三松堂文庫」は1980(昭和55)年9月に、また「明治大正美術史編纂用」に購入した近現代美術関係図書は、同年10月に、正式



22 『油絵道知辺』



23 『東京国立文化財研究所漢籍分類目録』(1983年改訂)

に蔵書登録を行った。1984(昭和59)年1月には、和田新旧蔵の黒田清輝に関する明治時代の新聞の切り抜き帖7冊〔図24〕、1993(平成5)年11月には和書9冊と2000(平成12)年5月に洋書125冊が遺族より寄贈された。



24 黒田清輝に関する明治時代の新聞の切り抜き帖7冊

1984(昭和59)年のコンピュータの導入後、業務のシステム化をはかるため、科学研究費(後述)による蔵書の遡及入力委託の他、日常業務でも諸情報のデータ化が進められ、1993(平成5)年度には、すべての登録がコンピュータ上で行われるようになった。構築された和漢書、洋書、展覧会カタログ、和雑誌、洋雑誌、文献等のデータベースは、会場と開催展覧会、和雑誌巻号と文献等とデータベース間でリレーションをくみ、日常作業に即した入力用システムを簡易言語を用いて独自に開発し、機器、OS、アプリケーションのバージョンアップにあわせて変更を加えていった。

1992(平成4)年、動物心理学者の都守淳夫が、売立目録の中から「猿猴図」の図版を探し出すため、閲覧に訪れたことから、売立目録の所在一覧作成に関わることとなった。国内では各地の美術倶楽部や寺などで明治維新、大恐慌、戦争など様々な理由で家蔵品の売立が行われた。そのほとんどは入札(一部^{せりうり}羅売)だったため、下見用に配布された目録が売立目録である。入札後は落札価格表や高値表が送られる方式だった。日本国内には売立目録を所蔵する機関は少なくないが、『東京美術市場史』(東京美術倶楽部、1979年)などに一部紹介されているものの、その全体像を把握し、まとめた資料はなかった。また当研究所でもデータベース化がされておらず、カードも目録から家名と入札会期、会場を簡単に記載しているだけであり、書誌の取り方は所蔵機関において異なっていた。その様な状況では、既に他機関で実見したものと同一の目録かどうか判断がつけ

られなかったため、都守は統一フォーマットを編み出し、詳細な売立目録の書誌データを作成した。その形式にあわせて資料室でも売立目録データベースを作成することになり、その過程で、東京大学、西尾市岩瀬文庫、奈良国立博物館、徳川美術館などの所蔵機関の調査も進め、1995（平成7）年の段階で18機関の所蔵情報3800件余りが集まった。それらの情報の共有化を目指し、上野にある東京国立博物館、東京藝術大学と当研究所の3機関の所蔵情報をまとめ、『美術研究』360、361号（1994年10月、1995年3月）に掲載した。その後も都守は調査を続け不明だった会期や、某家とあるものの家名を補い、86機関が所蔵する22490冊をまとめた『売立目録の書誌と全国所在一覧』（勉誠出版、2001年）を刊行した。2001（平成13）年時点で、国内には約4300種が確認されているが、資料室はその5割の2231種を所蔵しており、現在も収集を続けている。

1997（平成9）年度より、明治から昭和前期に刊行された美術雑誌のマイクロフィルム化に着手することとなった。これらは所蔵機関が少ないため利用率が高く、そのため劣化も激しかった。すでに『日本美術』、『みづゑ』、『中央美術』、『アトリエ』などの明治から大正にかけて創刊された美術雑誌のマイクロフィルムが雄松堂書店で作成されていたが、活用と保護の両面から、大正創刊の『美之国』、『大毎美術』や昭和創刊の『美術』、『美術評論』など、劣化の進んだものから順次マイクロフィルムに撮影していった。その際、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、東京都現代美術館、兵庫県立近代美術館、大阪府立中之島図書館などの協力を得て、欠号部分を補充し作成した。また他館が作成したマイクロフィルムの複製も許可を受け所蔵に加えた。資料保存と情報の共有化の両面からも関係機関の協力を得られたことは大きい。1998（平成10）年度以降は、マイクロフィルム化と同時にCD-ROM化も図るようになった。CD-ROMで提供するためのツールが整ってきた事もあり、資料保護の為に複数の媒体で保存することを目的とし、貴重書扱いの図書も対象に加えることになった。

1997（平成9）年度から2000（平成12）年度には科学研究費「日本における美術史学の成立と展開」によって、日本美術を紹介した刊行物や日本東洋美術のコレクションカタログなどを中心に購入した。それ以前にもイギリスの建築家ジョージ・アシュダウン・オーズリー（George Ashdown Audsley）とイギリスのコレクター、ジェームズ・ロード・ボウス（James L. Bowes）が編纂した“La Ceramique Japonaise”（Paris, 1880）や御雇外国人でのちの大英博物館の日本美術コレクションを収集したウィリアム・アンダーソン（William Anderson）の“The Pictorial Arts of Japan”（London, 1886）、『日本美術全書 沿革門・応用門』（八尾書店、1896年）などを購入していたが、フィレンツェ在住のアメリカ人批評家でコレクターのジェームズ・ジャクソン・ジャーヴス（James

Jackson Jarves) が記した “A Glimpse at the Art of Japan” (New York, 1876)、オーズリーの “The Ornamental Arts of Japan” (London, 1882)、御雇外国人でジャーナリストのフランシス・ブリンクリー (Captain F. Brinkley) と岡倉天心が編纂した “Japan” (12 vols., Boston, 1897 ~ 1901)、美術商サミュエル・ビング (Samuel Bing) の “Le Japon Artistique” (3vols., Paris) 等の日本美術を紹介したものあるいはコレクションカタログは、明治時代の外国人からみた日本美術を知る上でも貴重であり、独立行政法人化後の収集もあわせて蔵書の特色の一つとなった。“Collection Hayashi” (Paris, 1902 ~ 1903) には見返しにビングのサインが書かれているなど興味深い。

(2) 写真

1978 (昭和53) 年3月20日に完成した情報資料部研究棟では、撮影スタジオや暗室など撮影設備の整備が図られた。また、1970年代以降、国内の経済発展とともに各地での調査も盛んとなり、撮影した写真資料も飛躍的に増加した。このような状況をふまえて、写真原板の恒久的な保存、焼付写真のさらなる活用を目指して、写真資料の整理、管理、保存作業が日常業務として開始された。

まず、調査に伴う撮影に関しては、個別であった撮影調査票を美術部・情報資料部内で統一し、各調査者より原本ないしはコピーを収集、年月日毎に製本し保管することとした。調査内容は科学研究費による研究や他機関との共同研究も含まれている。原板フィルムから焼付写真を作成し、1枚は焼付台帳を作成して保管用に、もう1枚は小型カード台紙に貼付し検索目録用とした。さらに大きく引き延ばして焼付した1枚は、開架キャビネットで閲覧に供した。調査票にも原板登録番号を記入し整理に努めた。その後、小型カード目録作成については予算上の理由から中断した。

キャビネット配架用写真はこれまでと同様に分類し、冊子状の目録を作成した。日本・東洋美術に関しては、大分類 (彫刻・絵画・日本人作家・中国人作家・書跡等・建築など) 毎に冊子を作成、1頁毎の小項目 (キャビネット内にたてる札名) をたて、名称・所蔵者・枚数を記入した。これは当初からの分類を踏襲しているものの、収集数の少ない或いはこの時までには収集対象から外した分野などは、個別の目録をたてなかった。これは、網羅的な収集から、研究員それぞれの研究対象へと収集方法が特化されていったことによるものと考えられる。

キャビネット配架用写真の分類目録は以下の通りであり、現在もこの大枠の分類 (ただしアルファベット順に配架されていた項目を、日本美術に限り五十音順に変更) によって整理がなされている。

- ・日本絵画 仏画・歌仙絵・莊嚴絵
- ・日本絵画 絵巻物・神像・肖像・詩画軸
- ・日本絵画 A - N [作家名別]
- ・日本絵画 O - Z [作家名別]
- ・日本彫刻
- ・日本建築・寺院
- ・日本工芸 金工・木漆工・染織・考古学
- ・墨蹟・筆蹟 古筆 唐紙等
- ・朝鮮美術
- ・印度 彫刻・建築

なお中国美術（絵画）に関しても作家名で整理し、現在の配架は、漢字の日本語音読五十音順となっているが、目録は整備されず、作家名のみ項目がたっている。

当研究所全体のネットワーク化構想、各種文献情報などのデータベース化に伴い、原板やキャビネット配架用写真などの画像資料情報もデータベース化が始められた。初期のデータベースは冊子目録より作成し、現物にあたりなおして修正を重ね精度を高めた。

1977（昭和52）年の情報資料部新設に伴い、剥離剥落の進むガラス乾板のフィルムへの転写が計画され、この時点で所蔵するガラス乾板原板の破損状況をチェックした上で、転写予定の原板に新原板番号を付与した。翌1978（昭和53）年より、四ツ切・ハツ切・キャビネ・手札の各サイズ順に随時転写作業を開始。転写は橋本弘次、市川和正、野久保昌良の手により原板を直接接写する方法で行われ、原板のサイズに関係なくネガ・ポジ2種の4×5フィルムを作成した。毎年最多で1800枚程度が転写された。転写した各フィルムからは密着写真を紙焼きし、通常の原板同様焼付写真台帳により整理を行った。この作業は1994（平成6）年度まで業務として継続され、合計約2万3千枚（焼付写真台帳40冊分）のフィルム転写が完了している。ガラス乾板原板に比べると若干精度が劣るものの、劣化破損の進むガラス乾板の画像を保存させる意義があったと言える。

計画された新庁舎建設にむけ、1985（昭和60）年度に所蔵写真関係資料を配置する棚数を割り出すためにもフィルムを整理し、1985（昭和60）年2月4日付「施設整備計画委員会作業部会用資料」として庶務課へ提出したが、この新営は計画段階で取りやめとなった。その際カラーポジフィルムの増加にともない、保存方法を検討し、便利堂、フジフィルム、小西六における保管状況を比較検討し、写真棟1階奥に細長い大型の冷凍庫を設置し、フィルム原板の保存環境の改善に努めた。

1983（昭和58）年度、科学研究費「中部地方の近世絵画」による調査写真のフィルム

69本、写真1046枚が河野元昭より、また和田新が撮影した西アジア遺跡写真1千枚が寄贈された。

大規模な調査による写真資料の収集整理の一例として、1981(昭和56)年度から1982(昭和57)年度に行われた科学研究費「大和絵模本の研究」が挙げられる。調査対象を模本類に限定し、初年度に「金刀比羅宮蔵為恭田蔵模本」、次年度に東京藝術大学蔵「住吉家粉本」、京都市立芸術大学蔵「土佐家模本」の各コレクションを調査し、作品リストを科学研究費報告書として発表した。金刀比羅宮蔵本、東京藝術大学蔵本については全作品モノクロ6×7フィルムで撮影し、焼付写真を作成、小型カード化して閲覧に供している。

寄贈された梅津次郎撮影の絵巻物資料の整理は、1989(平成元)年度から2003(平成15)年度にかけて行われた。美術・情報資料部の共同研究「絵巻物資料の研究」の一環として、米倉迪夫、大西昌子、佐野みどり、千野香織、村重寧らによる整理・データベース化が検討され、(1)ネガフィルム・撮影台帳(撮影記録)、(2)焼付写真(35ミリ、6×6を主としたネガフィルム618本から新たに密着写真を作成したもの)、(3)作品別資料ファイルに大別し、収録作品件数1129件に及ぶ調査記録の作品リストは、「梅津次郎氏撮影作品リスト(稿)」として科学研究費「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」において報告がなされた。

1988(昭和63)年度より科学研究費「在外日本美術作品の調査研究と内外の研究交流の促進」によって始められた、アメリカの美術館が所蔵する明治期以前の日本美術作品の調査では、プライス・コレクションから調査した全フィルム原板の寄贈を受け、現在も出版物等の利用申請に対応している。他機関調査に関しては、調査記録とともに焼付写真の寄贈を受け、閲覧に供している。

(3) 目録作成

美術資料室時代と同様に「東洋美術に関する交流関係資料の研究」(～1983年度)、「情報資料の収集と調査に関する研究」(～1988年度)、「日本・東洋美術史文献データベースの開発」(～1993年度)、「美術史研究における語彙の研究」(～1998年度)、「文化財に関する研究文献情報の活用」(～2000年度)という中長期研究計画のもとで、受け入れ資料からの古美術文献採録は、情報資料部員が担当し、未所蔵あるいは欠号雑誌については、国立国会図書館、国文学研究資料館へ出向き、文献採録を補った。また新たに全集本の月報類、展覧会カタログから文献の採録を開始した。1984(昭和59)年以降はコンピュータによる入力となり、新着雑誌の文献採録要否は所員が担当し、アルバイト

が入力を担当した。そのほか、また書籍掲載図版のカード作成は、従来通りカード方式で継続した。

(4) 閲覧

資料室で月、水、金の週3回、閲覧業務にあたった。この時期、アメリカをはじめ海外で日本美術研究が盛んになり、学芸員、教官など多くの日本美術研究者らが来日し、閲覧室を利用する人も多くなった。中国、韓国から、日本国内にある自国の美術関係資料調査で来日する研究者も増え、海外の研究者との交流も盛んになった。また国内では美術史系の学科の増設がめだち、学生も増加傾向であった。新庁舎移転にともない、閲覧は1999（平成11）年11月から2000（平成12）年8月まで休止した。その間、蔵書の点検を行い、2000（平成12）年9月より新庁舎2階の新閲覧室で閲覧業務を再開した。中国、台湾、韓国、欧米から、日本美術あるいは自国の美術資料を探す多くの研究者が利用するようになった。

(5) 情報処理

1980年代に入り、学術情報の加速度的な増加と多様化の時代をむかえ、同時にその需要も多様化しつつあった。情報資料部ではこうした状況に対応するため、1985（昭和60）年度から科学研究費の交付を受け、本格的に情報処理システムの研究に着手した。

その際、「データの共有化」をテーマとして「美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—」と題した研究を進めることとした。この研究はさらに「美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）」、「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」へと展開して情報システム構築や画像データ蓄積・処理方法の基礎をかたちづくった。これらの研究を推進する中で黒田記念館に小規模LANを敷設し、システム構築の基礎づくりに務めたことも特記しておきたい。

このような状況から1995（平成7）年度から始まった文化庁を中心とする「文化財情報システム・美術情報システム」の整備により、各研究部門・事務部門を結ぶLANの敷設やインターネットの利用環境を整え、1996（平成8）年度にホームページを開設した。1999（平成11）年度には新庁舎への移転にともない情報システムを再構築した。

上述した情報資料部における情報化の流れを5段階に分け、順次具体的に記しておきたい。

第1段階 パイロットモデルの作成

1984（昭和59）年度、美術資料に関する情報処理の可能性を検討するため1台のコン

ピュータ（NEC 製 PC9801、OS は MS-DOS ver.2.11）を導入し、簡易なデータベースアプリケーション “ μ COSMOS” による試行を経て、“dBASE II” によるデータベース作成に着手した。記録メディアは 8 インチフロッピーディスクのみからの出発であったが、資料情報化への期待はさらに高まったと言える。小規模で情報処理専従員を擁することの出来ない国内の多くの資料部門でも同様の状況から、情報化に向けて試行錯誤を始めた時期であった。

次いで 1985（昭和 60）年度から 2 年間、美術部と共に「美術史学における多角的情報処理システムの開発」をテーマとし科学研究費により、情報の共有化のためのシステムイメージの追求と、より広範囲な資料のデジタル化に着手した。そのため Micro VAX（OS 日本語 MicroVMS）を導入し、RS232C を介して PC3 台を接続し専用端末として使用可能とした環境を設定し、蓄積したデータをホストに転送してデータファイルの統合や再編などを一括して処理する実験を行った。また古美術文献目録のデータベース化へむけてサンプルとして、美術全集に掲載された論文（1600 件）を採録しデータベースのパイロットモデルの作成にあたった。この結果を出力したものが『美術全集所載日本東洋古美術文献目録（稿） 付録キーワード・リスト』（1986 年）で、情報を共有すべく美術関係機関に配布した。同時に東京国立博物館が代表の科学研究費「国立の博物館・美術館資料に関する情報処理ネットワークシステムの整備に関する調査研究」に参加し、諸機関の情報化構想の把握や人的ネットワーク構築に努めた。

第 2 段階 各種資料のデータ化と関係モデルの作成

翌 1986（昭和 61）年度はコンピュータ 8 台を追加し、美術史研究を支援する各種所蔵資料のデータ化を始動した。まずデータベースの素材となる「作品」、「写真資料」、「史料」、「文献資料」などの素材ごとの特性を生かすデータフィールド、各種コード、キーワードを含む入力書式等を順次確定した。また雑誌『国華』所載文献（1966～1985 年）をサンプルに、誌名典拠（SERIAL1）、雑誌台帳（SERIAL2）、文献（ART1）、キーワード（KWDIC）等の各ファイル間のリレーショナルイメージを固め、データベース設計を行った。この成果を報告書『美術史学における多角的情報処理システムの開発』（1987 年）としてまとめ、所蔵する各種情報のデータ化を本格的に開始した。

1986（昭和 61）年 6 月「美術情報分析システム研究会」（於大和文華館）、10 月の「日仏美術学会全国大会」、1987（昭和 62）年 3 月の「東洋学研究支援データベースの研究シンポジウム」（於京都大学大型計算機センター）などに所員が参加し、情報を交換するとともに情報資料部における情報処理研究の概要を発表した。時あたかも人文系研究機

関におけるデータベース構築への動きが加速した時期でもあった。

第3段階 画像情報のデジタル化

着手時期は、まだ Adobe Photoshop などの画像処理ソフトが一般に普及する以前であった。美術史研究者が個々のコンピュータにおいて簡易に画像処理が出来るよう既存のシステム・ソフトを土台に実験検討を重ね、独自に美術研究用画像処理システムの改良・作成を試みた。

1987（昭和 62）年度から 1988（昭和 63）年度に国内の美術館博物館や大学の研究者と共に科学研究費「美術史学研究支援画像処理モデルの開発」において、美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究に着手した。当研究では画像処理専用機 NEXUS6810 を導入、美術作品の画像データの分析に即した画像処理用パッケージを開発し、いくつかの分析手法を公表した（詳細は昭和 62～63 年度科学研究費補助金研究成果報告書『美術史学研究支援画像処理モデルの開発』を参照）。さらにデジタル画像の作成にあわせて電子ファイリングシステム RIFILE への光ディスクへの画像データ蓄積、画像データベース検索システムなどの研究を行った。

続いて 1991（平成 3）年度からは、東京国立博物館が中心となり、京都・奈良の国立博物館、東京・奈良の国立文化財研究所の 5 機関が参加した科学研究費「有形文化財データベース検索アルゴリズムの研究」において毎年 2 千枚から 2500 枚分の所蔵ガラス乾板をアナログ画像としてレーザーディスクに蓄積し、「有形文化財映像データベース」を作成した（1991～1994 年度）。その間、将来の画像データベース像を想定し、TIFF や J-PEG などの記録形式について検討を加えた。その結果 1995（平成 7）年度からガラス乾板のデジタル化は、アナログ方式のレーザーディスクから、デジタル方式の CD-ROM へ記憶媒体を変更し、解像度 300dpi8bitTIFF 形式のファイルとした。同時に、所蔵する古美術や黒田清輝作品のカラーリバーサルフィルムをもとに、当時は世界的に利用されていたコダック社のプロフォト CD を実験用に作成した。

フィルムからデジタルデータへ

1994（平成 6）年度からは、中長期研究計画「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」（5 ケ年計画）を掲げ、1996（平成 8）年にレーザーディスクに収録されていた画像をデジタル変換し、CD-ROM へ入力し直した。そのほか、1999（平成 11）年度までに 4×5 判カラーリバーサル・ガンマ線・X 線などの各フィルムを毎年約 2 千件、外部委託によりコダック社のプロフォト CD 及び 8bitTIFF 形式で CD-ROM に

収録した。黒田作品のプロフォト CD 画像は、ホームページに開設を検討中であった「黒田仮想美術館」の小規模画像データベースの実験材料として使用した。

また本研究をもとにした活用の面では、国宝「源氏物語絵巻」の科学的分析の例が挙げられる。これは1998（平成10）年度に、2年間の受託研究として徳川美術館より同館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」の科学的分析を依頼されたことから始まったもので、情報資料部、保存科学部、修復技術部の共同研究によるものである。初年度は15面についてデジタルカメラによる高精細カラー撮影、X線透過撮影、エミシオグラフィー（光電子撮影）、蛍光X線分析、赤外線撮影、顕微鏡写真撮影などを実施した。

中長期研究計画が「デジタル画像情報の多重化に関する研究」に引き継がれた1999（平成11）年度には、五島美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」4面も対象として加わった。さらに1999（平成11）年に城野誠治が当研究所情報資料部に採用されると、彼がそれまで独自に研究を進めていた可視域内励起光を用いた蛍光撮影による調査も行い、その研究成果を、1999（平成11）年11月20日に「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻」（於徳川美術館）、2000（平成12）11月11日に「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻Ⅱ」（於五島美術館）と題した2回のシンポジウムの折に成果を発表した。調査に使用された城野の光学的な写真撮影法による画像では、彩色の褪色や経年の劣化によって現在では目視出来ない細部や、装束の文様、草花を明瞭に捉えることが出来た。この調査は、当研究所において可視域内励起光を用いた蛍光撮影が応用された最初の例であった。その後、この手法が広く知られるようになり、非破壊による作品の新たな調査方法を提示した点でも大きく貢献した。また戦後間もなく秋山光和等によって行われた「源氏物語絵巻」の調査（前述）に続き、新たな手法による調査成果が加えられたことは「源氏物語絵巻」調査の歴史を伝えるアーカイビングでもあった。また調査の成果は、徳川美術館が同時期に進めていた復元模写事業を担当した林功（愛知県立芸術大学教授）らも参考とした。なお本研究は2004（平成16）年に『光学的手法による国宝・源氏物語絵巻調査報告書』としてまとめられたが、その後の研究成果も加えた図書（『国宝源氏物語絵巻』中央公論美術出版、2009年）が刊行されたことを付しておく。

このように様々な撮影方法によって得られる多様な情報を解析することにより、新たな文化財の研究成果が生み出される可能性が示され、その後の画像形成の研究へと続くことになる（「独立行政法人化後の調査研究・資料収集・作成・公開」中の「(1) 画像形成技術の開発に関する研究」参照）。

第4段階 ローカルエリアネットワークの敷設

1980年代後半には、各所で様々な学術データベースが構築され、コンピュータの普及により個々の研究者レベルでのデータ生産も日常化してきた。しかしデータベースの利用環境はいまだ整備された状況ではなく、また基礎資料のデータベース化は遅れていた。そこで、1989（平成元）年度より、基礎資料のデータベース化と相互利用システムの整備を目指し、関係諸機関の研究者を分担者として科学研究費「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」を開始した。

当研究所内での情報の共有化を実現すべく、黒田記念館内でMSDOS、DBASE3-LANPACK、アンガマンバス-LANマルチポートトランシーバ8ポートによる最初のローカルエリアネットワーク（LAN）を敷設した。これは文献資料研究室のパソコン2台をサーバーとし、各研究室の12台のクライアントをつないだ小規模なLANではあったが、これにより文献目録の入力や、資料の検索がネットワーク上で可能となった。

LANの実現とともに力をそそいだのは基礎資料のデータ化である。まず研究文献目録の作成を目標とし、美術史関係主要学術雑誌4誌『美術研究』、『美術史』、『仏教芸術』、『国華』所載文献のデータベース化から始まり、その後『日本美術年鑑』掲載古美術文献の遡及入力、既刊の『東洋美術文献目録』、『日本東洋古美術文献目録』2冊の所載文献のデータ化を継続して進め、1996（平成8）年度には美術研究所時代より収集してきた古美術文献すべてのデータベース化が完了した。また美術研究の基本資料である『本朝画史』、『歴代名画記』、など日本中国の画史画論108種（1989～1991年）、所蔵和漢書（1991年）、『日本美術年鑑』（1995年～）などを順次データ化していった。

上述の成果は1990（平成2）年6月の「アートドキュメンテーション研究会第1回総会」（於当研究所）で、情報資料部の情報処理システムの紹介とあわせて報告された。また、国立歴史民族博物館の共同研究「歴史系研究支援情報処理の研究」への参加（1991年）、『歴代著録画目』などの画論を研究者へ配布しモニターを依頼（1992年）、学術情報センターや国文学研究資料館のデータベース利用、佐賀県立美術館・博物館でのデモンストレーション（1992年）など、データ共有化に向けたモデルケースづくりを試みた。

こうした中、1993（平成5）年度からは文化庁を中心とする「文化財情報ネットワークシステム」構想が実現に向けて動き始め、美術館・博物館・文化財研究所におけるデータの活用、共有化の環境作りが始まった。

第5段階 所内LANの構築、そしてインターネットへ

1995（平成7）年度には補正予算により急遽、文化庁を中心とする文化財情報ネット

ワークシステムが整備されることとなり、それによって当研究所も本館、別館をつなぐ LAN システムを構築した。ネットワーク構築に際しては所内のクライアントに異なった OS を許可することを前提として進められたが、一部 OS の TCP/IP への対応が不完全であったためサーバーは NEWS4000、同 5000 (NEWS-OS6.1) で運用を開始し、ネットワーク上に X 線写真画像などを蓄積するための MO ディスクライブラリを設置した。さらに SINET を通じて外部ネットワーク (インターネット) への接続を開始し、同時にホームページも開設、コンピュータの利用環境は一段と整備された。

データ化についても「白馬会展覧会出品目録」(1992 年)、『絵画の将来』(1996 年)、『黒田清輝日記』(1996 年)、芸能部蔵書 (1996 年)、「万国博覧会関係出品目録」(1997 年)、『木魚遺響』(1997 年)、『方眼美術論』(1997 年)、『芸術のエスプリ』(1997 年)、『仮象の創造』(1997 年)、『鉄人画論』(1997 年)、『光雲懷古談』(1998 年)、『小山正太郎先生』(1998 年)、『謡曲界』(1998 年)、『能楽画報』(1999 年)、保存科学部蔵書 (2000 年) など多岐にわたる資料の入力を進めることが出来た。これらはのちに、『明治期美術展覧会出品目録』(1994 年) などの刊行物や、ホームページ、情報検索システムなどで公開されている。

2000 (平成 12) 年の新庁舎の竣工に伴い、所内のネットワークシステムを一新することとなり、各部の意向を確認し会計部署と連携をとって設計を進めた。3 階の LAN 機械室を中心として、各フロアーにそれぞれ 1GB スイッチングハブを設置した。その間のバックボーンに 1GBps 高速光軸ケーブル (SMF ケーブル) を配線したスイッチングハブと、居室の間は 100MBps の光軸ケーブルでつなぎ、円滑で迅速な業務遂行をサポートする環境とした。外部との間には Firewall を設置し、不正アクセスやウイルス感染に対処している。光ケーブルを幹線とした高速ネットワークシステムを構築し、また SQL サーバーによる資料検索システムの試験運用を開始し、情報発信への足がかりとした。さらにモーション・キャプチャの導入により芸能部の動画情報の定量的把握への試行を開始、またリモート・センシング・システムの導入をはかり衛星画像の解析から地理情報を取得分析へと文化財情報解析の基盤を構築した。

5 独立行政法人化後の調査研究・資料収集・作成・公開

2001 (平成 13) 年～2006 (平成 18) 年

2001 (平成 13) 年 4 月 1 日、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となったことにともない、情報資料部は協力調整官—情報調整室となった。協力調整官は、外部からの様々な協力依頼に対して、研究性の高い結果報告をまとめるために、各研究部門の



25 ディスク (8 インチ、5 インチ、3.5 インチ)

協力体制を調整する(本書「管理運営」中の「独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所」参照)。また情報調整室は、所内の情報システムを管理するほか、伝統芸能、保存科学、修復技術などの複数の研究分野にまたがる研究所全体の成果を統合し、外部へ発信する役割を担い、広報企画関係の事業を行うほか、資料の作成と公開を担う資料閲覧室・写真室を統括することとなり、広領域の情報への対応が要求され、それに

伴い、従来行ってきた古美術文献目録の作成業務は美術部へ移すこととなった。従来情報資料部の職掌に掲げられながら、実績を伴わなかった所全体の研究成果の統括的な発信も、新庁舎に全部署が集まったことで、実施への環境が整った。業務は5ケ年を単位とする「中期目標・中期計画」にもとづき実施されたが、情報公開事業費の文言が示すとおり、業務の主体は情報の発信であり、調査研究事業費による業務は、「画像形成技術の開発に関する研究」1件であった。インターネットが前提の社会環境のもと、記録媒体も8インチ、5インチ、3.5インチ、ギガ単位・テラ単位のハードディスク〔図25〕へと変化し、情報発信の現場はツールの進化に迫り立てられるように、文字情報の公開から画像情報の公開まで一気に進むこととなる。また情報資料部から情報調整室へと規模が縮小されたため人員は半減したが、前述のように業務は拡大したため、担当者への負担は増大した。

以下、調査研究としての(1)「画像形成技術の開発に関する研究」、業務としての(2)システム管理、(3)広報企画事業、(4)資料閲覧室運営、(5)所蔵目録刊行・バーコード化、(6)写真室運営・写真設備の6項にわたり記すことにする。

(1) 画像形成技術の開発に関する研究

本研究プロジェクトは、1999(平成11)年度から翌年度に行われた中長期研究計画「デジタル画像情報の多重化に関する研究」を発展的に継承したものである。これは、入力データ(画質、情報等)の向上を計るために、画像形成の研究の必要性が高まり、一方でデジタルデータの記録メディアが目まぐるしく変わるため、ハードコピーをあわせて作成し、データを保全する目的から始められたものである。その背景には、コンピュータ技術の深化と普及やデジタルカメラ技術の進化、また赤外線写真フィルムの輸入中止などの様々な環境の変化が、文化財に関する研究画像の形成やその管理方法へも大きな影

響を及ぼしたことが挙げられる。そのために、このような変革に即応しうる体制の整備と技術開発は、緊急の課題であるという認識があった。

美術史研究、あるいは文化財の保存や修復のためには、任意の尺度で統一された再現画像をつくることは、多種多様な文化財の研究には欠かせないが、画像形成時における諸条件の整合性は十分に計られていない状況であった。このような状況の中で、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵等の美術作品を対象とし、それぞれについて、以下の項目を掲げ研究を開始した（口絵掲載）。

1) 光に対する物性の検討

鉱物系顔料・天然有機色料・合成染料・油彩絵具などの文化財に使用される色料が、可視光域から赤外線域におよぶ波長域の光に対して、どのような特性を保有し、どのような論理のもとで、その特性の画像化が出来るのかについて、形成画像の実例を増やし、その分析結果を蓄積する。

2) 光物性の画像化に関わる技術開発

複数の材料が複合的・重層的に混合あるいは重なりあう形で形成されている文化財の表面は、任意の厚みをもった構造体として把握される必要がある。こうした観点から、絵具層の表面から支持体にもっとも近い面までを断層的に撮影する基本的な技術を開発し、調査で応用する。また、あわせてミクロな観察の結果を画像化する技術として、高精細デジタルカメラによる近接撮影に加え、蛍光顕微鏡による試料の撮影を行う。

絵具層の表面 → フルカラー撮影、偏光撮影、可視域内励起光を用いた蛍光撮影

絵具層と支持体との中間層 → 反射赤外線撮影（複数のフィルタを使用）

支持体にもっとも近い層 → 透過赤外線撮影（複数のフィルタを使用）

3) 形成画像の汎用的な活用法（表示・出力）に関する条件整備

画像形成は、デジタルカメラにより分割撮影した画像をディスプレイ上で合成して形成するため、膨大な時間・費用・容量を要する。しかしながら、形成された画像は、被写体の情報をマクロからミクロまで様々なレベルで出力・表示出来る、きわめて有用な高精細デジタルコンテンツとなり、情報の共有化の点からも、展示や刊行物等様々な利用の可能性を探る。

以上の手法と目的から開始された本研究プロジェクトでは、何よりも画像データをデータベース用資料から研究用資料に変換することが大きな目的であった。そのためにもデジタル情報の特性を活用するための条件整備、特にコンピュータ用に汎用的な画像処理ソフトを利用し、所内で処理することによって研究に資する情報の生成をすべく実

用化を進めた。その方向性が認められたため、後述するように文化庁の依頼により、国宝「燕子花図屏風」の撮影を行い、修復のための検討材料として活用された。

以下、本研究プロジェクトのもと、所内外からの要請により実施された調査作品について、すでに報告書、展示等で成果報告した主要な14件を記録しておきたい。

①佐賀・鏡神社「水月観音図」

2001（平成13）～2003（平成15）年度に調査撮影

本図は、現状430×254cmの巨幅でありながら、使用した絵絹は1枚のみとされる作品である。フルカラー画像は、2200万画素の高精細デジタルカメラを使用して85カットの分割撮影を行い合成した。約600MBの画像に圧縮してもズームインすると細部の観察が可能となる。拡大画像からは、目視不可能な絹目や、裏彩色に用いられた赤い色料、金泥の雲気文や、薄物のベール（白色の細かい線描を2mm間隔の格子状に何本も引いて、透かしの効果を演出している）により緻密で計算された技量を確認することが出来た。

反射近赤外線撮影では109カットの分割画像を合成した。この画像では、墨線を明瞭に可視化出来、色料の有機・無機を判別した。

特に蛍光画像からは、有機染料を使用した可能性や、同じ緑色でも、鉱物顔料と天然有機色料を使い分けられていることが判明した。また従来墨と思われた箇所が天然有機色料の可能性が有ることなど、様々な問題提起がなされた。

2001（平成13）年11月19日に、東京大学総合図書館で行われた「人文社会情報とIT」シンポジウムで事例報告を行い、2003（平成15）年10月にサンフランシスコ・アジア美術館で開催された「高麗王朝 輝かしい韓国の歴史」展（“Goryeo Dynasty Korea's Age of Enlightenment, 918-1392”、2003年10月～2004年1月）の関連シンポジウムにおいて、調査報告と画像の展示（2003年10～11月）がなされた。

他に本作品調査に関する報告は、下記の通りである。

井手誠之輔、城野誠治（共同執筆）「美術史における研究画像の現在」（『人文社会情報とIT』全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ11、2001年11月）

城野誠治「近赤外線画像の形成と利用」（『美術研究』376、2002年3月）

城野誠治「光学的手法による可視画像の形成と利用」（『第30回文化財保存修復研究協議会—光学的方法の明日—』2002年3月）

Seinosuke Ide, Seiji Shirono, The Reception of Northern Song Artistic Practice in Goryeo Buddhist Painting : The Representation of Mt. Potalaka in the Water-Moon Avalokitesvara of Kagami Shrine, Goryeo Dynasty : Korea's Age of

Enlightenment (918-1392), Asian Art Museum of San Francisco, California State Building, 2003. 10. 18

②黒田清輝作「湖畔」

黒田清輝作「智・感・情」

2001（平成13）～2002（平成14）年度に調査撮影

美術部の研究プロジェクト「黒田清輝の再評価に関する調査研究」（「美術部」中の「独立行政法人化後の調査研究」参照）との共同研究として、画家黒田清輝の「絵づくり」の過程を多角的に解釈するために、様々な光学的な手法によって継続的に調査を行った。その成果を、「展示」という形式で黒田記念館の2階展示室を会場に2004（平成16）年6月10日から11月7日に一般公開した。

この展示は、黒田清輝の作品である「湖畔」、「智・感・情」、さらに肖像画を素材として、「風景・からだ・顔」という三つのテーマを立て、実作品と合わせて鑑賞しながら、同時に通常の人間の視覚では得ることが出来ない、カラー画像、近赤外線画像、可視域内励起光による蛍光撮影画像を立体的に体験することを目的にしたものであった。

会場では、下記のように3テーマを具体的に設定し、展示室を3分割して、それぞれのテーマごとに画像を展示した。

(1)「湖畔」の風景：実際に作品が描かれた場所に立って撮影された現在の風景（神奈川県箱根町、芦ノ湖）の画像を壁一面に拡大し、その前に実寸大の「湖畔」の画像を吊し、両画像を比較しながら、画家がどのように風景をとらえていたかを提示した。また、反対側の壁面には、精密に拡大された高精細画像を展示し、肉眼では感じられなかった色彩の微妙なニュアンスを示すようにし、同時に原寸大の近赤外線画像（油彩画の下絵と思われる線描の跡が示されている）と比較出来るようにした（口絵掲載）。

(2)「智・感・情」のからだ：このコーナーでは、3点の作品について、それぞれ3種類の画像を展示した。この3種類の画像展示は、制作時から現在までの時間の経過を提示する試みでもあった。まず近赤外線撮影による絵具の層とキャンパスの間をとらえたモノクロームの画像、これは制作中の画像である。形を修正したり、模索している跡を認めることが出来た。つぎに光をあててその蛍光反応



26 画像展示「黒田清輝の目—風景・からだ・顔」会場

をとらえたオレンジ色の画像（可視域内励起光による蛍光撮影）からは、完成後、長い時間をへて画面が痛んでいた部分が黒い部分として見る事が出来た。そしてカラー画像によってとらえられた、修復後の現在の作品の姿である。展示では、それぞれの画像の間を来館者が自由に通ることが出来、画像を比較出来るようにした。画像展示の会場〔図26〕。

（3）肖像画の顔：このコーナーでは、肖像画の顔に焦点をあて、蛍光反応をとらえた赤い画像と近赤外線撮影によるモノクロームの画像によって、絵作りのプロセスを提示する試みを行った。作品の表面の内側を見ることが出来る近赤外線撮影による画像では、製作途中の線描や修正の跡をみとめることが出来る。また、それぞれの物質は、独自の蛍光反応を示す特性をふまえて、画面では同じ白色に塗られたように見える部分も、蛍光反応では異なることから、白色の絵の具を画家は使い分けていたことを提示した。

なお、この展示のために、パンフレット（A4変形、16頁）を作成し、来館者に配布し、さらに詳細な解説を記した。来館者には、この会場で体験した後、もう一度黒田清輝の作品との比較を進め、「わたしたちの目が、何を見ているのか、また、何が見えていなかったのかを考えてみてください」と呼びかけた。このような、多様な画像を駆使した実験的な展示は、これまでにないものであり、テレビ、新聞等のマスコミにもとりあげられ、多くの話題を呼んだ。しかし何よりも画像形成技術の蓄積と進歩、そして展示形式に対する卓抜なアイデアによって初めて可能になった研究成果の公開であった。この展示期間終了後も、一部の画像は、同記念館にて公開を継続した。

③中国甘肅省敦煌市「敦煌莫高窟」第53窟

2002（平成14）～2004（平成16）年度に調査撮影

当研究所が2001（平成13）年度から2005（平成17）年度に実施した敦煌研究院との第4期「敦煌莫高窟壁画の保護に関する日中共同研究」の一環として、莫高窟第53窟を対象として、情報調整室、美術部のメンバーによって、2002（平成14）年8月10日から21日、2004（平成16）年7月7日から17日に壁画の調査を行った。彩色技法の調査にあたっては、情報調整室が画像形成を担当した。第53窟は莫高窟の崖の最下層に位置し、幅約6.5m、奥行き約6.5mの方形の洞窟で、天井最高部の高さは約6.3mあり、その特徴的な劣化状態のため、第1期の共同研究が開始されて以来、調査研究対象窟とされてきた。今回の作業においては、窟内に足場を組み機材を持ち込んで、カラー画像撮影、近赤外線撮影、可視域内励起光を用いた蛍光反応の撮影を行った。

南壁、北壁で、目視でラピスラズリと思われる箇所可視域内励起光を用いた蛍光反応では、場所によっては有機物の存在の可能性が示され、高精細デジタルカメラで接写

した拡大画像でも、顔料の粒子が確認出来ない箇所が認められた。また北壁下面（五代の壁画）の供養者題記については、反射近赤外線撮影で痕跡が見られないことから、墨書銘ではないと判断され、可視域内励起光を用いた蛍光撮影によって、植物性の色素をふくむ色料で書かれている可能性が示された。敦煌研究院のサンプル採取とX線解析も併せ調査成果等の協議を行い、第4期における同窟の修復作業に対して、有効な判断材料を提供するとともに、デジタル写真撮影を活用した光学調査の新しい方向性を示すことが出来た。

画像形成及び彩色技法に関する公表は以下の通りである。

城野誠治「有機色料の光物性を応用した撮影」（第4期中日合作研究保護敦煌莫高窟第53窟調査成果報告会、敦煌研究院資料中心閲覧室、2002年8月21日）

城野誠治「科学写真撮影の実際」（第1回文化財修理技術者講習会、2002年11月）

井手誠之輔、城野誠治「敦煌莫高窟第53窟壁画彩色技法調査について」（『敦煌莫高窟第53窟壁画保存修復に関する日中共同研究報告』2004年3月）

Determination of Wall Paintings Based on Photographic Images (Taken from Mogao Cave 53 and 260) (Nakano Teruo and Shirono Seiji), Conservation of Ancient Sites on the Silk Road, Second International Conference on the Conservation of Grotto Sites, The Dunhuang Academy, 2004. 7. 2

④奈良県高市郡明日香村「高松塚古墳壁画」

2002（平成14）～2003（平成15）年度に調査撮影

高松塚古墳壁画は7世紀末から8世紀初めにつくられたと推察される円墳石室内の、漆喰上に描かれた極彩色の壁画である。東西南北の各壁に四神、男女群像及び日輪月輪を、天井に星宿図が描かれている。その撮影記録としては、(1) 1972（昭和47）年3月21日壁画発見時に橿原考古学研究所の依頼によって22日、24日の2日間に行われた便利堂による撮影、(2) 同年4月に所管が文化庁に移ってのち10月8日から9日に行われた記録撮影、(3) 1975（昭和50）年5月9日から10日及び翌年2月19日から20日に当研究所が関わり行われた修理記録原図作成のための特殊撮影も含めた記録撮影、の3件がある。これ以降大規模な撮影が行われたことはなかった。過去の各撮影手法や古墳自体の保存に関しては、奈良県橿原考古学研究所編『飛鳥高松塚』（奈良県高市郡明日香村、1972年）、高松塚古墳総合調査会編『高松塚古墳壁画』（便利堂、1974年）、『国宝高松塚古墳壁画保存と修理』（文化庁、1987年）等を参照されたい。高松塚発見30周年にあたる2002（平成14）年、文化庁が記念出版を計画したこともあり、長期間にわたり古墳の保存に関わってきた当研究所が、現在の光学調査技術による新画像及び画

像研究資料を作成するため光学的調査を行うこととなった。2002（平成14）年9月から2003（平成15）年4月の期間中10回にわけ撮影を行った。本調査は、これまでの本研究プロジェクトにおける撮影現場とは状況が著しく異なる。南北2.655m×東西1.035m×高1.134mという狭い古墳石室内部での壁面を傷つけないための慎重な作業、また温度摂氏約16℃・相対湿度ほぼ100%という撮影者のみならず調査機材に対しても負荷の大きい環境での作業が求められた。各撮影機材の搬入や固定方法、撮影方法などの周回な計画をねり、実際に石室内で撮影にあたるカメラマン1名、前室で撮影データのチェックにあたる2名とも防塵服とマスクを着用し撮影に臨んだ。

その折の撮影では壁面を平均的に再現するための無影撮影が望まれ、壁面の水分の影響を除去する為に偏光カラー撮影法を採用、鮮明な線描や壁面の様子を写しとることに成功した。カラー画像のうち、天井及び東・西の2壁面は8800万画素で各12分割、北壁面は6分割に撮影し、各デジタル画像を一面に繋ぎあわせることで、正面性・平均性を保った全図画像を形成した。人物群像や4神、日月や星宿図など壁画彩色部は別個に部分撮影を行った。また漆喰下地や彩色壁画部分に使用されている有機染料などの検出とその画像化を目的に、可視域内励起光による蛍光撮影を行った。撮影の成果は、文化庁監修『国宝高松塚古墳壁画』（文化庁、2004年3月）として報告書が刊行された。その他、当研究所における代表的な画像の公開は以下の通りである。

2003（平成15）年7～11月、当研究所1階エントランスロビーにおけるパネル展示。

2004（平成16）年9月25日、NHK教育テレビ「サイエンスZERO」特集「画像解析で国宝壁画の謎に迫れ！」放映。撮影画像を内部全面に使用した実寸大模型を制作、放映後当研究所エントランスホールにおいて模型を展示。

⑤根津美術館「燕子花図屏風」

2002（平成14）年度調査撮影

2003（平成15）年度より2ケ年にわたる本作品の解体修理事業にあわせ、根津美術館と共同で撮影調査を行った。保存修理の前提ともなる技法・顔料等の情報を得ることと現状記録が目的であり、デジタル画像によるカラー撮影、近赤外線撮影、透過X線撮影による光学的調査を行った。

本調査の成果は、実際の修復にも修理前記録として用いられ、その燕子花図屏風の修復完成披露も兼ねた「国宝燕子花図 光琳 元禄の偉才」展（2005年10月8日～11月6日）にあわせ、『国宝燕子花図 保存修理竣工記念』（根津美術館、2005年）として根津美術館より上梓された。

⑥韓国国立中央博物館・東京国立博物館「大谷探検隊将来西域壁画」

2002（平成14）～2004（平成16）年度調査撮影

科学研究費「大谷探検隊将来西域壁画の保存修復に関する総合研究」（同報告書を参照）により、大谷探検隊が将来した韓国国立中央博物館所蔵品の保存修復のための調査として、同じく将来品の東京国立博物館所蔵品もあわせて調査が行われ、カラー画像撮影、近赤外線撮影、可視域内励起光を用いた蛍光反応の撮影を行った。以上の調査撮影によって、材質の異なる色料の使用をはじめ、特に「仏坐像」（8世紀、クムトラ出土、東京国立博物館）からは、褪色した色料が可視域内励起光の蛍光反応で、腹部に紐状の描画線としてとらえられるなど、今後の修復のための判断材料を提供することが出来た。成果報告として以下の発表がある。

城野誠治「大谷探検隊将来西域壁画の画像形成」（韓国国立中央博物館、2003年12月24日）

⑦ MOA 美術館「紅白梅図屏風」

2003（平成15）～2004（平成16）年度調査撮影

MOA 美術館との共同研究で、同館所蔵尾形光琳筆「紅白梅図屏風」のデジタル高精細撮影及び蛍光X線などの特殊撮影による光学的調査を行った。本作品は、金地は金箔、現在黒色に見える流水部分は銀箔が酸化したものと言われていたが、本調査によってこれら従来の説へ新しい科学的見解が加えられ、美術史のみならず、新聞報道などで社会的にも大きな話題となった。2004（平成16）年2月14日にはMOA 美術館能楽堂において当研究所と同美術館により「尾形光琳筆「紅白梅図屏風」の新知見—調査速報とシンポジウム」を共同開催し、調査結果の報告と討議が行われた。シンポジウムにあわせ、MOA 美術館では本作品が特別公開され、会場では撮影画像等のパネル展示が行われた。シンポジウムのプログラムは以下の通りである。

調査報告

- (1) 三浦定俊（協力調整官）「調査の概要について」
- (2) 内田篤呉（MOA 美術館学芸部）「光琳筆「紅白梅図屏風」にみられる技法の再検討」
- (3) 早川泰弘（保存科学部）「光琳筆「紅白梅図屏風」における蛍光X線による顔料分析の知見」
- (4) 城野誠治（情報調整室）「画像情報からみた光琳筆「紅白梅図屏風」の制作」

総合討議、パネリスト：内田篤呉・三浦定俊・早川泰弘・城野誠治、司会：井手誠之輔・綿田稔（情報調整室）

テレビの特集番組（NHK スペシャル「光琳・解き明かされた国宝の謎」NHK 総合、2004年8月21日など）により話題となったが、下記に挙げる報告書においては撮影画像を可能な限り多数掲載して、科学的・光学的数値データを公開した。

東京文化財研究所・MOA 美術館編『国宝 紅白梅図屏風』（中央公論美術出版、2005 年）なお本報告書において特記すべきことは、蛍光 X 線分析データと対応した画像が掲載され、文字通り自然科学と人文科学の連携による画期的な内容となったことである。

また、当研究所においては同年 12 月 25 日から翌 2005（平成 17）年 9 月 30 日まで 1 階エントランスロビーに於ける画像パネル展示や、2005（平成 17）年 2 月 1 日の総合研究会『紅白梅図（尾形光琳筆、MOA 美術館所蔵）調査について』などでも発表を行った。その後 2006（平成 18）年 9 月には、画像及び関連する文献を結びあわせた総合的な研究用のコンテンツを iPalatnexus にて作成し、公開している。

⑧中国・河南省洛陽市「龍門石窟」

2002（平成 14）～2005（平成 17）年度撮影

当研究所は、国際文化財保存修復協力センターを担当として、2000（平成 12）年度から、龍門石窟研究院との共同研究・共同事業を実施した。その一環として、2001（平成 13）年度から、龍門石窟を画像によって記録する共同研究を実施した。特に同年にはユネスコ龍門石窟保護修復事業に参加したこともあり、同事業の試験洞窟である皇甫公窟（北魏時代、6 世紀前半）について、撮影作業を開始した。皇甫公窟に引き続き、ユネスコ事業とは切り離して、龍門石窟研究院と当研究所との別個の共同研究事業としてさらに敬善寺洞（唐時代、7 世紀後半）と蓮華洞（北魏時代、6 世紀前半）についても撮影を実施した（本書「文化遺産国際協力センター」中の「2006（平成 18）年までの調査研究」のうち「中国文化財保存修復に関する調査・研究（龍門石窟の保存修復に関する調査・研究）」参照）。撮影には情報調整室の城野誠治と鳥光美佳子があたった。

皇甫公窟での撮影は、ユネスコ事業における洞窟の状態記録が目的であった。2002（平成 14）年 6 月 1 日から 22 日、翌年 3 月 1 日から 12 日の 2 回にわたり、壁面から等距離での平行移動で、均一な光を当てながら約 380 カットの画像を撮影した。

敬善寺洞及び蓮華洞の撮影は、洞窟内の仏教造像をその内容に沿って記録することが目的であった。これまでの龍門石窟仏教造像に関する写真撮影は、光源の確保に困難があったため、自然光が作る強い陰影によって、作品の情報を十分に伝えることの出来ないものが多かったが、今回は、撮影に十分な時間をかけ、光源の確保、自然光の遮蔽などを実現して、作品の細部にわたる情報を得ることに成功した。敬善寺洞の作業は 2004（平成 16）年 11 月 4 日から 24 日、2005（平成 17）年 6 月 12 日から 26 日の 2 回実施し、183 カットの画像を撮影した。

蓮華洞の撮影は、（2006 年 6 月 12～23 日、11 月 22～12 月 6 日、2007 年 5 月 30 日～6 月 14 日）も合わせると計 4 回にわたり、313 カットの画像を撮影した。

これらの撮影成果は、『世界遺産龍門石窟 日中共同写真撮影プロジェクト報告書（画像目録）』（文化遺産国際協力センター、2008年）としてまとめられ、関係専門機関と専門家に配布された。さらに、画像データベースとして当研究所資料閲覧室に設置したコンピュータでの閲覧・公開を行っている。

⑨金剛峯寺「仏涅槃図」

2003（平成15）年度調査撮影

本作品（267.6 × 271.2cm）は、1975（昭和50）年から3年をかけて修理ならびに調査を行い、色料の判別を行った。その当時、彩色と技法の調査を担当した渡邊明義の発案で、可視域内励起光を用いた蛍光撮影を用いて、本作品に使用されている鉱物系顔料・天然有機色料等の色料の新しい判断材料を得ること、とりわけ天然有機色料の使用の可能性を探るため、金剛峯寺、東京国立博物館と調査を行うこととなり、2003（平成15）年1月26日から2月6日まで、東京国立博物館で、カラー画像の分割撮影、可視域内励起光を用いた蛍光撮影、反射近赤外線画像撮影、ならびに蛍光X線分析を行った。撮影画像は、「弘法大師入唐1200年記念 空海と高野山展」（東京国立博物館、2004年4月6日～5月16日）にあわせて、同館の平成館1階ロビーに展示された。また調査報告として、5月8日に平成館大講堂にて『絵画表現の深層を探る—国宝仏涅槃図（応徳涅槃図）の光学的調査—』と題する調査報告座談会を開催した。他に、『朝日新聞』（2004年5月15日）紙上では、本調査の記事が掲載され、蛍光撮影で捉えられた頭光のグラデーションや褪せしていた文様などの画像が紹介された。

⑩京都・平等院「平等院鳳凰堂仏後壁」

2004（平成16）～2005（平成17）年度調査撮影

2003（平成15）年から開始された本尊阿弥陀如来坐像ならびに天蓋の平成大修理のため、同本尊を堂外に運び出したことに併せて、宗教法人平等院との共同研究として、仏後壁の撮影を行った。本尊の背後の板絵（仏後壁）は、縦302cm、横26～40cmの板を11枚並べた上に描かれている。2004（平成16）年7月26日から8月6日、翌年1月11日から26日（休止日あり）、2月14日から26日（休止日あり）、3月22日から24日の4回にわたった撮影では、国宝建造物のため、壇上をはじめ周辺部分も養生をほどこし万全を期して行われた。色を忠実にとらえることを基本に、剥落あるいは褪せした画面から、何が描かれているか、どのような色料によって描かれているのかを読み取ることを念頭に調査撮影を行った。撮影は仏後壁全対を16分割して行った。近赤外線撮影では、描かれた足の数から2頭の象が描かれていたことが判明し、可視域内励起光を用いた蛍光撮影では有機物などから発する蛍光反応により、衣に書かれた文様も捉えられた。こ



27 『国宝 絹本着色十一面観音像』

これらの画像や分析により、今後の仏後壁の研究成果が期待される。2008（平成20）年度から撮影画像の種類別の画像目録を刊行する予定である。

⑪奈良国立博物館「十一面観音像」

2004（平成16）～2005（平成17）年度調査撮影

2004（平成16）年度より、奈良国立博物館と共同で、博物館所蔵の仏教絵画についての光学的調査を行っている。その第一次として「十一面観音像」の調査を行った。2004（平成16）8月16日から22日、12月10日から12日、2005（平成17）年8月19日から21日の3回にわたり、博物館は透過X線撮影を行い、当研究

所ではフルカラー撮影、近赤外線撮影（反射・透過）、可視域内励起光を用いた蛍光撮影、ならびに蛍光X線分析を実施し、下記に挙げる本調査の報告書において、2mm範囲の蛍光X線分析の測定箇所に含まれる材料と対応した拡大画像を掲載することが出来た〔図27〕。

『奈良国立博物館所蔵 国宝 絹本着色十一面観音像』（東京文化財研究所、2006年）

奈良国立博物館新館地下通路にてパネル展示 2005年～

⑫出光美術館「伴大納言絵巻」

2004（平成16）～2005（平成17）年度調査撮影

本作品は、貞観8（866）年閏3月10日に起きた応天門炎上事件に基づき、12世紀後半の宮廷絵師によって描かれたとされる現状3巻の絵巻物である。本調査では、出光美術館との共同研究により、2004（平成16）年11月及び2005（平成17）年8月にカラー撮影、近赤外線撮影、可視域内励起光による蛍光撮影、蛍光X線分析及び画像形成を行った。絵巻は全巻を通して撮影し、また登場人物など特定の部分については特に細部まで観察出来るよう部分撮影を行った。

反射及び透過近赤外線撮影により、建造物群の入念な下書き跡とは対照的に、登場人物については下絵なしに描かれていることなどが判明し、絵巻の制作方法や歴史背景についても新たな発見があった。

調査の成果として、「国宝伴大納言絵巻展—新たな発見、深まる謎—」（出光美術館、2006年10月7日～11月5日）において、画像解析などともあわせパネル展示を行った。絵巻では10cm程度に描かれた諸々の人物像を等身大に引き延ばした画像、炎上する応天門の大画面等の画像を展示した。あわせて展覧会図録の意味合いを兼ねた『国宝伴大

納言絵巻』(出光美術館、2006年)が刊行された。

⑬台湾・国立故宮博物院「懷素『自叙帖』」

2004(平成16)年度調査撮影

唐代草書の代表作とされる懷素「自叙帖」は、名書家懷素が自らの生い立ちなどを記した書巻であり、清朝乾隆帝が「神品」と定めた優品で書法の手本としても著名である。石守謙(国立故宮博物院長)



28 故宮博物院での調査風景

は、これまで科学的調査が行われてこなかった同博物院の文物に対しても、これら手法を取り入れた調査を行いたいとの趣旨から、本研究プロジェクトの光学的手法が有効であるとの判断にたち、共同研究を行う運びとなった。本研究プロジェクトにとっても、海外の機関との連携による調査、絵画以外の作品という点で、新しい試みであった。

2004(平成16)年8月中に故宮博物院との協議を行ったのち、同年10月12日から21日の日程で現地を訪れ、光学的調査を行った〔図28〕。

調査を終えた10月20日には同博物院図書館視聴室において成果発表会を開催し、当研究所の山梨絵美子と城野誠治、及び故宮博物院書画処の何傳馨が画像の作成や解釈などについて発表した後、質疑応答が行われた。また、10月30、31日に台北市師範学院で開催された中華書道学会「懷素自叙與唐代草書」学術研討会議でも何傳馨によって画像とともに発表された。

なお故宮博物院では、この研究会に合わせ、10月29日から11月1日の4日間のみ、「自叙帖」全巻が公開され、あわせて本調査画像のパネル展示が行われた。その成果は故宮博物院、当研究所双方が共有するものとし、2ヶ国語併記の報告書『懷素自叙帖檢測報告』(国立故宮博物院、2005年)にまとめられた。本調査以降、故宮博物院とは、李唐筆「万壑松風図」、徽宗筆「文会図」など絵画の共同調査も継続して行っている。

⑭奈良・薬師寺「麻布著色吉祥天像」

2005(平成17)年度から継続して調査撮影

本作品は、数少ない奈良時代の著色絵画の一つである。本調査は、2004(平成16)年度から行っている奈良国立博物館と共同研究において、「十一面観音像」に続く第2次調査として行った。2003(平成15)年12月4日から5日の蛍光X線調査を皮切りに2005(平成17)年8月29日、9月3日及び2007(平成19)年1月22日から25日に光学調査を行い、蛍光X線調査を23日から24日に行った。なおX線透過撮影は奈良国

立博物館が分担した。

成果発表は以下の通りである。

「平城遷都 1300 年記念 国宝薬師寺」展（東京国立博物館、2008 年 3 月 25 日～6 月 8 日）
におけるパネル展示。

奈良国立博物館との共同編集により刊行された報告書『薬師寺所蔵 麻布著色吉祥天像』（東京文化財研究所、2008 年）。

本研究プロジェクトの成果は、従来の文化財、美術史研究のための「美術写真」の概念を変えるものとなった。近年急速に進化するデジタル技術と、画像光学研究の成果に基づき、ミクロからマクロまで、また近赤外線、可視域内励起光を用いた蛍光撮影等の特殊撮影による多様な「画像」を形成、提示することは、文化財、あるいは美術作品そのものを「見る」ということの意味を、あらためて問い直すこととなった。同時に、本研究プロジェクトの実践と成果そのものが、文化財の研究における非破壊の光学的調査の新しい局面を切り開いたという、学術的、かつ専門的な研究領域として国内外から高く評価され、注目されるようになった。その後も、本研究プロジェクトは「高精細デジタル画像の応用に関する調査研究」（2006 年度以降）に引き継がれ展開されている。

（2）システム管理

新庁舎における、システムは 2000（平成 12）年度の構築後、順調に稼働した。システム・ネットワークについては情報調整室長が管理責任者となり、システム、セキュリティー、メールなどを管理し、各部・センターの委員で構成した LAN 委員会と共に、メールアカウント、システム更新や保守契約等について協議している。

（3）広報企画事業

当研究所の活動を紹介する刊行物の編集出版は、情報調整室の職掌の一つとなった。これらは毎年広く国内外の関係機関へ送付している。

独立行政法人化を目前にひかえた 2000（平成 12）年 3 月に、当研究所の研究・活動を広く一般へ向けて伝える広報誌『東文研ニュース』の刊行を開始した。本誌は年 4 回の刊行で、研究活動や関連する話題の中から、速報性と公共性の高い情報を記事にするもので、2006（平成 18）年 3 月までに 24 号を刊行している。

1998（平成 10）年度より、当研究所は『東京国立文化財研究所要覧』にかわって『東京国立文化財研究所年報』を発行してきたが、2001（平成 13）年度より『東京文化財研

究所年報』となった。本誌は、当研究所における各年度の活動を網羅的に報告するもので、自己点検、外部評価委員会の参考資料としても使用している。2006（平成18）年3月までに、『東京文化財研究所年報 2005』を刊行している。

1988（昭和63）年度より刊行している『東京国立文化財研究所概要』は、『東京文化財研究所概要』と改題し、年度初めに、当年度の事業目標を掲げ紹介している。2006（平成18）年5月に、『東京文化財研究所概要 2006』を刊行している。

所内の部・センターにおいては個々に研究会を開催しているが、各研究部門のプロジェクトについて情報の共有化をはかるため、総合研究会を開催することとなった。これは各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、研究者間で自由討論するシンポジウム形式で毎月1回開催している。

また各部・センターのプロジェクトの成果や経過報告を、各部の持ち回りでパネル、展示品、映像等を使用して、来所者の方々によりわかりやすく紹介するのが、当研究所エントランスホールでのパネル展示である。情報調整室の担当では、2003（平成15）年3月に高松塚古墳壁画の撮影報告を、パネルと実物大に再現した古墳の墓室とともに展示した他、2004（平成16）年12月にはMOA美術館と共同で行った国宝『紅白梅図屏風』の調査の成果を展示した。

ホームページは、インターネットとイントラネットの2種に分けて運用している。各部がそれぞれのサイトを管理運営しているが、トップページと黒田記念館のページは、情報調整室が担当している。黒田記念館では作品の画像と解説、日記、書翰、自筆文献、白馬会関係資料など基礎資料を提供し黒田清輝研究のための知的データベースとして、機能と内容の充実を図っている。白馬会関係新聞記事は、石橋美術館学芸員の植野健造より、作成した情報の提供をうけたもので、情報の共有化の一つの方法「場」の提供でもあった。なお2002（平成14）年度からは、ホームページの充実を目指し、ホームページ及び公開データベースの作成・運営を独立したプロジェクトとした（口絵掲載）。

アクセス件数は以下の通りである。

2001年度	41万2938件
2002年度	57万2334件
2003年度	73万1587件
2004年度	72万6381件
2005年度	86万1486件

(4) 資料閲覧室運営

資料閲覧室は月、水、金の週3日公開し利用者に諸資料を提供し、それにとりなう検索システムの構築や、公開用データベースの作成管理を担当している。新庁舎の書庫には、美術部、芸能部、保存科学部の蔵書が一括で収められ、全所的に情報発信を行う部署として、美術部、芸能部、保存科学部の蔵書情報をはじめとして、美術関係文献情報、『保存科学』所載文献情報、伝統芸能関係雑誌所載文献情報、伝統楽器所在情報など各部の調査研究成果の提供も受け、検索システムに加え運用を図っている。また情報調整室では各部の蔵書を対象に出納業務を行うこととなった。ただし、資料の登録作業は従来通り各部ごとに行うが、書籍のテーマによっては、より近い研究分野をかかえる部署で登録するように調整することとした。

検索システムは、すでにイントラネット上で、Windows 2000 サーバに Microsoft の SQL サーバーを搭載して研究資料検索システムを構築し運用していたが、2002（平成14）年3月29日より、インターネットで試験運用を開始し、7月1日に正式に外部公開を開始した。

入力システムは、現在までにソフトウェアのバージョンアップに伴う更新を2回行い、アプリケーションの FILEMAKER（SERVER、Pro）を利用した小規模ネットワークを所内に構築し、資料の登録業務や、美術部の文献目録入力用プログラム作成、また平行して情報調整室でも諸情報のデータ作成や、既存のデータの校正作業を行っている。

独立行政法人等情報公開法の施行にとりない、2002（平成14）年10月1日より従来の限定公開が改められ、一般公開施設となった。インターネットの普及により、当研究所の知名度もあがり利用者は増加している。作成あるいは作成中のデータベースは35種あり、2009（平成21）年3月末の段階で13種のデータベースを公開している。

公開データベース（2006年3月31日現在）

- 2002年7月1日 美術関係漢書（のち洋書追加）・売立目録
- 2003年3月31日 近現代美術展覧会情報
- 2003年5月15日 伝統芸能関係図書・保存修復関係図書
- 2004年3月25日 近現代美術展覧会カタログ（のち統合）
- 2004年9月30日 古美術展覧会カタログ（のち統合）
- 2005年3月31日 伝統芸能関係三雑誌所載文献

2002（平成14）年度から2005（平成17）年度の美術部の科学研究費「モノ・宝物・美術品・文化財の移動に関する研究—価値観の変容と社会—」によって、フランスの文学者ゴン

タールの“Collection des Goncourt: Arts de l'Extreme-Orient” (Paris, 1897)、「ガゼット・デ・ボザール」の編集長ルイ・ゴンス (Louis Gonse) の“L'Art Ancien a l'Exposition” (Paris, 1879) など日本美術の紹介や日本東洋美術のコレクションカタログなどの購入を続けた。

その中の1冊“Histoire de l'Art du Japon” (Paris, 1900) は、1900年パリ万国博覧会のために、臨時博覧会事務局の委嘱を受けた帝国博物館によって編纂され、臨時全国宝物取調局の調査成果を基に岡倉天心、福地復一等によって執筆された日本人による初めての日本美術史のフランス語版である。これは事務官長の林忠正の序、九鬼隆一の緒言、挿絵322図、290頁のB4判で1千部刊行され、200部を皇族はじめ国内へ、279部は各国へ配布された。本書には、林忠正自筆の書状が貼り付けてあり、各国へ送られた中の1冊であることがわかる。日本語版は1901(明治34)年に『稿本日本帝国美術略史』として農商務省より刊行されたが、当研究所には1908(明治41)年日本美術社刊行の再版と、簡易製本の『日本帝国美術略史稿』(農商務省、1901年)があり、いずれも十三松堂文庫のものである。

おなじく2002(平成14)年度から2005(平成17)年度の科学研究費「日本近代の造形分野における「もの」と「わざ」の分類の変遷に関する調査研究」でも、“L'Art Japonais” (Paris, 1883) や“Oriental Series Japan and China” (12Vols., Boston/Tokyo, 1901～1902) を購入した。

「美術部」中の「独立行政法人化後の調査研究」のうち「現代美術資料の調査・研究—資料収集・整理法の確立のための研究」の項(219～221頁)でも記したように、2002(平成14)年、笹木繁男主宰現代美術資料センターより近現代美術に関する膨大な資料が寄贈された。寄贈資料の内容については、同項で記した通りであるが、ここでは、その公開について記すことにする。整理、データ化が完了した資料から公開を進めているが、同資料の場合、展覧会準備の学芸員の利用が多い。また、展覧会開催情報データの提供も大きな成果である。現在、国内で開催された展覧会の開催情報を網羅するデータベースの公開はまだみあたらない。明治以降の美術館博物館の開催データが膨大なこと、また近代現代作家の展覧会を網羅するには画廊の開催データが欠かせないが、膨大な情報を収集することは非常に難しい。しかし笹木氏は画廊を廻り、開催情報の蓄積の必要性を説いて、賛同する多くの画廊から、開催情報のデータが当研究所に提供されるようになってきた。これらは整理がついたものから順次、資料検索システムの展覧会開催情報に加えて外部に公開しており、今後も充実を目指している。

なお、美術部では受け入れた資料別に『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資

料目録』(CD-ROM、2002年)、『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録画廊関連データ』(CD-ROM、2006年)を制作し、関係機関に配布しているが、これらの資料は閲覧室で利用可能である。なお現在も資料は受け入れを継続している。

2005(平成17)年度には洋画家藤間清の蔵書が「藤間文庫」(目録は『藤間清寄贈図書目録』2006年)として寄贈されたが、いずれも近現代美術に関する大量の図書や資料類であった。また同年、旧所員の故柳澤孝の蔵書(目録は『柳澤孝旧蔵書籍目録 図書・展覧会カタログ・雑誌』2006年)が寄贈された。同年度以降も旧職員であった梅津次郎、川上涇、久野健、高田修、田中一松、中村伝三郎等の調査研究資料が遺族より寄贈され、整理を順次進めている。資料保存については、情報資料部時代よりの貴重雑誌や図書のマイクロフィルム化、あるいはCD-ROM化を継続して行っている。

(5) 所蔵目録出版・バーコード化

1938(昭和13)年、美術研究所は次年度概算要求に「美術研究所設置十週年記念出版ニ要スル経費」として以下の要求を行っている(「沿革」50頁参照)。

(二) 美術研究所蔵書目録

美術研究所々蔵美術関係図書ハ現在和漢洋書ヲ合セ約五、七〇〇部一四、〇〇〇冊ニ達スルヲ以テ其分類目録ヲ編纂刊行シ、以テ美術研究所事業ノ報告ノータラシムルト共ニ、研究者並ニ一般ノ利便ニ供セントスルモノナリ

内 容

四六倍判約三〇〇頁 一、〇〇〇部印刷

結局予算要求は通らず、その後蔵書目録刊行の話も立ち消えとなったまま60年余りが経った2001(平成13)年、情報調整室のプロジェクトとして「所蔵目録出版・バーコード化」が決定した。バーコード化については、蔵書点検が前提となるため、その準備としても蔵書目録編纂が必要となり、5年計画で始めた。まず美術図書館としての成り立ちを検証する意味で、美術関係図書から始めることとし、第1冊目は、初代所長矢代幸雄の蔵書を中心とする西洋美術関係図書を対象とした。「序」についても、蔵書の成り立ちに係わるテーマでの執筆を所員及び関係者に依頼し、口絵には稀覯本を中心に解題を付けて掲載した。本プロジェクトは第2期5ヶ年計画でも継続され、2009(平成21)年3月末現在、以下の目録を刊行している。

『東京文化財研究所蔵書目録1 西洋美術関係 欧文編・和文編 2001年7月31日現在』
(2002年)

欧文図書 1467 種、和文図書 526 種を収録。182 頁、口絵 7 頁、序「東京文化財研究所蔵西洋美術関係図書と矢代幸雄」

『東京文化財研究所蔵書目録 2 日本東洋近現代美術関係 2002 年 3 月 31 日現在』
(2003 年)

欧文図書 159 種、和文図書 6298 種、簡易装丁図書 379 種を収録。541 頁、口絵 10 頁、序「明治大正美術史編纂事業について」

『東京文化財研究所蔵書目録 3 日本東洋古美術関係 和文編』(2004 年)

和文図書 7348 種、簡易装丁図書 863 種を収録。702 頁、口絵 13 頁、序「中川忠順と研究所の蔵書」

『東京文化財研究所蔵書目録 4 日本東洋古美術関係 欧文編』(2004 年)

欧文図書 1124 種、簡易装丁図書 133 種を収録。134 頁、口絵 7 頁、序「尾高鮮之助について」

『東京文化財研究所蔵書目録 5 上 和雑誌 目録編』(2005 年)

和文雑誌 2445 種 7 万 1893 冊を収録。601 頁、口絵 11 頁、序〔無題〕

『東京文化財研究所蔵書目録 5 下 和雑誌 索引編』(2005 年) 181 頁

『東京文化財研究所蔵書目録 6 上 展覧会カタログ 目録編』(2006 年)

1888 ～ 2004 開催分 2 万 1744 種を収録。601 頁、口絵 8 頁、序〔無題〕

『東京文化財研究所蔵書目録 6 下 展覧会カタログ 索引編』(2006 年) 509 頁

(6) 写真室運営・写真設備

新庁舎における写真室は、画像情報室と名称を変更し、撮影方法をアナログ（フィルム）からデジタルへと移行した。撮影の目的も、被写体である文化財の記録から、画像そのものを利用した研究を包括するものへと変化した。画像形成の諸研究で得られた高精細デジタル画像は、従来の CD-ROM 媒体には収まりきらないギガバイト、テラバイト級のデータ量を有するようになり、画像保存媒体は DVD、ハードディスクが中心となる。それに伴い従来の写真画像の蓄積・登録などは根本的に見直しの時期を迎えた。画像処理には、一般に普及するようになった既存の Adobe Photoshop や Illustrator などを使用するようになった。なお作成されたデジタルデータの保存方法については今後の課題となっている。

これら高精細デジタル画像のうち、尾形光琳筆「紅白梅図屏風」（MOA 美術館蔵）をモデルに、高精細デジタル撮影と赤外線や蛍光 X 線などを用いた特殊撮影の画像比較、画像及び関連する文献を結びあわせた総合的な研究用のコンテンツを iPalettexus に

よって作成し、2006（平成18）年9月より資料閲覧室内端末で閲覧に供している。

写真資料の目録については、冊子体の目録にかわり、情報資料部時代に検討・構築した画像データベース検索システムをベースに、画像検索システム（Picture web）を作製した。2001（平成13）年度中に、テキストデータベース化が完了していた文字情報に加え、デジタル処理済フィルム画像、デジタル撮影画像等、各種画像情報の試験的な登録・検索実験を行った。その後、プログラムの修正、データ登録作業の算用的な運用について協議を重ねた。2004（平成16）年度より、写真資料中利用需要の高い4×5モノクロネガフィルムをはじめ本格的に登録を開始し、現在までに前述ネガフィルム約4万8500枚、4×5カラーポジフィルム約8500枚等がイントラネット内の検索システムで運用されている。

蔵書累計（2006年3月31日現在）

図書	和漢書		6万7530冊
	洋書		5665冊
雑誌	和雑誌	2613種	7万7499冊
	中国雑誌	126種	4346冊
	韓国雑誌	45種	499冊
	洋雑誌	437種	1万2079冊
展覧会カタログ			2万4488冊
写真原板			7万900点
キャビネット写真			26万点

むすびにかえて

2006（平成18）年度、協力調整官—情報調整室は企画情報部として情報システム研究室と文化財アーカイブズ研究室の2室体制となり、翌年、当研究所は国立文化財機構の1組織となった。

情報システム研究室は、情報システムを管理するとともに、『年報』『概要』『東文研ニュース』などの広報誌の編集・刊行やホームページの運用など、各種の広報企画事業を展開し、当研究所の情報発信に努めている。

文化財アーカイブズ研究室は、開所前から75年以上にわたって、調査や研究の結果うまれた様々な資料や情報を、受け入れ、整理し、保存し、提供する役割を担ってきた。

その間に収集された資料群は今も当室の誇るものであり、それを利用して下さる多くの方々に心から感謝している。

現代社会は、ほんの4半世紀前には想像すら出来なかった「高度情報化社会」となり、情報や資料の入手は容易い。ただし情報は氾濫している。

一つの作品が、戦前のガラス乾板と最新のデジタル画像両方で記録されて同じ場所に保管されていること、明治、大正、昭和、平成と時代ごとに作成された文字資料、これら文化財に関する様々な情報を積み重ね、収集してきたことは、「アーカイブ」の実践そのものであり、資料を通して見えてくる75年の歴史は、「継続は力なり」と語っている。これからの時代、資料群をどう充実させていくのか。情報とは何か。収集すべき資料とは何か、どこに集めるのか、どう保存するのか、どう活用し、どのように次代に伝えていくのか。「75年の歴史」をつなぐ責任は重い。

新たな企画情報部として

本章の「企画情報部」では、2006（平成18）年3月31日までの「美術部」と「情報資料部・協力調整官—情報調整室」の75年にわたる歴史を2部構成にして記してきた。

最後になるが、2007（平成19）年4月に所内の改組にともない美術部と企画情報部を統合し、新たな企画情報部が設置された。当部は、これまで、ともすれば美術に関する情報に重きをおいてきたが、当研究所全体の文化財に関する情報発信を担い、同じく所全体の文化財アーカイブズの構築を目指し、さらに文化財そのものの研究を深めなければならない。この三点こそが、相互に連携しあい、将来にわたる当部の業務、調査研究の中心になるであろう。なかでも情報発信は、今後も重要な当部の職掌の柱となる。その文化財情報とは、そのもととなる質の高い研究情報は、研究者による調査研究や、当研究所内ばかりでなく、広く他機関、研究者等とのネットワークによってしか生産されないことは言うまでもない。この点を今一度認識し、それを実現することが、当部にとっての責務である。これにより、統合のメリットの実現を目指しつつ、継続すべき調査研究の実践によって、企画情報部としての新たな展望を示すことになるかと確信している（「現況」参照）。

2 無形文化遺産部

1 沿 革

1952（昭和27）年4月、文化財保護委員会無形文化課の起案により芸能部が設置されることになった。日本で唯一の伝統芸能、民俗芸能を研究する国立の機関が誕生したのである。東京藝術大学音楽学部別科教室2室（8坪）を借用して現実に発足したのは同年10月であったが、演劇・音楽舞踊・郷土芸能の3研究室に、専任研究員2名、1週1日出勤の非常勤研究員3名、臨時筆生1名という体制でスタートをきった。浦山政雄、三隅治雄が専任、非常勤研究員に戸部銀作、岸辺成雄、池田弥三郎という構成に翌年3月、横道萬里雄が専任研究員として加わり、この6名が発足時メンバーとなった。別科教室は防音設備のない木造2階建ての建物である。箏・三味線はもちろん、ピアノの弾奏も絶えず聞こえる中で研究を余儀なくされた、という話はことあるごとにうかがった。後に職階制の変動などがあって定員が2名増加したが、この間は部長の定員が認められず、東京藝術大学音楽学部長が芸能部長を兼任するか、所長が事務取扱を行う体制であった。また発足当初は文化財保護委員会無形文化課の併任職員でもあったので、施策に参画し、重要無形文化財の指定及び保持者の認定基準や、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択基準の作成にも参与した。

1962（昭和37）年7月、保存科学部が新庁舎に移るに及んで、東京国立博物館構内の旧保存科学部庁舎に移転することになった。木造平屋建て1棟で初めて3室が分離し、ほかに資料室と機器操作室と1坪の録音室とが設置されることになったが、住環境は必ずしも快適とはいえないものであったらしい。1967（昭和42）年に、浦山政雄が部長に任命され、芸能部単独の体制が整った。またこの年、部の紀要『芸能の科学』1号（口絵掲載）と2号が公刊されたが、いずれも手書き原稿を孔版印刷したもので200部限定、3号より活版印刷に定着した。年1回、芸能部の研究成果を一般公開する公開学術講座も、この年始まった（口絵掲載）。実演者の演技を交えながら部員が研究発表を行う形式は当初からのもので、カルチャーセンターや大学のオープン講座が盛んになる以前に独自色をうちだした企画であった。当初は2日間行っていたが、第3回より1日になり、冬の慣例事業として定着した。ネスカフェのコマーシャルで一躍著名になった野村万作の出演した第9回（1977年）、坂東玉三郎が出演した第12回（1981年）は聴衆があふれ、

入場出来ないほど盛況であったという。

1966（昭和41）年、国立劇場が開場するが、その設立にあたっては、劇場の規模、組織、上演種目などの調査にあたって芸能部が全面的に協力を行った。当初、国立劇場に芸能センターが設置され、芸能部がその中心的存在になる構想があったが、案の規模が縮小され、国立劇場調査部門は上演に関する資料調査に主力を注ぐことが明らかになったため、芸能全般の基礎研究を目標とする芸能部とは立場を異にするとの見解により、一体化には至らなかった。

1970（昭和45）年4月、新設成った庁舎へ移転する。新庁舎3階には、3研究室のほかに部長室・図書室・資料室と視聴室・録音室・調整室を擁し、視聴室に舞台が設けられた。5月の竣工記念式に続いて、6月6日には舞台披露が行われ、坂東三津五郎が「七福神」を踊って門出を祝福された。1975（昭和50）年には郷土芸能研究室が民俗芸能研究室へ改称する。この年より、夏期学術講座が始まった。芸能研究者の育成を目指して、早稲田大学と慶應義塾大学の学生を対象に部員が専門的な講義を4日間行うもので、次第に東京近郊の大学を対象を広げ、部員が共同で講義を分担するなど、形を変えながら2005（平成17）年まで続した。この間、浦山に続いて内部から横道萬里雄、三隅治雄、佐藤道子、蒲生郷昭が部長となった後、1998（平成10）年、初めて文化庁より星野紘を部長に迎えた。1999（平成11）年3月、民俗芸能の保護について、現在の課題や対策をめぐって当事者と研究討議する場として民俗芸能研究協議会（『資料編』203～206頁）を開始した。

2000（平成12）年2月、新庁舎が竣工し、移転する。新庁舎の1階に3研究室、視聴覚資料室、映像音響分析室、地下に舞台を含む実演記録室が設けられ、5月15日、東京楽所による舞楽「賀殿・破」で舞台披露が行われた。

2001（平成13）年、ユネスコによる「人類の口承及び無形遺産の傑作」宣言以来、無形文化遺産の保護に関して意識が高まりつつあるのをうけて、2006（平成18）年4月、無形文化遺産部と改称し、それに伴って室の構成も無形文化財研究室、無形民俗文化財研究室、音声・映像記録研究室に改組した。研究対象を古典芸能及び民俗芸能から伝統的工芸技術、風俗・慣習、民俗技術、文化財保存技術に拡大して日本における無形文化遺産の全体を対象とし、無形文化遺産分野について国内外との研究交流も視野に入れた改組である。2007（平成19）年2月には無形文化遺産保護条約の発効を受けて国際研究集会を開催し、国の内外に無形文化遺産の重要性をアピールすることとなった。

2 調査・研究

資料収集

伝統芸能、及び民俗芸能の基礎研究を目的として設置された芸能部では、調査研究と並行して芸能資料の収集にも力を注いできた。

市販された音源資料の収集もその一つだが、最大のトピックは1960（昭和35）年度科学研究費「浄瑠璃の音楽的理法の研究」によって購入した、安原コレクション邦楽SPレコード5600枚であろう（図1）。義太夫が過半数を占めるが、明治・大正における雅楽から大衆芸能までのジャンルを網羅した音盤は、江戸時代末期の演奏の名残と考えられる様式や技法、明治以降の演奏の変化、関東と関西における演奏様式の違いなどを如実に伝える芸能資料として大変貴重である。音盤に貼られたレーベルを綿密に調査し、音盤に打ち込まれた番号によってレコードの製作状態を把握するなど、詳細な調査を行った結果、整理、目録化が完成し、『音盤目録』4巻の刊行を終えたのは実に1987（昭和62）年のことであった。目録の刊行以後、日本有数の邦楽SPレコードコレクションとして知られるようになり、その後も竹内道敬コレクションなど貴重な音源の寄贈を受けて現在に至っている。

芸能の研究は従来文献中心であったが、芸能部ではこれと並行して身体の「わざ」、技法や演出を対象とした研究を目指し、発足当初より積極的に研究対象として記録作成を行ってきた。2300本以上のオープンリールに音声、1600本以上のビデオテープに映像を記録してきたが、音声・映像共に主力を置いてきたのが、伝承のあやぶまれる種目、秘伝とされる演目や楽曲の記録である。また、文化財としての指定の有無にこだわらず、芸能として貴重、あるいは価値を有すると判断したものは調査の対象として記録を採り続けてきた。

今、発足当初に録音したオープンリールの箱書きを見ると、1953（昭和28）年6月に「葛西雛子」「正調博多節」、同年10月に「筑紫箏」、翌1954（昭和29）年4月に長野県下伊那郡上郷村の「三番叟口上」、同年10月に伊豆下狩野村の三番叟など、精力的に様々なジャンルの記録を作成



1 安原コレクションのSPレコードを収容していた木製ボックス

したことがうかがえる。伊豆半島各地で行われていた三番叟の伝承はとだえ、筑紫箏も伝承者が亡くなった現在、こうした記録は大変貴重なものと言えよう。

伝統芸能に関しては、文化財保護委員会が主催する古典音楽特別鑑賞会など演奏会に出向いて録音を行い、芸能部の専用舞台が出来る以前は文化会館の録音室や実演者の自宅などを借りて単独に録音を行うなど、第二次世界大戦後、伝統芸能が復興するまさにその状況の記録を数多く残してきた。こうした音の記録を有する機関はそう多くはない。

専用舞台が出来てからは、演者を招いて特別に記録を採るようになった。伝統芸能の講演や邦楽の演奏会は恒常的に行われているが、そこで演じられ演奏される曲目は、伝承曲のうちの一部でしかない。そこで、芸能部では秘伝として上演の稀な演目を中心に記録を作成した。例えば1980(昭和55)年、能楽ワキ方の森茂好によって替エの語りを主としたワキ謡の記録を行っている。

当時の当研究所は公開施設でなかったため、こうした録音を広く活用することはなかったが、報告書の形で公開したのが能の「翁」の記録である。「翁」は鎌倉時代から演じられてきた能楽最古の演目だが、神聖視され、秘伝化した部分もあって、楽譜、型付けの類は公開されていない。芸能部ではシテ方各流による演技の違い、笛方や小鼓方の流儀による演奏の違いを1994(平成6)年から6年間かけて個々に記録し、『芸能の科学』27号(1999年3月)や『芸能部プロジェクト報告書 伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究』(2006年)で写真と所作を対比させながら報告した(口絵掲載)。

無形文化財に指定や選択の対象になっていないジャンルに関しても、芸能としてすぐれた価値を認めた場合には、記録作成を行っている。その中で最たるものが寺院行事、法会の記録である。横道万里雄は「寺事」という用語を新たに考案したが、記録選択の対象となる声明が唱えられる場であり、雅楽や能楽、平曲の発生や伝承に大きな影響を及ぼした寺院行事の解明は、日本の伝統芸能の伝承解明に欠くことが出来ない重要性を有している。とりわけ東大寺二月堂修二会(俗称お水取)については佐藤道子を中心となって1967(昭和42)年から6年間にかけて集中的に調査を行い、紀要『芸能の科学』6、7、12、13号(1975年6月・1977年3月・1980年7月・1982年11月)に、行事の次第や内容、所作、声明について詳述したが、これは法会研究の嚆矢として外部の研究者から高く評価された。ビクターが1971(昭和46)年に作成した6枚組のレコード『東大寺修二会

観音悔過』の編集・解説も横道と佐藤が担当したが、このレコードは同年度の芸術祭優秀賞を受賞し、寺事の重要性を広くアピールすることとなった[図2]。このほか法蔵館が1984(昭和59)年に作成したレコード『声明大系』全6巻の主要音源は部の作成記録から提供し、主たる解説も担当するなど、作成した声明・寺事の記録は広く活用さ

れている。

なお、録音・録画媒体の劣化を憂えて、当部では平成になり媒体変換を行い、デジタル化の作業を進めている。これは、作成記録の公開に向けた取り組みでもある。

これまで芸能の研究は文献主体であった。従って文献資料も台本を中心とした文学研究に添うような文字資料が大半を占めていたが、芸態を中心に据える芸能部では演出資料の収集にも力を注いできた。例えば能楽各流の実技伝承者の家に伝わる楽譜や演出資料の調査を行い、資料の写真撮影を行ったり、歌舞伎においても黒みすの中で演奏される陰囃子などを記した付帳等を入手している。



2 『東大寺二月堂修二会』のレコード解説書

中長期研究計画以前

中長期研究計画が行われるようになる以前、芸能部では、各研究室で個別に研究テーマを設け、期限を特に限定せずに研究を行っていた。研究室ごとのプロジェクトというよりは個人研究に近いかたちで行われたものもあり、その数は膨大である。ここでは紙数の関係でその一部を紹介することにしたい。

初期の芸能部が総力を掛けて行ったものに、『日本舞踊譜』の作成が挙げられる。日本舞踊に限ったことではないが、日本の芸能は動作単元に分解することが出来、そのくみあわせで全体が構成されている。こうした特性を生かして、舞楽や能楽では舞譜として型を記録し、次代へ伝える方法が長年の間に発達しているが、日本舞踊では幕末まで舞踊譜が存在しなかった。しかも流派ごとに型の名称が異なり、名称のない型も少なからず存在する。流派をこえて共通する型、関連性のありそうな型があっても、それらを総合的に把握することがむずかしい状況だったのである。そこで、それらに統一名称を与え、型の映像を記録して名称と対照させた一覧を作成する作業が第一段階として行われた。この基本作業に則って、板東流の「廓八景」、藤間流の「松」、花柳流の「松の緑」、若柳流の「夕月船頭」、西川流の「扇」を例に挙げて伴奏音楽と型の関わりをわかりやすい舞踊譜としてまとめたものを、1960（昭和35）年に創元社より刊行した〔図3〕。エスペラントのごとく、日本舞踊を共通用語で記録することで、教習や研究、また著作権



3 『日本舞踊譜』

儀を俯瞰した能楽の技法解明なども行われた。能楽の技法についての詳細な分析は横道万里雄独自の視点で行われ、能楽研究においては、歴史的研究を主とする法政大学付属能楽研究所と並んで技法研究を行う研究機関と認められるようになった。

能楽に関しては、山形県東田川郡櫛引町大字黒川に伝わる黒川能の調査も行った。黒川能は中央の能とは異なる点が多く、その中には、中央の能の技法史を解明する上での重要な手がかりが含まれている。そこで法政大学能楽研究所と提携して、音楽舞踊研究室が中心となって1956（昭和31）年より調査研究を開始した。諸行事の録音・撮影をはじめ、所蔵する面・装束、莫大の量の伝来文書の撮影を行ったが、その成果の概要を『黒川能』（平凡社、1967年）で発表した。

寺院行事は宗教行為であるために文化財指定制度になじまないが、人間の生み出した知的遺産として大きな意味を持っている。宗教学の立場だけではなく、前述したように、日本芸能研究の源泉としてその研究解明は欠くことが出来ない。例えば修正会・修二会等の春迎の行事には、農耕に結びついた民俗芸能との深い関係が見られるし、学会における講問の論議や、涅槃会等で聞かれる講式は、平曲・曲舞・能等の語り物の祖形と大きな関わりを有している。また呪師の作法をはじめとする法会の所作には、舞踊史・演劇史上注目すべき多くの点を指摘出来る。こうした理由から、音楽舞踊研究室（後に演劇研究室に移る）では寺院行事の研究を志し、1961（昭和36）年以来、多くの寺院で実地調査と録音・写真による記録を行ってきた。修正会・修二会の代表的法要は悔過法であるが、そのもっとも大がかりなものに、お焚松またはお水取りと言われる東大寺の修二会がある〔図4〕。これについては前述したように詳細な調査を行い、報告書を作成して高い評価を受けた。その他の悔過会についても、花会式と呼ばれる薬師寺の薬師悔過、行いと呼ばれる法隆寺金堂の吉祥悔過、同寺夢殿の十一面観音悔過、西円堂の薬師

設定にも役立ちうる土台作りが出来たわけで、1966（昭和41）年には改訂版も出版された。外部からの評価も高く、研究の続行も予定されていたが、残念なことに継続されていない。

流儀・流派ごとに閉じられていた各ジャンルを共通の視点で総合的に把握する、というのが芸能部の方針である。その方針は他のジャンルにも応用され、流

悔過、新薬師寺の薬師悔過、東大寺大仏殿の如意輪観音悔過、中宮寺の十一面観音悔過、西大寺の仏頂悔過、長谷寺の十一面観音悔過などの調査を行い、民俗芸能的色彩を帯びた大分県岩戸寺・成仏寺・天然寺の薬師悔過、三重県正月堂の観音悔過、岩手県毛越寺の常行三昧供等についても、研究の手を進めた。学会については長谷寺におけ



4 修二会の行われている東大寺二月堂下の宿舎で取材をする横道万里雄

る真言宗豊山派の伝法大会、延暦寺における天台宗の法花大会、東大寺華嚴宗の方広会、薬師寺（または興福寺）の慈恩会、延暦寺の別請堅義会、天台会・霜月会、延暦寺横川の元三会、寛永寺の元三会、東大寺の聖武天皇御忌会・良弁忌、延暦寺の御修法、光明寺の十夜念仏法要、遊行寺のお滅灯法要、新勝寺の落慶法要の曼荼羅供、法隆寺・四天王寺の聖霊会、増上寺の法然上人御忌会、万福寺の開山遠忌など、天台・真言・華嚴・法相、聖徳・浄土・時宗・黄檗宗など諸宗派に及ぶ法会の実態調査を行った。これだけ広範囲に、諸宗諸寺等にわたる全国的な調査は、仏教学方面でも今までに例がなく、芸能研究上の新分野を開拓したと言えることが出来る（口絵掲載）。

民俗芸能研究室では民俗芸能の分布と分類研究に着手

民俗芸能（発足当時は郷土芸能）の全国的な分布は、芸能部発足時の1952（昭和27）年頃にはまだ学界でも十分に把握されていなかった。文化財保護委員会では、1951（昭和26）年と1954（昭和29）年の2回にわたって全国各都道府県に対して郷土芸能の現状調査を依頼し、各市町村からの報告を求めたが、その回答率は微々たるものであった。郷土芸能研究室でも、当初から郷土芸能の所在地台帳と分布図の作成を計画し、アンケート調査、現地採訪、既調査資料の蒐集などを行い、文化財保護委員会との資料交換を頻繁に行うことによって、相当量の資料の集積を得た。

それと同時にこれらの芸能をどのように整理分類し、日本芸能史の上に位置づけていくか、も研究の対象となってくる。郷土芸能の分類については、すでに早稲田大学の本田安次が、芸能様式と信仰要素の面からする分類案を作成していたが、郷土芸能研究室では、それに基づきながら新たな分類を考案し、池田弥三郎が『芸能』（岩崎書店、1955年）、『日本人の芸能』（岩崎書店、1957年）、三隅治雄が『日本民俗芸能概論』（東京堂出版、1972年）などで発表した。

九州の南部から沖縄に至る南西諸島の祭祀と芸能の研究も、郷土芸能研究室に端を発している。本土・中国大陸・東南アジア等に隣接する地理的条件のもとで、それら諸国の文化を吸収しつつ、独特の文化を培養しながら今日まで来たが、特に注目されるのは、本土ではすでに失われた古代日本の文化と同質の文化が、これらの島々の現実の生活の中に色濃く残していることである。そのため従来より学界から注目されていたが、実際に調査を行ったのは郷土芸能研究室が最初で、1957（昭和32）年8月、奄美大島と徳之島の民俗芸能の調査を行い、奄美大島のノロの祭祀・八月踊・奄美民謡、徳之島の浜踊・まんかい・闘牛・徳之島民謡などを現地調査した。次いで翌9月、薩摩半島に近い三島村の硫黄島・黒島・竹島を訪れ、硫黄島の疱瘡踊・太鼓踊、黒島の疱瘡踊・長刀踊・弓矢踊・三才踊・二才踊・面踊・民謡等の芸能を詳しく調査した。その後も、1962（昭和37）・1965（昭和40）・1966（昭和41）年の3回にわたって薩南地方の調査を行い、多くの芸能資料を蒐集し、学会誌にその成果を発表した。

琉球（現在の沖縄県）に関しては、第二次世界大戦後、アメリカの軍政下に置かれた関係上、調査が叶わなかったが、1958（昭和33）年8月、琉球政府文化財保護委員会の招聘を受けて渡島し、組踊・端踊・雑踊・歌劇等の舞台芸能や沖縄本島に分布する京太郎・白太鼓・南の島・打花鼓等の民俗芸能や、八重山諸島に伝えられる大胴小胴・節歌・盆アンガマなどの調査を行った。これによって、戦後衰退を憂慮されていた沖縄の伝統芸能の現状を知ることが出来、また芸能分布の状況をおおよそつかむことが出来た。1964（昭和39）年11月には、沖縄全域の伝統音楽の記録化を計画して、沖縄・宮古・八重山の各諸島に渡り、琉球文化財保護委員会の協力を得て1000曲にのぼる歌曲・器楽曲・舞踊曲の録音化を果たした。この成果は1965（昭和40）年、日本コロムビアレコードから『沖縄音楽総覧』（LP30cm盤16枚）として刊行され、その年の芸術祭奨励賞を受賞した〔図5〕。



5 『沖縄音楽総覧』のレコード

その後も久高島でのイザイホーなどを調査し、その成果を『沖縄の芸能』（邦楽と舞踊出版部、1969年）、『沖縄文化史辞典』（東京堂出版、1972年）、「沖縄の民俗芸能の分布とその分類」（『人類科学』24、1972年）などに逐次発表している。

中長期研究計画以前の段階では、一般研究費が些少であったため、上記のような研究を行う際、以下のような科学研究費の交付を得た。

1955（昭和30）年度 『「翁」の総合的研究』（総合）

- 1956（昭和31）年度 「能楽の音楽的研究」（各個）
- 1957（昭和32）年度 「能楽史料の総合的調査研究」（総合）
- 1957（昭和32）～1959（昭和34）年度 「未翻刻歌舞伎脚本の研究」（各個）
- 1959（昭和34）年度 「歌舞伎舞踊古曲の復元に関する研究」（各個）
- 1960（昭和35）・1961（昭和36）年度 「浄瑠璃の音楽的理法の研究」（機関）
- 1960（昭和35）・1961（昭和36）年度 「近畿地方に残存する風流踊とその歌謡の研究」（各個）
- 1962（昭和37）年度 「歌舞伎画証資料の研究」（各個）
- 1963（昭和38）年度 「日本古典芸能の单元構成の研究」（各個）
- 1964（昭和39）年度 「小町踊りとその歌謡の研究」（各個）
- 1967（昭和42）年度 「歌舞伎の演出・技法の研究」（機関）
- 「能の小段構成の研究」（各個）
- 1968（昭和43）・1969（昭和44）年度 「寺院芸能の研究－声明を中心として」（一般）
- 1969（昭和44）年度 「歌舞伎囃子付帳の研究」（一般）
- 1970（昭和45）年度 「沖縄の舞踊技法の譜化とその分析研究」（一般）
- 「近松周辺の浄瑠璃作者の研究」（奨励）
- 1970（昭和45）・1971（昭和46）年度 「歌舞伎演技譜の研究」（一般）
- 1971（昭和46）年度 「能の脚本史の研究－二場形式の成立について－」（奨励）
- 「語り物芸能の研究」（一般）

中長期研究計画—独立行政法人以前の特別研究を中心に—

研究室ごとに、先述したような基礎研究を行う一方で、部として総合的な研究を行う姿勢を取るようになった。その最初が、1974（昭和49）年度から美術部との共同による特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」である。4ケ年の中で浄土教の寺院行事、念仏踊りなどの調査研究を行った。この時期は、調査の報告書を別個に刊行することはなかったが、『芸能の科学』8号（1977年3月）に柿木吾郎が「大谷派の正信偈・念仏・和讃—その構成と音楽的分析—」、翌9号（1978年3月）に佐藤道子が「祖師会の史的研究」、11号（1980年3月）に佐藤が「浄土真宗本願寺派の法要形式に関する一考察」として成果を公表している。

1980（昭和55）年度から4ケ年計画で特別研究「民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究」が始まった。民俗芸能研究室を中心に、民俗芸能の伝承を支える各地域の社会的条件を具体的に考慮し、伝承条件の変化に対応する新たな伝承の仕方（継

承者選定及び技法習得過程)について、各地域の関係者が具体的にどのように対処すべきかの方法論を示すための調査研究で、その成果は『芸能の科学』15・16(1985年3月・1988年3月)号に載せた三隅の論文「民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究」に詳しい。

引き続き、1984(昭和59)年度より4ヶ年計画で「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」が始まった。人から人へ、技芸の伝達によって保存が可能になる伝統芸能にあっては、その伝達を正確、かつ強固に行うための保存伝承組織の確立が望ましい。そのため、過去の伝承組織の諸相を考察し、現存する各地の保存会・養成会・愛好会などの実態を精査し、それらの分析を通して、伝統芸能の文化財としてのより完璧な保存組織のあり方を研究するもので、この成果は『芸能の科学』17号(1989年3月)に佐藤道子「伝統芸能の保存組織のあり方の研究—東大寺修二会の伝承基盤—」、中村茂子「伝統芸能の保存組織のあり方の研究—民俗芸能保存会の事例を中心に—」、羽田昶「能楽における後継者養成の現状—国立能楽堂三役研修の事例を中心に—」として報告された。

1988(昭和63)年度より特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」が始まる。日本の伝統的な行事や芸能が、仏教との関わりの中で展開してきた様相を具体的に解明し、文化史的・芸能史的位置づけを行うことを目的としたもので、中でも衰滅の危機にある延年を対象として、その芸態を把握し、芸能史的位置づけを明らかにするために残存事例の実態調査を行った。『芸能の科学』21号(1993年3月)は延年特集号と特に冠していないが、実際はその成果報告書にあたるもので、羽田昶「『延年』の定義と概念について」、中村茂子「民俗芸能にみる延年の諸相その2—種目名としての延年試案—」、鎌倉恵子「毛越寺の祝詞」、蒲生郷昭「延年の音楽(上)—小迫の場合—」(中村の論は20号にその1が、蒲生の論は22号に(下)を載せる)、芸能部編「延年関係資料・文献目録」を載せている。

特別研究ではないが、1990(平成2)年度には、能楽の技法を多角的にとらえる共同研究「能楽の芸能学的調査研究」を5ヶ年計画で開始した。この成果は『芸能の科学』23号(1995年3月)に高桑いづみ「扇拍子覚エ書」、羽田昶「〔楽〕〔神楽〕〔羯鼓〕のある狂言—狂言の囃子事その2—」、鎌倉恵子「元禄歌舞伎と能—初代市川団四郎の場合—」、蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」、中村茂子「武器と芸能〈その2〉—流鏑馬を中心に—」として発表している。

1992(平成4)年、東京国立博物館法隆寺献納宝物特別調査「楽器」に、蒲生、高桑、調査員の高橋美都が参加したことが契機となり、1993(平成5)、1994(平成6)年度には科学研究費の交付を受けて「雅楽古楽器の総合的調査研究」が始まった。音楽学、美

術工芸学、保存科学といった専門分野を異にする研究者が共同し、現存する雅楽古楽器の文化史的異議を解明しようという意図で始められた研究は、蒲生郷昭が研究代表者となったが、これまでに類例のない研究であったため、未知の楽器を「発掘」するなど著しい成果を挙げた。この成果は1997（平成9）年から1999（平成11）年にかけて行われた科学研究費「地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究」に引き継がれ、その後の研究プロジェクトに発展する〔図6〕。



6 宮内庁式部職楽部での楽器調査風景

1993（平成5）年度からは特別研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」を行った。日本の民俗行事や宗教行事、能・狂言・歌舞伎などの伝統芸能に、様々な形で登場する「鬼」の多面的な性格、芸能的表現の多様性、歴史的変遷を総合的に把握、解明することを目的としている。この成果は『芸能の科学』24号（1996年3月）に結実した。すなわち中村茂子「民俗行事・民俗芸能に見る鬼の形態」、高桑いづみ「『乱声』の系譜—雅楽・修正会から鬼狂言へ」、鎌倉恵子「近松門左衛門の鬼—浄瑠璃の場合—」、蒲生郷昭「長唄の鬼」の各論がそれで、これ以前にも『芸能の科学』21号（1993年3月）に高桑が「鬼の囃子の古態—〈早笛〉でハタライた可能性—」、22号（1994年3月）に鎌倉が「江戸歌舞伎の鬼ノート（1）」を掲載し、第20回夏期学術講座（1995年）では「伝統芸能の鬼」と題して専任研究員全員で成果を公表している。また第27回公開学術講座（1996年）では、「鬼狂言の復曲」と題し、研究成果を生かして大蔵虎明本にのみ残る非上演曲「くも」を復活上演した。

1994（平成6）年度より共同研究「『翁』の技法集成」を開始した。神事的な色彩が強く、楽譜類が非公開である「翁」の技法について、能楽シテ方、笛方、小鼓方、狂言方各流の能楽師を招いて記録作成を行ったもので、その一部は『芸能の科学』27号（1999年3月）に高桑いづみが「翁の技法」としてまとめたが、関連する論考として『芸能の科学』26号（1998年3月）に鎌倉恵子が「式三番覚書き—いわゆる元禄歌舞伎の時代—」、28号（2000年3月）に中村茂子が「三信遠地域の〈おこない〉に伝承した翁猿楽の特色」、高桑が大蔵虎明の自筆伝書「代伝抄」の翻刻を発表した。このほか、第22回夏期学術講座（1997年）には「翁（式三番）の種々相」と題して丸茂美恵子（日本大学芸術学部専任講師）を交えて専任研究員全員で公表し、第31回公開学術講座（2000年）では「翁

の技法―舞う翁・語る翁―」と題して兵庫県上鴨川神社の翁舞、能楽金春流による「翁十二月往来」の実演を交えながら高桑と中村が講演を行った。

1996（平成8）年度からは特別研究「近代歌舞伎の伝承に関する研究」を開始した。重要無形文化財保持者各個指定の中村又五郎に取材をして「一谷嫩軍記」を例にした団十郎型と芝翫型の扮装・演出の相違、後継者育成の問題点などをうかがったほか、上方歌舞伎について制作や演出に携わる中川芳三を取材し、近年まで上演されていた演目や演技、古い技法について話をうかがった。成果は『芸能の科学』26・28号（1998年3月・2000年3月）に羽田昶・鎌倉恵子による〔聞き書き〕として報告した。このほか、芸能部所蔵の杵屋栄二旧蔵歌舞伎附帳写真について、鎌倉と児玉竜一が共同で整理にあたり、目録を『芸能の科学』27号（1999年3月）に掲載した。この特別研究は、1998（平成10）年度に始まった新たな中長期研究「伝統芸能の継承に関する特別研究」の中に組み込まれる形となったため、報告書の刊行は2001（平成13）年度に持ち越された。報告書は第1章・近代歌舞伎と写真メディア、第2章・近代上方歌舞伎の伝承、として研究期間中に開催した研究会での講義録（神山彰〈明治大学教授〉、浅原恒男〈日本俳優協会〉、権藤芳一〈元大阪学院大学〉）、と石井雅子（日本芸術文化振興会）、中川芳三へのインタビュー、及び芸能部所蔵となった石井雅子撮影の歌舞伎舞台写真の目録と、雑誌『幕間』総目次で構成されている。

独立行政法人以後

独立行政法人化に伴い、プロジェクト研究は一新した。それまでの共同研究、特別研究という枠組みはなくなり、演劇研究室と音楽舞踊研究室が共同で「伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究」を、音楽舞踊研究室が「日本伝統楽器の変遷研究」を、民俗芸能研究室が「民俗芸能の上演目的や上演場所の調査研究」を行うこととなったのである。

2001（平成13）年に始まった「伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究」では、伝承上の問題や社会的な趨勢などによって上演が希少となった演目や技法の調査研究を行った。主として行ったのは三番叟の技法報告を含む能楽の特殊上演に関する調査研究、歌舞伎戯曲の基礎文献の作成、文楽の裏方調査などで、最終年度の2006（平成18）年3月にプロジェクトの報告書を刊行した。そこでは「三番叟の調査報告」「人形浄瑠璃人形遣いへの聞き書き」「能『卒都婆小町』の旋律復元」「系統別歌舞伎戯曲解題索引」を報告したが、いずれも、いまだ他で行われたことのない調査研究ばかりである。例えば能『卒都婆小町』の復元は、2002（平成14）年11月、財団法人横浜市芸術文化振興財団横浜能楽堂や早稲田大学演劇博物館 COE との共同作業で、桃山時代の演出を復元上

演したもので、伝承の変化を舞台の上で具体的に示すことで、能楽界に少なからぬ波紋を呼び起こした。上演は1回限りであったが、成果は放送大学の特別講義として5年以上放映され、いまだに関心を呼び続けている。「系統別歌舞伎戯曲解題」は、渥美清太郎によって示された歌舞伎戯曲の俯瞰図だが、雑誌『芸能』に四半世紀にわたって連載されたもので、歌舞伎研究の基礎資料でありながら、今まで十全に活用されていなかった。その索引を作成した意義は大きい。報告書以外にも『芸能の科学』等に論文や聞き書き、三番叟に関する大蔵虎明自筆伝書の翻刻、芸能部所蔵の資料目録などを掲載し、夏期学術講座で発表した。



7 実演記録室での謡曲の録音風景

記録作成事業はこのプロジェクトに組み込まれることとなり、プロジェクトのタイトルに添って、秘伝・特殊上演を中心に継続している。能楽では橋岡久馬による乱曲「東国下」、近藤乾之助等による「勸進帳」を始めとする三読物と「関寺小町」など、上演が稀な演目ばかりである〔図7〕。また、1997（平成9）年に「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択された講談について、文化庁の委嘱を受けた「講談調査推進委員会」の協力依頼に基づいて2002（平成14）年度より宝井馬琴・一龍斎貞水師の記録作成を始め、2005（平成17）年度より部の事業として記録作成を行うこととなった。

このプロジェクトには「アジアとの研究交流」も組み込まれており、韓国国立文化財研究所などとの人的交流等を積極的に行っている。

「日本伝統楽器の変遷研究」は、これまで行ってきた楽器研究をプロジェクト化したもので、2000（平成12）年に着手した。このプロジェクトでは、全国の博物館や寺社へアンケートを送付し、それぞれが所蔵する楽器について調査を行った。楽器の文化的な価値については一般的な認識が低く、所蔵状況の全貌がまだ把握されていない。人知れず朽ちていく楽器が少なくない中、所蔵データベースの構築を第一の目標に掲げた。成果の一部として最終年度に『伝統楽器・所在データベース』を刊行し、ホームページ上で公開検索が出来るようになっている。このほか、主として管楽器の調査を行った。特筆すべきは、鎌倉時代に造立された仏像の胎内納入品の横笛の調査である。現時点で、納入された横笛は3管確認している。従来横笛の製作年代は確定出来なかったのが、仏像の造立年代をそう下らない時代に製作されたであろう横笛の存在は、正倉院の楽器に

つぐ古さを確定出来るものとして貴重である。このうち1管は現在の龍笛とほぼ変わらぬ寸法、音律であったが、他の2管は現存する横笛よりはるかに小さいもので、文献資料にあがったこともない未知の存在であった。遺跡から出土された笛資料とあわせて『芸能の科学』31号(2004年3月)で報告したほか、夏期学術講座や関連する学会でも報告を行った。このプロジェクトと関連して第25回国際研究集会を「日本の楽器」をテーマに行った(『資料編』173～175頁)。音楽学の立場以外に美術工芸史、図像学、博物館学など多彩な視点から楽器をとらえようという目的で開催し、好評を博した。

2001(平成13)年に始まった「民俗芸能の上演目的や上演場所の調査研究」では、現代における民俗芸能の保護と継承に役立つ実践的な課題に取り組むことを志して、「社会変化にともなって上演目的や上演形態が変化したと考えられる民俗芸能の調査研究」と、「本来の上演場所以外での公開の調査研究」を二つの柱として調査研究を行ってきた。前者については、主として近世後期以後の社会変化の影響を強く受けて伝承実態が変化してきたと考えられる民俗芸能の事例として、山口県長門地方の岩戸神楽舞、千葉県南房総地方のミノコドリ、岐阜県揖斐郡の太鼓踊等を取り上げて、実地調査に基づいて、芸態や伝承組織、地元における伝承の意味付けなどの変化を、時代ごとの社会的背景との関連で考察し、それぞれ『芸能の科学』などに成果を公表してきた。こうした調査研究は、現代に生きる文化財としての民俗芸能の保護を考えるにあたって、ややもするとスタティックな制度と考えられがちな「文化財保護」のあるべき姿を再考し、とくに無形民俗文化財としては避けることの出来ない「変化」の問題を、保護施策の実践との関連でどのようにとらえるべきかという課題に取り組むための試みであった。これらの事例研究を踏まえて、民俗芸能の変化について考察した論考を、本プロジェクトの報告書である『民俗芸能の上演目的や上演場所に関する調査研究報告書』に発表した。また後者については、無形民俗文化財としての民俗芸能の保護活動の一環として長い歴史を持つブロック別民俗芸能大会をはじめとして、文化財保護とは別の枠組みで始められ定着してきた「地域伝統芸能全国フェスティバル」などのイベント、さらには近年たいへんな盛況となり、地域の民俗芸能のあり方にも影響を与えている高知のよさこい祭りや北海道のYOSAKOIソーラン祭りに至るまで、いわゆる民俗芸能の現地公開とは異なる場所・異なる環境で開催されているイベントについて実地調査を行い、そのデータの集積と分析を行ってきた。その成果は『芸能の科学』や上述のプロジェクト報告書で発表しており、近年この種のイベントの社会学的研究が盛んになる中で、その基礎データを提供するものとして評価されている。

2006(平成18)年4月から、部の改組に伴って新たなプロジェクトが始まった。無形

文化財研究室と音声・映像記録研究室を中心とした「無形文化財の保存・活用に関する調査研究」と、無形民俗文化財研究室を中心とした「無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究」である。まだまとまった成果を発表する段階まで調査研究は進んでいないが、新たな紀要『無形文化遺産研究報告』に各自が論考、あるいは資料紹介を掲載する形で2006（平成18）年度分の調査報告を行っている。

3 シンポジウムと国際交流、研究会

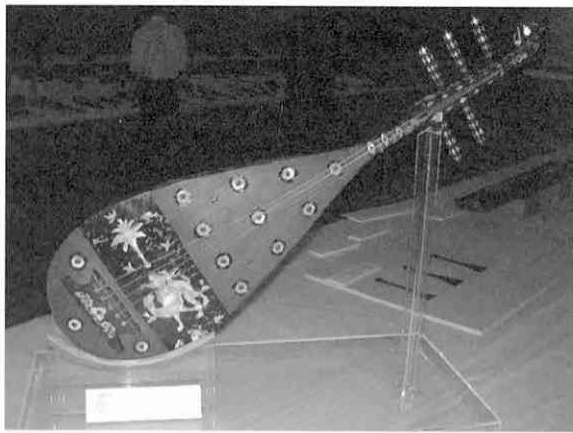
芸能部の担当で5回、無形文化遺産部として1回の国際研究集会をこれまで行ってきた。

始めは、柿木吾郎を中心に「伝統芸能の保存と発展」と題して1980（昭和55）年8月に行った。セッション1が「日本の民俗芸能」、セッション2が「太平洋周辺の音楽」、セッション3が「保存と発展」、セッション4が「日本の芸術音楽と楽器」というタイトルで、翌年、英語で報告書が刊行されている。

次に三隅治雄を中心に「アジアの仮面芸能」と題して1986（昭和61）年9月に行った。本田安次とフランク・ホフを基調講演者に迎え、セッション1は「鬼神と信仰儀礼」、セッション2は「獅子の舞踊」、セッション3は「仮面舞踊」というタイトルで、ネパール、韓国、タイ、チベット、インドネシアから専門家を招き、様々な仮面芸能についての討議が行われた。報告書は翌年英語で刊行したが、日本人向けには財団法人日本ナショナルトラスト刊行の『自然と文化』15号（1986年12月）に要旨を掲載した。

次に、羽田昶・蒲生郷昭を中心に「能の伝承と再生」と題して1991（平成3）年10月に行った。ジェームズ・ブランドン、横道萬里雄を基調講演者に迎え、セッション1は「伝承の諸相」、セッション2は「能と現代芸術」、セッション3は「欧米における能の受容」、セッション4は「復曲の意義と活動」というタイトルで、アメリカ、デンマーク、ポーランド、ドイツから研究者や実演家を招き、3日目には「能劇の座」との共催で世阿弥作の能「多度津左衛門」の復曲上演を鑑賞するなど、能楽界の現状に即したプログラムを組んだ。報告書は翌年、日本語・英語の混合版で刊行した。

次に、羽田昶・鎌倉恵子を中心に「歌舞伎―変遷と展望―」と題して1996（平成8）年11月に行った。ジェームズ・ブランドン、河竹登志夫を基調講演者に迎え、セッション1は「西洋との出会い」、セッション2は「江戸時代の歌舞伎」、セッション3は「近代の歌舞伎」、セッション4は「現代の課題」というタイトルである。欧米の研究者を招き、国立劇場の歌舞伎研修生の研修風景を見学するプログラムを組んだ。報告書は翌年刊行された。



8 2001年11月 第25回国際研究集会「日本の楽器—新しい楽器学へ向けて」で行われた東京国立博物館所蔵の楽器展示風景

次に、高桑いづみを中心に「日本の楽器—新しい楽器学へ向けて—」と題して2001（平成13）年11月に行った。笠原潔、ケン・ムーアを基調講演者に迎え、セッション1は「楽器学の現在」、セッション2は「図像学から見た楽器」、セッション3は「工芸品としての楽器」、セッション4は「楽器の修復と展示」というタイトルである。所内からは美術部の勝木言一郎、修復技術部の加藤寛

にも発表を依頼し、東京国立博物館の協力をいただいて博物館所蔵楽器の展観を博物館本館特別展示室で行った〔図8〕。当研究所のホームページをご覧になった秋篠宮妃が非公式で参加され、その応対におわれるなど、ハプニングもあるシンポジウムとなった。報告書は翌年、出版芸術社の協力で公開したが、市販は部として初めての試みである。

次は、無形文化遺産部となって初めての国際会議である。宮田繁幸を中心に「無形文化遺産の保護—国際的協力と日本の役割—」と題して2007（平成19）年2月に行った。基調講演は宮田のほか、愛川紀子を招き、中国、韓国、ベトナム、インドネシア、フィリピンの保護行政関係者を中心に、セッション1・2・3は「各国の無形文化遺産保護の現状と課題」、セッション4に「国際的協力における日本の役割」と題して、活発に討論を行った。今後の無形文化遺産部の課題に正面から向き合った国際会議である。

このほか、2001（平成13）年2月に、ユネスコ等との共催で人間国宝制度をめぐる無形文化遺産についてのワークショップを開催している。日本の文化財制度と諸外国のそれでは大きな格差があり、その間の協力をどのように行っていくか、今後の課題と言える。

芸能部を特色づけてきたのは、実演を伴う公開学術講座である。1967（昭和42）年に第1回が開催されたが、美術部の講座が研究発表の色彩を強くするのに対して、芸能部では一般への芸能普及という性格を基本に置いていた。講座開催のきっかけについては『東京国立文化財研究所20年のあゆみ』に詳しいので、そこから引用したい。

……公開講演会が実現に至るまでには、次のような段階があった。すなわち昭和31

年4月7日に第1回が持たれた「実演による芸能研究会」である。この時は博物館大講堂において八王子近郷の芸能が実演されたが、第2回は昭和33年5月17日に、同じく博物館大講堂において、西川流車人形家元連中との共催、東京新内連盟と民俗芸能の会の後援により、「車人形と民謡」の実演が催された。演目は新内による「三番叟」と「関取千両幟」、民謡「念仏唄と童唄」、説教節による「熊谷館騒動」桂姫門前払いの段であった。そうして第3回は昭和33年の開所記念行事として、芸能部が担当した10月17日の日琉舞踊の会である。産経新聞社と沖縄芸能同人会の後援を得て、祝儀物・男物・女物・通い物・娘物・打組物などに分類したおのおのについて、琉球舞踊と日本舞踊とを交互に演じて見せる豪華な研究会であった。

以後、開所記念行事として芸能部が担当したのは、昭和35年、桐竹紋十郎の文楽人形の実演を加えて、安原コレクション邦楽レコード購入の披露を行ない、昭和39年、「関東の神楽能」を東京文化会館ホールに催し、昭和42年、「黒川能」の講演と実演を行なった3回があること、付録欄に掲げたとおりである。そうして、昭和42年度より毎年朝日講堂を借用し、朝日新聞社の後援を得て公開学術講座を開くに至……

『芸能の科学』30号(2003年3月)に特集として組んだ「芸能部50年の歩み」の中で、横道萬里雄は「公開講座を始めた理由は、社会に貢献した方がいいと思ったからです。それと同時に研究所の名前が社会に知られた方がいい、ということもあった。美術部がやっていたからそれに倣ってのことだろうと思います」と発言している。芸能部の研究の特色を打ち出すように「〇〇の技法」と銘打ったタイトルが恒例であった。

大がかりだったのは第7回(1975年)で、「法会と芸能・その技法」というタイトルのもと、東大寺塔頭寺院の僧侶に大勢参加いただき、二月堂修二会の声明の実演が行われた。また、第9回は「狂言の技法」というタイトルで、狂言様式にアレンジした能「自然居士」が、野村万之丞・万作兄弟によって上演された。世阿弥によって様式化される以前の観阿弥作の能は、構想の点で狂言と共通性がある、という仮説に基づく上演である。古台本や古譜に基づく復元はその後もおりにふれ試みられ、第22回(1991年)の「声明の技法—「大懺悔」と「三十二相」を中心に—」、第27回(1996年)の「鬼狂言の復曲」、第36回(2005年)の「中世の寺院と芸能」など、演奏者の協力をいただいて実施された。

年1度のペースで開催し、36回を数えたところで部の改組となった。2006(平成18)年には文化財保護委員会が作成した録音記録を素材に、内容を一新して第1回を行ったが、今後は、東京以外の地方での開催も視野に入れながらさらに発展させていく方針である。



9 民俗芸能協議会

公開学術講座と並んで恒例行事となったのが夏期学術講座である。1975（昭和50）年に第1回が始まったが、『芸能の科学』30号の特集「芸能部50年の歩み」の中で三隅治雄は「夏期講座を池田さん〔池田弥三郎〕が発案して当初は早稲田と慶応の大学院生を対象に始めたのですが、そうすることで

我々の研究が学界に貢献できるという学問的な意味がある」と、その成り立ちについて発言している。大学において芸能をテーマにした講座が現在ほど多くなかった時代に、若手研究者を育成したい、という熱意から誕生した講座であった。

同じ様な趣旨で行われたのが能楽技法研究会である。横道萬里雄が中心となって所外の若手研究者に呼びかけ、1967（昭和42）年から3年間、合同研究を行って技法の知識を体得させた。その成果の一部は『能の囃子事』（音楽之友社、1990年）に結実している。1995（平成7）年には、羽田昶と高桑いづみが中心となって能楽技法講座を開催し、同じように若手研究者に能楽の技法を体得させる研究会を2年間行った。

夏期学術講座、技法研究会・技法講座には、現在活躍している能楽、もしくは芸能研究者が多数参加し、学界への貢献は少なくなかったと考えている。

1999（平成11）年3月に始まった民俗芸能研究協議会も、民俗芸能研究室の恒例行事となり、「学校教育と民俗芸能」「芸能用具の保存・修復・新調・活用」「民俗芸能の公開をめぐる」「無形民俗文化財の映像記録作成」など、無形民俗文化財としての民俗芸能が直面している課題をテーマに掲げて、文化財行政担当者・保存会関係者・研究者らが一堂に会し、テーマにもとづく事例報告と、それをもとにした総合討議を行ってきた。いずれも現代的・実践的な課題を取り上げており、また各地方自治体や民間団体、伝承者自身による民俗芸能の保護と伝承のためのユニークな取り組みを紹介し検討する場として、さらには民俗芸能の伝承に取り組む関係者が地域の枠を超えて交流する貴重な機会として定着してきたものと自負している。なおこの協議会は、2006（平成18）年度より対象を無形の民俗文化財一般に広げた「無形民俗文化財研究協議会」に引き継がれている〔図9〕。

また、この協議会から派生した活動として、2003（平成15）年度より映像記録作成に関する継続的な小協議会を、映像製作関係者や文化財行政関係者の有志の協力を得て開

催し、無形の民俗文化財の映像記録作成事業に関する情報の共有と手法の検討を積極的に行っている。この成果は、2007（平成19）年度に『無形の民俗文化財映像記録作成の手引き』（仮称）として刊行する予定である。文化財保護の手法としての無形の民俗文化財の映像記録作成事業についての実践的な指針はこれまでに存在しなかったものであり、大きな期待が寄せられていると感じている。

4 科学研究費補助金交付による研究

研究活動を行うために、科学研究費補助金制度に負うところが大きかった、ということとは先述したが、それ以降も状況は大同小異である。1975（昭和50）年度以降の主な研究、また分担者となった研究について述べる。

1975（昭和50）年度 仏事法要の様式技法の研究（一般）

1976（昭和51）年度 能楽技法の総合的研究（一般）

1977（昭和52）年度 日本民謡歌詞の総合的研究（総合）

1979（昭和54）・1980（昭和55）年度 論議会の研究（一般）

狂言の演劇における「型」の研究（一般）

1982（昭和57）・1983（昭和58）年度 南都諸寺の宗教儀礼に関する総合的研究（総合）

1984（昭和59）年度 遠隔地に残存する悔過会の調査研究（一般）

1984（昭和59）・1985（昭和60）年度 義太夫節における様式展開の研究（総合分担者として参加）

1984（昭和59）～1986（昭和61）年度 東アジア文化圏から見た沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究（一般）

1986（昭和61）～1988（昭和63）年度 醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究（総合 分担者として参加）

1987（昭和62）～1988（昭和63）年度 仏教典礼に基づく法華経信仰の研究（一般）

1993（平成5）・1994（平成6）年度 雅楽古楽器の総合的調査研究（総合）

1997（平成9）～1999（平成11）年度 地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究（一般）

1998（平成10）～2000（平成12）年度 新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ——大神楽から花祭りへ——（一般）

2001（平成13）～2003（平成15）年度 古楽器の形態と音色に関する総合研究

2001（平成13）～2004（平成16）年度 大惣旧蔵本を中心とする歌舞伎台帳の書誌的研究

2002（平成14）・2003（平成15）年度、2004（平成16）・2005（平成17）年度 科学
技術を応用した近世芸能の基礎的研究（特定領域研究）

2002（平成14）～2005（平成17）年度 民俗芸能における文化財指定の及ぼす影響に
関する調査研究

2005（平成17）～2007（平成19）年度 大規模イベントにおける民俗芸能・祭礼の利
用の実態とその影響の調査研究（若手研究）

日本学術振興会研究費 インドネシア音楽の民族音楽的研究（国際共同）

このうち、特筆すべきは仏事法要、宗教儀礼に関する調査である。補助金を得たことで、前述したように天台・真言・華嚴・法相、聖徳・浄土・時宗・黄檗宗など諸宗派に及ぶ法会の実態調査を行うことが出来た。特に報告書は刊行していないが、『芸能の科学』18・19号（1990年3月・1991年3月）に分載した佐藤道子「悔過法要の形式—成立と展開—」などに成果は公表されている。

「義太夫節における様式展開の研究」は、井野辺潔（大阪音楽大学教授）を研究代表者とするもので、これまで漠然と指摘されてきた「風」（演出）の違いを具体的な音の差異としてとらえる試みである。報告書は1986（昭和61）年にアカデミア・ミュージックより刊行された。

総合研究では蒲生郷昭が研究代表者となった「雅楽古楽器の総合的調査研究」の意義が大きい。これまでの科学研究費補助金交付研究は、芸能部の研究を補助する意味合いが強かったが、この研究が契機となって新たなプロジェクトが発展した、という点でこれまでの研究とは経緯を異にしている。

以上、芸能部の50年のあゆみをざっと追ってみた。文化庁の附属機関として、行政に直結した研究のみに従事してきた、とは言いがたい。しかし、行政から少し離れた立場を取っていたからこそ寺事のように行政の指定制度になじまないけれど無窮の文化的価値を有するものの研究を行えた、とも言えよう。昨今は、行政に資する研究がより一層強く求められるようになっている。選定保存技術の調査、文化財記録作成についての地方行政へのアドバイス、近隣諸国との連携による無形文化遺産の保護、など無形文化財の基礎的な研究を踏まえてさらに実際的な研究を行っていく所存である。

3 保存修復科学センター

保存修復科学センターは、2007（平成 19）年 4 月に、保存科学部と修復技術部が統合して設立された。当センターは、自然科学的手法を応用し保存修復に関する科学研究を強力に推進するナショナルセンターとして先端的・総合的調査研究を行うことを目指しており、より充実した目標に向かって調査研究を進めている。

以下、1952（昭和 27）年に発足した保存科学部、次いで 1973（昭和 48）年に保存科学部内から新設された修復技術部について、それぞれの歴史を振り返ることで保存修復科学研究の基礎を固め、より一層の飛躍の糧としたい。

保存科学部

はじめに

保存科学部は1952（昭和27）年に発足した時は、化学、物理、生物（現在は生物科学）の3室で構成されていたが、1962（昭和37）年に修理技術研究室が出来て1973（昭和48）年に修復技術部となって独立するまでの11年間は4室となった。また1952（昭和27）年の発足当初から1973（昭和48）年に修復技術部が出来るまでは、保存科学部の中で合成樹脂を用いた絵画の剥落止め、建造物部材の保存修復、考古出土品や遺跡の保存処置などが研究されていた。その頃の修復技術に関する研究内容については、1973（昭和48）年に発行された『東京国立文化財研究所20年の歩み』の保存科学部の項に詳しい記載があるので、そちらにゆずることとして、ここでは化学、物理、生物の研究室が行ってきた研究について述べる。

研究を組織や予算の枠組みの変化に従い、おおよそ次の年代に分けて述べていく。

第1期 1952（昭和27）年～1966（昭和41）年

主に一般研究費で調査研究を行った時期

第2期 1967（昭和42）年～1988（昭和63）年

特別研究費でプロジェクト研究を行った時期

第3期 1989（平成元）年～2000（平成12）年

中長期研究計画に従って研究を行った時期

第4期 2001（平成13）年～2006（平成18）年

独立行政法人化以降

1 第1期 1952（昭和27）年～1966（昭和41）年

東京文化財研究所の設立に伴い、それまで文化財保護委員会建造物課の下にあった保存修理部門が保存科学部となり、化学、物理、生物の3研究室がおかれた。部長は建造物課長が兼務し、化学研究室はそれまで化学系研究員2名であったのが、技官1名、技術員1名、臨時職員1名となり、物理研究室は当初、非常勤研究員1名だったが、同年10月に技官1名の定員が付いた。生物研究室は専任研究者は置かず、委託で調査を行っ

ていた。その後、生物研究室には1958（昭和33）年から非常勤1名が配置された。

発足当初は東京国立博物館地下の修理室を研究室としていたが、1953（昭和28）年4月に木造倉庫を改造して、化学・物理・生物の各研究室や実験用暗室、写真暗室をも設けた。1962（昭和37）年3月には鉄筋コンクリート造2階建の建物が建ち、研究室、実験室の他、アトリエ、試験器室、図書室、会議室が設けられた。この時、施設の拡充に併せて修理技術研究室が室長以下3名の人数で新たに設置され、化学研究室も技官1名が増員されたので、保存科学部は部長（兼任）以下技官10名、非常勤2名となった〔図1〕。



1 保存科学棟での実験の様子

1959（昭和34）年から、文化財の所有者・管理者から委託を受けて調査研究を行う受託研究が始められ、その報告として「受託研究報告」が発行された。しかし、それ以外の研究成果の公表は1951（昭和26）年に発刊した古文化資料自然科学研究会（現、文化財保存修復学会）の機関誌『古文化財之科学』に依っていたために、保存科学部独自の機関誌として、1964（昭和39）年から「受託研究報告」を含めて『保存科学』が年1回発行されるようになった。この頃の研究は一般研究費と受託研究費で行われて、特に一般研究については年限を切って行われていなかったので研究テーマごとに細かく分けて述べることが出来ない。そこで研究を大まかに、保存環境に関する研究、材質・構造・技法に関する研究、生物劣化に関する研究、に分けて概要を述べる。

保存環境に関する研究

保存環境の研究は「室内環境の調査、適正な環境のための条件の検討」として、保存科学部発足当初から取り組まれた。しかし温湿度に関する研究はそれより早く、文化財保護委員会建造物課の下にあった頃よりさらに前の、国立博物館保存修理課保存技術研究室時代の1948（昭和23）年より開始されている。当時は東京国立博物館内外での測定を基に、収蔵庫・陳列ケース等の保存環境上の効果を立証している。また1950（昭和25）年には朝日新聞文化事業団と中尊寺による調査「中尊寺御遺体学術調査」の一環として中尊寺金色堂の須弥壇中の湿度を研究し、かなりの高湿であることを報告した。保存科学部が発足して後の1955（昭和30）年になると科学研究費「古美術品の変色に関する研究」で、恒温恒湿装置を設置して人工照明による染織品の退色に関する研究を進

めるようになった。これに関連して、蛍光灯から出ている紫外線による資料の退色を防ぐために、1958（昭和33）年に紫外線吸収剤を蛍光灯の管壁に塗布して、その効果を検証し、やがて蛍光灯を製造しているメーカーと協力して紫外線を出さない博物館・美術館用の蛍光灯市販へとつながっていった。

三重県四日市で石油化学コンビナートから排出される大気汚染物質により、ぜんそくなどの公害病が1960（昭和35）年頃から多発して、大きな社会問題となったが、文化財の保存環境の立場からも大気汚染は重大な問題で、汚染因子により直接影響をこうむって変色や腐食を起こしている例が出て来たため、社会問題となるより早く1950年代から研究を行った。1956（昭和31）年度に正倉院周辺道路が、三笠温泉、若草山に上る観光道路に通ずることになり観光バス等の交通量が増大し、正倉院御物への影響が懸念され、議会文教部会の問題となった。そのため保存科学部は、これらの汚染によって、正倉院御物が影響を受ける可能性があるか否かを2年にわたり調査を行った。構内数カ所に百葉箱を設置し、その中に金属、顔料の試片を置き、それらが受ける影響を測定し、汚染の分布を判定し、汚染因子の分析に努め、同時に保存科学部構内においても汚染度の指標として亜硫酸ガス濃度の測定を行った。この調査を契機とし、以後は東京国立博物館を中心とする上野周辺から始めて、各地の汚染度の測定に着手した。

1960（昭和35）年には岡山県西大寺市西大寺観音院の重要文化財梵鐘について調査依頼を受け、調査した結果、鐘の表面から内面まで紫がかった暗青色の異様な色と変わっており、調査の結果、硫化水素による硫化であることが判明した。原因については、寺の脇を流れる川に上流の板紙工場のパルプ廃液が流入し、澱んで醗酵して硫化水素の発生を見たことがわかり、工場側が浄化槽を設置するなどの改善処置がとられた。その後1961（昭和36）年には鎌倉大仏、箱根美術館、1962（昭和37）年浅草寺、1964（昭和39）年横浜三溪園、東京国立博物館法隆寺宝物館内、京都国立博物館、清水寺、宇治平等院などにおいて観測点を設け、測定が行われた。

大気汚染の研究を開始した頃の1957（昭和32）年に、戦後初めての国宝重要文化財の欧州巡回展が行われた。その当時、文化財輸送は海上輸送であったが、熱帯地を通過してまた温暖地へ入る航路では密閉した文化財梱包の中は乾燥したり、あるいは文化財の木質部などから梱包内に吐き出された水分が、温度が下がった時に急に元に戻れず、空気相の相対湿度が異常に高くなり時としては結露を起こすことがあった。これに対して、吸湿容量の大きい吸湿剤（ゲル）に予め相対湿度55～60%の空気に平衡するだけの水分を吸わせたものをかなり多量に同封して、密閉梱包して相対湿度はほぼ恒常に保つという方法が始めて試みられた。その後、文化財の輸送は殆んど空輸になってきたので



2 梱包された仏像の蒸れの監視



3 調湿剤の開発

1966（昭和41）年には空輸についての研究を行い、空輸では温度湿度変化に加えて圧力変化も起こり、密閉梱包でもかなり梱包外からの空気の出入も起こって、変化も急であることなどが明らかになり、以後、文化財の輸送にはこの方法が標準として採用されるようになった。この考案は国の特許となった〔図2・3〕。

材質・構造・技法に関する研究

非破壊分析の一つである放射化分析を試みたのは1955（昭和30）年で、理化学研究所の協力を得て、同所のサイクロトロンを用い金沢城石川門、鉛瓦中の銀、朝鮮昌寧出土の剣の飾金具、金張中の銀の検出に応用したのが最初である。金銀製品（金張、金泥など）、ガラス小玉について分析を行ったが、多成分系、大きさ、形状に制約があり、小型か微小な試料のような特殊な場合とか、微量成分である不純物に着目して分析を行う時に活用すべき方法であることがわかった。

非破壊的分析法として蛍光X線分析法を、青銅鏡、醍醐寺五重塔相輪に応用し検討し始めたのは1957（昭和32）年のことである。当時は依頼分析、装置の借用などにより分析していたが、1961（昭和36）年、永仁銘瓶子をはじめとする「古瀬戸調査」において、釉薬分析に応用し、瓶子などの真贋の判定に有力な材料を得ることが出来た。これによって装置、分析法の有効性が認められ、1961（昭和36）年度に蛍光X線分析装置が購入設置された。その後1964（昭和39）年度には、X線回折分析装置が設置された



4 X線調査撮影室（1962年）

〔図4〕。

美術部では前身の美術研究所時代の1949（昭和22）年から科学研究費により光学研究班を組織して絵画と木彫像などのX線透視写真による技法的調査が行われていたが（168～169頁参照）、保存科学部も発足以来、これに協力して研究を行った。特にコバルト60よりのガンマ線による金属製品の透視撮影は、放射性同位元素の文化財方面への最初の利用として注目された。当時、高压X線の利用の便がなく、金銅仏の内部構造を行うことは出来なかった。そこで1953（昭和28）年に科学研究所及び富士写真フィルム株式会社の協力を得てコバルト60のガンマ線による小金銅仏の透視試験を行い、活用の有効性を確めた上で、東京国立博物館と共同し法隆寺献納宝物四十八体仏の透視撮影を行った。その結果は金銅仏内部構造を明らかにし、製作技法史に寄与する点が多く、また一方内部欠陥等も分かり保存上注意すべき点などが明らかとなった。その後、保存科学部でコバルト60線源を所有保管するために、1957（昭和32）年に地下貯蔵のための不燃性の収蔵庫を設け、放射性同位元素関係の作業所としての認可を科学技術庁から得て、1960（昭和35）年から研究を行った。

1954（昭和29）年には奈良薬師寺の薬師三尊のX線透視撮影、関東地方では1956（昭和31）年深大寺、竜角寺などで仏像のX線透視撮影を行った。このうち本尊については1955（昭和30）年から翌年にかけて台座修理が行われたので、改めて台座についての構造的欠陥などを透視によって調査した。その他、興福寺東金堂で1954（昭和29）年月光菩薩、1955（昭和30）年法隆寺宝物殿の諸金銅仏についても調査した。また鎌倉大仏の修理に際しては1959（昭和34）年度と1960（昭和35）年度の2度にわたり大規模な透視撮影を行った。この結果から材質中の気泡、亀裂、鑄込つなぎ部の欠陥、壁厚推定値などが分かり、修理方針の樹立に寄与した。法隆寺においては1962（昭和37）年から中門金剛力士像の修理が行われたが、そのうち塑像阿形像についてX線透視とガンマ線透視の両方を行った。

この他、木彫像や建造物の修理に際しての調査のためのX線調査も行った。1961（昭和36）年には中尊寺金色堂の修理問題がおこった。金色堂はこの時既に木質部の腐朽が著しいことは判明しており、また覆堂の屋根が下がって金色堂を圧している状態であった。創建時にそもそも組上がった後に漆をかけたものか、各部材を漆で装飾した後組立てられたのかで解体修理が容易か否かが決まってくるために、現場での詳しい実物調査が必要となり、構造部材に対するX線透視調査を1961（昭和36）年秋に実施した。その結果、斗組みの様子、巻柱の構造などが明らかとなり、解体可能の結論が出されて3年余にわたり解体修理が行われた。特に内陣漆芸部材はすべて当研究所に運び込



5 中尊寺金色堂透視調査 (1961年)



6 欧州巡回日本古美術展への協力—殺虫処理 (1958年)

み、螺鈿の復原補足、沃地の保存と修復など漆芸技法による修理のすべてがアトリエで行われた。その間色々必要とされた試験、調査の多くが保存科学部によって行われた。解体部材のうち4本の巻柱は特に内部木質の腐朽の激しいものであったのでアトリエにおいてもう一度精密なX線透視を行って腐朽を調査し、4本のうち内陣後部2本は新しく製作してとり替えることになった〔図5〕。

生物劣化に関する研究

生物被害防除に関する研究は、1952(昭和27)年度より建造物の腐朽被害調査、古材の材種鑑定などの委託調査から始まった。木材腐朽菌による被害の調査は、京都：1952(昭和27)年大報恩寺本堂及び鳳凰堂、奈良：1952(昭和27)年十輪院、極楽院、法華寺、1961(昭和36)年薬師寺金堂、栃木：1959(昭和34)～1967(昭和42)年日光東照宮、二荒山神社、輪王寺などで行われた。絵画の被害調査に関して、1961(昭和36)年薬師寺：吉祥天像、1967(昭和42)年法隆寺：焼損壁体をはじめ多くのものを手がけた。また装飾古墳の壁面や発掘後露出保存されている住居跡に発生する微生物や空中微生物の調査も、多くの文化財展示収蔵施設で行われた。

食害昆虫に対する殺虫処理は、1952(昭和27)年頃より各社寺の宝蔵、経蔵内の収蔵品を一括して燻蒸した。初期の頃の主な社寺は、1952(昭和27)年醍醐寺、妙法院、高野山、西本願寺、東福寺、教王護国寺、1955(昭和30)年増上寺、1956(昭和31)～1957(昭和32)年浅草寺、1957(昭和32)年輪王寺、1960(昭和35)年明王院などである。また個々の対象については殺虫室、収蔵庫などで天幕燻蒸を実施した。殺虫剤としては初期には、クロルピクリンを使用した、その後臭化メチルが使用された〔図6〕。

2 第2期 1967(昭和42)年～1988(昭和63)年

この時期に組織としては、1972(昭和48)年度に保存科学部修理技術研究室が修復技術部として独立し、保存科学部は発足当初と同じ化学、物理、生物の3研究室となり、部長以下、化学研究室が研究員3名、物理研究室が研究員2名、生物研究室は研究員1名と調査研究員(非常勤)1名で、あわせて研究員7名、非常勤研究員1名の構成となった。

始めに述べたように、それまで研究経費は一般研究費と受託研究費、科学研究費の3種類であったものが、1967(昭和42)年になって新たに特別研究費の枠が設けられ、特定の研究テーマを設けて予算がつけられるようになった。その最初が1968(昭和43)年度から1969(昭和44)年度まで行われた特別研究「陳列室並びに収蔵庫内の湿温度及び汚染空氣が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究」であり、その後、「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」(1971～1973年度)、「軸装等の保存及び修復技術に関する科学研究」(1974～1976年度)、「石造文化財の保存・修復に関する科学研究」(1977～1984年度)、「金属文化財の材質・技法及び保存に関する研究」(1985～1988年度)とテーマを変えながら実施された。

受託研究も、それまでは修復技術、特に彩色の剥落止めがほとんどであったが、この時期から保存環境や材質調査についての受託研究が見られるようになった。例えば、受託研究「日光東照宮陽明門両袖外壁の調査」(1971～1972年度)、「加曾利貝塚の遺跡保存」(1971～1975年度)、「中田横穴保存状態調査研究」(1972～1974年度)、「虎塚古墳石室彩色壁画保存のための調査研究」(1973～1974年度、1976～1983年度)、「国宝・重文日光社寺文化財保存の研究」(1974～1986年度)などが、その代表的なものである。1972(昭和47)年3月に高松塚古墳壁画が発見され、文化庁の依頼を受けて保存科学部の研究者は環境調査に携わることとなったが、中田横穴と虎塚古墳に関する受託研究は、高松塚古墳の調査と重なるようにして研究が進められた。

高松塚古墳の発見と並んでこの時期には世間の注目を浴びた出来事があった。1974(昭和49)年4月から6月まで東京国立博物館で開催された「モナ・リザ展」で、この展示に保存科学部が協力した。展覧会ではケース内の湿湿度を一定に保つために、当時、主に輸送に用いられていた調湿剤を備えた密閉展示ケースが初めて設計・使用された。展示に際してフランス側から示された条件は、温度は18～21℃、相対湿度は50±10%、照度は200ルクス以下で紫外線を含まず温度上昇も起こさないことという条件であった。これを満たすためにケースの壁は25mmと50mmのガラスウールを含む5層

の断熱構造、正面は二重ガラスとし、床下に相対湿度50%に調整した調湿剤を置いた。また照明は紫外線を出さない蛍光灯と補助光源として熱線吸収フィルターをつけた白熱灯を用いた。その結果、非常に大勢の観客が押しかけたにもかかわらず、「モナ・リザ」の入ったケース内は展示期間中、大変安定した環境が得られ、ここで用いられた展示ケースが、現在広く利用されている密閉展示ケースのモデルとなった〔図7〕。



7 「モナ・リザ展」準備（1974年4月東博）

文化財の保存修復に関する研究は、この当時までは国内の文化財を対象にしたものに限られていたが、この期の終わり頃に初めて政府を通じた国際研究交流が行われるようになり、現在の活発な国際研究協力へとつながっていった。まず1984（昭和59）年の日中両国外相会議、1985（昭和60）、1987（昭和62）年の日中文化交流政府間協議において、敦煌莫高窟壁画の保存に関する日中の協力が約束された。それを受けて1986（昭和61）年度から政府開発援助（ODA）予算として特別研究「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」が認められ、1987（昭和62）年度からは科学研究費として国際学術研究「中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究」が採択され、中国との国際研究協力が始まった。また1988（昭和63）年に文化庁とアメリカ・スミソニアン研究機構との間で覚え書きが交わされ、両者の機関間で文化財保存の分野で共同研究が開始され、当研究所がとりまとめを行うこととなった。これらの研究内容については、次の第3期の項で述べることとする。この他に当研究所の事業ではないが、国際文化財保存学会（IIC、The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）の京都大会が1988（昭和63）年9月に京都の国際会議場で開催され、保存科学部の研究者は組織委員会、事務局等において運営に尽力し、この国際会議が保存修復分野での広範囲な国際研究交流の始まりとなった（口絵掲載）。

第2期には、文化財の科学研究に関する科学研究費特定研究が2度にわたって行われた。最初が「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究に関する総括」（1976～1978年度）、次が「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学に関する総括」（1980～1982年度）である。計画研究の中には保存科学部が中心となって、研究を進めたものがある。例えば後に述べる「新設展示施設および収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法」（1976～1978年度）や「文化財の虫徴害防除法の開発」（1977～1978

年度)がそうである。その他、研究分担者として研究を行ったものもあり、赤外線ビジコンを用いた壁画の研究がその例として挙げられる。従来用いられていた赤外線フィルムに代わって、赤外線ビジコンを用いた調査手法は赤外線リフレクトグラフィと呼ばれ、保存科学部ではいち早く1974(昭和49)年度に機器を購入して研究を開始し、宮城県多賀城跡から出土した漆紙文書に書かれた文字を初めて発見していたが、この特定研究では法界寺阿弥陀堂の四天柱絵の調査に応用して、燻煙で黒化して肉眼では見えない図様を明らかにした。この手法は、後に二次電子を利用したX線撮影法であるエミシオグラフィと併せて、鶴林寺太子堂四天柱絵の調査などにも応用されて成果を上げた。

この時期にはまた、鉛同位体比測定による青銅器の産地推定の研究が始められた。1976(昭和51)年度から1977(昭和52)年度に科学研究費を受けて「同位体分析による古文化財の研究」が行われ、中国、日本の青銅鏡や古銭、方鉛鉱などの鉛同位体比を測定し、日本と中国の鉛では同位体比が異なることを明らかにした。この研究は以後も一般研究として進められた。その結果、中国の青銅鏡も前漢と後漢・三国時代では鉛同位体比が異なっており、前者は華北、後者は華中から華南で産出したものと考えられること、日本の青銅鏡は弥生時代のものは前者、古墳時代のものは後者に対応していることなどが明らかになった。また朝鮮半島で製作されたと考えられる青銅製品は、以上のものとは異なる鉛同位体比が得られ、青銅製品の産地推定手法として鉛同位体比分析は重要な位置を占めるに至った。

1971(昭和46)年には第1回の文化財保存修復研究協議会が開催された。この会議は文化庁文化財保護部三課の担当官、東京国立博物館、東京藝術大学その他の保存修復に関わる関係者が集まって、研究発表と協議を行う会で、第1回は「木材を素地とした文化財彩色の保存と修復」というテーマの下に、板絵、彫刻彩色、建築彩色に関する研究討議が行われた。この時期はまだ学会活動などでの研究者交流機会も少なく、特に美術史・建築学・保存科学などの学際交流の視点もなかった時期であり、研究促進のための研究情報把握や専門研究者間の充実した討議、研究成果のすみやかな公開を通して、図らずも重要な専門研究者交流の場を提供することとなった。この研究協議会は2005(平成17)年まで毎年開催されたが、学会活動の充実や各プロジェクト単位での研究会が盛んになってきたことから、その役目を終えた(各回のプログラムについては、『資料編』187～202頁参照)。また新年度事業に関する文化庁との打合せの場として、1971(昭和46)年春から文化庁文化財保護部長、文化財鑑査官、庶務課長及び記念物課、美術工芸課、建造物課の各課長や担当官の出席を得て、文化財保存科学懇談会が年度末に毎年開催されるようになった。この懇談会は1990(平成2)年春頃まで続いた。

1984（昭和59）年度には、博物館・美術館の学芸員を対象とした「保存担当学芸員研修」が始まった。この研修は博物館・美術館等の施設が各地に建設され、燻蒸室など保存修復関係の施設が整備されるようになったが、学芸員が保存に関する知識を習得しようとしても、適切な学習の場や教材がない状況であることを受けて、文化財の科学的保存に関する知識や技術について研修を行うことを目的に始められた。研修期間は当初から2週間で、第1回目は12月に行われたが、2回目以降は7月に開催されるようになり、現在まで続いている（『資料編』224～227頁）。研修参加者は初めの頃は20名前後であったが、現在は毎回30名程度の参加者となり、研修修了者は2005（平成17）年度で約500名となった。現在ではこの他に、研修修了者に対するフォローアップ研修や、地域の博物館協議会などの協力を得て各地で実施する1日程度の資料保存地域研修（1998年度から）も行われている（『資料編』216～217頁）。

特別研究「陳列室並びに収蔵庫内の湿湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究」

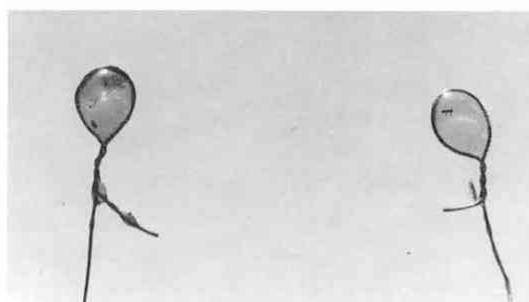
1960年代後半になると文化財の展示・収蔵施設が各地に建設されるようになった。それらの建物は防火の観点から多くが鉄骨コンクリート造りとなっていて、本堂や本殿が木造の寺社も収蔵庫はコンクリートで建てられた。それまで長い年月、木造の建物の中に置かれていた文化財がコンクリート造りの収蔵庫に移された時に、保存の面からどのような点に気をつけるべきか明らかにするために、この特別研究は1968（昭和43）年度から1969（昭和44）年度まで実施された。

当初は、1965（昭和40）年前後に建設された鎌倉（杉本寺、青蓮寺）や京都（高山寺、大覚寺、妙蓮寺、知恩院、平等院）にある寺院収蔵庫や、当研究所の庭に建設した寺院収蔵庫の1/2模型などで温湿度や空気汚染などの測定を行った。また最後の年には「正倉院展」に併せて奈良国立博物館でも測定した。研究の結果、コンクリートから発生する「アルカリ」が室内気温に依らず壁温に依ることなどがわかったが、それが何であるかを明らかにするところまでは至らなかった〔図8〕。

この特別研究に関連して少し後になって、先に述べた科学研究費



8 アルカリ因子に関する最初の報道
（昭和40年1月29日）



9 初期のアマニ油試験片

「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究に関する総括」(特定研究)の中で「新設展示施設および収蔵庫内の汚染現象と収蔵文化財への影響とその防除法」というテーマで研究が行われた。新設のコンクリート造りの施設の中で「枯らし」が不十分な時期に使用を開始する

と、コンクリートや内装材から発生する揮発成分により収納品に変退色を起こす恐れがある。このような室内汚染因子の測定法や文化財への影響評価、防除法の確立を目的として研究が行われた。研究の結果、コンクリート庫内のアルカリ雰囲気、コンクリートから放出されるカルシウムが大きく寄与していることや、室内汚染の判定に pH 試験紙の一種である変色試験紙やアマニ油含浸紙などが利用出来ること、アルカリ汚染因子の発生量はコンクリート打ち込みから半年ぐらいが大きく、その後時間と共に減少し、ほぼ3年でその発生量は安定して、比較的良好な環境状態を示した。またアルカリ因子の減少に強制換気は有効であるが、エアクリーナーは効果が低く、特殊なフィルターや吸収剤の選択、組み合わせが必要なのことがわかった〔図9〕。

特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」

書院造りの建物内に長年置かれてきた襖絵などが、観覧者の増加や大気汚染の影響を受けていないか、将来のことを考えてもっと良い保存環境の場所へ移す必要があるかといったことを調べるために、この研究は1971(昭和46)年度から1973(昭和48)年度まで3年間行われた。調査は京都(二条城、西本願寺、智積院、南禅寺、妙蓮寺、天球院)を中心に行われた。調査の結果、温湿度、光、大気汚染、塵埃など建物内の環境は決して良いものではなく、既にかかなり弱化していると考えられる襖絵にとっては、別の場所例えば収蔵庫へ移すなど、抜本的な環境の改善が必要であると結論された。この他、緑青焼けの現象についても研究を行った。

特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学研究」

掛け軸、巻物に仕立てられた絵画や書跡の保存と修復を科学的な観点から研究しようとするもので、1974(昭和49)年度から1976(昭和51)年度まで3ケ年にわたって保存科学部と修復技術部の共同研究として実施された。

研究の内容は、(1)表具技術の記録、(2)和紙の中の微量元素、(3)表具用裏打紙の

走査型電子顕微鏡による撮影、(4) 表具における紙の接着断面の光学顕微鏡による観察、(5) 裏打ちに伴うかさ比容変化と裏打紙の湿度による伸縮、(6) 打刷毛による接着促進効果、(7) 表具用化学糊について、(8) 日本画中における力学的諸現象、(9) 保存箱内の温湿度変化、(10) 和紙と虫害、(11) 防虫・防黴剤の薬効と材質への影響、(12) 漉嵌機の和紙修理への応用、(13) 電子線による補修用絹の劣化促進処理、と軸物の材料に関する研究だけでなく、伝統技術や修復材料などに関することまで多岐にわたった。中でも表具技術の記録は、それまで表具の全行程を文章に表したものがなかったのも、海外からも注目され、以後の研究のための基礎的資料となった。



10 軸装等の保存及び修復に関する研究

また欧米で文書の修理に利用されていた漉嵌機を、和紙にも応用して虫害で穴だらけになった文書の修理に利用しようという研究は、その後も進められて現在では文書などの修復に利用されている〔図10〕。

特別研究「石造文化財の保存・修復に関する科学的研究」

この研究は、当時、白杵・熊野の磨崖仏や石塔、石造建造物など石造文化財の早急な保存対策が要請されていたことから、1977（昭和52）年度から1979（昭和54）年度まで3ヶ年行われ、引き続いて1980（昭和55）年度から1984（昭和59）年度まで特別研究「石造文化財—石及び類似材料の保存と修復に関する科学的・技術的研究」として5ヶ年、通算して8年間実施された。

研究の内容は(1)凍結劣化とその対策、(2)塩類風化とその対策、(3)生物劣化とその対策、(4)保存修復処置に関する基礎実験、(5)保存修復処置の歴史と現状に分けられた。中でも凍結劣化については、福田正己（北海道大学低温科学研究所）の協力を得て、岩石の超音波伝搬速度と空隙率から凍結破壊に対する抵抗度を調べ、北海道小樽市や余市町、福島県小高町など石造文化財のある地域で冬季気温変化を測定することにより、凍結破壊の危険度を評価することが出来た。凍結劣化対策としては、凍結破壊が起きる原因である、もろい岩質、水分供給、低温の三つの要素を改善することが考えられた。もろい岩質の改良については、幾種類かの合成樹脂を比較した結果、撥水性シラン（SS-101）の含浸処置が有効であることがわかり、福島県小高町の薬師堂石仏の修理などに応用された〔図11〕。



11 石仏の凍結破壊への対策の研究

この特別研究は1980（昭和55）年度から1982（昭和57）年度まで行われた、科学研究費「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」（特定研究）の総括班に設けられた「石造文化財の劣化に関する研究」班と密接な関係を持って進められた。この研究班では、千葉県館山市大福寺磨崖仏をフィールドとして、大学及び当研究所の研究者や修理関係者が、研究会や塩類風化の調査などを行った。

特別研究「金属文化財の材質・技法及び保存に関する科学研究」

金属文化財の保存・修復のために、時代による材質の変遷や環境の変化と製作技法、耐食性などについて1985（昭和60）年度から1988（昭和63）年度までの4年間にわたって行われた。東京国立博物館所蔵の法隆寺四十八体仏を初めとする金銅仏のガンマ線撮影や蛍光X線分析、プラズマ発光分析による微量金属元素の分析、青銅製品の鉛同位体比測定などを行った。この特別研究と関連して1985（昭和60）年度から1987（昭和62）年度に鳥根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐸・銅矛の調査が行われたが、発掘された銅剣は総数358本にのぼり、どこで製作されたかが考古学的に大きな問題となった。鉛同位体比分析からは、銅剣の大部分は華北の鉛を含むが、朝鮮半島の鉛を含むものが1本あり、華北の鉛に朝鮮半島の鉛が若干混ざったものが少しあるという結果が得られた。このことから朝鮮半島産の鉛を含む1本を除く後の357本は、弥生時代の九州・近畿地方で一般的に使われていた大陸産の青銅原料を用いて、荒神谷又はその付近で鑄造されたと推定された。

受託研究「加曾利貝塚の遺跡保存研究」

千葉市にある加曾利貝塚遺跡の住居址と貝層断面の保存に関する研究で、1971（昭和46）年度から1975（昭和50）年度まで行われた。住居址と貝層断面の展示施設はいずれもコンクリート製の覆屋で、表土層の合成樹脂による処理、土壌に含まれる塩の析出の制御、カビの防除が



12 加曾利貝塚保存委員会の視察

課題となった。分析の結果、析出物は土中に含まれる多量の貝殻などに起因する硫酸カルシウムや炭酸カルシウムなどで、貝層断面では覆屋内の湿度を上げて地表面からの水の蒸発を阻止することが実験された。その結果、析出物は減少したが結露やカビ発生の問題が生じた〔図12〕。

受託研究「虎塚古墳石室彩色壁画保存のための調査研究」

茨城県勝田市（現、ひたちなか市）にある虎塚古墳では、1973（昭和51）年8月の発掘時に石室を開口する前に石室内部の温湿度や空気組成、微生物の調査を行うことが出来、その後も石室内の環境について受託研究が1983（昭和58）年度まで（1975年度のみ一般研究で実施）継続して行われた。石室は発掘後いったん埋め戻されたが、その間も測定用の管を通して石室内の温湿度等の環境データが測定され、石室内の気温は年間平均15℃で変動は±2℃、相対湿度は92～98%であることなどがわかった。1978（昭和53）年に仮設保護施設を建設し、再発掘が行われ、一般公開が実施されたが、この際の石室内環境変化を調査し、石室内環境の保全に努めた。また1980（昭和55）年には公開保存施設が建設され、以後、春と秋の2回一般公開が行われるようになったが、施設の設計と公開時の環境管理について調査結果を基に助言を行った。

受託研究「国宝・重文日光社寺文化財保存の研究」

日光市山内には、国宝・重要文化財に指定された建造物を初めとして多数の建造物が保存されているが、山地であるために建造物はきわめて厳しい保存環境に置かれていて、修理が完了してそれほど年数が経過していないにもかかわらず、塗装、彩色、金具類が変退色や腐食を起こすことが多かった。このような劣化現象に対して科学的調査研究を行うために、日光社寺文化財保存会から委託を受け、1974（昭和49）年度から1986（昭和61）年度まで13年間にわたり、日光社寺建造物の修理に関して塗装、彩色、生物被害、微気象などの研究が行われた。

始めに山内の気象を知るために東照宮、二荒山神社、輪王寺大猷院で温湿度を測定したところ、標高の高い輪王寺大猷院の年平均気温が、他の2ヶ所より1℃ほど低いがいずれも年平均気温は10℃前後、年平均相対湿度は75%程度であった。1年の変化を見ると夏に相対湿度80%以上、冬は氷点下の気温の日が続く、文化財の保存にとっては厳しい気候であることがわかった。特にその傾向は輪王寺大猷院で著しかった。

輪王寺大猷院の二天門では、修理の際に表面に塗られた漆が黒く変色することが問題となり、漆の塗装技法、材料、微生物など色々な原因が考えられた。表面の黒変した部



13 日光東照宮透塀角の退色の様子

分を分析したところ、漆を塗ったケヤキ材から出てきた水溶性物質であることがわかった。また顕微鏡で見るとその中にカビの菌糸が観察され、ケヤキから出た水溶性樹脂成分に *Cladosporium* sp. が付着して増殖し、黒化したものと推定された。

東照宮の本殿と拝殿を取り巻く透塀の格狭間の上下長押には、漆箔地に唐油彩色で四ッ花入り亀甲繫ぎ文が施されている。この彩色が場所によって、変色したり、退色している原因の調査を行った。調査の結果、太陽光線の直射や敷石等からの照り返しが大きく寄与しているものと考えられ、防止策として唐油に酸化防止剤や防黴剤を配合することが考えられた〔図13〕。

科学研究費「文化財の虫徴害防除法の開発」（特定研究）

文化財の虫徴害防除では、文化財の材質に変色や変質を起こさずに、加害生物を殺菌、殺虫、防除しなければならない。この研究では、文化財に悪影響を及ぼさない薬剤を選定することと、文化財に即した防除法を開発することを目的として研究を行った。

研究では各種の燻蒸剤と二酸化炭素、フロンなどの希釈剤の文化財材質への影響を検討し、文化財用の燻蒸剤として酸化エチレン、臭化メチル、弗化サルフリルを選定し、薬量、燻蒸時間、温度等の燻蒸条件を決定した。また燻蒸後の残留ガスの廃棄方法について検討し、活性炭を用いた回収装置を開発して実用化した。この他、防虫剤や当時使えなくなった有機塩素系薬剤に代わる低毒性薬剤について検討を加えた。

3 第3期 1989（平成元）年～2000（平成12）年

この時期には1990（平成2）年10月にアジア文化財保存研究室が発足して保存科学部の定員が1名減となり、1992（平成4）年度から研究員6名、調査員（非常勤）1名、客員研究員（非常勤）1名となった。また1993（平成5）年から1995（平成7）年度は一時的に研究員が1名少ない状態で研究を行っていたが、1996（平成8）年度に現在と同じ研究員6名に戻った。この他、1990（平成2）年度に客員研究員（非常勤）が1名ついた。

1989（平成元）年度からは中長期研究計画に従った研究が開始され、保存科学部では最初に「有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立」（1989～1994年度）、「特

殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討」(1989～1994年度)、「フォクシングの保存科学的研究」(1989～1992年度)の三本の研究が行われた。またこの後に「鉄器材質の歴史的変遷に関する研究」(1991～1993年度)、「新しい文化財防虫防黴法の研究」(1994～96年度)、「無公害な生物被害防除法の研究」(1997～2000年度)、「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」(1995～1999年度)といった研究が行われた。



14 東京藝術大学大学院文化財保存学授業風景

また1995(平成7)年度から東京藝術大学との間で「教育研究に対する連携・協力に関する協定書」を結び、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻にシステム保存学研究分野を設置して、保存科学部と修復技術部が中心になって6名の研究者を教官(教授4、助教授2)として併任させ、保存環境学研究室と修復材料学研究室の2研究室で大学院教育を行うこととなった。この文化財保存学専攻は学部を持たない独立専攻で、当研究所が担当するシステム保存学の他に保存修復(日本画、油画、彫刻、工芸、建造物)と保存科学(文化財測定学、美術工芸材料学)があり、合計三つの研究分野からなっている。保存担当学芸員研修では社会人教育を、東京藝術大学との連携協力では学生教育を担当し、各段階における保存科学教育の要望に応じていくこととなった。システム保存学からは2005(平成17)年度までに10名の修士課程修了生が出たが、次年度からは協定書を改訂して、講義と演習のみを担当して院生の受入は行っていない〔図14〕。

ハロンの全廃、臭化メチルの全廃、阪神・淡路大震災など、国際的な枠組みの変化や社会における重要案件との関連による課題が増え、年次進行途中の研究課題であっても緊急に組み替えて対応を拡充させていった。また研究成果がすみやかに行政的な指針に反映することも多く、この時期に多くの手引き・指針が文化庁から発刊された。かねてより行われていた新築博物館等への保存環境調査ではあったが、これらの研究成果が基礎資料となり、「はじめて、重要な文化財を借用して他府県移動を伴う場合」には保存環境調査報告書の提出が必要と変更され、文化庁文化財部美術学芸課からの依頼を保存科学部が受けて、全国の公開施設に対して、環境調査を開始した時期でもある。保存環境調査を通して現場のニーズと研究シーズを把握し、新たに研究課題に設定する形で、博物館等の保存現場と密接な協力関係が築かれていった。

中長期研究計画「有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立」

文化財の保存において、材質・構造・技術調査と保存環境制御の研究は重要であり、そのためには新しい調査手法の開発が必須である。この研究は、調査手法のより一層の開発が望まれる有機質材料について検討を進めたもので、特に光や温度・湿度による劣化の機構解明とその防止の研究を行った。主に絹の劣化について検討し、経年劣化で断裂する分子構造との比較を行い、相関を見いだした。また、電子線劣化による補修用絹と比較検討し、より経年劣化絹と分解機構が近く物性が似ていることから、小規模の補修用絹の作成には紫外線劣化も採用されるようになった。有機質文化財の劣化初期の損傷を検出する方法の一つとして、化学発光検出器の利用を検討し、紫外線劣化では分解に寄与する波長のエネルギー量に比例した短寿命の蛍光成分のほか、累積照射エネルギー量が増大するにつれて長寿命の燐光成分が現れることがわかった（関連課題、科学研究費「絹の劣化度の科学的評価」）。

これに関連して、1994（平成6）年の第18回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財保存における分光学的手法」では、国外9名、国内8名、その他ポスターによる発表者を加えて、保存修復分野でさまざまな成果を上げている分光学的調査手法を網羅した。1995（平成7）年には、専門研究者間の交流促進として、第25回文化財保存修復研究協議会「有機質文化財に関する調査研究の新しい展開」を開催し、有機質文化財の調査研究の現状と限界、望ましい情報などについて検討した。

調査研究手法の応用や新手法開発については、リモートセンシングを応用した広域の遺跡探査手法の検討や、エミシオグラフィを利用した元素推定、可搬型蛍光X線分析装置開発やそれを用いた「その場分析」の研究などに受け継がれた。2000（平成12）年には第30回文化財保存修復研究協議会「光学的方法の明日」を開催した。X線、赤外線などを用いた文化財の画像計測は、「光学的方法」と呼び慣わされ、1950年代から日本美術へ応用して画期的成果を上げてきた代表的な非破壊測定法であるが、可視光励起蛍光画像から情報を得る新手法とポータブル型機器類から得られる情報について検討し、「光学的方法」と歴史研究との新たな結びつきと発展の可能性について論議した。

中長期研究計画「特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討」

新築の博物館等施設内の空気汚染や大気汚染など、文化財を傷める因子の多い現代の環境から文化財をいかに守るか、収蔵展示環境がいかにあるべきかを研究した。新築博物館内に設置した硫酸銅含浸紙に銅アンミン錯体が形成されることから新築施設内の空気にアンモニア分子が含まれること、画材への影響については油画の褐変のほか、日本

画顔料の緑青が青変して水溶性になることなどを報告した。この研究は、中長期研究計画「文化財施設内における保存展示条件の検討」に引き継がれ、最終的にアンモニアの発生はコンクリートに混合される骨材と共に持ち込まれる微生物等の分解によるものと推定し、新築建物の「アルカリ」対策として建築研究者らによるアンモニア吸着シートや各種ケミカルフィルターの開発へとつながった。また、科学研究費「文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究」では、室内建材等から発生する有機酸の文化財への影響試験から鉛を含む日本画顔料に影響が大であること、博物館等施設内濃度を実測し文化財が劣化する



15 環境調査への協力—平成館開館前
収蔵庫調査（1996年）

可能性があることを明らかにし、ケミカルフィルターなどを利用した改善方法について検討した。1991（平成3）年には、専門研究者への情報普及や研究交流促進を、第21回文化財保存修復研究協議会「新設の文化財施設における『アルカリ』発生の原因と対策」の場で行っている〔図15〕。

大気汚染については、上野周辺、都内郊外の環境中の酸性ガス（ SO_2 、 NO_2 ）濃度や酸性ミスト濃度などを測定し、同一場所での銀・銅・石灰石等の試験片の曝露結果と比較検討し、環境汚染が文化財へ与える影響について評価した。酸性雨の文化財への影響を評価する場合には、初期降雨と全降雨の組成が異なることから、全降雨について検討することが優位であることがわかった。銅板からの溶出割合は、降雨中の陰イオン総量と相関があることがわかった。施設への侵入を阻止するには、エントランスに風除室を設けることとともに、搬入口に換気装置を設置することが有効であることが、施設内の NO_x 濃度計測結果からわかった。

これらの研究と関連して、1990（平成2）年には第14回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財と環境」を行い、海外から6名、国内から9名の研究報告を迎えて、文化財を取り巻く様々な環境の整備について、屋外彫刻の保存から館内環境制御、展示技術、移送のための梱包技術まで検討を行った。また、1993（平成5）年の第22回文化財保存修復研究協議会「文化財保存と環境汚染」では、特に文化財をとりまく大気汚染の実態の把握と評価手法を焦点に検討を行った。

関連した研究課題として、鎌倉大仏の錆の生成について風向・風速と霧の発生が関連することを明らかにした研究（科学研究費「文化財におよぼす酸性霧の影響に関する研究」）

や、高湿度環境下での木材の歪みの変化が季節変化に起因することを解明した研究（科学研究費「環境の湿度変化が国宝中尊寺金色堂に与えた影響に関する研究」）などがある。

これらの研究成果は、文化庁文化財部「文化財公開施設の設計の指針」（1995年10月）にも盛り込まれている。

中長期研究計画「文化財施設の保存（収蔵・展示）環境の研究」

1993（平成5）年12月の消火剤ハロン生産停止、1995（平成7）年1月の阪神・淡路大震災など、文化財保存の上で緊急に取り組むべき対象が防災にも拡大したことを受けて、年次途中で組み替えたものである。この中で、ハロン消火剤の各種代替薬剤の文化財への影響評価を行い、代替フロン薬剤は噴出時の体積膨張による室温低下効果が大きいと誤作動に注意が必要なこと、窒素ガス消火設備でも噴出ヘッド直下では結露水の落下が生じるため、文化財の直上に設置しないなどの運用上の注意点を検討した。科学研究費「美術工芸品等の防災に関する調査研究」等の補助も受けつつ、地震時に水消火スプリンクラーのヘッドが脱落して文化財の汚損被害があったことから余圧方式への切り替えの推奨、免震装置の評価などを行った。絵画用吊り金具（S環）については、引っ張り強度は内径の曲率の小さな形態が強度の点からは優れていること、引っかかりが浅いとはずれやすく、太さは直径6mm程度の金属で市販の金具でも十分な引っ張り強度（120kgf）があることがわかった。テグスの結び方については、片結びの方が引っ張り強度が高くなるが容易に切れやすいことがわかった。ワイヤーについては接続部分の強度が弱く、使用には注意が必要なことがわかった。その他、転倒防止用ワックス、粘着マットなどについても試験し、文化財に溶出する化学物質に注意が必要であることなど、使用上の注意点を検討した。

その後、屋外における文化財の保存、特に多孔質材料である石材・レンガの保存研究を進め、科学研究費「多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明と防止対策」、「石造文化財の劣化機構と保存対策の研究」、「屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発」、「石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究」を通して、多孔質材料中での水分移動と劣化の関係を検討し、シミュレーションと実測を組み合わせ、対策の有効性を検証する手法を確立した。これらの基礎研究は、国内の文化財保存に貢献するのみならず、海外での遺跡保存のための研究手法として展開し、その後の成果を導いた。

中長期研究計画「フォクシングの保存科学的研究」

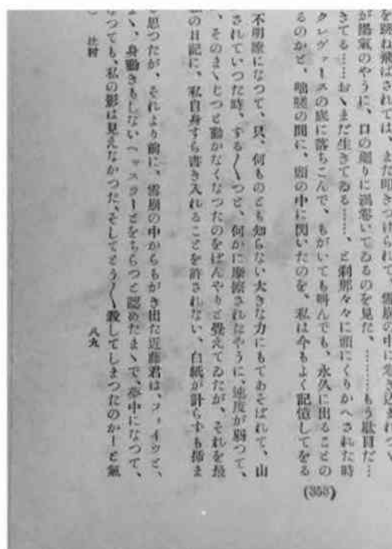
絵画や古文書に発生する褐色斑点（フォクシング）の要因と形成のメカニズムを微生物学観点から究明し、修復方法を確立することを目的として行った。欧米では主として、鉄イオンを要因としてフォクシングが生じると報告されている。これに対して、フォクシングの生じた紙片からカビの代謝物である各種アミノ酸や糖、有機酸などを分離した。分離されたもののうちグルコースと γ -アミノ酪酸を混合すると、化学変化して茶褐色の不溶性物質を生じることを発見し、微生物的な発生要因が存在することを明らかにした。科学研究費「環境制御等による微生物被害防除法の開発」は、微風速がカビの生長に与える影響を検証した基礎研究である〔図16〕。

我が国の文化財保存において、カビや虫による生物被害の問題はたいへん大きく、その事例や対策について専門研究者への情報普及と研究交流を絶えず行っている。1989（平成元）年の第19回文化財保存修復研究協議会「保存科学における生物学的諸問題」では、文書や建造物について具体的な事例を挙げて協議した。

中長期研究計画「新しい文化財防虫防霉法の研究」

1988（昭和63）年5月にオゾン層保護法が制定され、その影響は消火剤ハロンの生産中止という形で文化財保護分野に影響を与えたが、1992（平成4）年11月の第4回モントリオール締約国会合で、この30年ほど文化財害虫の殺虫に用いてきた臭化メチルが廃止リストに追加され、1995（平成7）年12月の第7回モントリオール締約国会合で2004（平成16）年12月末の生産全廃が決まり、文化財の生物被害防止のための新手法研究が必要となった。

1～2週間の処理期間であれば現場で対応可能であるとの学芸員へのアンケート調査結果を受けて、新しい虫害防除法として、低酸素濃度殺虫法が実際に日本の主な文化財害虫に適用可能か明らかにする基礎研究を始め、その後低温処置法についても検討を拡げた。また、処理期間を短くするための防虫剤との併用や、脱酸素剤での処置が難しいやや大きな文化財への低酸素濃度処理を可能にするための各種機器開発に携わった。



16 フォクシングの研究



17 保存担当学芸員研修実習風景

中長期研究計画「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」

臭化メチル全廃スケジュールの前倒しを受けて拡充されたこの研究課題では、二酸化炭素処置法などについても検討し、文化財の大きさに即した効率的な処理仕様策定や各種機器の開発に関わり、化学薬剤のみに頼らない文化

財生物被害対策の確立を進めた。これら新しい処置方法や防虫剤・防黴剤等の文化財への影響について、化学的影響を検討する顔料試験を行った。漆器や木造構造物への処理を想定した各種処理で生じる歪みの評価試験を行い、二酸化炭素処置法は高湿度下では鉛丹の変色を生じる可能性があること、低温処置や二酸化炭素処置で木片に生じる歪みは比較的小さく、これら処置の導入が可能であることを明らかにした。

科学研究費「文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）のシステム構築に関する研究」では、臭化メチル燻蒸に頼ってきた従来の体制を、文化財への影響はもとより、環境や人体への影響も考慮した総合的な文化財保存体制へ移行することを目指し、具体的な対処法を検討した。文化財害虫を同定し的確に対処するための『文化財害虫事典』の編纂、各種処理方法の使い分けの目安の公表、現場における IPM プログラム実践を通して、IPM システムのモデル作りを行った。

これらの研究成果は、2001（平成 13）年 3 月文化庁文化財部刊行の『文化財の生物被害防止に関する日常管理の手引き』の基礎資料として重要な位置を占めた。

また、保存担当学芸員研修のプログラムを改編して、生物被害対策に関わる講義・実習を強化し、最終的には 8 コマを充てることとした〔図 17〕。

1999（平成 11）年には、高温多湿のアジア地域で生物被害対策としてどのような方法論が必要なのかを探る目的で、第 23 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「アジアの文化財生物被害防除対策の今後—2005 年臭化メチル全廃を控え—」を開催し、国内外から研究者を迎えて活発な議論を行った。気候や国状がかなり違い取り組みの内容はそれぞれ異なるが、文化財害虫発生の変因を探り早期に対処することで、毒性の強い化学薬剤のみに頼らずに文化財を害虫から守るための方法論の確立に各国が取り組んでいることがわかり、日本における IPM 推進の起爆剤となった。

その他、最新の生化学的手法を用いた研究手法により、修復技術部と共同で糊抜きに酵素を利用する手法の確立のための基礎研究を行った受託研究「装潢材料の生化学的研

究」や、出土木材の形態安定化処理に用いる合成樹脂（PEG）を分解するバクテリアを同定して一般土壌中によく見られるバクテリアが原因であることを発見した。研究手法の確立のための基礎研究（科学研究費「古代日本の動物遺体の DNA 解析」、科学研究費「古代日本の動物遺体の DNA 解析及び免疫学的研究」）なども行った。

中長期研究計画「鉄器材質の歴史的変遷に関する研究」

古代において、鉄がどのように作られ流通したかは、考古学の立場からも科学技術の立場からも興味深い問題である。この研究は、鉄器原料の産地推定に対して、化学組成や鉛同位体比法が応用出来るか検討したものである。古代鉄中における鉛濃度はたいていそう低く、古墳時代鉄器で約 0.1 ～ 0.01ppm で、銅製資料における鉛濃度の 1/100 ～ 1/1000 であったが、いくつかの資料で測定は可能であり、その値は銅製資料とは異なり鉄資料独自の分布を示すことが明らかになった（関連課題、科学研究費「出土鉄器の鉛同位体法による原料産地の推定」）。これらの成果をもとに、専門研究者への情報普及と研究交流のため開催された第 23 回文化財保存修復研究協議会「古代鉄の保存科学」（1993 年）で、古代鉄の産地・時代・技法などに関する問題の解明がどのように進んでいるか、鉄器に対してどのような科学的保存処置法が開発されているかなどの発表が行われた。

中長期研究計画「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」では、青銅器資料の化学組成及び鉛同位体比から青銅器の産地や製法に関する研究を行った。青銅器の器形による鉛同位体比の数値分布について国内資料についてはほぼ完結したことを礎に、中国の青銅器文明を材料学的視点から分類した。

科学研究費「化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究」（特定研究）

未発掘の遺跡（石室、住居跡など）の探査には、一般に電気・磁気・地中レーダーによる探査手法が用いられるが、これらの手法は、限られた範囲について探査を行うもので、広い地域について遺跡の所在を確認したり、遺跡の広がりを調査することは難しい。そこで 1992（平成 4）年度から 1996（平成 8）年度まで、科学研究費「遺跡探査」（重点領域）の中で「化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究」を行い、人工衛星からの画像を用いてアユタヤ遺跡（タイ）の 1980 年代の整備による環境の変化を調査した。国内では群馬県子持村の田尻遺跡を中心に、気球などを用いて可視から近赤外領域にわたる分光画像を利用して調査したところ、地中レーダーの探査結果と比較して良い一致を得た。また探査結果を基にボーリングして、採取した土壌試料を化学分析した結果、遺跡の周溝に含まれる有機物含有量が道であったと思われる場所に比べて

少ないことから、遺跡の築造後それほど時期を経ない内に榛名山の火山灰で遺跡は埋まったのではないかと推定された。

スミソニアン研究機構との国際研究交流

1988（昭和63）年に文化庁長官とアメリカ・スミソニアン研究機構の長官との間で交わされた覚書に基づいて、両者の機関間で文化財保存の分野で、東アジアの文化財を保存科学の立場から研究する共同研究が、科学研究費「東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究」を下に開始された。具体的には次の五つのテーマについて、アメリカ側は保存分析研究所（CAL）、日本側では当研究所が中心となって日米の研究者が交流し、フリーア・サックラー美術館が所蔵する青銅器などの分析調査などを行った。（1）東アジア文化財とその原料についての鉛同位体分析のデータベース作成、（2）ブロンズ病と青銅腐食のメカニズム、（3）古代東アジア青銅器における鍍金、（4）中国製、朝鮮半島製、日本製青銅器の鋳型製作、鋳造技術、冶金学的問題、（5）縄文土器の技法、組成の研究。

引き続いて、科学研究費「科学技術を利用した文化財研究法の開発」を受けてスミソニアン研究機構との共同研究を続行し、アメリカ大陸における遺跡探査、青磁・緑磁のアジアにおける伝搬、青銅器の起源と伝搬に関する研究が行われた。

敦煌文化財の保存修復に関する調査研究

1984（昭和59）年の日中両国外相会議、1985（昭和60）、1987（昭和62）年の日中文化交流政府間協議において、敦煌莫高窟壁画の保存に関する日中の協力が約束された。それを受けて1987（昭和62）年度から、科学研究費「中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究」などによる中国との国際研究協力が始まり、その後も共同研究は現在まで継続している。共同研究は、敦煌莫高窟の第194窟、第53窟について行われ、保存科学部は1988（昭和63）年から1992（平成4）年まで、主に窟内の温度、湿度などの環境を調査した。その結果、莫高窟は乾燥地域にあるにもかかわらず、稀に降る大雨や洞窟の前の大泉河からの水の影響を受けて、壁画の劣化が進んでいることが明らかになった。

文化財保存に関する日独学術交流

日本とドイツとの間では、1974（昭和49）年に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、1990（平

成2)年の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案がなされ、ドイツ側はミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、日本側では当研究所がそれぞれ事務局となって、1992年(平成4)度から学術交流を開始した。科学研究費「漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」(国際学術研究—共同研究)及び「文化財の微量試料分析法の開発」(国際学術研究—共同研究)を受け、主に16世紀から18世紀にかけて、東インド貿易を通じてドイツを中心とするヨーロッパに渡った輸出漆器の調査とその分析、保存方法についての共同研究を行った。研究の結果、漆の新しい分析方法の開発と共にドイツ各地にある輸出漆器の調査が進み、輸出漆器の研究やその保存・修理に大きな貢献をすることが出来た。これらの成果は、1999(平成11)年第13回「大学と科学」公開シンポジウム「海を渡った文化財—様々なすがたとわざ」の中で公表され、文化、技術の伝播と、国際交流の中で相互に影響を及ぼしていく受容・変容のすがたを説いた点で高い評価を得た。また、2000(平成12)年には“East Asian and European Lacquer Techniques”(独語・英語、Bayerisches Landesamt für Denkmalpflege, München)、2001年には“Japanese and European Lacquerware”(独語・英語、Bayerisches Landesamt für Denkmalpflege, München)の著作物を著し、基礎学術研究の礎を確立した。

日独学術交流は、輸出漆器に関する研究に引き続き、科学研究費「彩色文化財の材料と技法に関する科学研究」を受け、中世の彩色木造彫刻について共同研究を実施し、日本ではポータブル蛍光X線分析装置を用いて木造彩色彫刻の顔料の非破壊分析などを行った。

4 第4期 2001(平成13)年～2006(平成18)年

2001(平成13)年4月から、当研究所は独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所になり、保存科学部では生物研究室を生物科学研究室と改称し、より広い視野で生物被害防止に関わる研究を進めることを明示した。研究に関しては、中期目標として決められた5年間の目標に沿った形で年度計画が立てられた。保存科学部では、主となる三つの基礎研究プロジェクトを立てた。化学研究室を中心として研究を進めている「非破壊調査法に関する調査研究」、生物科学研究室を中心として研究を進めている「臭化メチル燐蒸代替法に関する研究」、物理研究室を中心として研究を進めている「文化財施設の保存環境の研究」である。またこれらの基礎研究の成果をすみやかに海外に紹介するとともに海外研究者と研究交流を行う二つのプロジェクト「文化財の保護に関する日独



18 ポータブル蛍光X線調査風景

学術交流」及び「北米の文化財保存研究機関との国際研究交流」を行った。いずれの研究成果も紀要『保存科学』を通してすみやかに成果発表するとともに、すでに学芸員として定着している社会人を対象に保存科学に関する講義・実習を行う博物館・美術館等保存担当学芸員研修、大学院生に対して保存科学教育を行う大学院教育への参加、公共サービスとして

都道府県教育委員会等に対して保存科学的見地から助言指導を行うなど、普及・教育・研修活動も基礎研究と関連づけて充実していった。

非破壊調査法に関する調査研究

文化財の彩色材料や基材を様々な科学的な手法で調査・解析し、同定する研究を進めている。文化財に用いられる無機材料・有機材料の新たな調査・分析法の開発及びその応用を目標とし、実験室規模からダウンサイジングした可搬型機器及びその周辺技術等に関する基礎研究を行い、ポータブル蛍光X線分析装置及び種々の光学的手法の改良と、これらの手法を応用した文化財の分析調査を行った〔図18〕。

ポータブル蛍光X線分析装置により、「源氏物語絵巻」、尾形光琳筆「紅白梅図屏風」、「燕子花図屏風」などの国宝絵画をはじめとした彩色材料調査を重点的にを行い、いくつかの資料について新たな知見を得るとともに、各時代に使われていた彩色材料に関する貴重なデータを蓄積することが出来た。また、国宝稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣などの考古遺物や彫刻・工芸品についても材料調査を行い、いくつかの資料について新たな知見を得ることが出来た。これらの調査は、科学研究費「可搬型分析機器を用いた未調査文化財の材質調査に関する研究」、「文化財の彩色材料の変遷に関する基礎的研究」、「文化財の彩色材料の変遷に関する科学的調査研究」などを通して充実した成果を発表している。さらに、バッテリー駆動（AC電源等不要）のハンディ型蛍光X線分析装置により高松塚・キトラ古墳石室内の壁画顔料の調査を実施し、非常に貴重なデータを取得することが出来た（受託研究「特別史跡キトラ古墳墓道部発掘調査及び壁画の保存業務」、2006年度）。

新たに導入したファイバー投受光型分光光度計を用いて漆工品分析の検討を行い、漆に混合された藍の反射スペクトルが、強い散乱光の影響を受けつつも、主成分インディゴ特有の吸収帯を検出出来る事を見いだした。また、ナノ秒発光寿命測定による材質情報

取得についても検討を始め、膠がその存在状態によって異なる寿命成分を示すことが分かった〔図19〕。得られた成果は、2004（平成16）年に開催した度第28回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財の非破壊調査法—X線分析の最前線—」において発表された。その他、非破壊分析に関する各国の考え方、最新技術、可搬型蛍光X線分析装置をはじめとする様々な機器開発がもたらした美術史的・歴史的新知見などが報告された。



19 分光分析

材料・構造に関わる非破壊手法を用いた調査研究として、科学研究費「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（特定領域研究）の計画研究「トヨタコレクションの材料・技法の分析と保存に関する研究」を通して、からくり人形や噴水器・時計など数多くの江戸の優れた技術を研究する機会にも恵まれた。X線透視撮影手法ではイメージングプレートを利用した撮影を進め、各地の美術館の調査にも協力し、画布の再利用の検出や薄い挽き板を巻いて作った琉球漆器独特の構造の発見など、多くの新知見がこれら調査を通して見つかっている。X線調査手法の研究は引き続き進められており、科学研究費「文化財の透過撮影および材質調査を目的とした新しいX線検出器の開発」などを得て新技術開発に関わる基礎研究を進めている。

臭化メチル燻蒸代替法に関する研究

かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルがオゾン層の保護のため、2004（平成16）年末に全廃され、2001（平成13）年から2003（平成15）年度には代替手法の開発が緊急に求められていた。世界的にも種々の代替法が検討される中、わが国においても薬剤を使用しない方法、薬剤を使用する方法のそれぞれについて使い分けを明確にすることが求められ、当部で種々の臭化メチル燻蒸代替法の具体的な使用法を確立した。臭化メチル製剤の使用停止を迎えた2004（平成16）年から2005（平成17）年度には、臭化メチル燻蒸代替法研究の総仕上げとして、総合的有害生物防除管理（Integrated Pest Management）を取り入れた生物被害対処法の周知に力を入れた。

基礎研究においては、化学薬剤のみに頼らない代替手法の処理仕様の確立と、代替燻蒸薬剤の文化財への影響について主に検討した。低酸素濃度処理法に関しては、中規模の低酸素濃度処理を簡便に行うための具体的な処理手順を策定した。二酸化炭素殺虫法

については、二酸化炭素の材質への吸脱着の性質を調べる基礎実験とともに現場での処理例を重ねて、加湿二酸化炭素による処理仕様を策定した。高温処理についても、外部機関と協力して現場での検討を行った。化学薬剤にのみ頼らない上記の手法については、文化財への物理的影響の有無を計測評価して、より安全な処理仕様を確立した。臭化メチル製剤及び代替燻蒸剤の文化財への影響については、自然史資料のDNAへ多大な影響のあることを明らかにした（科学研究費「文化財“臭化メチル代替新規燻蒸剤”等が収蔵品DNAに及ぼす影響の科学的評価」）。また、紙への薬剤残留量計測や金属など材料に対する変色などの影響を詳細に検討した。化学薬剤によるガス燻蒸抑制のためにはカビ対策の確立が急務であり、環境評価手法として有望であった浮遊菌調査手法の確立を試み、制御状況評価に用いることが出来ることを明らかにした（科学研究費「室内空間におけるカビ等真菌類汚染の調査と地球環境に配慮した殺菌殺黴法に関する基礎研究」）。

臭化メチル燻蒸代替法については、専門研究者向けの研究会、一般向け講演会のほか博物館・美術館等（2001年度）、自然史系博物館（2002年度）、公文書館・図書館・史料館（2003年度）への普及を目指して研修を開催した。また現場の保存担当者や研究者とともに活動し、適した枠組みへの改変など技術的な検討を行った。2005（平成17）年度には教育委員会文化財係等を対象とした文化財保護行政担当者のためのIPM入門研修を東京、京都、福岡の3カ所で開催して普及に努めた。関連事業「臭化メチル製剤の使用実態調査」（文化庁委託事業、2002年度）、「文化財の生物被害防除手法に関するアンケート2005」（2005年度）で、博物館・美術館・資料館・図書館等の実態調査と代替手法の普及状況を調査した。



20 「文化財生物被害防止ガイド」
（DVD教材）

成果物として、『文化財害虫事典』（クバプロ、2001年）、『文化財生物被害防止ガイドブックー臭化メチル代替法の手引きー』（2002年）、『文化財生物被害防止ガイドブックー臭化メチル代替法の手引きー（平成15年度版）』（2003年）、『文化財害虫事典 2004改訂版』（クバプロ、2004年）、『文化財生物被害防止ガイド』（DVD教材、クバプロ、2004年）、『文化財のカビ被害防止チャート』（2004年）がある。『文化財生物被害防止ガイドブックー臭化メチル代替法の手引きー（平成15年度版）』は文化庁予算で増刷となり、全国の重要文化財等所有者や博物館・美術館等に配付された〔図20〕。

文化財施設の保存環境に関する研究

文化財の展示収蔵施設の環境調査では、美術館・博物館・倉・城など様々な施設での空気環境や温湿度環境の調査を行った。空気環境の調査に関しては、変色試験紙法に加えて、アンモニアと有機酸をそれぞれ個別に半定量的に判断出来るパッシブインジケータ（商標名）による評価方法を導入し、博物館・美術館等で調査を行い、その有効性を評価した。



21 保存環境計測

川越市山車収蔵施設、長浜市曳山収蔵用の土蔵、熊本城重要文化財「細川家波奈之丸舟屋形」の展示施設などの温湿度測定を行うと共に、建造物の構造、換気回数などを調査し、温湿度の安定性と建築物の構造、換気回数の関係を求めた〔図21〕。

九州国立博物館の壁付き展示ケースにおける換気回数、温度、相対湿度の測定を行い、換気回数が温湿度に与える影響を調査した。展示ケースの換気回数測定法に関する室内試験を行い、換気回数測定法の比較を行った。

土壁や建材の水分特性は、文化財の展示収蔵施設内の湿度の安定性を評価する上で重要な因子である。土壁、レンガ、木材などの建材を用いた実験により、それらの水分特性を求めた。これらの物理定数をシミュレーション解析に用いた。九州国立博物館の文化財収蔵庫用建材として使用される国産杉材の試験法に関する検討を行った。

展示収蔵施設のシミュレーション解析は、展示収蔵施設内の温湿度変化を外気の温湿度変化、換気回数や建材の熱物性値や水分特性から予測することであり、施設内の環境の現状把握、施設の環境の改善方法を検討する上で有効である。ここでは、熊本城「細川家舟屋形」の展示環境の調湿建材を用いた改修に関して数値シミュレーションを行い、この調湿建材の有効性について確認した（受託研究「重要文化財『細川家舟屋形』の保存環境調査」、2002～2003年度）。

また、川越市の山車収蔵施設の温湿度変化が、建物の構造や建材の種類により異なるという測定結果に関しても、数値シミュレーションにより、この違いが建材の水分特性及び換気回数によるものであることを示した。これらの結果から、文化財を取り巻く環境の評価、対策方法の策定に関して、シミュレーション解析が有効であることが分かった〔図22〕。

また、カビの発生が問題になっている高松塚古墳内の温湿度と墳丘土の水分特性の関



22 蔵の保存環境の研究

やキトラ古墳の保存対策に役立てられている。

係等に関しても調査を行った。科学研究費「古墳や洞窟遺跡の保存に関する研究—水の影響とその対策」、「古墳壁画の保存環境に関する研究」、「古墳や洞窟遺跡の保存対策に関する研究」、受託研究「特別史跡高松塚古墳壁画保存対策等調査業務」（2004年度～）、「特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務」（2004年度～）を通して、大きな成果を得、高松塚古墳

文化財の保護に関する日独学術交流

日独学術交流は1999（平成11）年度から2002（平成14）年度にかけて、中世の彩色木彫像の研究を中心に彩色文化財に関する共同研究を行ったが、その成果をバイエルン州立文化財研究所と共同で論文集（英語・独語）“Historical Polychromy”（Michael Kühlenenthal and Sadatoshi Miura, Hirmer Verlag München, 2004）として出版した。ドイツ側は主にバロック、ロココ時代の彩色木造彫刻の彩色材料・技法とその保存について報告し、日本側は切金装飾や金泥塗りも含めた木造彫刻の彩色材料・技法及びそれらの歴史に関する研究を報告した。本の内容は、1. 18世紀ドイツの彩色彫刻に関する研究、2. 日本の彩色彫刻に関する研究、3. 科学的研究の3章に分かれ、全部で27編の論文を含む576頁（24 × 30cm）の本で、日本の彩色彫刻の歴史や材料・技法の研究を世界に紹介する英文の研究書としては初めてのものである〔図23〕。

2003（平成15）年度よりドレスデン工科大学との間で「石造文化財、石造建造物の保存」に関する共同研究を行っている。2003（平成15）年には、7月から9月にかけての2ヶ月間、保存科学部の研究員がドレスデン工科大学を訪問し共同研究を行った。研究テーマは、建材に使われている石材、断熱材などの多孔質材料中の水分移動、熱移動に関するシミュレーション手法、水分特性測定法の研究である。具体的な研究内容としては、北海道開拓の村で行っている土壁中の水分変化、温度変化を温湿度や日射などの環境条件をもとにシミュレーションを行い観測結果との比較を行った。

2003（平成15）年11月には、ピーター・ハウプル（ドレスデン工科大学建築環境研究所教授）、ジョン・グルネワルド（同研究員）、ルドルフ・プラーゲ（同）、ハイコ・フェヒナー（同）を招聘して、「石造文化財、石造建造物中の水分移動解析と水分特性の測定」

に関する研究会を開催した。また、プラーゲ研究員らと、X線を用いた多孔質材料の水分特性測定を共同で行った。

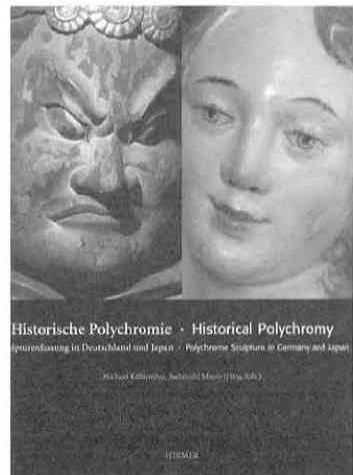
2004（平成16）年、2005（平成17）年には、ドレスデン工科大学建築環境研究所の研究員を招聘して、共同で研究を行うと共に「建築材料の水分特性、調湿特性の研究」等に関する研究会を開催した。

北米の文化財保存研究機関との国際研究交流

中期目標において定められた協力事業及び研究機関・専門家との学術交流について、当初予定したとおり5年間にわたりアメリカ・スミソニアン研究機構フリーア・

サックラー美術館の研究者やカナダ文化財保存研究所の研究者との学術交流を行った。

カナダ保存研究所 Canadian Conservation Institute (CCI, 1972年設立、カナダ文化財局) はカナダ国内の文化財保存のために設立された研究所であるが、保存環境に関する研究を進めるだけではなく、北米を中心に世界中の博物館・美術館等に対して保存のための助言や指導を行っている。カナダではすでに燻蒸以外の代替殺虫法へ移行しており、代替法やシステムの研究、運用で学ぶべき点が多くあり、専門研究者であるトム・ストラングを招聘してIPM（総合的害虫管理）や温度処理殺虫法についての研究交流を行い、あるいは当研究所の専門研究者をカナダに派遣して代替システムの運用の実際と方法論についての調査を行うなど研究交流を進めた。2004（平成16）年度はトム・ストラング（CCI）を招聘し、共同でIPMワークショップを行った。この共同ワークショップは、IPMの方法論を具体的に学ぶ場を国内博物館等に提供する専門研修であるだけではなく、博物館・美術館等の実状に沿って各国の専門研究者がIPM研修方法を共同で組み立てていくことが出来た。2005（平成17）年度はストラングの招聘時期にあわせて「IPMコロキウム」を開催し、IPM手法による管理を実践している国内の5博物館よりその実例報告があり、参加者と有益な意見交換があった。また北米やヨーロッパにおける博物館でのIPM実施状況に関するストラングの講演があり、IPMについての理解を深めた。



23 日独出版物

修復技術部

1 沿 革

1973(昭和48)年、東京国立博物館内に竣工した当研究所新庁舎に、保存科学部内にあった修理技術研究室を拡大し、修復技術部を設立した。設置当初は、文化財修復に関する科学的・技術的調査研究とその公表を主務とし、木質文化財及び漆芸品の保存修復を主務とする第一修復技術研究室と紙や布を主体とする文化財の保存修復を研究する第二修復技術研究室が置かれた。部の設立後数年内は、主に絵画修復技術に関する研究や工芸品の修復に関する研究が行われた。成果の一部として出版された『表具の科学』(1976年)は、伝統的な装幀技術を科学的視点から調査記録したものであり、現在でも伝統的な装幀技術の標準データを示していると高く評価されている。1978(昭和53)年には、金属、石材、陶磁器など無機材質の文化財に保存修復に関する研究を主務とする第三修復技術研究室を加えた。

2001(平成13)年、東京国立文化財研究所が独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所へ移行するのに伴い、以下の通り研究室名を変更した。

- 第一修復技術研究室 → 伝統技術研究室
- 第二修復技術研究室 → 修復材料研究室
- 第三修復技術研究室 → 応用技術研究室

2006(平成18)年、独立行政法人文化財研究所は、独立行政法人国立博物館との統合に伴い次の通り研究室名を変更した。

- 応用技術研究室 → 近代文化遺産研究室

2 調査・研究

第1期 1974(昭和49)年～1988(昭和63)年

設立当時、一般研究として、中尊寺金色堂復元修復を「伝統的製作技法及び修復技術の研究」として位置づけ技術的な協力を行っていた。また、合成樹脂に関する研究においては、「木造文化財の合成樹脂による修復の研究」として、アクリル樹脂による絵具の剥落止めや二液性エポキシ樹脂を使った人工木材、合成樹脂を使用した遺跡の剥ぎ取

りや遺構の保存技術などの開発を行い、合成樹脂の応用範囲の広さと有効性を示した。

屋外文化財の保存の分野では、石造及び金属文化財表面の汚れやカビ、苔、地衣類などの生物のクリーニング法、その後の表面処理法の開発などを行った。この研究をきっかけにして、屋外文化財に対する周辺環境による影響が問題視されるようになり、改めて屋外環境調査の必要性が認識された。これらの研究で培った保存修復技術が、鎌倉市の高德寺国宝銅造阿弥陀如来坐像いわゆる鎌倉大仏〔図1〕の保存修復に活用されたことは特筆出来る。



1 鎌倉大仏

1974（昭和49）年から1988（昭和63）年度に行った「一般研究」の題目は以下の通りである。

- 伊達政宗廟（瑞鳳殿、仙台市）墓所出土複製品の保存と修復に関する調査
- 出土遺物の保存処理法に関する研究
- 木造人頭標本の修理処置
- 合成樹脂による彩色剥落止め技法の研究と実施
- 石造文化財の修復処置に関する研究
- 屋外露出の鉄製文化財の保存処置法の研究
- 遺跡、遺構の保存に関する研究
- 染織品の保存処置の研究
- 青銅製品の修復処置に関する研究

(1)「合成樹脂による彩色剥落止めや木造文化財の修復の研究」において行われた保存修復処置は次の通りである。

- 1968（昭和43）年 瑞巖寺本堂襖絵
- 1971（昭和46）年 日光輪王寺板絵著色神像
- 1971（昭和46）年 称名寺著色弥勒来迎図、板絵著色弥勒浄土図
- 1971（昭和46）年 浄瑠璃寺三重塔初重内部
- 1971（昭和46）年 石山寺多宝塔内部柱
- 1971（昭和46）年 日光輪王寺五大明王像

- 1971 (昭和 46) 年 明恵上人紀州遺跡卒塔婆
- 1973 (昭和 48) 年 国宝如庵の木質部材部
- 1973 (昭和 48) 年 文化財保存に於ける人工木材の応用
- 1973 (昭和 48) 年 木造建造物化粧材の保存と修復における合成樹脂の応用
- 1973 (昭和 48) 年 旧富貴寺羅漢堂遺材
- 1973 (昭和 48) 年 如庵移築に伴う部材保存処置
- 1973 (昭和 48) 年 出羽三山神社合祭殿内板戸
- 1974 (昭和 49) 年 書院造り建造物中の障壁画
- 1974 (昭和 49) 年 荒川神社絵馬及び白山媛神社絵馬
- 1974 (昭和 49) 年 新潟県議会旧議事堂中心かざり
- 1974 (昭和 49) 年 建造物の修復における合成樹脂処置一覧
- 1974 (昭和 49) 年 酒井抱一筆「洋犬図絵馬」汚損クリーニング
- 1975 (昭和 50) 年 鹿島神宮黒漆居木
- 1975 (昭和 50) 年 東福寺三門天井
- 1975 (昭和 50) 年 名古屋城旧本丸杉戸絵
- 1975 (昭和 50) 年 唐招提寺金堂天井
- 1975 (昭和 50) 年 「太鼓時計」
- 1976 (昭和 51) 年 北野天満宮本殿漆地彩絵
- 1977 (昭和 52) 年 所沢市熊野神社板碑
- 1977 (昭和 52) 年 大樹寺障子壁画

合成樹脂による保存修復は、多くが壁画や障壁画などの絵具の剥落止めに用いられている。例えば、昭和 50 年代に行われた桂離宮古書院・中書院の保存修復では、欠失した木材部分の補填や失われた木の節や木目などを人工木材で修復されている。しかし、先に挙げた桂離宮の例でも近年人工木材による屋外部分の修復部分が著しい劣化状況を呈しており、合成樹脂による修復は厳密な使用条件及び保存環境下のみで目的とした物性を発揮することが出来るということを明記しなければならない。

(2)「伝統的製作技術及び修復技術の研究」では以下の調査研究を行った。

- 1973 (昭和 48) ～ 1974 (昭和 49) 年 中尊寺金色堂漆芸部材の修復
- 1974 (昭和 49) 年 にかわの劣化と顔料の変退色
- 1976 (昭和 51) 年 平安時代漆芸技法資料—仏功德蒔絵手箱・蓮唐草蒔絵経箱—
- 1977 (昭和 52) 年 東大医学部像人頭模型の製作技法調査と保存処置

伝統的な修復材料や技術は、長い経験に基づいて確立してきたものであり、文化財修復の根幹をなすものであるが、技術や技法を自然科学的に記述し、問題点を明らかにするとともに改良を行っていくことも重要な仕事である。このような観点から上記のような調査研究が行われた。その結果をこれらの修復に生かすとともに合成樹脂などの新たな材料や技法との比較評価も行った。

(3) 出土遺物の保存処置法に関する研究

出土金属製品の表面強化に合成樹脂を使用する応用研究を行った。使用した樹脂は、アクリル系樹脂、二液タイプのエポキシ系樹脂などである。従来の使用法から比較して格段の作業性の向上が見られた。

以下のような修復を応用研究として行い、良い結果を見た。

- 1971（昭和 46）年 日光男体山山頂祭事遺跡出土鉄器
- 1971（昭和 46）年 宮城県山王遺跡出土弁柄漆塗櫛
- 1973（昭和 48）年 黄金塚古墳出土鉄器
- 1974（昭和 49）年 伊達政宗廟（瑞鳳殿）墓所出土副葬品
- 1974（昭和 49）年 観音山古墳出土金属製品
- 1975（昭和 50）年 岩手県堀野古墳出土蕨手刀
- 1975（昭和 50）年 松本市桜ヶ丘古墳出土金銅天冠
- 1976（昭和 51）年 三重県津市愛宕山古墳出土の金銅押出仏

第 2 期 1989（平成元）年～1994（平成 6）年

今期では、研究テーマを下記の 2 点に集約した。

- (1) 文化財の伝統的修復材料の研究
- (2) 屋外文化財の劣化過程の調査と修復方法の開発

(1) 「文化財の伝統的修復材料の研究」では、次に挙げる文化財に関して調査及び修復を行い、伝統的修復材料である膠や漆に加え、セルロース誘導体やアクリルエマルジョンなども応用可能であることを見いだした。

- 埼玉県指定文化財天海坐像
- 重要文化財多久聖堂鏡天井
- 中尊寺金色堂巻柱及び高欄
- 楼蘭文書

(2)「屋外文化財の劣化過程の調査と修復方法の開発」では、厳島神社等の木造建造物修復のために丹色塗装の人工的劣化促進実験を行い、外装塗装に用いられる材料の耐候性判定手法を開発した。

第3期 1995（平成7）年～2001（平成13）年

今期中期計画は下記の通りであった。

- (1) 文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究
- (2) 漆の加熱硬化に関する調査研究
- (3) 近代の文化遺産の修復に関する調査研究
- (4) 近世輸出工芸品の実証的研究

(1)「文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究」では、屋外にある文化財が環境汚染から受ける被害について、従来の修復のみの処置だけではなく、修復前の環境観測からの劣化原因の解明と修復後のモニタリングを含む総合的な保存修復計画を視野に入れて、調査法及び修復法の開発研究を行った。環境観測のためのステーションを鎌倉市高徳院・奈良市東大寺に設置し、環境汚染物質が文化財に与える影響を調査し評価した。この事業は韓国国立文化財研究所と石造文化財の保存と修復に関する共同研究であった。

臼杵磨崖仏では、岩体からの湧水量や含水率の変動などのデータ収集が行われた。厳島神社では建造物の漆塗装の耐候性向上のために、ウルシオール主体の新塗装法の開発と丹塗り塗装の変色原因調査と対策を行った。日光建造物群では漆塗膜上に起こる変色の原因究明と、胡粉彩色上のカビ発生と環境との関連を調査し、環境制御による対策立案のための基礎資料を得た。さらに、日光山内での温度・湿度・雨量などの通年観測を行い、継続的な環境観測のシステムの構築に向けた基礎資料を作成した。



2 みちのく北方漁船博物館

(2)「近代の文化遺産の修復に関する調査研究」では、栃木県野木町の重要文化財・旧下野煉化製造会社煉瓦窯で、煉瓦の劣化状況調査と保存対策に関する調査を行った。海中から引き上げられた第五福竜丸のエンジンの保存処置を行った。航空機に関しては、航空自衛隊入間基地、

靖国神社、日本航空整備工場などに保管されている機体の修復材料・方法などの調査と環境測定を行った。また、船舶に関しては、みちのく北方漁船博物館はじめ関連博物館を調査した〔図2〕。近代の文化遺産特有の問題を研究するために国内外の研究者を招いて研究会を行った。そのテーマと開催年は次の通りである。

- 1998（平成10）年 煉瓦の保存について
- 1999（平成11）年 航空機の保存・修復について
- 2000（平成12）年 船舶の保存・修復について

（3）「漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査研究」では、文化財の金属表面にほどこす焼付漆の工法について技法の調査を行った。この研究では、焼付温度を変えながら銅板に焼付けて密着性、硬度、平滑性などとともに物性の変化を調査した。その結果、密着性については120℃で4時間の焼付時間の場合がもっとも高いことが判明した。また、硬度の変化では焼付温度の高いものが、硬い塗膜になることがわかった。これらの研究をふまえて、18世紀後半の輸出漆器である蒔絵ブラックの製作工程の復元手板の作成を行った。

（4）「近世輸出工芸品の実証的研究」は、国際文化財保存修復協力センターで行っている「在外日本古美術品保存修復事業」で海外に所在する日本の輸出工芸品が修復のために里帰りをする機会をとらえて、材料及び製作技術の調査、様式の変遷など国内工芸品との比較研究を行った。また、海外から3人の専門家を招聘し、以下の通り研究発表会を開催した。

- 「ポーランドにおける日本の工芸品の保存について」：ドロータ・ロス・ミエレッカ（ナエドロ国立博物館東洋部長）
- 「リンデン美術館の東洋コレクションについて」：クラウス・ヨアヒム・ブランド（リンデン美術館東洋部長）
- 「初期の日蘭交易（長崎商館長日誌より）」：シンシア・フィアレ（ライデン大学調査員）

（5）「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」では、第2期の保存修復のための情報をコンピュータ入力してデータ管理システムを立ち上げたが、第3期では美術情報並びに図面表示の出来る簡易写真測量図化システムの開発と操作研究を行った。

第4期 2001（平成13）年～2007（平成19）年

文化庁の施設等機関から独立行政法人に移行した2001（平成13）年からは、5年間の中期目標に基づき、下記の通り中期計画プロジェクトを進めた。

- (1) 「近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究」
- (2) 「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」
- (3) 「伝統的修復材料に関する調査研究」
- (4) 「レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究」
- (5) 「焼損文化財の保存修復に関する研究（2003年3月までの2カ年）」
- (6) 「文化財の防災計画に関する調査研究」（2003年4月～）
- (7) 「在外日本古美術品保存修復協力事業」
- (8) 「国際研修『紙の保存と修復』及び『漆の保存と修復』」
- (9) 「敦煌莫高窟壁画保存修復に関する調査研究」

2006（平成18）年4月には、新たな中期目標の策定に伴う業務見直しが行われ、下記の通りプロジェクトが進められた。

- (1) 「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」
- (2) 「文化財の防災計画に関する調査研究」
- (3) 「伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究」
- (4) 「近代の文化遺産の保存修復に関する研究」
- (5) 「国際研修『紙の保存と修復』及び『漆の保存と修復』」
- (6) 「在外日本古美術品保存修復協力事業」

「近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究」は、1998（平成10）年に開催された第22回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「近代の文化遺産の保存と活用」から引き続き行っており、航空機・船舶・鉄道及び鉄道施設・大型構造物など毎年テーマを替えて、保存活用に関する欧米の事例を調査するとともに、我が国の現状把握のための現地調査を行った。特に欧米における情報収集に関しては、ドイツ技術博物館と共同研究の覚書を交わして研究者の交流を行った。さらに、重要文化財・0.5t及び3t スチームハンマー（旧横須賀製鉄所設置、1865年、オランダ製）や屋外展示航空機資料（かかみがはら航空宇宙博物館）に関しては、その保存状態の把握、より良好な保存方法の提案のために環境計測を実施するとともに、防錆塗装に関する現地試験を継続して実施した。特に二式大艇に関しては、船の科学館に屋外展示されていた時代から観測を継続し、海上自衛隊鹿屋航空基地への移転に関して貴重なデータを提供することになった〔図3〕。



3 二式大艇



4 厳島神社大鳥居

また、「近代の文化遺産の保存及び修復に関する研究会」では、海外で近代の文化遺産の保存修復に携わる研究者・修復技術者や、同領域で活躍する我が国の研究者・修復技術者・ボランティアなどを招聘し講演・議論を行った。その成果は和文報告書『未来につなぐ人類の技』（2000年～）をシリーズとして刊行するとともに、英文でも報告書を刊行した。

「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」では、屋外環境下にある石造文化財・木造建造物を対象に、劣化現象を把握するための周辺環境計測を行うとともに、劣化の進行を妨げるため環境制御方法や耐環境性の強い修復材料の開発を行った。

石造文化財では国宝・白杵磨崖仏及び重要文化財・熊野磨崖仏を対象とし、主な劣化要因について周辺環境の影響を確認するための現地観測を行った。特に凍結破砕に関しては、白杵磨崖仏において2001（平成13）年1月の大寒波到来で多数の凍結破砕による表面崩落が起きて以降、より詳細な調査を行うこととなった。またその一環として、より寒冷な環境にある碓氷峠鉄道施設の煉瓦構造物でも同様の観測を実施した。その結果、劣化現象と周辺環境の関係について計測データから確認が出来るようになり、環境制御など有効な劣化防止策の立案が可能となった。また、基質強化剤や撥水剤などの修復材料を屋外環境下で使用する場合、気温や表面含水率などが大きく影響することを確認し、同様の修復において周辺環境を把握する重要性を広く周知することとなった。

木造建造物では、臨海環境下にある厳島神社〔図4〕を対象に、神社や回廊の柱・高欄の鉛丹塗装の変退色について、試験片を作製し室内実験及び現地曝露試験を行った。また、退色状況の観察や木材水分量測定など現地観測による原因究明を行った。その結果、鉛丹塗装の退色過程や変退色した柱の平面分布特性などが明らかとなった。

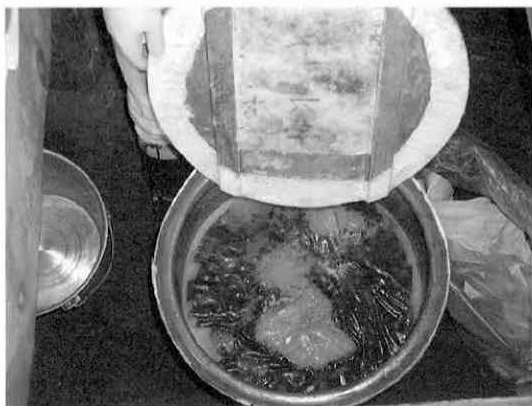
日光二社一寺では、世界文化遺産登録後にユネスコより義務付けられた保存環境モニ

タリングの実施に向けて、気象環境や環境汚染物質濃度の観測方法、取得データを報告書にする方法などの所有者や管理者への技術移転を行った。現在では、管理者である日光市が現地観測及び報告書作成を自前予算で実施している。この結果は、地方公共団体の文化財保護担当者が保存環境モニタリングを持続的に行えること、またモニタリングを行うことでより積極的に文化財保護に関わる体制作りが可能なことを示しており、今後多くの文化財へ適用出来ると考えている。

また、「周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究」は、韓国国立文化財研究所との共同研究でもあり、1996(平成8)年から研究者の交流を開始した。また、2002(平成14)年より、毎年1回のペースにて日韓交互で研究報告会を開催し、発表・議論により両国の研究者が情報交換出来るように改めた。さらに、両国で類似したサイトを選定し、共同で現地調査を行うとともに得られた成果の比較を行った。その結果、石造文化財の覆屋(韓国では「保護閣」と定義)の環境性能評価などに関して多くの共同成果が生まれた。

「伝統的修復材料に関する調査研究」では、文化財修復材料について製造法・適用法などを調査研究し、適正な文化財修復を行うための基礎を築くことを目的とした。伝統的修復材料の製法・使用技法・材料物性などの研究から、伝統技術を記録しその有効性について科学的な検証を行った。また、得られた結果をもとに、現在の環境も踏まえてより文化財修復に適した技術や材料の開発も行った。2006(平成18)年4月からは、業務見直しにより「伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究」と名称を変え、文化財修復材料としての合成樹脂について過去の事例の再評価等の研究が加わった。

その結果、修復現場で使われる糊や膠などの接着剤・膠着剤の物性が明らかとなり、特に親水性材料はその強度が湿度など修復後の保存環境の違いに大きく影響されることが



5 古糊

が明らかになった〔図5〕。紙に関しては、本紙の調査方法の開発と修復紙の最適化という観点から研究を進め、適切な修復紙の選択を行うための本紙の調査方法を検討し、基礎データの収集を進めた。焼付漆に関しては、耐候性試験を中心とした研究を行い、天然漆及びウレタン変成漆の焼付に関して有効なデータを得た。

得られた成果は報告書『伝統的修復材

料に関する調査研究』1～5(2002～2007年)を刊行するとともに、「伝統的修復材料に関する調査研究会」を通じて、伝統的修復材料を取り扱う技術者などへの周知を行った。また、調査研究で得られた成果と交流をもとに、2005(平成17)年に第35回文化財保存修復研究協議会「伝統的日本画修復材料への科学的アプローチ—近年の動向—」を開催した。伝統的であるが故に歴史の中で変化してきた絹、紙、接着剤について、製法の現状や、現時点における使用上の注意点などを科学的・技術的側面から再検討を行った。

「レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究」では、木造仏の寄木部分に付着した麦漆、彩色のある漆喰の汚損、石造文化財(特に大理石)の汚損を対象にクリーニング実験を行った。赤外線レーザーは黒色物質に反応することが知られており、麦漆など黒色を呈する接着剤、彩色のある漆喰の黒色斑点、大理石に付着した環境汚染物質などは、レーザークリーニングが有効であると考え、室内実験を行った。結果、麦漆に関しては、そのものの除去は成功したがレーザー照射部が焼け焦げ木造文化財への使用には注意が必要であること、彩色のある漆喰の汚損に関しては、その原因となる2種類のカビへは過酸化水素水と比較しても同様の分解効果が得られたものの、彩色への影響が大きいことも同時に判明した。その中で、大理石のクリーニングに関しては、韓国国立中央博物館で展示の敬天寺址十層石塔(国宝第58号)の保存修復工事で使用する中で、他の方法と比較して安全性が高いこと、後処理が簡便であることが明らかとなり、同種の文化財での有効性を確認した。

「焼損文化財の保存修復に関する研究」では、焼損した木造文化財の合成樹脂による表面強化について実験による評価を行った。また、合成樹脂の含浸方法では、刷毛による塗布や樹脂溶液への浸漬など従来の方法のほかに、減圧含浸による実験を行った。試験片の電子顕微鏡写真による比較などから浸透性の評価を行った結果、アクリルエマルジョンを減圧含浸する方法が最も浸透性が高く表面強化に効果的であることを究明した。成果については報告書『焼損文化財の保存修復に関する研究報告書』(2003年)として刊行した。

「文化財の防災計画に関する調査研究」は2003(平成15)年4月より始まった。建造物文化財の多くが木造である我が国では、火災による被害が多いため世界でも先進的な文化財防火技術を有する。しかし、1995(平成7)年1月の阪神・淡路大震災で多数の

文化財が毀損被害を受けたこと、また地震だけではなく台風や豪雨により広域な文化財被害が観測されることで、広範囲での文化財防災計画を立てる必要が出て来た。そこで修復技術部では、大規模な自然災害による広範囲の文化財被害を早急に把握し、合理的な応急対策が可能となるよう、地理情報システム（GIS）を用いた文化財防災情報システムの開発を行った。また、文化財防災情報システムと台風経路や活断層マップなど災害情報を重ね合わせることで、被災文化財の地理的傾向や地震被害を受ける確率などが明らかとなった。さらに文化財防災情報システムに各文化財の毀損・修理履歴の項目を追加し、災害による文化財被害の時系列把握を可能とするとともに、平常時にも有効な情報が提供出来ることで地方公共団体担当者などの文化財管理者が使用出来るようにした。

文化財の保存修復に関する研究分野では、被害を受けた文化財についての原因究明も重要であるが、同様の災害で被害がない、もしくは軽微で済んだ文化財について、その理由を考察することも重要である。例えば五重塔では、火災により焼失した谷中五重塔、台風により倒壊した四天王寺五重塔という例はあるが、大地震により被害を受けた例は皆無である。そこで、五重塔を対象に常時微動測定を行うことでそれらの振動特性の把握を試みた。

また、文化財防災に関する先行研究例を収集するとともに、文化財防災の大切さを広く一般に知らせるため、「文化財の防災計画に関する研究会」を開催した。現在までに3度の研究会を開催した（「第1回—文化財防災への道—」、「第2回—震災から文化財をまもる—」、「第3回—震災から美術工芸品をまもる—」）が、その中で災害による文化財被災状況、被災した文化財の救援活動、行政や美術館・博物館における危機管理、消防署などによる地域での取り組みなどについて講演・討論を行うことで、文化財防災に関する情報を広く国民に周知し、文化財防災に関わる人々のネットワークをつくることが出来た。

「在外日本古美術品保存修復協力事業」は、1991（平成3）年より絵画を対象に、1997（平成9）年より工芸品も対象を広げて、海外の美術館・博物館への協力を行ってきた。2001（平成13）年から修復技術部の担当となり、修復内容の検討、修復作品の写真記録の作成や整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たった。2007（平成19）年3月末までに、絵画177点、工芸品146点を修復し、無事所有者へ返却した（各年度の事前調査及び修理事業については、『資料編』67～76頁参照）。

預かった作品の修復内容や歴史については、和文・英文で記載された『在外日本古美

術品保存修復協力事業報告書』を毎年刊行し、広く国民に公開した。また、在外日本古美術品の修復を通じて得られた新しい知見などは、第32回文化財保存修復研究協議会「近世輸出工芸品の保存と修復」(2002年)などにおいて報告を行った。



6 国際研修「漆の保存と修復」研修風景

「国際研修『紙の保存と修復』及び『漆の保存と修復』」は、ICCROM との共催事業である。1999(平成11)年は漆をテーマに開催し、その後は紙と交互にテーマを変えて研修会を行った〔図6〕。それぞれのテーマについて、材料や技法などの基礎知識、基本的な取扱い方法について、講義及び実技から学んでもらうとともに、エクスカージョンで産地や修復現場を視察し、我が国での保存修復の実際を理解してもらった。1992(平成4)年の研修開始以降、紙コースでは103名、漆コースでは34名の受講者を輩出し、基礎知識を持つ海外学芸員のネットワークが世界中に広がりつつある(各研修の詳細については、『資料編』207～215頁参照、口絵掲載)。

「敦煌莫高窟壁画保存修復に関する調査研究」は、敦煌研究院保護研究所との共同研究も第4期となり、修復技術部が担当して壁画修復に関する調査研究を行った。主に、「壁画修復履歴管理システムの構築並びに運用」、「壁画修復材料の試験施工と改良」、「日中壁画修復用語集の刊行」、「光学的方法による壁画彩色技法の調査方法に関する研究」についての調査研究を実施し、2004(平成16)年及び2005(平成17)年夏期に第53窟の壁画修復を実施した(2003年は重症急性呼吸器症候群(以下、SARSとする)を原因とする渡航自粛により中止した)。研究成果は、2004(平成16)年に開催された国際シンポジウム「Conservation of Ancient Sites on the Silk Road - Second International Conference on the Conservation of Grotto Sites(邦題:第2回洞窟壁画保存に関する国際研究集会—シルクロード古代遺産の保存)」などにおいて一部を公表するとともに、2006(平成18)年3月に刊行した報告書『敦煌莫高窟壁画保存修復に関する日中共同研究2005』において総括した。

また、プロジェクトでは敦煌研究院保護研究所より研究員を受け入れ、1ヶ月程度の研修を実施した。初期は、「壁画修復材料の試験施工と改良」の室内実験を行うための試料作製や実験遂行が主な研修内容であったが、我が国の修復技術者が実際に敦煌莫

高窟の壁画修復に携わることとなり、修復に関する考え方の中での相違を埋めるため、2004（平成16）年より我が国の文化財修復現場の見学を研修プログラムに加えた。

3 文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

修復技術部では、過去に6度「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」を担当した。調査研究事業や文化財保存修復研究協議会の成果などを海外へ情報発信すること、また海外の事例を国内へ紹介することを目的に題目を設定し、国内外の招聘講演者による講演・討論を行った（各会のプログラムは、『資料編』127～180頁参照）。

第1回「木の保存」 1977（昭和52）年11月24日～28日

第1回目の題目は「木の保存（Conservation of Wood）」としたが、これは我が国にある文化財の特徴や保存修復に関する先進的な思想・技術を世界に発信するのに「木」というキーワードを外せなかったからである。会議では、海外6名を含む12名の講演者による講演・討論が行われた。我が国からは、

「木造建造物の構造的補強」

「日本における木造建造物の保存及び修復における原則」

「木造文化財の生物劣化とその防除」

「合成樹脂による劣化木材の強化及び修復」

「日本における彫刻品の保存」

「平城宮跡から出土した水浸木材の保存処置」

について講演を行い、多種多様な我が国の木製文化財に関して、保存修復の理念や技術・材料に関する先進事例を発信した。また、海外講演者からは、

「歴史的建造物の劣化した木質部材の構造的修復」（カナダ）

「ダッカ博物館にある大きな水浸木材の保存処置に関する問題点」（バングラデシュ）

「家具を含む木工芸品について」（タイ）

「インドにおける木工芸技術」

「インドネシアにおける木製遺物の保存について」

について事例報告があり、木製文化財をめぐる海外の状況についても情報共有が行われた。また会議後は、奈良・京都の木造建造物や木造彫刻の修理現場などを訪問し、我が国の現状を理解する機会とした。

第6回「木造文化財の保存に関する国際研究集会」 1982（昭和57）年11月1日～6日

第6回の題目は「木造文化財の保存に関する国際研究集会（The Conservation of Wooden Cultural Property）」で引き続き「木」に関する研究集会となった。これは、1980（昭和55）年に開催された第21回ユネスコ総会において、翌年から3年のうちに木材の保存に関する国際シンポジウムを開催するとの提案がなされたこと、また木材の保存修復に関する定期研修コースの開催準備も兼ねていたことによる。そのため、この回の研究集会は当研究所とユネスコの共同主催となった。

基調講演は文化財保護審議会の関野克が「日本における木造建築の様相」という題目で行い、我が国の伝統的木造建築及びその技術を紹介し、それらは将来に残すべきものであると指摘した。我が国からはその他にも、桧や杉など我が国の木材の特徴や、木造彫刻や木造建築の修復、合成樹脂による木造文化財の修復に関する発表が行われた。さらに海外からは、スイス・韓国・オーストラリア・インドネシア・パキスタン・ノルウェー・英国・ブルガリアの木造建築物や、メキシコ・インド・フィンランド・フランス・ネパールの博物館所蔵品としての木材について保存修復事例の報告が行われた。最後、我が国や欧州における木造文化財保存修復のための研修方法について報告がなされたのち、今後我が国で開催予定の木材保存技術の国際研修について議論が行われた。

第13回「金属文化財の保存と修復における今日の問題」 1989（平成元）年10月4日～6日

第13回は「金属文化財の保存と修復における今日の問題（Current Problems in the Conservation of Metal Antiquities）」を題目に開催した。ここでは特に出土金属遺物の保存修復を取り扱ったが、土中における腐食過程の解明が不十分であったこと、腐食における塩類の挙動と修復における脱塩処理方法の開発が強く求められていたからである。セッションは、ウィリアム・オディ（大英博物館）「ヨーロッパにおける金属遺物の歴史及び保存の展望」や樋口清治「日本における出土鉄器修復処置の変遷」から始まり、出土金属遺物の構造や腐食メカニズム、安定化や脱塩処理など保存修復に関する先進事例の報告が行われた。また、総合討論により出土金属遺物の保存修復に関する欧米と東アジアとの交流が促進される結果となった。

第17回「漆文化財の保存」 1993（平成5）年11月10日～12日

第17回は「漆文化財の保存（Conservation of Urushi Objects）」を題目に開催した。これまでヨーロッパをはじめとする海外に日本で作られた漆芸品が数多く輸出されたことは知られていたが、この研究集会がこれらの海外における現状と、今後の取り扱いを含

めた保存修復をどうするかについて、日本から情報発信する初めての国際的な機会となった。セッションでは、現在、日本製漆芸品をコレクションとして所蔵している国々における現状と課題がまず提示され、日本との環境の違いや伝統的な修復理念に関する考え方の違いなどが浮き彫りとなった。また、ドイツなどの伝統的な塗装法や事前の分析調査などの方法も報告された。その上で、日本における漆と漆芸品の歴史、漆工技術、漆塗料を用いた日本の伝統的な漆芸品の保存と修復方法など多岐に渡って報告された。いずれにしても、この研究集会は、海外における漆芸品を取り巻く現状把握と日本の漆工品と伝統的な保存修復の方法に関する基本的な共通認識を国内外の参加者が共有するよい機会となった。

第22回「近代の文化遺産の保存と活用」 1998（平成10）年11月4日～6日

第22回は「近代の文化遺産の保存と活用（Conservation of Industrial Collections）」を題目に開催した。近世までの文化財と違い多種多様な材料を使い、規模も大きい近代の文化遺産の保存と修復、また活用について、ヨーロッパの事例の報告も交えながら、日本における各種の取り組みが報告された。建造物から機関車、飛行機、産業機械と動産、不動産を含めその保存の理念の確立、手法の開発、活用のあり方など、日本では始まったばかりといってもよい近代文化遺産の保護に関して問題提起がなされ、その解決方法が議論された。

第27回「漆が語る国際交流—海を渡った文化財情報—」 2003（平成15）年12月3日～5日

第27回は「漆が語る国際交流—海を渡った文化財情報—（The Role of Urushi in International Exchange）」が題目であった。これは、第17回「漆文化財の保存」において我が国の漆芸品の修復技術を海外へ情報発信してから10年が経過したとことと、その後、ICCROMと共催で「漆の国際研修」が行われるようになり漆文化財の修復技法に関して深い知識を持つ海外の修復技術者が増えたことで、より先進的かつ正確な情報を提供することを目的に開催された。前回の第17回の国際研究集会では、主に海外に所蔵されている漆芸品の現状把握と、日本の漆と漆芸品の歴史や伝統的な漆芸品の保存修復の方法や技術を海外へ情報発信することが主目的であったが、本国際研究集会では、ヨーロッパ圏を中心として日本の伝統的な漆工技術や漆芸品の歴史に関する基礎知識を十分有した講演者たちによる在外の日本製漆芸品の歴史的もしくは美術史的な研究成果の報告や、保存修復の実際に関するレポート、さらには日本とヨーロッパの伝統的な保存修復技術の調和を模索するマゼランチェストのプロジェクトの開始など、この点は国際研

修を積み重ねてきた成果である。

4 科学研究費による研究・受託研究・共同研究

科学研究費による研究

第1期では、出土金属製品のクリーニングや漆芸技法の実証的研究など、一般研究に付随するテーマで科学研究費の交付を受け研究を進めていた。その中でも、「古美術、古建築の主要材料である木材およびその化粧材料、接着剤の劣化と修復処置後の耐久性強度に関する研究」(1976～1978年度)や「古建築保存処置へのシランカップリング剤の応用」(1980年度)などは、合成樹脂の文化財修復への使用に関して検討が行われた。この時期は、文化財修復に合成樹脂が多用されたが、これらの研究成果に基づいていたものと考えられる。

第2期では、中長期研究計画に付随するテーマに加えて、「在外日本美術作品の調査研究と内外の研究交流の促進」(1988年度)や「中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究」(1988年度)など、その後国際協力プロジェクトを立ち上げるための事前調査として補助金交付を受けていた。その後、「在外日本美術作品の調査研究と内外の研究交流の促進」は「在外日本古美術品保存修復協力事業」へ、「中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究」は「敦煌莫高窟壁画保存修復に関する調査研究」へ発展した。また、1995(平成7)年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で数多くの文化財が被災したことにより、美術工芸品の防災について考え直す必要が出てきた。「美術工芸品の防災に関する調査研究」(1995・1996年度)は、博物館展示品などの美術工芸品に対してどのような耐震対策を講ずるかなどが網羅的に研究されており、成果報告書は現在でも文化財防災研究の基礎となっている。

第3期では、「中国河北省の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究」(2000～2003年度)や「大谷探検隊将来西域壁画の保存修復に関する総合研究」(2002～2004年度)など、中期計画プロジェクトの枠組みでは実施が難しい海外共同研究について研究所全体で取り組んだ。また、「文化財における複合素材の保存修復のための材料技法の開発に関する調査研究」(2002～2005年度)では、トヨタコレクションの調査研究を通じて、近世から近代につくられた複合材料からなる文化財について、その保存修復に関する様々な知見を得た。

受託研究及び共同研究

修復技術部では、文化財の修復に関する研究、科学的修復方法の開発研究とその応用を担当していたこともあり、文化財修復現場と密接な関係を持つことが多かった。その中で文化財の修復に関して、国や地方公共団体などからの要請により多くの受託研究や共同研究を実施した。

第1期は、文化庁の施設等機関として国指定文化財の修理に密接に関わっており、多種多様な文化財において、その修理に必要な材料・技術に関する研究を受託した。その中でも目立つのは、「国宝東福寺三門天井絵彩色保存処置の研究」(1973年度)や「重文名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置の研究」(1974年度)など彩色文化財の修復処置に関する研究、「(三重県立博物館保管)出土押出仏修復保存処置に関する研究」(1973年度)や「長野県指定重文桜ヶ丘古墳出土金銅天冠の保存処置の研究」(1974年度)など考古資料の修復処置に関する研究である。これらは、当時の一般研究や科学研究費による研究と強い相関があり、修復技術部が、文化財保存修復の研究分野のうち、主に「臨床」を請け負っていたことを示している。

第2期からは、加えて「風邪引き紙の保存研究」(1989～1991年度)や「絹の劣化度の非破壊計測に関する研究」(1994年度)、「装飾材料の生化学研究(岡墨光堂)」(1995・1996年度)など、装飾技術や材料に関する調査研究を受託するようになり、装飾技術や材料の発展に寄与した。また、「重要文化財・鶴岡カトリック教会天主堂擬ステンドグラスの保存研究」(1994年度)や「重要文化財旧札幌農学校演武場(時計台)塗装の研究調査」(1995年度)など、近代文化遺産の保存修復に関する研究も受託しており、ここでの成果は中期計画プロジェクト「近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究」へと発展した。

第3期では、中期計画プロジェクト「在外日本古美術品保存修復協力事業」において



7 高松塚古墳の解体に伴う壁画養生

工芸品の修復を受け入れるようになり、同時に我が国にある漆工品の保存修復に関して受託するようになった。また、「特別史跡高松塚古墳壁画保存対策等調査業務」(2005年度～)では、高松塚古墳の石室解体において壁画養生や側石の隙間に被る壁画漆喰の取り外しなどを指導し〔図7〕、2007(平成19)年に石室が解体され、国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設

へ移動したのちは、病害調査やクリーニング材料に関する実験を進めた。さらに、「特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務」(2005年度～、口絵掲載)では、石室内の壁画取り外しに際して、必要な材料・技術に関する室内実験の実施や実際の取り外し業務における指導助言を行った。また、取り外した漆喰片の再構成・クリーニングに関しても指導助言を行った結果、完成したものから飛鳥資料館の特別展にて展示公開出来るようになった(2006〈平成18〉年には四神のうち白虎像、2007〈平成19〉年には玄武像が公開された)。

4 文化遺産国際協力センター

はじめに

世界各国に存在する文化財は、国や地域を越えて人類共有の財産として認識され、多くの人々がその価値を享受する権利とともに、国際協力の下にそれらを守る義務をも果たせられている。多様で豊かな文化財を有し、100年以上に及ぶ文化財保護の歴史と充実した保護制度を持ち、保存・修復のための科学的研究と技術を発展させてきた日本が果たすべき役割は大きく、世界各国からの協力要請も年々増加している状況にある。

当研究所の前身である東京国立文化財研究所は、1990（平成2）年に「アジア文化財保存研究室」を設置し、3年後にはこれを「国際文化財保存修復協力室」と改称し、1995（平成7）年に至り「国際文化財保存修復協力センター」に改組して体制を充実させてきた。2001（平成13）年の独立行政法人発足にあたっては、奈良文化財研究所国際遺跡研究室との間に、独立行政法人文化財研究所の国際関係活動の全般について連携協力する体制がとられた。さらに、2006（平成18）年には「文化遺産国際協力センター」と改称し、世界各国の文化財の保存・修復に関する国際協力の我が国における中心的な存在として活動している。

1 2006（平成18）年までの調査研究

（世界、特に）アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

日本を含むアジアの文化財は、アジア固有の素材により作られ、独特の自然環境の中で伝えられ、伝統的手法により保存・修復されてきた。そのため、アジアの文化財の修復材料や修理方法などに関する調査研究において、その基礎となる文化財そのものの材質、周囲の自然条件などに関する情報収集は課題であった。本プロジェクト「アジア諸国における文化財保存に関する情報の収集」は1990（平成2）年のアジア文化財保存研究室発足と同時に始まり、(1) 文化財の劣化状態及び保存対策の調査、及び(2) 文化財保存に関わる組織、機構、プロジェクト等の調査、が実施された。

(1) としては、インドネシア・ボロブドゥール及びブランバナン付近の遺跡の現地調査、韓国・ソウル及び慶州の石造文化財に関する韓国国立文化財研究所との共同調査、タイ¹⁾

の文化財などに関する現地調査が行われた。

(2) として、当研究所を訪れた各国の文化財保存の関係者からの聞き取り調査や、文化財の保存修復に携わる国内外の人材・文化財保存修復に携わる機関に関する情報収集が実施された。諸外国の文化財保存修復関連機関の情報は、センターのウェブサイトで「各国の文化財保護関連ウェブサイトリンク集」として公開されている。また、日本の文化財保存修復国際協力事業の現状と問題点に関して、国際文化財保存修復研究会（別項参照）での事業に関する事例紹介の情報が項目ごとに整理・分析され、論文としてまとめられた²⁾³⁾。

さらに、(1) 及び (2) の両方の内容について、アジア文化財保存セミナー（別項参照）に出席した文化財保存修復に携わる各国の専門家に対してアンケート調査が行われ、報告書及び論文としてまとめられた⁴⁾⁵⁾⁶⁾。

1993（平成5）年4月、アジア文化財保存研究室の国際文化財保存修復協力室への改組に伴い、本プロジェクトは「世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集」と改称され、2000（平成12）年度まで継続した。なお、本プロジェクトに関連して、科学研究費「世界の文化財の保存—わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—」の交付を受けた。本プロジェクトで収集された情報は適宜更新され、現在まで各国の文化財保存に関する基礎情報として活用されている。

- 1) 西浦忠輝『石造文化財保存調査報告書—大韓民国（ソウル・慶州）—』（東京国立文化財研究所アジア文化財保存研究室、1991年5月）
- 2) 二神葉子・西浦忠輝「我が国の文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点（Ⅰ）—国際文化財保存修復研究会からの知見（1）—」（『保存科学』38、1999年3月）
- 3) 二神葉子・西浦忠輝「我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点（Ⅱ）—国際文化財保存修復研究会からの知見（2）—」（『保存科学』40、2001年3月）
- 4) 西浦忠輝『アジア文化財保存に関するアンケート調査—結果と考察—』（東京国立文化財研究所アジア文化財保存研究室、1992年3月）
- 5) 西浦忠輝・二神葉子「アジア諸国における文化財保存の現状—アンケート調査の結果と考察—」（『保存科学』33、1994年3月）
- 6) 二神葉子・西浦忠輝「アジア諸国における文化財保存の現状—アンケート調査の結果と考察〈2〉—」（『保存科学』37、1998年3月）

文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究

[経緯]

レンガは、泥を直方体に整形して乾かして得られる日干しレンガと、さらに焼成して

得られる焼成レンガとに大きく分けられるが、いずれも世界共通の文化財材料であると言える。しかし、湿潤気候下の日本には日干しレンガで造られた文化財は、実質上皆無に等しく、また焼成レンガで造られた文化財も非常に少ない。これは、関東大震災によってレンガ造建築物が集中的に破損を受けたことから、レンガは地震に弱いという認識が一般に持たれ、それ以降レンガを構造体とする建物が殆ど造られなくなったことに象徴されるように、我が国の気候・風土にはあまり馴染まない材料だったことが一因と考えられる。このため、文化財の保存修復に関する研究が年々盛んになる中で、レンガの保存に対する研究は日本ではあまり行われて来ていなかった。

しかしながら、文化財の保存修復に関する国際協力が推進されるにつれて、レンガの保存に関する問題に直面するケースが飛躍的に増え、それに対する対策の要望が増してきた。このため、世界各地の文化財保存に協力することを目的として、レンガの劣化現象と保存対策に関する研究がスタートした。

本研究は、1991（平成3）年度に始まる、「屋外石（レンガ）造文化財の保存修復処理に関する研究」に起源を持つ。当初はレンガ造ばかりでなく、石造も含めた屋外文化財を広く対象とした研究が行われ、これは2000（平成12）年度まで続けられた。一方、石やレンガで出来た屋外文化財の保存という視点ではなく、文化財材料としての一つ一つのレンガに注目し、その劣化現象と保存対策に関する研究が「文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究」として1994（平成6）年度年から始まり、それが2005（平成17）年度まで続けられた。

1999（平成11）年1月14日には、第28回文化財保存修復研究協議会として、「レンガ造文化財の保存修復」のタイトルで研究会が行われ、研究成果の発表と成果の共有が図られた。また、科学研究費「タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処理に関する調査」、「タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査」、「タイ国・アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究」も、当該研究と密接に連携した形で行われた研究である。それぞれにおいて報告書が刊行されるとともに、研究終了時の2006（平成18）年3月には、それまでに得られた研究成果を網羅する形で、『文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究成果報告書』が刊行された。

〔研究成果〕

国外のレンガ造遺跡として、タイ・アユタヤ遺跡にあるマハタート寺院について調査を行った〔図1〕。同寺院内には、レンガ造の建物が多数あるが、そうした建物のレンガ壁は、一般に脆弱化して下部が抉られたように凹んでいる場合が多い。その原因について検討したところ、主として塩類の析出によってレンガが傷んでいる（塩類風化）こと



1 アユタヤ遺跡での調査（1999年、タイ）

が明らかにされた。そこで、その塩類析出の要因について検討したところ、地下水の影響は少なく、雨水がレンガ造構造物内に浸透することが主原因と判断された。このことから、当該構造物の表面を撥水処理し、雨水の浸透を防ぐことが塩類風化を軽減する保存対策となり得ると考えられた。

しかし、実際の建物で対策を実行することで、かえって弊害を引き起こす可能性も懸念されたため、遺跡近くに当該構造物のミニチュア模型を造り、その表面を撥水処理して経過を観察し、その効果と弊害を検証した。結果的に効果は十分に確認され、弊害も僅かに認められたものの対処可能なものであったため、実際のレンガ造構造物において同様の処置を行い、弊害が引き起こされないような対策も行った。

その後、処理後の状態観察を行い、効果は得られており、また大きな弊害も起きていないことを確認した。さらに、壁面状態を検証した結果、処理以前に比べて処理以後の方が、壁面の傷みが少ないことも明らかとなった。もちろん、これまでのところは効果が認められているだけで、今後弊害のようなものが遅れて起きてくることがないか、またこの効果がいつまで持続するのか、といったことは検証していく必要がある。それでも、本研究で行った保存対策は、傷んだレンガそのものに対する働きかけではなく、その傷みを引き起こした原因に対する働きかけで対策を試みている点に新規性を持つものであり、同様の問題を抱える他の遺跡に対しても、応用可能な対策となることが期待される。

一方国内では、類似した塩類風化を起こすレンガ造文化財として、栃木県野木町にある旧下野鍊瓦窯の状況について検討した。その結果、風化は確かに塩類の析出が激しい箇所で行進しているものの、季節的に見れば塩類の析出量が最大になる冬場にはむしろ崩落が少ないことが確認された。これは、塩類の析出そのものが表面崩落を引き起こすわけではなく、一旦析出した塩類が潮解して水を含んで重くなることにより、崩落が引き起こされるためと考えられる。つまり、従来から言われているように「水が与えられるから塩類風化が起こる」というような単純な状況ではなく、むしろ湿潤と乾燥とが繰り返されることが塩類風化を生んでいると思われ、水を断ち切る言うよりはむしろ水の移動を軽減するような対策が有効と判断される。このことに基づき、同建物において塩類風化の著しかったレンガ壁を親水性樹脂で処理することにより、水の移動量を軽減

し、処理以前に比べて崩落量を四分の一程度にまで軽減することに成功した。この考え方は、他のレンガ造文化財の保存にも貢献するところが大きいと期待される。

また、江戸東京博物館にある「銀座煉瓦街遺構」についても検討した。これは明治に建てられた銀座煉瓦街の一部壁面を切り取り、博物館内に展示・公開しているものだが、状況から雨水や地下水の供給がないはずであるにもかかわらず、塩類が析出して表面崩落が続いていた。その原因について検討したところ、展示環境でも室内の湿度は季節変化を持つため、湿った季節にはレンガ壁が空気中の水分を吸い込み、逆に乾燥した季節には壁から水分が空気中に放たれるという、水分のやりとりがあることが判明した。つまり、内部から一方的に水が供給されているような状況ではないと判断されたことから、壁表面における水分のやりとりを軽減することが、劣化を軽減する対策として考えられた。ただし、これも対策を採ることによる弊害が懸念されるため、試験的に一部を合成樹脂により強化・撥水处理して、その効果と弊害とを検証した結果、一定の効果が得られ、弊害も認められないことが判明した。このことから、試験的に行った強化・撥水处理を、壁全面に対して行うことが保存対策となることが期待される。本事例では、空気中の水分との間でレンガが水のやりとりをするだけでも劣化が進行する事実と、またそれに対する対策を示すことが出来たため、他の事例に対する貢献が期待される。

なお、それ以外の現場として、碓氷峠鉄道施設と、旧日本煉瓦ホフマン式輪窯についてもレンガの劣化と保存対策について検討した。碓氷峠鉄道施設では、トンネルの入口を閉鎖して空気の流通を軽減することで凍結破砕を軽減出来る可能性を提示し、日本煉瓦においてはかつて造られた建物を覆う覆屋の存在が、レンガの劣化を軽減している効果について具体的に検証した。これらについても、他のレンガ造遺跡の保存対策を考える際に貢献可能と考えられる。

文化財の保存修復に関する国際共同研究

〔経緯〕

本研究は、1994（平成6）年度より始まる「文化財の保存修復技術に関する国際共同研究」に起源を持ち、当初は文化財の保存修復に用いられる修復材料に関する研究としてスタートした。文化財の保存修復には、合成樹脂などの修復材料が用いられるケースが多く存在し、もちろん修復材料とは言っても実用化までには様々な試験や評価がなされるが、例えば日本で開発された材料であれば、日本で用いられることを前提とした評価しかなされていない場合が多い。しかしながら、そもそもの文化財材料が異なることに加え、それが置かれている自然環境や文化的環境も異なる外国においては、日本では

有効だった材料が全く有効でないばかりか、逆に悪影響を与える可能性すら考えられる。従って、国際協力を推進する際には、そうした修復材料に関する新たな評価方法が必要とされる。このような観点から、2000（平成12）年度までは上記タイトルで、主として合成樹脂の物性評価の研究が進められた。

当初はタイとの共同研究として進められていたが、やがてカンボジアも対象地域に加え、2001（平成13）年度からは「文化財の保存修復に関する国際共同研究」のタイトルで、広く東南アジア一般を対象とした調査研究へと発展した。これに伴い、研究内容は修復材料の物性評価に限定されず、広く東南アジア地域の遺跡保存に関する総合的なプロジェクトとなり、それが2005（平成17）年度まで続けられた。なお、さらに2006（平成18）年度より開始された「アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究」へと引き継がれている。

当該研究の一環として、1999（平成11）年3月、2001（平成13）年9月、そして2004（平成16）年12月には、タイのバンコクで共同研究の成果報告会を開催するとともに、2003（平成15）年12月にはバンコクを中心に石造文化財保存専門家会議を行い、研究成果を広く公表し共有した。また、科学研究費「木造古建築の保存を目的とした外装塗装（丹色塗装）の物性評価」、「古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性」、「タイ国・スコータイ遺跡の劣化と保存修復対策に関する調査研究」も、当該研究と密接に連携した形で行われた研究である。それぞれの報告書が刊行されるとともに、2006（平成18）年3月には、それまでに得られた研究成果を網羅する形で、『文化財の保存修復に関する国際共同研究成果報告書』が刊行された。

〔研究成果〕

本研究は、当初は文化財の保存修復に用いられる合成樹脂などの物性評価に関する研究から始まっている。この段階の研究により、木造古建築の塗装コーティング材や、石造文化財の強化処理剤など、様々な修復材料そのものが持つ、粘性や強化力や耐久性に関する基礎的なデータが収集され、蓄積されていった。個々のデータは、当該報告書に掲載されて公表されているとおりである。

やがて、タイ芸術総局からの要請に応える形で、スコータイ遺跡にあるスリチュム寺院における共同研究が、1996（平成8）年度より始まった。同寺院には漆喰で表面が仕上げられた大仏が存在するが、かつてはあったと考えられる木造の屋根が現在は完全になくなってしまっているために、常に雨ざらしの状態になっていた。このため、本来は純白だったはずの大仏表面の大半が汚れて黒ずんだ状態になっており、信者やタイ政府からクリーニングの強い要望があった。しかし、クリーニングが行われて一旦は白色の

表面を取り戻したとしても、そのままではすぐに元通りの汚れがついてしまうことが容易に予想されたため、クリーニング後に表面が白色を保ち続ける方法についての共同研究が行われた〔図2〕。

まず、黒色の汚れの正体は、苔などを中心とする生物であることが判明し、その原因として水の影響が考えられた。た



2 スコータイ遺跡スリチュム寺院の大仏（タイ）

だしその水の起源としては、調査の結果従来言われていたような地下水の吸い上げなどの影響は殆ど考えられず、ほぼ雨水のみに起因することが明らかにされた。つまり、雨水が大仏に浸透することを防げれば、汚れの沈着は軽減出来ることになる。そこで、日本で同様なケースで実績を持つ撥水剤により大仏表面を処理することで、雨水の浸透を防ぐ対策が提案された。

以上に基づき、1998（平成10）年度に、まずタイ側によって大仏表面のクリーニングが行われた。これは、化学薬品を用いることなく、物理的に表面の汚れが除去されたものである。そののちに、日タイ共同で、大仏表面に当該撥水剤を塗布する処理が行われた。

その後、2000（平成12）年頃から、再び藻類をはじめとする植物が表面に繁茂し始めて問題視されてきた。これは、日本では実績を持つ撥水剤が、タイの環境下では完全には機能していないことが原因と判断された。そこで、そうした植物が生えにくくなる環境を考察する目的で、現地の気象計測、モデル構築物を用いた現地実験、そして試験的な薬剤塗布などを進めた。

モデル構築物による実験では、大仏と同様に漆喰で仕上げられた状態の柱に対して、屋根を掛けた場合と掛けない場合、そして撥水処理を行った場合と行わない場合の四通りのモデルを作り、水分の浸透や表面の汚れなどについて観察を続けた。その結果、屋根を掛けることによる効果が非常に大きく観察され、撥水処理の有無に関わらず屋根のあるもので含水率は低く、屋根のないもので含水率が高い傾向が認められた。また、表面の汚れについても、屋根を持つものの方が持たないものに比べて明らかに沈着が少ないことが確認された。ただし、屋根を掛けることによる弊害についても考慮する必要があるため、さらに他の方法も含めて最善の方向性を検討している。

その他、繁茂した生物を除去する薬剤についても効果を試験した。その結果、日本で実績を持つ生物除去剤は、タイにおいても有効であることが確認された。ただし、日本での耐久年数については実績があるものの、タイにおける耐久性に関しては全くデー

がない状態である。このため効果の持続期間について、さらに慎重に検証を行っている。

一方、カンボジアにおいては、2001（平成13）年度よりアンコール・シェムリアップ地域保護管理機構（APSARA）との共同研究として、タ・ネイ遺跡における調査研究を始めた。同遺跡では、建物を構成する砂岩やラテライトの石材表面に、苔類、藻類、地衣類などの生物が繁茂して問題視されていた。これに対して、各生物種を解析してその正確な種類やその生態を研究するとともに、現地の気象計測、表面沈着物のクリーニングと樹脂含浸による撥水処置、さらには薬剤による生物除去処理などの試験的な保存対策を検討した。まず、クリーニングについては日本で有効だったジェルパックによる方法がカンボジアでも適用可能であるものの、その後の撥水処理に関しては、日本で有効な材料が現地では十分に機能しないような状況も一部で認められているため、実際の遺跡の保存対策には慎重な対応が必要であろう。また、生物除去の薬剤はカンボジアでも有効であるものの、その耐久性についてはさらに検証が必要であると判断された。それぞれの成果は、2002（平成14）年12月にシェムリアップにおいて行われた、第7回バイオンシンポジウムや、各年度にシェムリアップで行われたアンコール地域保護・開発国際調整委員会の場で報告された（口絵掲載）。

また、2004（平成16）年度よりベトナム情報文化省との共同で、ミソン遺跡の調査を開始した。同遺跡は、レンガ造の建造物であり、現在までに気象計測を開始してデータを蓄積している。

文化財保存に関する国際情報の収集及び研究（ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例）

本研究プロジェクトは、海外の文化財及び文化財保存の現状、特に文化財保護に関わる各国の法律や文化財保存事業を行っている機関など、文化財保護制度についての情報を広く収集整理し、相互に比較して特長を明らかにし、日本の文化財保護制度に関する政策研究、文化財保存を通じての国際協力事業の進展に寄与することを目的とし、2001（平成13）年度から2005（平成17）年度の中期計画において、文化財保存に関わる法体系、組織などがよく整備されているヨーロッパ諸国からドイツ、イギリス、フランス、イタリア、ベネルクス諸国を対象に研究を行ったものである。

研究は、対象国における現地調査及び資料収集、対象国からの専門家招聘・研究会開催の成果などに基づいて行った。現地調査においては、中央及び地方政府を含む政府関係機関におけるインタビューに加え、文化遺産の保護の現場における運用の実態についても調査を行った。研究の成果は、各国ごとに報告書としテーマとめ、また収集した資料は文化遺産国際協力センター資料室に納め公開の便をはかった。

研究の結果、以下のことが明らかになった。

現在世界に普及している文化財保護制度が19世紀半ばにヨーロッパで始まって、1世紀半になる。この間に、社会システムの進展にともなって文化遺産の概念も拡大し、またその範囲が拡大していく文化遺産を保護していくための施策も各国で様々に工夫されてきた。20世紀初めの自然保護の動きに連動した天然記念物や優れた景観の保護制度の導入、戦後復興による特に都市の歴史的景観の破壊に抗しようとした都市政策に連動した歴史地区の保存制度の導入、あるいは都市域の大量の歴史的建造物の保存のための施策の拡充は、ヨーロッパ各国に共通してみられた動きである。

特に日本に比べて一桁も二桁も異なる圧倒的多数の歴史的建造物や美術コレクションの保存、そのための体制を誇るこれらヨーロッパ先進国の文化財保護制度は、常に日本の文化財保護制度の模範となってきた。

しかしそうしたヨーロッパ先進国における文化財保護をめぐる状況は大きく変わりつつある。かつてほどの成長率を望めない先進国の経済事情は、日本と同様である。文化財を活用した地域おこし事業の普及は地方政府にとって重要な政策事項であり、広がりつつある産業遺産の保存、農業景観の保存への視点はこれと連動している。

地域活性化のための各種施策と地方分権化施策も連動している。国の権力によるシステムティックな保存を進めてきたこれらヨーロッパの国々において、中央政府のスリム化と規制緩和、地方への権限委譲あるいは民営化の推進、また各種経済振興施策との連携は重要な政策事項であり、これにヨーロッパ連合が整えつつある各種政策との整合性の確保のための制度・組織の改変の必要が加わっている。ヨーロッパ連合が進める各種施策は、文化財の売買や、文化財に関わる経済活動の域内自由化に限らず、各国の文化財修理事業を国が認定する建築家・修復家、また埋蔵文化財調査機関などに制限していることの是非論なども含まれ、文化財・景観保護の政策分野にも確実に影響してきている。またユネスコなど国際機関が進める、例えば無形遺産条約や世界遺産条約などに関係する文化遺産保護関係施策の影響も無視出来ない。

調査研究を行ったヨーロッパ主要各国の文化財保護政策について、連邦制をとっているドイツを除きどの国においても、上記を背景にした中央省庁レベルでの制度及び組織の改変が急速に進行中であり、しかもまだどこもその終着点を見出していないことが確認された。

イギリスのように文化財の法定保護制度が不動産文化財のみで、地方公共団体が行う都市計画と密接に連携し、かつイングランドなどサッチャー政権時代に主要業務すべてを新設の特殊法人にアウトソーシングしてしまっているのはその先行例であるが、また

オランダでは同様の制度改変が現在進行中であるが、政府の中央集権体制による手厚い文化財保護制度の歴史を誇ってきたフランス、またイタリアにおいてもここ数年のうちに同様の傾向が進んでいることが認められたことは、ヨーロッパのこれらの国において19世紀に始まり世界に広がった文化財保護制度の歴史が良くも悪くも新たな転換点を迎えているという点で注目される。

特に、ヨーロッパの多くの国では指定や現状変更など国の文化財行政を担う国家公務員あるいはこれに類する職員が全国に網の目上に配置されており、そのことが、地方公共団体の教育委員会に事務の一部を委ね、国の地方組織を持たない日本と異なる特徴であったが、かつこの点においてフランス及びイタリアの制度がよく知られてきたが、しかしこれらの国においても、地方分権の流れのもとに、部分的にはあるが国の職員の監督権限が地方政府にも移されるようになったことで、国の文化財行政に地方政府の意志が反映されるようになっている。

また広く文化財の活用、特に時代の変化に伴って用途を失い空き家となってしまう文化財の処遇は、低迷する地方経済の振興策とも関連して、日本のみならずヨーロッパ各国政府にとって頭の痛い問題であり、その活用のための様々な工夫が政府レベルで、また民間レベルで進んでいる。これについては炭鉱など競争力を失って荒廃した産業地域を数多くかかえるドイツ、イギリスが重要な参考例となる。

本研究プロジェクトは、文化財保護制度の歴史にとって一つのターニング・ポイントが訪れていると考えられる現在において、これまで日本がお手本としてきたヨーロッパ主要各国の文化財保護制度の現状について情報を収集し、比較研究することで、ベンチマークとなる記録を残すとともに、わが国の文化財保護施策の今後を考えるための政策

研究に資する成果を残すことが出来た。

〔報告書〕

(1) ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例

〔ドイツ編〕 2002年

(2) ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例

〔イギリス編〕 2003年

(3) ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例

〔フランス編〕 2004年

(4) ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例

〔イタリア編〕 2005年〔図3〕

(5) ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例



3 「イタリアの文化財保護制度と活用事例」報告書（2005年）

〔オランダ編〕 2005 年

中南米諸国文化財保存修復協力事業—第1期 パナマの歴史地区の保存修復協力事業
中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明といった古代文明の遺跡、あるいはスペイン植民地時代の中世都市など、世界的に見ても価値の高い文化遺産が数多く残されている。これらの遺跡や歴史的建造物は、材質的に見れば木造・石造・レンガ造などであり、虫害や風化などの劣化が深刻に進行している。また、現代社会の発展や市民生活のあり方は、これらの文化遺産に対する人々の価値観を大きく変えようとしている。

アジア文化財研究室を前身として発足したセンターは、一貫してアジア各国の文化財保護に協力するための研究と事業を推進してきたが、2001（平成13）年度に始まった独立行政法人化後最初の中期5ヶ年計画において、初めて中南米諸国との協力事業を推進することになった。

「パナマの歴史地区の保存修復協力事業」は、1998（平成10）年11月にパナマ政府から日本外務省に対して出された「パナマ市歴史地区カスコ・アンティグオの復興計画に関する支援の要請」と、それに基づく外務省から当研究所への協力要請を契機として、結果的に当研究所が独自予算をもって実施したものである。これは、当初外務省と連絡をとりつつ外部資金を利用する方向で計画していたカスコ・アンティグオの建造物修復事業が、諸般の理由によって実施されないことになったため、この間同地区の修復・活用基本計画の策定作業を進めてきた当研究所が、2002（平成14）年2月にパナマ文化庁との間で共同研究及び交流のための合意書を交換し、自らの能力に応じた責任を果たしたのである。

5年間の共同研究と交流は、主に二つの内容として総括出来る。

その第一は、パナマ人専門家の日本への招聘・研修である。これは2001（平成13）年度から連続4年間実施した。この間に計5名の専門家が来日し、日本国内の重要文化財建造物の修理現場、文化財保護制度の枠外にある市民参加による建造物・町並み保存の現場等を視察し、日本の建築文化の特質、建造物の修復理念・方法の長所を理解し、パナマの建築保存、とりわけ木造建築の保存修復に適用し得る知識を習得して帰国した。うち1名については、この研修を契機として東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復建造物研究室への留学を実現した。

第二は、都市保存に関する国際セミナーの開催である。これは2002（平成14）年度から3年間連続で実施した。このうち2002（平成14）年と2003（平成15）年度は、カスコ・アンティグオ地区の保存に携わるパナマ人専門家の人材育成、地区住民を含むパ



4 パナマプロジェクト（山口県・萩市におけるワークショップ）

ナマ市民の町並み保存に関する啓発を第一のテーマとし、これまで情報交換がなかったアジアと中南米の専門家の交流をはかるということを目的として、パナマと日本の他にフィリピン、シンガポール、メキシコ、コロンビアの専門家をパナマシティへ招聘して実施した。2004（平成16）年度は、日本に会場を移し、萩市との共催で「歴史地区における木造民

家の保存、及び地域の再生—萩市における町並み保存と活用に学ぶ—」を開催した〔図4〕。来日したパナマ、メキシコ、フィリピンの専門家に日本の町並み保存の実例を紹介するとともに、この活動に熱心な萩の市民にアジア及び中南米における保存活動を紹介し、交流をはかった。

5年間の活動内容を総括して、2005（平成17）年度にはスペイン語と英語による報告書を作成し、パナマの他、セミナーに参加した各国に配布した。以上の活動によって、日本を含むアジア各国と中南米各国との交流が促進され、パナマの歴史都市保存に有効な情報を提供することが出来た。

当研究所としては、本来の目的であったカスコ・アンティグオ建造物修復事業そのものにかかる大きな資金を自前で調達することは困難で、この総括をもってパナマに対する協力事業を終了した。カスコ・アンティグオ建造物修復事業については、2004（平成16）年3月に、パナマ外務省からパナマ側の状況が改善されたということについて現地駐在日本国大使への連絡があったものの、結局事業復活に至っていない。カスコ・アンティグオ保存事務所は、当初計画で対象となった建造物2棟について、老朽化が顕著で危険な状態にあるため、パナマ政府の自己資金を調達し、独自に修復工事を開始している。この保存事業に5年間の交流の成果が少しでも反映されるならば、それがせめてもの幸いである。

中国文化財保存修復に関する調査・研究（龍門石窟の保存修復に関する調査・研究）

龍門石窟の保存修復に関する日中共同の調査・研究は、敦煌莫高窟における日中共同研究が開始されてから約15年を経て、当研究所としては二つめの中国文化財の保存修復に関する共同事業として始められたものである。

中国・河南省洛陽市に所在する龍門石窟は、中国三大石窟の一つに数えられる仏教石

窟寺院で、北魏時代から宋時代までに2千余の大小仏龕が開かれ、現存する仏像の数は10万体にのぼると言われている。また造像銘記約2800が現存しており書法芸術の宝庫としても知られている。2001（平成13）年12月にはユネスコにより世界文化遺産に登録された。しかし、この岩山はもともと無数の断層が走り、石質も場所によって精粗の差があり、風雪による温度・湿度の変化、断層を通して洞窟内へ滲出してくる水、結露水の発生など、長年にわたって厳しい自然環境にあったために、様々な傷みが生じている。

この貴重な仏教遺跡の保存に関して、当研究所はセンターを担当として龍門石窟研究院との共同研究・共同事業を実施した。その項目は、2000（平成12）年秋に始まる長期・短期の人材育成協力（運営交付金、文化財保護・芸術研究助成財団からの助成、国際協力機構 JICA からの要請）、2002（平成14）年に始まる高精細デジタルカメラによる写真撮影と画像データ管理システム構築の共同研究（文化財保護・芸術研究助成財団からの助成）、2001（平成13）年秋に始まるユネスコの文化遺産日本信託基金による龍門石窟保存修復事業への専門家及びコンサルタントとしての参加（ユネスコとのコンサルタント契約）である。運営交付金による調査研究は、2001（平成13）年度に始まる中期計画において「中国文化財保存修復に関する調査・研究（龍門石窟の保存修復に関する調査研究）」として実施され、2006（平成18）年度からの新中期計画においても2008（平成20）年度終了を目途に継続実施した。

これらは、それぞれに異なる財源によるものであり、また始められた契機も異なるが、龍門石窟の世界遺産登録とも重なり、まさに龍門石窟保護の機運の高まりとともに、当研究所に対する各方面からの篤い信任を得て開始されたものである。

1996（平成8）年11月、龍門石窟研究所所長劉景龍が当研究所に渡邊明義所長を訪ね、龍門石窟の保護に関して人材育成と共同研究の要請を行った。この要請に対して、渡邊所長は当時建設中の新館完成を目途に検討することを約束した。2000（平成12）年に新館落成と研究室の移転が完了したことを承け、渡邊明義所長は財団法人文化財保護振興財団（現、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団）に、龍門石窟に対する各種支援についての援助を要請した。要請に応じた同財団は、同年11月に始まる龍門石窟研究所保護技術處研究員の日本における長期研修（10カ月）についての助成を開始した〔図5〕。これに先駆け



5 龍門石窟研究院・馬朝龍研究員の研修（2000年）

る同年10月には、渡邊明義所長が龍門石窟を訪問し、劉景龍所長と協議して、同年12月の日付をもって三者の協力を約束した合意書を署名交換した。

一方、1998（平成10）年11月に中華人民共和国の江沢民国家主席が来日し、小渕恵三首相との会談によって、文化方面の一項目としてシルクロード文化財の保護についての合意がなされた。翌1999（平成11）年、小渕恵三首相が中国を訪問したが、この時シルクロード文化遺産保護協力の具体的な対象として、新疆ウイグル自治区クムトラ千仏洞と龍門石窟の二つが選択されるということで日中双方の意見が一致し、この資金として日本政府がユネスコに提供する日本信託基金が充てられることになった。

当研究所は、外務省の要請を受け、2000（平成12）年1月の「ユネスコ保護事業形成のための予備調査」のためのミッションに参加した。その後、ユネスコ／日本信託基金龍門石窟保護事業へ専門的立場から参加し、ユネスコのサブコンストラクターの役割を担うことになった。同年9月に再度派遣された調査ミッションを経て、前後2段階にわたるプロジェクト計画案が作成された。そして、2001（平成13）年11月、ユネスコと中国国家文物局との間で合意書が交換されるとともに、12月、当研究所とユネスコとの間で第1年目のコンサルタント契約が結ばれ、同事業がスタートした（口絵掲載）。

5ヶ年の事業は、当初計画では第1期3年、第2期2年の計5ヶ年で実施されることになっていた。第1期において、各種の観測、実験を行い、そのデータを分析して第2期に予定される実際の保存修復作業に向けての作業計画を作成すること、第2期においては具体的な保存修復作業を実施することが目指されている。そのために、事業としては皇甫公窟（北魏時代、5世紀前半）、路洞（東魏時代、5世紀半ば）、潜溪寺洞（7世紀半ば）という三つの洞窟が試験洞窟に選定され、第2期に修復作業が行われる予定になっている。2003（平成15）年度のSARSの発生やユネスコでの手続き上の問題等によって若干の遅れを生じつつも、2005（平成17）年3月に第1段階が終了したが、諸般の事情を勘案して第2期は3年の時間をかけることになった。同年9月からその第2段階が始まり、結局2009（平成21）年3月をもって終了した。

このような大規模な文化遺産の保護においては、短期的な保存修復作業による成果を求めると同時に、持続可能な保護を保証するための長期的な目標も持たなければならない。すなわち、ユネスコ事業終了後も龍門石窟研究院が引き続き保護活動を継続していくことが出来るような基盤をつくることが目指された。このため、ユネスコ事業において石窟全域及び試験洞窟に関する各種の観測、調査、試験を実施してデータを収集し、分析結果をもとに具体的な計画を検討するということを、作業としてこなしつつ、同時に龍門石窟研究院の保護担当者に対して、基礎から実践までの教育を施し、自らの能力

によって問題点を発見し、解決の方法を考案し、幾多の困難をも克服して、保護の活動を実践する人材の育成が図られた。ただし、ユネスコ事業の経費では人材育成を計画的に進めることが出来ないので、当研究所は劉景龍前所長との約束を実行することによって、ユネスコ事業と一体のものとして人材育成を進めた。すなわち、財団法人文化財保護振興財団による



6 龍門石窟・皇甫公窟における撮影作業（2002年）

長期研修に対する援助は、2000（平成12）年から2001（平成13）年度にまたがる1人目で終了したが、以後の長期研修はJICAによる研修事業（12ヶ月）を受け入れる形式をとって継続し、2005（平成17）年度までにさらに計4名の研修が終了している。

長期研修とは別に、運営交付金を財源として毎年2名程度の研究員を短期で日本へ招聘し、国内の関係機関、文化財保護を視察させ、龍門石窟保護のための個別のテーマを設定し研修を実施した。これは5年間でのべ10人に達した。

この他、2002（平成14）年度には、ユネスコ事業の一環として同事業の試験洞窟である皇甫公窟（北魏時代、6世紀前半）について、情報調整室の協力を得て、高精細デジタルカメラを用いた詳細画像による石窟データの収集を行った（278～279頁参照）〔図6〕。そして2004（平成16）年度からは新たに龍門石窟研究院との間で合意書を調印・交換し、「画像データによる洛陽龍門石窟の記録と画像管理方法に関する日中共同研究」をスタートさせ、唐時代の敬善寺洞、北魏時代の蓮華洞について、撮影作業を実施した。2005（平成17）年度からは皇甫公窟を含む画像データの整理作業とともに、龍門石窟研究院及び当研究所における画像管理システム構築のための共同研究を進めた。

文化財保存に関する国際情報の収集及び研究—データベースの作成・公開

本プロジェクトは、国際文化財保存修復協力センターで実施する調査・研究により得られた、文化財そのものや文化財保存技術、文化財保存国際協力事業等に関する情報をデータベースとして広く公開し、文化財保存国際協力に役立てることを目的として、2001（平成13）年度から2005（平成17）年度に実施された。本プロジェクトは、(1) センターで実施した調査研究による情報のデータベース化、(2) 寄贈資料のデータベース化、に大別される。

センターで実施した調査研究については、特に東南アジア（タイ、カンボジア、ベト

ナム)での現地調査の際に調査地点の位置情報が記録され、空間情報データベース化された。データベース化にあたっては、各国の公的機関が作成した紙地図や、国際協力機関・文化財保存修復機関による電子地図、衛星画像なども併せて収集されている。野外調査記録のデータベース化の手順は論文にまとめられた。¹⁾

また、2001(平成13)年度から2005(平成17)年度のアジア文化財保存セミナー(別項参照)で各国から報告された文化財保護制度に関する情報は、2006(平成18)年3月に「アジア8ヶ国文化財保護制度資料—法令・機構図・文化財」としてテーマとめられた。²⁾法令の条文は、科学研究費研究成果公開促進費によるプロジェクト「文化財保護関連データベース」(別項参照)との連携により和訳されている。

本プロジェクトでは、センターで実施された調査研究の情報の収集のほか、文化財保存修復国際協力の専門家が収集した資料の受入と分類が行われた。2001(平成13)年度は、当研究所の所長を務めた関野克の資料、2002(平成14)年度から2004(平成16)年度には、ボロブドゥール遺跡の修復に修復工事技術諮問委員として参加するなど、主にアジア諸国の文化財保存国際協力活動に携わった千原大五郎の資料について、データベース化と目録の作成が実施された。³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾2005(平成17)年度はユネスコのアジア・大洋州・ヨーロッパ文化遺産業務研修部部長などを務めた野口英雄の資料のうち、主に文化遺産の危機管理関連の資料がデータベース化された。

このほか、「世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集」から引き続き、文化財保存修復に携わる国内外の機関・人材に関する情報を収集・蓄積するなど、情報の充実が図られた。

- 1) 二神葉子・隈元崇「文化財科学の分野の野外調査における地理情報システムの応用及びデータベース構築の手法—国際文化財保存修復協力センターの実例—」(『保存科学』43、2004年3月)
- 2) 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『アジア8ヶ国文化財保護制度資料—法令・機構図・文化財 その1. 東アジア編、その2. 東南アジア編、その3. インド編、その4. 西南アジア編 (4分冊)』(同センター、2006年3月)
- 3) 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『関野克資料目録』(同センター、2002年3月)
- 4) 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『千原大五郎資料目録(書籍・雑誌編)』(同センター、2003年3月)
- 5) 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『千原大五郎資料目録(写真・論文・図面編)』(同センター、2004年3月)
- 6) 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『千原大五郎資料目録(写真編)』(同

センター、2005年3月)

国際資料室の整備・公開・活用

アジア文化財保存研究室発足以来、文化財とその保存修復に関する情報の収集は一貫してプロジェクトの柱であったが、旧庁舎では専用の収納施設がなかったため、実際には資料の蓄積は困難が伴うものであった。しかし、2000（平成12）年2月の新庁舎への移転に伴い、国際文化財保存修復協力センターに国際資料室が設置され、大規模な資料の収集が可能となった。そこで、国際資料室の外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ、センターでの関連の研究や事業に利用し、国内外の関連分野の専門家が利用出来るようにすることを目的として、2001（平成13）年度から本プロジェクトが開始された。

本プロジェクトでは、文化財自体やその保存修復、機関・組織・法令などの保護制度、文化財の公開と活用、危機管理などの分野の書籍や報告書、会議録、地図など、文化財保護に関する資料だけでなく、文化財保存修復国際協力を行う上で参考となる関連諸学に関する資料も含め広く収集している。資料の収集は他のプロジェクトとも連携して実施され、プロジェクト対象地域については、現地語による資料も含め重点的に集められた。

収集された資料の内容は多岐にわたるが、文化財の保存修復国際協力というセンターの事業の性格上、地域別・文化財別に資料が分類・配架されることが望ましい。そのため、地域及び文化財の種類を基礎とした独自の分類コードが2001（平成13）年度に作成され、収集資料の分類・データベース化を行い、毎年度末に目録が作成された（東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『国際資料室蔵書目録』同センター、2002年3月、2003年3月、2004年3月、2005年3月、2006年3月）。2005（平成17）年度までの5年間で、書籍等4600点余り、定期刊行物2300点（300種類）余りが登録されている。

国際資料室には、所蔵資料目録に掲載されている上記資料のほか、「文化財保存に関する国際情報の収集及び研究—データベースの作成・公開」（別項参照）により整理された専門家からの寄贈資料や、「文化財保護関連法令データベース」（別項参照）により収集・和訳された各国の法令が所蔵されている〔図7〕。

なお、所蔵資料件数の増加と内容の充



7 各国の文化財保護に関する法令の資料（国際資料室）

実の一方で、資料の増加と文化財の概念の変化、関連分野の広がりにより、従来の分類・配架方法は資料の内容を十分に表現したものとは言えなくなった。そのため、最終年度の2005（平成17）年度には、分類項目の見直しに着手した。

西アジア諸国等文化遺産保存修復に関する調査研究・技術移転・人材育成事業

第1期 アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業

「西アジア諸国等文化遺産保存修復に関する調査研究・技術移転・人材育成—第一期アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業—」は、西アジア諸国の文化財の保護・保存・修復に関する協力・支援事業の一環として、特に内戦・紛争によって危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化財の調査研究を行い、それに基づいて文化財保護支援事業の優先順位を定め、破壊された文化財の保存・修復事業を通して、関連する分野の技術移転を図るとともに、当該国から強い要請を受けている人材育成を行い、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指すことを目的としている。本事業は2003（平成15）年度に開始され、2004（平成16）年度以降は「西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業」と名称を変え、継続されている。

〔アフガニスタン〕

アフガニスタン文化遺産の保護に対する協力事業が開始されることとなった大きな契機は2001（平成13）年3月のバーミヤーンの東西両大仏の破壊である。この破壊以後、アフガニスタンの文化遺産の保護を支援していこうという国際社会の動きの中で、日本においても2002（平成14）年9月に文化庁主催で「アフガニスタン等文化財国際協力会議」が開催され、国内の支援体制作りや協力事業の方向性が検討され、これがきっかけとなり、本事業が開始されることとなった。

2003（平成15）年度には、アフガニスタンにミッションを派遣して事前調査を実施するとともに、「アフガニスタン文化遺産保護のための国際調整委員会第1回総会（パリ）」に参加して関係機関から情報収集を行った。また、当研究所と情報文化省（現在は文化青少年省と改称）との間でアフガニスタンの「文化財保護のための協力に関する合意書」を締結し、以後の協力関係の枠組みを構築した。なお、こうした動きに迅速に対応するために、2004（平成16）年度以降、5名の特別研究員を採用した。

アフガニスタンの文化遺産の保存修復支援事業としては、大きくアフガニスタン専門家の人材育成及び技術移転、そしてバーミヤーン遺跡保存に関する支援事業に分けられる。

人材育成及び技術移転に関しては、2004（平成16）年度及び2005（平成17）年度に、

アフガニスタンの文化財保護を担当する三つの部局、つまりカーブル国立博物館、考古学研究所、歴史的建造物局から各年度4名の専門家を日本に招聘し、研修を実施している。また、あわせてアフガニスタンでの研修事業も実施しており、2003（平成15）年度（文化庁からの委託事業）にはカーブル国立博物館で、2005（平成17）年度にはバーミヤーンで「考古資料の保存修復のためのワークショップ」を開催した（口絵掲載）。



8 バーミヤーン石窟における壁画保存作業（2005年）

バーミヤーン遺跡保護の協力・支援活動は、同じ目的で実施されているユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「バーミヤーン遺跡保存事業」と歩調をあわせて実施されている。ユネスコ事業の枠組みの中では、当研究所は「壁画の保存」、「保存管理活用計画案の策定」及び遺跡保護のための「考古学調査」を実施している（図8）。これに加えて、以下の様々な活動を行っている。また、各活動においては、アフガニスタン人専門家と共同で作業を行うことによって、人材育成を図っている。

（1）バーミヤーン遺跡地下探査及び試掘調査

バーミヤーン遺跡では、文化的及び考古学的地区と保護されるべき考古遺跡を特定し、地域開発による破壊からこれらの文化財を守ることが急務であることから、埋蔵文化財の存在を確認するため、2003（平成15）年度（文化庁からの委託事業）及び2005（平成17）年度に非破壊の地下レーダー探査法を用いて地下探査を実施するとともに、それによって得られたデータを検討するために試掘調査を実施している。

（2）バーミヤーン遺跡建造物調査

石窟の現状把握、石窟の構成、技法、編年観に関する建築史的調査を目的として、2005（平成17）年度に予備調査を実施。

（3）「アフガニスタン文化遺産調査資料集」の出版

バーミヤーンで実施している事業の成果を公表するために、「アフガニスタン文化遺産調査資料集」のシリーズを刊行（2005年度以降）。

（4）バーミヤーン遺跡保護支援活動の広報のために、2004（平成16）年12月に「バーミヤーン遺跡保存に関する第3回専門家作業グループ国際会議」をユネスコと共催するとともに、「国際シンポジウム 世界遺産バーミヤーン遺跡を守る—現場からのメッセージ」を開催。



9 イラク人文化財専門家の研修
(2005年、奈良)

(5) その他、バーミヤーン遺跡保存事業の一環として実施されている事業としては、以下の通りである。

- ①名古屋大学年代測定総合研究センターと共同で、壁画や壁土から採集された麦や木片を試料として、放射性炭素年代測定法によって、バーミヤーン遺跡仏教壁画や石窟の年代測定を実施している(2004年度以降継続)。
- ②東京藝術大学と共同で、流出文化財保護日本委員会が保管している「バーミヤーン遺跡仏教壁画片」の調査を実施(2004年度)。

③仏教壁画の技法や材料を理解するために、アフ

ガニスタン文化青少年省の許可を得て日本に持ち帰った壁画の微量試料の分析を行うとともに、中央アジアで発見されている壁画の調査を実施(2004年度以降継続)。

[イラク]

イラクの文化遺産の保存修復支援事業は、同国の治安状況を鑑み、略奪にあったバグダード国立博物館からイラク人の文化財専門家を日本に招聘し、研修事業を実施している[図9]。

イラクは、メソポタミア文明発祥の地であり、世界的に重要な考古学遺跡が数多く存在するのみならず、バグダードをはじめとする国立博物館には膨大な数の遺跡から発掘された貴重な遺物も大量に保管されている。残念ながら、紛争中及び紛争後の混乱の中で、博物館の収蔵品が破壊され、また、重要な遺跡も盗掘の被害を受けてしまった。しかしながら、現時点では、こうした文化財を保護し、調査する専門家のみならず、最新の文化財修復技術に関する知識や経験が不足している。そのため、本事業では、イラク人専門家の人材を育成し、イラク人自身による文化財復興を支援することを目的としている。

2004(平成16)年度には2名、2005(平成17)年度にはユネスコ日本信託基金による人材育成事業と共同で2名の研修生を受け入れた。

中国文化財保存修復に関する調査・研究(陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する研究)

中国陝西省西安市周辺に現存する唐時代の皇帝陵のうち乾陵(高宗・則天武后)と橋陵(睿宗)、さらに則天武后の母の韋氏が葬られる順陵の三つについて、2004(平成16)

年度から、その東西南北各門に配置される石彫像の保存を日中共同で実施することになった〔図10〕。

これは、日本の篤志家黒田哲也が、平山郁夫が理事長を務める財団法人文化財保護・芸術研究助成財団に対して「中国の文化財保護に資金一億円を提供する」ことを申し入れ、平山理事長と中国国家文物局との間で調整した結果、上記三つ



10 陝西省咸陽市順陵の石彫像

の陵墓について、その石彫像の保存修復を行うことが合意され、同財団の委託を受けた当研究所が、センターを担当として実施することになったものである。

同財団は陝西省文物局との間で共同事業実施に関する合意書を交換した。当研究所は西安文物保護修復センターとの間で具体的事業計画案を作成し、実際の推進役としての合意書を交換した。当初は4年間の計画であったが、初年度の報告書作成に手間取り、実質は5年間の計画に修正された。また、本来は同財団からの委託を受けた外部資金による事業であるが、当財研究所の運営交付金による経費を確保し、これによって共同研究の部分を実行することになっている。

保護の対象となる石彫像は、いずれも良質の石灰岩によって作られているものの、露天環境に置かれたまま1300年の期間、夏季の直射日光、冬季の風雪に曝されている。重量数トンの巨大な石造物は、大きな空隙を伴う亀裂に起因する崩壊の危険性をはらんでいる。表面が甚だしく風化し、すでに当初の美しい彫刻の線と面をほとんど失っている。地衣類・蘚苔類が繁殖し、無惨に黒変している像も多い。現在も多くの劣化因子が存在しているのである。

このような状況にある石彫像に、有効な保存修復の処理を施すことが第一の目標であるが、同時に、本来これらの陵墓は、当初は周囲に垣を設け、東西南北の参道に石彫像を配置し、陵園としての景観を備えていたもので、石彫像の保護は、その景観の中でのあるべき姿についての考察と効果的な設計を伴ったものでなければならない。対象となる三つの陵墓のうち、多くの陪葬墓から唐時代を代表する壁画が発見されている乾陵は、観光地化が進み、すでに当初の配置を考慮しない参道の拡幅がなされている。これに対して順陵は農耕地で、管理体制が取りにくいほか、農業に使う灌漑用水が石造物に及ぼす影響など、調査すべき事柄が多い。橋陵は、西安市からはやや遠隔の地点に存在するものの、すでにドイツとの共同による考古発掘調査が終了し、地元としては公園化を進

めることによって地域経済の発展に寄与させようという意欲が強く、石造物そのものの保存処理については、まさにこの共同事業・共同研究による問題の解決を待っている状態であった。

このため事業は、異なる条件を持った三つの陵墓の石彫像に対する周到な調査と保護の計画が作成され、多角的なアプローチによって実行された。順陵及び乾陵については陝西省考古研究所、西北大学文博学院、西安文物保護修復センター、当研究所合同による考古調査が実施され、その復元的考察に基づいた整備作業が進められた。西安文物保護修復センターを中心とした保護修復班の作業は、環境計測装置の設置、超音波による石造物内の亀裂分布調査と構造強化処理作業、表面撥水処理試験などが着々と進められた。

また、西安文物保護修復センターと共同で毎年西安において「石造文化財保護に関する研究会」を開催し、また同センター研究員を短期で日本へ招聘し特定のテーマによる共同研究・研修を実施した。

本事業と共同研究は2009（平成21）年3月に完了した。

2 シンポジウム、研究会等

「敦煌莫高窟の保存」

（第19回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会）

1996（平成8）年2月1日～3日の間、奈良県新公会堂において、250名の参加者を得て「敦煌莫高窟の保存国際シンポジウム」が行われた。会では、1.基調講演、2.地形、地質と石窟の環境、3.石窟の構造的安定化、4.壁画の強化と修復、という四つのセッションが設けられて19件の発表が行われるとともに、5.総合討議のセッションも設けられ、活発な議論が行われた。また、シンポジウム後の同年2月4日には、同じテーマで公開シンポジウムが開催され、一般にもシンポジウムの成果が公表された。翌1997（平成9）年には、シンポジウムの成果をまとめたプロシーディングスとして、“The Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and Related Studies” が出版された（『資料編』162～164頁）。

文化財保護法50年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」

（第24回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会）

本シンポジウムは文化財保護法制定50年を記念し、文化庁との共催で2000（平成

12) 年12月18～21日に東京国立博物館大講堂で開催された〔図11〕。

1994(平成6)年の「文化遺産の真正性に関する国際会議」以降、「多様性」が世界の遺産保護の指針となった感がある一方、文化遺産に関する価値の多様性を標榜した身勝手な解釈や破壊、グローバル化の急速な進行による地域



11 文化財保護法50年記念国際シンポジウム

固有の文化の破壊が起こってきた。そこで、文化と文化遺産の「多様性」の真の意味を見直すとともに、そのことを世界に発信することを目的に、本シンポジウムのテーマが設定された。日本の文化財保護法は世界に先駆けて制定当時から「無形文化財」の概念を持つなど、「多様性」を有していたことも、このテーマの設定にかかわっている。

シンポジウムでは4日間にわたり四つのセッション、16名の講演と討議が行われ、「文化の多様性と文化遺産に関する東京宣言」が採択された¹⁾²⁾(『資料編』172～173頁)。

- 1) 東京国立文化財研究所編『文化財保護法年記念国際シンポジウム 文化の多様性と文化遺産』(東京国立文化財研究所・文化庁、2000年12月)
- 2) National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo: "International Symposium in Commemoration of the 50th Anniversary of the Japanese Law for the Protection of Cultural Properties, Tokyo 2000. Cultural Diversity and Heritage Symposium Report." National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, March 2002

「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」

(第29回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会)

東地中海沿岸から日本に至るまでのシルクロード沿いに残されている壁画の歴史・文化的な側面、あるいは技法や材料といった様々な側面に焦点をあて、当時の東西文化交流の実相に迫ろうという試みであった。専門家の議論の場としてコロキウム(2006年1月24～26日)を、そして一般への情報公開の場としてシンポジウム(1月28日)をあわせて開催した。

3日間にわたるコロキウムでは、日本、イギリス、イタリア、アメリカ、インド、韓国、中国、ロシア、フランス、カンボジア、タイの壁画の保存修復に関わる専門家及び美術史家、歴史家計31名が一同に会し、シルクロード沿いに位置する壁画をテーマに様々な視点から討議を行った。西洋と東洋という単純化した影響論に終始せず、シルクロードにおける壁画の美術史的・歴史的側面の知識を、世界の専門家たちと共有するとともに

に、各地域の複雑な文化の融合によって生み出された壁画技法や材料、描かれたモチーフの意味などについて具体的に議論しあうことで、地中海地方から日本にかけてのダイナミックな東西の文化交流の一端を明らかにすることが出来た。それと同時に、文化遺産としての壁画の保存と修復が抱えている問題点も浮き彫りになった。破壊や盗難、現地の状況に応じた保存修復技術、人材育成と技術移転、文化遺産を守るための社会の意識など、数多くの問題点が指摘された。また、本コロキウムでは、シルクロードの壁画の保存については、様々な分野の専門家の協力が必要であり、過去において東西の人々が交流し、文化が発展してきた歴史を示す壁画を未来の人々に伝えていくためには、現代に生きる私たちが、東西の経験を共有し協力していかなければならない、ということが確認された。

シンポジウムでは多くの参加者を得て、美術史・文化史、壁画の技法と材料、壁画の保存修復の視点から6名の専門家が講演を行い、パネルディスカッションでは保存におけるこれからの課題について話し合われた（『資料編』182～185頁）。

「中国・山西省の文化財と文化財保護の現状」（第31回文化財保存修復研究協議会）

2001（平成13）年11月28日（水）に「中国・山西省の文化財と文化財保護の現状」をテーマとして開催された研究会では、中国から招聘した夏路（山西省博物館館長）と劉軍（同館陳列部主任）に、最近も重要な古代壁画墓等の発見が相次ぎ、また現在新博物館の建設を進めている山西省における文化財保護の制度と現状、そして今後の課題等をめぐって、「山西省の文物と文物保護の概況」（夏館長）と「山西省博物館の概要と新館建設について」（劉主任）の二つの報告があった。『中華人民共和国文物保護法』が規定する大きな枠組みから、各省ごとの市、県レベルの文化財保護に関する個別の状況、新博物館建設の具体的な内容まで、詳細かつ多岐にわたる報告によって、非常に有益な成果を上げることが出来た。併せて、国際文化財保存修復協力センター・岡田健が、山西省の仏教石窟寺院で2001（平成13）年度に世界文化遺産に登録された雲岡石窟の保護に関しての報告「雲岡石窟保護の現状」を行った。所内外あわせて32名の参加があった（『資料編』200頁）。

なお、本研究会の報告書は、2002（平成14）年度に各国文化財保護制度に関する現状と課題（中国編）報告書・叢書「文化財保護制度の研究」『中国文化財保護制度の研究』（山西省・陝西省編）の一部として作成、刊行された。

「文化財の調査研究および保護に対する地理情報システムの利用」

(第34回文化財保存修復研究協議会)

位置情報を持った事物を対象としてデータベース化・管理・分析を行うツール「地理情報システム」(以下、GISとする)は、近年様々な分野で利用が進んでいる。文化財は位置情報との関係が不可分であるにもかかわらず、日本では埋蔵文化財以外の分野でのGISの利用はまだ始まったばかりである。そこで、「文化財の調査研究及び保護に対する地理情報システムの利用」をテーマとして2005(平成17)年3月24日に当研究所セミナー室で第34回文化財保存修復研究協議会を開催し、現在GISを積極的に活用している文化財分野の専門家による事例紹介を行い、今後のGISの利用の可能性について考える機会とした。

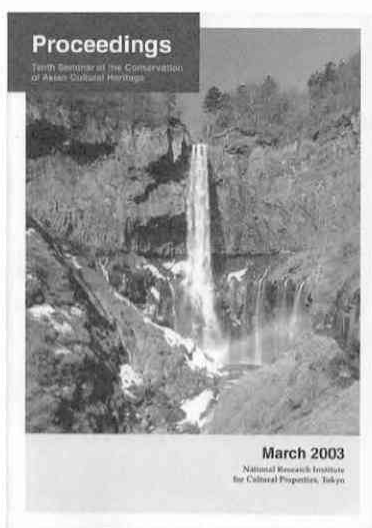
研究協議会には67名が参加し、外国からの2件を含む6件の事例紹介と質疑応答が行われた(『資料編』201頁)。また、事例紹介と質疑応答をまとめた報告書が作成された(東京文化財研究所編『第34回文化財保存修復研究協議会報告書 文化財の調査研究及び保護に対する地理情報システムの利用』東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター、2006年3月)。

- (1) 基調講演：文化財保存修復分野におけるGISの利用(奈良大学、碓井照子)
- (2) 文化財と時空間情報科学—4D-GISによる文化財解析—(東京藝術大学、津村宏臣)
- (3) 文化財防災へのGISの利用(当研究所、二神葉子)
- (4) 金沢のGIS歴史遺産データベースについて(金沢工業大学、宮下智裕)
- (5) GISを用いた文化財インヴェントリー(イル・ドゥ・フランス地方圏文化局、ロズリーヌ・ビュシエール)
- (6) 世界遺産のマネージメントと保護に応用された情報システム(世界遺産センター、マリオ・サンタナ・キンテロ)

アジア文化財保存セミナー

膨大なアジアの文化財を保存・活用するには、各国の主体的な努力と相互の協力が不可欠である。このような認識から、アジア各国の代表が文化財の保存に関する基礎的情報を交換し、将来の多国間の共同研究・共同事業を推進するための礎を築くことを目的として、アジア文化財保存セミナーが企画された。

セミナー開催の発端は、文化庁予算により、当研究所の担当でアジアの文化財保存をテーマとしたセミナーを開催しては、という文化庁からの依頼がなされたことであった。1990(平成2)年10月のアジア文化財保存研究室の発足ということもあって、馬淵久夫保存科学部長が事務局長となった。セミナーのテーマは、アジア諸国が保存を望んでい



12 第10回アジア文化財保存
セミナー報告書（2002年）

るのは観光資源として国の経済に関係する歴史的遺跡との考えから「石造文化財保存の問題点」とされた。そして、アジア13ヶ国の文化財保存に携わる国立研究所や行政機関から出席者の推薦を受け、文化庁・奈良国立文化財研究所との共催、ユネスコ・アジア文化センターの協力により1990（平成2）年11月に国立京都国際会館で第1回目のセミナーが開催された。セミナーにおける日本の立場は、ホスト役ではあるがアジアの一員として平等というものであった。その後のセミナーも一貫して円卓の会場で開催され、議長は各国代表が交代で行うという形式を取っている。

第1回～第9回までのセミナーでは、各開催年度で文化財の材質や種類によるテーマを設定し、各国の文化財の現状と保存の技術的な問題について情報交換と討議を行ってきた（口絵掲載）。

これに対して、2001（平成13）年度に始まる中期研究計画（5年間）で実施した第10回～第14回のセミナーは、これまでの形式を一変させる試みを行った〔図12〕。

この5年間のテーマは、アジアの各地域における文化遺産保護の制度とその運用についての調査研究を行い、各国の文化遺産保護制度についての認識を相互に共通のものとし、アジアの文化財の保護のための有効な理念の確立と、より強固な協力関係の構築を目指す、というものである。

しかし、一つの国の文化財保護を理解するためには、きわめて多様な内容についての研究が必要である。その国において何を文化財と捉えているか。具体的な保護制度は、どのような文言によって規定されるのか。制度の運用はどのような組織、人材、予算的裏付けによって担保されているのか。現在に至る文化財保護の制度はどのような歴史をたどってきたのか。文化財保護の制度はそれぞれの政治、経済、文化、民族、民俗、宗教などと、どのような関係を持っているのか。保護の制度は将来においてどのように変化していこうとしているのか。またどのようにあるべきなのか。それらの問題を、各国の専門家がこの機会を利用して一つ一つ検証し直し、他の国との比較を行うことによって、さらに自国の特徴を認識するとともに、自国の保護制度の改善に寄与することが目標とされた。

そして、日本を含む9ヶ国の固定されたメンバーが、毎年日本に集合し、設定されたテーマに従って調査研究と報告を行った。最終年度の2005（平成17）年には、この5

年シリーズの共同研究の次の段階として、各地域での国際協力の実践が必要であることが確認された。このように周到で高い質を持った研究会はかつて例を見ないので、センターの歴史においても特筆すべき成果であると言える（各回の詳細は、『資料編』「アジア文化財保存セミナー」37～58頁参照）〔図13〕。



13 第13回アジア文化財保存セミナー（2004年）

国際文化財保存修復研究会

人類共通の遺産である文化財を守るためには国際協力は不可欠であり、世界の文化財を守るため、伝統的・先進的な技術をとともに有する日本が果たす役割は大きく、実際に多くの国際事業が行われてきた。しかし、文化財の材質やその置かれている環境は多様であり、日本とは民族や宗教、社会体制、経済状況などが異なる外国で文化財の保存修復を行う際には、多くの問題に直面しているのが現状である。

上記のような文化財保存国際協力事業に関する問題点について検討し、解決のための方策を探ることを目的として、1997（平成9）年3月3日、「アジア文化財保存修復研究会」が開催された。その後この研究会は国際文化財保存修復協力センター（当時）の事業の三本柱の一つである、「情報収集と人材ネットワークの構築」を実現する手段として位置づけられ、2回目以降は冒頭に回次がつけられるようになる。以後、2005（平成17）年度まで19回が開催された。

本研究会は、日本の文化財保存修復協力事業の主要なターゲットはアジアであったことから、2回目までは「アジア文化財保存修復研究会」という名称であった。しかし、3回目からは「対象をアジアに限定すべきでない」との参加者の意見に基づき「国際文化財保存修復研究会」と改称され、ヨーロッパや中米などでの事業の紹介や、外国や国際機関で働く日本人専門家による発表も行われるようになった。

研究会は、文化財保存修復国際協力事業の現状と問題点を紹介する事例紹介と、それに関する質疑応答、及び総合討議という形式で行われていた。ところで、本研究会では、他の研究会と比べて長時間の質疑応答の時間を確保していた。これは、本研究会を、様々な面で日本とは異なる外国で事業を行うに際して直面した困難やそれへの対処、時には日本、あるいは自らの所属機関の事業運営の問題点も含めた情報を提供してもらう一方、参加者相互の議論を通じて事業のノウハウを交換し、問題解決の方法を探る場として活

用しようとしたためである。様々な地域の保存修復事業の事例が（研究としてではなく）事業として紹介され、情報を得られる場はあまりなかったため、参加者のアンケート調査を見てもこの点に関する評価は高かった。保存修復事業に関する事例紹介は、2000（平成12）年度までの9回の研究会で34件行われた。

次の2001（平成13）年度から2005（平成17）年度までの間に、合計10回の研究会が開催された。この、研究会は事例紹介だけではなく、文化財をとりまく社会環境の問題、民族や文化そのものに焦点をあて、その保護のあり方を討論する場として機能するようになった。これは、民族や宗教の対立がますます顕著となる中で、国を越えた保護活動のあり方、場合によっては文化そのものを越えた協力活動のあり方について、あらかじめ考えておく必要がある、という認識によるものである。

2001（平成13）年度に実施した第10回、11回は、ともに「地域社会と文化遺産」というテーマをかかげ、世界の各地域における民族、宗教、文化の違い、違いを認識した上での相互交流のあり方について、それぞれの分野の専門家による報告があり、文化財保護の専門家との間で討論を行った。このような討論は、文化財科学の分野から発展成立した国際センターにとって、これまであまり得意としてこなかったことで、まさにセンターの変化を象徴するものであった。とくに、10月18日に実施した第10回では「イスラム社会と“文化”の構造」という報告があるが、これは9月11日のアメリカ同時多発テロ事件よりも前に企画をスタートさせていたもので、世界の情勢をいかに読み、どのような準備をしておくべきかという点で、図らずも、センターのこれからのあり方を強く示唆する結果となった。

2002（平成14）年度の第12回では、日本、アジア、ユネスコにおける「無形の文化財」保護をテーマにした。遺跡の保存修復のみを扱っていた国際センターとしては、画期的な出来事である。次の第13回では、この間に発生したバーミヤーン大仏の爆破からアフガニスタンの治安復興を受けて「アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして」という研究会を実施した。急激に変化し始めた世界の情勢に、国際センターが積極的に対応した研究会である〔図14〕。

2003（平成15）年度の第14回と第15回は、イラク戦争終結を承けた「イラク文化遺産保護の地平線」と中央アジア西アジアの文化財の主要な材料である「日干し煉瓦の保存」がテーマとなった。緊急の課題となる地域についての情勢報告とともに、具体的な保存修復に関する内容にも対応することが求められた。

2004（平成16）年度の第16回には、この年改正された文化財保護法に新たに盛り込まれた「文化的景観」についての研究会を実施した。法律の施行に対して、導入された

経緯、その意味、今後の課題について、報告と討論を行った。これに引き続き、2005（平成17）年度の第18回では考古学、地理学、歴史学、民俗学などの立場から「文化的景観」と言われているものが具体的にどのように生み出され、現在の人々によって継承されているのか、という問題を考えた。

本研究会の「情報収集と人材ネットワークの構築」を実現するという当初の目標は今後も変わることはない。日本国内の文化財保存に従事する専門家のみならず、世界各国や国際機関の専門家との連携がますます必要となっている。また、多分野の専門家との交流がなければ多様な文化遺産の保護は出来ない。しかし、このように国際協力のテーマがかつてないほど多様なものとなっている今日、それだからこそ、問題に対応するためのセンター自身の明確な方向付けが必要である。ネットワークの構築は、その目的と活用する方法が明らかになっていなければ、実現するはずがないからである（各回のプログラムは、『資料編』「アジア文化財保存修復研究会・国際文化財保存修復研究会」59～66頁参照）。



14 研究会「アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして」報告書

各国の文化財保護制度に関する研究会（第1回～第13回）

2001（平成13）年度に始まる中長期研究計画では、各国の文化財保護制度に関する研究が重要な位置を占め、これまでのセンターの研究・活動方向を大きく転換させるものとなった。すなわち、日本を含むアジア9ヶ国の文化財保護の制度について各国の専門家が5年間にわたって共同で研究を進める「アジア文化財保存セミナー」と、ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例についての研究を進める「文化財保存に関する国際情報の収集及び研究」の二つの研究項目を設けたことである。もちろんこれらは、専門家招聘や外国への出張旅費など、予算的措置を伴ったものであった。しかし、センターにはその他の科学研究費による招聘や、別件の国際会議等で来日中の外国専門家の来訪がしばしばあり、その機会を利用して積極的に研究会を開催し、各国の文化財保護制度に関する情報を収集して来た。「各国の文化財保護制度に関する研究会」と銘打った研究会は、2001（平成13）年度から2005（平成17）年度までの5年間で通算12回を数えた。以下に12回のテーマを列举する。

第1回：中国・山西省の文化財と文化財保護の現状 2001（平成13）年11月28日（第

- 31 回文化財保存修復研究協議会：第 2 回開催時にこれを第 1 回と位置づけた)
- 第 2 回：中国・陝西省の文化財保護の現状 2002（平成 14）年 1 月 23 日
- 第 3 回：ドイツの産業遺産の保存と活用 2002（平成 14）年 7 月 11 日
- 第 4 回：文化財への地理情報システム応用に関する研究 2003（平成 15）年 1 月 22 日
- 第 5 回：ドイツの歴史的建造物の再生—現代社会に適合した歴史的建造物の多様な再利用— 2003（平成 15）年 2 月 13 日
- 第 6 回：イギリスの新しい文化財保護の動き—ロンドンの都市景観保存から町並み再生事業まで— 2003（平成 15）年 3 月 10 日
- 第 7 回：ドイツの産業遺産の保存と活用—現代社会に適合した歴史的建造物の多様な再利用— 2003（平成 15）年 10 月 15 日
- 第 8 回：フランス文化財保護の現在—都市文化財と文化財プロモーション— 2004（平成 16）年 3 月 15 日
- 第 9 回：「歴史的モニュメント主任建築家の職能と実践」（講演、ダニエル・ルフェーブ
ル＝歴史的モニュメント主任建築家） 2004（平成 16）年 5 月 31 日
- 第 10 回：フランス文化財の現在（3）：文化財建築家の要請と実務 2004（平成 16）
年 7 月 20 日
- 第 11 回：イタリア文化財保護の仕組み：文化財監督局の役割と展覧会に関する規定
2005（平成 17）年 1 月 31 日
- 第 12 回：（タイトルなし、イタリアの景観保護について） 2005（平成 17）年 5 月 25 日
- 第 13 回：アジアの文化的景観を考える—世界遺産フィリピン・コルディリエーラの
棚田群の事例を通して 2005（平成 17）年 8 月 29 日

3 科学研究費による研究

石器石材の岩石学的研究

石器に用いられている石材は、これまでは主として考古学の分野から分類研究されてきたため、岩石学的に見れば不正確な記載方法が多く目にされた。しかしながら、ある遺跡で出土した石器と、別の遺跡で出土した石器とを比較して検討する場合には、石材名が統一的な基準で分類されている必要がある。もちろん、石器石材の分類は、考古学的な議論や考察を目的として行われるものであるから、岩石の成因に関する議論を目的とするような既存の分類法を単純にそのまま適用することは好ましくないが、岩石学の分野では既に確立されている方法論に則れば、系統的な分類は可能になると期待される。

このような観点から当研究では、高知県から出土した、主として旧石器の石材を岩石学的に記載することから、それらを系統的に分類することを試みた。このようにして確立された分類法は、高知ばかりでなく他の地域の石器を記載する場合にも有効となると期待される。

古墳の装飾に用いられた赤色顔料に関する鉱物学的研究

文化財の分析は、これまでは主として化学分析が中心に行われてきた。このため赤色顔料の分析では、鉄を含んだベンガラなのか水銀を含んだ朱なのかが主として議論されてきた。確かに朱が用いられる古墳とベンガラが用いられる古墳とは違いが見られ、この議論が有効であることは事実である。しかしながら、顔料が持つ情報は決して化学成分だけではない。例えば鉄を発色の主要因とするベンガラの中にも、純粋な赤鉄鉱の鉱石のようなものから、結晶構造を持たない、単に赤い粘土のようなものまで様々なものが存在する。そこで本研究では、そうした赤色顔料を、化学成分で見るとばかりでなく鉱物学的に細分していくことにより、さらに細かい議論を構築することを目的とした。その結果、純粋な赤鉄鉱と、結晶構造を持たない赤い粘土質の物質とは明確に区別され、古墳によって使い分けられるばかりでなく、一つの古墳内で両者が併用される場合もあることが判明した。

壁画顔料の現地非破壊分析法に関する研究

壁画顔料の分析は、美術史的研究としての側面ばかりでなく、その文化財の保存修復を考える際にも必要不可欠であるが、通常はそのために試料を採取することは許されない。文化財の非破壊分析法はそれまでもいくつか知られてはいたが、壁画は実験室に運び込むことが出来ないため、現地に持ち込んで十分ではない電源環境で分析を行える装置が必要となる。そこで、容易に持ち運びが可能で、バッテリーで駆動することが出来、対象に対して非破壊・非接触で元素分析を行える装置を開発することを目的とした。その結果、法律の規制が生じない、低レベルの放射線源を利用することで、重さ4kg以下の装置で、バッテリーによって稼働することの出来る、蛍光X線分析装置を開発することに成功した。この装置を用いることにより、出雲地方の中世から近世に描かれた壁画や各地の絵馬、あるいは建造物彩色などに用いられている顔料を、非破壊で分析した。

空間情報データベース及びインターネットによる各国の文化財保護システムに関する研究
外国での文化財を取り巻く状況は自然環境だけでなく、保護制度や保存に対する考え

方も日本とは異なり、文化財保存修復国際協力事業の効果的な推進にはこれらの情報が不可欠である。ところが、このような情報は体系的に整理され提供されているとは言えず、現に情報不足のために様々な問題が起きていることが、事業に関わる専門家から指摘されている。

そこで、国内外の文化財保護システムを中心とした情報を広く収集し、結果を空間情報データベースとして構築することで文化財保存修復国際協力に貢献することを目的に、2001（平成13）年から2002（平成14）年に本研究が行われた。

本研究では、インターネット、文献、各国の専門家へのアンケート調査から、各国の文化財保護機関の情報収集を行い、機関の連絡先や業務内容の概要を明らかにした。国別に整理されたデータは地理情報システムソフトを用い、その他のデータとともに空間情報データベース化した。

中国陝西省北宋時代の石窟造像の調査研究—子長県鐘山石窟を中心として

本調査研究は、中国陝西省に所在する北宋時代に開かれた石窟寺院の仏教彫刻について、美術史及び考古学の方法から現地調査とそれにもとづく研究を行い、北辺の守りの地に展開した仏像様式を理解するとともに、同時代（10～12世紀）の中国各地の仏像様式との比較検討を進め、北宋仏像様式全般への展望を示すとともに、同時代の日本の仏像様式との比較検討におよぶことを目的として実施した。

現地調査は、第1年次9日間、第2年次9日間の日程で中国へ赴き、中国側共同研究者とともに子長県鐘山石窟を中心に実施した。また、陝西省北宋時代石窟寺院との比較研究のために、第3年次には四川省で関連調査を実施した。最終年度の2003（平成15）年12月16日には、西北大学文博学院との共同で同学院において研究会「陝西石窟仏教芸術研究会」を開催した。調査と研究の成果は、科学研究費報告書として作成、刊行した。

文化財保護関連法令データベース

文化財保存修復国際協力事業の遂行には、対象国の文化財保護制度に関する情報が欠かせない。国内でも文化財保護法の改正に際し、検討の過程で諸外国の法令が参考にされるなど、各国の法令は国内の文化財保護施策を考える上でも重要な資料である。

本プロジェクトの目的は、世界各国の直接的に文化財保護を目的とする法律や、都市計画や環境、景観保護、観光、交通など関連諸分野の法令を広く収集・和訳・分類し、文化財保護に携わる国内外の専門家に提供すること、文化財保護制度の比較研究を行うことである。これまでに130ヶ国以上の法令を収集し、うち280件の法令の和訳・デー

データベース化を実施した。2001（平成13）年度から2004（平成16）年度には科学研究費補助金研究成果公開促進費の助成を受けたが、現在も、センターの他の事業とも連携し、法令情報の収集と和訳・用語集作成を継続し、文化財の定義などについて比較研究を行っている。

歴史的建造物における塗装の変遷に関する研究

歴史的建造物が、それが建てられた時代に、当時の人々の目にどのような色で見ていたかを系統的に検証した。まず、古代における建造物塗装は、瓦に付着する顔料に基づいて検討した。塗装の際にはみ出して付着したと考えられる顔料をもとに推定すると、奈良時代以前の日本においては、建造物塗装に用いられた赤色顔料としてはいわゆる不純なベンガラしか今のところ認められず、水銀朱や鉛丹による塗装は全く確認されなかったため、通常の復元模型などに塗られた派手なイメージは今後改められる必要があるだろう。その後、平安頃になると、一部に水銀朱で塗られたと考えられる事例が認められ、鉛丹で外装塗装がなされたと考えられる事例はこれまでのところ近世以降のものしか確認出来ていない。この他に赤以外の塗装として注目されるものとして、含コバルト青色顔料が挙げられ、徳川家光に関係した時代に一部の限られた建物において用いられた形跡が認められた。

低頻度大規模自然災害—地震—による文化財建造物の損害可能性の確率評価

限られた予算や資源を活用した文化財防災のためには、過去の災害被害のデータベースによる将来の被害の想定や、統計・確率に基づく評価が有効である。本研究は文化財建造物を対象に、GISと地震の発生確率論を融合した新しい実地的な危険度評価を試みたものである。

本研究では、重要文化財建造物のGISデータベースを作成し、「全国を概観した地震動予測地図」により地震危険度を算出した。また、最勝院五重塔（青森県弘前市）を対象に強震動予測を行った。さらに、イタリアでのGISデータベースによる文化財の危機管理に関して予備調査を実施した。

「文化的景観」概念の成立とその国際比較

文化的景観（cultural landscape）は、1992（平成4）年世界遺産委員会において、従来の建築や考古遺跡といった物質中心の保護制度からさらに進んで、農耕や狩猟、漁業といった自然の利用形態、自然に託し絵画や文学、口承などを通じて継承されてきた文化

など世界の多様な文化表現を保護するため、無形の価値の認識、自然環境への連携に注目するものとして、文化遺産の分野に新しい概念として導入された。文化的景観の概念は、文化の多様性を考慮し地域に根ざした文化遺産の保存・活用を促進する上でも今後その役割が期待される重要な文化遺産の概念であるが、しかしその具体的な保護の手法についてはまだ十分な調査・研究が行われていない。

本研究では、この「文化的景観」概念について、(1)「文化的景観」概念成立の歴史的背景についての研究、(2) 諸外国や国際機関における「文化的景観」概念とその保護制度についての研究、及び、(3) 各国の「文化的景観」遺産の事例調査により、各国における「文化的景観」概念の相違と制度の相違を国際的に比較し、これからの「文化的景観」保護のあるべき方向性について提言を行った。

太行山脈一帯に点在する仏教石窟群の包括的保護計画策定に関する日中共同研究

中国山西省と河北省の中間に位置する太行山脈一帯には、5世紀から6世紀にかけて仏教の小石窟が数多く開かれ現存しているが、管理体制の不備によって、破壊・略奪が続き、危機的状況に陥っている。本研究は、それらの小石窟がいくつかの小さなグループを構成しながら分布していることに着目し、日中共同で、この小石窟群について、①美術史学、考古学、地質学、民俗学など多分野による学術調査と研究を実施し、その分布状況、構造、技法、主題、歴史を明らかにし、②石窟がどのような理由によって個々の地域に集中して造営されたのか、という観点からその文化的ゾーンとしての位置づけを行い、③風化や崩落、人為的破壊等についての現状を把握し、④これらの石窟が地元のみならず中国文化史上の貴重な財産として適切に保存され、なおかつ文化的資源として有効に活用されるための、具体的な保護計画を策定することを目的として実施した。

4 受託、外部資金による研究・事業

入水三十三観音石仏の保存修復研究

入水三十三観音は、福島県滝根町（当時）にある大理石製の磨崖仏群で、1850（嘉永3）年に造られたものである。いずれも表面が風化するとともに汚れが沈着し、大理石本来の白色が失われて表面が灰色から薄黒色になっていた。製作された当初は、大理石本来の色である純白の磨崖仏を意図していたと考えられることから、この汚れを取り除くことが要望されていた。石仏群の中で第一番石仏だけは例外的に丸彫りであり、他の石仏群からは離れた場所に置かれていたことから、これを当研究所に持ち込み、適切にクリー

ニングすることを通じ、他の磨崖仏をクリーニングする方法についても確立することを目的とした研究が行われた。1992（平成4）年度に化学薬品を用いたバック法によるクリーニングが行われ、撥水性シラン樹脂を塗布する処理を経て純白の色を取り戻した状態で、第一番石仏は現地に戻され、原位置に安置された。研究成果は『保存科学』33号（1994年3月）に報告されている。

文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法

本研究は、科学技術振興事業団（現、科学技術振興機構）の戦略的基礎研究推進事業（CREST2000）で2000（平成12）年度から5ヶ年の研究として採択されていたもので、当研究所は、研究チームの1グループとして加わったものである。当研究所と科学技術振興機構との間では2001（平成13）年8月1日付で「共同研究契約書」が締結された。

池内克史（東京大学生産技術研究所）による研究計画は、レーザー光三次元デジタルセンサーやデジタルカメラ・ビデオを利用して文化遺産の画像情報や形状情報を自動的に処理し、高度メディアコンテンツ化する手法を開発するというものであった。当研究所チームは解析と結果の評価に文化財の専門家として関わり、文化財の保存修復や記録作成のための手法の開発を行ってきた。

当研究所の担当部分で得られた成果は下記の通りである。

(1) 史跡フゴッペ洞窟（北海道余市町）の窟内全体を三次元デジタルセンサーで計測し、得られた洞窟の形状をもとに、太陽運行のシミュレーションによる洞窟内部への光の射し込み方を見積もった。その結果、特別に灯りを用いなくとも、季節と時刻を選べば、自然光を利用して洞窟内で壁画を描くことが可能なことが判明し、成果は洞窟の現場で公開された¹⁾。

(2) 王塚古墳（福岡県桂川町）、寺徳古墳（福岡県田主丸町）、山口8号横穴墓（熊本県植木町）、オブサン古墳、弁慶が穴古墳（熊本県山鹿市）の各古墳で、石室の構造と壁画を三次元計測し、ヴァーチャルリアリティを作成した。

通常、この種の遺跡では壁画の保存のため人の入室を厳しく制限するが、遺跡をデジタル・コンテンツ化し、博物館等で擬似的に窟内を体験出来るようにすることは、文化財の活用として有効である。また、デジタル・コンテンツ化された情報は、壁画制作時の光環境を研究する上で有用であることが判明した。

(3) 整備に伴い一部解体された史跡前二子古墳（群馬県前橋市）の石室の壁、床、天井の石材の状態を解体前、解体中、修復後に三次元デジタルセンサー及び三次元測量カメラで計測・記録し、実測図を作成した²⁾。

形状の異なる石を数百個の単位で積み上げている遺跡では、スチルカメラによる記録や従来の測量による図化では記録として不十分で、何らかの事情でオリジナルな状態に戻す場合に不安があった。これに対し、三次元デジタルセンサー及び三次元測量カメラで計測・記録した情報では、解体前の状況を正確に把握することが可能である。しかし、狭い窟内での情報取得は長時間を要し、これらの情報から図化を行うことも種々の困難を伴うことから、三次元デジタルセンサーと三次元測量カメラには、それぞれ有利・不利があることが明らかになった。今後は、より有効な手段の開発のための研究を行い、取得した情報を利用した修復や復原のシミュレーションなどへの応用を目指す。

(4) アユタヤ遺跡(タイ)で、レンガの劣化が顕著な壁面を2001(平成13)年及び2004(平成16)年に三次元計測し、壁面崩落の程度を定量的に解析した。また、同じ地点について、2000(平成12)年と2004(平成16)年に撮影した写真を用いて、写真計測技術による構造・形状情報の取得と、三次元データを用いた劣化評価³⁾を行った。

これは、微細で複雑な変化をデジタル情報として取得し、劣化の進行や原因の解明、防止措置の開発を目指すものである。しかし、現在の三次元デジタルセンサーの精度では限度があり、この種の文化財保存プロジェクトへの応用に適した機器の性能に関する研究とその開発を進める必要がある。写真計測の手法による劣化評価は、従来定性的に記載されていた文化財の劣化の進行状況を定量化出来る可能性を示した。写真を用いた計測にはデータ処理の作業量が多いなど問題もあるが、今後の研究により、文化財保存の分野への貢献が期待出来る。

(5) 将来的な芸能の身体技法の三次元的な記録作成の方法として、二次元の動画像(フィルム・ビデオ)を三次元のモーション・データとしてトレースするための手法について検討した。またそれに向けて、芸能部が所蔵するフィルム・ビデオ等の資料について、どのような映像が三次元データの元として有効かを検討しながら、整理を行った。

これは、近年世界的に重要性が認識されてきた無形の文化遺産に関する研究で、デジタル・コンテンツ化した情報を用いて、言葉でしか表現し得なかった技能の核心を数値的に解析し、また、その成果を伝承者養成に応用する研究に利用出来る可能性がある。

- 1) 増田智仁・山田陽介・朽津信明・池内克史「三次元計測データを用いたフゴッペ洞窟内の線刻画の太陽光源の移動による見えのシミュレーション」(『余市水産博物館研究報告』7、2004年3月)
- 2) 津村宏臣・二神葉子「三次元写真測量の手法を応用した前二子古墳石室の計測」(『大室古墳群 史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳ならびに小古墳 保存整備事業報告書』前橋市教育委員会文化財保護課、2005年)

- 3) 二神葉子・津村宏臣「デジタル写真測量技術を用いた文化財建造物の計測と劣化評価」(『文化財保存修復学会誌』49、2005年3月)

IV 現 況

はじめに

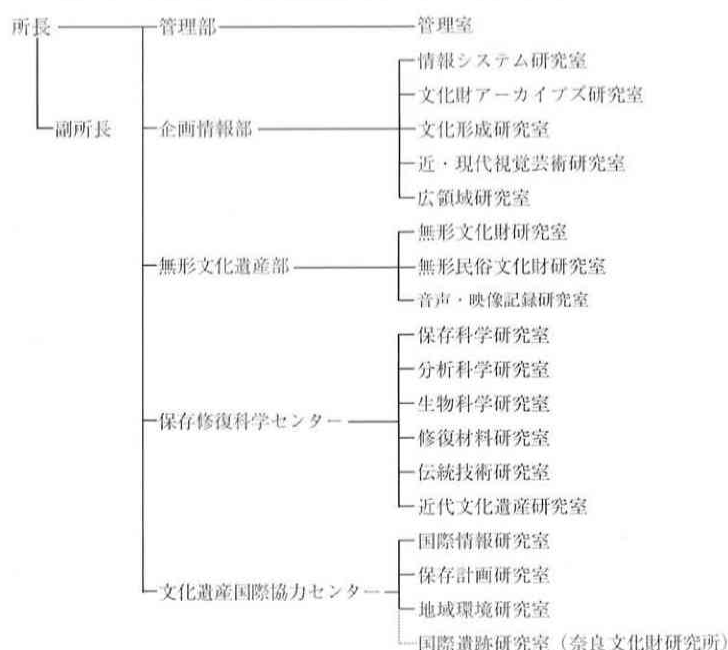
これまで1930（昭和5）年から2005（平成17）年度までの75年にわたる歴史を回顧してきたが、本章では、現在の当研究所の組織と概要を「現況」として記すことにする。2006（平成18）年4月以降から現在までの当研究所の組織の改正については下記の通りである。

2006（平成18）年4月1日 文化財研究所組織規程の一部が改正されて、協力調整官—情報調整室は企画情報部に、芸能部は無形文化遺産部に、国際文化財保存修復協力センターは文化遺産国際協力センターとなった。

2007（平成19）年4月1日 独立行政法人文化財研究所と独立行政法人国立博物館との統合により、東京文化財研究所は、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、黒田記念館は、その保管する作品とともに東京国立博物館に移管された。この統合に伴い、東京文化財研究所の組織は、美術部と企画情報部が統合されて新たな企画情報部となり、また、保存科学部と修復技術部が統合され、保存修復科学センターとなり、管理部を含め3部2センターに改編された。

以下の組織図に基づき、現在の当研究所の各部、センターの業務、ならびに調査研究の概要を記し、現在の職員一覧を挙げることにする。

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所組織図（2009年10月1日現在）



組織の概要

1 管理部

管理部は、管理室に庶務係、企画渉外係、会計係を置いて、当財研究所の事務部門として庶務、人事、会計、施設管理、国際交流、研究支援の業務を行っている。法人本部と連携を取りながら年度計画の作成、予算の執行及び評価委員会関係資料の作成、諸規則の整備、人事システム、会計システムの運用を図るとともに一般管理費の経費削減、及び業務の外部委託・事務のOA化を推進し行政コストの効率化を行っている。

庶務係

当研究所における業務方法書の変更、中期計画及び年度計画の取りまとめ、事業年度の業務実績についての評価委員会の評価に関する事務を行っている。また、情報公開に関する事務、秘書業務に関する事務、規程の制定改廃に関する事務、文書の授受・発送に関する事務、文化庁等の他機関・法人本部及び各施設並びに所内の連絡調整に関する事務、人事管理に関する事務（有期雇用職員、客員研究員、調査・研究アシスタントの任免に関する事務を含む）、共済組合に関する事務、栄典及び叙勲に関する事務等を行っている。

企画渉外係

海外渡航に関する事務、研修及び国際研究集会等の実施に関する事務、国際交流等に係る政府機関及び関係団体との連絡調整に関する事務等を行っている。また、在外日本古美術品修復協力事業に関する事務、研究助成に関する事務、寄付金の受入、視察及び見学の受入と対応、所蔵の写真・出版物等の使用許可に関する事務等を行っている。

会計係

財務諸表の作成に関する事務、決算報告書の作成に関する事務、監事及び会計監査人の監査に関する事務、予算・決算に関する事務、資金管理及び出納に関する事務、諸謝金及び旅費の執行に関する事務を行っている。また、毎事業年度の業務の実績に係る資料作成に関する事務、給与計算及び給与の支払いに関する事務、物件費の執行に関する事務、物品及び役務の調達、契約及び管理に関する事務、会計関係事務電算機の保守管理に関する事務、建物及び設備等の管理に関する事務等を行っている。

2 企画情報部

企画情報部は、文化財に関する専門的アーカイブを構築して外部へ発信するほか、所内の情報システムを管理し、広報企画事業を行い、資料閲覧室や画像情報室を通じて資料の作成と公開を担う。また、日本及び東アジアの美術に関する調査研究を行い、美術史研究のための高質な資料や情報を作成し、その成果を積極的に刊行することを目指す。美術の研究に際しては、時代や地域をほぼ隙間無くカバーして研究するのみならず、ジャンルや調査研究手法などの枠にとらわれない広領域的、学際的な研究テーマを設定して、他の分野との連携を進める。

情報システム研究室

システムの管理と運営を行い、広報事業（ニュースレター・概要・年報などの編集、公刊）やホームページの作成を通じて、研究成果の公開を行う。

文化財アーカイブズ研究室

文化財の専門的アーカイブとして、文化財に関する画像や図書等の情報・資料を収集、整理、公開するとともに、文化財所有者からの調査研究に関わる依頼を調整し、その成果のとりまとめを行う。

資料閲覧室：受け入れた文化財関連の図書や定期刊行物、展覧会カタログ、写真資料などを整理し、月・水・金曜日に一般の利用者に公開するほか、各種の書誌や研究情報のデータベースを作成する。また、所蔵資料のデジタル化と目録作成を進め、刊行物としても提供する。図書資料、写真資料等のオンライン検索に対応するとともに、写真資料は主題別・作家別に分類・配架し、閲覧に供する。

画像情報室：各研究部門の依頼や外部機関の要請により、文化財を撮影し、画像を形成するほか、光学的理論やデジタル技術を応用した最先端の画像形成を開発・駆使し、視覚的な研究情報を提示する。

文化形成研究室

日本を含む東アジア地域の美術を対象に、これからの美術資料のあり方や可能性を探りながら、文化財の多様な価値形成のしくみを解明することを目指し、調査研究を行う。

近・現代視覚芸術研究室

明治以降の日本美術を研究する。近・現代美術に関わる研究資料を収集、整理し、研究手法を開発するとともに、現代美術の動向を調査、研究する。また、近・現代美術の研究者ネット・ワークを構築する。



1 第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会
 (「“オリジナル”の行方—新しい文化財アーカイブ構築の
 ために」, 2008年12月)

広領域研究室

美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、文化財に関わる諸分野と連携して、広い視野から美術を研究し、美術の材料、技法、制作過程等を明らかにする。

企画情報部は以下の事業を行う。

(1) 文化財に関する専門的アーカイブの拡充

他機関との共同調査研究により高精細デジタル画像を作成するとともに、当研究所の各研究部門と共同で画像資料のデジタル化等を推進し、画像管理と内部閲覧を目的とする画像データベースを運用する。また、これらの画像資料を、文献資料、及び研究情報と関係させ、より充実した文化財アーカイブの形成を進める〔図1〕。

(2) 研究情報の自己評価

所内の各部門が遂行する研究の新しい成果を共有し、かつ互いに評価し合う場として所内総合研究会(年6回程度)を企画、開催するとともに、各年度の研究や事業を総括した年報を編集する。

(3) 研究情報の外部発信と共有化

研究情報は、ニュースレター・概要・年報・ホームページ等によって提供する。ホームページ及び外部公開データベースは、昨今のブロードバンド時代に対応すべく、一層の充実を目指す。LAN委員会を主宰し、情報システムの効率化とホームページの充実について協議し、イントラネットシステムを活用して所内の情報化を進め、情報公開の要請に即応できる体制を整える。

(4) プロジェクト研究

歴史的な観点から美術を捉えることによって、モノに対する理解を深めると同時に、その成果を文化財の保存、修復、保護、公開に役立て、かつ恒に新しい研究方法と研究領域を開拓して、社会に貢献することを目指す。美術研究所の創設以来、当研究所が今日まで果たしてきたアーカイブとしての任務を認識し、美術研究のための資料や情報を、より高品質で信頼性のあるものにすること、そしてそれらの有効な活用と社会への還元を心がける。また、新しい研究方法や研究領域の開拓のためには、関連分野との連携のみならず、国内外の研究機関や研究者との研究交流が重要と考え、研究のためのネッ

ト・ワークを構築し、その中心的役割を担う努力を続ける。その実現のために、①高精細デジタル画像の応用に関する調査研究〔図2〕、②東アジアの美術に関する資料学的研究、③近・現代美術に関する総合的研究、④美術の技法・材料に関する広領域的研究、を遂行する。



2 高精細デジタル画像の応用に関する調査研究
(奈良国立博物館との共同研究、2008年11月)

(5) 研究成果・研究情報の公開

『美術研究』（年3冊）、『日本美術年鑑』（年1冊）、『東京文化財研究所蔵書目録』のほか、種々の報告書を公刊して、調査研究の成果を公表する。また研究成果の一端を、一般向けの講演会であるオープンレクチャーにて披露する。

(6) 黒田記念館の運営と黒田清輝に関わる研究情報の公開

黒田清輝（1866～1924）の遺産に基づいて造られた黒田記念館には、当研究所の前身である美術研究所と黒田記念室が置かれた。独立行政法人国立文化財機構の発足に伴い、黒田記念館と黒田清輝作品の管理を東京国立博物館が行うことになったが、黒田記念館の運営を当部が担当し、作品と研究成果の展示を行い、毎週木、土曜日の午後に無料で公開する。秋には、台東区の上野の山文化ゾーンフェスティバルに協賛し、特別公開も行う。さらに、1977（昭和52）年以来、「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を年1回、各地の美術館と共催している。また、ホームページでは、ヴァーチャル・ミュージアム「黒田記念館」を公開する。

3 無形文化遺産部

無形文化遺産部は、無形文化財（伝統的工芸技術、芸能）、無形民俗文化財（風俗・習慣、民俗芸能、民俗技術）及び文化財保存技術という、日本における無形文化遺産の全体を対象として、その保存継承に資する基礎的な調査研究を実施している。また重要な保護手法である音声・映像による記録については、作成とともに新たな手法開発についての研究を行っている。また、無形文化遺産分野について国内外との研究交流も実施している。

無形文化財研究室

古典芸能、伝統的工芸技術、及び文化財保存技術について、伝承実態の調査や技法技術の変遷の研究など、その保護に資するための基礎的調査研究を行っている。



3 タイにおける仮面制作工房調査



4 実演記録室における記録作成（講談）の様子

無形民俗文化財研究室

風俗・慣習、民俗芸能、及び民俗技術などの無形民俗文化財について、その保護に資するための基礎的調査研究を、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等の実地調査に基づいて行っている。また、映像記録作成、公開事業等、現実的な問題について全国の関係者との協議を実施し、その対策の検討も行っている。

音声映像記録研究室

無形文化遺産に関する記録のアーカイブ化、記録作成手法について研究を行っている。また無形文化財、無形民俗文化財の現状を把握し、後世へ継承するために、それらの音声・映像記録を作成している。

(1) 無形文化遺産に関する調査研究

技法・技術・慣習等、無形文化遺産は多岐にわたっており、保護対象の確定や適切な保護手法の確立のためには、無形文化遺産を構成する諸要素の専門的な調査・研究が重要である。また、人によって伝承されるために、年代や社会情勢の変化に伴って変容する要素も大きい。このため、従来の文献的研究の蓄積に加えて、伝承の実態に即した調査研究を実施している〔図3〕。

(2) 音声映像記録作成とデジタルアーカイブ化

無形文化遺産保護にとって、音声・映像記録は、記録保存的役割はもちろんのこと、その伝承ツールとしても重要な意味を持つ。このため、無形文化遺産部では、他機関では行い難い希少演目等の記録保存事業を実施すると同時に、既存の記録活用のために、デジタルアーカイブ構築に向けての研究を行っている〔図4〕。

4 保存修復科学センター

保存修復科学センターは、文化財の保存科学・修復技術のナショナルセンターとして調査・研究を行う目的で、保存科学部と修復技術部を統合して設立された。センターでは、保存のために、文化財を取りまく保存環境の研究や科学的な調査方法の研究を行っている。また、修復のために、それぞれの文化財の材質、製作技法とその置かれた環境を調査し、必要な修復材料・技法の改良と開発評価及びメンテナンス手法の開発を行っている。これらの調査・研究は文化財の保存修復現場の人々と密接に協力しながら進めている。

研究テーマは、文化財保護の行政施策面からの必要性、学問分野における先端性と発展性、保存修復現場からの要請や国際協力などを勘案して設定している。ここでは、現在進めているプロジェクト（2006～2010年度）について概略を記す。

また、保存修復科学センターには国立博物館等の保存修復関係者（18名）が併任となり、国立博物館と文化財研究所との間で「文化資産の保全に寄与する保存環境の構築」というテーマで連携して研究を進めている。

保存科学研究室

温湿度・光などと文化財の劣化との関係を調べ、環境を評価して劣化を防止するための研究を行っている。X線・赤外線などを使った非接触調査手法の開発も重要な研究である。

分析科学研究室

文化財の材質を様々な分析手法によって調査し、文化財の化学的な特徴を明らかにする研究を行っている。本研究は材料や技術の歴史的な変遷や資料の保存方法を理解するために利用されている。

生物科学研究室

生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除法の研究を行っている。現在は、文化財の安全性はもとより、環境や人体への影響をも視野に入れた対策の開発に力を入れている。

修復材料研究室

伝統的修復材料の評価と改良、新しい修復材料の開発評価及び修復材料の適用方法の開発を行っている。最適な材料を選択するために、材料に影響を与える環境調査も併せて行っている。



5 蛍光X線分析調査風景

伝統技術研究室

文化財の伝統的修復材料と技術に関する情報収集と研究を行い、その改良・開発を行っている。これらの研究は、文化財保存の適切な概念の構築も目標とし、日本のみならず在外日本文化財の保存と活用にも寄与している。

近代文化遺産研究室

航空機、鉄道、大型構造物などの近代化を担ってきた文化遺産に関して、保存修復のための情報収集、技術・材料の調査・開発を行い、近代文化遺産を後世に伝えていくために研究している。

航空機、鉄道、大型構造物などの近代

(1) プロジェクト研究

①「文化財の非破壊調査法の研究」

材質分析は文化財の保存修復や歴史研究のために今や欠かせないものとなっている。彩色文化財を主な対象として、分析科学研究室を中心に、新たな非破壊分析方法の開発と現場での測定を目的としたポータブル蛍光X線分析装置の改良や染料など有機化合物の物質同定を目的とした新たな非破壊調査法の調査・研究を行う〔図5〕。

②「文化財の生物劣化対策の研究」

歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は生物被害を受けやすい環境にあるが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とは言えない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況について集約し、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発などの研究を行う。本テーマに関して、カナダ保存研究所（CCI）などの研究者と共同研究を行っている。

③「文化財の保存環境の研究」

文化庁美術学芸課からの依頼を受けて実施している国指定文化財公開のための館内環境調査の基礎となる研究である。保存科学研究室を中心に、これまで室内汚染物質、美術館用免震装置、ハロンに代わる消火剤など公開施設が日常抱えている問題を研究してきた。現在は様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究及び実践を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として研究を進めている。本テーマに関して、

ドイツのドレスデン工科大学の研究者と共同研究を行っている。

④周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究

石造文化財や社寺建造物など屋外にある文化財は、自然環境における石材や木材、塗装の劣化など、保存上大きな問題を抱えている。本テーマでは、自然環境が文化財に及ぼす影響を評価し、それらを軽減するための研究及び修復技法の開発を行っている。

また、石造文化財を対象に大韓民国・国立文化財研究所と共同で調査研究を行っている。

⑤文化財の防災計画に関する調査研究

自然災害による文化財の被害を軽減するための調査研究を進めている。大災害時の被害予測、迅速な被災文化財救援を目的として、文化財の被災履歴と地理情報システムを組み合わせた文化財防災情報システムを開発している。また、仏像群の耐震対策を立案するための基礎的調査を行っている。

⑥伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究

伝統的修復材料と技術の評価と改良、新しい修復材料の開発評価及び修復材料の適用方法の開発を行っている。また、最適な材料を選択するために、材料に影響を与える環境調査も併せて行っている。

⑦近代の文化遺産の保存修復に関する研究

近代の文化遺産は多種多様な材料から構成されており、また、その規模の大きさも特徴的である。それゆえ、従来の修復材料や技法での対処が難しく、新たな材料、技法の開発が必要となっている。現在は、鉄構造物の利活用について問題点、手法などの研究を行っている。本テーマに関しては、ドイツ技術博物館の研究者と共同研究を行っている。

⑧文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力

高松塚古墳壁画は2001（平成13）年以降、微生物による損傷が著しくなったため、石室の解体を行い2007（平成19）年に壁画を修理施設に移動した。壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究の業務を実施している。またキトラ古墳では、壁画は損傷が激しく、カビなど生物による被害も生じているため、環境制御を行いながら、壁画の保存処置を図っている。なお業務は、奈良文化財研究所の保存担当者と共同して実施している〔図6〕。



6 ダイヤモンドワイヤソーによる壁画取外し
（キトラ古墳・朱雀）



7 裏打紙の除去

(2) 研修・指導等

①博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

プロジェクト研究で得られた研究成果は直ちに博物館・美術館・資料館などの現場に活かしていかなければならないものが多い。そこで毎年夏に保存担当学芸員研修を実施するとともに、修了生のフォローアップのための研修や、各地の

博物館などに出かけて行う地域研修など、受講生の状況に応じた研修を実施している。

②在外日本古美術品保存修復協力事業

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力している。この事業で修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、さらには技術交流も促進されている。

③国際研修—紙の保存と修復・漆の保存と修復

海外の美術館・博物館に保管されている紙文化財や漆芸品は、乾燥した環境と保存状況の違いから損傷を持つ作品が多い。また不慣れな取り扱いから破損する場合もある。これらの問題に対処するため、当研究所はICCROM と共同で参加者を募り、紙と漆の保存と修復に関する国際研修を毎年交互に開催している〔図7〕。

5 文化遺産国際協力センター

国際情報研究室

国際社会における文化財に関する理念、法理念、条約・憲章や、諸外国の文化財保護に関する法制度、保護の状況及び文化財と政治、宗教、民族との関わりなどについての調査研究を行う。

保存計画研究室

世界各国の文化財の保存・整備・活用計画、地域開発・観光開発と文化財との関わり等に関する調査研究と保存計画立案を行う。

地域環境研究室

世界各地の文化財をとりまく自然環境、歴史的・人文的環境、経済的環境と、それらが文化財に及ぼす影響ならびにその保存対策に関する調査研究を行う。

文化遺産国際協力センターは、日本政府による国際協力センター設置の方針を承け、文化庁によって1990（平成2）年に当研究所にアジア文化財保存研究室が設置されて以来、一貫して我が国の文化遺産国際協力活動の最前線で活動を行っている。我が国の国際協力活動の端緒となり現在もなおその象徴的存在である敦煌壁画の保護に関する日中共同研究はすでに第5期を迎え、タイ王国における石造文化財の保存に関する共同研究もまた継続実施されている〔図8〕。



8 第5期「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究」
（2007年5月）

中国河南省龍門石窟の保護に関するユネスコ日本信託基金保存修復事業におけるコンサルタントとしての活動、陝西省唐代陵墓石彫像の保護修復事業は2009（平成21）年3月に終了し、いずれも中国政府、河南省・陝西省両政府から高い評価と感謝の意が表されている。

20世紀末から世界の各国では自然災害、戦争等による文化遺産の破損・破壊が頻発するようになり、アフガニスタン・バーミヤーン遺跡保存修復協力事業、アフガニスタン文化財専門家及びイラク文化財保存専門家の人材育成事業等の戦災復興、スリランカ、インドネシア、中国、イタリア等で発生した地震・津波等の災害復興にも貢献している。

このほか、カンボジアにおける石造文化財と遺跡の保存に関する共同事業、大エジプト博物館附属の保存修復センター開設のための協力事業、タジキスタン等中央アジア諸国の壁画保存のための協力事業、インド・アジャンター石窟壁画保護のための協力事業、ベトナム・タンロン遺跡の保護事業、モンゴルにおける文化遺産保護協力事業など、アジアを中心に世界の広範な地域での活動を展開中である。

さらに、諸外国の専門機関・専門家との共同研究や研究交流、人材育成事業、専門家を招聘しての研修を積極的に展開実施している。これらの活動は各協力事業の一環として行われているほか、1990（平成2）年以来実施されてきた「アジア文化財保存セミナー」は2006（平成18）年から「アジア文化遺産国際会議」と名称を改めたが、一貫してアジア諸国の文化財保存関係者により特定のテーマに関する意見交換を行う場となっている〔図9〕。

そして、各国の文化財やその保護のためのしくみ（保護制度）に関する調査研究・情報発信も文化遺産国際協力センターの重要な業務である。2001（平成13）年以来、ヨ－



9 日中韓共同シルクロード人材育成プログラム
「紙の文化財保護修復研修コース」(2007年11月)

ロップ諸国を主な対象として文化財保護に携わる省庁や研究機関に関する総合的な調査研究を実施するとともに、世界各国の文化財保護に関する法令を収集・翻訳し、ウェブサイトや印刷物による公開を行っている。さらに、関連の書籍や資料を収集・分類・整理して利用するとともに、国際資料室で閲覧に供している。このような調査研究によって得られた情

報は、諸外国での事業を行うに際しての基礎資料として業務に活用される一方、日本の文化財保護制度との比較という観点から、国内の関連機関によっても活用されている。

これらの多岐にわたる事業、共同研究の実施は、当然ながら当研究所独自の運営費交付金だけでは経費が足りないため、各種外部資金の活用にも積極的に取り組んでいる。常勤職研究員が6人に抑えられている中、これらを実施するには人材の不足は否めないが、多彩な分野の客員研究員、特別研究員、研究・事務補佐員の献身的な仕事はこれを支え、外部専門家の協力も得ながら、総合科学領域としての文化遺産保護を国際社会の現場で実践している。

2001(平成13)年の独立行政法人化以降は、奈良文化財研究所の国際遺跡研究室が当センターへの併任となり、奈良文化財研究所と協力して国際協力活動を実施している。なお、2006(平成18)年6月に「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」が制定され、この法律を具体的な活動とし、文化遺産保護の動機を共有する機関や個人等の幅広い結集を図り、協調的・連携的な国際協力のための共通基盤を確立することを目指して、「文化遺産国際協力コンソーシアム」が設立された。その事務局は毎年公募によって選定されるが、設立以来、当センターが事務局を担当している。

職員一覧 (2009 年 10 月 1 日現在)

所 長 鈴木規夫 (工芸史・文化財学)

副所長 中野照男 (東洋絵画史)

管理部

管理部長 北出猛夫

管理室長 高柳 明

庶務係長 崎部 剛

企画渉外係員 井手真二

会計係長 正木敏博

専門職員 梶山利夫

事務補佐員 窪田太一

事務補佐員 吉野雅子

事務補佐員 神谷智美

事務補佐員 谷村 彩

事務補佐員 的場麻美

事務補佐員 木船妙子

事務補佐員 有賀由貴子

事務補佐員 宮川菜里子

事務補佐員 石丸真弥

事務補佐員 松本栄子

事務補佐員 瀧岡希美

事務補佐員 石井奈央子

事務補佐員 藤本奈緒

企画情報部

企画情報部長 田中 淳 (日本近代絵画史)

情報システム研究室長 勝木言一郎

(東洋絵画史)

文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英

(日本彫刻史)

文化形成研究室長 塩谷 純

(日本近代絵画史)

近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子

(日本近代絵画史)

広領域研究室長 綿田 稔

(日本中世近世絵画史)

研究員 皿井 舞 (日本彫刻史)

研究員 江村知子 (日本近代絵画史)

研究員 土屋貴裕 (日本中世絵画史)

専門職員 城野誠治 (画像形成)

特別研究員 (アソシエイトフェロー)

中村明子 (西洋絵画史)

特別研究員 (アソシエイトフェロー)

鳥光美佳子 (美術写真)

特別研究員 (アソシエイトフェロー)

井上さやか (美術資料)

事務補佐員 中村節子 (司書・情報処理)

研究補佐員 菅沼万里絵 (日本近代絵画史)

客員研究員 相澤正彦 (日本中世絵画史)

客員研究員 吉田千鶴子 (日本近代美術史)

客員研究員 三上 豊 (近現代美術)

客員研究員 森下正昭 (芸術社会学)

客員研究員 丸川雄三 (情報学)

客員研究員 中村桂史 (情報学)

学術振興会特別研究員 國本学史

(日本美術史)

無形文化遺産部

無形文化遺産部長 宮田繁幸 (民俗芸能)

無形文化財研究室長 高桑いづみ (古典芸能)

無形民俗文化財研究室長 (兼務) 宮田繁幸

音声・映像記録研究室長 飯島 満

(古典芸能)

主任研究員 俵木 悟 (民俗芸能)

研究員 菊池理予 (工芸技術)

特別研究員 (アソシエイトフェロー)

松山直子 (染織工芸)

特別研究員 (アソシエイトフェロー)

七海由美子 (文化人類学)

研究補佐員 綿貫 潤 (情報処理)

研究補佐員 星野厚子 (情報処理)
研究補佐員 金子 健 (古典芸能)
客員研究員 福岡裕子 (工芸技術)
客員研究員 森下愛子 (工芸技術)
客員研究員 服部比呂美 (民俗学)
客員研究員 星野 紘 (民俗文化財)

保存修復科学センター

センター長 石崎武志 (地盤工学)
副センター長 川野邊渉 (高分子化学)
保存科学研究室長 佐野千絵 (材料化学)
分析科学研究室長 早川泰弘 (分析化学)
生物科学研究室長 木川りか (生物化学)
修復材料研究室長 (兼務) 川野邊渉
伝統技術研究室長 北野信彦 (塗装技術史)
近代文化遺産研究室長 中山俊介 (船舶工学)
主任研究員 吉田直人 (分析化学)
主任研究員 犬塚将英 (物理計測)
研究員 早川典子 (有機化学)
研究員 森井順之 (土木工学)
研究員 加藤雅人 (製紙科学)
事務補佐員 市川久美子
研究補佐員 川端冴子 (都市計画)
研究補佐員 山口加奈子 (西洋史)
研究補佐員 中村明子 (建築史)
研究補佐員 久世めぐみ (美術)
客員研究員 三村 衛 (地盤工学)
客員研究員 小椋大輔 (建築環境学)
客員研究員 白石靖幸 (建築環境学)
客員研究員 三浦定俊 (物理計測)
客員研究員 間瀬 創 (保存環境学)
客員研究員 呂俊民 (建築環境学)
客員研究員 藤井義久 (木材科学)
客員研究員 板垣義郎 (高分子化学)
客員研究員 横山晋太郎 (航空機保存)
客員研究員 館川 修 (高分子化学)
客員研究員 長島宏行 (航空機)

客員研究員 小堀信幸 (船舶)
客員研究員 中右恵理子 (絵画保存修復)
客員研究員 安部倫子 (造形)
客員研究員 大林賢太郎 (装こう技術)
客員研究員 本多貴之 (高分子化学)
客員研究員 中條利一郎 (高分子化学)
客員研究員 坪倉早智子 (保存科学)
客員研究員 松島朝秀 (保存科学)
学術振興会特別研究員 吉川也志保
(史料保存)
連携併任 神庭信幸 (東京国立博物館)
連携併任 和田 浩 (東京国立博物館)
連携併任 救仁郷秀明 (東京国立博物館)
連携併任 日高 慎 (東京国立博物館)
連携併任 土屋裕子 (東京国立博物館)
連携併任 三笠景子 (東京国立博物館)
連携併任 荒木臣紀 (東京国立博物館)
連携併任 村上 隆 (京都国立博物館)
連携併任 浅湫 毅 (京都国立博物館)
連携併任 谷口耕生 (奈良国立博物館)
連携併任 本田光子 (九州国立博物館)
連携併任 今津節生 (九州国立博物館)
連携併任 鳥越俊行 (九州国立博物館)
連携併任 藤田励夫 (九州国立博物館)
連携併任 志賀智史 (九州国立博物館)
連携併任 高妻洋成 (奈良文化財研究所)
連携併任 脇谷草一郎 (奈良文化財研究所)
連携併任 降幡順子 (奈良文化財研究所)

文化遺産国際協力センター

センター長 清水真一 (建築学)
国際情報研究室長 岡田 健 (文化財学)
保存計画研究室長 友田正彦 (建築学)
地域環境研究室長 山内和也 (考古学)
主任研究員 朽津信明 (地質学)
主任研究員 二神葉子 (考古科学)
特別研究員 宇野朋子 (建築環境工学)

特別研究員 有村 誠 (考古学)
 特別研究員 影山悦子 (美術史)
 特別研究員 秋枝ユミイザベル (建築学)
 特別研究員 邊牟木尚美 (金属修復・博物館学)
 特別研究員 島津美子 (保存科学)
 特別研究員 鈴木 環 (建築学)
 研究補佐員 廣野 幸 (紙保存修復)
 研究補佐員 杉崎佐保恵 (保存科学)
 事務補佐員 高多加奈子
 客員研究員 前田耕作 (美術史)
 客員研究員 津村宏臣 (考古学)
 客員研究員 鉾井修一 (建築環境工学)
 客員研究員 高林弘実 (文化財科学)
 客員研究員 西山伸一 (考古学)
 客員研究員 岩井俊平 (考古学)
 客員研究員 今井健一郎 (法律学)
 客員研究員 柏谷博之 (植物学)
 客員研究員 谷口陽子 (保存科学)
 客員研究員 安倍雅史 (考古学)
 客員研究員 松岡秋子 (絵画保存修復)
 客員研究員 古田嶋智子 (保存科学)
 客員研究員 末森 薫 (美術史)
 客員研究員 野島崇子 (絵画修復)

国際遺跡研究室 (併任)
 室長 杉山 洋 (奈良文化財研究所)
 研究員 石村 智 (奈良文化財研究所)
 研究員 森本 晋 (奈良文化財研究所)
 特別研究員 (アソシエイトフェロー)
 田村朋美 (奈良文化財研究所)
 ・文化遺産国際協力コンソーシアム事務局
 特別研究員 田代亜紀子 (社会学)
 特別研究員 (アソシエイトフェロー)
 原本知実 (国際政治学)
 特別研究員 (アソシエイトフェロー)
 原田 怜 (文化財保護政策)
 研究補佐員 小角由子 (情報学)
 事務補佐員 土居香葉子

関 連 資 料

関連団体

はじめに

本章では、当研究所の75年の歴史を振り返るという本書の趣旨から、美術研究所時代の調査研究の業務と密接な関係にあった「美術懇話会」と「東洋美術国際研究会」の事業活動について、その概要を記すことにする。

前者は、当研究所創設期に調査研究業務の協力支援を目的に設立された団体である。後者は、戦前に外務省の外郭団体「財団法人国際文化振興会」との関連から設立された団体であり、刊行事業を中心に当研究所職員もその活動に協力していた。いずれも当研究所の創立期から戦中期にかけて、当研究所内に事務局を置いていた。

本書刊行のための調査を進める過程で、これらの団体には当時の各界の著名人が多数関与し、当研究所の事業を援助していた事実が明らかとなった。以上の理由から、「関連団体」として掲載するものである。

「美術懇話会」

「美術懇話会」の設立と活動について

当研究所創設後の1931（昭和6）年11月に、帝国美術院長正木直彦の首唱によって「美術懇話会」が設立され、事務局が同研究所内に置かれることになった。同会は、正木の言葉によれば、「美術に関する友達が唯だ単に集まって話をしたり、よい物を見ろといふ、とりとめのない会合を時々やつて行くうちに、美術の発達を奨励し後援する面白い着想やら、また之を実施する為の新計画やらが自ら湧いて来て、大袈裟に申せば将来社会を動かす与論の基礎をも作る」という「高遠なる理想」を目的に、しかしながら「極めて暢気に、謂ゆる美術の友達の会といふ程度」のことから始められた。言わば、当研究所の「後援」会的な性格であったと言える。ここに、『美術懇話会一覽』（昭和18年8月15日発行、47頁、縦21×15cm）〔図1〕と題された冊子があり、その中から「美術懇話会設立の趣旨」、「美術懇話会規則」、及び同年までの「沿革及事業概要」を紹介したい。なお同資料は、原則として原文表記のままであり、そのため同会主催の展覧等の事業については、各事業について校閲を経て編集された『資料編』の「美術懇話会主催展覧及び講話等」（663～696頁）を参照されたい。同会は、同資料刊行後も、1945（昭和20）年4月まで展覧、講演等の活動が行われたと記録されている。また「美術懇話会会員名簿」（697～698頁）も参照されたい。



1 『美術懇話会一覽』1943年

美術懇話会設立の趣旨

設立首唱

帝国美術院長 正木直彦述

我国社会に於いて美術に興味と関心とを持つて居らるゝ方は、中々多いのでありますが、従来我国には、是等の人々が相集まつて懇談する機会が余りありませんでした。是は甚だ遺憾なる事態で、私は夙うから、斯くの如き人々が時々集つて美術に関する趣味を味ひ、美術を憂ふる同じ志を語るといふやうな会合を作りたいと思つて居りました。

我国は真に世界の美術国でありまして、よい美術を古来産出して居り、また誠に優れた美術的天才を持つた国民であります。それにも拘らず、我国の社会に於ける美術鑑賞並びに研究の設備と申すものは、欧米諸国に比して、未だ甚だしく遅れて居るのは御承知の通りであります。斯くの如き状態は、縱令我國民が本来美術的天才を持つ国民であるとは言へ、我が美術を将来堅実に発達せしむる所以ではありません。我国の社会に於ては、美術の爲めにしなければならない仕事は実に沢

山あるのであります。然るに美術に関する社会の設備は、容易に改まるものではありません。美術の名品を調査保存し、之を研究し鑑賞する施設を作るとか、それによつて、将来の我が美術育成の基礎を作るなどといふことは多額の経費を要して実現が困難なるのみならず、美術といふと我国に於ては、何か遊戯のやうに聞えて、何となく社会の必要から迂遠なる仕事として等閑視され易いのであります。然るによく考へるならば、美術とは単に美しい楽しいものであるばかりでなく、実に重要な社会的任務を持つていて決して軽視してはならないものであります。家庭に於ける美術の教養が人間の感情を美しく発露せしむる謂ゆる美育として重要なことは近年識者によつて提唱されるやうになりました。また斯くの如き教育の普及は我国の美しき工芸の進化に、従つてまた産業の発展の上に重要な基礎を作ります。優秀なる文化を示して世界各国がはげしく競争する今日に於ては実に美術は最も有力なる平和的武器となり、国民外交上最も感化力に富みたる一資料たる働きをなすものであります。斯くの如く美術は国民生活の上に実に意味深きものでありますので、私共は、この我国の美術を愛し護り健全に発達させねばならぬと考へ、それが為め先づ芽生を育てる様な積りで、茲に一つ美術懇話会を作り、同趣味同憂の方々と御集りしたいと思ふのであります。美術に関する友達が唯だ単に集まつて話をしたり、よい物を見るといふ、とりとめのない会合を時々やつて行くうちに、美術の発達を奨励し後援する面白い着想やら、また之を実施する為の新計画やらが自ら湧いて来て、大袈裟に申せば将来社会を動かす世論の基礎をも作るであらうと考へるのであります。

今回、私共が作りたいと思ふ美術懇話会は上述の如き高遠なる理想を持つて居るのであります。それを極めて暢気に、謂ゆる美術の友達の会といふ程度で、先づ兎に角始めたいといふ意嚮であります。大きな会になつた暁には、法人にして、正式なる組織にする予想と希望とを以つて、然しながら、初めから余り大袈裟なことを考へても却つて実現し難いことでありますから、本式なるものに進む第一歩として、先づ同志と語り合ひ、語らつた者が追々に集まるといふ形で、兎に角始めやうといふ訳であります。本会は或る都合から本年中に早く作つておかねばならなかつたので、去る十一月二十一日創立いたしたのでありますが、同志勧誘の方法も、斯くの如き趣旨の会でありますから至極暢気にやつて居るので、或は創立までに是非お話ししなければならない方々にも、未だ申上げずに居たりする有様であります。自然に御目にかゝつた方にお話して、先づ以つて十一月二十一日に蓋開けをしたといふ成り行きであります。今後と同様な方針で、話し合つて同志を追々に糾合するといふ形で進むほかありませんので、従つて勧誘の先後順序などには全然意味がなく、唯だ美術に興味があり我国美術の堅実なる発達に関心をもたれる方々に成る可く広く御入りを願つて、仕事の成績を挙げたいと思ふのであります。何卒宜敷御願ひ致します。

最後に一言いたしておきたいことは、本会の事務所を美術研究所に置き本会理事の一人を美術研究所長に委嘱したことであります。一体本会の如き美術の友達の会を作りたといふ希望は多年持つて居りましたが、これを漸く作れるやうになつたのは、実は、美術研究所が出来たからであります。一種の倶楽部とも見るべき美術懇話会を成立させる為めには、先づ適当なる場所がなければ、事務を執掌して行く上にも、或は会合や小展観を為す場合にも経費ばかりかゝつて、不便で仕方がないのであります。ところが昨年丁度都合のよい美術研究所が出来上がりましたので、予て望んで居た懇話会も初めて作れるやうになつたわけであります。美術研究所は御承知の通り故黒田清輝子爵の遺志と遺産により、牧野伯爵閣下、樺山伯爵、福原鐙二郎君、久米桂一郎君等の尽力を俟つて

成立し、之が政府に寄附されて、帝国美術院に附属したる美術研究所となつたのでありますが、建物は実に品位ある立派なもので、且つ美術の中心である上野公園にあり、その上また研究所の仕事の性質上、美術懇話会の如き、美術に興味と理解とを持ち、日本の美術の堅実なる発達を後援し奨励して行かうといふ会の本部を置くに、この上なく適当したところであります。美術全般に亘る研究資料を蒐め諸種の調査に従事し、美術上の海外連絡にまで力を致して居る美術研究所に、懇話会の仕事をやつてもらふことは、懇話会の事業方針の上にも、広く且つ深い学術的根柢を与へて好都合であると同時にまた研究所としても、懇話会の如き美術研究を後援する事業を直接に世話することは、仕事は少し面倒になつても、大きく見れば、研究所側も利益を蒙つて、事業の能率を高める所以に他なりませぬ。我国に於ける美術研究所に、民間の美術の理解者後援者の集合団体である美術懇話会を置くことは、初めは小規模であるにせよ、性質としては、謂ゆる官民一致して、我国の美術を専門的にも社会的にもまた国際的にも進展せしむる所以でありまして、その将来兩者協力して斯界に貢献するところ多きを期待されるのであります。

以上、美術懇話会設立の首唱として、本会の趣旨を略述し、同志同愛の諸君の御入会を勧誘する次第であります。

昭和六年十一月

美術懇話会規則

第一条 本会ハ美術懇話会ト称ス

第二条 本会ハ事務所ヲ美術研究所内ニ置ク

第三条 本会ハ美術ニ関スル趣味及理解ヲ進メ社会ニ於ケル美術ノ堅実ナル発達ニ貢献スルコトヲ以テ目的ト為ス

第四条 本会ハ其目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

- 一 美術ニ関スル懇話会ノ開催
- 二 展覧会講演会等ノ美術ニ関スル研究的集会ノ開催
- 三 美術ニ関スル出版
- 四 其他本会ニ於テ適当ト認メタル事業

第五条 本会ハ其ノ趣旨ヲ賛シ之ヲ維持スル会員ヲ以テ組織ス

第六条 会員ノ入会ハ会員二名以上ノ推薦に基キ理事長之ヲ決ス

会員ニシテ退会セントスルトキハ書面ヲ以テ理事長宛ニ其ノ旨ヲ届出ツヘシ

第七条 会員ハ会費トシテ年額金六拾円ヲ本会ニ納入スルモノトス

会員ハ第四条第一項及第二項ニ掲ケタル諸集会ニ招待ヲ受ク

会員ハ本会出版物ノ中理事会ニ於テ特ニ定ムルモノヲ除キ其ノ無料配布ヲ受ク

第八条 本会ニ理事長一名及理事若干名ヲ置ク

理事長ハ總會ニ於テ会員中ヨリ之ヲ選挙ス

理事ハ会員中ヨリ理事長之ヲ指名ス

但シ理事中一名ハ美術研究所長ニ之ヲ委嘱スルモノトス

理事ノ中若干名ヲ常務理事トス

理事長及理事ノ任期ハ各三年トス但シ重任ヲ妨ケス

第九条 理事長ハ本会ヲ代表シ会務ヲ統轄ス

理事長ハ総会ヲ召集シ其ノ議長トナル

理事長故障アルトキハ其ノ指名シタル常務理事其ノ職務ヲ代理ス

理事ハ理事会ヲ組織シ会務ヲ処理ス

常務理事ハ理事長ヲ輔ケ常務ヲ処理ス

第十条 本会ノ事務ヲ処理スル為主事其他ノ職員ヲ置ク

前項ノ職員ハ理事長之ヲ命免ス

第十一条 本会ハ毎年一回通常総会ヲ開ク

通常総会ニ於テハ理事長ハ其ノ前期間ニ於ケル本会ノ事業及会計ノ報告ヲ為スコトヲ要ス

通常総会ノ外必要アルトキハ臨時総会ヲ開クコトヲ得

第十二条 左ノ事項ハ総会ノ議ニ付スルコトヲ要ス

一 本会規則ノ変更

二 本会ノ解散

第十三条 本会ノ経費ハ会費ヲ以テ之ニ充ツ

沿革及事業内容

昭和六年

十一月二十一日 同日迄に本会設立の趣旨を賛して入会を承諾せられたる人々美術研究所に相会して設立会を開く。右会合に於て満場一致別項の如き本会規則を議定し役員の選定を了し以て本会の設立を決したり。

初度の役員として、理事長に正木直彦君、理事に和田英作、川合玉堂及矢代幸雄の三君就任す。右設立会に際し本会最初の事業として会員岡田三郎助君所蔵に係る本邦古裂類を借用して展覧し会員其他同好者等約百八十名の観覧に供したり。

十二月十九日 美術研究所に於て懇話会を開催す。三原繁吉君所蔵の保永堂版広重東海道五十三次及異版若干を借用陳列し、田中喜作君の解説並に所蔵者三原君の版画技術に関する講話あり。

十二月十九日 本会規則第八条中『美術研究所主任』とあるを『美術研究所主事』と改む。

昭和七年

一月 美術研究所編輯の定期刊行物『美術研究』第一号を発行し、引続き毎月一回刊行会員に配す。

一月三十日 規則第八条により原邦造君理事に就任す。

一月三十日 懇話会を開催す。摂津住吉の聆濤閣吉田家所蔵に係る古文書、集古図集の類を借用陳列し、蒐集の由来及陳列品の概要に就て正木直彦君の談話あり、尚引続き翌三十一日研究者を招待して観覧に供したり。

二月二十日 懇話会を開催す。画法画譜類約三百点を展覧し、脇本十九郎君解説をなす。

三月二十三日 規則第八条により大島義脩君理事に就任す。

三月二十三日 懇話会を開催す。探幽縮図及写生図巻並に常信縮図を陳列す。

三月三十一日 美術研究所編輯美術研究資料第一輯『支那古版画図録』を発行し会員に配布す。

四月二十三日 懇話会を開催す。香取秀真君所蔵の和鏡約百二十点を展観し同陳列品に関する講話をなす。

六月二十五日 懇話会を開催す。諸家収蔵に係る西洋近代絵画三十九点を借用陳列し矢代幸雄君の出陳画に関する講話あり。

引続き翌二十六日より二十八日まで之を西洋近代絵画展覧会として公開したり。来館者四千二百人。

九月二十四日 懇話会を開催す。諸家に蔵せらるゝ長崎系洋風画約七十点を展観し、引続き二十五日及二十六日の両日之を公開したり。

十月二十二日 規則第八条により杉栄三郎荻野仲三郎両君理事に就任す。

十月二十二日 懇話会を開催す。東京美術学校所蔵狩野芳厓筆『悲母観音図』及其下絵並に『鷲図』等数点を借用陳列し、正木直彦君の談話あり。

十一月十八日 通常総会を上野公園精養軒に於て開催す。総会終了後尾高鮮之助君の印度支那、印度、アフガニスタン方面の旅行談あり、同君旅行中撮影に係る活動写真等を観覧す。

十一月二十六日 懇話会を開催す。中村不折君所蔵に係る支那古代書道の沿革に関する資料を陳列し同君の談話あり。

十二月十日 懇話会を開催す。奈良元興寺塔址出土品並に京都鞍馬寺経塚の発掘品一切を陳列し荻野仲三郎田沢金吾両君これに就て講話す。

尚翌十一日研究者を招待して観覧に供したり。

十二月十五日 美術懇話会叢書第一輯『和鏡の話』を発行し会員に配布す。

昭和八年

一月二十八日 懇話会を開催す。子爵岡部長景君所蔵に係るハツタ彫刻二十点、東京帝室博物館所蔵のガンダラ彫刻二点及び東京美術学校所蔵のガンダラ彫刻一点を借用陳列し、尾高鮮之助君の解説あり。

二月二十五日 懇話会を開催す。上田恭輔君の『失はれ行く清朝の名宝に就て』の講話あり、同君所蔵の北平故宫宝蔵内の書画の写生、標本などを展観す。

三月二十五日 東京帝室博物館に於て懇話会を開催す。浄瑠璃寺吉祥天女像、同厨子、東京美術学校所蔵同厨子扉並に関野聖雲君作同像模作を陳列し田中豊蔵君及関野聖雲君の講話あり。

四月二十八日 懇話会を開催す。小場恒吉君の朝鮮樂浪郡時代の古墳発掘の状況新発見に関する講話あり。

五月二十七日 懇話会を開催す。男爵古河虎之助君所蔵の萬古焼約二百五十点を借用展観し脇本十九郎君解説をなす。

七月一日 懇話会を開催す。東京、横浜、静岡、愛知等の諸家に収蔵せらるゝ渡辺崋山筆肖像画並に椿椿山作品を借用陳列し菅沼貞三君の講話あり。尚翌二日この展観を公開したり。

九月十六日 懇話会を開催す。吉沢三朗君所蔵に係る支那陶器九十余点を借用展観し同君の談話あり。

十月二十八日 懇話会を開催す。寺崎広業筆画稿、写生図類を主とし、なほ大仏開眼、溪四題を陳列野田九浦君の談話あり。

十一月二十五日 懇話会を開催す。国宝東北院歌合絵巻一卷外職人画絵各種を収蔵諸家より借用

陳列し、脇本十九郎君解説す。尚翌二十六日この陳列を公開し研究者の観覧に供したり。

十二月十六日 通常総会を上野公園精養軒に於て開催す。総会終了後、子爵大河内正敏君所蔵の陶磁器中の名品を実例として『日本陶磁器の鑑賞に就て』の講話をなす。

昭和九年

一月一日 美術研究所編輯美術研究資料第二輯としてボストン美術館所蔵吉備大臣入唐絵詞を発行す。

一月二十七日 懇話会を開催す。橋本辰二郎君所蔵に係る憚南田筆扇面全部六十八枚を借用展覧し、同君及小室翠雲君の解説あり。

二月五日 美術懇話会叢書第二輯『三代秦漢の遺品に識せる文字』を発行し、会員に配布す。

二月二十四日 懇話会を開催す。熊谷直太君所蔵の文晁筆写生図、画稿、模本縮図類を主とし、並に男爵倉富勇三郎君所蔵の文晁作品、東京美術学校所蔵の縮図等を借用展覧し、脇本十九郎君の談話あり。

三月二十四日 懇話会を開催す。諸家収蔵に係る芭蕉、嵐雪、蕪村等の俳画約二十五点を借用展覧し、伊藤松宇君の俳画に関する講話あり。

四月十四日 懇話会を開催す。円山応挙筆写生図三巻を西村総左衛門君より借用し、なほ、帝室博物館所蔵の応挙写生帖、滋賀県円満院蔵応挙筆難福図巻稿本二巻を併せ陳列して、田中豊蔵君の解説あり。

五月十二日 懇話会を開催す。諸家収蔵に係る西洋近代絵画、素描及び彫刻約六十点を借用展覧し、児島喜久雄君陳列品に関する講話を行ひ、山本豊市君のマイヨールについての追憶、富永惣一君はフランス近代画家の書簡につき談話す。尚翌十三日この展覧を研究者及愛好者の為に公開したり。

六月九日 懇話会を開催す。美術研究所撮影に係る平等院鳳凰堂本尊並に雲中供養仏写真及び東京美術学校所蔵の模刻三体を陳列し、田中喜作君解説をなす。

九月二十二日 懇話会を開催す。故久米桂一郎君の油絵四十余点を収蔵諸家より借用展覧し、和田英作君の談話あり。

十月二十三日 懇話会を帝室博物館に於て開催す。野間清六君『古楽面の鑑賞に就て』講話を行ひて後同館主催古楽面特別展覧会を観覧す。

十一月十七日 懇話会を開催す。侯爵浅野長勲君蔵男衾三郎絵詞一卷を主とし、併せて鎌倉光触寺蔵国宝頼煥阿弥陀縁起二巻を借用陳列し、脇本十九郎君これが解説をなす。

十二月十五日 通常総会を上野公園精養軒に於て開催す。事業報告に次で理事長改選を行ひ、正木直彦君重任す。理事長指名に依り川合玉堂、和田英作、矢代幸雄の三君理事に重任す。総会終了後、関野貞君の熱河、興安兩省に於ける遼代古蹟に関する後援を行ふ。

昭和十年

一月二十六日 懇話会を開催す。板谷波山君夫人蒐集に係る髪飾品を借用展覧し、伊藤超君の講話あり。

一月三十日 原邦造君理事任期満了の処理事長指名に依り重任す。

二月二十五日 懇話会を上野公園精養軒にて開催。外山英策君の『日本庭園に就て』の後援を聴きたり。



2 美術懇話会による講話を聞く会員たち



3 須賀川所在亜欧堂田善遺品展覧会会場風景

三月二十三日 懇話会を開催す。武藤金太郎君所蔵に係る光琳関係資料を借用展覧し、田中喜作君の講話あり。

四月二十七日 懇話会を開催す。安田善次郎所蔵の平家納経副本三十三巻を借用陳列し、田中親美君の談話あり。

五月二十日 美術研究所編輯美術研究資料第三輯として、ボストン美術館所蔵『徽宗摸張萱搗練図』を出版し、会員に配布す。

五月二十五日 懇話会を開催す。応挙眼鏡絵とその類品並に眼鏡を蒐集展覧し、外山卯三郎君の講話を行ふ。

六月一日 本会規則第八条中『美術研究所主事』とあるを『美術研究所長』と改む。

六月二十二日 懇話会を塩原又策君邸に於て開催す。同君蒐蔵の陶磁器数十点を鑑賞したり。

七月十四日 理事大島義脩君逝去す。

九月二十八日 懇話会を開催す。文晁筆公予探勝其他山水写生図類を諸家より借用展覧し、菅沼貞三君解説をなす。

十月二十二日 杉栄三郎君荻野仲三郎理事任期満了の処理事長指名に依り重任す。

十月二十六日 懇話会を開催す。須賀川所在亜欧堂田善作品及関係資料を陳列し、西村貞君の田善に関する講話を聴く。〔図2〕

翌二十七、二十八の両日この陳列を須賀川所在亜欧堂田善遺品展覧会として公開したり。来館者三百余名。〔図3〕

十一月三十日 懇話会を開催す。菊池容斎作品画稿其他資料を蒐集し、結城素明君の講話聴きたり。十二月二日此展覧を研究者の為公開す。

十二月十九日 通常総会を上野精養軒に於て開催。理事長より本会概況説明並に事業概要の報告ありて総会を終了し、続いて三原繁吉君及平塚運一君より木版画製作技法に関する講話を聴く。

昭和十一年

一月二十五日 懇話会を開催し、牧松、周耕等主として足利期水墨画の珍蹟を諸家より借用陳列し相見香雨君の講話を行ひたり。

二月五日 美術研究所編輯美術研究資料四輯『鳳凰堂雲中供養仏』を発行、会員に配布せり。

四月二十五日 懇話会を開催す。帝室博物館及西沢笛畝君所蔵の人形を展覧し、同君人形を展覧

し、同君人形の発達に就き講話せられたり。

五月二十三日 懇話会を開催す。前川家、団男爵家、西脇家及増上寺蔵国宝法然絵伝を展覧し、田中一松君の講話を聴きたり。翌二十四日之を特別展覧として公開す。

六月十三日 懇話会を開催す。平塚運一君蔵上代仏教版画を展覧し、同君の講話を行ふ。

九月二十六日 懇話会を開催す。東京美術学校所蔵故加納夏雄君旧蔵装剣金工具類展覧海野清君講話を行ふ。

十月二十七日 規則第八条に依り芝田徹心君理事に就任す。

十月三十一日 懇話会を開催す。子爵岡部長景君蔵北斎富岳三十六景を展覧藤懸静也君の講話聴きたり。

十一月二十八日 懇話会を開催す。岡崎及東京所在の桜間青厓作品約三十点を展覧し菅沼貞三君の講話を行ふ。尚美術研究所に於ては二十九及三十日の両日此展覧を公開して研究者の参考に供したり。

十二月十九日 通常総会を上野精養軒に於て開催。続いて法隆寺壁画の実物大写真を撮影したる便利堂技師佐藤濱次郎君撮影状況に就て講話を行ひたり。

昭和十二年

一月三十日 懇話会を開催し、山元家所蔵山元春拳筆山の写生卷等を陳列し、川合玉堂君の講話を聴きたり。

二月二十日 懇話会を上野精養軒に開催し、ボストン日本古美術展覧会の日本側代表として渡米したる溝口禎次郎の米国見聞談を聴きたり。

三月二十二日 懇話会を日本民芸館に開催す。同館蒐集民芸を鑑賞し、柳宗悦君の民芸館設立の由來に就て講話を開きたり。

四月二十三日 懇話会を開催し、帝室博物館、東京美術学校、香取秀真、其他諸家所蔵の懸仏を借用陳列し、香取秀真君の講話を行ひたり。

五月十五日 懇話会を開催す。ドイツ素描画名作二十四点を陳列し、ベルリン国立銅版画蒐集館主事ドクトル・メーレ君の講話を聴きたり。

六月十二日 懇話会を開催す。主として青森県所在の建部寒葉斎遺墨三十余点並に關係資料を借用展覧し、西村南岳君の講話を行ひたり。

十三、十四両日之を当別展覧として公開す。

九月二十五日 懇話会を開催し、東京美術学校、下村英時君岡田儀一君及び村田徳次郎君所蔵下村観山筆下図類を展覧し、下村英時君の講話を行ひたり。

十月二十三日 懇話会を開催す。主として津山、青森地方所在の広瀬台山遺墨を展覧広瀬哲士君の講話を行ひたり。尚二十四、五両日之を特別展覧として公開す。

十一月二十日 美術研究所編輯昭和十二年版日本美術年鑑を會員に配布せり。

十一月二十七日 懇話会を開催し、満谷家所蔵の満谷国四郎遺作、習作、素描、写生等を陳列し、小杉芳庵君の講話を聴きたり。二十九日之を特別展覧として公開す。

十二月十八日 通常総会を上野精養軒に於て開催。理事長本会事業の報告をなして後理事長の改選を行ひ正木直彦君重任と決定、理事長指名により理事川合玉堂、和田英作、矢代幸雄の三君理事に重任す。総会を了りて日本刀剣に関する本間順治君の講話を聴く。

昭和十三年

- 一月二十日 懇話会を神田学士会館に於て開催。山崎覚太郎君のバリ万国博覧会視察談（十六ミリ映画使用）並びに男爵団伊能君より同博覧会参加経緯を聴く。
- 一月三十日 理事原邦造君任期満了の処理事長指名により重任す。
- 二月十八日 懇話会を開催。岡野繁蔵君の蒐集の東印度遺存古陶磁を陳列し斉藤正雄君の講話を聴く。尚十九日之を特別展観として公開す。
- 三月二十六日 懇話会を開催す。堂本印象君の大分県富貴寺壁画模写及美術研究所撮影に係る同寺壁画写真を展観し、豊岡益人君の講話を行ひたり。
- 四月三十日 懇話会を開催す。浅井忠遺作水彩画、素描等を諸家より借用展観し、石井柏亭君の講話を聴きたり。尚五月二日此展観を公開せり。
- 五月十一日 懇話会を開催す。釈迦三尊並に十六羅漢図十九幅を展観し、田中喜作君の講話を聴きたり。
- 六月二十三日 美術研究所編輯日本美術資料第一輯を会員に配布せり。
- 六月二十四日 懇話会を上野精養軒に於て開催し、有島生馬君のダヌンチオのヴィラ、ヴィットリアーレに就ての談話を聴く。
- 九月二十九日 上野精養軒に於て懇話会を開催し、川端龍子君の北支及内蒙古旅行談を聴きたり。
- 十一月十二日 懇話会を根津嘉一郎君邸に於て開催し、牧溪筆瀟湘八景図同竹雀図光琳筆燕子花図屏風、新因果経、十二因縁絵巻、天狗草紙其他の絵画並に銅器仏像等を鑑賞したり。
- 十二月十九日 通常総会を上野精養軒に於て開催。理事長本会事業の概要の報告をなして総会を終了し、続いて堀口捨巳君の現代日本建築に就て（映画使用）の講話を聴く。

昭和十四年

- 一月十八日 美術研究所発行昭和十三年版美術年鑑を会員に配布せり。
- 一月二十一日 懇話会を開催し、朝倉文夫君蒐集の清朝乾隆時代の硝子器を借用展観し、各務鉞三君の講話を聴く。
- 一月三十日 原邦造君杉栄三郎君萩野仲三郎君理事任期満了の処理事長指名により重任す。
- 三月四日 懇話会を開催す。滝沢邦行君筆桜花写生図を展観し、三上参次君三好学君及滝沢邦行君の講話を聴く。尚引続き五、六両日之を特別展観として公開す。
- 四月二十二日 懇話会を開催す。佐々木昌興君蔵彭城百川作品を借用展観し、田中喜作君の講話を聴きたり、翌二十三日特別展観として之を公開す。
- 六月二十三日 懇話会を開催し、武内金平君其他諸家蔵のエジプト、ギリシャ、ローマ等の小芸術品を借用展観し、児島喜久雄君の講話を聴く。
- 六月三十日 杉栄三郎君理事を辞任せらる。
- 七月二十二日 美術研究所編輯日本美術資料第二輯を会員に配布せり。
- 九月二十九日 規則第八条により帝室博物館総長渡部信君理事に就任す。
- 九月三十日 懇話会を開催し、細川侯爵、中山侯爵、其他諸家所蔵菱田春草作品を借用展観し、安田靫彦君等の談話を聴きたり。
- 十一月十一日 懇話会を開催す。阿部幸次郎君蔵支那画を展観し、正木直彦君の講話を聴きたり。尚十二日之を特別展観として公開す。

十二月四日 理事芝田徹心君任期満了の処理事長指名により重任す。

十二月十六日 通常総会を上野精養軒に於て開催。理事長より本会概況並に本年度事業概要の報告ありて後、伊東忠太君の講演「熱河の建築に就て」（映画使用）を行ふ。

昭和十五年

一月二十日 懇話会を開催す。新潟地方所在の文人画家石川侃齋の遺墨約三十点を陳列し、酒井千尋君の講話あり。

二月二十日 東洋美術国際研究会発会式に因み、華族会館に於て、蜂須賀侯爵家藏紫式部日記絵詞、毛利侯爵家藏雪舟筆山水長巻、田男爵家藏光悦宗達合作歌巻を展覧せり。

三月二日 理事長正木直彦君薨去せらる。

四月二十七日 懇話会を開催。故正木直彦君蒐集の墨蹟、絵画、茶器、文房具を陳列し、交友諸家の座談ありて同君の遺風を偲びたり。

五月十一日 細川侯爵邸に於て同家蒐蔵の支那古明器、三彩、銅器等を鑑賞す。

五月二十日 美術研究所発行日本美術年鑑昭和十四年版を会員に配布す。

七月六日 臨時総会を東京帝室博物館会議室に於て開催し正木前理事長薨去伴ふ後任理事長に藤原銀次郎を推薦し同君の就任を見たり。

理事長指名により東京美術学校長沢田源一君理事に就任す。

総会后諸家に収蔵せらる、足利時代水墨山水画の尤品十二点を展覧せり。

八月十六日 美術研究所発行日本美術資料第三輯を会員に配布せり。

十月十三日 懇話会を開催す。北鎌倉長尾欽彌君別邸に就て同君蒐蔵の絵画、彫刻、陶磁、衣裳等を鑑賞。

十二月二十一日 通常総会を日本工業倶楽部に開催。理事長より本年度事業及本会概況の報告ありて後、矢代幸雄君の講演「対支文化政策と美術」並に正木篤三君の「現代支那工芸」の講話を聴く。支那工芸標本陳列。

川合、和田、矢代三理事任期満了のところ理事長指名により重任せり。

昭和十六年

一月二十八日 昨年末総会に於ける協議に基き、日本工業倶楽部に於て午餐会を開催し、松永安左衛門君の講演「禪と茶趣味」を行ふ。

二月十八日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。西脇清三郎君藏国宝善教房絵詞を展覧し正木篤三君解説をなす。

三月十八日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。永平道元、古林清茂、痴絶道沖、南楚師説、無学祖元、梵琦楚石等の墨蹟を陳列し、田山信郎君の講話を行ふ。

三月三十一日 規則中一部を改正し、理事の増員、常務理事及主事其他職員を置。

四月十五日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。飯塚琅玕斎君の竹細工の話聴く。

五月二十七日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。大名物瀟湘八景図六幅を展覧し、矢代幸雄君解説を行ふ。

六月十七日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。小山富士夫君の講演「北支定窯窯址発見の顛末」を聴く。

九月十六日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。香取秀真君の講演「茶の湯釜の話」を聴き、同

君蔵及根津美術館蔵の釜を陳列す。

十月二十一日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。小沢清佑君蔵初期洋風画「帝王図」及細川侯爵家蔵泰西人遊楽図屏風を陳列し、隈元謙次郎君の講演「最近発見の初期洋風画」を聴く。

十一月十八日 日本工業倶楽部に於て午餐会開催。尾上柴舟君の講演「平安朝の仮名の鑑賞」を行ひ、同家蔵東大寺切及石山切並に津村重舎君蔵高野切を展観す。

十二月十六日 日本工業倶楽部に於て通常総会を開催し理事長に代り沢田常務理事より本会事業の概要報告を為して総会を終了し、続いて三矢宮松君より「日本刀剣の各時代の様相」と題する講話を聴き、国宝、重要美術品刀剣類十数点を鑑賞せり。

昭和十七年

一月二十日 独逸より帰朝された小塚新一郎君より「美術と防空」に就ての講話を聴く。

二月十七日 哥廬に就て版画を展観し、高橋誠一郎君の講話を聴きたり。

三月十七日 「茶室の話」と題し堀口捨巳君に講話を願ひ、それに関する写真を陳列す。

四月十八日 根津美術館に於て「青磁の発達変遷に就て」小山富士夫君の講話を聴く。この日敵機の来襲を受け、途中で展観品の片付を致したが無事講演を終了す。

五月十九日 帝室博物館蔵の故岡崎正也翁の蒐集品を借用展観し、溝口禎次郎君の講話を聴く。

六月十六日 華山筆四州真景並に椿山筆山海奇景を展観し、菅沼貞三君解説をなす。

七月、八月 毎年の例により、休会す。

九月二十二日 田中一松君に「仏教図像類に就て」の講話を願ひ、図像類を諸家より借用展観す。

十月二十日 文部省前宗教局保存課長の青戸精一君より「保存行政に就て」の講話を聴く。

十一月十三日 長尾欽彌君の古代衣裳並に南方染織品を借用し、東京美術会館に於て東洋美術国際研究会と共催の下に展観行ふ。来館者凡そ二千名。

十二月十二日 「日本南宋画の発祥」に就て田中喜作君の講話を聴き、渡来黄檗画及日本初期南宋画を諸家より借用展観す。尚二十日右出陳作品を中心として、更に数点を加へて美術研究所に於て特別展観を開催す。

「東洋美術国際研究会」

「東洋美術国際研究会」の創立と活動

同会（英語名称：The Society of Friends of Eastern Art）は、1940（昭和15）年2月に、会長を細川護立〔図1〕とし、当研究所を事務所にして創設された団体である。当研究所とは別組織ながら、矢代幸雄をはじめ所員が同会の事業活動を委嘱され、参画する場合が多く、そのため同研究会の性格と活動を明らかにするために、本章でははじめに、（1）創立時に刊行された小冊子『東洋美術国際研究会規則』（発行日昭和15年1月、10頁、縦22×15cm）〔図2〕の全文を引用しておく。ついで（2）でこうした研究会が創設された背景を説明したうえ、（3）で事業の中心となった刊行事業のなかで主要な刊行物を順次説明し、（4）で同研究会が外務省に助成申請し、1940（昭和15）年9月に実施された中国大陸への視察旅行、最後の（5）で終戦後から同研究会の解散にいたるまでを資料に基づいて記すこととする。

（1）「東洋美術国際研究会規則」

東洋美術国際研究会規則（表紙）

第一章 名称及事務所

第一条 本会ハ東洋美術国際研究会（The Society of Friends of Eastern Art）ト称ス

第二条 本会ハ事務所ヲ東京市下谷区上野公園美術研究所内ニ置ク

第二章 目的及事業

第三条 本会ハ世界ニ於ケル日本及東洋美術ノ研究ヲ進メ美術上ノ国際連絡及協力ヲ図リ併セテ日本文化ノ海外宣揚及国際親善ニ貢献スルコトヲ以テ目的トス

第四条 本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

- 一 講演会及展覧会ノ開催並ニ連続講義ノ開設
- 二 外国人ノ研究及見学指導
- 三 著述、編纂、翻訳、出版並ニ定期刊行物ノ発行
- 四 海外研究機関トノ連絡及協力
- 五 海外ニ対スル出版物ノ頒布、寄贈及交換
- 六 其ノ他理事会ニ於テ適当ト認メタル事業

第三章 役員、顧問及職員

第五条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク



1 会長細川護立



2 『東洋美術国際研究会規則』
1940年

会長 一名
理事長 一名
理事 若干名（内若干名ヲ常務理事トス）
監事 二名
評議員 若干名

第六條 会長ハ評議員会ノ議決ニ依リテ之ヲ推薦ス

会長ヲ除ク役員ハ会長之ヲ委嘱ス

第七條 会長ハ本会ヲ統轄ス

理事長ハ会務ヲ掌理ス

理事長事故アルトキハ其ノ指名シタル常務理事之ヲ代理ス

理事ハ理事会ヲ組織シ会務ヲ処理ス

常務理事ハ理事長ヲ輔ケ常務ヲ処理ス

監事ハ本会ノ資産及業務ヲ監査ス

評議員ハ評議員会ヲ組織ス

理事長及常務理事ハ有給ト為スコトヲ得

第八條 役員ノ任期ハ三年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

補欠トシテ選任セラレタル役員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

役員ハ任期満了後ト雖後任者ノ就任迄其ノ職務ヲ行フモノトス

第九條 本会ニ顧問ヲ置クコトヲ得

顧問ハ理事会ノ推薦ニ依リ会長之ヲ委嘱ス

顧問ハ本会ノ会議ニ出席シ意見ヲ述ブルコトヲ得

第十條 本会ノ事務ヲ処理スル為主事、書記其ノ他ノ職員ヲ置ク

前項ノ職員ハ理事長之ヲ命免ス

第四章 會議

第十一條 會議ヲ分チテ理事会及評議員会トス

第十二條 理事会ハ理事長之ヲ招集シ之ガ議長トナル

理事総数ノ三分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求ヲ為シタルトキハ理事長ハ遲滞
ナク理事会ヲ招集スルコトヲ要ス

第十三條 理事会ハ理事総数ノ三分ノ一以上出席スルニ非ザレバ議決ヲ為スコトヲ得ズ

理事会ノ議事ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同数ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十四條 評議員会ハ会長之ヲ招集シ之ガ議長トナル

評議員会ハ毎年一回之ヲ開催ス但シ会長必要ト認メタルトキハ臨時ニ之ヲ招集スルコトヲ得

監事又ハ評議員総数ノ四分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求ヲ為シタルトキハ会
長ハ臨時評議員会ヲ招集スルコトヲ要ス

評議員会ノ招集ハ開会一週間前ニ日時、場所及議事事項ヲ各員ニ通知スルモノトス

第十五條 評議員会ハ評議員総数ノ六分ノ一以上出席スルニ非ザレバ議事ヲ開クコトヲ得ズ

評議員会ニ出席スルコト能ハザル評議員ニシテ書面ニ依リ又ハ他ノ出席者ニ委任シテ表決權ヲ
行使シタル者ハ出席者ト看做ス

評議員会ノ議事ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同数ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第五章 会員

第十六条 本会ノ会員ヲ名誉会員、賛助会員及研究会員ト為ス

第十七条 名誉会員ハ理事会ノ議決ヲ經テ会長之ヲ推薦ス

賛助会員ハ本会ノ事業ヲ翼賛シ一時金五百円以上若ハ年額参拾円以上ヲ釀出スルモノトス

研究会員ハ本会ノ施設及事業ヲ利用シテ研究ニ資セントスル内外人ニシテ会費年額拾円ヲ納ムルモノトス

第十八条 会員ハ本会ノ定期又ハ臨時ニ開催スル講演会、講義其ノ他ノ会合ニ出席シ及見学ニ参加スルコトヲ得

会員ハ一定ノ本会出版物ノ無料配布ヲ受ケ特ニ定メタルモノニ就キテハ割引価格ヲ以テ購入スルコトヲ得

第十九条 会員ニシテ退会セントスルトキハ其ノ旨ヲ本会ニ届ケ出ヅベシ

会員ニシテ会費ヲ滞納シ又ハ本会ノ目的ニ反スル行為アリタルトキハ理事会ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコトアルベシ

退会又ハ除名ニ際シテハ既納ノ会費又ハ釀出金ハ之ヲ返付セズ

第六章 資産及會計

第二十条 本会ノ資産ハ左ニ掲グルモノヨリ成ル

- 一 寄附金品
- 二 会費
- 三 政府補助金
- 四 資産ヨリ生ズル収益
- 五 本会ノ事業ヨリ生ズル収入
- 六 其ノ他ノ収入

第二十一条 本会ノ基本財産ハ左ニ掲グルモノヨリ成ル

- 一 基本財産ニ編入スベキコトヲ指定シタル寄附金品
- 二 基本財産ニ編入スベキコトニ決シタル金品

第二十二条 基本財産ハ消費スルコトヲ得ズ但シ事業遂行上特ニ必要アルトキハ評議員会ニ於テ評議員総数ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得テ其ノ一部ヲ経費ニ充当スルコトヲ得

基本財産中現金ハ国債証券又ハ確實ナル有価証券ヲ買入レ若ハ郵便官署又ハ確實ナル銀行、信託会社ニ預入ルモノトス

第二十三条 本会ノ経費ハ基本財産以外ノ資産ヲ以テ之ヲ支弁ス

経費ニ余剰ヲ生ジタルトキハ次年度経費ニ繰越スモノトス但シ理事会ノ議決ヲ經テ其ノ一部若ハ全部ヲ基本財産ニ編入スルコトヲ得

第二十四条 本会ノ予算ハ年度開始前評議員会ノ議決ヲ經ルコトヲ要シ決算ハ理事会ノ議決及監事ノ監査ヲ經テ之ヲ評議員ニ報告スルモノトス

第二十五条 本会ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第七章 補則

第二十六条 本規則ノ改正ハ評議員会ニ於テ評議員総数ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ之

ヲ為スコトヲ得ズ但シ第二条ノ事務所ヲ東京市内ニ於テ変更スル場合ニ限り理事会ノ議決ヲ経
テ之ヲ為スコトヲ得

第二十七条 本規則施行ニ関シ必要ナル細則ハ理事会ノ議決ヲ経テ別ニ之ヲ定ム

第二十八条 本会創立ノ時ニ於ケル会長、理事長、理事及監事ハ左ノ如ク之ヲ定ム

会長	侯爵	細	川	護	立
理事長	伯爵	樺	山	愛	輔
理事（○印ハ常務）					（五十音順）
		浅	野	長	武
	侯爵	井	上	三	郎
京城帝国大学教授		上	野	直	昭
国際観光局長		片	岡	譚	郎
		加	藤	正	治
○東京帝国大学助教授		兒	島	喜久	雄
東京美術学校長		芝	田	徹	心
	子爵	澁	沢	敬	三
文部省専門学務局長		関	口	鯉	吉
○	男爵	團		伊	能
	侯爵	徳	川	義	親
		長	尾	欽	彌
東京帝国大学教授		藤	懸	静	也
外務省文化事業部長		三	谷	隆	信
	男爵	三	井	高	陽
	子爵	武者小路	公	共	雄
○美術研究所長		矢	代	幸	雄
○		柳		宗	悦
帝室博物館總長		渡	部		信
（関西方面ニ尚数氏委嘱ノ予定）					
監事		原		邦	造
		藤	山	愛一	郎

（奥付）

昭和十五年一月

東洋美術国際研究会

東京市下谷区上野公園美術研究所内

電話下谷(83)三四八七番

（2）「東洋美術国際研究会」創立の背景

同研究会創立の背景についてみておきたい。1937（昭和12）年6月の帝国芸術院創設にみられるように、国内においては美術をふくむ芸術全般の「統制」が文部省主体にすすめられていった。一方で、海外に対しては、外務省が中心となって「文化」を喧伝（宣揚）するようになった。その背景には、満州事変（1931年9月）、満州国の建国宣言（1932年3月）以来国際的な批判をあび、ついに国際連盟脱退（1933年3月）にいたる日本の孤立化があると言っているだろう。そうしたなか、海外への「文化」宣伝の中核を担うべく設立されたのが、半官（外務省）半民の財団法人国際文化振興会（略称：K.B.S.、1934年創設）であり、これは現在の独立行政法人国際交流基金の前身にあたるものである。

同財団は、総裁に「高松宮宣仁親王殿下」、顧問に宮内大臣、外務大臣、文部大臣等をはじめとして有力な華族がならび、会長は近衛文麿、理事長は樺山愛輔からなり、「事業綱要」として下記のように「著述、編纂、翻訳及び出版」、「講座の設置、講師の派遣及び交換」等の10項が挙げられている。

- 一、著述、編纂、翻訳及び出版
- 二、講座の設置、講師の派遣及び交換
- 三、講演会、展覧会及び演奏会の開催
- 四、文化資料の寄贈及び交換
- 五、知名外国人の招請
- 六、外国人の東方文化研究に対する便宜供与
- 七、学生の派遣及び交換
- 八、文化活動に関係ある団体若しくは個人との連絡
- 九、映画の作製及び其の指射援助
- 十、会館図書室研究室の設置経営

（以上は、『国際文化』1号、1938年11月掲載による。）

さらに1938（昭和13）年11月には、機関誌として『国際文化』を創刊した。巻頭には「対外文化事業の永久性」と題する無署名の一文が掲載されている。これを読むと、当時の国際的な状況のなかで、対外的に日本の「文化」を宣揚しようとした主体がどの組織だったのか、またその戦略とはどういうものだったのかがうかがわれる。やや長い引用ながら、つぎに同文の一節を挙げておきたい。

今度の事変に關聯して日本の國際上の立場を有利にしようとしていろいろの努力がなされた。所謂國民使節の派遣とか宣伝印刷物をバラ撒くとか乏しい智慧を絞つて支那の宣伝に對抗しやうとしたが、どうも思はしくない。國民使節の話は『弁解者』として頭から聴かうともしないし、パンフレットは帯封のまゝ、紙屑籠に没書にされると云ふ憂目は度々。

こうした宣伝の効目がないことは数年前の満州事変のときで経験済みの筈である。たゞあの時

の場合と違ふのは文化宣伝が今度の事変の以前から余程効いてゐたことだと思ふ。之はどの位効いてゐるか実物で証拠立てられるものではないけれども、平常の文化的接触がどれ程こんな時に役に立つかは吾々の想像外であらう。その意味から曩の満州事変に促されて一層強化された対外文化機構—外務省内の文化事業部、国際文化振興会の新設や観光局、日仏会館、日独文化協会等の拡充を指す—のこゝ、数年間の活動なかりせば、日本の国際的立場は一層困難にされてゐたらうと考へることは果して云ひ過ぎだらうか。(中略)

今度の事変に就いての経験から文化そのものの紹介又は文化問題を通じての宣伝でなければ、かうした非常時に国際的に理解を進める途はないと云ふことを知つた。そしてそれはいざと云ふときになつて慌て、始めてもあまり役に立たぬと云ふことを知つた。

文化事業は恒久的事業でなければならない。謂はゞ地均作業である。地均された道路の上の重いトラックは走れる。この地均には十年二十年いや百年を必要とする。

平常何の連絡も関係もないところへ、いきなり事変に関するパンフレットを送つても誰も見ない訳である。吾々が文化問題についてこゝ、数年間に作つた海外の友達に吾々からそうしたパンフレットを送つて初めて彼等は読んで呉れるのだ。

対外文化事業は際物的であつてはならない、華々しさを期待してはいけぬ。それは毎日ジワジワとそして地味に続けられるべきものだ。

而もその効果は国家有事の時に現はれるものである。

(『国際文化』1号、1938年11月、2～3頁)

当時の日本は国際的に孤立し、状況がきわめて逼迫しているにもかかわらず、上記の文中では「文化事業」は「恒久的」で「毎日ジワジワとそして地味に続けられるべき」と述べている。しかしながら実際の活動には、拙速の感があつたと言わざるをえない。たとえば、その一つが外務省文化事業部と同財団の斡旋で創立された「日本ペンクラブ」である。P.E.N.クラブとは、1921(大正10)年にロンドンで創立された文芸家の国際的な相互理解を目的とした団体であつた。日本では、1935(昭和10)年11月に東京で創立総会が開かれ、初代会長に島崎藤村、副会長には有島生馬が就任した。翌年7月には、ブエノスアイレス(アルゼンチン)で開かれる第14回国際ペン大会に出席のため、日本代表として藤村と有島は東京を出発した。9月の現地の大会では、有島を通訳にして藤村が講演し、さらに1940(昭和15)年の国際大会を東京で開催するように提案したのである。この当時の日本は、1940年が皇紀二千六百年にあたることから、これを目指して国をあげて国際的な「宣揚」にとりくんでいたように思える。たとえば当時の新聞紙面には帝国芸術院問題とともにオリンピック開催(1940年東京開催)にむけて会場用地(東京の神宮外苑)の問題がとりざたされているように、東京オリンピック、万国博覧会(1940年東京開催)なども国家的なプロジェクトとしておしすすめられていた(P.E.N.クラブの東京大会、オリンピック、万国博覧会のいずれも中止となる)。

また、『国際文化』5号(1939年7月)では、下記のように「幻燈板『現代美術篇』の製作」と題する記事が掲載されている。

本会では先に(昭和十一年)古美術幻燈板を製作、既に今日迄に、一万三千余枚のものが各国に配布され、美術の国日本の紹介に、又講義用に貴重な材料として各方面に尊重されてゐるが、

今回はその姉妹篇として「現代美術篇」を製作することになった。

古美術篇は、絵画、彫刻、工芸、建築、庭園の五部門に分れてゐるが、現代篇は庭園を除いて同様に四部門とした。

選定された約二百点の作品は明治、大正、昭和の三代に互り、いづれも代表的作品であるが、単に現代優秀作品の紹介と云ふばかりでなく現代美術を通じて日本文化史の経移を現はそうと云ふことを主眼としたものである。

主な作者を挙げてみると左の如きもので作品は大体一人一点の割である。

- (一) 絵画のうち日本画では、幸野樸嶺、瀧和亭、狩野芳崖、橋本雅邦、菱田春草等から横山大観、竹内栖鳳、下村観山、平福百穂、富岡鐵齋、川合玉堂等約五十氏の作品、
洋画では高橋由一、川村清雄、黒田清輝から安井曾太郎、梅原龍三郎、藤島武二、藤田嗣治等三十氏の作品を含む。
- (二) 彫刻は木彫の高村光雲、塑像の新海竹太郎から現存作家の佐藤朝山、平櫛田中等約三十氏の作品
- (三) 工芸では金工の加納夏雄、香取秀真等、陶磁の板谷波山、富本憲吉等、漆工の柴田是真、六角紫水等、染織の川島甚兵衛、竹工の飯塚琅玕齋、等その他約四十氏の作品。
- (四) 建築ではウオートレス氏の造幣寮、ボアンビル氏の工部大学講堂、辰野金吾氏の東京駅日本銀行等から現代の代表的ビルディング、競技場、橋梁、個人住宅迄約五十点を含んでゐる。
尚作品の選定は本会常務理事を中心に行つたが外からは美術研究所の隈元謙次郎氏の努力を願つた。

作品は大部分実物直接撮影を行つた為、各方面各位の御援助を賜つたことは感謝の至りである。

ここで述べられている「古美術幻燈板」の内容については不詳ながら、この「現代美術篇」の構成については、すでに「美術研究所の隈元謙次郎氏」の関与していたことが明らかである。また隈元は、ほかにその学術的な専門性から、同誌4号（1939年4月）に「明治初年に於ける吾が国と伊太利亜文化の交渉」を寄稿している。

また『国際文化』8号（1940年3月）には、「紀元二千六百年記念国際懸賞論文募集規定」が掲載されている。これは同年が「紀元二千六百年」にあたることから、その「奉祝事業」として企画されたもので、「論文題目」は、「一、日本文化の特質 二、日本と諸外国との文化的交渉 三、世界に於ける日本文化の地位」の三題から「一題を選択執筆のこと」となっている。その「審査」の「委員」の一人には「美術研究所長 矢代幸雄」の名前も挙げられている。

このように、国際文化振興会の事業に美術研究所員が少なからず関与していたことは、この東洋美術研究会創設の前章にあたる事柄であろう。実際、本稿の冒頭には「東洋美術研究会規則」をかがけておいたが、そのうち「第一章第四条」の6項にわたる「事業」に明らかなように、この研究会は、国際文化振興会の「事業綱要」のうち、「学生の派遣」と「映画の作製」を除き、「文化」を「東洋美術」に置き換えて構想されたものであることがわかる。この事実は、国際文化振興会の理事長であり、同時に同研究所創設に尽力し、またここで誕生した同研究会の理事長にも就任したのが樺山愛輔であったことと無縁ではないだろう。つまり、同研究会は、樺山を中心にして、国際文化振興会の「文化」事業のうち、とりわけ東洋（日本）美術を海外に宣揚するためのものであったので

はないだろうか。なお、同研究会の会員については、『資料編』の「東洋美術国際研究会会員名簿」(699～701頁)を参照されたい。

一方、美術研究所内でも、以下に挙げる“The albums of Koetsu's shikishi in the Ostasiatische Sammlung in Berlin”のように、すでに海外に向けた刊行物を作成しており、これは東洋美術国際研究会創設を意識した事業であったと思われる。この冊子は、ベルリン東洋美術館所蔵の本阿弥光悦書・俵屋宗達下絵による「四季草花下絵和歌色紙帖」(2帖、36枚)の英文解説である。基礎データを含む本文は、『美術研究』85号掲載の矢代幸雄「伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖」(1939年1月)をほぼそのまま英訳したもので、原寸よりやや小さい色紙2面のモノクロ挿図を付している。矢代幸雄による序文原文を以下に引用し、訳文を付す。

“The albums of Koetsu's shikishi in the Ostasiatische Sammlung in Berlin”

Yukio Yashiro

Preface

The Facsimile-reproductions of the Albums of Koetsu's shikishi in the Ostasiatische Sammlung in Berlin are here published as the Series VIII of the “Sources for Eastern Art-Researches” edited by the Institute of Art, Tokyo. The Institute takes up the publication of the Berlin Albums in order to introduce to the people of the country the masterpiece of Eastern art which has gone abroad and never come back. Although photographic reproductions are not adequate to give the artistic impression of the original, it is our sincere wish that these might enable the countrymen who have no chance of seeing the original, to enjoy this great work of Koetsu's calligraphy, together with its beautiful background designed most probably by Sotatsu.

Our gratitude is due to Professor Otto Kummel, Director-General of the State-museums of Prussia as well as Director of the Ostasiatische Sammlung, who was willing to gratify our desire to get good photographs of the albums. Also we wish to acknowledge here the financial help so generously given by the Trustees of the Suenobu Foundation, by which the present publication was realized. The invariable goodwill and encouragement of the Foundation toward the Institute of Art Research can never be fully appreciated.

The explanatory note appended to the reproduction is what I myself have written for the “Bijutsu Kenkyu” (No.85), the Journal of Art Studies, edited by the Institute. It is no more than a mere report with some necessary researches, which still leaves many important and interesting questions for the future. Personally I do not know whether such a report is worth while reprinting, but I dared to do so, simply with the hope that it would be of some use to those who had never seen the original. I shall welcome any suggestions which would contribute to the solution of the problems contained therein.

Tokyo, June 1939.

Yukio Yashiro

Director of the Institute of Art Research

伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖

序文

このたび美術研究所編集の『美術研究資料』の第8集として、伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖のファクシミリ複製が出版のはこびとなった。当所では海外に流出して回帰することのない東洋美術の名品を国民に紹介する趣旨によりベルリンの光悦色紙帖を刊行の対象として取り上げた。写真複製によってオリジナルの芸術的印象を完全に伝えることはできないが、この光悦の書と宗達制作とされるすぐれた下絵とが渾然一体として調和している珠玉の作品を、オリジナルに接する機会のない国民に対して、鑑賞に供せられることができれば幸いである。

プロシア国立博物館総長であり、伯林東亜美術館館長を兼務するオットー・キュンメル教授には、光悦色紙帖の良質な写真の提供においてご協力をいただき、感謝する次第である。また本書の刊行については末延財団による助成を受けており、出版の実現のためにご高配賜ったことを記して感謝の意を表したい。同財団の当所に対する不変のご理解ご協力については感謝の念に堪えない。

作品画像に添えた解説は、美術研究所の機関誌である『美術研究』85号（「伯林東亜美術館所蔵光悦色紙帖」1939年1月）に私自身が著したものである。これは数度の基礎的調査に基づく報告にすぎないが、今後の重要かつ興味深い研究課題を未だ残している。個人的にはこのような一報告を翻刻することに意義があるのか定かではないが、オリジナルを目にしたことのない方々にとって解説として役立つことを期待してあえて再録した。光悦・宗達研究の問題について忌憚ないご意見を仰ぎたい。

東京 1939年1月

矢代幸雄
美術研究所所長

(3) 刊行等の事業活動

同研究会の活動のひとつに、「講演会及展覧会ノ開催並ニ連続講義ノ開設」がある。これは、1931（昭和6）年創立の美術懇話会がすでに行っていた「展観」・「講話」等の事業と共同主催されることが多かった。この面での活動の一覧は、『資料編』の「美術懇話会主催展観及び講話等」（663～696頁）を参照されたい。ここでは、同研究会の事業活動に挙げられた「著述、編纂、翻訳、出版並ニ定期刊行物ノ発行」及び「海外ニ対スル出版物ノ頒布、寄贈及交換」に関連した刊行事業について見ておきたい。その主な刊行物は下記の5種である。それぞれの刊行物の解題を記した上で、その刊行物の序文（英文）を引用し、翻訳も付すことにする。

- 1 Bulletin of Eastern Art
- 2 Masterpieces of Eastern Art no.1-5
- 3 Index of Japanese Painters
- 4 Art Guide of Nippon 1 : Nara, Mie and Wakayama
- 5 東洋美術絵端書

1 Bulletin of Eastern Art

Bulletin of Eastern Art (『東洋美術国際研究会紀要』以下、『紀要』とする)は、同会の定期刊行物である。創刊号は、会の設立に先立つ1940(昭和15)年1月、A11判(縦26×18cm)、計12頁、定価50銭で刊行された〔図3〕。第3号より付せられた奥付によれば、編集兼発行人は豊岡益人、印刷は文化出版印刷社(東京市京橋区)とある。⁽¹⁾

創刊号の冒頭に記された会の設立趣旨(執筆者不明、442～443頁に全文を掲載)の中に、次の一文がある。「本研究会は、会員に向けて定期刊行物を発行し、東洋の芸術活動を伝え、またより高度な研究と深い鑑賞のために出来る限りの便宜をはかることとする」。東洋美術の研究と鑑賞が「世界的な関心と呼ぶ」なか、東洋美術のさらなる啓蒙と有益な情報の提供を目的として刊行された『紀要』には、東洋美術に関する論考、美術界の動向を記した「Art News」(展覧会情報・物故記事など)、書評などが英文で掲載された(一部、ドイツ語も含まれる)。

当研究所が所蔵する第1号から39号を概観すると、35・36号(1943年)までは月刊で、基本的に各号一つのテーマが選ばれていることがわかる。内容は日本の仏教美術から現代絵画、能、刀剣、日本庭園、橋などの建造物のほか龍門石窟やアフガニスタンの美術及び考古学など多岐にわたり、毎号、表紙に1点と本文に数点の図版がモノクロで掲載される。テーマの選定基準は不明であるが、会が定期的に行っていた展観や個人コレクションの鑑賞会の折にはその特集が組まれている。

美術作品の紹介のみならず、日本美術に造詣の深い外国人による講演や論考、日本・東洋美術研究に秀でた外国の研究者の紹介も掲載されるのが、本紀要の特徴であろう。『国華』(594号)において「氏の日本美術に対する理解は、外国人としては相当深いものと察し得る、」と紹介されたイタリア大使ジャチント・アウリーチの講演「日本美術の印象」(3号)は、西洋及び東洋美術における写実主義と理想主義について、また自然に対する態度の違いなどが、日本の作品と主にイタリアの画家を例に語られ、西洋人の目から見た東西比較として興味深い。⁽³⁾ また、矢代が連載したビニヨン、ウェイリー、クンメル紹介は、単なる業績紹介にとどまらず、氏と交流のあった矢代ならではのエピソードが記されているのも印象的である。⁽⁴⁾

当時の編集作業の様子は、当研究所が所蔵する3冊の『日記』(昭和15年～17年)からうかがうことが出来る。執筆者は不明であるが、異なる筆跡が認められるため少なくとも二人以上によって記されたものと推測される。

特に詳細な記述が記されているのは第6号についてであるが、「昭和15年6月21日(金)」の項



3 Bulletin of Eastern Art (東洋美術国際研究会紀要) 1940年1月

には「翻訳(ブレテイン第六号柳氏の民芸原稿)」とあり続いて「美の国と民芸」(高田)、陳列品の説明(小池)、民芸館案内(伊地知)と記されていることから、日本語で執筆された原稿を何名かの担当者によって翻訳していたようである。⁽⁶⁾

ここに名前の記されている

る小池愛子、伊地知純子は、共に津田英学塾を卒業後、嘱託として当研究会に勤務していた。この他にも翻訳者には、倉田文作や、オーストラリアに5年近くの在住経験があり、共立女学校で英語科の教員を勤めていた森節子などがいる。会の設立趣旨に、「何よりも、信憑性のある翻訳と有益な刊行物の出版に全力をそそぎたいと望んでいる」とあるように翻訳者には英語に堪能な者が積極的に選ばれたのだろう。

完成された翻訳原稿は、時にジョージア・ニューベリー（Georgia Newbury、「外人嘱託」として昭和17年6月まで当研究会に勤務）によるネイティヴ・チェックを経て、印刷所へと入稿された。発行部数の詳細は不明であるが、3号＝500部、6号＝800部、21号＝500部、30号＝500部、31号＝500部と記録されている。

『日記』（東洋美術国際7）には、「火曜までにしなければならぬので必死」（昭和15年6月21日（金））「柳氏の翻訳、やっと間に合ふ」（同年6月25日（火））などの言葉が見られ、編集作業に多忙であった様子が伝わってくる。月刊のため、担当者は翻訳、編集、校正、発送作業に追われる日々であった。

紀要は刊行後直ちに発送された。『日記』（東洋美術国際10）や『収入帳』（執筆者不明）に記された送付先には、会員の他、イギリス、ハンガリー、アメリカ、中国の大学、公共図書館、博物館、研究機関に加え、各国（アフガニスタン、メキシコ、フランス、イタリア、ポーランド）の大使・公使、日本ノルウェー協会、日仏学会、日葡協会、国際文化振興会などの名前が見られ、幅広く配布されていたことが認められる。

第35・36号まで月刊であった『紀要』は、37号（1943年12月）より季刊となる。表紙には従来までのアート紙に代わって和紙が用いられ、判型もA11判から縦25.5×18.2cmへと変更された（定価3円）。掲載論文数も増加し、新たに表紙の作品解説が加えられ、「従来に比べ三倍以上の内容を一冊に盛り込む」（37号56頁）とあるように、内容のさらなる充実がはかられた。

しかし太平洋戦争は、『紀要』の刊行にも影響を与えていた。『日記帳』（東洋美術国際9）には、「ブレチン用紙の配給が思はしくないので取あえず21号（9月号）には研究会保存のものを使ふことにす」（昭和16年10月29日）、「……（尚 大橋商店には10月分のアート紙は配給がない由）」（同年11月5日）などの言葉が見られる他、紙の配給元である日本出版文化協会とのやりとりの記録が散見し、紙の確保に難渋する様子がうかがえる。本紀要の第39号は“Masterpieces of Eastern Art”の第5輯として刊行（詳細は次項参照）されたが、その背景には、戦時下において刊行を続けるためのやむを得ない状況があったことが推察される。⁽⁷⁾

最終的にはこの「合併号」をもって本紀要は終刊となった。『昭和二十年度事業経過報告』（475～477頁に全文を掲載）によれば、「第四十号及第四十一号ハ製版中途ニテ、印刷工場ガ昭和二十年五月焼失セルタメ、発行不可能トナリ、原稿ヲ翻訳中ナリシ第四十二号（平家納経研究号）ハ翻訳担当者森節子氏宅空襲ノ為羅災ノ際邦文原稿及翻訳原稿ノ大半ヲ焼失セリ」とある。第40号に関しては、終戦後編纂を開始したものの、資金不足により印刷がままならず、昭和21年度の政府補助金を用いて刊行する予定であったところ、1946（昭和21）年7月、会自体の解散により、本紀要も終刊となった。

註

(1) 印刷はその後、16号から30号までを東京印刷株式会社（東京市王子区神谷町、後に東京証券印

刷株式会社と改名)、31号から39号までを笠井印刷所(東京市荏原区東戸越)が行っている。また、18号から第32・33号(1941年6月～1942年2月)まで、配給元として日本出版配給株式会社の名が記される。また、創刊時50銭であった定価は、7・8号(1940年)より1円、35・36号(1943年)には2円となった。

- (2) 38号までの総目次は『資料編』の839～844頁に掲載されている。また第39号は、“Masterpieces of Eastern Art”の第5輯として刊行された。
- (3) アウリーチは、1934年～1940年イタリア大使として日本に滞在。サン・フランシスコを出航した「大洋丸」船上で矢代幸雄と出会い、親交を結び、来日後矢代とともに平等院、法隆寺、薬師寺を訪問した。『紀要』の創刊号には「平等院」と題した論文が掲載されている。この講演は、1940年3月29日、氏の帰国に際し、華族会館にて英語で行われた。
- (4) 「ローレンス・ビニオン」(第7・8号、1940年)「アーサー・ウェイリー」(第9号、1940年)、「オットー・クンメル博士」(第17号、1941年)。日本の愛好家であったビニオンの人柄を伝えるものとして「源氏」と名付けられた愛犬が紹介されている他、ウェイリーに案内されてロジャー・フライの自宅を訪問した話などが記されている。
- (5) 当研究所は計4冊の日記を所蔵し、年次順に「東洋美術国際」7～10の仮番号を付している。『東洋美術国際研究会／日記／1940.5—』(東洋美術国際7)、『日記／昭和15～16／東洋美術国際研究会』(東洋美術国際8)、『日記帳／(昭和16年4月～)』(東洋美術国際9)、『事務日記／Index／guide Book Vol. I to II／Post Card／昭和16年1月末以降／大串』(東洋美術国際10)。なお、『事務日記』の詳細については、458頁の註3を参照されたい。
- (6) 『昭和二十年度事業経過報告』によれば、昭和20年12月より翌年3月までは、「金子重隆一人ニテブレチンノ原稿及美術案内記ノ原稿ヲ英訳セリ」とあり、常に複数の翻訳者がいたかについては不明である。
- (7) 日本出版文化協会の会長は、当研究会の会長でもある細川護立が務めていたため、紙の配給に幾分かの便宜が図られることもあったかもしれない。37号より季刊となった背景に、戦時下による紙不足の影響を見ることも出来よう。

THE SOCIETY OF FRIENDS OF EASTERN ART

Recently the study and the appreciation of Eastern Art has become of world-interest. In this artistic interest which would most propitiously help East and West to know each other better, a great difficulty always exists in the differences of languages, of histories, of racial manners and customs etc. which foreigners except specialists can hardly surmise or fully understand. In order to promote mutual understanding between East and West under these circumstances and make the Eastern Art, which is the expression of the high ideals of one half of mankind, better known and appreciated, this “Society of Friends of Eastern Art” is here organized.

Institutions for the study of Eastern Art, both academic and social, are increasing all over the world, and with them the number of individual scholars, collectors, and amateurs, but they have no helpful means by which they can learn the actual movements and activities in the field of Eastern Art. International collaborations are not only needed for the progress of human culture but also they would be pleasurable works which would combine different peoples of the world with unselfish and peaceful service to the Beautiful. This society is going to issue bulletin

which will inform the friends of Eastern Art of art-activities of the East and give facilities to them, as far as possible, to encourage more advanced studies and deeper appreciation.

On the other hand, we deeply regret to notice that foreigners, either residents or tourists, who take interest in Eastern Art have very little chance to see rich collections housed in the country. Public museums are not many. Private collections are difficult to approach. Temples with precious treasures are scattered throughout the country and it requires experts' help to know their whereabouts. Moreover, for foreigners who want to get more advanced and systematic knowledge of Eastern Art, there has been almost no chance offered to satisfy their desires except some popular lectures given now and then. Our society intends to lend some helping hand to such practical needs.

Although it would be impossible to give entire satisfaction to individual cases which are too many and too varied, the society will endeavour, so far as possible under the circumstances, to organize visits to famous private collections, tours to historical places and special lectures for advanced courses, which we are sure would promote a more serious interest in Eastern Art and its study. But most of all the society wishes to concentrate its energy to trustworthy translations and useful publications. Recent studies of Eastern Art done in this country are very important from a scientific and artistic point of view and it is a great pity that they are not so fully utilized as they deserve, simply because there are few good translations or summaries available for foreigners. Also books, which give most fundamental information concerning Eastern Art, such as chronologies, index of artists, guide-books etc., and without which students are left helpless without guidance—such elementary books are still waiting to be published and the compilation of these will be made by the society.

It is a great honour and pleasure to announce that the society is now established under the patronage of the Minister of the Foreign Office, and the Minister of the Department of Education, and is especially fortunate to have as President Marquis Hosokawa who is not only President of the Committee for National Treasures but also himself a world famous collector and connoisseur of Eastern Art, and as Chairmanship Count Kabayama whose name is familiar and dear to all foreigners for his never failing endeavour to encourage international friendship. Among Directors of the Society we can count heads of all important artistic institutions in the country, for instance, the Imperial Household Museum, the Imperial Art School, the Institute of Art Research, and also professors of the Imperial Universities, great collectors and famous scholars. With the collaboration and good will of all those influential officers the society hopes and trusts to flourish and to give encouragement to the progress of human interest in art.

東洋美術国際研究会

近年、東洋美術の研究と鑑賞は世界的な関心を呼んでいる。この芸術への関心は、東洋と西洋が互いをより良く知るためのもっとも好ましい助けとなりうるものであるが、言語・歴史、人種による風俗・習慣等の違いから、それは常に大きな困難を伴うのである。なぜならば、これらの違いは

専門家を除けば普通の外国人にはほとんど推測することも十分に理解することも出来ないからである。

このような状況のもとで、東西の相互理解を推進するために、また、人類の半数を占める人々の高い理想の表現である東洋美術をよりよく知ってもらいまた鑑賞してもらうために、この「東洋美術国際研究会」をここに設立する。

東洋美術研究のための機関は、学術的なものにしろ社会的なものにしろ、世界中で増加しつつあり、またそれに伴って、個人の学者、蒐集家、そして一般の美術愛好家の数も増加しているが、彼らは東洋美術の分野において実際にどのような動向がありまた活動が行われているかを知るための有益な手段を持ち得ていない。国際間の協力は、人類の文化の進展のために必要であると同時に、私心を捨て平和な心で「美」に仕えることで世界中の様々な人々を結ぶ楽しい仕事にもなりうるものである。

本研究会は、会員に向けて定期刊行物を発行し、東洋の芸術活動を伝え、またより高度な研究と深い鑑賞のために出来る限りの便宜をはかることとする。

ところで、我々にとって大変遺憾なことであるが、東洋美術に関心のある外国人たちは、日本に在住していてもまた旅行者であっても、我が国で優れたコレクションを目にする機会はきわめて少ない。公共の博物館はそう多くはない。また個人コレクションをたやすく見ることも出来ない。貴重な文化財を保有している寺院は日本中に点在しているが、それらがどこにあるのかを知るには専門家の助けを必要とする。さらに、東洋美術についてより高等でまた体系的な知識を得たいと思う外国人にとって、時折開催される人気のある講演を除けば、彼らのその願いをかなえるような機会は従来ほとんど提供されていない。本研究会は、そのような現実的な求めにいくらかの手助けをするつもりである。

多種多様な個々人の欲求を余すことなく満たすことは不可能であろうが、本研究会はこのような状況において、有名な個人コレクションの訪問や史跡への旅行、あるいは上級者のための特別講演などを可能な限り計画するよう努めて行きたい。それは東洋美術に対する関心と研究を深めることになることと確信している。しかしながら、本研究会は何よりも、信憑性のある翻訳と有益な刊行物の出版に全力をそそぎたいと望んでいる。近年の我が国における東洋美術研究は科学的、美術的な観点において大変に重要なものであるが、極めて残念なことにそれらの研究は十分に利用されていない。これは、ひとえに外国人が入手できる良い翻訳や要約がほとんど無いためである。書籍に関しても状況は同様である。年代記や画家索引、案内書等々の類、これらの書物は東洋美術に関する基本的な情報を与えるものであり、またこれらなくしては、学生たちは手引が無く途方に暮れることになるのだが、こういった基本的な書物は依然として出版を待っている状況にあり、それらの編集は本研究会において行われるであろう。

本研究会が、外務大臣、文部大臣の援助のもとにここに設立されることをお伝えするのは、誠に誇るべきことでありまた喜ばしいことである。さらに、会長に侯爵細川護立氏、理事長に伯爵樺山愛輔氏をお迎えすることは、本研究会にとって特に幸運なことである。細川氏は国宝保存会の会長であるばかりでなく、ご自身が東洋美術の世界的なコレクターでありまた鑑定家でもおられる。また樺山氏は国際親交の促進に常に努めておられ、そのお名前はあらゆる外国人にとってよく知られまた慕われているのである。本研究会の理事には、我が国のあらゆる重要な芸術機関の長を数える

ことが出来る。例えば、皇室博物館、東京美術学校、美術研究所などである。また帝国大学の教授たち、あるいは著名な蒐集家や有名な学者たちもおられる。これらの有力な役員との協力とご厚意によって本研究会が発展し芸術に対する人々の関心をより深めることになると願いかつ確信するものである。

2 Masterpieces of Eastern Art no.1-5

“Masterpieces of Eastern Art” は、1941（昭和16）年から1944（昭和19）年にわたり、全5冊が刊行された〔図4〕。本書は美術研究所編『日本美術資料』（143～144頁を参照されたい）

を英訳したものである。奥付には「東洋美術資料 日本美術第〇輯」とある（以下、本書を『東洋美術資料』と呼ぶこととする）。掲載作品は『日本美術資料』と同一である。ただし、『日本美術資料』においては、「日本美術の最も重要な特色の一つが、富麗清麗なる色彩に存する」として原則カラー図版が採用されていたのに対し、『東洋美術資料』では全てモノクロ図版となっている。また、二図掲載されていたものが一図となっていたり、図版の差し替え、トリミングの変更があるなど、若干の差異が認められる。また、巻末には日本、中国、朝鮮（韓国）の簡単な年表が付されている。

本書には会長細川護立による「英語版のための序」と、『日本美術資料』に載せられていた矢代の序の英訳（「日本語版の序」）が付されている。この「英語版のための序」には、細川による本書刊行の目的が記されている。要約すると以下の通りである。

東洋の美術は西洋の美術とは異なる独自の美と理念を持っており、東洋美術の研究とは、世界の啓蒙化や東西の人々の相互理解に大きく寄与するものである。しかしながら、実際の作品に触れること（とりわけ西洋の人々にとって）は難しく、ゆえに東洋美術の名品の信頼のおける複製の出版が求められている。このような目的の下に本書を刊行し、海外の研究者や美術愛好家に益したい。

良質な図版の提供こそが美術の研究には欠かせぬものと謳うこの序文だが、「日本美術に関する一般的教養を増進せんこと」にあった『日本美術資料』の刊行とは、その対象と目的とが大きく異なるものと認められる。

加えて、同序は“Masterpieces of Eastern Art”、『東洋美術資料』と冠しながらも、掲載作が「日本美術」であることの意味を、次のように説明している。

日本の美術は、国内で独自に育まれたもののみならず、中国その他の大陸の美術を摂取してきた。つまり、日本美術の中には、大陸では既に失われた精神や技術の豊かな蓄積があるということであり、日本美術の研究とは東洋美術の普遍的な要素を見いだすことに他ならない。

同一の作品、解説文を採用しながら、『日本美術資料』のタイトルが『東洋美術資料』と名を改めたことの意味は極めて大きい。ただし、表紙等に“Japanese Art, Series 〇”、奥付に「日本美術第〇輯」とあることから、「日本美術編」に続いて、「東洋美術の傑作全てを網羅」（英文版序）すべく続編の刊行が企図されていたとも考えられるが、『日本美術資料』の刊行中断その他の理由に



4 Masterpieces of Eastern Art（東洋美術資料）
1940年10月-1944年

より、この「東洋美術編」は幻の構想となった。これは先述の美術研究所「昭和十八年度概算書」の「大陸美術ノ紹介ヲ併セテ行フ可キ学的必要」という一連の動きと対応するものと解されよう。

さて、1943（昭和18）年に刊行された第4輯より、編集にいささかの方針変更があったと推察される。一つには日本人名の表記と、ローマ字表記法の変更である。前者に関しては、第1から第3輯の細川の序のすぐ下に Note として、明治以前の人名に関しては姓一名の順で、明治以後の人名に関しては欧米式に名－姓と表記すると記されていたが、第4、5輯では時代に関係なく、「日本式」の姓－名の順で表記することとなったと記される。また、後者に関しては、それまでの輯が「日本式ローマ字表記」であったものを、「訓令式ローマ字表記」（1927〈昭和12〉年内閣訓令第3号『国語ノローマ字綴方統一物件』）に改められた。よって、例えば3輯までの Yukio Yashiro の表記は、第4輯以降 Yasiro Yukio となった。

なお、本書の最終号となった第5輯は、表紙及び見返しに“Special Number of “Bulletin of Eastern Art”” No.39, 1943、奥付に「東洋美術資料 日本美術第五輯 プレチン・オブ・イースタンアート第三九号（昭和十八年七月－九月号）」とあり、同じく当研究会の定期刊行物“Bulletin of Eastern Art”の最終号ともなった。

MASTERPIECES OF EASTERN ART

PREFACE TO ENGLISH EDITION

It is with great joy that we notice the study and appreciation of Eastern art gradually beginning to flourish throughout the world to-day. Indeed Eastern art has developed a unique beauty and ideal of its own which differs from that of Western art, and the study of it contributes to the progress of the world's civilization and the better understanding between the people of the East and West. On the other hand, it is most difficult to see the masterpieces of Eastern art in the original. Public museums in Europe and America, especially those in the latter country, are endeavouring to collect these masterpieces and really some museums, especially the one at Boston, have succeeded in doing so; and yet, generally speaking, we find these collections of Eastern art far inferior to those of Western art not only in quantity but also in quality. Masterpieces of Eastern art still chiefly exist in the East and moreover most of them being prized in private collections it is difficult to see them even in their native countries.

What is most needed at present, therefore, for the study of Eastern art is to publish reliable reproductions of representative works and make them easily available for the public. This is particularly needed for the students of Eastern art in the Western world. With this in view, so far as is possible with the technique of printing now available, the Institute of Art Research is issuing series of reproductions of the masterpieces of Eastern art in a form which satisfies scholarly conscience of accuracy. Furthermore, with the hope that this series of publications will be fully utilized by scholars and amateurs abroad, the Society of Friends of Eastern Art has been asked by the Institute to issue its English edition, which is here given. This series is intended to reproduce in course of time all the important masterpieces of Eastern art, but naturally the first preference has been given to Japanese art, the work being done in Japan, while the masterpieces

of Chosen (Korea) and China will be included in the future. Japanese art is not only the flower of her own civilization, but also by faithfully studying the continental arts of China and of other countries, it is, so to speak, a rich reservoir of ideals and techniques which have long since been lost on the continent. Paying proper attention to this significant fact, if Japanese art be studied it will provide us with a wealth of material for Eastern art in general. In addition, it is well-known that quantities of Chinese art have been brought to Japan from early times and preserved in this country with special care. We understand with satisfaction that the Institute intends eventually to select and reproduce those masterpieces of continental art preserved in Japan in the series. It is not too much to say that for the real study of Eastern art, Japanese art and Japanese collections of continental art must receive very special attention. We sincerely hope that this series, which is being edited with this definite idea, will be appreciated by scholars and amateurs all over the world.

Marquis Moritatsu Hosokawa
President

Tokyo, October 1940.

Note :

In Japanese the order of personal names is the reverse of that of European names, placing the family or surname first followed by the personal or Christian name. In addition to this the question of Japanese names is very complicated in that before the Meiji Restoration in 1868 it was a convention to use one's rank or profession as part of one's name, thus often having several words in the name. Nowadays all names have been simplified into two words consisting only of family and personal names.

Since it is rather awkward to use the European order for those long names, we have decided to leave them as in the original. The order of the modern Japanese names, however, has been inverted and they are used in the conventional English manner.

PREFACE TO JAPANESE EDITION

"Masterpieces of Japanese Art^{*}" is published under my own editorship by the Institute of Art Research with the intention of compiling great achievements of Japanese art in reproductions as correct and reliable as possible in order to improve the public culture with regard to the art of the country. Art is the most honest manifestation of the national character and therefore a survey of the art of all periods reveals the development of the national spirit better than anything else; in other words, art exists not only for its own appreciation but also it forms an important section of national civilization reflecting the history of the country. It is urgent in these days, when the development of our national spirit is emphatically being advocated, to know these precious national inheritances left by our forefathers, to feel the essence of our history, and thereby to make contribution to the cultivation of the national spirit. The Institute of Art Research believes that it is most timely to start this enterprise of popular edification, although,

being a national institution of art studies for specialists, principally it concentrates its energy on scientific and historical researches.

In selecting materials and making explanations, great pains have been taken to avoid the inclination to become too specialized, since our main purpose is to make clear the characteristics of Japanese art judged according to the standards of art in general. Also since one of the most important characteristics of Japanese art is its rich colouring, we have decided to use reproductions in colour, although we know their defects very well. Indeed the colouring and atmosphere of our ancient art is too subtle and tranquil for any printed reproduction ; but since the originals of our precious art cannot easily be seen, most of them being in private collections, we have dared to use colour reproductions, which certainly explain the original better than monochrome and look more beautiful. We promise to be strict in supervising the reproductions, so that these facsimiles will resemble the originals as closely as possible.

These series are intended to be published annually in portfolios, each containing twenty reproductions or thereabouts. They include painting and sculpture as well as applied arts, but the first series has been limited to painting. Under my direction explanatory notes have been written by Tokuzo Masaki, who is on the research-staff of the Institute.

On this occasion our greatest gratitude is due to those museum-directors and collectors who generously allowed us to study these priceless collections and gave us permission to reproduce them.

Yukio Yashiro

Director of the Institute of Art Research March 1938.

* Since it was decided to publish an English Edition, this series has been enlarged to "Masterpieces of Eastern Art."

東洋美術資料

英語版のための序

今日、東洋美術の研究と鑑賞が世界的に盛んになりつつあることは、大いなる喜びである。実に、東洋美術は西洋美術と異なる独自の美と理念を育んできたのであり、その研究は、世界の啓蒙化や東西の人々の相互理解に大きく寄与するものである。しかしながら、東洋美術の名品を実際に見ることは大変に困難である。欧米、特にアメリカの公的な博物館では、これらの作品の収集が試みられており、実際にいくつかの博物館、特にボストン美術館のように、収集に成功している例もある。だが一般に、欧米の東洋美術コレクションは、西洋美術のコレクションに比べ、質量ともにはるかに劣っている。東洋美術の名品は主として東洋の地に存在し、しかもその多くはプライベートコレクションのため、同国人でさえそれらを見ることは困難な状況にある。

それゆえ、今日の東洋美術研究に最も求められていることは、東洋美術の名品を信頼のおける複製によって出版し、それを一般の人々が容易に入手できるようにすることである。これは、特に西洋において東洋美術を学ぶ人々によって求められていることである。このような展望のもと、美術

研究所は今日利用できる限りの印刷技術を用いて、東洋美術の名品の複製を出版し、専門家を大いに満足させている。そしてさらに、このシリーズを海外の研究者や愛好家の益に供するため、英語版刊行の話が研究所から東洋美術国際研究会にもたらされた。それが本書である。このシリーズは、いずれは東洋美術の名品全てを網羅しようと企図しているが、日本において制作された日本美術を先ずは優先的に取り上げ、朝鮮（韓国）や中国の名品は、今後含めていきたいと考えている。日本の美術は、日本文化の精華であるばかりでなく、中国その他の大陸の美術を忠実に学習することによっても豊かなものとなっており、言わば日本美術には、大陸では既に失われてしまった精神や技術の豊かな宝庫なのである。この重要な事実にしきんと留意して日本の美術を研究するならば、東洋美術全体を理解する要素を豊富に手にすることになるだろう。加えて、よく知られているように、多くの中国美術は古くより日本にもたらされ、そしてこの国において特別な関心のもとに伝世されてきた。ゆくゆくは研究所が、日本所在のこのような大陸美術の名品を選出し、本シリーズにおいて刊行するであろうと我々も大いに期待している。東洋美術を真に研究していくためには、日本美術と日本所在の大陸美術のコレクションに特に目を向ける必要があると言っても過言ではないのである。このように明確な意図のもと編集された本シリーズが、世界中の専門家や愛好家に評価されることを切に願っている。

会長 侯爵 細川護立

1940年10月 東京

註 日本の個人名の表記は、個人名やクリスチャンネームの後に名字がくる欧州のそれとは逆である。加えて、日本人の名前が複雑なのは、明治維新（1868）以前には、階級や職業を名前に用いる習慣があり、従ってしばしば多くの単語が名前に用いられることである。今日では、全ての名前は姓と名によってなる二つの単語に簡略化されている。

欧州の順序で長い名前を表記することは困難なため、本書ではもとの表記（姓-名の順）を取ることにした。ただし、近代以降の日本の名前の表記は、欧州式に姓と名を逆にしてある。

MASTERPIECES OF EASTERN ART 掲載作品一覧

Series 1

- I . INGWAKYO *The Imperial Art School, Tokyo*
- II . The Image of Sri-Mahadevi *Yakushiji Temple, Nara*
- III . The Resurrection of Sakya-Muni *Chohoji Temple, Kyoto*
- IV . Bird and Animal Scroll *Kozanji Temple, Kyoto*
- V . Portrait of Yoritomo *Jingoji Temple, Kyoto*
- VI . Scroll-Painting *Murasaki Shikibu Nikki Marquis Masauji Hachisuka, Tokyo*
- VII . & VIII . The Image of Fudo *Marquis Saburo Inoue, Tokyo*
- IX . The Nachi Waterfall *Mr. Kaichiro Nezu, Tokyo*
- X . Amano-Hashidate *Marquis Toyokage Yamanouchi, Tokyo*
- XI . Cherry-Blossoms *Chishakuyin Monastery, Kyoto*
- XII . Pine-Trees *Zenkoan Monastery, Kyoto*

- XIII. "Different Professions" *Kitayin, Monastery, Saitama Prefecture*
- XIV. The Gods of Thunder and Wind *Kenningji Temple, Kyoto*
- XV. The Red Plum by the River *Count Yoshitaka Tsugaru, Tokyo*
- XVI. Lake Hsi-Hu *Mampukuji Temple, Kyoto*
- XVII. A Woman under Cherry-Blossoms *Mr. Shigekichi Mihara, Tokyo*
- XVIII. Sketch *Mr. Sozaemon Nishimura, Kyoto*
- XIX. Portrait of Ichikawa Beian *Mrs. Sen Shimomura, Kanagawa Prefecture*
- XX. Black Cat *Marquis Moritatsu Hosokawa, Tokyo*

Series 2

- XXI. Portrait of Priest Gonso *Fomonyin Monastery, Wakayama Prefecture*
- XXII. Fudo with Two Boy Attendants *Shorenyin Monastery, Kyoto*
- XXIII. Shaka *Jingoji Temple, Kyoto*
- XXIV. Scroll-Painting Shigisan Engi *Chogosonshiji Temple, Nara Prefecture*
- XXV. & XXVI. Scroll-Painting Nezame Monogatari *Mrs. Sueko Hara, Yokohama*
- XXVII. Buddhist Sutra Written in Fan-Shape Ground *Shitennoji Temple, Osaka*
- XXVIII. Fudo *Daigoji Temple, Kyoto*
- XXIX. Portrait of Prince Shotoku Taishi *Ninnaji Temple, Kyoto*
- XXX. Portrait of Daito Kokushi *Daitokuji Temple, Kyoto*
- XXXI. Catfish Caught with Gourd *Taizoyin Monastery, Kyoto*
- XXXII. Willow Trees *Samboyin Monastery, Kyoto*
- XXXIII. & XXXIV. Wild-Geese and Reed *Marquis Moritatsu Hosokawa, Tokyo*
- XXXV. & XXXVI. Iris *Mr. Kaichiro Nezu, Tokyo*
- XXXVII. Landscape *Mr. Kin-ya Nagao, Tokyo*
- XXXVIII. Kwannon as Merciful Mother *The Imperial Art School, Tokyo*
- XXXIX. Ink-Stone Box "Hana-no-Shirakawa" *Mr. Kaichiro Nezu, Tokyo*
- XL Tea-Pot with Wistaria Design *Mr. Kin-ya Nagao, Tokyo*

Series 3

- XLI. & XLII. Wall-Paintings of Horyuji *Horyuji Temple, Nara Prefecture*
- XLIII. Nirvana *Kongobuji Temple, Wakayama Prefecture*
- XLIV. Portrait of Zemmui *Ichijoji Temple, Hyogo Prefecture*
- XLV. Scroll-Painting Gaki-Zoshi *Sogenji Temple, Okayama Prefecture*
- XLVI. Reading in the Bamboo Grove *Imperial Household Museum, Tokyo*
- XLVII. & XLVIII. Hawk on Pine-Branch *Imperial Household Museum, Tokyo*
- XLIX. Flowers *Tenkyuyin Monastery, Kyoto*
- L. Irises by the Bridge *Mr. Saburo Yamaguchi, Kyoto*
- LI. & LII. Oku no Hosomichi *Mr. Tatsujiro Hashimoto, Tokyo*
- LIII. Snow Landscape *Mr. Tetsunosuke Shibata, Shiga Prefecture*
- LIV. Gyoran Kwannon *Mr. Kin-ya Nagao, Tokyo*

- L.V. By the Lake *Institute of Art Research, Tokyo*
 L.W. Image of Princess Nakatsuhime *Yakushiji Temple, Nara Prefecture*
 L.W. & L.W. Tapestry of Preaching Sakyamuni *Kanjuji Temple, Kyoto*
 L.X. Fuyuki Kosode *Imperial Household Museum, Tokyo*
 L.X. Kakiemon's Jar with Design of Phoenix *Baron Koyata Iwasaki, Tokyo*

Series 4

- L.XI. Bosatsu *Syosoin Imperial Repository, Nara*
 L.XII. Image of Zyuniten (Suiten) *Saidaizi Temple, Nara*
 L.XIII. & L.XV. Image of Hugen *Imperial Household Museum, Tokyo*
 L.XV. Heike-Nokyo *Itukusimazinza Shrine, Hiroshima*
 L.XV. Scroll-Painting Ono-Yukimi-Miyuki-Ekotoba *Imperial Art School, Tokyo*
 L.XVI. Portrait of Priest Ikkyu-Zenzi *Imperial Household Museum, Tokyo*
 L.XVII. Priest Ling-Yun Viewing Peach-Blossoms *Imperial Household Museum, Tokyo*
 L.XX. Instructions for Dynasts *Zyorakuden Hall of Nagoya Castle, Aiti*
 L.XX. Woman at Entrance *Mr. Hara Kunizo, Tokyo*
 L.XXI. & L.XXII. Mt. Horai and Peach Blooming Paradise *Prince Kayanomiya, Kyoto*
 L.XXIII. Image of Monzyu in the Five-Storied Pagoda *Horyuzi Temple, Nara*
 L.XXIV. & L.XXV. Image of Zyuitimen Kannon *Syorinzi Temple, Nara*
 L.XXVI. & L.XXVII. Image of Kitizyoten *Zyorurizi Temple, Kyoto*
 L.XXVIII. Image of Itizikinrin *Tyusonzi Temple, Iwate*
 L.XXIX. & L.XXX. Tamamusi-no-zusi *Horyuzi Temple, Nara*

Series 5

- LXXXI. Portrait of Ryuti *Kyoogokokuzi Temple, Kyoto*
 LXXXII. LXXXIII. LXXXIV. Amida, Kannon & Seisi & A Boy Attendant *Hokkezi Nunnery, Nara*
 LXXXV. Image of Rakan *Raikozi Temple, saga*
 LXXXVI. Fragment of the Scroll of "Yamai Zosi" *Mr. Mahunaga Yasuzaemon, Tokyo*
 LXXXVII. Fragment of the Scroll of "Ippen Syo-e" *Baron Masuda Taro, Tokyo*
 LXXXVIII. Portrait of Syoiti Kokusi By Mintyo *Tohukuzi Temple, Kyoto*
 LXXXIX. Chou Mou-Shu Admiring the Lotus By Masanobu *Mr. Ogura Akira, Tokyo*
 XL. XLI. Summer & Winter Landscapes By Sessyu *Imperial Household Museum, Tokyo*
 XLII. XLIII. Monkeys By Tohaku *Ryusen-an Monastery, Kyoto*
 XLIV. XLV. Scroll of Poems with Ground Design of Flowers By Koetu and Sotatu *Baron Dan Ino, Tokyo*
 XLVI. Courtesan By Tyosyun *Mr. Sibusawa Gihi, Yokohama*
 XLVII. Sketches Made in the Sagami & Izu Provinces By Buntyo *Viscount Matudaira Sadaharu, Tokyo*
 XLVIII. Story of a Mirror By Tametika *Imperial Household Museum, Tokyo*
 XLIX. Mown Grass By Hyakusui *Marquis Maeda Tosinari, Tokyo*
 L. Tebako *Mr. Ogura Akira, Tokyo*

第一輯

1. 「過去現在因果經」東京美術学校
2. 「吉祥天像」奈良藥師寺
3. 「釈迦再生說法図」京都長法寺
4. 「鳥獸戯画」京都高山寺
5. 「隆信筆頼朝像」京都神護寺
6. 「紫式部日記絵」東京侯爵蜂須賀正氏
- 7・8. 「不動明王像」東京侯爵井上三郎
9. 「那智瀧図」東京根津嘉一郎
10. 「伝雪舟天橋立図」東京侯爵山内豊景
11. 「桜図」京都智積院
12. 「友松筆松樹図」京都禪居庵
13. 「吉信筆職人尽図」埼玉喜多院
14. 「宗達筆風神雷神図屏風」京都建仁寺
15. 「光琳筆紅梅図」東京伯爵津義孝
16. 「大雅筆西湖図」京都万福寺
17. 「豊信筆花下美人図」東京三原繁吉
18. 「応挙筆写生図」京都西村総左衛門
19. 「崋山筆市河米庵像」神奈川下村仙
20. 「春草筆黒き猫」東京侯爵細川護立

第二輯

21. 「勤操像」和歌山普門院
22. 「不動明王像」京都青蓮院
23. 「釈迦如来像」京都神護寺
24. 「信貴山縁起」奈良朝護孫子寺
- 25・26. 「寢覚物語絵」横浜原寿枝子
27. 「扇面下絵法華経」大阪四天王寺
28. 「信海筆不動明王蔵」京都醍醐寺
29. 「聖徳太子像」京都仁和寺
30. 「大燈国師像」京都在大徳寺
31. 「如拙筆瓢鮎図」京都退蔵院
32. 「柳図」京都三寶院
- 33・34. 「二天筆盧雁図」東京侯爵細川護立
- 35・36. 「光琳筆燕子花図」東京根津嘉一郎
37. 「竹田筆松樹図」東京長尾欽彌

38. 「芳崖筆悲母観音図」東京美術学校
39. 「蒔絵花白河硯箱」東京根津嘉一郎
40. 「仁清作色絵藤花文飾茶壺」東京長尾欽彌

第三輯

- 41・42. 「法隆寺壁画西大壁」奈良法隆寺
43. 「涅槃図」和歌山金剛峯寺
44. 「天台高僧像善無畏」兵庫一乗寺
45. 「餓鬼草子」岡山曹源寺
46. 「周文筆竹斎讀書図」東京帝室博物館
- 47・48. 「雪村筆松鷹図」東京帝室博物館
49. 「花卉図」京都天球院
50. 「乾山筆八橋図」京都山口三郎
- 51・52. 「蕪村筆奥の細道図」東京橋本辰二郎
53. 「玉堂筆東雲節雪図」滋賀柴田哲之助
54. 「雅邦筆魚籃観音図」東京長尾欽彌
55. 「黒田清輝筆湖畔図」美術研究所
56. 「仲津姫像」奈良藥師寺
- 57・58. 「釈迦如來說法図繡帳」京都勸修寺
59. 「伝光琳筆冬木小袖」東京帝室博物館
60. 「柿右衛門作鳳凰文徳利」東京男爵岩崎小弥太

第四輯

61. 「菩薩像」奈良正倉院御物
62. 「十二天像水天」奈良西大寺
- 63・64. 「普賢菩薩像」東京帝室博物館
65. 「平家納経序品見返」広島嚴島神社
66. 「小野雪見御幸絵詞」東京美術学校
67. 「一休禅師像」東京帝室博物館
68. 「伝元信筆雲雀観桃図」東京帝室博物館
69. 「探幽筆帝鑑図」名古屋城上洛殿
70. 「縄文簾図」東京原邦造
- 71・72. 「鉄斎筆蓬萊山図」「鉄斎筆桃花源図」
京都賀陽宮家御蔵
73. 「文殊菩薩像」奈良法隆寺
- 74・75. 「十一面観音像」奈良聖林寺

76・77.「吉祥天像」京都浄瑠璃寺

78.「一字金輪像」岩手中尊寺

79・80.「玉厨厨子」奈良法隆寺

第五輯

81.「真言七祖像龍智」京都教王護国寺

82・83・84.「阿弥陀三尊及童子図阿弥陀」

「阿弥陀三尊及童子図観音勢至」「阿弥陀三尊及童子図童子」奈良法華寺

85.「十六羅漢像」滋賀来迎寺

86.「病草紙残欠」東京松永安左衛門

87.「円伊筆一遍聖絵残欠」東京男爵益田太郎

88.「明兆筆聖一國師像」京都東福寺

89.「正信筆周茂叔図」東京小倉彰

90・91.「雪舟筆夏冬山水図」東京帝室博物館

92・93.「等伯筆猿猴図」京都龍泉庵

94・95.「光悦・宗達筆歌巻」東京男爵団伊能

96.「長春筆美人図」神奈川洪沢義一

97.「文晁筆公余探勝図」東京子爵松平定晴

98.「為恭筆鏡壳図」東京帝室博物館

99.「百穂筆刈草図」東京侯爵前田利為

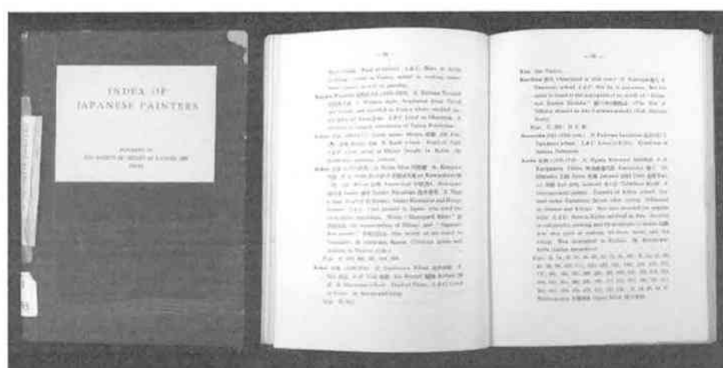
100.「片輪車螺鈿蒔絵手箱」東京小倉彰

3 Index of Japanese Painters

“Index of Japanese painters”（『日本画家索引』）は、1941（昭和16）年3月に豊岡益人を発行人として当研究会より発行された〔図5〕。本書は上古から近代までの日本人画家約600名について、生没年、姓名、字、号、出生地、小伝、流派、画風、代表作などを英文で表記し、アルファベット順に配列されている。画家の別号、通称などの相互参照指示も配備しており、全体の収録項目数は848名を数える。また各画家の作品の図版が『美術研究』『国華』『日本国宝全集』に掲載されている場合はその号数を記し、主要な画集が刊行されている場合はその書名を記している。巻末に絵画全集等の参考書籍一覧、日本の地名の新旧対比表、仏画、大和絵から近代日本画・洋画までの各流派の概説、各流派の活動期を示した簡略な年表を付す。

『事務日記』（東洋美術国際10）によると対象となる画家の選定及び編集については二段階に分けて進められている。第一次段階では江戸時代以前の画家354名、明治・大正時代の画家120名が選定・執筆され、その後111名の画家が対象として増補されている。各画家の解説は、正木篤三、渡邊一、白畑よし、梅津次郎、中川千咲らによって分担執筆されている。原稿は伊地知純子によって英文に翻訳され、秋山光和、ジョージア・ニューベリーらが校閲作業に従事し、1千部が作成されたと見られる。

本書の特徴は、日本で最初の英語による画家人名辞典ということもさることながら、各画家について複製出所を列挙している点にある。尾形光琳や円山応挙といった数多くの作品が掲載されているような著名画家では60～80件程度の図版掲載先が列挙されており、参照の利便性が高い。B6判156頁というコンパクトな体裁でありながら、充実した内容の参考書



5 Index of Japanese painters（日本画家索引）1941年

籍と言える。本書奥付によると定価5円となっている。

"Index of Japanese painters"

Preface

Since the Society of Friends of Eastern Art was organized in Tokyo in February, 1940, it has been engaged in various activities such as lecture meetings, special art-exhibitions, visits to private collections and the publication of the monthly Bulletin of Eastern Art, etc., and we believe that it has contributed something to the advancement of the study of Eastern art in general and to the promotion of international cooperation in artistic and intellectual work. What is still badly lacking at present seems to be the handy and elementary books such as concise biographical dictionaries of artists, guide books, dictionaries of subjects of paintings, and the like, which all lovers and scholars of Eastern art can use as convenient references. The Society of Friends of Eastern Art is planning to compile these much needed publications. It is our great joy that the "Index of Japanese Painters" is herewith published as the first fruit of our plan. The compilation of this Index was entrusted to the Institute of Art Research. The Society would like to express profound thanks to those members of the research staff who have been in charge of this work under the leadership of Professor Yashiro, Director of the Institute.

Marquis Moritatsu Hosokawa
President

日本画家索引

序文

1940年2月に東洋美術国際研究会が発足して以来、研究会、美術品の特集展示、個人コレクションの鑑賞会、毎月の"Bulletin of Eastern Art"の刊行など様々な活動を行ってきた。当会の事業は東洋美術研究の発展と、芸術的・学究的活動における国際協力の促進に広く貢献してきたと確信している。さて、かねてより東洋美術愛好家や研究者らが便利に参照できるような、簡潔な内容の画家の伝記辞典、便覧、画題辞典など、手頃で基本的な書籍の刊行が待ち望まれていた。東洋美術国際研究会ではこのように、大いに必要とされている刊行物の編纂を企画している。この企画の最初の成果物としてここに『日本画家索引』が刊行のはこびを迎えたことはたいへん喜ばしいことである。本書の編纂は美術研究所に委ねた。美術研究所長である矢代教授の指導の下、本書の編集に従事した研究所職員に対して当会から深謝の意を表する。

侯爵 細川護立
会長

Introduction

At the time when the appreciation and the study of Eastern art has become world-wide, it is the duty of Japanese scholars to publish reference books to aid students of all countries. To our regret we often find that the foreigners who study Eastern art or who come to Japan to

study it have rather a difficult time because of the lack of any index or dictionaries of Japanese painters. So the Institute of Art Research expresses deep gratitude regarding this plan of the Society of Friends of Eastern Art to publish this book, Index of Japanese Painters, and the staff members of the Institute are glad to collaborate in every way possible.

The Index contains about six hundred names, with short biographies, of painters who are familiar in the reproductions and the articles which have been published for the past several years in important publications of the country. It is compiled on a far smaller and incomplete scale than was our ideal for this sort of book which we hope to realize at some future time. But as it contains most of the famous painters whom we meet often in the study of Japanese art, we can recommend it with some conviction as a convenient book for all lovers and students of Japanese art.

Prof. Yukio Yashiro

Director of the Institute of Art Research

緒言

東洋美術の鑑賞と研究が世界規模となった昨今、諸外国の研究者を支援するための参考書を出版することは日本の学識者の責務である。これまで我々は、海外の研究者、あるいは来日して東洋美術を志す研究者が、日本の画家についての手引きや辞典が存在しないために、ひじょうな苦難を強いられている状況をしばしば目にして、遺憾なものと認識していた。そこで美術研究所は、東洋美術国際研究会による本書『日本画家索引』の刊行企画について感謝の意を表し、研究所員は本書の刊行に対して積極的にあらゆる手段による協力を行った。

本書には、過去数年の間に国内で出版された重要な刊行物に掲載されている図版や論説においてよく取り上げられる画家 600 人の人名を小伝とともに収録している。本書は甚だ簡便にまとめており、我々が将来実現を希望しているこの類の参考書の理想から見ると不十分で小規模な内容となっている。しかしながら日本美術を研究する際に頻出する画家のほとんどは本書に収録されており、日本美術の愛好家と研究者に対して便利な参考書となることについて、いささかの確信とともに上梓する次第である。

矢代幸雄

美術研究所 所長

4 Art Guide of Nippon 1 : Nara, Mie and Wakayama

"Art Guide of Nippon VOLUME 1 : NARA, MIE AND WAKAYAMA PREFECTURES" (『英文日本美術案内記』第 1 巻) [図 6] は、同研究会によって編集された旅行ガイドブックの第 1 巻で、1943 (昭和 18) 年 11 月 15 日に刊行されたものである。⁽¹⁾ 同研究会会長であった細川護立の記した序文にあるとおり、本書は、外国人旅行者の需要に応じて日本各地域に所在する美術作品の解説を目的とするものであった。以下に述べるように、当初は全 5 巻の刊行が予定されていた。しかし、⁽²⁾ 実際には、第 1 巻しか刊行されなかったようである。

本書は、奈良・和歌山・三重の順に、各県をおおよそ鉄道の沿線ごとにくいつかの地域にわけ、



6 Art Guide of Nippon vol. 1 (日本美術案内記) 1943 年

それぞれの地域の主要寺院に関する歴史・堂塔・所蔵作品を詳細に解説するという構成になっている。巻末には、仏像の尊格リスト、明治以前の行政区分と都道府県名対応表、建築・絵画・工芸・彫刻の用語集、インデックスなど、解説を読むために必要な手引きを掲載する。⁽³⁾

本書の編集作業などをはじめとして、刊行に至るまでの経緯については、『事務日記』に詳しい。以下、この『事務日記』などを手がかりとして、本書刊行の経緯について判明する限りを述べていきたいと思う。

『事務日記』によると、「3月20日から25日にかけて古美術案内原案作成」と記されており、1941（昭和16）年の3月頃に本書刊行に向けての作業が始動したとみられる。続けて、「第一冊、奈良・和歌山・三重、第二冊、京都・大阪・滋賀、第三冊、岐阜県以東、第四冊、兵庫県以西、第五冊、索引並びに案内記等」とあり、当初、本事業では全5巻が刊行される予定であったこと、またその内容がおおよそ決定していたことがわかる。第1巻に奈良・和歌山・三重が選ばれたのは、序文で述べられるように、奈良は古代美術の中心であると考えられていたためであったと推測される。

第1巻の寺社調査・原稿執筆を統轄していたのは、大串純夫であったとみてよい。⁽⁴⁾ 1941（昭和16）年5月の調査役割分担から秋山光和の名前がみとめられ、秋山もまた、本事業の主要メンバーの一人であったことがわかる。⁽⁵⁾ さらに、同年の10月下旬に行われた奈良県南部への出張分担当表には、O、K、A・Nのアルファベットが割り振られており、その前後の記事を参照すれば、それぞれ大串・倉田・秋山・中根の頭文字と考えられることから、少なくとも翌年10月時点で、大串・秋山・倉田文作、中根勝が本事業に加わっていたとみてよい。⁽⁶⁾ また、その年の12月4日の「現在進行情表」とその次ページに掲載される「未執筆分一覧表」には、上記のほか、梅津次郎の名がある。この他、英訳も日本語原稿執筆と並行して行われていたようで、この「未執筆分一覧表」と同ページに掲載される「翻訳進行情表」には、金子・倉田・今井（綾子）の名が記されており、金子重隆が中心となつて日本語原稿の英訳を進めていた。⁽⁷⁾ なお、1942（昭和17）以後、金子は日本語原稿の執筆にもかかわっている。⁽⁸⁾

1942（昭和17）年1月12日の日付のある「完成・未完成一覧表」は、県ごとに寺社名と原稿担当者名が一覧にまとめられたものであるが、未完寺院の当初担当者の名前が斜線で消され、傍らに「立田」あるいは「金子」と記されており、原稿の遅滞を取り戻すためと考えられるが、この時点で立田三郎が事業に加わったことがわかる。

以上をまとめると、本書刊行に際しては、大串純夫が統轄責任者で、そのもとで秋山光和・倉田文作・中根勝・金子重隆・立田三郎・梅津次郎が、調査や原稿の執筆や英訳を進めていたと言える。

実際の作業手順としては、奈良・和歌山・三重各県の主要寺社を選定し、現地調査を行ったうえで、原稿執筆を進めるというものであった。実際、原稿の進捗等にあわせて、奈良を中心におよそ4回にわたって関西への出張が行われたことが知られる。⁽⁹⁾ 1941（昭和16）年末段階では、翌年1月

末に原稿の完成、2月末に英訳原稿の完成、3～4月に印刷、というスケジュールであったが、戦時下という事情のため翌年1月6日には、所長・矢代幸雄から、原稿翻訳は一時中止、日本語原稿のみ完成を急ぐよう指示があり、また3月19日には、大串・立田が「東洋美術絵端書」編集に従事することになったために原稿執筆が滞るなど、編集作業が大幅に遅れた。最終的には、5月19日に原稿が完了し、あとは清書するのみとなっていた。ところが、この原稿完成から実際の刊行に至るまでには、約1年半の月日を要している。この間の経緯についてもまた、『事務日記』により詳細が判明する。

1942（昭和17）年5月9日の原稿完成直後には、「大東亜戦争」勃発という理由により、本書を英文で出版するという方針は一時変更するという話が出たようだが、すぐさま当初の予定どおり英文で出版することが決定した。同年6月3日より立田・金子・倉田・大串が原稿の読み合わせを開始、同月8日（あるいは、8月か）には、完成原稿に訂正すべき所が往々にしてあるとの見解から、十分な訂正を行うこととしたという。そして読み合わせから半年後の12月末には、三重・和歌山 の原稿を印刷所へ渡し、翌年の1943（昭和18）年1月には奈良の原稿が完成したものとみられる。人名については、同年1月15日に東京大学史料編纂所の竹内理三に確認を依頼し、完成度を高める努力を継続したことが知られる。

さらに、戦時下という特殊な状況のため、日本出版文化協会（日本出版会の前身、1943年3月に解散）への紙の配給等の申請や内容審査に時間を要したようである。この間のことは、『事務日記』中にある「第二冊の編集事務日記」に詳述されている。それによると、実際の刊行にあたっては、日本出版文化協会に申請して、出版のための用紙の確保を依頼し許可を得ることと、内容の審査を経て許可を得ること、の2点を満たす必要があり、こうした実務には、大串のほか、当研究会主事の石沢正男⁽¹⁰⁾、同編集主任の山田千三郎が中心となって当たったことがわかる。とりわけ紙の確保は困難を極めたようで、日本出版文化協会への最初の申請から3ヶ月を経た4月上旬になっても許可は下りず、石沢が別途「情報局」に援助を依頼したようである。

こうした刊行のための諸手続きに並行して着々と校正作業がすすめられていたが、5月上旬に日本出版会より、訳文の不統一や誤訳について指摘されたため、大串は校正・初校などを見直して原稿を訂正した。手直しした原稿を日本出版会に再提出すると同時に、金子・都沢安・森（節子か）で、さらに校正刷の訳文を検討し、さらに女子大教授岩本氏にも意見を求め、最終調整を行った。

5月26日には「出版及書籍用紙特別割当」の許可があり、翌月の7日には「書籍用紙特別割当通知書」が届いて、ようやく用紙が確保されて印刷可能となった。「本書の校正刷を全てまとめて発送」とある7月6日の記事以降は、本書に関する記事はなく、この時点で校了したと考えられる。それから約4ヶ月後の11月15日に、本書は刊行されたのである。

以上のように、本書は、編集開始から刊行までに相当の時間を要したことが知られ、担当者は完成度の高いものを目指すために、最後まで推敲を続けた。その作業内容にふさわしく、本書は、旅行ガイドブックというよりも、美術品解説の専門書として網羅性と専門性に富みながら、同時に読者に美術作品の理解を促すための心配りがなされている。本書は、序文にあるように、日本美術をはじめて学ぶ人々にとって、まさに最良の「ガイド」と言えるであろう。

註

- (1) 縦15×11cm、全186頁、赤褐色のクロス装。表紙に、型押しで、ART GUIDE OF NIPPON VOLUME I NARA, MIE AND WAKAYAMA PREFECTURESのタイトルと、表紙下端に、発行所である東京美術国際研究会の英語名、THE SOCIETY OF FRIENDS OF EASTERN ART TOKYOとある。奥書により、発行部数は一千部、定価13円50銭、売値14円85銭、著作権発行者が美術研究所内東洋美術国際研究会石沢正男、印刷者が笠井朝義、印刷所が笠井印刷所、発行所が東洋美術国際研究会、配給元が日本出版配給株式会社であることがわかる。
- (2) 第2冊については、『事務日記』『案内記第二冊編集事務日記』により、昭和17年より編集が開始されていたことや、その内容が関東・奥羽・中部地方に決定したとあり、事業開始当初に予定されていた、第2冊を京都・大阪・滋賀とする案から変更されたことがわかる(『事務日記』昭和17年6月19日の記事参。『事務日記』については、註3を参照のこと)。
1946(昭和21)年3月末頃に記されたとみられる『昭和二十年度事業経過報告』によると、この時すでに第2冊の日本語原稿が完成していること、翻訳者の人数が減ってしまったために英訳の進捗が遅れていること、非常勤の英訳者を得れば昭和21年度上半期には完成する目処であったという。さらに、第3冊については、その内容が「京都・滋賀・大阪地方」と決定しているものの、調査担当者全員の応召、また予算の関係から新規調査員を嘱託することが不可能であることによる人手不足のため、ほとんど進捗していなかったという。
- (3) 約縦20×16cm、厚さ1cmのノート(表紙にBUNPODOとある)に、大串純夫が書き記した事務日記。東洋美術国際研究会がすすめていた、画家人名辞典、日本古美術案内記、絵葉書の刊行に関する編集作業が記録されている。東洋美術国際研究会の事務日記はこの他に3冊あり、この大串による『事務日記』は、刊行物の編集実務に関わる内容に特化したもの。
- (4) 『日記』(東洋美術国際7)、1941(昭和16)年1月27日条に「大串氏国際研究会嘱託を決定/二月一日より勤務」とあり、この頃当研究会の嘱託となることが決定していることが知られること、またその直後から本書の具体的な編集作業が始められていること、事務作業内容を記した『事務日記』の執筆者が大串自身であったことなどからみて、本事業の統括に大串が当たっていたとして、大過ないだろう。大串は、この事業と並行して『日本画家人名索引』(INDEXと通称されていたとみられる)の編集も担当していた。
- (5) 5月の分担打ち合わせには大串のほかには秋山の名前しか見えず、本書の編集作業開始当初から、調査・執筆の主要メンバーであったとみられる。ところが、1942(昭和17)年1月10日に、秋山の入営が決まり、秋山分担分の原稿で未完成のものについては、大串が引き継ぐことになった。
- (6) 『日記』(東洋美術国際7)、1941(昭和16)年6月18日条に「倉田文作氏、翻訳者として勤務する事に決定」とあり、少なくとも1941(昭和16)年6月より国際研究会に関わっていたことがわかる。また、『昭和二十年度事業経過報告』により、倉田は1945(昭和20)年11月まで英訳を担当していたが、同年12月より進駐軍司令部との美術に関する連絡のため、文部省勤務となったこと、その後の英訳は、金子一人で担当したことが知られる。
- (7) 梅津は、伊勢霊宝館(伊勢徴古館)と金剛証寺の2件の原稿執筆をまかされている。
- (8) 『日記』(東洋美術国際9)、1941(昭和16)年11月20日条に「金子氏翻訳部に入る事内定(十八日)」、ついで同年11月24日条に「金子・佐藤両氏本日より登庁」とあり、金子はこの日より同研究会に勤務していたことが知られ、本書の翻訳に関わったのはこの頃からであったことがわかる。
- (9) 『事務日記』によると、1941(昭和16)年5月9日に大串・秋山が奈良を中心に役割分担を行い、それに伴って、第1回関西出張を行っている。同年5月13～27日、大串・守中、関西出張(『日記』(東洋美術国際9)による。『事務日記』(東洋美術国際10)には5月17日～27日、関西(奈

良・和歌山）出張とある）。『日記』（東洋美術国際9）にある、6月23日～7月1日にかけての秋山による関西出張は、本事業に関わったものと推測される。

第2回出張は、大串・秋山・中根が、8月6日から13日にかけて、三重県の古社寺調査を行った。

第3回出張は、大串・秋山・倉田が、10月22日から11月1日にかけて、奈良県南部の古社寺調査を行った。

第4回出張は、吉川・大串・中根・立田・金子5名が、1942（昭和17）年4月13日から21日にかけて、奈良、和歌山を中心に確認調査等を行ったもの。

(10) 1941（昭和16）年10月から美術研究所嘱託、翌年から1947（昭和22）年2月まで東洋美術国際研究会の主事を務めた。

Art Guide of Nippon VOLUME 1 NARA, MIE AND WAKAYAMA PREFECTURES INTRODUCTION

It will be readily admitted that Japanese art occupies an important position in the arts of the world. The art of Japan is most inseparably related to the land of Japan and the life of its race. The land is unusually beautiful in nature, and it has a state organization unique in the whole world, centered round His Majesty the Tenno, who is the direct descendant of the most sacred founder of the country. Japanese art loses half its brilliancy when it is considered apart from its native land. Moreover Japan is most fortunate in the preservation of its art-treasures ; most of the best examples are still found intact in the country, almost in their original places. Japanese art, therefore, is best studied in the country. It is not too much to say that, in order to have full understanding of Japanese art, it is indispensable to come over to Japan and to study the subject in close relationship with the country and the people.

It is the unanimous complaint of foreign art-lovers who visit Japan, that there are few art-institutions with convenient accommodation for study and appreciation, and that there is a remarkable lack of easy literature which helps them to understand Japanese art. It is certainly to be deplored that there are not many art-museums in Japan. But one has to bear in mind that ancient Japanese art cannot be appreciated in its true meaning unless it is viewed in its own environment or historical background, nor does its intrinsic value shine out in an art-gallery, where the art-objects are exhibited mainly for the purpose of education and study. We should rather congratulate ourselves on having the ancient art-objects still installed as they were in the places selected by our ancestors. In religious art, which constitutes the main part of our art in old times, images or objects of worship are enshrined even nowadays in Shinto shrines and Buddhist temples, which are found all over the country. Unless a good guide-book of Japanese art were published, foreign visitors would not know how to find their way of artistic pilgrimage up and down the country.

There is no lack of guide-books of Japanese art published in the country, but as they are written in Japanese, foreign readers have little chance to use them. Now that the Greater East Asian Co-Prosperity Sphere has been established under the guidance of Japan, and Japanese art and culture is playing a spiritual role far wider in influence than before, we believe it a task

laid on our own shoulders to publish a guide-book of Japanese art for the convenience of foreign visitors to the country, who are becoming more and more numerous with the development of cultural relations in Greater East Asia. It is with this in view that this guide-book of Japanese art is sent out to the public in English, a language more readily available to the greatest majority of visitors than any other language.

In the spring of the 16th year of Syowa 昭和 (1941) we started the compilation of this guide-book. The work proved far more difficult than we had anticipated, but we have brought the first volume to a sort of completion, after much delay. A work of this sort can never be said to be complete, and the present volume, in spite of the efforts of the editorial staff, is far from being satisfactory in the way of investigation, of compilation and of translation into English. We have decided to publish the present volume with all its shortcomings, in answer to the urgent demand of the public ; we hope to give it careful revision at the earliest opportunity.

This guide-book will be five volumes in all : the first four volumes will be the topographical and artistic itinerary of the country divided into four sections, and the fifth volume will give general remarks, technical and historical, on Japanese art, which would be necessary for travelers and students. The present volume deals with the prefecture of Nara, a great center of ancient art, including the neighbouring prefectures of Wakayama and Mie, which are all very rich in historical and artistic monuments.

Marquis Hosokawa Moritatu, President.

日本の美術ガイド 卷一 奈良、三重、和歌山県

序文

日本美術が世界の美術の中で重要な位置を占めていることは、ただちに認められるであろう。日本美術は、日本という土地と日本人の生活とに、非常に密接な関係を持つものである。この国は自然が非常に美しく、そして、全世界的にも比類のない、神聖なる建国の祖の直系の子孫である天皇陛下を中心とした国家機構を持っている。日本美術は、それが生み出された土地をはなれた時その輝きを半分失ってしまう。しかし、日本は、幸いなことに美術作品がよく保存されており、その最良の事例は、この国の中で、それも作品が生み出された本来の場所に、完全な状態で見出される。それゆえ、日本美術はこの国で学ぶのが最もふさわしい。日本美術を十分に理解するためには、来日して土地と国民と密接な関係を結びながら、作品を学ぶことが必要不可欠なのである。

日本を訪れた海外の美術愛好家たちがおしなべて不満を抱いているのは、便利な宿泊施設の付随した勉強のための機関がほとんど無いこと、日本美術を理解する手助けとなる書物がほとんど無いこと、である。日本に美術館がそう多くはないことも、確かに残念なことである。しかし、心に留めておくべきことは、古代日本美術は、そのものが持つ固有の環境と歴史的背景のなかで見られなければ真の意味を正しく評価できないし、また、主に教育や教養のために美術作品が展示される陳列館においては、その固有の価値は輝きを失ってしまう点である。我々はむしろ、古代の美術作品が我々の祖先によって選ばれた地に、いまなおそれらが安置されていることを喜ばねばならない。日本古代美術の多くを占める宗教芸術においては、像や作品は、今もなおこの国のそこそこに見ら

れる神社仏閣に祀られているのである。良質の日本美術ガイドブックが刊行されない限り、外国人旅行者は日本をめぐる美術巡礼の方法を見出すすべはない。

日本において、日本美術のガイドブックが全く刊行されなかったわけではないのだが、日本語での記述であるために、海外の読者はそれらを使う機会はほとんど無い。大東亜共栄圏が日本の領導のもとに打ち立てられ、日本美術と文化は、以前よりもさらに広範囲にわたって影響を及ぼすような精神的な役割を担っているのである。外国人旅行者に利便を図るために日本美術のガイドブックを刊行することは当会の責務であると信ずる。来日する外国人旅行者の数はますます増えつつあり、彼らは大東亜共栄圏において文化的関係を発展させているのである。こうした観点から、この日本美術のガイドブックは、大半の旅行者にとってなにより便利な言語である、英語を用いる人々のために、世に送り出されたのである。

1941（昭和16）年の春、当会はこのガイドブックの編集を始めた。この事業は、当初の予想をはるかに超えて困難を極めたが、大幅に遅れて第1巻の完成にこぎつけた。この種の事業は、決して完成されることはない。事実、第1巻は、編集スタッフの尽力にもかかわらず、調査、編集、翻訳の点において、多くの不満を残すものであった。我々は、人々の差し迫った需要にこたえるために、あらゆる欠陥をともなったままで第一巻を刊行することを決めたが、一刻も早く改訂版を出版する機会が得られることを望んでいる。

このガイドブックは、全5巻の刊行を予定している。最初の4巻は、日本を四分割し、それぞれの地理と美術品に関する旅行ガイドであり、第五巻は、旅行者と学生にとって必要であろう、日本美術に関する技法的、かつ歴史的な概論となろう。第1巻は、古代美術の聖地である奈良県と、その隣県で、豊かな歴史的かつ美術的のモニュメントを持つ和歌山、三重県を含むものである。

侯爵 細川護立、会長

CONTENTS

INTRODUCTION

NOTES

ART GUIDE OF NIPPON

NARA-KEN

NARA-SI AND VICINITY (I)

Nara Teisitu Hakubutukan (Imperial Household Museum in Nara)	奈良帝室博物館	Hukuti-in	福智院
Todaizi	東大寺	Zyurin-in	十輪院
Syoso-in	正倉院	Gokuraku-in	極楽院
Tamukeyama-zinzya	手向山神社	Gango-zi	元興寺
Kohuku-zi	興福寺	Renzyo-zi	璉城寺
Kasuga-zinzya	春日神社	An-yo-zi	安養寺
Sin-Yakusi-zi	薬師寺	Saiko-in	西光院
Byakugo-zi	白毫寺	Denko-zi	伝香寺
Zuto	頭塔	Saiho-zi	西方寺
		Ensyō-zi	円証寺

Syomyo-zi	称名寺
Himuro-zinzya	氷室神社
Goko-in	五劫院
Hannya-zi	般若寺
Saihuku-zi	西福寺
Konbu-in	興福院
Hutai-zi	不退寺
Zuikai-zi	瑞景寺
Kairyuo-zi	海龍王寺
Hokke-zi	法華寺
Unatari-ni-imasu-takamitama-zinzya	宇奈多理坐高御魂神社

NARA-SI AND VICINITY (II)

Akisino-dera	秋篠寺
Saidaizi	西大寺
Hatiman-zinzya	八幡神社
Kiko-zi	喜光寺
Tosyodai-zi	唐招提寺
Saiho-in	西方院
Yakusi-zi	藥師寺
Hatiman-zinzya	八幡神社
Daian-zi	大安寺
Kasuga-yama Sekibutu-gun	春日山石仏群
Enzyo-zi	円成寺
Nanmyo-zi	南明寺
Nibu-zinzya	丹生神社
Tenzin-sya	天神社
Kono-dera	神野寺
Kinryu-zi	金龍寺
Tugemikumari-zinzya	都祁水分神社

NEAR TOBINOMURA AND IKOMA

Along Kansai-kyuko	
Somemikata-ni-imasu-zinzya	添御懸坐神社
Ryosen-zi	靈山寺
Zyurokusyo-zinzya	十六所神社
Tyokyu-zi	長弓寺

Hozan-zi	宝山寺
Tyohuku-zi	長福寺
NARA-OZI	
Along Kansai-sen	
Zyokei-zi	淨景寺
Tosen-zi	洞泉寺
Sentai-zi	千休寺
Yada-ni-imasu-kusitamahiko-zinzya	矢田坐久志玉比古神社

Kasuga-zinzya	春日神社
Kongosen-zi	金剛山寺
Tomyo-zi	東明寺
Koizumi-zinzya	小泉神社
Matu-no-o-dera	松尾寺
Syorin-zi	勝林寺
Horyu-zi	法隆寺
Sai-in	西院
To-in	東院
Daihozoden	大宝藏殿
Tyugu-zi	中宮寺
Horin-zi	法輪寺
Hokki-zi	法起寺
Daihuku-zi	大福寺
Gokuraku-zi	極楽寺
Komyo-zi	光明寺
Gakuan-zi	額安寺
Hukki-zi	富貴寺
Yunen-zi	融念寺
Yosida-dera	吉田寺
Senko-zi	仙光寺
Daruma-dera	達磨寺
Kannon-zi	観音寺

OZI-IKOMA

Along Sigi-Ikoma-dentetu	
Hatiman-zinzya	八幡神社
Tyogosonsi-zi	朝護孫子寺
Humon-in	普門寺

Hodo-zi	宝幢寺	Noman-in	能満院
Enpuku-zi	円福寺	Soyu-zi	宗祐寺
TAIMA AND VICINITY		Udamikumari-zinzya	宇太水分神社
Along Osaka-dentetu		Gosin-zi	悟真寺
Tion-zi	置恩寺	Buturyu-zi	仏隆寺
Hudo-in	不動院	Daizo-zi	大蔵寺
Saiko-in	西光院	Ono-zi	大野寺
Taima-dera	当麻寺	Muro-zi	室生寺
Koyu-zi	高雄寺	Hokan-in	法花院
Zyoban-zi	常磐寺	UNEBI AND ASUKA	
Aniti-zi	阿日寺	Kokubun-zi	国分寺
NARA-SAKURAI		Honkomyo-zi	本光明寺
Along Sakurai-sen		Zuiké-in	瑞花院
Obitoke-dera	帯解寺	Kudara-dera	百済寺
Konin-zi	弘仁寺	Syoren-zi	正蓮寺
Syoryaku-zi	正暦寺	Kasihara-zingu	橿原神宮
Wanisimo-zinaya	和爾下神社	Guhuku-zi	弘福寺
Zenpuku-zi	善福寺	Ango-in	安居院
Isonokami-zingu	石上神宮	Oka-dera	岡寺
Tenno-zinzya	天皇神社	Tatibana-dera	橘寺
Nisi-itodo-ku	西井戸堂区	Omiashi-zinzya	於美阿志神社
Tyogaku-zi	長岳寺	Kozima-dera	子島寺
Senman-in	千満院	Minamihokke-zi	南法華寺
Omiwa-zinzya	大神神社	YOSINO AND VICINITY	
Genpin-an	玄寶庵	Kinbusen-zi	金峰山寺
Raio-zi	来迎寺	Yosimizu-zinzya	吉水神社
Monzyu-in	文殊院	Dainiti-zi	大日寺
Syorin-zi	聖林寺	Sakuramoto-bo	桜本坊
Danzan-zinzya	談山神社	Tikurin-in	竹林院
Ossaka-ku	忍阪区	Nyoirin-zi	如意輪寺
HASE-MURO		Yosino-mikumari-zinzya	吉野水分神社
Along Knsai-kyuko		Kinbu-zinzya	金峰神社
Hase-dera	長谷寺	Hokaku-zi	鳳閣寺
Myoen-zi	妙円寺	Kozen-zi	興禪寺
Humon-in	普門院	Kawakami-mura	川上村
		Hukugen-zi	福源寺

GOZYO AND VICINITY

Along Wakayama-sen

Goryo-zinzya	御霊神社
Daizen-zi	大善寺
Sokoku-zi	草谷寺
Takakamo-zinzya	高鴨神社
Eizan-zi	栄山寺
Kasuga-zinzya	春日神社
Zyokaku-zi	常覚寺
Kohuku-zi	高福寺

WAKAYAMA-KEN

KOYASAN AND VICINITY

Suda-hatiman-zinzya	隅田八幡神社
Kongobu-zi	金剛峯寺
Seigan-zi	青巖寺
Reihokan	靈宝館
Hozyu-in	宝寿院
Renge-in	蓮花院
Syoti-in	正智院
Zensyu-in	善集院
Myoo-in	明王院
Zyoren-in	成蓮院
Ryuko-in	龍光院
Sinno-in	親王院
Gobo-zyakuzyo-in	五坊寂靜院
Nyoirin-zi	如意輪寺
Seinan-in	西南院
Renzyo-in	蓮上院
Oti-in	桜池院
Hoki-in	宝亀院
Syakamon-in	釈迦文院
An-yo-in	安養院
Konzo-in	金藏院
Tamon-in	多聞院
Minami-no-in	南院
Kodai-in	光台院

Zenko-in	全光院
Ryusen-in	龍泉院
Taiun-in	泰雲院
Godai-in	五大院
Humon-in	普門院
Hugen-in	普賢院
Takamuro-in	高室院
Kongo-sanmai-in	金剛三昧院
Hudo-in	不動院
Kitamuro-in	北室院
Renge-sanmai-in	蓮花三昧院
Henzyoko-in	遍照光院
Zizo-in	地藏院
Syozzyosin-in	清淨心院
Kongobu-zi Okuno-in	金剛峯寺奥院
Henmyo-in	遍明院
Rengezyo-in	蓮花淨院
Zyohuku-in	成福院
Zyoki-in	常喜院
Nibutuhime-zinzya	丹生都比売神社

ALONG WAKAYAMA-SEN

Hatiman-zinzya	八幡神社
Dainiti-do	大日堂
Nibu-zinzya	丹生神社
Kogawa-dera	粉河寺
Daidenpo-in	大伝法院
Wakamiya-hatiman-zinzya	若宮八幡神社

ALONG KISE-SEISEN

Sadehiko-zinzya	刺田比古神社
Syosyo-in	松生院
Gonen-in	護念寺
Wakayama-zyo	和歌山城
Tenman-zinzya	天満神社
Sozi-zi	総持寺
Kada-zinzya	加太神社
Kasuga-zinzya	春日神社

Tosyo-gu	東照宮	Taisi-zi	太子寺
Gokoku-in	護国院	Zion-zi	慈恩寺
Hatiman-zinzya	八幡神社	Zizo-in	地藏院
Ganzyo-zi	願成寺	Zingu-zi	神宮寺
Syaka-do	釈迦堂	Inahu-zinzya	伊奈富神社
Zizobu-zi	地藏峯院	Myohuku-zi	妙福寺
Tyoho-zi	長保寺	Senzyu-zi	専修寺
Zyomyo-zi	淨妙寺	Syokyu-zi	勝久寺
Susa-zinzya	須佐神社	Renko-in	蓮光院
Kori-zi	広利寺	Sitenno-zi	四天王寺
Zyokyo-zi	淨教寺	Kannon-zi	観音寺
Syoraku-zi	勝楽寺	Daiho-in	大宝院
Semui-zi	施無畏寺	Zizo-in	地藏院
Yakuo-zi	薬王寺	Sairai-ji	西来寺
Kanki-zi	歓喜寺	Kansyo-in	寒松院
Hoon-zi	法音寺	Daityo-zi	大長寺
Kitizyo-zi	吉祥寺	Zenpuku-zi	善福寺
Hatiman-zinzya	八幡神社	Kozen-zi	光善寺
Myoo-in	明王院	Zyogan-zi	成願寺
Kokoku-zi	興国寺	Zyohuku-zi	常福寺
Dozyo-zi	道成寺	Yakusi-zi	薬師寺
Ozi-zinzya	王子神社	Eizen-zi	永善寺
Sodo-zi	草堂寺	Seiko-zi	清光寺
Zensyo-zi	善照寺	Nanryu-zinzya	南龍神社
Kumano-nati-zinzya	熊野那智神社	Tyoden-zi	朝田寺
Seiganto-zi	青岸渡寺	Dainiti-do	大日堂
Hiryo-zinzya	飛瀧神社	Sinpuku-zi	真福寺
Kumano-hayatama-zinzya	熊野速玉神社	Tyosei-zi	長盛寺
Asuka-zinzya	阿須河神社	Hugen-zi	普賢寺
		Tikahase-dera	近長谷寺
		Saido-zi	西導寺
		Syoho-an	正法庵
		Tamiya-zi	田宮寺
		Zingu Tyokokan	神宮徴古館
		Seigi-zi	世義寺
		Komyo-zi	光明寺
		Daiko-zi	大江寺
		Kongosyo-zi	金剛証寺
MIE-KEN			
ISE PROVINCE			
Along Sangu-sen			
Tado-zinzya	多度神社		
Daihukuden-zi	大福田寺		
Kannon-zi	観音寺		
Daisyoin	大聖院		
Rinko-zi	林光院		

Kozo-zi	庫藏寺	Tyoryu-zi	長隆寺
		Kannon-zi	觀音寺
IGA PROVINCE		Itiba-dera	市場寺
Along Kansai-sen		Rentoku-zi	蓮徳寺
Manzyu-zi	満寿寺	Zyohuku-zi	常福寺
Nenbutu-zi	念仏寺	Omura-zinzya	大村神社
Buddo-zi	仏土寺	Hogon-zi	宝厳寺
Takakura-zinzya	高倉神社	Miroku-zi	弥勒寺
Kanbodai-zi	観菩提寺	Mudo-zi	無動寺
Sairen-zi	西蓮寺	Hukuzyozyu-zi	福成就寺
Saiko-zi	西光寺	Enzyu-in	延寿院
Sin-Daibutu-zi	新大仏寺	Ida-zinzya	猪田神社
Syoin-zi	勝因寺	Kunitu-zinzya	国津神社

List of Buddhist Deities

Reference Table of Provinces and Prefectures

Glossary

Plates for Glossary

Index

Maps and Plans

Pl. I Plan of Todaizi

Pl. II Nara-si

Pl. III Heizyo-kyo

Pl. IV Plan of Horyu-zi

Pl. V Nara-ken

Pl. VI Wakayama-ken

Pl. VII Mie-ken

Fig. I Plan of Nara Teisitu Hakubutukan

Fig. II Diagram of Temple-plans from the Asuka to the Nara periods

Fig. III Arrangement of Images in the Hokkedo, Todaizi

Fig. IV Plan of Kohuku-zi

Fig. V Arrangement of Images in the Tyukondo, Kohuku-zi

Fig. VI Plan of Kasuga-zinzya

Fig. VII Plan of Tosyodai-zi

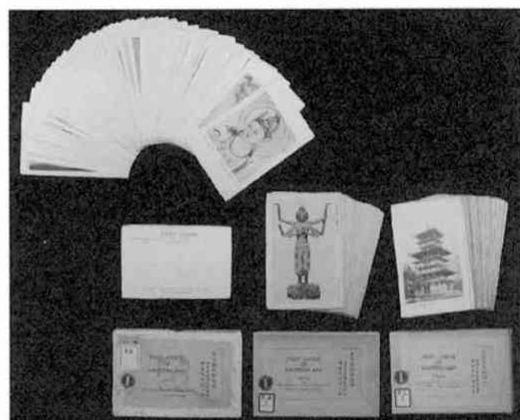
Fig. VIII Arrangement of the Art Objects in the Kondo, Horyu-zi

Fig. IX Plan of Taima-dera

Fig. X Koya-san

5 東洋美術絵端書の発行

同会は記録上確認できるだけで4回、「東洋美術絵端書 東洋美術国際研究会講義資料」[図7]と題した絵葉書のセットを編集・販売している。毎回50作程度の作品が選ばれ、片面には作品のモノクロ写真と日本語キャプション、もう片面には英文のキャプションが記されている。採録された作品や図版は『日本美術資料』や“Masterpieces of Eastern Art”と重なるものが多い。葉書にはナンバーが付けられており、おおむね作品の制作年代順に並べられているが、一部異なる。また、作品のキャプションは和文が作品名、所蔵者程度なのに対し、英文ではこれらに加えて材質や成立年代などの情報が加えられている。



7 東洋美術絵端書

このシリーズは、1941（昭和16）年6月に第1輯、翌年3月に第2輯、同年6月に第3輯が発行され、それぞれ絵画、彫刻、建築の絵葉書が一箱にまとめられている。また1945（昭和20）年12月には、「五十枚一組ノ第四輯」の編集が終わり、印刷中との記述が確認できるが（『昭和二十年度事業経過報告』）、この第4輯はシリーズごとに絵画、彫刻、建築と分けていた従来の編集方針とは異なり、絵画、彫刻、そして庭園を合わせたものとなっている。

また、箱入りの「東洋美術絵端書」シリーズとは別に、封筒に数点の絵葉書を封入したセットも作られたようだ。この中には絵画、彫刻、建築のみならず工芸の絵葉書も存在する。同研究会の会計簿によれば、1940（昭和15）年度以降、頻繁に絵葉書の印刷を行っており、箱入り「東洋美術絵端書」シリーズに先行するかたちで封筒入り「絵端書」の発行がなされていたと推察される。これらを考える上で興味深いのが、「東洋美術絵端書」第2輯彫刻編の欠番である。後掲のリストからも明らかのように、絵数50点のうち第1、3輯の絵画、庭園編が1～50の連番なのに対し、彫刻編は1～66となっており、途中の番号を欠く。封筒入り絵葉書の中にはこの欠番に対応するナンバーを有する絵葉書が存在することから、（箱入り）「東洋美術絵端書」編集時に作品の取捨選択がなされたと推察される（なお、この欠番の中には、10点弱の雲崗石仏の絵葉書がある）。

不明な点の多い本シリーズだが、第2、3輯の発行に関しては『事務日記』が残されている。1941（昭和16）年3月に編集を依頼され、同月末にはすでに作品を選定し、写真等の資料が揃えられている（ただし、校正・印刷などが滞り、発行は翌年となった）。また、同日記によれば、第2輯の彫刻編は最初80点程の作品がリストアップされ、その後数点を絞っていった様子がうかがえるが、具体的にどのような判断基準で作品が選ばれたかなどは不明である。

さて、先述の『昭和二十年度事業経過報告』によれば、1945（昭和20）年9月には物価高騰により定価を5円より12円50銭に引き上げたが、完売したとある。また、販売分とは別の「相当部数」を「マツクアーサー元帥ヲ初メ、進駐軍将校ニシテ日本美術、或ハ日本文化ニ特ニ関係アル人々ニ寄贈」したことが確認できる。

(4) 中国大陸への視察旅行

同研究会は、1940（昭和15）年8月に、外務省文化事業部に対して、中国の美術及び工芸等の調査視察を行うために下記の申請書を提出した（以下にあげる外交文書は、いずれも「国立公文書館 アジア歴史資料センター」のホームページより検索し、転載したことを断っておく）。

「支那美術及美術工芸調査事業助成申請書」の全文は、下記の通りである。

対支文化工作ハ固ヨリ各方面ヨリスル観察ヲ基礎トシ統一アル立案ヲナサザルベカラズ然ルニ從來専門学者ノ現地踏査ハ古美術ニ関シテハ概ネ考古学者建築学者其他ニヨリテ行ハレ美術全般ノ立場ヨリスル調査ニハ欠クルトコロアリ現代ノ美術工芸ニ関スル調査ノ如キ全ク欠如セリト言フモ過言ナラズ美術全般ノ立場ヨリ観察スル中ハ古美術ノ保存、現代支那美術諸機関及美術家トノ連絡提携、地方土産工芸ノ保護開発、美術行政及教育ニ関スル調査等ヲ主要ナル項目トシカクノ如キ項目ニ関シ全般的見通シヲ樹テ適切ナル施策ヲ立案スルハ我国美術関係者ノ当然ノ責務トイフベシ

本会ニ於テハ右ノ趣旨ニ基キ今般美術研究所長矢代幸雄、美術研究所員正木篤三、美術研究所助手豊岡益人ノ三名ヲ依嘱シ満洲及支那ニ派遣シ左記ノ各事項ヲ調査セシメントス

一、美術上ノ文化施設ノ視察

事変前ヨリ存続スル美術館博物館ノ如キ機構並ニ列品ニ重要ナル変化ヲ来シタルモノ多ク今後ノ経営ニ関シテハ深甚ナル考慮ヲ要スルモノアリ或ハ新設ノモノニ関シテモ今後ノ発展計画等内地ノ状況ト照応シテ適切ナル対策ヲ考究セントス

二、古美術保存ノ状況視察

從來問題トナレル所ハ多ク現地ニ於テ保存工作ヲ施サザルベカラザル大規模ノモノ（古建築又ハ石窟遺跡ノ類）ナレドモ同時ニ絵画、彫刻、工芸ノ如キ分散破壊セラレ易キ古美術ノ保存ニ関シ適切ナル方策ノ施行セラレタルヲ聞カズ今回ハ寧ロ主力ヲ此方面ニ注ガントス從テ各地ニ於ケル個人蒐集美術商等ニ就テモ出来得ル限り視察ノ便ヲ得タシ

三、地方美術工芸ノ視察

地方土産ノ工芸ハ地方都市ノ産業ノ主要部分ヲ占ムルモノアリ之ヲ保存改良奨励スルコトハ文化上ノ重要問題タリ故ニ能フ限り土産美術工芸ノ状況ヲ調査スルト共ニ其ノ標本ヲ蒐集スルコトニ努ム

四、前項ニ関スル現地側及支那側要人トノ意見交換

支那ニ於ケル各種文化施設ハ今後内地側機関ト密接ナル関係ヲ有スベキコトハ論ヲ俟タザル所ニシテ美術関係ニ於テハ内地ノ美術行政、美術教育、美術研究ノ中心機関ノ枢要ナル地位ニアルモノニシテ親シク現地側ト意見交換ヲナシタルモノナク今後カ、ル企ハ極メテ重要ナルヲ以テ先ヅ今回ハ特ニ具体的問題ヲ掲ゲズシテ現地関係者ト隔意ナキ懇談ヲ遂ゲ其間ニ今後ノ趨勢ヲト知シ将来ニ資スルコトヲアラントス

本事業ニ要スル経費トシテ別紙予算書ノ通り計八千七百七拾参円六拾壹銭也要スルコト本会ニ於テハ之ヲ支出スル途ナキニツキ右金八千七百七拾参円六拾壹銭也助成方御詮議相願度別紙事業計画書及事業予算書相添此段及申請候也

昭和十五年八月二十六日

外務省文化事業部長 三谷隆信 殿

なお同申請書には、「旅行日程並びに調査の場所及調査事項」も添付されており、「旅行日程」では、つぎのように各地を視察することになっていた。第1日東京発、第4日大連、第7日奉天、第9日新京、第11日承德、第13日北京、第19日張家口、第20日大同、第22日北京、第26日太原、第29日北京經由で天津、第31日済南、第34日青島、第37日海路にて上海、第40日杭州、第43日上海經由で蘇州、第44日鎮江、第45日南京、第50日空路にて漢口、第53日九江、第57日空路にて南京、第58日上海、第60日長崎、第61日東京着。

この申請に対して「指令書」として、下記のような回答があり、8千円が助成されることになった。

指令第七二号 「昭和拾五年九月参日 發送済」

指令書

東洋美術国際研究会長

侯爵 細川護立

第一条 其ノ会ノ支那美術及美術工芸調査研究事業助成ノ為昭和十五年度ニ於テ金八千円也ヲ交付スヘシ

第二条 本交付金ノ収支ハ之ヲ帳簿ニ記帳シ其ノ収支ヲ明カニスヘシ

物品ノ受払ニ就テモ亦同シ

領収書其ノ他収支ノ事実ヲ証明スル一切ノ書類ハ指令ニ依リ何時ニテモ提出シ得ル様整理保存シ置クヘシ

第三条 年度経過後一ヶ月以内ニ収支計算書並ニ事業成績報告書各二通ヲ提出スヘシ

第四条 本交付金ニ依リ調査又ハ研究セル出版物ハ十部無償ニテ提出スヘシ

第五条 外務大臣ハ所属職員ヲシテ本事業ニ関スル収支及経営ノ状態ヲ監査セシムルコトアルヘシ

第六条 外務大臣ハ必要ニ応ジ本指令書ニ変更ヲ加フルコトアルヘシ

第七条 本事業ニ関シ其ノ目的ヲ達成シ得サルモノト認ムル時ハ本交付金ヲ返納セシムルコトアルヘシ

昭和拾五年九月参日

外務大臣 松岡洋右

また、この「指令書」に基づき、外務省からはつぎのような文書によって「便宜供与」がされていた。

昭和十五年九月九起草

発信人名 松岡大臣 受信人名 宛先別記ノ通ノ計十三通

件名 美術研究所長矢代幸雄外二名ニ対シ便宜供与ノ件

「今般東洋美術国際研究会員美術研究所長矢代幸雄外二名ハ支那ニ於ケル古美術ノ研究並ニ現代美術及美術工芸ノ調査研究ノ為別紙日程ニヨリ九月十二日東京出發滿支各地ニ出張スルコトト相成右事業ニ対シ当方ヨリ相当経費助成シタル次第ナルニ付テハ右御承知ノ上全人等貴地着ノ節ハ右

調査研究ニ関シ御差支ナキ限り便宜供与方可然御取計相成度此段申進ス」

同文書には、つぎのように送付先が記されており、在新京（大使館）、在北京（大使館）、在天津、在張家口、在大同、在太原、在濟南、在青島、在上海（大使館）、在杭州、在南京（大使館）、在漢口、在九江 各公館長宛計十三通が送られたことがわかる。当時の美術研究所長矢代幸雄、所員正木篤三、助手豊岡益人の3人は、同年9月12日に出発し、11月14日に帰着した。その報告書として、翌年に矢代の執筆になる「昭和十六年五月提出 支那旅行視察報告 対支文化工作ノ目標トソノ方策」と題された冊子（縦21×15cm、孔版刷、全91頁）である。

序には、つぎのように記されている。

本報告は余が昭和十五年九月より十一月に亘りて支那旅行をなしたる視察の結果なり 余は旅行に際し美術研究所所員正木篤三、同所助手豊岡益人を同伴し、それぞれ特殊問題に関する視察を命じたり。本報告は余自身の視察のみならず、同記二氏の視察の結果をも包含するものなり。

矢代幸雄

つぎに「目次」は、下記のとおりである（ ）内の数字は頁。

目次	北京の将来
序—基礎的考察……………(7)	比類なき芸術都市
広大なる土地と強力なる自然	北京中心の観光路
無限の民衆と金持階級	建築統制の問題
歴史的背景	紫禁城の美術館の利用
日本の独善主義	古美術保存策……………(50)
対支文化政策確立の必要	古美術保存の必要
	規模の広大に対する用意
人心收攬の問題……………(20)	国宝保存法的制度の不可能
文化工作の真意義	法治的訓練なき支那
清朝の人心收攬術	日本軍隊撤退後の考慮
医療と文化工作	北京中心の華北古美術保存策
人心收攬術と現地軍人の所感	支那古美術の日本流入を許すべし
文化顧問の設置……………(32)	為替問題
文化工作に対する政治的考慮の欠乏	古美術現地保存主義の再検討
組織上の欠陥	美術教育の問題……………(67)
対支最高幹部としての文化顧問	事変以前美術教育施設
対支芸術政策……………(35)	現行美術教育施設の拡充策
支那人の芸術愛好	北京大学
東亞共栄理念教育の効果	北京師範学院
芸術政策による注意の転換	北京国立芸術専科学校
北京大学芸術院の復興	杭州美術学校の復興
北京の芸術都市的観光都市的開発……………(42)	上海美術学校の新設

美術上の日支提携の問題…………… (76)

日支美術上の差違

不用意なる合同最も慎しむべし

日支提携委員会と附属調査機関の設置

支那工芸の開発…………… (82)

支那工芸の世界的流行

倫敦支那美術大展覧会

支那工芸力の開発と授産

指導上の注意

支那中心の日本の海外宣伝…………… (87)

在支外国人の重要性

日本の国際文化事業に対する世界の批評

北京中心の世界的宣伝

上海中心の世界的宣伝

序—基礎的考察

昭和十五年九月十二日より十一月十三日に亘る約二ヶ月間の余の北・中支視察旅行に際して先づ第一に感じた事は、皇軍将士への感謝であつた。諸種の困難に打克つて東亜共栄の国家的理想にむかつて皇軍将士が力闘してゐる有様を実地について目撃し、感謝の念を新たにしたのであつた。更にまた最も痛感したことは、この支那事変を、現在の混沌状態より一日も早く整頓して日支の融和と協力を確立しなければならないといふことである。皇軍がこれ程に力闘して平定したる北支中支の広大なる地域と民衆とを秩序立て、安定せしめ、日本と共栄する為に日本の官民ともに全力を挙げて努力しなければならないといふ事であつた。この事は日本国民として平素より感じてゐる筈のことであつたが、その困難なる実状を目撃して更にその感を深くせざるを得なかつた。而してまた、それに伴ふ困難の容易ならぬ所以をも認識した。余は文化美術及工芸視察の職責より支那に於ける各種の実情を能ふ限り調査研究し、その大体の報告と、それに対する対策を私見として述べて見たい。

その視察旅行の結果として、日本が今後引続き対支文化工作を遂行してゆく上に於て、余は最も重要な基礎的事実として以下の諸事項を充分考慮する必要があると考へた。

一、広大なる土地と強力なる自然

支那大陸を旅行して最も感銘されるものは、その自然の大規模にして、且つ強力なることである。対支工作の凡ゆる方策は、この広大なる土地と、強力なる自然を基礎として考へなければならぬ。同じ事業にしても、規模の雄大といふことが全くこれに対する方策を覆へて了ふことがある。即ちこの広大なる地域に働きかける為には、余程大規模なる工作の資源と労力との準備なくしては不可能であつて、小規模なる国土の自然に育つた日本人は対支工作に於て、この比例が比較を破つて大きいといふことで失敗に帰する、或は少くとも予期の効果を挙げ得ないことが屢々ある様に見受けられる。日本の如き狭い国では容易に為し得る同じ事柄が、支那に対しては屢々、最も不自然に、又、不可能になり、有害無益に終ることは、最も戒心すべきである。この意味より重点主義は日本の対支工作に於いて最も必要であると思はれる。

二、無限の民衆と金持階級

この広大なる地域に殆ど無限無量の如く感ぜられる支那の民衆が住んでゐる。それ等がこの強大なる自然に養はれて、殆ど無神経に近き強靱なる神経をもつて育成してゐるので、是等に対する凡ゆる工作は国土狭少、また国民の纏りがよく、而してまた国民の神経鋭敏にして万事よく行き渡る日本に対する対策及び運用法とは著しく異らねばならぬ筈で、この深刻なる事実を基礎的に考へな

ければ有らゆる対支工作を誤るといふ他はない。

而して、この大なる支那の民衆は非常に多数なる無知の大衆と、金持階級とにわかれてゐる。無知の大衆は無神経で、殆ど動物の如き生活をしてゐるに對して、金持階級は非常に富裕贅沢であり、儀礼を重んじ、文化的芸術的に進化してゐる。支那には日本に於ける中産階級といふが如きは頗る少い模様で一方に無知なる大衆、他方に金持階級が対立し、この両者が一方は数に於て、一方は實力に於て支那を動かしてゐる。それ故に日本の如く中産階級に殆んど統一されてゐる社会に育つたものが支那に働きかける場合には、この懸絶したる二種類の民衆をそれぞれ標準にをくことは、特に深く認識して置かなければならぬ。日本の対支工作の或る部分は、此の事実の閑却から予期の効果を挙げ得ないかのやうに感じられる。

而して此の金持階級は、支那の民衆の全体の数の比例より言へば、あまり大きくないかもしれないが、然し日本人の普通の考へ方よりいへば、なかなか多数と言はなければならない。それは例へば北京、天津、上海等都会地の諸学校の生徒を見れば解る。生徒の往復に或は自動車、或は洋車などをもつて送迎する数は非常に多く、且つ彼等は美服を着けて一見贅沢なる育ちであるのであつて、之を以て見ても支那に金持の多いことは顯著である。且つ支那人には拝金主義行き亘り、又、威容をとゝのへ極度に体面を重んずる民族なるが故に、この金持階級の社会上の勢力は非常に有力なるを想像せしめる。支那を動かすには余程この金持階級を重要視する必要がある、殊に文化工作の如きは主としてこの金持階級を標準に置くべき性質を持つ。斯くの如く、対支文化工作はこれ等の金持階級を相手とするにより、決して貧弱なる装備を以て行ふを得ないのである。若し之を貧弱なる用意と装備とを以て行ふならば、却つて輕蔑を招く憂をなしとしない。

以上は、対支文化工作の相手として金持階級の重要な所以のみを力説したのである。何となれば、対支工作の大部分は一概に大衆相手のやうに取扱はれて居る嫌ひがあるからである。下層大衆も勿論大切であるが、文化工作の性質上、特にこの閑却されてはならない方面に注意を喚起する次第である。

三、歴史的背景

支那へ行つてその国土を見、又、その民衆に接する時、非常に深く感に打たれることは、それ等のもつ深き歴史的背景である。支那の広大なる国土には至る所に歴史的遺跡散布して寸土も悠遠なる歴史を含まざるなく、実に古文明の国たるを思はせる。その民衆も現在は無智無教育のものが多いが、然も彼等は長き歴史に養はれたる文化爛熟の血液を享けてゐて、決して唯の野蛮人ではない。それ故に、彼等の考へ方は複雑に老熟したる文化性を持ち、謂はゞ文化的の老人であつて決して單純なる、一筋縄で自由になる如き原始人ではない。況んや教育を受けてゐる金持階級は、文化的に極度に發達した寧ろ癡癡の人類であつて、その考へ方は屢々、老獪とも評すべく、彼等に対する諸種の工作には種々なる工夫と手心が要るのである。例へば、支那の民衆が演劇、音楽、書画其他凡ゆる装飾、歓楽、贅沢を好む程度は真に驚く可く、紳士の教養として欠くべからざるのみならず、或ひは殆んど之に淫するほどで、日本人の想像も及ばざる所である。この歴史的背景ある民族に、文化的素養の單純なる一本気の日本人が簡単に思ひついた所を与へて感化しようと思つても無理と言はざるを得ない。従來の文化的工作は、斯くの如き支那民心の動向の觀察に不充分のところがあつたやうに思はれる。

四、日本の独善主義

在支の日本人は官民共に、支那に働きかけることに最善の努力を費してゐる事は一見よく解る。日本の、それら工作に当る人々が、日本の為にも支那の為にも考へて凡ゆる誠意ある努力を尽してゐることは、つゆ疑ふ余地がない。然し乍ら、斯る純粹なる動機と、真摯の態度とを持つが故に、なほ更我が対支工作には日本人の持前の性質である独善主義と前述の日本人一般の文化的素養の欠陥とが、そこに却つて卒直極端に現はれて、支那民衆に働きかける上に於て喰ひ違ひを生じ、彼等の心をしつかりと捉へるに未だ程遠い観がある。日本人の独善主義は、その動機が純真だけに猶更反省の機会尠く、日本人は自分等の親切が先方に理解されずと怒り、先方はまた迷惑を感じながら、然も訴へるに途がないといふ望ましからざる關係を生じて居る。

日本人の独善主義、即ち独りぎめは今日始まつたことではなく、日支關係の過去の歴史に於ても常に顯著に現はれてゐた。即ち日本人は支那に対して先方が如何に考へ、如何に受取るかと云ふ事を余り注意しないで、常に日本流を押し通した。これは日本の自主的見識とも言ひ得べく、歴史上に於ては尠からざる貢献をもなして居るのであるが、現在の如く日本が支那に対して働きかけ現實に之と結び付いて行かなければならない場合には警しめなければならぬ傾向であり、特に日本が勝利者として彼等に臨み、彼等を支配し、指導してゆかねばならぬ立場に立つ現在には、この善意な独善主義こそ正に危険といふべきである。現在の如き状態に於いて、日本の善意なる独善主義を指摘して或は反省を促し、或は相談に来ることは支那側にとつて事実上不可能であり、また日本人側は勢いがよすぎて彼等の言はんとするところを靜かに聴いてやる余裕もない、そういふことを言つて来れば、日本人は己が好意が通ぜざるを寧ろ不満に思ふのである。又、日本側に近づいて来る支那人は迎合を事として己の利益を計らんとする老獪なる者も無きに非ず、日本人は余程注意して対支工作を行はざれば却つて彼等に乘ぜられる機会は充分にあり、さもなくとも工作の効果は容易に挙がるまいと思はれる。対支文化工作の諸事業の現代に於ける最大なる欠陥は多くこの点に存し、之がよく認識され解決されなければ、凡ゆる努力も支那を動かす上には未だ軌道に乗らないと言ひ得る。實に、支那に行つて見ると東亜の將來を憂へ、又支那を愛すること多き善意ある日本の若き官民其他が懸命の努力をしてゐるが、それと支那側との気合ひは必ずしもぴつたり合つてゐないことが眼につく。斯くの如き状態を幾年続けたところで眞の日支融合は結実し難いと云ふ他はない。實に支那に進出する日本の青年等は、東亜共栄を目指すところの自分等の善意を了解せざるは、その罪支那側の認識不足にありとなして、彼等に世界の形勢を説き、或は東亜共栄の理念を教へて彼等をなほして行かうと努力してゐるが、さういふ点も確かに間違つて居ないが、それよりも、もつと重要な事實として彼等支那人の民族的感覺、歴史的背景及び思想の動向が異つてゐるといふ点を反省しなければならない。彼等を動かすには、その点をよく掴み彼等を動かすに適切なる道を以てしなければならないのである。日本の対支文化工作を見ると、恰も青年が理窟を言つて、万事を心得た老人を説得感化しようとする様な様子がある。

また一方支那に居る日本人の中には、所謂支那通が多くて、これらの人々は支那人に親しみ、支那のやり方に熟通してゐると自認してゐるが、その自認してゐるだけに又、独りぎめなる日本人流を暴露してゐるのであつて彼等の意見が全部其の儘に信賴されないことは、新進の対支工作者の考への未熟なると同じである。

五. 対支文化政策確立の必要

斯くの如き老熟せる支那民衆に、斯くの如き客氣に焦り独善に陥り易き日本が働きかけようとい

ふのであるから、対支文化工作の困難なる事言ふ迄もなく、それには諸種の方策を練る必要あり、余も或る具体案を持ち之を私見として試みに提示する心算であるが、それは何れにしても文化工作はその性質上、急速に効果を挙げ難く、深き感化影響の次第に人心に浸透するを期待して長き眼を以て観察すべきである。斯くて文化政策の目標の確立といふ事が現在最大なる重要事になり、これをよく研究して確立した上は常に根本を揺るがすことなく、然しながら同時にその人心に及ぼす効果を絶えず批判計量反省し、謂はゞ相手及び効果に応じて手を換へ、品を換へてその実現を図るべきである。然るに支那に於ける実情は日本人の性急なる性質の爲もあり、又対支文化的諸機関のあまりに複雑なる組織上の欠陥もありて、頻々と人事の移動行はれ、従つて又、その都度政策の変更少くとも運用上の変更あるは免れ難く、是は実に歎かばしい次第である。

余の昨年十一月帰朝以来、既に華北の文化局長も華中の文化局長も移動したるは驚く可く、速やかなる移動である。

あらゆる文化工作は、謂はゞ対人関係であつて、支那の有力者と親しき関係をもち、互ひに正直なる意見を交換し、又情誼に於いて結び付いてゆかねば実現の出来ぬ事は勿論、根本方針の研究すら困難である。然も現在の如く二、三年で人事が変更するやうでは根本的情事は何も出来ないといふ方が当然である。支那側の人々には多く変更がないので彼等の告白によると、日本側の前任者と余り親しい関係になつて居ることは、後任者との関係を円滑にせざる憂へすらなきに非ず、又、人が変れば方針がどう変るか解らないので、危なくて余り深入りは出来ないと云つて居るのも決して無理ではない。

以上の如きが対支文化工作を進める上に考慮すべき実状のうち最も重要な諸点であつて、之れらを基礎として余の専門であるところの文化美術及び美術工芸等に関して、対策を考ふところ以下の通りである。(同報告書、7～20頁)

ここに記されているように、すでに日中戦争のさなかであることから、やはり侵略、占領した側である日本からの教化策として提言がこめられている。翌1941(昭和16)年9月から11月にも、同じく同研究会から派遣されている(51頁参照)。

ところで矢代は、この報告書を完成させた1年後の6月には、美術研究所を辞職している。原因は、矢代自身によれば、所内外から「国際派」、とくに「米英派」と目され、1942(昭和17)年1月、研究所内において「宣戦の詔勅」を誤読したことから、「不敬不忠として詰問」され、「排斥」する動きがあったためと記している(『私の美術遍歴』前掲)。ただ矢代は美術研究所を退いた後も、同研究会の活動には関与していたらしく、引き続き戦時下の中国に赴いている。

(5) 1945(昭和20)年から解散まで

終戦をむかえた1945(昭和20)年も同研究会は活動を継続していたようで、その『昭和二十年度事業経過報告』と翌年8月に外務省に提出された「東洋美術国際研究会解散届」(写し)を下記に挙げておきたい。

いずれの書類も、朱色の罫線で枠取られた14行詰めB5判の原稿用紙に、鉛筆書きで記された

もの。欄外右下に「東洋美術国際研究会」とあるため、同研究会専用につくられた原稿用紙であったことがわかる。

昭和二十年度事業経過報告

東洋美術国際研究会

一、講演展観

上半期

本年度上半期ノ大部分ヲ占ムル戦争末期ハ空襲熾烈ヲ極メ、東京都ノ大部分ハ焼土ト化シ講演展観ノ開催ハ事実上不可能トナリタルノミナラズ、本事業ノ対象タル外国人ハ各地方ニ四散シテ、例ヘ講演会ヲ開クモ聴衆ヲ期待シ得ザル事態トナリシ為、上半期ニ於テハ講演展観共一モ開催セズ。ソレニ代リテ外国人ノ日本美術研究ノ援助ニ努力、又外国人ニ適宜本会出版物ヲ寄贈シテ啓蒙ニ努メタリ。

下半期

終戦後、直チニ進駐軍特兵ノ為ニ講演及展観ヲ開催スル準備ヲ開始、十月進駐軍司令部ノ美術部ト相談同部ト連絡シテ展観ヲ行フ事ト決セリ。先ヅ三原繁吉氏蒐集ノ浮世絵ノ展観ヲ行フ事トナリ、同氏ノ快諾モ得タレドモ同氏ノ健康状態ハ、福島県鏡石ノ疎開先ヨリノ上京ヲ許サズ、又適当ナル展観場ヲ帝都ニ見出し得ズシテ延期。昭和二十一年二月三原氏ノ上京ヲ俟テ、展観ノ準備ヲ開始シタル処、間モナク同氏ハ病床ニ就キ、四月遂ニ逝去セラレテ、同展観ハ中止ノ止ムナキニ至レリ。

日本現代工芸美術ノ展観 自一月二十三日 至二月六日 於 アメリカ赤十字横浜クラブ

進駐軍将兵ニ真ニ日本的ニシテ高級ナル現代ノ工芸美術ヲ紹介スルタメ織物、陶磁器、漆器等ノ現代作家ヲ諸家ノ出品ヲ請ヒテ、アメリカ赤十字ノ将兵慰問ノタメ横浜クラブニ於テ二週間展観、好評ヲ博セリ。

日本画ノ実演 一月二十日 於アメリカ赤十字東京クラブ（旧銀行集会所）

日本画家東山魁夷氏ニ依頼シテ、アメリカ赤十字ノ進駐軍兵士ノ集会所タル旧銀行集会所ニ於テ、日本画ノ実演ヲナシ、過去十数年間日本画ヲ習練セル、トルネー女史ニ依頼シテ英語ノ説明ヲナセリ。進駐軍特兵ノ観衆多ク日本画ヲ習ヒタシト希望スルモノ多シ。

日本画ノ教授

前記日本画実演ノ際ニ於ケル希望ニ於応ズル為、アメリカ赤十字東京集会所長ト相談、同所ニ於テ、日本画ノ教授ヲ行フヤウ本会ニテ世話ヲナス事トナレリ。東山魁夷氏ニ依頼シテ週二回、同集会所ニ於テ日本画ノ授業ヲナス事トセリ。但シ東山氏ヘノ謝礼ハアメリカ赤十字ニテ負担スル事トセリ。三月廿六日夜ソノ第一回ヲ開催、進駐軍将兵七名授業ヲ受ケタリ。初メノ数回ハ本会主事モ出席シテ東山氏ノ教授ヲ助ケタリ。

古代衣裳ノ展観

麹町区丸ノ内ニ新設セラレタル進駐軍兵士ノ学校ニ於テ、日本美術ノ展観ヲ定期的ニ行フコト、ナリ、第一回トシテ長尾家処藏ノ日本古代衣裳ノ展観ヲ行フべく、長尾家トノ交渉、カタログ及説明文ノ執筆等準備ヲナシタレドモ展観場ノ設備三月末迄ニ成ラズシテ本年度中ニハ開催不可能ナレリ。

二、欧文「東洋美術研究」(プレチン・オブ・イースターン・アート)

本年度上半期事業経過報告ニ報告セル如ク、第四十号及第四十一号ハ製版中途ニテ印刷工場ガ昭和二十年五月焼失セルタメ、発行不可能トナリ、原稿ヲ翻訳中ナリシ第四十二号(平家納経研究号)ハ翻訳担当者森節子氏宅空襲ノ為罹災ノ際邦文原稿及翻訳原稿ノ大半ヲ焼失セリ。終戦後第四十号ヲ新事態ニ適応シテ新シク編纂ヲ開始、既ニ翻訳モ完了セルガ、印刷費ノ不足ノ為、二十一年度政府補助金ノ下附ヲ俟テ印刷ニ附スル筈ナリ。

三、英文「日本美術案内記」(アート・ガイド・オブ・ニッポン)

既ニ邦文原稿完了シテ本年度ニ於テ英訳ヲ完了、印刷ニ附スル筈ナリシ第二卷ハ、昭和二十一年三月ニ至ル迄翻訳者僅カニ一人ナリシ為(昭和二十年十一月迄英訳ヲ担当セル倉田文作ハ文部省社会教育局ヨリノ熱望ニヨリ進駐軍司令部トノ美術ニ関スル連絡ノタメ、十二月ヨリ主トシテ文部省ニ於テ仕事ヲスル事トナリ、十二月ヨリ三月迄ハ、十一月ヨリ囑託セル金子重隆一人ニテプレチンノ原稿及美術案内記ノ原稿ヲ英訳セリ)翻訳進捗セズ本年度末ニ至レリ。三月ヨリパートタイムノ英訳者二人ヲ得タレバ、昭和二十一年度上半期ニハ完了セン。

又第三卷(京都・滋賀・大阪地方)ハ調査担当者全部応召ノ為、又予算ノ関係上新規調査員ヲ囑託不可能ノ為僅カナル進捗ヲナシタルノミナリ。

四、日本美術読本

上半期東亜諸国人ノタメ日本美術読本ヲ編纂中ナリシガ、終戦後新事態ニ対応シテ、計画ヲ全ク変更、新ナル構想ノモトニ欧米人向ノ「日本美術入門書」ノ編纂ヲ開始ソノ原トナルベキ草稿ハ相当ノ量ニ達セリ。

五、日本美術絵葉書

既ニ発行済ナリシ日本美術絵葉書第一第二第三輯ハ近時ノ物価ニ対応シテ一輯ノ定価ヲ金拾貳円五拾銭ニ値上、九月中旬ヨリ教文館ニ卸売シテ販売ヲ開始セン処、売行極メテ良好ニシテ全部ヲ売尽セリ、但シ相当部数ハマックアーサー元帥ヲ初メ進駐軍将校ニシテ日本美術、或ハ日本文化ニ特ニ関係アル人タニ寄贈セリ。

本年下半期ニ於テ五十枚一組ノ第四輯ヲ編輯ヲ行ヒ、十二月完了、京都便利堂ニ於テ目下印刷中ナリ。

六、「マスター・ピース・オブ・イースターン・アート」

発行ズミナリシ第五輯迄ハ九月中旬ヨリ(終戦前迄ハ相当部数ノ在庫アリシガ)教文館ニ於テ発売ヲ開始、何レノ輯[モ]売切トナレリ。但シ本書モ相当部数ハ進駐軍将兵ヘノ効果ナル寄贈ニ用ヒタリ。

本書ニ似テ更ニ大部ナル「マスター・ピース・オブ・ジャパニーズペインティング」ノ編纂ニ着手シタレドモ印刷所ノ見積書ニヨレバ二千部ニテ六万円ノ費用ヲ要スル為費用不足ニテ発行ヲ見合せリ。

七、外人ノ日本美術ノ鑑賞及研究ニ対スル援助

上半期ニ於テハ中立国人及独乙人ニ適宜出版物ヲ寄贈シテ啓蒙ニ努メタル外(第一項参照)独乙人ゼッケル氏ノ仏教美術ニ関スル研究及宇治鳳凰堂ニ就テノ研究ノ援助ヲナセリ。下半期ニ於テハ終戦後ノ新事態ニヨリ本会ノ仕事モ自由トナリ本会本来ノ目的ニ勵進スルコトヲ得テ、米国人ノ美術鑑賞及研究ニ大イニ活動セリ。即チ

- 1、進駐軍司令部ノ美術部「アーツ・アンド・モニュメント部」ト密接ナル連絡ヲトリテ、ソノ仕事ノ援助ヲナセリ。
- 2、本会事ム所及本会主事山田智三郎宅ニ来リテ日本美術ニ関スル質問乃至助言ホメタル進駐軍將兵ニ諸説明ヲナシ、又鑑賞ニ関スル便宜ヲ、或ハ助言ヲ与ヘタル外、展観及社寺ヘノ案内ヲモナセリ。
- 3、アメリカ赤十字東京及横浜ノ「インフォメーションオフィス」ニ対シ、ソノ主催スル進駐軍將兵ノタメノ見学旅行ニ附テハ助力ヲナシ又、案内説明人ノ世話ヲナセリ。
- 4、前記進駐軍司令部美術部ノ部員シックマン小佐及デーヴィス大尉ノ美術史家トシテノ個人的研究ニ助力セリ。
- 5、極東委員会英国代表サンソム卿来朝ニ際シ同氏ノ関西旅行ニ矢代常務理事同道シテ古美術鑑賞ノ世話ヲナセリ 又本会出版物ヲ同氏ニ寄贈セリ。
- 6、以上ノ外、本会ノ出版物ヲ進駐軍將校ニシテ、日本文化或ハ美術ニ興味アル人々ニ適宜寄贈シ又、アメリカ赤十字集会所、図書室等ニモ寄贈シテ本邦美術ノ紹介ニ努メタリ。

八、事務所及図書、研究資料ノ疎開移転

昭和二十年春ノ空襲ハ熾烈ヲ極メ、本会ノ苦心蒐集セル図書研究資料ノ安全ヲ計ランガ為ニハ、疎開移転スルノ止ムナキニ至リ、又本会事務所ノ所在スル文部省美術研究所ハ山形県酒田市ニ疎開移転シ、研究所ノ建物ノ大部分ハ外事専門学校ニ貸与サル、事トナリシ為、本会モ図書、研究資料ヲ神奈川県大船町北鎌倉山ノ内東慶寺山上ノ松ヶ丘文庫ニ移転シ、事務所ヲ同町山ノ内六九〇番地山田智三郎方ニ移転スルコトニ決定、五月初旬ヨリ準備ヲ開始六月末移転ヲ完了セリ。

前記外事専門学校ハ美術研究所ノ大部分ヲ昭和二十一年二月末日迄使用シ居リシ為美術研究所ニハ図書類ヲ置ク場所ハ勿論・執務ニ充分ナル場所モナキ為終戦後モ引続事務所ヲ美術研究所及疎開先ノ両所ニ置キテ執務セリ。

（以上）

東洋美術国際研究会会解散届（欄外に外務省へ提出書類ノ写シと記載）

先般及御居候如ク、本会経済上ノ理由ニ依リ解散ノ止ムナキ次第ト相成リ七月十六日評議員会ヲ開催、解散ソノ他添附別紙ノ如キ議題ヲ計リシ処、何レモ可決セラレ候間、七月末日ヲ以テ解散致ス事ト相成候間此段及御居候也。

尚事業ノ一部ハ日本交通公社ニ於テ、添附別紙事業引継覚書ノ如キ条件ニテ引継被下事ト相成候。

現在評議員会ニ於テ可決セラレシ処分方法（添附別紙評議員会議題参照）ニテ残務整理中ニ候ハバ清算ノ上ハ決算御報告申上ベク候。

本会創立以来、外務省及情報局ヨリ多大ノ御援助ヲ賜リシ事役員一同衷心ヨリ感謝致シ居リ一同ニ代リテ此処ニ厚ク御礼申上候。

昭和廿一年八月廿九日

東洋美術国際研究会

会長 侯爵 細川 護立 印

外務省

情報部長殿

追 想

本章では、当研究所創設時からの職員であった名誉研究員故白畑よしのインタビューと同インタビュー後に寄せていただいた「覚書」、そして日本画家稗田一穂氏のインタビューを掲載する。

白畑よし氏のインタビューは、創設期から戦後までの研究所内の様子が語られており、貴重な記録である。このインタビューをした1996（平成8）年当時、すでに創設期を知る旧職員は、白畑よし氏おひとりであった。そのために当研究所では当時の記録を残すためにインタビューを行った。本インタビューはその記録であり、本書の刊行のために改めて編集して掲載するものである。

また日本画家稗田一穂氏のインタビューは、同氏が1944（昭和19）年に当研究所に嘱託として勤務していたことから、戦中期に行われた当研究所の「疎開」作業にあたられており、その記憶をもとに語られている。本書編集中に、稗田氏に会い、当時の話をうかがう機会があり、「疎開」当時の話題を中心に話していただいた。本インタビューは「疎開」の記録として掲載するものである。

白畑よしインタビュー

1996（平成8）年1月19日 於京都市新都ホテル

聞き手：米倉迪夫、山梨絵美子、中村節子

白畑よし氏（1906年10月29日～2006年6月2日）略歴

1906（明治39）年10月29日、山形県酒田市に生まれる。9歳で指物師であった父に同行して上京。1926（大正15）年4月文部省専門学校入学検定試験に合格。1928（昭和3）年8月1日、設立準備中の当研究所に入所。東京美術学校の矢代幸雄研究室で、図版資料の作成、中川忠順文庫の整理にあたる。1930（昭和5）年6月30日当研究所雇に採用される。当時の研究所員であった田中喜作に図版解説執筆を勧められ、その指導によって、「仲津姫像（図版解説）」（『美術研究』39、1935年3月）「板絵神像 奈良薬師寺藏（図版解説）」（『美術研究』45、1935年9月）を発表。その後論文執筆を勧められて「勧修寺繡帳の技法について」（『美術研究』48、1935年12月）を発表する。以後「人麿像の像容について」（『美術研究』66、1937年6月）「佐竹侯爵家藏三十六歌仙絵雑考」（『美術研究』77、1938年5月）「女絵考」（『美術研究』132、1943年11月）「截金文様の研究 平安朝仏画を中心として」（『美術研究』139、1946年11月）など中世絵画を中心とする論考を発表する。戦中は当研究所の資料の疎開にともなう酒田に滞在。戦後は同所資料部主任を経て、1949（昭和24）年6月文部技官となり、「歌仙絵の変遷」（『国華』688、1949年7月）を執筆するなど、文化財の調査研究と指導に努める。1952（昭和27）年8月に京都国立博物館学芸課に転任。1962（昭和37）年8月資料室長となり、研究図書および関係資料の充実に努める。この間「源氏物語白描絵雑考」（『大和文華』12、1953年12月）「寝覚物語絵巻雑考」（『大和文華』14、1954年6月）等、大和絵の絵巻を中心に調査研究を行い、また、同館の東洋美術品の収集に尽力する。1968（昭和43）年3月に京都国立博物館を定年退官。その後も京都市内に住んで、大和絵に関する論考を発表。白畑の研究は、作品を観察し画中の人物の着衣や文様などの細部に注目するとともに、文学との関わりから描かれた主題や作家の考察におよび、広範な知識と鋭い洞察によって、多くの新知見がもたらされる。女性研究者の少ない時代にあつて、第一線で認められる論考を発表し、後進に指針を示しつづけ、女性美術史家の草分け的存在である。最晩年は埼玉県川口市に住む甥のもとに転居し、2006（平成18）年6月2日、同地で死去。享年99。当研究所名誉研究員。

美術研究所の創設期について（『美術研究所一覽』を見ながら）

【聞き手】これで言うと、嘱託っていう身分でこちらの方たちは研究所にいらしたんですか。

【白 畑】そうでしょう。嘱託っていうのがいっぱいいるんですよ。なかなかこの文部省の仕組みというのが分かりにくいんですわ。嘱託でも二通りあるんです。つまりちゃんと常勤で毎日来て、そして仕事をする人と、顧問みたいな。偉い人たちは顧問になっていろいろアドバイスするとかね、研究に対して。そういう二通りあるんですよ、嘱託と言っても。

初めはまだ文部省になってませんから、非常に自由なんですよ。別にそういう名前使っても、構

わない。文部省で使ってる規則と違いますから。昭和10年ですか、文部省に移管されたのが。それからになると、なかなか囑託というの簡単になれない。それまでは自由に研究所で名前をつけてました。

【聞き手】「自由研究員」ですね。

【白 畑】 福井利吉郎先生とか望月先生、児島喜久雄。みんなもうそのころのそうそうたる学者は全部研究所に縁があったわけなんです。別にお役目とか月給をちゃんともらって

るとか、そういうものではなくて、ほんとにまだ自由でね。資料がありますから、やっぱりその資料を見たいわけですね。ほかにはないんです、あのころ。図書館だって全然美術なんて、もちろんないわけです。

【聞き手】 今みたいにアナウンスは、研究所ができたっていうのはそんなに一般的に広まるわけではないですね。

【白 畑】 ないですよ。

【聞き手】 それでもこれだけの方たちが見えたわけですか。

【白 畑】 ええ。そうそうたる学者は全部博物館と研究所の顧問みたいな、そういうふうな仕組みになっていて、何かあると聞きに行くとか、資料をいろいろ提供してもらおうとか、そういうふうに網が張ってあったんですね。研究費も何もないんですよ、この時点では。昭和3年の8月1日に、それまでの研究所の建物がみんな引っ越したって、何にもない。モスグリーンのバンドーンだけが、ダーッとね。空のバンドーンだけ。置いてあったんですよ。

そのうちに、中川忠順って偉い学者さんなんですけどね、東大の講師をされていた偉い学者じゃないかと思うんですけど。昭和3年に亡くなられてますから、私、お会いしたことないんですが。その息子さんが中川千咲さん。その千咲さんにいろいろと話を聞きました。同じ資料部でしたからね。机が本当に接してますからね。それでいろんな中川先生のことをつぶさに聞きました。

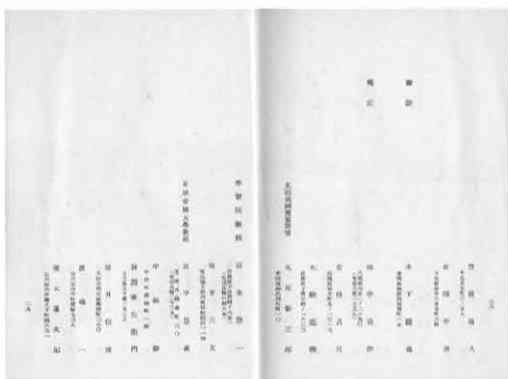
そのころ、瀧精一さんでしたかね、講師になってられて、田澤坦、熊谷宣夫、田中一松そういうそうそうたる方々、みなさん中川先生の講義を聞いて美術研究所というものが成立したと言ってもいい。中川先生の講義ノートをお弟子さんたちが出版して出そうかという企てがあったんですけども、つまり船頭多くして船が出ないっていうんで、その各々お弟子さんたちがいろいろ言うものですから、どうしても出版までこぎ着けなかった。結局出なかったと思いますね。そのノート、一部見せてもらったことがあります。

【聞き手】 それをまとめにかかったことはあるんですか。

【白 畑】 ですから、亡くなられてからお弟子さんたちが出そうというので、集まって何度か会議をしたそうですね、結局。

【聞き手】 会議の段階でもう。

【白 畑】 ええ。つまりいろんな説があって、こうしたらいいとかああしたほうがいいんじゃないとか、ああはいけないとか。脇本楽之軒さんとか丸尾彰三郎さんとか、その他の人でもみんな、



『美術研究所一覧』 昭和13年1月



資料室の白畑よし（左側）

簡単じゃないんですよ。よく言えばまじめと言うんですかね。いい加減に妥協してというのが、そういうのは全然ないんです。みんな明治人ですからね。今の方には、到底分からないと思いますね。

研究所に脇本さんとか丸尾彰三郎さんとかが集まると必ず議論ですわ。ご飯なんか食べる時、みんな集まりますからね。そうすると、非常にみんな研究心が強いですから、喧々諤々です。

中川先生なんていうのは、もうとにかく立派な方なんですけど、議論したら絶対に妥

協しないのね。だから、いつでも辞表を懐に入れて、そして役所に通ったっていう。そういうところが面白いんですね。自分の説が通らなきゃ辞めるんだってね。相当の覚悟。それは子供さんに聞いたから、恐らく間違いないと思います。そういうところがすごく厳しい方の方なんですけど。当初研究所の始まった時の、こういう気風がやっぱりずっと伝わっていくんですね、私に言わせれば。昭和3年以來、そういうものを見たり聞いたりしておるわけですからね。

矢代幸雄の指導

【聞き手】美術研究所の中では矢代先生の意志と言うか、そういうものがかなり強かったんですか。

【白 畑】もうそのころは、定員について文部省にも若い人がいないから、矢代先生の意のままね。

【聞き手】先生のこの文章（注：白畑よし「女流美術史家の回想」、『芸術新潮』237～242、1969年9月～70年2月）の中に女性は化粧は絶対許さんとか。

【白 畑】化粧はしないし、私はよう我慢しますが、腕を出してはいけないんですね。洋服着ていくわけ、まだ若い人は。絶対真夏でも半袖は着ちゃいかん。やかましいんですよ。ノックの仕方が悪いとかね。電話のかけ方が悪い。細かいことが。

【聞き手】階段を駆け登ってはいけないって言われたっていうのが伝説になっていますけれども。それは本当ですか。

【白 畑】それは本当です。学問の人ですけどね。そこにいる人間はやっぱりちゃんとしたマナーを身につけてなくてははいけない。それを浸透させました。貴族主義とかね。出勤なんか非常に厳しくてね、絶対に遅刻なんかできないのよ。退庁は4時でした。4時まできちんといなかったら絶対いけない。随分しかられてました。ずぼらな、美校を出た絵描きさんと、ちょっと入った人で、絵描きさんですから、やっぱりそういうの守れないんですね。始終しかられてましたね、それでいやになっちゃって辞めちゃった。そういうのはかなりありますよ。

【聞き手】男性は必ずネクタイをしなくてはいけないとかいう。

【白 畑】それはもちろんネクタイはちゃんとしてなきゃいかんと。別にお客さんが来るわけでもないんですけどね。とにかくきちんとしたんです。私なんか、やっぱり図録なんか、絵巻物なんか見たいわけですね。だから、昼休みに大きな机のところで、昼休み時間だからって見ることが

あるんですよ。だけど、勤務時間中にそういうものを見たら絶対怒られます。

いつのことだったか忘れましたが、奥書きがあるんです、発行日を書いてあるのね。カードをつくる時にその発行日が知りたいから、時間中ですよ、こうやって広げて、おしまいまで広げてたら、そこへ矢代先生が。始終見に来るんですよ。一日になんべんとなく。何をしているんだって。

【聞き手】 そのころ、先生はどのお部屋だったんですか。

【白 畑】 資料室のある1階に。

【聞き手】 ああ、そうですか。矢代先生もそこにいらしたんですか。

【白 畑】 矢代先生だけが2階に。下はみんなの研究室があり事務室になってました。2階を使うようになったのはもっと後のほうなんです。

中川文庫と資料の収集

【白 畑】 そのころは、非常によく勉強できました。発行年代、カードに書かなきゃならないから、だって資料の収集でしょう。それを毎日毎日やって、目録を取っては貼り。それはもう無限にある。

【聞き手】 そうですよ。今でも「美術研究所蔵書印」という四角い印を押した本がありますが。

【白 畑】 あれは中川忠順さんの本を昭和3年、4年に全部買ったんです。私が堀口さんという人に頼んでね。中川文庫ってあるでしょ。文求堂さんを介して買ったの。全部蔵から出して、そういうのをとにかく全部もらってね。

【聞き手】 あの時には図書は入ってましたけども、雑誌っていうのは。

【白 畑】 雑誌はあまりなかったです。どういうわけか雑誌というのは発行されていないんですよ。あのころある雑誌は『中央美術』ですか。『みづゑ』なんて、古い美術のものを載せてくれないですからね。古いものっていうのは、『国華』。毎月発行されるのは。

【聞き手】 古い明治の雑誌って、『美術画報』とかそういうものはいつ入ったんですか。

【白 畑】 そういうものはいつ頃入ったんでしょう。買おうと思ってもなかなか見つからないんですよ。まとめて買えたのは『国華』だけ。

【聞き手】 じゃ、徐々に買い集めてきたってことですね。

【白 畑】 発行部数も少なかったですから、あのころは。買う人もいないんですね。だから、我々学生が原稿書くなんてこと全然。たまたま矢代先生のような偉い人が『思想』とか、ああいうのに投稿される。全然本がないんだから。雑誌がないんだから。

【聞き手】 書く場がなかったわけですね。

【白 畑】 ええ。だから、いいんですよ、原稿書かなくて。勉強するよりほかにはないんだから。今みたいにコピーの機械があるわけがないですし、コンピューターがあるわけじゃないしね。だから、みんな手作りなんです。古い文献を積んで、自分で全部手書きで写さなかったらしょうがない。だから、時間がかかりますからね。今みたいにコピーがあるわけでない。

【聞き手】 かなり手書きで写されてるそういうたぐいのものっていうのがありますよね。みんな和綴じして。

【白 畑】 一時、臨時に雇って複写したことがあるの。間に合わないで。

【聞き手】 白畑先生もそれおやりになって。

【白 畑】 全部やりましたよ。東洋美術文献目録なんかをそろえるという計画もあった時から、そ

ういう資料を早く集めないと私一人ではとても不可能、時間的にね。大変なものです。

【聞き手】図版を切り抜かれて、『国華』の図版を切り抜いてバンドーンにしまって。

【白 畑】図版始めるのだって何にもないんですよ。だから、何かまず基本をつくらなきゃできない。それには『国華』を切り抜いて貼ることが一番有効なんですよ。いろんなものが入ってるの。矢代先生が向こうから持ってらした本の中から切って貼っていいようなものをばらして、そして貼ったんだけど、当面は東洋美術の中でも日本美術を専門にやろうっていうことになってましたからね。西洋美術は積極的にあんまりやってなかったです。中国やらそんなのは。日本美術を中心にしたから。でも、西洋美術もあることはあるんです。多少ね。図版を集めたり。だけど、積極的にやってないわけ。体裁を整える上で東洋と西洋があるという。

だから、西洋美術もいくらかはやってたことがあるんです。山田智三郎とか、みんな西洋美術ですよ。それは矢代先生のお弟子さんであったり、富永惣一さんは違いますけど。とにかく西洋、東洋を問わず美術史やってる人たちが全部研究所に集まってるんですよ。それは正式の所員だからとかそういうことじゃなくて、何かをやろうと。今までないですからね、そういう基本的なものが。だから、みんなが盛り上げようという、美術史全体が。そういう機運で研究所というのが初めはあったんです。だれでもいらっしゃいと。そういう学者さんたちに。

【聞き手】一番最初、書庫はなかったんですね。

【白 畑】書庫あったんですよ、越した時から。1日に越した時から書庫はちゃんと、書棚もちゃんとありました。書庫は2階まであったんです。今、3階ですか。ちょっと渡り廊下を渡って書庫があったんです。だって、しまうとこないですよ。

黒田作品の展示

【聞き手】黒田記念室は、当初から公開だったんですか。

【白 畑】一週間に一度。

【聞き手】それは当初からですか。

【白 畑】ずっと。あれは黒田さんの寄付で建てた建物ですからね、黒田記念館と言うわけでしょう。だから、黒田さんの作品は陳列すると。遺言の執行人の方たちがそういうふうに決めたわけ。だから、それがずっと継続されてるわけ。

【聞き手】その記念室に収まる作品の数って限られてると思うんですけど。

【白 畑】黒田さんのところに残ってるものだけです。それから久米桂一郎さんとか和田英作さん、お弟子さんたちの持ってる黒田さんの絵とかね。だから、あそこに飾ってあるものは限定されてるわけ。亡くなられた当時にあったものとか縁故の人が寄贈したものとかね。下絵みたいなのがありますね。

【聞き手】それらはどこに置いてあったんですか。

【白 畑】やっぱり陳列してありました、展示会の時には。

【聞き手】デッサンなどもですか。

【白 畑】黒田さんの作品がずっと。デッサンみたいなのが並べてありました。

【聞き手】2階の部屋は、全部。

【白 畑】初めは。

【聞き手】 そうなんですか。所長室以外は全部。

【白 畑】 下が全部事務室に使ってたでしょう。東洋美術国際研究会っていうのができて、そこに貸さなければならなくなっちゃって、2階をその事務室にしたわけ。

【聞き手】 それでも今のように部屋は区切られてたわけですか。

【白 畑】 大きい部屋が一つあるでしょう。あのほかは小さい部屋でしたね。

【聞き手】 この小さい部屋に飾ってあった。

【白 畑】 陳列してありました。

美術懇話会と展覧会

【聞き手】 展覧会をしていたのはどこのお部屋で。

【白 畑】 向こう側の窓のところ。入って行って階段を二段上がるでしょう。その左側。陳列室。あそこで展覧会を、毎月のようにやったんです。「美術懇話会」って、『美術研究』の中に索引があるでしょう。あの中にずっと書いてありますよ。あれだけやったんです。毎月のように展覧会を。

【聞き手】 いろいろなところから作品を借りてきて展示をされたと。

【白 畑】 そうそう。たくさんじゃないです。あそこへ陳列できる程度ですからね。ほんの少しです。

【聞き手】 それはいろいろな担当の方が、今回は誰々がっていう感じでやったんですか。

【白 畑】 それはだいたい矢代先生といろいろな所蔵家の方とかがね。「美術懇話会」の会員がいるわけですよ。その会員はみんな各界の名士でね。だから、収集家がその中にはいるわけです。だから、今度はあそこから借りてやろうとか、そういう企画があったんですね。だいたい研究所に予算があまり来ないわけですよ。だから、思うように研究ができないわけなのよね。それで矢代先生が「美術懇話会」という外郭団体をつくって、会費をかなり高く取って、その代わり毎月一回展覧会をして講演したり物を見せたり、そして各界の人が集まるから親睦会にもなるでしょう。それで研究所のためにつくったんです、「美術懇話会」というのを。

【聞き手】 会費を取ったんですか。会費というのか基金みたいなものなんですか。

【白 畑】 援助団体、後援会ですよ。本を買いたいって言ったって、高い本じゃ、予算がないから買えないでしょう。だから、そういう高い本を買って、それを寄付してもらったというケースにしようですね。

【聞き手】 美術懇話会寄贈と台帳に書いてあるのがそれだったんですね。

【白 畑】 文部省のお金もらえませんかね。だから、それは矢代先生の手腕でした。そういうところは偉かったですね。ちょっとほかの人にはできないことを。どんな偉い人にも。国際的にも。

【聞き手】 そうでしょうね。

【白 畑】 いろんな意味で顔が広い方でしたからね。だから、そういう意味で研究所というのは支えられていたんですわ。研究所の基礎が固まったというのは、矢代先生のとても顔が広くて、社交的で、そういう功績がやっぱり大いにあるわけですね。矢代先生の手腕がなかったら駄目でしょう。必ず人間っていうのはいいことばかりじゃないですよ。そういう偉いことをする人は必ずまたその陰に、やっぱり反対にみんなが困った。人間って必ず二面的ですよ。一面的な人間なんてあまり出世してないですよ、見ていて。今まで美術学界に関係のある人は大抵見えますけれども、偉くなる人というのは必ず二面的なところがある。だから、人がいい一面的な人はあんまり

大したことない。私が見たのはですよ。(笑)

創刊当時の『美術研究』

【白 畑】みんな昔の先生っていうのは個性があって、面白かったですけどね。若い時。上り坂ですからね。『美術研究』も、毎月出すんですよ、月刊誌だから、終戦までは。

【聞き手】大変でしたね。

【白 畑】だから、書くのが大変なんですよ。みんなもう大学を出て何年もたたないような連中が書かせられたんです、あのころ。前に書いた人がないから、何書いてもいいっていうわけじゃないけども、怖いものがないわけですよ。ほかの文献も買ってなくてもいいし、だから書けたんですがね。毎月になっちゃった。だから岩波へ校正へ行くのが大変でしたよ。

【聞き手】当時は岩波から出していたんですか。

【白 畑】岩波出版。『美術研究』が出るようになってからは忙しかったですよ。その編集に追われるから。

【聞き手】そうでしょうね。毎月となるとね。

【白 畑】今はみんな原稿書くのいやがって、いくら催促しても書かないんだとかって、何ぜいたく言ってるのなんて言ってね。(笑) 時代が違うからしょうがないんですけどね。

研究者としての白畑よし

【聞き手】先生に論文を書くように勧められたのは。(注:『美術研究』39号、1935年3月に〔図版解説〕「仲津姫像(薬師寺蔵)」を初めて執筆。)

【白 畑】田中喜作先生です。喜作さんと渡邊一さん。喜作先生というのは、フランスに行ってた方だから、ちょっと日本の女性蔑視とはちがうものがありますので、そういう研究のようなことをどんどん、どんどん前に仕向けてくるんですね。図版と本の整理なんかが終わりになると、絵巻物の複製を見せてもらい、この仮名書きを読んで、現代の仮名に、今の漢字に直して書きなさいというんです。こっちは古い字が分かんなかったら先生に聞けるでしょう。これはこうだ、これはこうだって、だから、非常に勉強ができるんですね。今は別だけど、美術の研究なんかで論文書こうと思うと、先生いないんですよ。いないのにみんなが、やれやれって、研究所の若い男



平等院調査 1933年頃
左から下村英時、脇本十九郎、田中喜作

の人たちが言うんです。それだからやってみようかなと思って。恐れ多いけれど、やりたくてやってるわけじゃありませんけどもね。それでうまくやりました。

でも、勤務時間中は絶対に資料を探したり書いたりってことはしません。私の本当の仕事じゃないから、土曜日の午後とか。時間中は絶対やらない。やるもんかと思って。だから、家へ持ってって本を読むとかね。時間外にやるとか、そういうことはしましたよ。だけど、戦後は研究所職員にしてくださったから

おおっぴらにできるようになりました。とにかく何にもない、始まりですからできたんで、今だったら、ほんとできないですよ。何にも論文なんてなかったから。作品の解説みたいなのが、それもすごく有名なものがあっただけでしたから。



平等院調査 1933, 34 年・渡邊一の出征 1940 年

【聞き手】この平等院は何年ころでしょうか。(平等院調査の写真を見ながら)

【白 畑】これは図録があるでしょう(注:『美術研究資料第4輯 鳳凰堂雲中供養仏』1936年)。あれの2、3年前だと思



渡邊一氏召集の記念写真 1940 年

うんです。これは脇本さんですけどもね。それから横が田中喜作さん。これは花屋敷という旅館みたいなものがありまして、そこへ泊まって撮るんですね、そこで働いていた女の方たち。お昼のお弁当か何か、お結びを持って来るんです。これは下村観山の息子さんにあたる下村英時さんですね。一時哲学とか、いろんなことをしてた。専門家じゃないです。なかなか有能な人でした。

【聞き手】これが昭和15年の渡邊一さんが召集された時の記念写真です。部屋は2階。2階のどこの部屋でしょうね。

【白 畑】どこでしょうか。2階ではあんまり集まらないんですけどね。どこだかちょっと分かりませんね。多分2階の陳列室かな。昭和15年の東洋美術国際研究会のいわゆる秘書の仕事をされてた方は、みんな津田出です。これは吉川逸治さんか。今、大和文華館館長のね。

【白 畑】上野アキさんのお姉さんがお嫁に行った。これが新規矩男さんです。これは山田智三郎ですね。これが中川千咲です。この人、岩淵さん。これが豊岡益人さん。これが和田新さん。青山さん。これは須賀利雄っていう人なんです、楠木正成の銅像を研究して、『美術研究』に書いてあった、論文が。これが木下さんですね。あとは菅沼〔貞三〕さんですね。これが小高根太郎さんで、こちらが運転手さんです、たしか。

【聞き手】運転手さんっていうのは。

【白 畑】があっただんです、あのころ。一時。あんまり使わないんですけど、一応あっただんです。これは石澤正男さん。ご存じないですか。

【聞き手】名前は聞いたことがありますね。

【白 畑】これは渡邊一さん、矢代先生。この人〔守中〕はちょっとどうにも思い出せなくてね。これが高山貞子さんってあるでしょう。これが青柳得江さんって。それから於保〔佐代子〕さんっていう、それから小野〔貞子〕さんという人で、これは矢吹〔光子〕さん。これが正木さんですね。これは久野さん。後の久野〔真白〕さんです。東洋美術文献目録の編纂の仕事をされていた。

豊岡益人氏が主任だった。そのほかに臨時雇いで長いこと来てた人がいるんです。林さんと守中さん。これが文献目録の手伝い。もう所員と同じようにやってたと思います。

資料の閲覧について

【聞き手】美術研究所に昭和13年に閲覧の規則が残っているんですが。

【白 畑】閲覧の規則ってあるでしょう。

【聞き手】これは皆さんで決められたものなんですか。

【白 畑】研究員たちで決めたことですよ、矢代先生はじめ。

【聞き手】当時は毎日閲覧、これを見ると、月曜から金曜までいつもやって。

【白 畑】やりましたよ。だから、いろんな人が来ましたよ。だけど、紹介者がなければ駄目なんです。

学生も美術学校の生徒さんもなんか随分来てましたよ。いまだに年賀状寄越す人がいます。

【聞き手】白畑先生が書庫から本を出してらして。

【白 畑】ええ。図録とか本とか出してきて、そして見せるんです。だいたい研究者って限られてるけど。今はどうなんですか。

【聞き手】学生たちが来ては、コピーをがらがんとしていくので、急に本が傷んでしまいました。この数年。

【白 畑】そういうのががらがん来したら、研究所の研究なんかできないですよ。公開するということはいいことだけれども、やっぱり2部あるような本を見せるってぐらいにしないと、研究所が何もできなくなっちゃいます。それはしょうがないです。そんなにいちいち見てられないですものね。後から買えるものならいいけれども、補充がきかないのが美術史の本です。だから、やっぱりチェックしたほうがいいですね。見せる本はこれだけっていう。

【聞き手】難しい問題でね、そのへんは。

【白 畑】悪いとは思うんですよ、みんなに公開しないっていうのは。だけど、大本の研究所が研究ができなくなっちゃったらどうにもならないでしょう。だから、ここはしょうがないんですよ。やっぱり厳しくしたほうがいいです、それは。悪いけど。いくら悪口言われても。それはあくまでも図書館の仕事ですから。研究所は図書館じゃなくて、研究所なわけでしょう。

【聞き手】研究所には研究所にしかない本っていうのが結構たくさんあるんです。

【白 畑】貴重本がいっぱいあるわけです。だから、貴重本をどんどんはんこを押して、それは絶対に貸さないの。そういうふうになかったら研究する時に、どこにあるかって言ったって、困るでしょうからね。雑誌のバックナンバーなんてなくなっちゃったら絶対補充できないんですよ。

【聞き手】世の中の流れとして、社会に奉仕しろっていうのがどうしても大きくは出ますけど。

【白 畑】だから、研究所とかはそういう資料的なものを集めて、それを出版するとかでいいわけですよ、研究所の使命っていうのは。それ以上することないんです、何も。それををはっきりしておいたほうがいいんです。そのために図書館というのがあるんです。面倒でもあっちのほうへ行っ

て見てもらう。仕方がないですね。
今、時代が違うんですよ。私らのいる時はそんな心配はあんまり。閲覧者が来ても、人数も少ないし、来る人はみんな分かった人ばかり。研究所なんか怖くて行けませんよっていう。(笑)

【聞き手】わたしも怖くて入れなかったですね。今はだれも怖がらない。

【白 畑】 このごろは開いてるけど、前は呼び鈴がついてて、呼び鈴が鳴ったら、私らがあの階段をタッタ、タッタ下りていって開けに行くんですよ、お客さまが来ると。普通では開かないです。キーもないし。変わってしまったのでね、私がこんなこと言っても。

疎開について

【聞き手】 美術研究所が山形県の酒田市に疎開したのは、そちらのご出身だった白畑先生の関係からですか。

【白 畑】 いいえ、そうではないですよ。細川護立さんの関係で、本

間家の刀剣の研究家で本間順治という方がいらした。ずっと会長が何かつとめていらした。だから、その人に頼んだわけ。田澤さんとか、みんな仲間ですよ。酒田のほうだったら大丈夫だから、本間さんだったらいろいろ受け入れ体制もあるだろうからって言って、本間さんに頼んで、本間さんは受け入れてくれました。

【聞き手】 関千代さんの初仕事が疎開だったと言っていましたね。大変だったって。

【白 畑】 焼けなかったんだから、疎開しなくてもよかったんですけどね。

【聞き手】 上野の山は一度も空襲に遭わなかったのですか。

【白 畑】 上野の公園の中はないでしょう。ただ、寛永寺がめちゃくちゃになってね。

【聞き手】 酒田に行かれたのは。

【白 畑】 一番東京の大きな空襲されて、5月の25、6日ごろでした。

【聞き手】 先生のお話ではご自宅が焼けた。

【白 畑】 私の家が焼けたんです、明日発とうする前の晩に。

【聞き手】 向こうでは何人？ 17人ぐらい行かれたというふうに書いてありましたけど。

【白 畑】 向こうで雇った人もいます。地元でね。だから、行ったのは田中豊蔵先生に梅津さん、……。それから隈元さんがもう最後でしたね。関さん。鈴木さんって、これも亡くなったんですけどね。女の方は私と関さんと鈴木さんと3人で、あとは現地で雇いました。それから稗田一穂さんという絵描きさんで、戦後美術学校の日本画の先生になって、その人がまだ学校出たで、一緒に疎開してました。その人も資料集めのお手伝い。資料部の手伝いですよ、あの若い人は。

【聞き手】 疎開して東京に帰ってきた時、研究所に焼け出された東京外国語学校が入ってきたでしょう。あの建物に入ったんですか。

【白 畑】 入ってたんです。

【聞き手】 学校をやったわけではないんですか。



復興式 1946（昭和21）年5月

前列左から菅沼貞三、隈元謙次郎、田中豊蔵、田澤坦、下村英時、関千代、田上フミコ、上野アキ、白畑よし、毛利朝江、藤江金治、澤柳大五郎、黒川光朝、河北倫明、川上澄、久野健、岡畏三郎、村内、萩原定之

【白 畑】授業はできませんよ。だから、庶務のような人が入っていたんじゃないかな。偉い教授なんかあまり行ってなくて、英語の関係の人はいましたね。

戦後 復興式（昭和 21 年復興式の写真を見ながら）

【聞き手】このあたりになると、私もいくらか分かるようになってきます。

【白 畑】21 年でしょう、これ。酒田から帰ってきた時ですね。帰った後ですか、ここに毛利さんがいるから。だから、中根さんが辞められるぎりぎりの時だった。

【聞き手】上野さんは何年までに美術研究所に入ったんですか。

【白 畑】昭和 18 年ぐらいじゃないかな。これは和菓子屋の虎屋の家業を継がれた黒川光朝さんです。これは田澤先生のお弟子だったんです。それで田澤〔坦〕さんが部長になられたときに、引張ってきたんですね。これが藤江金治さんって、さっきの岩淵さんの後で会計にきた方です。それは田上さん。今、藤井さんっていうんですが、その方が連れて来た。連れて来たって、紹介したんです。これは川上さん。これが久野健さん、岡畏三郎さん。これが若かりしころの河北倫明さん。これは澤柳大五郎さんです。澤柳さんは、有名な成城学園の創設者のご子息。教育者の方です。この方がちょっと、そう長いことないですけどいられて。これは関さんですね。この人、みんないい人でしたよ。この人、どうしたか、あのお嫁に行く人がありましてね。これが下村〔英時〕さんですよ。

【聞き手】田澤先生っていうのは随分背が高かったんですか。

【白 畑】そんな高くはなかったですね。背が高いのは山田智三郎さん、熊谷宣夫さん、それからさっきの杉田さん。すぎちゃんと言ってね。随分背の高い。それから尾崎紅葉の息子夏彦さん。お話しに出ていましたよね。

美術史研究の変化

【白 畑】何かいろいろなこと言って悪いけど、美術研究というものが変わっちゃったんですよ、今。

【聞き手】そうですね。

【白 畑】古美術研究というのは。ほんとに我々の時はまだ一生懸命資料を集めて、これからやるっていう、そういう始まりでしょう。それがもう 50 年、半世紀たちましたから、一応ケリついたと。ケリついたっておかしいけど、そういう研究の道程が一応ピークになって、その後の研究方法っていうのが、いろいろ難しいんですよ、今。我々がやっていた時は何にもないんですよ。だから、間違いもあったかもしれないけれども、とにかくどんどん書こうというものが何かあった。今はみんなが書いてるから、その上になおかつ研究を積んでいくと思ったら、大変なことなんですよね。文献だってどれだけ集めなきゃならないかね。私、吉川さんに聞いたことがあるんですよ。フランスあたりはとにかく基礎研究というものは全部でき上がって、もう 18 世紀ぐらいに、19 世紀以前に、博物館に陳列してあるような名品というのは全部研究もできてるんだと。だから、女の人もやれるんですよなんて言われて、ああと思って。研究があるから、それを踏襲していけばいいので、それでほとんど向こうの館員は女の人が多い。ということをやったので、ああ、そうですかねって言った覚えがあるんです。

だから、ちょうど今そこへさしかかっているんじゃないですか。西洋美術にしたら、イタリアとか、

広いでしょう。だけど、日本美術というのは中国まで手を出したら、とてもじゃないけど、発掘なんかまた分野が違いますでしょう。だから、中国絵画とか中国彫刻なんかいっぱいあるんでしょうけどね。まだ新しく資料も分かってない。東洋美術と言ったって、ちょっと手を広げられない。でも、やる時間が長いんですよ、極端に言えば。そういう時代に来てるわけでね、今。だから、それをどういうふうに打開していくかというので、なかなかちょっと苦労はあるかもしれませんね。とにかく先がないから、あまり分からないけど。やりにくいだろうなっていうことは始終思いますよ。

【聞き手】そうですね。確かにやりにくい。

【白 畑】何にもない時にいたから、何やっても論文とか何かになるでしょうけど、もうまあ名品というのは、ついていますわね。その上に何をたてようかっていったら、大変だと思います。だから、もっと広げて風俗だとか文化とか、文化人類学みたいにやれば、そりゃ何かあるかも分かりませんが、それと美術の研究とちよっと違うんですよ。文献だけでやるんなら歴史家になれないけど。だから、そのへんをどう打破して新しい研究体制を立てていくかというのは大変だと思いますね。絵巻物の詞書きをひとつとっても可能性があるわけですしね。源氏絵とか文学的なものは国文学の人がちゃんと解釈もついてくるけれども、社寺縁起絵とか祖師伝とかの詞書なんて、だれも現代語に訳してくれないですね。鎌倉時代の文章とかね。

そんなことすらしてないんですよ、美術史というのは。そうすると、国文学のほうは自分の分野だって怒るでしょうけどね。何か宗教のことを少し言ったら、これは仏教のほうだって言われるでしょうね。(笑) それがないから、やっぱり一般の人が絵は見るけれども、全体が何だか分からないということもありうるんじゃないでしょうかね。だから、文学の人とタイアップして、今の新聞の文章ぐらいのところで直してみるとか、そりゃやさしいたって切りがありますけど、一応常識的に現代文に直してみるとか。そうでもしなかったら、もう格差ができちゃって、全体にね。

訳してみると、容易じゃないですけど。仏教のことがいっぱい出てくるし、それをどういうふうにもく伝えようかというのは、なかなか難しいわざですわね。仏教学者だとか、漢文があったら漢文の学者とか、いろいろなものが出てきますからね。学際的なネットワークをつくってね、一時やろうかって言ったことがあるんですよ、研究所にいた時に。だけど、立ち消えになりました。地味な仕事ですけどね。今はコピーがどんどんできるんですから楽ですね。印刷にお金がかかるって言ったって、昔ほど印刷費かからないですものね。

【聞き手】今、全部自宅で印刷ができる時代ですからね。

【白 畑】そうよ。私らの時代ではちょっと意味が違うし、出てきた資料を写し取るなんていうのは今はしなくてもいいんですから。何かそういう活路を見いださないと、何をやっていいんだか分からないでしょう。

付 記

このインタビューの後、白畑氏より「美術研究所資料室 覚書」をインタビューをした担当宛に送っていただいたので、以下にその全文を掲載する。

昭和三年八月一日新築完成した黒田記念館美術研究所に旧東京美術学校内矢代幸雄先生の研究室より移転した。その折の人員は矢代先生の外に田中喜作先生、尾高鮮之助氏、青山新氏（後和田英作の養嗣子となり和田姓）写真担当の雨宮幸男氏と私（同年七月入所）であった。

黒田清輝画伯の遺言に原き創設された美術研究所は矢代先生の年来の御希望により実現されるため黒田画伯の遺言執行人（東京美術学校長正木直彦氏外）等によって決定された。所属は帝国美術院であったので同院美術研究所と呼ばれた。建築内部も岡田信一郎氏設計で階上は黒田記念館としての遺作陳列室があり外に所長室、集会室等で、階下には研究室、事務室と、広い資料室と書庫であった。広い資料室の窓際の周囲には「バンドーン」という金属性の引出のついた写真や複製が収納されるように取付けられていた。部屋の中央から二分して右方は東洋、左方は西洋と大体わけてあった。

美術研究所の最大の目的は矢代先生が大英博物館の資料蒐集の方法を取入れ、美術研究の基礎となるように広く図書類は当然として写真、複製図版等を蒐集して各項目毎に分けて分類し、見出しのあるファイルに入れてバンドーンに入れることである。

昭和三年当時は吾国の美術史学界は未だ基礎がなく、出版図書も少なく、図版、論文等を掲載した定期刊行物は「国華」が殆ど唯一ともいえる。その他日本国宝全集、尚美資料等に図版と短い解説をのせる例があったにすぎない。

西洋の方は矢代先生の欧洲での御研究の折集められた図書、図版、特にルネッサンスのものはかなり研究所に寄附されたものが多かったようである。しかし東洋、殊に日本の方は図書も写真も図版も殆どないので、一から集めなくてはならない状態であった。幸に図書の方は中川忠順氏（中川千咲氏尊父）が昭和三年に逝去になられ、その図書と資料等を全部文求堂の世話で購入することになった。中川氏は東洋美術の権威で、岡倉天心と親交があり、その関係で日本在住のままボストン美術館の顧問をしていられた。晩年は日本美術史の講座を東京帝大「美学美術史」科を担当され、瀧精一教授と共に後進を育成された。それ故その蔵書は歴史、文学、中国も含めて充実したものであった。研究所図書中「中川文庫」の朱印のあるのがそれである。それ故図書については東洋、日本は当時としては役立つものであった。

しかし作品の図版については中川氏蔵有の写真類は、未だ写真は普及せず費用も高く手の届かないことで僅かであった。とにかく研究所は先づ西洋より日本美術研究に資することが眼目であったので、早急に主要な美術作品の複製を集めることが必要とされた。その手初めとして「国華」の揃ったものを二部購入して、一部は保存用とし、もう一冊は解体して一点づつを台紙に貼付けることにした。台紙の裏面には必要事項を書き入れ各々分類してバンドーンに並べて入れた。大分類は絵画・彫刻・工芸・建築・書蹟・その他（考古学）であるが、先づ絵画が中心となった。その分類については東洋は日本、中国、朝鮮、印度等であるが田中、尾高所員の指示によって余り細く部類すると、却って出し難いということで、日本では大体室町時代以前の作者の少ないものは品目別にし、仏画・肖像画・絵巻類・その他にし、仏画は尊像別、肖像画は天皇族・公家・武家・僧侶（頂僧を含む）・その他とした。室町時代以後は大体作家別をアルハベット順にし、作品の多い例では適当に山水・花鳥・人物画等小ファイルにさらに分類し、取り出し易いような便宜本位にして、利用する人に大

体覚えて馴れてもらうようにした。

図書の方は原簿に記入し、カードを作り図書館の分類システムではなく、図版の分類に準じたものと、図書名で索引するものと両用作ったと思われる。これも後に一般研究者等に図書資料を公開することになってからである。しかし大方は図書も図版も資料部担任の人が外来の研究者に必要なものを聞いて提供するようになっていた。当時外部の研究者の要望は少なく、研究所内部、或は関係学者の為の利用が殆どであった。

とにかくはじめは図版を充実することに専念したが、昭和五年研究所が文部省の附属になるまでは写真にも専門の技師は存在しないので、特に図版が増えるという程ではなかった。昭和五年頃から研究所も所員が増し、渡邊一、正木篤三、菅沼貞三、熊谷宣夫氏等を迎え、充実した。研究も各分野に亘ることになった。そこで機関誌美術研究の発行を企画され、同七年に第一号の発刊となったが、その編輯の為に写真部に中根勝氏が入所され、外部に向って写真撮影が行われたので、その撮影による図版も段々増して来たわけである。資料がある程度集積されたことで、日本絵画の作家について集中的に資料を整えて、やがて発表することになったのが昭和十一年頃と思われる。総目録と称し、やがては代表的な画家をすべて挙げたいという意向であったが、先づ二十五項目を選んで、その画家について世に知られている作品・文献・印譜などに亘って蒐集する仕事に着手した。これは主に渡邊一氏の担当であった。

二十五項目は黙庵を別にして室町時代から江戸時代に至る画家で、いわば日本の代表的画家であるが、その二十五人については果たして正しいか、今私の記憶もはっきりしていない。しかし大方は当たっているように思われる。黙庵・周位・明兆・如拙・周文付秀文・雪舟・文清・靈彩・周徳・祥啓・正信・元信・永徳・等伯・山楽・宗達・光琳・大雅・玉堂・蕪村・応挙・抱一・文晁・畢山・椿山等でその一部は渡邊氏によって美術研究に発行された。

とにかく当時文献上に知られることを網羅し、落款印譜類もすべて集め、もとより雑誌その他図録等に掲載されている作品について複写し、資料となる関係文献も知られる限り集めることで、売立目録の切抜も必要となる。研究所に売立目録は全部揃っていないので、先づそれを欠落なく揃える必要になって、主に神田、その他の古書店をさがし求めた。売立目録に出た二十五項目画家はその信偽に係りなし一応集めることであった。売立目録は両面に刷ってあるので三冊同じものを揃え、一部は保存用、二部を解体して、総目録用のカードに貼り、売立の家名と、その年月日をたしか活字で捺した。ボール箱に作家別に分類し、細分類はバンドーンに準じたと思う。雪舟などは殊に数が多く、しかも印刷が鮮明ではないので、それほど役立つとも思われないが、総目録の堅前として、すべての資料を集めることに原いたわけである。

二十五項目の画家でも遺作品の少ない分は問題はないが、例えば雪舟のように真偽併せて多数あるものについては問題があるわけで既に真作として定説のあった作品は一応別で、研究者の間にも二説に分かれる作品に検討を加えるのも、総目録の目的であった。それ故手はじめに雪舟を取上げることになった。研究所の所員はもとより田中豊蔵・脇本楽之軒・田澤坦・藤田経世氏たちも集まっていたので、熊谷宣夫・渡邊一氏等が主となり、一々そうした問題のある点と共に、一通りは既に真作とされている作品についても区別を示す意味でそれをAとした。真作とはいえないが弟子たちの模本でしかもすぐれた作品をBとし、その他はCと分けたように記憶している。この品定会は実に議論が湧き、活気に充ちたものであったのを印象的で忘れ難い。いまのように録音でもで

きたとしたら、後世の学徒の大参考になったと思われる。しかしこの品定会はすべての項目に及ばず、二十五項目総目録も渡邊氏の応召によって担当者がなく、資料部の私が気付いた資料を集める程度であった。渡邊氏の論文がその成果の一端を示しているわけである。その後研究所の資料を山形県酒田町に疎開することになり、終戦後再び資料は戻って来たわけであるが、総目録は戦後の種々の事情で中止となった。

稗田一穂インタビュー

2009（平成 21）年 4 月 14 日 於東京都世田谷区稗田邸

聞き手：中村節子、田中淳

稗田一穂氏（1920 年～ ）略歴

同氏は現在の和歌山県田辺市に生まれる。大阪市立工芸学校図案科を経て、1939（昭和 14）年に東京美術学校日本画科に入学。43 年に同学校を卒業。44 年 6 月から翌年 12 月まで、美術研究所の嘱託として勤務。研究所在職中には、疎開の仕事にあたり、山形県の観音寺村において職員であった梅津次郎とともに、美術研究所から搬送されてくる資料の受け入れ作業にあたった。45 年 8 月に応召、奈良の部隊に入隊することになっていたが、山形県酒田市からの帰路、終戦となる。戦後は、46 年の日展に「東北の秋」が初入選し、山本丘人に師事して創造美術、新制作協会日本画部に出品、さらに 64（昭和 49）年には創画会結成にあたり、会員として参加し、以後出品を続けている。また、70（昭和 45）年に東京藝術大学助教授、72 年から 88 年まで同大学教授として後進の育成にあたった。82 年に「稗田一穂展」（和歌山県立近代美術館）、96（平成 8）年に「稗田一穂―日常にそえる詩情」展（世田谷美術館）、2002（平成 14）年に「稗田一穂展」（富山県立近代美術館）など、各地で回顧展が開催されている。2001 年には文化功労者に選ばれた。

美術研究所の嘱託として

【聞き手】先生が研究所にいらした時期のことですが、昭和 19 年の 6 月に入られている。

【稗 田】そうですか。18 年の 9 月に学校を繰り上げ卒業で出ました。それから大阪市立工芸学校に嘱託教師で行きましたが、大阪で中学の教師をやっていたらとても勉強できないので、3、4 カ月で辞めたんですよ。（笑）僕の 1 年上の月岡榮貴さんにいろいろ技巧のことなどを聞いていた関係で、もう 1 回東京に戻ってどこか勤め口がないかと伺ったところ、月岡さんが関千代さんを知っておられ、関さんの紹介で美術研究所に入ったわけです。

【聞き手】美術研究所に入られてなさったお仕事は？

【稗 田】図書係です。図書係の一番上に白畑よしさんが主任でおられて、蔵書の裏の番号を付けたりしていたんです。

【聞き手】黒田記念館のこのお部屋でしょうか。

【稗 田】そうそう、この別室のほうに事務室みたいなのがあったですね。

【聞き手】お仕事をされていたのは、多分、音楽学校の方の広いお部屋ですよな。

【稗 田】そうです。広い部屋でした。



稗田一穂氏（東京都世田谷区内のご自宅にて 2009 年 4 月 14 日撮影）

【聞き手】 そうすると資料室ですね。

【稗 田】 階段の右の方です、左の方は隈元〔謙次郎〕 さんとかいろいろな方の研究室みたいな。

【聞き手】 あの当時の研究員、職員で先生が会ったのは。

【稗 田】 隈元さん、梅津〔次郎〕 さん、それから田澤坦さん、河北倫明さん。それから菅沼〔貞三〕 さん。

【聞き手】 関先生はもういらしたんですか。

【稗 田】 関さんはその下の助手でおられましたね。

【聞き手】 隈元先生や河北さんは。

【稗 田】 1階の入ったこちら側。河北さんなんか、こちらの道路に面した部屋におられた記憶があるけど。この真ん中の辺りに隈元さんとか、菅沼さんがおられて。

【聞き手】 お勤めのときは、もっぱら1階でお仕事をなされて、2階に上がられるようなことは。

【稗 田】 ないですよ。僕は図書係でここばかりだから、あまり行ったことがない。

【聞き手】 囑託というのは毎日行くものですか。

【稗 田】 はほとんど毎日行きましたね。朝9時に行かなければならないのに、僕はあまり9時に行かなくて、空襲のある日なんか、空襲だからちょっと遅れてもいいやなんて思ったら、僕より遠い国分寺の上野アキさんが出ていて、僕が近い吉祥寺なのに、遅れたっていうのは悪かったなと思った覚えはあります。(笑)

疎 開

【聞き手】 昭和19年の6月に入られて、8月にはもう疎開を始めていますね。夏に作品を疎開させたんですね。

【稗 田】 そうですね。暑い覚えがあります。東京美術学校の藏品と一緒に木炭燃料のトラック。木炭だから煙がいっぱい出ますよね。それで一緒に行った西田〔正秋〕 という芸大の美術解剖学の先生。あの人の顔が真っ黒にすすけたことを覚えている。僕もすすけたんだと思うけど。

【聞き手】 トラック1台で乗りました？

【稗 田】 そんなにたくさんじゃなかったね。何台出たのかもわかりませんが。

【聞き手】 先生がここにお勤めのときに、2階に黒田記念室がありましたよね。黒田の絵を並べている部屋。

【稗 田】 そういう記憶があまりないね。上に絵が並んでいるのを見たことがない。そう上へ度々行ったことはないですよ。

【聞き手】 昭和19年の6月、8月といたら、東京も、もう空襲が始まっていたでしょう。

【稗 田】 そうですね。僕は美術研究所で空襲は度々見ましたよ。屋上へ上がると、よく敵の飛行機がずっと来るのが見えますからね。そうそう。倉田〔文作〕 さんから誘われて。「おい、見よう、見よう」って。(笑) ここから見ると、浅草のほう、ずっと向こう、千葉から飛行機が入ってくると、急に向こうの飛行機がずっと上へ上がるんですよ。高射砲が届かない範囲にずっと上へ上がるんですが、そのずっと上へ上がるのがよく見えた。今の博物館のこちらに、池、噴水みたいなものがありますね。あそこらは昔、全部芝生で、僕が学生時代はまだ芝生だったけれども、そこに高射砲を2台据えて。研究所が疎開するころは高射砲みたいなものがありましたね。ここからよく見ま

したよ。そして、浅草のほうなんか空襲されたときに、関さんは顔を真っ黒にすすけて、研究所へ、おやじさんかな、家族と一緒に来たのを覚えている。

【聞き手】 焼け出されたんですね、関先生は。それで戦後も多分、研究所にしばらく住んでいた。白畑先生も住んでいた。みんな住んでいたと言っていた。上野先生も。この写真は、西多摩の絵を疎開したところです。

【稗 田】 東京の、五日市か何か。

【聞き手】 そうです。ここはトラックに乗っ

ていかれているんですね。これはいつの写真なんだろう。昭和19年には違う。この疎開した後もう1回行っているということでしょうかね。冬だから。昭和19年の冬。

【稗 田】 このとき東京美術学校は、上野さんが校長だったんですね。僕、上野さんには会ったことがないですね。これは柳澤さん。前田泰次さんもここにおられたんですか。これは芸大の先生をやっていたわけですか。

【聞き手】 これは多分、美術学校組と研究所組が一緒に行っているの、多分前田先生は美術学校のほうでいらして。ところで疎開をするときの荷造りというのは、自分たちでやったものですか。

【稗 田】 荷造りはみんな業者ですよ。だから、僕なんか、手を下して荷造りした覚えはない。これとこれとこうやってとか、何とかってというのは、白畑さんなんかやったんでしょうね。僕はあまりそういう記憶はない。だから、することがないから、ここら辺に座って、一日中、本ばかり見ていたり。(笑)

【聞き手】 でも、嘱託だから、給料はもらえるわけでしょう？

【稗 田】 給料といたって、そんなに十分なものではないけどね。

【聞き手】 白畑先生というのは厳しい方でした？

【稗 田】 いや、別に厳しくも何でもなかったですよ。怒られたこともないし。

【聞き手】 先生が研究所で嘱託をされていた時期というのは、それこそ本業の絵の制作というのはどうされていたんですか。

【稗 田】 このころは絵の制作はほとんどしていません。毎日研究所に出なければいけないから。

【聞き手】 先生、片一方でお勤め先は美術研究所ですけども、山本丘人先生のところには通われていたんですか。この間、山本さんとはお付き合いはありましたか。

【稗 田】 研究所に行っているときはどうだったかな。丘人先生のところを訪ねていったのは、確か研究所へ行って、疎開する前だったと思うね。だけど、先生のところを訪ねていって、空襲警報が鳴ったのを覚えているから、終戦前ですね。

【聞き手】 山本丘人先生のところへ行かれると、ほかの絵描きさん、例えば高山辰雄さんとか、そういう方もいらしていたんですか。

【稗 田】 研究会を一緒にやるというときに誘われて、そのとき初めて高山先生に会ったり。そう



美術品疎開先の五日市谷合家にて

左より前田泰次、田澤坦、一人おいて田中豊蔵、隈元謙次郎、上野直昭、田中喜作、澤柳大五郎（『上野直昭日記 東京芸術大学百年史東京美術学校篇第三巻別巻』ぎょうせい、1997年より）



山形県酒田に疎開した、文部省美術研究所にて
左より稗田一穂、萩原 梅津次郎（「稗田一穂展」
カタログ、世田谷美術館、1996年より）

いうお弟子さんの集まりみたいなのをつくったのは終戦後です。これ、ご存じかと思うけれど。世田谷美術館でやったときの展覧会のカタログ、ここに酒田にいったときの写真が掲載されています。

【聞き手】本間家ですか？

【稗 田】これは梅津さんと、萩原さん。写真担当の人。

【聞き手】研究所が酒田に疎開していたとき、職員の人は何をしていたんですか。本は全部箱から出したんですか。

【稗 田】こも包みで随分たくさんあったね。この部屋以上の分量があって、そこへ一応届いて、そこから荷車でまた1時間半ぐらいの観音寺村へ疎開して。向こうで荷をほどここともなしに終戦になりましたね。

【聞き手】これは昭和20年ですよ。5月、山形県酒

田市、本間家倉庫に疎開とあります。

【稗 田】そうですね。このぐらいでしょうね。向こうに行って、ほかの人は知りませんでしたね。梅津さんと僕だけで、萩原という人は知っているけど、ほかの人はどうなっていたか知らないですね。

【聞き手】一緒に酒田に行かれている方が、田中所長と田澤担さん、隈元さん、菅沼さん、白畑さん、梅津さん、あと関さん、鈴木さん、萩原さん、平沢さん、諸星さんが酒田に行ったと。

【稗 田】ほかの人は知らない。

【聞き手】みんな同じところに下宿したわけではなく、みんなばらばらのおうちに。

【稗 田】どうでしょうかね。資料の一部が行くのは、恐らく観音寺という1カ所だけだったと思います。酒田のほかにはね。そこへは梅津さんと僕だけ。それは前の村長さんのうちだって言っていました。そこの蔵を借りて、そこへ疎開した。

【聞き手】トラックですか、それとも荷車？

【稗 田】そう、荷車。だから、暑かったことは覚えています。僕は戦後になって、初め日展に出していましたが、「東北の秋」とか、「羽黒」を描いたのは、こっちに行ってから、その休みに羽黒なんか写生に行った。そういうことで羽黒の絵を描いたんです。

【聞き手】これ、そういうことなんですか、この絵は。

【稗 田】これは向こうの庄内平野で、この百姓の姿が非常にきれいだった、美しかったからね。観音寺の宿屋で、ちょっとそういう服装をして、娘さん、描かせてもらった。

【聞き手】ということは、先生は画材を持っていかれたわけですね。スケッチブックとか。

【稗 田】スケッチブックとかはありましたけど。簡単なクレパスみたいなものと。

【聞き手】その基になっているわけですか。こういう、向こうの地元の人がモデルになって、それをスケッチするやうゆとりというか、時間はあったわけですか。

【稗 田】そうですね。日曜日とか、休みはあるので。

【聞き手】酒田にいらっしゃるとき、月曜日から毎日仕事としては、何をしていたんですか。

【稗 田】酒田に行って、観音寺に行って、それで荷ほどこして、整理する予定だったのが、荷ほどきした覚えがないからね。何をしていたんだろう。(笑)まだ次々来るのを受け取るような状態だったのかな。運ぶだけ。

【聞き手】それだけ本が多かったというわけですね。

【稗 田】そうですね。多かったですよ。

【聞き手】車両5台分って書いてありましたから。

【稗 田】閲覧室のああいうカード、あの分だけでも相当あるでしょうね。

【聞き手】本だけじゃなくて、昔、研究所には鉄製の大きいキャビネットというか、引き出しみたいなのがいっぱいありました。

【稗 田】持っていったかもわかりませんよ。

【聞き手】それだと本当に荷物を整理するだけで、瞬く

間に2カ月は過ぎる。(笑)酒田に行っている間は、東京には一度も戻れなかった？

【稗 田】戻りません。そんなに長いこと酒田にはいなかったと思うけど。

【聞き手】向こうで信太金昌という日本画家の方と一緒に働いてらしたのですか。

【稗 田】それは日本画の僕の1年下です。僕が勤めているというので、何かのついで、僕の後でちょっとだけしましたけど。だから、僕はこの人と一緒に働いていないですよ。辞めて、自分の郷里の秋田に帰ったかな、信太さんは。私が酒田で召集令状を受けたというのを聞いて、秋田から来て送ってくれましたけど。そのとき秋田で『魁新報』という新聞社の記者をやっていた。ああいう性格では、記者なんかとてもできるような性格じゃなかったけど。後で聞いたら、日本が戦争に負けて、講和条約を受けたということを知っていたらしいんです、新聞社だから。そういうことを全然言わないで、万歳、万歳で送っていたからね。

【聞き手】白畑先生のこの文章を読むと、皆さんが同じところでたくさんいたようなイメージでしたが、違いましたね。上野アキさんと先生は一緒に働いていないわけですね。

【稗 田】あまり印象にないね。僕と行き違いと思ったけど、そういう空襲のことで知っているから、確かにちょっとしばらく一緒だったんですね。美術研究所で会った覚えはあまりないですね。

【聞き手】梅津先生が一番親しかったという感じ。

【稗 田】一緒に観音寺に行って、寝泊まりしましたからね。

【聞き手】そういうときは、梅津先生はもっぱら勉強されていたんですかね。

【稗 田】よく知らないね。どういことをやっていたのかね。

【聞き手】看板は出していたんですね。「文部省美術研究所」と。

【稗 田】何か書いてありましたね。

【聞き手】墨書の板看板だった。あちらで疎開した本間家というのには行かれたことがあるんですか。



「東北の秋」1946年 和歌山県立近代美術館蔵

【稗 田】 ないです。そこの研究所へちょっと寄って、すぐ観音寺。だから、酒田に泊まったこともないです。

【聞き手】 そのときは酒田も空襲があったんですか。

【稗 田】 いや、なかったですよ。そのずっと前です。酒田では空襲はあったんですか。僕は観音寺村で召集令状を受けて、奈良の連隊に行くときに、汽車で直江津回りですずと行って。新潟のちょっと手前で長いこと、6時間ぐらい汽車が動かなかった、空襲で。新潟駅でおばあさんが乗ってきて、僕の座席の前に座って泣いているから、どうしたのって聞いたら、日本が負けたっていうんですね。ああ、やれやれと僕は思った。(笑)それで初めて終戦を知ったんですよ。だから、奈良の連隊に行く必要がなくなって、壺坂の、疎開先のうちへ帰ったら、役場から召集令状、桃色でしたけれども、それを取り返しに来て、そういうことがありました。だから、ずっと奈良の壺坂で、終戦になってから、1カ月近くそこにいたような気がするけどね。

【聞き手】 電車の中という、本当に1日前ぐらいに出発しているんですね。(笑)

【稗 田】 そうです。玉音放送があったのを聞いた。おばあさんが乗ってきて、日本は負けたって泣いていたから。

【聞き手】 本間家の倉庫に入ったのは何が入っていたんだらう。先生は大沢村というのは行かれたことはないですか。観音寺と大沢と分かれたみたいなんですけど。

【稗 田】 そうですか。大沢というのは知りません。

【聞き手】 みんな、ここのこの人たちは、ばらばらだったんですか。観音寺村にいたのは、梅津先生と稗田先生と2人だけだったんですね。

【稗 田】 そうですね。大沢村というのは初めて知りました。

【聞き手】 先生は昭和20年の12月に美術研究所を辞めたことになっています。

【稗 田】 美術研究所を辞めたのはね。終戦になって、奈良に帰って、それで僕は大変悪いけど、学者になるつもりで研究所に行ったわけじゃないから、どこかに勤めていないと徴用で引っ張られるから。だから、戦争が終わったら、そういうことはなくなったから、もう美術研究所を辞めさせてもらおうというので、それで辞めたんですよ。

終戦後のこと

【聞き手】 終戦後もお住まいは吉祥寺に。

【稗 田】 そうですね、下宿ですよ。実家が大阪から奈良に疎開したから、そこへ帰って、奈良だから奈良の連隊に入隊ということで。

【聞き手】 終戦後は研究所には戻られなかった？

【稗 田】 1日ぐらいあいさつに行った覚えはありますね。

【聞き手】 終戦後は？

【稗 田】 美術研究所を辞めてからは、進駐軍の奥さんに絵を教えていました。油絵とか日本画とか。進駐軍の奥さんが4、5人グループをつくって、そこへ僕が教えに行って。その人たちがお金を出し合って、それを僕がもらってくる。

【聞き手】 どなたの紹介だったんですか。

【稗 田】 それは吉祥寺に下宿していたときに、同じうちに進駐軍の婦人の宿舎の舎監をやってい

る婦人がいて、その人が私に、向こうの奥さんで絵を習いたい人がいるけれども、あんた、教えないかというので、それでのこのこ行ったわけですよ。それが4、5人、初め、グループだったのが、割合評判がよかったのか、だんだん増えてね、そういうグループが5、6組になった。ワシントンハイツとか、こちらが出張して行って、それで随分生活が助かりましたね。(笑) そういうところで背広をもらったりして。(笑)

矢代幸雄について

【聞き手】 学生さんのときですか、矢代幸雄先生の授業を受けられているんでしょう？ それは何の授業ですか。西洋美術の授業ですか。

【稗 田】 特殊講義で、水墨画の研究という。

【聞き手】 それは週1回あった？

【稗 田】 そうですね。学校の講義の中で一番面白かったというか。それがまとめたのは岩波新書に。あれの根本の講義です。

【聞き手】 もう先生が東京美術学校の学生さんの時代から、矢代先生のことは面識があったわけですか。

【稗 田】 そうですね。だけど、矢代先生との間は、学生の時代は、ただ講義を聞くだけだったんですけどね。非常に東洋画、日本画に興味を持ってもらっているというのは、頭にありましたから、創造美術ができて、僕らの、何か研究会をやって、月に1回何かしなければならぬというときに、矢代先生にお願いして、博物館の講堂を借りて、2、3回講義をしてもらったことはあります。

【聞き手】 美術研究所の囑託になって軽井沢に行かれたのは、昭和19年の冬としますよね。矢代先生はよく研究所にいらしていたんですか。矢代先生は2階で何かされていたのですか。

【稗 田】 それの助手というか、手伝いをしたのが倉田さん。倉田さんは青山学院か何かだったかな。矢代先生のお手伝いをしていた。(注：昭和15年に設立された東洋美術国際研究会は、黒田記念館の2階で業務を行っており、同研究会に矢代は関与していたと推察される。)

【聞き手】 それは終戦後の話ですか。

【稗 田】 戦争中でしょうね。外国人は軟禁状態という。(注：戦中期の軽井沢には、スイスなどの中立国、非交戦国の臨時公使館などがあった。)

【聞き手】 軽井沢で、矢代先生の英語での講演で、先生はスライド係だったわけですよね。何人ぐらい聞いていました？

【稗 田】 さあ、40人ぐらいいたかな。割合多かったですよ。40、50人のような感じがしたけどね。

【聞き手】 それは日本の美術の話だったんですか。

【稗 田】 そうですね。日本の美術が主だったと思うね。西洋画のスライドはあまり覚えていないね。だけど、日本のこれこれ、というの覚えていないけど。

【聞き手】 矢代先生というのは、日本語で普通に会話するときと英語で講演されるときと、感じが全然違いますか？

【稗 田】 非常にすらすら話していましたよ、英語で。僕なんかが学生さんのとき、講義のときに言っていたけど、あの人、ボッティチェリの研究者でしょう？ イギリスでボッティチェリの本を出して。日本人で外国でそういう本を出すのは非常に難しいと。しかも戦争中〔満州事変・支那事変〕

でしょう？ 日本というのは向こうではあまりいい感じを持たれていないということをちらっと聞いた覚えがある。矢代さんは水墨画の研究のとき言っていたけれども、向こうでずっと見ていて、日本の美術はどう見えるか、それが心配で、帰ってきて、一番初めに「信貴山縁起」を見て、日本の美術というのに対して自信を持ったというようなことをおっしゃっていた。そういう世界の中で日本の立場というのを、僕らも戦中のああいふ教育でやられていましたから、全然知らなかったけど、矢代さんはそういうことをちらっと、僕たちに差し障りのない程度にちょっと言われた。

【聞き手】 軽井沢で外国の人たちを相手に英語で話すときは、当然憲兵さんかおまわりさんか付いているわけですね。

【稗 田】そういうのは見なかったね。どこかに隠れていたのかもわかりませんよ。多分いたでしょうね。その翌日かな、「稗田君、ちょっと散歩に行こう」と言って、熊野平まで行って、それでいろいろイタリアでの話を、ジョットの空の青がとてもきれいだったというような話をいろいろ聞いて、僕はそういうのを見たいなというような気持ちでイタリアに行きましたけどね。

【聞き手】 やっぱり日本の空と違っていましたか、イタリアの空は。

【稗 田】 外国へ行くと、色が鮮明ですね。だから、カメラに撮っても、下手くそでもうまく撮れるような気がする。(笑) 学者というのは、非常に理論的でないと駄目なんでしょう？ 絵を見た、その人が感じる感受性というか、そういうことが第一じゃなくて、学者というのはデータが基本で、例えば応挙の「七難七福」だったかな、これはこういう作品とこういう作品の間にある作品だから、価値があるというようなことを、ある学者の人は言っていたけど、僕から見たら、それはつまらない絵なんですよ。だけど、そういう間の作品で貴重だという。そういう見方はあるのかなと思いましたね。だから、美術研究所なんか、鑑定みたいなものを持ってきたときも、先にこのぐらゐの落款の、どういう落款を使っているか、その人の、そういうのをまず持ってきて、それと首っ引きにその絵を見てね。だから、絵を見るんじゃないかって、そういうことを真っ先に見るのは、これは違っているのじゃないかなというような気もしたけどね。それを比べると感覚的に非常に、見ることに重きを置いているというのが、僕は矢代先生の魅力だと思って。

【聞き手】 矢代先生というのは、全体はもちろんご覧になりますけど、細かいところまでご覧になる。ディテールなども。ものすごく細かいところまで。あれはちょっとヨーロッパの学者と違うんですよ。ヨーロッパの学者は、すぐ構図がどうのとか、モチーフがどうのと言うけれども、先生は手の指の先まで細かくご覧になってる。ポッティチェリの独創性って、そういうところにあるんですね。ヨーロッパの学者とはちょっと違う物の見方ですね。それが日本だとか、東洋美術にも生かされていると思うんですよ。東京美術学校での矢代先生の講義というのも、ひたすらお話をなさるだけですか。実際の作品を前にしてとか。

【稗 田】 いや、そんなことはない。留学していて、南京虫に食われた話とか、そういう話が半分ぐらい。あれは下からずっとはい上がってくるんじゃないかって、上から落ちてくるよとかって。(笑)

【聞き手】 大和文華館の矢代先生とはずっとお付き合いがあったんですか。

【稗 田】 創造美術をやってから、そういう研究会で矢代先生に2、3回、講演をお願いして、そのぐらいですけどね。僕がお礼に行ったり。

【聞き手】 それは大磯のお宅まで。

【稗 田】お礼に行ったり、交渉に行ったりしていましたけど。晩年は頭が少し混乱していたような。同じことばかり言われて。「ところで、君、誰だったっけね」って。(笑)

【聞き手】矢代先生以外だと、隈元先生とか、河北先生とはずっとその後、戦後もずっとお付き合いをされていたんですか。

【稗 田】いや、隈元先生なんかは、僕が美術研究所を辞めてからは、一切知らないし、河北先生は研究所にいるときはほとんど話したこともないし、2、3回顔を合わせたかな。

【聞き手】先生、今日は長い時間にわたって、本当にどうもありがとうございました。

付 記

このインタビューをした後、稗田氏からお手紙を頂戴した。その一節には、当時のこと、矢代幸雄のこと等が懇切につづられており、貴重な証言として引用させていただくことにする。

……思いがけなくも美術研究所に勤務していた頃の話で拙宅を御訪ね頂き何の御もてなしも出来ないま、うろ憶えにも近い話を致しまして恐縮しています 戦時下の事で研究所の先生方も勉強どころで無かつたこと、推察していますが私の様な者をよく採用して頂けた事を感謝していました

その節置いて下さいました記録や白畑さんの文章等拝見して私の勤務の期間等正確に解りました 白畑さんがどの様な研究をされていたのか初めて知り興味深く読ませて頂きました 澤柳先生を召集で御見送りに行つた事等とつくに忘れていましたが記録を見てその様な事あつたかと淡い記憶の様な思いがしました 澤柳先生はずつと後に私の作品を見た感想を御寄せ頂いたことを思い出しました

矢代先生の上野公園の路上で二、三回逢つたのは戦後の事も交つていると後から思つたりしています 然し戦中に軽井沢の講演に倉田文作さんと一所に御供してその翌日雪の熊の平の峠に先生からさそわれて散歩してジョットの壁画のすばらしさその空の青い美しさを唯の一般的なことでなく先生自身の実感がヒシ、と私に伝わつて来て感動しました 私は何時かその壁画を見たいと熱望することになつていた事を思います

物故研究員等略歴

凡 例

- (1) 『資料編』掲載の職員名簿に記載された職員のうち、2006（平成18）年3月末までに物故した以下の者を対象とする。
 - 1) 当研究所刊行の要覧・年報・概要、管理部人事記録等の公的記録に掲載された当研究所の研究員及び専門的な知識、技術をもって研究の補助を行った者。
 - 2) 当研究所の設立に関わった遺言執行人、設立準備委員等。
 - 3) 東洋美術国際研究会の研究員。
- (3) 配列は氏名の五十音順とし、生没年月日を附した。
- (4) 生没年の表記は西暦とし、月日不詳の場合は、不明と記した。
- (5) 各研究員等の在職期間は、典拠資料により『資料編』掲載の在職期間と異なる場合がある。
- (6) 東京文化財研究所は、下記に挙げるとおり、組織改編により名称変更を行っているが、原則本文では「当研究所」で統一した。

～1930年6月27日 美術研究所

1930年6月28日～1937年6月23日 帝国美術院附属美術研究所

1937年6月24日～1947年5月2日 文部大臣直轄美術研究所

1947年5月3日～1950年8月28日 国立博物館附属美術研究所

1950年8月29日～1952年3月31日 文化財保護委員会附属美術研究所

1952年4月1日～1954年6月30日 東京文化財研究所

1954年7月1日～2001年3月31日 東京国立文化財研究所

2001年4月1日～2006年3月31日 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所

物故研究員等一覧

(五十音順)

氏 名	在職期間	氏 名	在職期間
浅野正俊	1929	倉田文作	～ 1942
新規矩男	1943.9.15 ～ 44.6.30 / 1947.10.21 ～ 59.3.31	倉田平吉	1935 ～ 43.1.15
雨宮幸男	1929 ～ 31	黒川光朝	1941 ～ 49
池田弥三郎	1952.10.1 ～ 66.3.31	兒島喜久雄	1932.9.30 ～ 43
石川陸郎	1956.12.1 ～ 93.3.31	小山富士夫	1941 ～ 43
石澤正男	1940 ～ 47.2	今日出海	1929 ～ 30
伊東卓治	1947.5.3 ～ 63.3.31	坂本万七	1947 ～ 49
今泉篤男	1947 ～ 48	澤柳大五郎	1942 ～ 49
岩崎友吉	1952.4.1 ～ 74.5.31	島田修二郎	1948.7.1 ～ 51.11.30
内田昭人	2002.4.1 ～ 05.8.16	下總覚三	1958.1.16 ～ 62.7.9
梅津次郎	1935.5 ～ 49	下村英時	1944.2.29 ～ 47
浦山政雄	1952.10.1 ～ 74.4.1	須賀利雄	1935 ～ 43
江本義教	1958.1 ～ 73.3.31	菅沼貞三	1930. 1 ～ 48.12.31
江本義理	1952.4.1 ～ 87.3.31	鈴木友也	1953.1.1 ～ 53.2.1 / 1981.4.14 ～ 87.3.31
大串純夫	1939.4.1 ～ 55.7.14	関野 貞	1930 ～ 33
岡田三郎助	1926.12 ～ 30	関野 克	1952.4.1 ～ 78.4.1
岡田信一郎	1926.12 ～ 30	田澤 坦	1942.8.29 ～ 47.5.2 / 1959.6.4 ～ 62.4.15
大給近清	1926.12 ～ 44.5.31	立田三朗	1942.1.15 ～ 46.7.31 / 1962.10.1 ～ 70.1.1
尾崎夏彦	1932 ～ 34	田中一松	1952.10.1 ～ 65.3.31
尾高鮮之助	1927.11 ～ 33.3.23	田中喜作	1927 ～ 45.7.1
小高根太郎	1935 ～ 42	田中豊蔵	1930 ～ 41 / 1942.6.29 ～ 48.5.10
加藤成之	1952.10.1 ～ 57.1.16	谷 信一	1947 ～ 48
金子重隆	1942 ～ 45.12	戸部銀作	1952.10.1 ～ 66.3.31
樺山愛輔	1925 ～ 30	富永惣一	1930 ～ 43
川上 涇	1946.2.28 ～ 82.4.1	豊岡益人	1934 ～ 42.5.28
河北倫明	1941 ～ 52.10.16 / 1953.4.1 ～ 65.5.31	仲井幸二郎	1966.5.1 ～ 88.3.31
岸辺成雄	1952.10.1 ～ 66.3.31	永雄ミエ	1948.9.3 ～ 75.5.5
久野真自	1930 ～ 40	中川千咲	1934.4.18 ～ 72.3.31
熊谷宣夫	1930.1 ～ 34.9.29 / 1944.10.1 ～ 62.3.31	中根 勝	1930 ～ 43
隈元謙次郎	1932.6.30 ～ 66.3.31	中村伝三郎	1947.10.1 ～ 78.4.1
久米桂一郎	1926.12 ～ 30		

氏 名	在職期間	氏 名	在職期間
橋本弘次	1946.6.15 ~ 91.3.31	宮 次男	1955.9.1 ~ 87.3.31
林 真彦	1937 ~ 42	毛利 登	1962.10.1 ~ 63.3.31
福井利吉郎	1932.9.30 ~ 48	茂木 曙	1954.7.1 ~ 89.3.31
福原鐸二郎	1925 ~ 30	望月信成	1931.4 ~ 35.3.31
福山敏男	1947 ~ 59.4.16	持丸一夫	1942.10 ~ 54.3.18
藤懸静也	1938	守中裕幸	1939.8.31 ~ 43
藤島武二	1926.12 ~ 30	森 八郎	1973.4.1 ~ 87.3.31
堀井三友	1930 ~ 41	矢代幸雄	1926.12 ~ 42.6.28 / 1952.4.1 ~ 53.11.1
本間順治	1945 ~ 47	柳澤 孝	1946.9.30 ~ 87.3.31
牧野伸顕	1925 ~ 30	山田智三郎	1934.7.31 ~ 44
正木篤三	1930 ~ 42.5	吉川逸治	1939 ~ 43 / 1947.10.1 ~ 65.5.31
正木直彦	1926.12 ~ 31.11.24	米澤嘉圃	1952.10.1 ~ 65.5.31
松下隆章	1947 ~ 52	脇本十九郎 (楽之軒)	1931.1.31 ~ 33.10.15
松島 健	1996.4.1 ~ 98.2.27	和田 = 青山新	1927.1.11 ~ 42.6.30
松本栄一	1929.7 ~ 29.10 / 1949.8.31 ~ 52.10.1	和田英作	1926.12 ~ 30 / 1935.6.1 ~ 36.6.21
松本修自	1993.10.1 ~ 02.3.31	渡邊 一	1931 ~ 44.3.23
丸尾彰三郎	1930 ~ 43		
美澄政博	1935.5 ~ 38.3.24		

浅野正俊 (あさのまさとし) 1907 年 2 月 11 日 ~ 1988 年 4 月 30 日

1907 (明治 40) 年 2 月 11 日、新潟県三条三之町御蔵小路に生まれる。旧制三条中学校卒業後、1924 (大正 13) 年東京美術学校に入学。結城素明に学び、1929 (昭和 4) 年同日本画科を卒業。卒業制作「かごめ」は、同校買い上げとなる。卒業後、設立準備中の当研究所で助手を 1 年務め、美術図版の整理や史料類の書写にあたる。その後小学校の図画の教師、府立第十高等女学校 (現豊島高校) など、美術教師として 40 年余にわたり勤め、1968 (昭和 43) 年 3 月 31 日豊島高校を定年退職するまで、美術教育に尽力する。1982 (昭和 57) 年 2 月に瞬生画廊 (東京銀座) において個展開催。1988 (昭和 63) 年 4 月 30 日、肺気腫のため東京都豊島区の病院で死去。享年 81。没後の 2002 (平成 14) 年 5 月、故郷の三条市歴史民俗産業資料館で展覧会が開催された。

新 規矩男 (あたらしきくお) 1907 年 7 月 30 日 ~ 1977 年 9 月 17 日

1907 (明治 40) 年 7 月 30 日、三重県名賀郡青山町に生まれる。三重県立上野中学校から広島陸軍幼年学校、陸軍士官学校へ進むが、健康をそこねて中退。旧制第一高等学校へ入学、1929 (昭和 4) 年 3 月同校文科丙類を卒業し、東京帝国大学文学部美学美術史学科へ入学、1932 (昭和 7) 年 3 月同学科卒業。同年 4 月東京美術学校講師となり、フランス語および西洋文学を担当。1934 (昭和 9) 年 12 月、メトロポリタン美術館東洋部助手となり渡米、1936 (昭和 11) 年 12 月まで同美術館に勤務。

1937（昭和12）年ヨーロッパ諸国を歴遊して帰国し、同年4月東京美術学校に復職し、フランス語を担当。1938（昭和13）年2月講師となり、1939（昭和14）年4月からは西洋工芸史も担当する。1946（昭和21）年12月東京美術学校教授、1952（昭和27）年3月東京藝術大学美術学部教授となり、西洋美術史、西洋工芸史を講じ、1975（昭和50）年4月、定年退官。のち名誉教授となる。その間、1943（昭和18）年から1944（昭和19）年まで、当研究所内の東洋美術国際研究会事務嘱託、1947（昭和22）年から1959（昭和34）年までは当研究所美術部文部技官を併任し、第二研究室で西洋美術史研究、西洋美術に関する図書および資料の整備、西洋美術文献の編纂に従事。1959（昭和34）年4月から1962（昭和37）年4月東京藝術大学附属図書館長、1965（昭和40）年12月から1967（昭和42）年12月東京藝術大学美術学部長、1970（昭和45）年4月から1972（昭和47）年2月東京藝術大学芸術資料館長、同年2月から1975（昭和50）年3月東京藝術大学附属図書館長を務める。これらの教育活動のほか、戦後の海外学術調査に重要な役割をはたし、1956（昭和31）年から1957（昭和32）年、1959（昭和34）年の2次にわたる東京大学イラク、イラン遺跡調査団（団長江上波夫）に副団長として参加、1966（昭和41）年、1968（昭和43）年の東京藝術大学中世オリエント学術調査団（トルコ洞窟協会壁画の調査）では2次ともに団長を務める。また、1951（昭和26）年から1975（昭和50）年まで、美術史学会常任委員に選出され、そのうち、1969（昭和44）年6月から1975（昭和50）年6月の間は同学会代表委員を務める。1970（昭和45）年5月に財団法人遠山記念館付属美術館長（非常勤）となり、東京藝術大学を定年退職後は同美術館の常勤館長となる。主著に『英国芸術史』（研究社、1941年）がある。1977（昭和52）年9月17日、心不全のため埼玉県所沢市の病院で死去。享年70。没後、勲二等に叙せられ、フランス政府から勲章を贈られた。

雨宮幸男（あめみやゆきお） 1908年7月10日～1996年2月29日

1908（明治41）年7月10日、山梨県塩山市藤木に生まれる。1922（大正11）年4月山梨県立日川中学校に入学し、在学中の1926（昭和元）年には、生徒に呼びかけて校内美術展を行い、理科実験クラブであるフラスコ会を作るなど、美術や化学に興味を抱く。1927（昭和2）年3月同校を卒業。1927（昭和2）年4月、設立準備中の当研究所にアシスタントとして採用され、東京美術学校の矢代幸雄研究室を職場として、田中喜作、和田（青山）新らのもとで美術を学ぶかたわら、東京物理学校高等師範科夜間部に入学、創作発明家を目指す。当研究所に文化財の撮影を専門とする写真部が設置されるのにもない、要請されて担当となり、1928（昭和3）年3月に東京物理学校を退学。文化財の撮影、複写、美術教科用のスライド作成などを独学する一方、同年4月太平洋美術学校夜間部に入学、デッサン、油彩画等を学ぶ。1928（昭和3）年9月からは、完成した黒田記念館の地下に設けられた写真室で業務に従事。1931（昭和6）年視力を害し、眼精疲労および左脚坐骨神経痛のため歩行困難となり、当研究所を依願退職し帰郷。その後、郷里で美術および発明の分野で活躍し、山梨造形美術会顧問、サロン・デ・ボザール山梨支部顧問、日本山林美術協会名誉会員、発明協会山梨支部会員等を務める。1996（平成8）年2月29日、肺炎のため山梨県甲府市の病院で死去。享年87。

池田弥三郎（いけだやさぶろう） 1914年12月21日～1982年7月5日

1914（大正3）年12月21日、東京銀座の天ぶら屋「天金」の3代目に生まれる。叔父は劇作家で演出家の池田大伍。東京市立第一中学校を経て、1931（昭和6）年4月慶應義塾大学経済学部予科に入学、1934（昭和9）年4月、文学部国文科に転じ、折口信夫に師事。1937（昭和12）年、慶應義塾大学文学部国文科を卒業。1952（昭和27）年10月から1966（昭和41）年3月まで調査研究員として当研究所郷土芸能研究室に勤務。戦後、終戦直前に活動を休止した芸能学会（折口信夫を会長として1943年に発足）復興に際し、機関誌『芸能』の再刊への協力依頼を受け、中心的な活動を行う。慶應義塾大学文学部教授時代の1957（昭和32）年から1963（昭和38）年にかけて、NHKのクイズバラエティ番組に出演し、タレント教授の走りとして知られるほか、NHK解説委員、NHK用語委員、国語審議会委員等も務める。1977（昭和52）年紫綬褒章を受勲。1980（昭和55）年慶應義塾大学文学部教授を定年退職した後、洗足学園魚津短期大学教授に就任。主著に『池田弥三郎著作集』全10巻（角川書店、1979～1980年）がある。1982（昭和57）年7月5日、肝不全のため東京都内の病院で死去。享年67。

石川陸郎（いしかわりくお） 1936年4月10日～1997年6月28日

1936（昭和11）年4月10日、東京に生まれる。1956（昭和31）年東京理科大学二部理学部入学。勉学のかたわら、当研究所技術補佐員として勤務。在学中から文化財のX線撮影の研究に携わる。1964（昭和39）年卒業と同時に当研究所保存科学部文部技官として採用される。主な研究としては、鎌倉大仏の修復にともなうガンマ線撮影等文化財の光学的調査、また1965（昭和40）年代から多くなった美術館博物館の新設にともなう展示環境の研究がある。さらに環境調査研究をもとに、当研究所主催の博物館美術館等保存担当学芸員研修を担当し、保存科学の教育・普及に努めるほか、1996（平成8）年から日本大学文理学部非常勤講師として保存科学概論を講じる。1991（平成3）年には韓国国立文化財研究所の招聘により博物館環境に関する研究交流を行うなど、国際的にも活動する。1993（平成5）年4月東京国立博物館学芸部保存修復管理官に任じられ、1994（平成6）年3月末まで当研究所保存科学部と併任。同年東京国立博物館平成館が着工されると、保存科学の立場から展示室、収蔵庫の保存環境整備設計に関与する。東京国立博物館在職中の1997（平成9）年6月28日死去。享年61。没後『石川陸郎遺稿集』（石川陸郎遺稿集刊行会、1998年）が刊行された。当研究所名誉研究員。

石澤正男（いしざわまさお） 1903年3月31日～1987年5月21日

1903（明治36）年3月31日、東京市麴町区永田町に生まれる。1925（大正14）年3月旧制第一高等学校文科乙類を卒業後、東京帝国大学文学部美術美術史学科に進み、1928（昭和3）年3月に同学科を卒業。1930（昭和5）年10月から1933（昭和8）年7月までメトロポリタン美術館東洋部の助手を務め、同年7月から1950（昭和25）年3月まで東京美術学校講師として東洋工芸史を講じる。この間、1941（昭和16）年10月からは当研究所嘱託、また翌年5月から1947（昭和22）年2月まで当研究所内の東洋美術国際研究会主事を務める。同年2月から文部省社会教育局文化課に文部技官として入省、1950（昭和25）年文化財保護委員会発足後には、同委員会文化財調査官、さらに同年から国立博物館保存修理課長、1951（昭和26）年に同館資料課長、1955（昭和

30) 年から美術課長を歴任し、1964 (昭和 39) 年 6 月に退官。同年 7 月から大和文華館次長となり、1970 (昭和 45) 年から 1981 (昭和 56) 年まで館長を務め、1982 (昭和 57) 年は同館顧問であった。また、1965 (昭和 40) 年に文化財保護審議会専門委員に任命される。美術館運営、文化財行政に携わる一方、専門とする東洋工芸史研究においても研究論文を発表。主要論文に「三つの新取蒔絵作品について」(『大和文華』54、1971 年 9 月)「琉球黒漆桃樹文様沈金高台付盆」(『大和文華』63、1978 年 8 月)「三嶋大社蔵梅蒔絵櫛笥について」(『大和文華』64、1979 年 3 月) などがある。1987 (昭和 62) 年 5 月 21 日、脳梗塞のため東京都杉並区の病院で死去。享年 84。

伊東卓治 (いとうたくじ) 1901 年 11 月 12 日～1982 年 1 月 25 日

1901 (明治 34) 年 11 月 12 日、静岡県浜松市鹿谷町に生まれる。静岡県立浜北中学を経て、1924 (大正 13) 年旧制第一高等学校文科甲類を卒業。1928 (昭和 3) 年に京都帝国大学文学部哲学科 (美学美術史専攻) を卒業。引き続き同大学院に進むが、1934 (昭和 9) 年中退、同年帝室博物館研究員となり東京帝室博物館美術課に所属、1938 (昭和 13) 年帝室博物館鑑査官補、1941 (昭和 16) 年同鑑査官に任じられるが同年退官。1942 (昭和 17) 年中華民国国立北京大学文学院副教授に就任、翌年同教授となる。戦後は 1946 (昭和 21) 年帝室博物館へ復帰し、翌年に当研究所へ異動、1962 (昭和 37) 年同所美術部第一研究室長となる。1963 (昭和 38) 年定年退官後は、1965 (昭和 40) 年から 1975 (昭和 50) 年まで神奈川大学教授として教鞭をとる。この間、従来愛好者の恣意的鑑賞にまかせられ、美術史研究上閑却されがちであった書道史研究の開拓に多大な学問的貢献をなす。漢字書道の部門では、「過去現在因果経絵巻」研究で書の面の性格を明らかにし、それまで書道史の材料が美術的製作の観察に傾いていた弊を是正し、紙背文書として存する仮名消息に注目し考察。さらに、墨蹟について禅僧の書の総合的観察を試みるとともに、光学的方法による古美術の研究で書道作品を担当し、技法、筆法の特殊性解明に新機軸を打ち出す。また『明治文化史 8』(洋々社、1956 年) で、明治の書道の章を担当。『醍醐寺五重塔の壁画』(吉川弘文館、1959 年) の共同研究者の一人として 1960 (昭和 35) 年日本学士院恩賜賞を受賞。1972 (昭和 47) 年、勲三等瑞宝章を受勲。1982 (昭和 57) 年 1 月 25 日、急性肺炎のため千葉市の病院で死去。享年 80。

今泉篤男 (いまいづみあつお) 1902 年 7 月 7 日～1984 年 1 月 19 日

1902 (明治 35) 年 7 月 7 日、山形県米沢市に生まれる。山形県立米沢中学校、旧制山形高等学校理科甲類を経て 1923 (大正 12) 年東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学、主に大塚保治の指導を受ける。1927 (昭和 2) 年卒業後同大学院に進み、1932 (昭和 7) 年に渡欧、はじめパリ大学、ついでベルリン大学へ転じ、デッサン、ニコライ・ハルトマン、オイデベルヒトラの講義を受ける。滞欧中、佐藤敬、田中忠雄、内田巖、小堀四郎、森芳雄、野口弥太郎、佐分利真等の作家と交流し、1934 (昭和 9) 年に帰国。帰国の年から美術評論の執筆を開始し、展覧会批評、日本現代作家論、西洋美術紹介などに精力的に従事する。また、1935 (昭和 10) 年には「美術批評に就ての疑問」(『アトリエ』12-11、1935 年 11 月) を発表、土方定一、瀧口修造、植村鷹千代、柳亮らと「美術批評の諸問題を語る座談会」(『アトリエ』15-7、1938 年 5 月) をもつなど、戦前から美術評論に従事し、はやくから美術批評の近代的なあり様に対して積極的な発言を行う。この間、1936 (昭和 11) 年には美術批評家協会の創立会員となる。1935 (昭和 10) 年から 1942 (昭和 17) 年まで

財団法人国際文化振興会に勤務、1940（昭和15）年には文化学院美術部長となる。戦後は、美術評論界を先駆的に導き、美術評論を独自の領域をもつ世界へ高める。1947（昭和22）年から1948（昭和23）年まで、当研究所美術部に在職、1950（昭和25）年跡見短期大学教授生活芸術科長となり、翌年国立近代美術館設置準備委員に任命され、美術行政でも多大の功績を残す。1952（昭和27）年跡見短大を退職し、同年創設の国立近代美術館次長に就任。1951（昭和26）年美術調査研究のため欧米を歴訪。同年毎日新聞社主催の「サロン・ド・メ日本展」が大きな反響を呼び、翌年日本作家がバリの同展に招待出品されたのを見て、創刊間もない『美術批評』誌上に日本作品に対する率直かつ鋭い批判を寄せ論議を呼ぶ。1954（昭和29）年美術評論家連盟創立に際し常任委員となり、翌年から1958（昭和33）年まで仮称「フランス美術館」設置準備協議会委員となる。国立近代美術館次長として、「現代美術の実験展」（1961年）を開催し、荒川修作、中西夏之ら若手の作家をとりあげるなど意欲的な企画を主導。また、浅井忠、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、熊谷守一から森芳雄、山口薫にいたる近代日本作家論へ幅を広げる。1963（昭和38）年国立近代美術館京都分館長となり、1967（昭和42）年同分館が独立し京都国立近代美術館となるにともない初代館長に就任、これを機に工芸の世界へも強い関心を寄せ、以後、富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司、岩田藤七、芹沢銈介、志村ふくみらを取りあげ、工芸批評に新機軸をもたらす。1969（昭和44）年京都国立近代美術館長を辞任、1971（昭和46）年から跡見学園女子大学美学美術史学科教授として西洋美術史を講じ、1974（昭和49）年に退職。膨大な著述の主要なものは『今泉篤男著作集』全6巻（求龍堂、1979年）に収められている。1984（昭和59）年1月19日、急性心不全のため東京都目黒区の病院で死去。享年81。

岩崎友吉（いわさきともきち） 1912年4月10日～1990年12月5日

1912（明治45）年4月10日、神奈川県に生まれる。1939（昭和14）年東京帝国大学化学科を卒業後、同大学院に進み、理学部副手、助手を務める。1948（昭和23）年東京国立博物館に発足した保存修理課保存技術研究室に文部技官として採用される。文化財保護委員会の設置にともない、文化財保護委員会事務局保存部建造物課研究室を経て、1952（昭和27）年に当研究所に保存科学部ができると同時に同部化学研究室の研究員となり、化学研究室長、修理技術研究室長を経て、1973（昭和48）年修復技術部発足と同時に修復技術部長となり、翌年退官。この間、1949（昭和24）年金堂火災直後の法隆寺国宝保存に関する調査を委嘱され、次いで1950（昭和25）年に壁画の化学的保存処置のために調査員を委嘱される。その後、各地で盛んになった歴史的建造物や修復にともなう内部の部材彩色の保存処置を担当、1972（昭和47）年に発掘された高松塚古墳の壁画保存については、ヨーロッパの壁画保存の実態調査に参加、専門家を招聘しての修理方針の決定に寄与する。1964（昭和39）年から1965（昭和40）年にかけてベルギーの王立文化財研究所客員研究員として文化財保存の西欧的手法を研究したのをはじめ、1967（昭和42）年に日本が加盟してからの8年間日本政府代表として、イクロム（ICCROM、文化財保存のための国際研修機関）の運営に関わり、1969（昭和44）年から理事を務める。主要論文は『保存科学』『古文化財之科学』に所載。著作のエッセイでは、『大正っ子のおしゃべり』（日本放送出版協会、1975年）の中の1篇「炭火」が1975（昭和50）年の「年間優秀100エッセイ」の一つに数えられ、後に山本健吉編『日本の名随筆20 冬歳時記』（作品社、1984年）に掲載されている。1984（昭和59）年、勲四等旭日小綬章を受勲。また、

1986（昭和61）年に、多年の功績に対しアジア地域で初めてイクロム賞を受賞。その他、国内外の文化財関係学会等主要職を歴任し、1986（昭和61）年スガ財団賞を受賞。1990（平成2）年12月5日死去。享年78。当研究所名誉研究員。

内田昭人（うちだあきと） 1949年11月1日～2005年8月16日

1949（昭和24）年11月1日、埼玉県秩父市に生まれる。国士舘大学工学部建築学科を卒業、さらに早稲田大学、東京大学で研鑽を積み、学位を取得、その後、1980（昭和55）年2月に奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに文部技官として採用される。平城宮跡発掘調査部在職中には平城宮跡朱雀門の復元に参画する一方で、建築学の専門を生かして全国各地の五重塔を対象に常時微動の測定を続ける。2002（平成14）年4月の異動で当研究所に赴任後は、プロジェクト研究「文化財の防災計画に関する調査研究」を中心にして、国際文化財保存修復協力センターとともにアユタヤやアンコールワットでの建造物の保存修復に関わるなど、幅広く活躍。史跡手宮洞窟、フゴッベ洞窟では、保存調査委員としてその保存修復に関わるなど、建造物に限らず多くの文化財の保存に貢献する。2005（平成17）年1月28日に、第1回「文化財の防災計画に関する研究会」を開催、文化庁、研究所、大学、京都市、奈良市消防局など、今まで個別に活動していた防災計画のネットワーク化に努め、その後報告書作成や第2回の研究会の準備を進めていたが、2005（平成17）年8月16日、肺炎で入院中のところ死去。享年55。

梅津次郎（うめづじろう） 1906年10月19日～1988年2月21日

1906（明治39）年10月19日、三重県宇治山田市大世古町に生まれる。旧制第八高等学校を卒業後、1932（昭和7）年、東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。1935（昭和10）年5月から1946（昭和21）年3月まで当研究所嘱託として日本古代中世絵画史研究に従事。当初は『美術研究』の編集を担当するが、その後東洋美術総目録事業のなかの絵巻部門を担当し、資料の調査収集に努める。また当研究所内の東洋美術国際研究会の業務を兼務し、“Art Guide of Nippon Nara, Mie and Wakayama Prefectures”（東洋美術国際研究会、1943年）の編集を分担。同年4月から、恩賜京都博物館に勤務、1968（昭和43）年3月、学芸課長として定年退官。退官後は、同年4月から大谷大学講師、奈良国立文化財研究所調査員を兼ねる一方、同年8月から1987（昭和62）年3月まで文化財保護審議会専門委員を務める。また1949（昭和24）年6月の美術史学会創立にあたっては、亀田孜、長廣敏雄等と共に関西の常任委員を務める。生涯を通じて追求した主題は絵巻物研究であり、日本の絵巻物研究の基礎を築く優れた多くの業績を残す。「実証的な基礎に立たない発言は殆ど無意味である。啓示もそこから生まれる」という姿勢に貫かれた研究により、絵巻の絵と詞に関する異本との詳細な校合を行い、多くの作品を日本絵画史上に新たに意義づける。研究活動の後半は、絵巻物を説話画の一形態と認識する視点から研究を続けるが、実証的研究を標榜した研究成果は鋭い感性と鑑識に支えられている。主著に『絵巻物残欠の譜』（角川書店、1970年）『絵巻物叢考』（中央公論美術出版、1968年）『絵巻物叢誌』（法蔵館、1972年）がある。1988（昭和63）年2月21日、呼吸不全のため京都市東山区の病院で死去。享年81。

浦山政雄（うらやままさお） 1912年3月17日～1979年10月21日

1912（明治45）年3月17日、東京府豊多摩郡に生まれる。旧制浦和高校を経て、1935（昭和10）年東京帝国大学文学部国文学科を卒業。しばらく教職と兵役に就いた後、1952（昭和27）年10月当研究所芸能部に入所、演劇研究室長、同部長事務取扱を経て、1967（昭和42）年初代芸能部長となり、以後1974（昭和49）年の退官までわが国の芸能部門における文化行政に大きく貢献する。同年4月より実践女子大学文学部教授に就任、また在官中から日本女子大学講師を務める。鶴屋南北研究の第一人者で、『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、1972～1977年）の牽引者でもある。演劇、音楽の研究基礎資料の整備につくした功績は大きく、同氏著作集が企画される。芸能学会常任委員、日本歌謡学会、中世文学会の常任理事、また文化庁芸術祭の演劇部門あるいは舞踊部門の審査委員のほか、文化財保護審議会専門委員を務める。1979（昭和54）年10月21日、胃癌のため、東京都杉並区の自宅で死去。享年67。没後、1979（昭和54）年11月2日付で正五位勲四等旭日小綬章の追贈を受けた。当研究所名誉研究員。

江本義教（えもとよしかず） 1892年10月28日～1979年5月18日

1892年（明治25）年10月28日、東京市に生まれる。1917（大正6）年東京帝国大学理科大学植物学科を卒業。1934（昭和9）年「硫酸化細菌の生理」により理学博士の学位を授与され、同年学習院教授となる。のちに学習院大学名誉教授の称号を授けられる。1958（昭和33）年から1973（昭和48）年まで当研究所保存科学部の調査研究員として、法隆寺金堂焼損壁画、高松塚古墳壁画の微生物の調査と防除処理の研究を行う。1974（昭和49）年天皇陛下に「温泉と硫酸バクテリア」について御進講、同年紺綬褒章を受勲。主著に終生の研究を集大成した『日本変形菌原色図譜』（英文、産業図書、1977年）がある。1979（昭和54）年5月18日死去。享年86。

江本義理（えもとよしみち） 1925年7月3日～1992年4月11日

1925（大正14）年7月3日、東京市に生まれる。1945（昭和20）年4月東京帝国大学理学部化学科に入学。1948（昭和23）年3月同科を卒業、同年4月から法隆寺国宝保存工事事務所の委嘱により、法隆寺壁画の調査に参加。同年12月、国立博物館保存修理課保存技術研究室勤務となる。以後官制の変更にともない、1950（昭和25）年9月文化財保護委員会保存部建造物課保存科学研究室勤務、1952（昭和27）年4月から当研究所に新設された保存科学部化学研究室へ異動。1967（昭和42）年3月主任研究官、1971（昭和46）年5月化学研究室長となり、1975（昭和50）年4月保存科学部長就任、1987（昭和62）年3月定年退官する。この間、1967（昭和42）年4月から1992（平成4）年4月まで東京藝術大学美術学部講師、1983（昭和58）年4月から1988（昭和63）年9月まで図書館情報大学講師を務める。戦後、わが国の文化財の科学的調査方法が未確立な状況の中で、他分野の検査方法を文化財調査に取り入れる試みを続け、1955（昭和30）年、サイクロトロンによる放射化分析を行い、その後は蛍光X線分析法を導入した文化財の析質調査、研究に力を注ぎ、文化財の非破壊調査など保存科学の第一人者。こうした材料分析のほか、文化財保存にも尽力し、1972（昭和47）年に発見された高松塚古墳壁画の保存、敦煌、エジプト・ルクソールの王家の谷等、海外の文化財保存にも携わる。学界においても、文部省学術審議会専門委員、日本学術会議考古学研究連絡委員会委員をはじめ数々の要職を務める。1992（平成4）年4月11日死去。享年66。主

要論文・研究業績等は没後に刊行された『文化財をまもる』（アグネ技術センター、1993年）に詳しい。当研究所名誉研究員。

大串純夫（おおくしすみお） 1912年7月18日～1955年7月14日

1912（明治45）年7月18日、東京に生まれる。1937（昭和12）年3月東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。1939（昭和14）年3月まで大学院で学ぶかわら、国華社編輯員、旧制成蹊高等学校講師を務め、同年当研究所嘱託、ならびに東洋美術国際研究会嘱託に就任し、“Art Guide of Nippon”（東洋美術国際研究会、1943年）の編纂にあたる。1943（昭和18）年応召、終戦後、満州からシベリヤに移されて5年間の抑留生活を送る。1950（昭和25）年引揚後成蹊大学講師となり、1951（昭和26）年文部技官となる。1952（昭和27）年12月文化財保護委員会事務局美術工芸課に併任され、翌年7月アメリカにおける日本古美術展覧会要員として出張、1954（昭和29）年3月4日に、出陳美術品と共にアメリカ海軍輸送船で横浜港に帰還。はじめは平安、鎌倉時代の仏教絵画を専攻し、その後説話を軸とする絵巻物研究に専念。著書に『来迎芸術』（法蔵館、1983年）がある。1955（昭和30）年7月14日急逝。享年43。

岡田三郎助（おかださぶろうすけ） 1869年1月12日～1939年9月23日

1869（明治2）年1月12日、佐賀県佐賀市八幡小路に佐賀藩士石尾孝基の四男として生まれる。幼名芳三郎。幼くして上京、旧藩主侯爵鍋島直大邸内に寄宿する。1887（明治20）年東京帝国大学工科大学助教授曾山幸彦に師事し、初めて洋風画を学ぶ。この年岡田正蔵の養嗣子となり岡田姓を称する。1891（明治24）年明治美術会員となる。師曾山の夭折後その家塾を承継する堀江正章、松室重剛の大幸館に留まり、1892（明治25）年修了。1893（明治26）年黒田清輝、久米桂一郎と知り合い、彼らの薫陶を受ける。1895（明治28）年第4回内国勲業博覧会に「初冬晩暉」を出品して三等賞を受賞。翌年東京美術学校に西洋画科が新設、選出され助教授となる。また同年白馬会の創立に参画。1897（明治30）年西洋画研究のため文部省より満4年間フランスに留学を命じられ出発。もっぱらラファエル・コランに師事し、研鑽を遂げ、1902（明治35）年1月帰国。同年12月東京美術学校教授となる。1907（明治40）年文部省美術審査委員会が創設されるとその第二部委員となり、以後官設展覧会を中心に出品を続ける。1919（大正8）年帝国美術院の創設と共に挙げられて会員となる。1924（大正13）年東京美術学校西洋画科主任を命じられる。1926（昭和元）年から1930（昭和5）年にかけて当研究所の創立に際して設立準備委員として尽力。同年2月文部省よりヨーロッパ出張を命じられ、各国の美術および美術工芸の研究を遂げ、同年11月帰国。1934（昭和9）年帝室技芸員を拝命し、翌年改組後の帝国美術院会員に挙げられ、満州国に出張。1936（昭和11）年に一時東京美術学校校長事務取扱を命じられる。翌年には多年の功勞により文化勲章を授与され、また新設の帝国芸術院会員となる。1938（昭和13）年より健康を害したが制作を続ける。翌年3月に入院、6月には退院し小康を得たが、療養中のところ同年9月23日、渋谷区の自宅で死去。享年71。

岡田信一郎（おかだしんいちろう） 1883年11月20日～1932年4月4日

1883（明治16）年11月20日、陸軍薬剤監岡田謙吉の次男として東京市芝区宇田川町に生まれる。

1903（明治36）年旧制第一高等学校工科を卒業、東京帝国大学工科大学建築学科に入学、1906（明治39）年卒業に際し成績優秀のため、恩賜の銀時計を拝受。卒業後直ちに警視庁並に清水組の嘱託となり、1908（明治41）年から1911（明治44）年まで日本銀行建築事務に従事、1915（大正4）年日本赤十字社建築顧問となる。また1907（明治40）年東京美術学校講師となり、早稲田大学教授を兼ね、続いて東京美術学校建築科主任教授となり、後進の誘導に尽力。この間、各種の美術工芸団体の諸委員に挙げられ、建築学会役員として編集方面に画策し、また諸調査機関の委員の主査となり都市計画および建築法規の基本草案作成等に加わる。建築学界の権威であるほか、建築史建築意匠に対する知識豊かにして、和風建築に関しても造詣が深い。建築界の流れがアカデミックの形式主義から自由主義に転向すると、新建築のために奮闘する。この方面における日本の先駆者である。主要作品には大阪高島屋1922（大正11）年、青山会館1924（大正13）年、歌舞伎座1925（大正14）年、東京府美術館1926（大正15）年、鎌倉国宝館1928（昭和3）年、日本赤十字社参考館1928（昭和3）年、銀座伊東屋1930（昭和5）年、赤坂虎屋1932（昭和7）年、明治生命1934（昭和9）年等があり、震災後のニコライ会堂の修繕1930（昭和5）年も担当する。当研究所の創立に際し、設立準備委員の一人として大いに尽力し、黒田記念館1928（昭和3）年を設計する。1932（昭和7）年4月4日、呼吸不全により死去。享年50。没後、勲四等瑞宝章の追贈を受けた。

大給近清（おぎゅうちかきよ） 1884年3月3日～1944年5月31日

1884（明治17）年3月3日、子爵大給近道の次男として東京に生まれる。学習院を経て1902（明治35）年東京美術学校西洋画科選科に入学、1906（明治39）年4月卒業。山本鼎、大槻武雄、森田恒友、高島七郎等と同級。黒田清輝に師事。1907（明治40）年黒田清輝の異母妹純（1885～1909）と結婚。1915（大正4）年11月葵橋洋画研究所展覧会に「裸体」と「瓦焼く窯」を出品。1924（大正13）年11月5～15日「黒田清輝先生遺作展覧会」に所蔵作品「新緑」「春の野」「紅葉」3点を出品。1927（昭和2）年黒田清輝の遺産による美術奨励事業開始とともに当研究所設立準備委員となり、事務嘱託として黒田清輝の遺作の管理にあたる。1937（昭和12）年日動画廊で個展を開催。1944（昭和19）年5月31日死去。享年61。

尾崎夏彦（おぎさなつひこ） 1901年5月20日～1936年4月11日

1901（明治34）年5月20日、尾崎紅葉の長男として東京に生まれる。1927（昭和2）年東京帝国大学文学部美術史科を卒業、国際聯盟協会学芸協力委員会の嘱託となって『日本美術年鑑』（英文）編集に従事、1932（昭和7）年当研究所嘱託となり明治大正美術史編集に着手。論文に「狩野芳崖筆 悲母観音図に就いて」（『美術研究』12、1932年12月）がある。病気のため1934（昭和9）年職を退き、神奈川県平塚海岸で療養中であつたが、1936（昭和11）年4月11日死去。享年36。

尾高鮮之助（おだかせんのすけ） 1901年5月30日～1933年3月23日

1901（明治34）年5月30日、朝鮮仁川に生まれる。1903（明治36）年5月仁川より帰京。1922（大正11）年3月旧制第一高等学校文科甲類を卒業、1926（大正15）年3月東京帝国大学文学部哲学科美学美術史科を卒業。1928（昭和3）年6月より東京美術学校内の矢代研究室で当研究所の設立準備事業にあたり、1930（昭和5）年当研究所開設と同時に入所、初代所員として活躍する。経

理部に配属ののち資料部に移り、苦心研究の結果、図書整理の基礎を作る。研究は多方面にわたり、最初浮世絵に力を注ぐが、当研究所に入ってから、東洋美術一般、特にインド、中国、西域の美術、並にそれらの交渉関係に意を注いで研鑽に努める。1931（昭和6）年10月16日から翌年10月14日まで1年間、文部省在外研究員となって、東南アジア、インド、パキスタン、ジャワ、アフガニスタン、ヨーロッパなどを行程として詳細な踏査を行い、多数の写真等の資料（日記5冊、調査ノート1冊、写真フィルム約2000枚、そして数千フィートの16ミリフィルム）を手にして帰国。現地調査の成果の整理やインド、中国美術の本格的な研究に取り組もうとしていた矢先の1933（昭和8）年3月23日、急性肺炎のため死去。享年33。没後、7回忌に寄せて、『印度日記』（刀江書院、1939年）『美術研究資料第7輯 印度及南部アジア美術資料』（美術研究所、1939年）が刊行された。熱心に収集していた蔵書の大部分は、1937（昭和12）年7月遺族によってに当研究所に寄贈され、尾高文庫を形成している。

小高根太郎（おだかねたろう） 1909年4月23日～1996年4月28日

1909（明治42）年4月23日、福岡県久留米市に生まれる。旧制東京府立第一中学校から、父の転勤にともなって1927（昭和2）年旧制大阪府立北野中学校を卒業。1930（昭和5）年旧制大阪高等学校卒業。1933（昭和8）年東京帝国大学文学部美術史料を卒業して同大学院に進み、1935（昭和10）年6月当研究所嘱託となり、1942（昭和17）年5月まで勤める。その後、文部省国民精神文化研究所（のち組織改編により教学錬成所）に勤務。戦後は東京都立大山高校教員のかたわら、東京国立近代美術館調査員、東京工業大学非常勤講師を務める。また、1975（昭和50）年4月から1983（昭和58）年3月まで鉄斎研究所長を務め、1993（平成5）年2月から没するまで鉄斎美術館名誉館長を務める。早くから富岡鉄斎の研究に取り組み、当研究所時代に「富岡鉄斎 公私事歴録」（『美術研究』65、1937年5月）「富岡鉄斎詩文集」上、下（『美術研究』70・71、1937年10・11月）「富岡鉄斎の旅行記について 富岡鉄斎旅行記 公刊」（『美術研究』82、1938年11月）を発表し、『富岡鉄斎の研究』（芸文書院、1944年）を刊行。同著は今日においても鉄斎研究の基本文献となっている。その後も、『富岡鉄斎』（養徳社、1947年）『人物叢書 富岡鉄斎』（吉川弘文館、1960年）『鉄斎』（朝日新聞社、1973年）『鉄斎大成』全5巻（講談社、1976～1982年）など生涯にわたって鉄斎に関する約40点の編著書、論文を著わす。中でも1969（昭和44）年から没するまでの28年にわたって『鉄斎研究』全71号（鉄斎研究所、1969～1996年）に、鉄斎作品約2000点について、賛文を読み起こし、その出典を和漢の造藪な書籍を博搜して明らかにし、訓読し解釈した作業は、鉄斎研究の基礎となるものである。その作業を通じて、鉄斎旧蔵の稀購書を少なからず発見し、それらの一部は鉄斎研究所の収蔵に帰している。また、鉄斎作品の鑑識にもすぐれ、清荒神清澄寺法主坂本光聡、富岡鉄斎嫡孫富岡益太郎とともに鉄斎作品の再発見に貢献。1996（平成8）年4月28日、心不全のため東京都世田谷区の病院で死去。享年87。

加藤成之（かとうよしゆき） 1893年9月6日～1969年6月30日

1893（明治26）年9月6日、東京市麴町区五番町に生まれる。祖父弘之は元東京帝国大学総長。学習院高等学科を経て、東京帝国大学文学部美学美術史学科、同大学院に進み、1921（大正10）年3月に修了。同4月東京美術学校講師、翌年9月、ヨーロッパにおける美学研究に関する事項嘱

託を文部省より命じられ、1922（大正11）年から1925（大正14）年までヨーロッパへ留学、ソルボンヌ大学で音楽美学を学ぶ。帰国後、複数の音楽、美術学校の講師の嘱託となり、また1932（昭和7）年貴族院議員に選出される。1935（昭和10）年東北帝国大学講師、1940（昭和15）年1月女子美術専門学校教授（副校長）、1944（昭和19）年9月、女子美術専門学校長、佐藤高等女学校長、後に東京音楽学校講師となり、音楽史、音楽美学を担当。1949（昭和24）年4月女子美術大学長、同9月辞職、同7月東京音楽学校音楽学部長就任、東京音楽学校長、女子美術大学教授を兼任。翌年10月東京藝術大学教授に就任。1949（昭和24）年から1956（昭和31）年まで初代音楽部長として楽理科の創設に尽力。1952（昭和27）年から1957（昭和32）まで、当研究所芸能部の文部技官を併任、翌年芸能部長事務代理となる。1957（昭和32）年6月、東京藝術大学を退官、女子美術大学理事長兼学長、付属高校、中学校長に就任。1966（昭和41）年4月、勲二等瑞宝章を受勲。1969（昭和44）年6月30日死去。享年75。

金子重隆（かねこしげたか） 1914年7月14日～2001年1月18日

1914（大正3）年7月14日、東京に生まれる。1934（昭和9）年に文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験英語科に合格し、1940（昭和15）年から1942（昭和17）年まで早稲田大学英文科に学ぶ。同大学の教員で天文神話学者の野尻抱影（作家大佛次郎の実兄）に傾倒し、野尻の晩年まで親交を重ねる。同大学英文科に在籍する倉田文作と友好関係にあり、彼の推薦により1941（昭和16）年11月に当研究所内の東洋美術国際研究会の嘱託となる。1943（昭和18）年に同研究会刊行の“Art Guide of Nippon Nara, Mie, and Wakayama Prefectures”の翻訳を担当。戦時下の1944（昭和19）年3月に同研究会をいったん退職するが、1945（昭和20）年11月に復職。同年12月に“Art Guide of Nippon”第2巻の翻訳担当であった倉田文作が進駐軍司令部との連絡調整のために文部省詰めとなったため、担当は金子に交代。“Art Guide of Nippon”第3巻は担当者が戦時下の応召のため中断されたが、1946（昭和21）年7月には同書の出版継続が図られ、その翻訳を担当。1946（昭和21）年9月、東洋美術国際研究会が解散。1947（昭和22）年2月に連合軍総司令部民間情報教育部文化資料調査担当となり、翻訳、校閲の仕事に携わる。同年9月1日に国立博物館（のちの東京国立博物館）に採用され、日本の文化、美術を英文に翻訳し紹介する職務に就く。1951（昭和26）年8月、アメリカ合衆国サンフランシスコ市、デ・ヤング美術館で開催の「サンフランシスコ古美術展」のため出張。同展の大成功を受け、アメリカ側から大規模な巡回展開催の希望が出され、1953（昭和28）年1月から12月の長期にわたり、ワシントン展（ナショナル・ギャラリー）、ニューヨーク展（メトロポリタン美術館）、シアトル展（シアトル美術館）、シカゴ展（シカゴ美術館）、ボストン展（ボストン美術館）が開催される。この「日本古美術展」にシアトル展から途中派遣され、1954（昭和29）年3月4日に横浜港に帰還。同展はその後の日本古美術の海外展の基点をなすものとなる。以後、1976（昭和51）年4月1日に東京国立博物館を定年退職するまで同館に勤務し、一貫して英文翻訳等を中心とする国際交流事業に専念し、東京国立博物館の刊行物、展覧会関係の翻訳をはじめ外国人賓客の展示案内等々の活動を行う。また、『奈良六大寺大観』（岩波書店）『大和古寺大観』（岩波書店）の英文翻訳、『和英対照 日本美術用語辞典 A DICTIONARY OF JAPANESE ART TERMS Bilingual [Japanese and English]』（東京美術、1990年）の英文監修、翻訳をはじめ、多数の翻訳出版事業を手がける。元東京国立博物館副館長

の金子啓明は重隆の長男。2001（平成 13）年 1 月 18 日死去。享年 85。

樺山愛輔（かばやまあいすけ） 1865 年 5 月 10 日～1953 年 10 月 21 日

1865（慶応元）年 5 月 10 日、薩摩藩士橋口与三郎の三男として鹿児島に生まれ、海軍大将伯爵樺山資紀の養子となる。1875（明治 8）年上京。神田共立学校を経て、1880（明治 13）年渡米、ウィルブラハム中学校入学、1885（明治 18）年ウェズレーアン大学入学、後に史学研究のためアーモスト大学に転学、1889（明治 22）年卒業。同年渡独、租税研究のためボン大学に入学するが、1891（明治 24）年病気のため帰国。壮年時代は実業界で活躍。のち貴族院議員、枢密顧問官となり、また日米協会長、国際文化振興会顧問、当研究所内の東洋美術国際研究会等の理事長として日本文化の海外紹介に尽くし、戦後は社会教育事業のためグルー基金の創設や国際文化会館の建設に尽力。黒田清輝の縁故者として遺産の三分の一を美術のために寄附する旨を遺言され、当研究所の創立と発展に尽くす。遺言執行人総代として、黒田が同郷の先輩として深く尊敬していた牧野伸顕に事業の撰定を依頼し、牧野は美術院長福原録二郎、東京美術学校長正木直彦兩名を相談相手として関係諸方面より案を徴し種々研究する。どの案にも決定は見ず長い間停顿していたが、1925（大正 14）年長期のヨーロッパ留学より帰国した矢代幸雄の美術研究機関（美術に関する基礎的調査機関）設立案を採用、根本方針が決定する。これに対し黒田の友人や弟子達の希望（黒田中心の回顧的な諸案）が強く、いろいろ苦情が持ち込まれたが、事業決定の全責任を少しも回避せず、毅然たる態度を以て既定方針を堅持する。また当研究所内に黒田記念室が設けられると、所蔵していた黒田清輝の代表作「湖畔」を寄贈。戦後の 1950（昭和 25）年、文化財保護法が制定され、当研究所は、文化財保護委員会の附属機関となり、1952（昭和 27）年には文化財保護法の一部改正により、東京文化財研究所と改称、新設される芸能部、科学研究部と共に並置する美術部となる。この時、文部大臣および国会に対して、黒田記念事業としての美術研究所の設立、並びに政府に対する条件つき寄附の顛末を説明し、この条件を承認して寄附を受けとった政府は、寄附の趣意を没却しない義務を負っていることに、強く注意を喚起する。遺言執行人中唯一の生存者として、戦後社会に重きをなす樺山によってなされたこの説明は、すこぶる有力に響いて、その結果新制定の文化財保護法中に但書一項が加えられ、東京文化財研究所の美術部は従来通り美術研究所と称することを得る。一度不用意に消されかけた名称を、設立の由来を想起させ法律上に存続させたことは最後の大きな務めとなる。1953（昭和 28）年 10 月 21 日、呼吸不全のため神奈川県大磯の自宅で死去。享年 88。没後、『樺山愛輔翁』（国際文化会館、1955 年）が刊行された。

川上 涇（かわかみけい） 1920 年 3 月 19 日～2006 年 1 月 18 日

1920（大正 9）年 3 月 19 日、京都市上京区河原町に生まれる。1932（昭和 7）年 3 月東京府立第一中学校を飛び級し 4 年で卒業。1939（昭和 14）年旧制第一高等学校文科甲類を卒業、同年東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学する。瀧精一に師事し、1941（昭和 16）年 12 月に同科を繰り上げ卒業。1942（昭和 17）年 4 月第一補充兵として近衛歩兵第一連隊に応召し、1943（昭和 18）年 12 月陸軍少尉、1945（昭和 20）年 8 月陸軍中尉となり応召を解除される。同年 10 月より東京女子大学講師として日本美術史を講じ、翌年 2 月当研究所嘱託となる。1947（昭和 22）年 6 月に東京帝国大学大学院を中退し、同年 4 月 1 日付けで当研究所職員となる。翌年 12 月東京女子大

学を退職。1952（昭和27）年4月当研究所美術部資料室、1954（昭和29）年7月、同所美術部第一研究室に配属され、1967（昭和42）年同研究室長となり、1976（昭和51）年4月同所美術部長となる。この間、1955（昭和30）年10月より成蹊大学講師、1963（昭和38）年から1967（昭和42）年3月まで横浜国立大学講師、1967（昭和42）年からは埼玉大学講師を務めたほか、東京大学、京都大学、東北大学の講師として教鞭を取る。明代清代の絵画史を主な研究対象とし、作品に即した実証的な調査研究を行い、1960（昭和35）年米澤嘉圃、鈴木敬とともに台湾に渡り、当時台中にあった故宮博物院が所蔵する絵画2800点あまりのうち約1000点を調査して、中国絵画の主要な優品の調査に基づく新たな中国絵画史研究に一石を投じる。1982（昭和57）年3月、当研究所を定年退官。その後も沖縄県立芸術大学などで講師として教鞭を取る。主著に『東洋美術全史』（共著、東京美術、1972年）『東洋美術1 絵画1』（共著、朝日新聞社、1967年）『日本絵画館12 渡来絵画』（講談社、1971年）『大阪市立美術館蔵中国絵画』（共編、朝日新聞社、1975年）『水墨美術大系4 梁楷 因陀羅』（共著、講談社、1977年）などがあり、個別作家の研究としては明代の宮廷画家王謬に関する論考「送源永春還図詩画卷と王謬」（『美術研究』221、1962年10月）「王謬筆山水図（図版解説）」（『美術研究』232、1964年10月）および揚州八怪のひとりともされる華岳に関する論考「新羅山人早期の作品 付華岳略年譜」（『MUSEUM』174、1965年9月）「華岳の秋声賦意図」（『美術研究』236、1965年3月）「研究資料 張四教筆新羅山人肖像—華岳伝記の一資料」（『美術研究』256、1969年3月）がある。美術史学会、東方学会等に所属し、東方学会においては1987（昭和62）年から1999（平成11）年まで、秋山光和とともに同学会内に部会を組織し、同会内の美術史部会への道を開くなど、後進のために尽力し、長年の功績により2005（平成17）年同会より功労者特別表彰を受ける。2006（平成18）年1月18日、老衰のため東京都品川区の自宅で死去。享年85。当研究所名誉研究員。

河北倫明（かわきたみちあき） 1914年12月14日～1995年10月30日

1914（大正3）年12月14日、福岡県浮羽郡山春村に生まれる。1931（昭和6）年福岡県立明善校を修了。1935（昭和10）年旧制第五高等学校を卒業して京都帝国大学文学部に進学し、1938（昭和13）年同大哲学科を卒業して同大学院に進む。1943（昭和18）年当研究所助手となり、日本近代画家の調査、研究に取り組む。1944（昭和19）年1月31日福岡で入隊、戦後、1948（昭和23）年頃より日本近代美術史に立脚した現代美術評論活動を盛んに行うようになる。同年同郷の洋画家青木繁の調査、研究成果として『青木繁』（養徳社、1948年）を刊行。また同年『近代日本画論』（高桐書院、1948年）を刊行して、個々の作家、作品についての調査、研究に基づきながら、史的流れのうえにそれらを位置づける日本近代絵画史の新たな方向を提起する。1952（昭和27）年国立近代美術館事業課長となり、日本で最初の近代美術館の運営に尽力。美術評論の分野でもその活性化と相互の連絡を目的として1954（昭和29）年美術評論家連盟を結成し、事務局長に就任。1963（昭和38）年3月東京国立近代美術館次長に就任し、1953（昭和28）年から1965（昭和40）年まで、当研究所美術部文部技官を併任。1967（昭和42）年5月美術交流展覧会のためソビエト連邦を訪れ、以後も美術による国際交流のため中国、西欧、アメリカ、南米等を訪れる。1969（昭和44）年2月京都国立近代美術館長となって、関西方面の美術館活動にも深く関わるようになり、1970（昭和45）年大阪万博では同博覧会美術館委員を務める。1982（昭和57）年美術館連絡協議会理事長

に就任し、長い間全国の美術館運営、学芸員の調査、研究の奨励に寄与。1986（昭和61）年10月から1994（平成6）年まで美術評論家連盟会長を務める。1986（昭和61）年京都国立近代美術館長を退き、京都芸術短期大学の設立に尽力して翌年6月同大学長となる。1989（平成元）年1月から1992（平成4）年6月まで横浜美術館長を務め、この間1991（平成3）年から1995（平成7）年3月まで京都造形芸術大学長も務める。また、1989（平成元）年私財を投じて全国の若手の美術館学芸員、美術研究者の活動を支援すべく「倫雅美術奨励賞」を創設。1993（平成5）年より式年遷宮記念神宮美術館長、1995（平成7）年より京都造形芸術大学名誉学長となる。主著に、『河北倫明美術論集』全5巻（講談社、1977～1978年）、『河北倫明美術時評集』全5巻（思文閣出版、1992～1994年）がある。1995（平成7）年10月30日、心不全のため東京都文京区の病院で死去。享年80。

岸辺成雄（きしべしげお） 1912年6月16日～2005年1月4日

1912（明治45）年6月16日、東京神田区神保町に生まれる。幼児教育家として著名な父福雄は、東洋家政女学校長。旧制武蔵高等学校高等科を経て、東京帝国大学文学部東洋史学科に進む。卒業後、東京帝国大学文学部副手、1941（昭和16）年旧制東京高等学校講師、教授を経て、1949（昭和24）年東京大学東京高等学校教授に就任。その間、華北、満州、内蒙古の音楽調査、七弦琴の教習、正倉院事務所の委嘱による楽器調査など、さまざまな調査研究を行い、日本大学や東京藝術大学、お茶の水女子大学で日本音楽史の講義を行う。1952（昭和27）年より1965（昭和40）年まで当研究所非常勤研究員として、筑紫箏の調査に従事。1961（昭和36）年東京大学教養学部教授となる。1978（昭和53）年定年退官、のち名誉教授となり、帝京大学教授、東洋音楽学会名誉会長を務める。専門は東洋音楽史。『唐代音楽の歴史的研究 楽制篇上巻』（東京大学出版会、1960年）により昭和36年度、第51回日本学士院賞を受賞、また下巻もあわせた同書で、東京大学より文学博士の学位を受ける。海外音楽の調査を数多く行い、1982（昭和57）年には勲三等旭日中綬章を受勲。その他の著書には『古代シルクロードの音楽 正倉院・敦煌・高麗をたどって』（講談社、1982年）『津軽箏曲郁田流の研究歴史篇』（共著、津軽書房、1976年）などがある。民族音楽学者の故小泉文夫ら多くの研究者を育てる。妻は山田流箏曲家の藤井千代珠、娘も山田流箏曲家の岸辺百代。2005（平成17）年1月4日死去。享年92。

久野真自（くのしんじ） 1913年2月3日～1972年8月29日

1913（大正2）年2月3日、新宿区岩戸町の浄土宗法正寺に、父真岡^{しんけい}、母幸^{こう}の子として生まれる。父真岡は愛知県から上京後、法正寺（慶長8年創建）の住職を務め、真自は23代目となる。1912（明治45）年、浄土宗門徒古賀春江が久留米から上京した折には、法正寺に寄寓している。幼少期から絵画を好み、独立美術協会の研究所へ通う。芝高校を経て大正大学に入学。同大学卒業後、当研究所に入所し、豊岡益人のもとで林真彦と『東洋美術文献目録 附定期刊行物調査表』（座右宝刊行会、1941年）の編纂に携わる。前述の二人に所員の守中祐幸を加えた4名は、新宿の浄土宗寺院の出身で法類。1940（昭和15）年に当研究所を退職し、国民精神文化研究所の嘱託となる。その後応召し、中国（満州）に渡る。大陸で病を得、内地帰還を命ぜられて帰国。戦後は旧富津中学校（千葉県富津町）で国語を教え、教頭を務める。大田区立道塚小学校や文京区立礪川^{れきせん}小学校など

で図工を教え、自宅でも子供の絵画教室を主宰。1972（昭和47）年8月29日死去。享年59。

熊谷宣夫（くまがいのぶお） 1900年9月2日～1972年10月15日

1900（明治33）年9月2日、山形県に生まれる。東京府立四中から、1924（大正13）年旧制第一高等学校文科甲類を卒業。1927（昭和2）年3月東京帝国大学文学部美学美術史学科卒業。卒業論文「大和絵肖像画の研究」は直ちに『国華』に連続掲載され（439・441・442、国華社、1927年6・8・9月）、早くもその才能を世にあらわす。同年東大文学部副手、1930（昭和5）年から1934（昭和9）年まで当研究所嘱託となり、東洋美術総目録編纂事業に加わって室町時代の漢画を担当し、初期の研究所時代はもっぱらこの方面での基礎的研究に携わる。1940（昭和15）年1月朝鮮総督府博物館嘱託となり、同館において大谷探検隊将来西域美術品に触れて以来、当時全く未開拓の分野であった西域美術研究に先鞭をつける。調査記録の乏しい大谷探検隊収集品の原所在地比定に始まる幾多の労作は、これらを西欧の収集品と対応させつつ実証的に独自の見解を示したもので、研究成果は『西域文化研究 5』（法蔵館、1962年）に集大成され、またこの「西域の美術」の論文で東北大学より文学博士の学位を授与される。これより先1944（昭和19）年10月当研究所嘱託となり、1947（昭和22）年8月文部技官となる。1951（昭和26）年2月以来1962（昭和37）年3月退職時まで、当研究所美術部第一研究室長として後進を指導するとともに『美術研究』誌上に健筆を揮い、また長期にわたり同誌の編集を主宰して充実に努める。雪舟研究は1932（昭和7）年の「伝雪舟花鳥図屏風に就いて」（『美術研究』3、1932年3月）にはじまり、死去の年の山陰地方調査旅行、美術史学会全国大会の研究発表におよび、西域美術研究とならんで主要研究テーマとなったが、その成果の大部分は『雪舟等楊』（東京大学出版会、1958年）に結集されている。また朝鮮美術史に関しては、「朝鮮仏画徴」（『朝鮮学報』44、1967年7月）をはじめ数編の論考がある。学究としての長年にわたる真摯な研究活動のほか、東京藝術大学併任教授、東北大学、東京大学、早稲田大学講師として、また最晩年は九州芸術工科大学教授として、学生の指導と研究者の養成に力を尽くし、また美術史学会の創立と運営に献身する。1972（昭和47）年10月15日、膀胱癌のため福岡市の自宅で死去。享年72。

隈元謙次郎（くまもとけんじろう） 1903年1月28日～1978年1月25日

1903（明治36）年1月28日、鹿児島市鴨池町に生まれる。旧制第七高等学校造士館理科乙類を経て、1928（昭和3）年東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業、1931（昭和6）年3月大学院修了。1932（昭和7）年6月当研究所に入り、日本近代美術の調査研究に従事。以来約半世紀近くを、もっぱら近代美術全般の調査研究と、当研究所における基礎資料の収集整備に尽力する。研究面では1939（昭和14）年、「明治初期来朝伊太利亚美術家とその功績」の論文によって、イタリア政府中亜極東協会が創設した第1回レオナルド・ダ・ヴィンチ賞を受賞し、学界に一躍その存在を示す。翌年には表題を改題した『明治初期来朝伊太利亚美術家の研究』（三省堂）を刊行。そのほか当研究所機関誌の『美術研究』誌上に、逐次多数の精緻にして実証的論文を発表したが、これは後に改訂され、『近代日本美術の研究』（大蔵省印刷局、1964年）として上梓される。同書のほか研究業績としては、黒田清輝、浅井忠、藤島武二等の評伝、『黒田清輝日記』全4巻（中央公論美術出版、1966～1968年）『十三松堂日記』全4巻（中央公論美術出版、1965～1966年）等の編集がある。

晩年は岡倉天心の研究をすすめ、隈元を中心に大規模にして完璧を期した天心全集の刊行が企画されたが、その出版を見ずして終わる。そのほか当研究所事業の一環として、1935（昭和10）年以来続いている『日本美術年鑑』の編集の指導に当たる。またその指導の下に整備された当研究所の近代美術関係資料は、他に類をみず、研究者はじめその恩恵に浴するものは多い。研究執筆以外の美術行政面においても、1952（昭和27）年9月から1966（昭和41）年3月まで東京国立近代美術館運営委員、1971（昭和46）年3月から1978（昭和53）年1月まで同評議員として運営、購入等にあたり、東京都美術館においても同様に、1965（昭和40）年4月から1977（昭和52）年3月まで運営審議会委員、これ以前は参与会委員として尽力する。また文化財保護審議会臨時専門委員として、近代美術の指定審議にあたり、1975（昭和50）年度文化勲章の選考委員を務め、また1962（昭和37）年12月から財団法人博物館明治村評議員として、その運営および作品の収集に参与する。教育方面では、当研究所在職中に女子美術大学の教壇にたち、1966（昭和41）年3月退職後は、1974（昭和49）年3月まで東京家政大学教授として教鞭をとる。1978（昭和53）年1月25日、前立腺癌のため東京都目黒区の病院で死去。享年74。没後、明治美術の史的研究その他の功績によって第4回明治村賞が授与された。

久米桂一郎（くめけいいちろう） 1866年8月8日～1934年7月27日

1866（慶応2）年8月8日、佐賀城下八幡小路に、歴史学者久米邦武の長男として生まれる。1874（明治7）年上京、少年期から父が欧米より将来した西洋画に親しむなど、絵画へ強い関心を示す。1881（明治14）年、第2回内国勧業博覧会出品の工部美術学校生徒のコンテ画「弓術之図」を見て西洋画研究を志す。この志望は「学問は自発に因る」という父の教育方針から快諾され、1884（明治17）年から同博の生徒出品の一人藤雅三^{きつびつ}について擦筆画を学び洋画研究を開始。1886（明治19）年フランスへ自費留学し、前年渡仏していた藤の師ラファエル・コランに入門、アカデミー・コラロッシのコラン教室で木炭素描を始める。同年、黒田清輝を知り、以後二人で共同生活を営むなど親密な交友を結ぶ。留学前半期すでにバルセロナ、パリ両万国博覧会の用務に携わり、後年内外博覧会の大半に関わることになる端緒をなした。1893（明治26）年、7年間の留学を終えて帰国、翌年には山本芳翠^{ほうすい}の画塾生巧館を譲り受け、黒田と天真道場をおこして指導にあたる。1896（明治29）年、黒田と明治美術会を脱会し新たに白馬会を結成。同年東京美術学校に新設された西洋画科の授業を黒田と依嘱され、1898（明治31）年教授となって、西洋考古学、解剖学といった画学の基礎部門を担当。1900（明治33）年、パリ万国博覧会に「残曠」他を出品し褒状を受ける。その後は制作発表から遠ざかり、もっぱら美術教育、西洋美術の紹介、啓蒙、および美術行政家として活躍、日本のアカデミズム形成に大きな役割を果たす。白馬会機関誌『光風』をはじめ、『美術新報』等の諸誌に精力的な執筆活動を行い、これらの主要な文献は『方眼美術論』（久米美術館、1984年）に収められている。1922（大正11）年から1931（昭和6）年まで、帝国美術院幹事を務める。黒田没後は当研究所の創立に際して設立準備委員として尽力する。1932（昭和7）年2月東京美術学校教授を退官し、従三位に叙せられ、同年6月名誉教授となる。その後は重要美術品等調査委員会委員として活躍。1934（昭和9）年7月27日、腎臓癌のため品川区上大崎の自宅で死去。享年68。

倉田文作（くらたぶんさく） 1918年4月17日～1983年1月23日

1918（大正7）年4月17日、画家倉田重吉（白洋）の次男として千葉県安房郡北条町に生まれる。長野県立上田中学校を経て1940（昭和15）年青山学院文学部英文科卒業、1942（昭和17）年早稲田大学文学部文学科卒業後入営、1941（昭和16）年より当研究所内の東洋美術国際研究会に勤務。1945（昭和20）年文部省社会教育局嘱託、1947（昭和22）年国立博物館に入り、調査課嘱託を経て、1948（昭和23）年文部技官となり、1950（昭和25）年文化財保護委員会事務局美術工芸課彫刻部勤務となる。以後、1959（昭和34）年彫刻部主査、1964（昭和39）年文化財調査官、1966（昭和41）年事務局美術工芸課長を歴任、1969（昭和44）年東京国立博物館学芸部長に就任。1972（昭和47）年文化庁文化財保護部文化財鑑査官、1975（昭和50）年奈良国立博物館長、1976（昭和51）年から文化財保護審議会専門委員を務める。また国立国際美術館評議員会評議員、国立歴史民俗博物館展示企画委員、国際交流基金運営審議会委員、奈良県および和歌山県文化財保護審議会委員、日本放送協会近畿地方放送番組審議会委員、日本展示学会評議員会評議員、日本伝統工芸展鑑査委員など、多くの役職を歴任。国内のみならず海外においても、東洋美術品の調査研究を始め、日米文化教育交流会議専門委員、ユネスコ・ローマ文化財保存修復研究国際センター理事兼財務委員を務め、その他多くの国際会議に出席し、日本美術の啓蒙、普及、文化財の保護に貢献し、文化財の国際交流に功績を残す。1981（昭和56）年博物館法施行30周年を記念して、博物館振興の功績により文部大臣より表彰を受け、1983（昭和58）年従四位に叙せられ勲二等瑞宝章を受勲。主著に『原色日本の美術 5 密教寺院と貞観彫刻』（小学館、1967年）があり、その他多くの美術全集に執筆。奈良国立博物館長在職中の1983（昭和58）年1月23日、肝不全のため奈良市で死去、享年64。

倉田平吉（くらたへいきち） 1912年1月25日～2000年3月19日

1912（明治45）年1月25日、画家倉田重吉（白洋）の長男として東京に生まれる。弟は倉田文作。1935（昭和10）年3月青山学院英文科卒業、4月に当研究所嘱託となり『日本美術年鑑』の編集に携わる。1936（昭和11）年4月に助手となったが、1943（昭和18）年1月に退職、7月に大同居留民団学務課に勤務し、大同石仏調査に従事する。軍務を経て、1948（昭和23）年10月には国立博物館の臨時翻訳に従事、1952（昭和27）年1月に社団法人日本博物館協会主事となる。主な著書に、『信州の美術 近代絵画の系譜』（共著、毎日新聞社、1979年）がある。2000（平成12）年3月19日、肺炎のため神奈川県小田原市の病院で死去、享年88。

黒川光朝（くろかわみつとも） 1918年7月24日～1990年11月19日

1918（大正7）年7月24日、東京市赤坂区伝馬町に菓子屋虎屋を生家として生まれる。東京府立第一中学、旧制成城高等学校を経て、東京帝国大学文学部へ入学。菓子を美的な文化ととらえ、日本文化の研究に興味を抱いて美学美術史学を専攻、日本の古美術を研究し、1941（昭和16）年12月東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。1942（昭和17）年1月、財団法人国際文化振興会に勤務し、海外向けに日本を紹介する仕事に携わる。同年11月30日より当研究所助手となり、日本の古美術を担当。論文に「教王護国寺藏牛皮華鬘」（『美術研究』129、1943年3月）などがある。1947（昭和22）年、父の武雄が菓子屋の地位の低さに憤り、参議院議員選挙に立候補して当選し

たため、同年3月末に当研究所を退職し、虎屋第十六代となる。同年5月虎屋商工株式会社取締役社長に就任。1951（昭和26）年2月社団法人日本青年会議所初代会頭に就任。従来、直営だけであった虎屋の店舗を、1962（昭和37）年から百貨店へも出店させるなど、経営上の改革を行う一方、1973（昭和48）年に虎屋文庫を設立。江戸時代の虎屋関係文書や菓子、食文化に関する文献、図書、菓子の木型等の資料を整理、保存、公開するなど、菓子文化の伝承、保存、普及に尽力する。1975（昭和50）年5月東京和生菓子商工業協同組合理事長、同年6月全国和菓子協会長に就任。文学部時代の友人文部大臣坂田道太らを頼み、伊藤延男所長時代、臨時行政調査会が提出した研究所の廃止案を阻止する。著書に『菓子屋のざれ言』（虎屋、1978年）『続菓子屋のざれ言』（虎屋、1984年）がある。また、俳句、写真など趣味が広く、句集に『花くらべ』『梅か枝』、写真集に『京都の四季』（鹿島出版会、1982年）などがある。1990（平成2）年11月19日死去。享年72。

児島喜久雄（こじまきくお） 1887年10月10日～1950年7月5日

1887（明治20）年10月10日、東京市四谷区舟町に児島益謙の五男として生まれる。1906（明治39）年学習院中等科卒業後、1909（明治42）年旧制第一高等学校文科卒業、同年東京帝国大学文科大学哲学科に入学し、美学を専攻、翌年4月から白樺同人となり同誌に寄稿する。1913（大正2）年7月東京帝国大学卒業、引き続き大学院に進み、大塚保治教授のもとでヨーロッパ美術史研究に従う。1915（大正4）年独逸学協会中学校ドイツ語教師、更に翌年5月学習院講師となり、またこの年矢代幸雄と『美術新報』の編集に当たる。1918（大正7）年4月東京女子大学講師、1920（大正9）年4月東宮職出仕を嘱託、6月に学習院の教授となる。1921（大正10）年8月アメリカを経由してヨーロッパに留学、ヴェルフリン、ボーデ博士等とともに欧州美術史の研究に従事、留学中、東北帝国大学助教授、文部省留学生となる。1926（大正15）年7月帰国、東北帝国大学に赴任。1932（昭和7）年9月、当研究所嘱託となり1934（昭和9）年11月九州帝国大学法文学部西洋美術史講師、1935（昭和10）年3月東京帝国大学文学部助教授兼東北大学助教授となる。1938（昭和13）年12月「柏林日本古美術展覧会」開催に際し、ドイツ、フランス、イタリア、アメリカに出張し、5月に帰国。1939（昭和14）年京城帝国大学法文学部西洋美術史講師に、1940（昭和15）年美術振興会調査会委員となる。翌年東京帝国大学教授となり、美術史講座を担当、1946（昭和21）年6月国宝保存委員会委員となる。1948（昭和23）年3月東京大学を定年退官。同月、国立博物館評議員、4月早稲田大学文学部講師、5月長尾美術館長となり、1949（昭和24）年1月には大学設置委員会委員、東京工業大学講師となって逝去まで在職する。主著に『レオナルド研究』（岩波書店、1952年）『西洋美術館めぐり』（座右宝刊行会、1935年）『美術概論』（小山書店、1936年）『希臘の鉄』（道統社、1942年）などがあり、油絵肖像画、装丁などにも筆をとる。1950（昭和25）年7月5日、心不全にて急逝。享年62。

小山富士夫（こやまふじお） 1900年3月24日～1975年10月7日

1900（明治33）年3月24日、岡山県玉島市に生まれる。東京府立第一中学から東京商科大学に入学したが、1923（大正12）年中途退学、その後さまざまな体験を経て作陶をはじめ、ついで古陶磁研究へすすみ、1930、1931（昭和5、6）年頃留学中の郭沫若と親交を結び、1935（昭和10）年頃から中国諸地方の古窯址を踏査、そのなかでも1941（昭和16）年定窯古窯址を発見した意義は

大きい。1942（昭和17）年から1943（昭和18）年まで、当研究所内の東洋美術国際研究会に在職。同年12月には、『支那青磁史稿』（丈中堂、1943年）を発表する。戦後は、東京国立博物館調査員、文化財保護委員会調査官として陶磁工芸の調査と文化財指定、各種陶磁全集の編集、評論に活躍し、1960（昭和35）年3月には第10回文部大臣賞芸術選奨をうける。とくに1954（昭和29）年の『東洋古陶磁』全6巻（美術出版社、1954年）は、数カ国語に訳出されている。また、1952（昭和27）年以降、毎年神奈川県立近代美術館における陶磁器展の企画をはじめ、多くの陶磁器展に参画し、根津美術館嘱託、神奈川県文化財専門委員、出光美術館顧問、日本工芸会副理事長などを歴任する。1961（昭和36）年秋、「永仁の壺」重要文化財指定解除問題がおり、翌年7月文化財保護委員会事務局を辞任。官職辞任後も、海外諸国の遺跡調査、学術講演に活躍し、一方1973（昭和48）年に土岐市泉町に築窯して作陶生活を楽しみ、翌年11月、日本橋壺中居において「作陶10年」展を開催する。日本陶磁協会理事、東洋陶磁学会常任委員長。1975（昭和50）年10月7日、心不全のため岐阜県土岐市の自宅で死去。享年75。

今 日出海（こんひでみ） 1903年11月6日～1984年7月30日

1903（明治36）年11月6日、北海道函館市に生まれる。三男で長兄は作家の今東光。1928（昭和3）年東京帝国大学仏文科卒業。同年、同大法学部に入学するが1年で退学、1929（昭和4）年から1930（昭和5）年に当研究所に在職し西洋美術史を研究する。研究所時代に「醍醐寺展」（1929年6月19日～6月28日、日本橋三越）を手がける。1933（昭和8）年から終戦まで明治大学仏文学の教授となる。学生時代から劇団新座をおこすなど演劇活動も行い、また同人誌『作品』を創刊し小説、随筆、評論の分野で活躍、文芸家協会書記長を務める。1945（昭和20）年、フィリピン従軍から奇跡的に生還し、戦後文部省文化課長となり、翌年「荒廃した首都に文化、芸術の息吹を」と芸術祭事業を提唱、推進する。1968（昭和43）年創設された文化庁の初代長官に就任、著作権保護に尽力するなど日本の文化行政を軌道に乗せる。国際性を買われ、1972（昭和47）年から8年間国際交流基金初代理事長も務める。このほか放送番組向上委員会委員長、日本アカデミー賞協会名誉会長、芸術祭執行委員長なども歴任。1974（昭和49）年一等瑞宝章を受勲。1978（昭和53）年11月には文化功労者に選ばれる。1980（昭和55）年から国立劇場会長。作家としては1950（昭和25）年『天皇の帽子』で直木賞受賞。1984（昭和59）年7月30日、脳梗塞のため神奈川県鎌倉市の病院で死去。享年80。

坂本万七（さかもとまんしち） 1900年1月13日～1974年4月19日

1900（明治33）年1月13日、広島県福山市笠岡町に生まれる。私立盈進商業を中退、1919（大正8）年武者小路実篤主宰の日向「新しき村」に入る。1924（大正13）年築地小劇場の舞台写真を撮り始め、1926（昭和元）年には豊島区目白町に桃源社坂本写真場を開く。1933（昭和8）年から1940（昭和15）年にかけて満州・蒙古の古代遺跡を撮影、また柳宗悦の民芸運動に参加して民芸品を対象に撮影する。1947（昭和22）年から1949（昭和24）年にかけて、当研究所嘱託として、美術研究調査の資料写真撮影に携わる。そのほか美術出版物の写真担当として、その活躍は広範囲にわたり、自己を没却してもっぱら作品自体に語らせようとする制作に対する敬虔な姿勢は、その道の専門家から高く評価される。また、戦前満州、中国、朝鮮などに広く撮影旅行をするが、戦後は1966（昭

和41)年ギリシア、ローマなどを巡廻する。写真を担当した主要出版物には『埴輪美』(聚楽社、1942年)『法隆寺金堂釈迦三尊像』(岩波書店、1949年)『法隆寺宝蔵小金銅像』(岩波書店、1954年)『日本の彫刻』(美術出版社、1960年)『土の芸術』(美術出版社、1954年)、『大徳寺』(朝日新聞社、1958年)『葉師寺』(実業之日本社、1960年)『国宝彫像』(徳間書店、1967年)『日本の工芸』(読売新聞社、1968年)『奈良六大寺大観 第3巻 法隆寺3』(岩波書店、1969年)等がある。1974(昭和49)年4月19日、胃癌のため東京都世田谷区の自宅で死去。享年74。没後、『美しき仏たち 坂本万七遺作集』(日本経済新聞社、1975年)が刊行された。

澤柳大五郎(さわやなぎだいごろう) 1911年8月23日～1995年11月3日

1911(明治44)年8月23日、東京府北豊島郡に生まれる。成城学園創設者澤柳政太郎の子息。1935(昭和10)年東北大学法文学部を卒業。美学美術史学を専攻し、同年より1938(昭和13)年3月まで同学部美学美術史学研究室助手を務める。同年11月から1943(昭和18)年10月末日まで文部省日本文化大観編集会嘱託となり、同年11月より1949(昭和24)年まで、当研究所嘱託となる。戦時中は中国へ出征。1949(昭和24)年東京教育大学助教授、1953(昭和28)年同大学教授となる。ギリシア、ローマ古代美術、特に葬礼に関する視覚資料を中心に調査、研究する。1959(昭和34)年文部省在外研究員として渡欧、1961(昭和36)年帰国。また、1966(昭和41)年レバノン、トルコ、ギリシア、イタリアを訪れる。1968(昭和43)年東京教育大学を定年退官し、名誉教授となる。同年より早稲田大学文学部教授となり、1982(昭和57)年定年退職するまで同大学で教鞭を取る。主著に、「ギリシア陶器と日本—古代中近東・地中海考古と美術展に触れて—」(『陶説』242、1973年5月)『ギリシアの美術』(岩波書店、1964年)がある。1995(平成7)年11月3日、心不全のため東京都小平市の病院で死去。享年84。

島田修二郎(しまだしゅうじろう) 1907年3月29日～1994年4月11日

1907(明治40)年3月29日、兵庫県神戸市に生まれる。1927(昭和2)年3月、旧制第三高等学校文科甲類を卒業後、京都帝国大学文学部哲学科に入学、美学美術史を専攻し、1931(昭和6)年3月に卒業後、1937(昭和12)年3月まで、同大学院で東洋絵画史を専攻する。1938(昭和13)年3月から1942(昭和17)年3月まで同大学文学部副手を務め、1941(昭和16)年5月から1948(昭和23)年4月まで京都府社寺課の嘱託として寺院什宝の臨時調査に当たる。同年7月から当研究所に勤務、1951(昭和26)年12月から恩賜京都博物館監査員、1952(昭和27)年4月同博物館の国への移管にともなって文部技官となり、5月には学芸課美術室長となる。1964(昭和39)年3月職を辞し、7月からプリンストン大学客員教授として日本美術史を担当、1965(昭和40)年7月には同大学教授となり、1975(昭和50)年6月に定年退職、名誉教授となる。同7月、メトロポリタン美術館顧問となり、また翌年9月から1977(昭和52)年1月までハーバード大学客員教授として中国美術史を教える。1977(昭和52)年8月、メトロポリタン美術館顧問を辞し、9月に日本に帰国。1980(昭和55)年から1982(昭和57)年まで京都国立博物館評議員会評議員、1992(平成4)年まで名誉評議員を務める。この間、1982(昭和57)年から1986(昭和61)年まで文化財保護審議会第一専門調査会絵画彫刻部会専門委員となり、1975(昭和50)年から1986(昭和61)年までメトロポリタン東洋美術研究センター会長、1982(昭和57)年から1991(平成3)年まで

国際交流美術史研究会長、次いで名誉会長を務める。中国、日本の絵画史研究に大きな足跡を残す。プリンストン大学では、欧米の学生に対して『古今著聞集』『法華経』などの原典講読を含む本格的な指導を行い、11年間に20人近くの東洋美術史専門の研究者を輩出する。このような、東洋美術史研究における世界的な貢献により、1990年度には第61回朝日賞を受賞。著作のほとんどは、『島田修二郎著作集』上、下（中央公論美術出版社、1987・1993年）に収められている。1994（平成6）年4月11日、呼吸不全のため京都市西京区の病院で死去。享年87。

下總寛三（しもふさかくさう）（皖一） 1898年3月21日～1962年7月8日

1898（明治31）年3月21日、埼玉県に生まれる。埼玉師範学校を経て、1920（大正9）年3月東京音楽学校甲種師範科を首席で卒業。卒業後地方へ赴任し、1928（昭和3）年を以て7年間の地方音楽教師の職を退く。1924（大正13）年宇都宮より東京の信時潔宅に通い作曲法の教授を受ける。退職による上京の後も引き続き信時潔のもとで作曲法を学ぶかわら、生活のため私立学校の教師として勤務。また当時新設された武蔵野音楽学校で音楽理論およびオルガンの教鞭をとる。1932（昭和7）年3月文部省在外研究員としてベルリンの国立ホッホシューレに留学。ドイツでは、パウル・ヒンデミット教授に師事、近代作曲法を学ぶ。1934（昭和9）年9月帰国。東京音楽学校助教授に迎えられ作曲法や音楽理論の講義をなし、1942（昭和17）年3月同校教授となる。同年10月芸術学特別学会において「日本語の特殊な場合の旋律と律動とに就いて（レコード使用）」の研究発表を行う。1956（昭和31）年東京藝術大学音楽学部長に就任、1958（昭和33）年1月から1962（昭和37）年7月まで当研究所芸術部長在任、1960（昭和35）年5月東京藝術大学音楽部長を退職。唱歌や童謡の作曲を通して初等音楽教育に果たした役割は大きく、近代音楽の基礎を築く。著書に『和声学』『対位法』『作曲法』『日本音階の話』などの理論書がある。門下生に芥川也寸志、團伊玖磨などがある。1962（昭和37）年7月8日、肝不全のため死去。享年64。

下村英時（しもむらひでとき） 1903年2月19日～1967年1月12日

1903（明治36）年2月19日、下村観山の三男として東京市下谷区谷中初音町に生まれる。小学校時代は、岡倉天心傘下にあった観山と共に五浦の地で過ごし、その後横浜市中区本牧和田町に移る。1920（大正9）年3月に東京の開成中学を卒業。1926（大正15）年3月に研究のためヨーロッパへ渡りイギリス、フランス、オーストリア、イタリア、ギリシア、エジプトなどを歴遊し、1927（昭和2）年帰国。帰国後は観山の秘書となる。1933（昭和8）年8月当研究所に入り、明治大正美術史編纂に従事。1934（昭和9）年1月に東京美術学校嘱託となり、1936（昭和11）年3月31日に同校書記となるが、1943（昭和18）年6月30日に依願退職。その間、1937（昭和12）年から1941（昭和16）年まで兵役につく。1944（昭和19）年2月29日当研究所書記となり、1949（昭和24）年6月1日文部技官となるが、公職追放令にふれ同年7月25日に退職。その後官職には一切つかず、自宅で日本近代美術史の研究に専念し、研究の成果の一端として『天心とその書簡』（日研出版、1964年）を刊行するが、3年後の1967（昭和42）年1月12日死去。享年63。

須賀利雄（すがとしお） 1908年12月1日～1994年12月21日

1908（明治41）年12月1日、東京市下谷区上野桜木町に生まれる。1935（昭和10）年東京帝国大

学文学部美術史学科卒業。当研究所に勤務し、明治大正美術史編纂事業に携わる。1943（昭和18）年辞任。父の事業を助けて東京上野広小路でカフェ菊屋（現在の黒船亭）や皇族も来店した雨月荘などを経営し、上野のれん会会長を務める。論文に「楠公銅像製作の由来」（『美術研究』73、1938年1月）がある。1994（平成6）年12月21日、心不全のため死去。享年86。

菅沼貞三（すがぬまていぞう） 1900年12月11日～1993年2月20日

1900（明治33）年12月11日、静岡県小笠郡菊川町に生まれる。1926（大正15）年3月慶應義塾大学文学部美学美術史科卒業、同年11月から1928（昭和3）年4月まで京都帝国大学附属図書館嘱託勤務。1930（昭和5）年1月に開所をひかえた当研究所の職員に採用され、同年6月より助手を務める。その後、嘱託を経て1943（昭和18）年4月当研究所員に任官。1948（昭和23）年12月31日に当研究所を退官するまで機関誌『美術研究』に健筆を揮い、1932（昭和7）年1月の創刊号より数多くの研究成果を公表する。退官後、1951（昭和26）年静岡大学教育学部、1953（昭和28）年愛知大学文学部非常勤講師などを経て、1961（昭和36）年4月慶應義塾大学文学部助教授、翌年4月同大学文学部教授となり、1969（昭和44）年3月定年退職。この間、1955（昭和30）年6月から1968（昭和43）年まで大和文華館研究員嘱託となり、同館の刊行する『大和文華』誌上に多くの論考を発表する。1970（昭和45）年4月愛知学院大学教授となり、1973（昭和48）年4月には常葉学園短期大学客員教授、1978（昭和53）年3月愛知学院大学を定年退職し、翌年4月より常葉美術館名誉館長の職に就く。1960（昭和35）年慶應義塾大学より文学博士の学位を得、1952（昭和27）年3月から1983（昭和58）年12月まで静岡県文化財保護審議会委員、1968（昭和43）年8月から1971（昭和46）年7月まで東京都文化財専門委員を務める。研究所時代より文人画を中心に日本の近世絵画の研究を進め、とくに郷里と縁の深い渡辺崋山の研究の基礎を確立して大きな功績をあげる。崋山没後150年を記念して『定本 渡辺崋山』全3巻（郷土出版社、1991年）が刊行されたが、崋山研究の基礎資料を集大成した本書に監修者、執筆者として参画したのが最後の大きな仕事になる。1993（平成5）年2月20日、心不全のため静岡県藤枝市の病院で死去。享年92。

鈴木友也（すずきともや） 1925年12月20日～1998年2月1日

1925（大正14）年12月20日、山形県に生まれる。1952（昭和27）年3月東京美術学校工芸科彫金部卒業。同年4月文化財保護委員会保存部美術工芸品課に採用される。翌年1月に当研究所美術部第一研究室に異動、2月に文化財保護委員会美術工芸課へ異動。1981（昭和56）年4月14日当研究所修復技術部長となる。1963（昭和38）年以降、東京藝術大学美術学部や東京学芸大学教育学部、東京経済大学の講師を務め、1987（昭和62）年3月31日定年退官。著書に『日本の美術 89 茶湯釜』（至文堂、1973年）がある。論文には「銅製五輪塔」（『国華』1194、1995年5月）「文化財保存修理論（試論）」（『保存科学』26、1987年3月）「東北地方の鏡像と懸仏」（『MUSEUM』269、1973年8月）などがある。1998（平成10）年2月1日死去。享年72。

関野 貞（せきのただし） 1867年12月15日～1935年7月29日

1867（慶応3）年12月15日、越後国高田に生まれる。1892（明治25）年第一高等中学校卒業、東

京帝国大学工科大学造家学科入学、1895（明治28）年卒業。翌年東京美術学校講師となり、以来東洋および日本建築史を講じ、また同年内務省古社寺保存計画調査を嘱託され、次いで奈良県技師として古社寺の保存計画と修理を担当するかたわら大阪における日本生命保険会社本社の設計に従事する。これは関野の設計に掛る唯一の洋式建築である。1901（明治34）年東京帝国大学工科大学助教授に任じられ、内務省、文部省を兼任、翌年6月韓国へ古建築調査のため出張、初めて同国建築の調査に着手する。「法隆寺金堂塔婆及中門非再建論」（『史学雑誌』16-2、1905年2月、『建築雑誌』218、1905年2月）「平城京及大内裏考」（『東京帝国大学紀要』工科第3冊、1907年6月）等を発表し、1908（明治41）年工学博士の学位を授けられる。翌年韓国政府度支部建築所より古建築調査に関する調査を依頼され、『朝鮮古蹟図譜』全15巻（朝鮮総督府、1915～1935年）を編纂し公刊。1917（大正6）年、これらの功績に対し、フランス学士院金石学及美文学院よりスタニスラス・ジュリアン賞を贈られる。1918（大正7）年建築史研究のため中国、インド、イギリス、フランス、イタリアの諸国に留学を命じられ、1920（大正9）年帰国、東京帝国大学教授となり、内務、文部両技師を兼任し、古社寺保存会委員、史蹟名勝天然記念物調査会臨時委員、學術研究会議員等を務める。1928（昭和3）年東京帝国大学教授を退官、名誉教授となる。1929（昭和4）年4月東方文化学院東京研究所が設立されると、評議員となりあわせて研究員として中国歴代帝王陵の研究に従事し、1933（昭和8）年その研究を完了する。引続き遼金時代の建築の研究にあたり、『遼金時代ノ建築ト其仏像図版』上、下（東方文化学院東京研究所、1934・1935年）を公刊、これと同時に熱河の諸建築の研究を遂げ『熱河』全4巻（共著、座右宝刊行会、1934年）を公刊する。更に満日文化協会評議員として幾多の研究問題、その他重要な提案をし着々その功績を収める。1930（昭和5）年から1933（昭和8）年まで当研究所嘱託。元東京国立文化財研究所長関野克、東京大学名誉教授関野雄は子息。1935（昭和10）年7月29日、白血病のため死去。享年67。

関野 克（せきのまさる） 1909年2月14日～2001年1月25日

1909（明治42）年2月14日、東京に生まれる。1930（昭和5）年東京帝国大学工学部建築学科に入学。1933（昭和8）年同学科を卒業後同大学院に進学し、日本の住宅史研究に力を注ぎ、「日本古代住居址の研究」（『建築雑誌』591、1934年11月）を皮切りに古代、中世の住宅建築に関する調査、研究に優れた業績をあげる。大学院在学中の1935（昭和10）年9月より東京美術学校の非常勤講師を務める。1937（昭和12）年藤原豊成殿の復元などを含む「古文書による奈良時代住宅建築の研究」（『建築学会論文集』23、1941年）により第1回建築学会賞を受賞。1938（昭和13）年4月25日同大学院を満期退学。1940（昭和15）年1月同大学工学部助教授となり、1966（昭和41）年同大学第二工学部設立準備委員会常務幹事、翌年同大学第二工学部勤務となる。この間、日本における住宅建築のはじめての通史となる『日本住宅小史』（相模書房、1942年）を刊行。1945（昭和20）年9月「日本住宅建築の源流と都城住宅の成立」により工学博士となる。1946（昭和21）年同大学第二工学部教授、1949（昭和24）年東京大学生産技術研究所教授となる。1951（昭和26）年登呂遺跡の竪穴式住居部材の発掘を機に、日本ではじめての古代住宅の復元となる登呂遺跡竪穴式住居復元を行い、敗戦間もない我が国において太古の住居イメージを実証的に提示して注目される。一方、1949（昭和24）年の法隆寺金堂炎上によって貴重な文化財を保存することへの意識が高まる中で1950（昭和25）年文化財保護委員会事務局が設置されると、その建造物課初代課長

に任じられ、1957（昭和32）年4月まで同大学生産技術研究所教授との兼務を続ける。これ以後、建築史学の調査研究と文化財の保存との両分野にわたって活躍。1952（昭和27）年4月から当研究所保存科学部長を兼務する。1957（昭和32）年4月から1961（昭和36）年8月まで文化財専門審議会専門委員、1960（昭和35）年から1968（昭和43）年まで宮内庁宮殿造営顧問となる。また、姫路城、松本城など大型建造物の解体修理などにも従事する。1965（昭和40）年当研究所長となり、1969年（昭和44）年9月東京大学定年退官まで兼務。のち名誉教授となる。1970（昭和45）年財団法人万博協会美術展示委員、1972（昭和47）年4月高松塚古墳保存対策調査委員となる。1973（昭和48）年「腐朽木材に科学的処置を加えて耐用化し、再使用することによる古建築復元の一連の業績」により日本建築学会賞を受賞。1978（昭和53）年当研究所を退任し、博物館明治村館長となる。1979（昭和54）年長年にわたる国宝、重要文化財建造物の修理、復元の功績により勲二等瑞宝章を受勲。戦後まもなくより文化財保護に関する国際交流にも尽力し、1986（昭和61）年文化財保存修理技術の近代化と国際交流における功績により日本建築学会大賞受賞。1989（平成元）年イコモス（国際記念物遺跡会議）国内委員会設立の業績によりイコモスよりピエロ・カゾーラ賞を受賞。1990（平成2）年、長年の文化財保護における政策、行政、人材育成の功績により文化財保護の分野においてはじめて文化功労者として顕彰される。2001（平成13）年1月25日死去。享年91。経歴、著作目録および残された資料の所在については藤森照信「関野克先生を偲ぶ」（『建築史学』37、2001年9月）に詳しい。当研究所名誉研究員。

田澤 坦（たざわゆたか） 1902年1月21日～1986年7月1日

1902（明治35）年1月21日、神奈川県横須賀市に生まれる。1925（大正14）年に東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業、同大学院に3年在学の後、1928（昭和3）年6月に東京帝国大学史料編纂所嘱託となる。1932（昭和7）年7月文部省国宝保存に関する調査計画等の嘱託、1942（昭和17）年8月当研究所員となる。1947（昭和22）年5月東京国立博物館資料課長、1951（昭和26）年2月同館工芸課長となる。1953（昭和28）年2月、前年4月に設立された奈良国立文化財研究所長に任命され、1959（昭和34）年6月から当研究所へ異動し、1962（昭和37）年4月15日に美術部長で定年退官。その後、同年4月から1974（昭和49）年3月まで武蔵野美術大学教授、のち名誉教授となる。この間、1928（昭和3）年4月から1942（昭和17）年3月まで共立女子専門学校、1932（昭和7）年9月から1942（昭和17）年9月まで東京女子大学、1942（昭和17）年4月から1954（昭和29）年3月まで東京大学文学部に講師として出講し、美術史教育にも力を尽くす。さらに、1966（昭和41）年5月から1982（昭和57）年6月まで財団法人元興寺文化財研究所長、常務理事を務め、文化財保護審議会専門委員（第1分科会絵画彫刻部会、第2分科会建造物部会）、東京国立博物館評議員、畠山記念館評議員、佐野美術館理事等を歴任。その研究も日本美術の各時代、分野にわたるもので、大岡実と著した『図説日本美術史』（岩波書店、1933年）がよくその性格を示している。1986（昭和61）年7月1日、脳出血のため神奈川県川崎市の病院で死去。享年84。

立田三朗（たつたさぶろう） 1915年3月28日～1970年1月1日

1915（大正4）年3月28日、東京市滝野川区田端に鑄金家であり歌人である香取秀真の三男として生まれる。小学生の頃より母方の立田姓を名乗る。1932（昭和7）年4月東京美術学校西洋画科

入学。1937（昭和12）年3月同校油画科卒業後、研究科を経て、仙台陸軍幼年学校の図画教授となる。1942（昭和17）年1月15日に当研究所内の東洋美術国際研究会の事務嘱託となり、“Art Guide of Nippon”（東洋美術国際研究会、1943年）の編纂に従事する。1944（昭和19）年5月30日当研究所の嘱託となるが、同年8月15日に応召。戦後1947（昭和22）年8月1日国立博物館保存修理課へ勤務後、1949（昭和24）年9月30日文部省大学学術局、1950（昭和25）年3月31日再び国立博物館、同年9月15日文化財保護委員会保存部美術工芸課と異動の後、1962（昭和37）年10月1日当研究所保存科学部へ異動。翌年10月1日保存科学部修復技術研究室長に昇任。「金工品の修理について（その1）」（『保存科学』2、1966年3月）をはじめ『保存科学』『MUSEUM』『国立博物館ニュース』等に多数の論文を発表している。また歌集に『鎌倉乃やと』（かまくら春秋社、1988年）がある。1970（昭和45）年1月1日急逝。享年54。

田中一松（たなかいちまつ） 1895年12月23日～1983年4月19日

1895（明治28）年12月23日、山形県鶴岡市に生まれる。庄内中学校から、1919（大正8）年旧制第一高等学校文科を卒業、1923（大正12）年3月東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。1924（大正13）年12月から1926（大正15）年12月まで東京帝室博物館美術課嘱託、同年12月古社寺保存計画調査嘱託、1935（昭和10）年3月国宝保存に関する調査嘱託、翌年10月重要美術品等調査委員会臨時委員、1945（昭和20）年10月社会教育局国宝保存に関する調査嘱託、1947（昭和22）年5月国立博物館の事務嘱託を経て、同年8月文部技官となり、国立博物館に勤務する。1950（昭和25）年9月文化財保護委員会保存部美術工芸課勤務、同年12月から1966（昭和41）年2月まで文化財専門審議会専門委員を務める。1952（昭和27）年10月当研究所美術部長、翌年11月当研究所長となる。1958（昭和33）年7月から翌年3月までヨーロッパ巡回日本古美術展派遣団長として渡欧、帰途インドの美術遺跡、博物館を視察する。1965（昭和40）年3月当研究所長を退官、同年4月から1977（昭和52）年8月まで国華社主幹、1966（昭和41）年2月から1968（昭和43）年6月まで文化財保護委員会委員を務め、1967（昭和42）年勲三等旭日中綬章を受勲、1968（昭和43）年6月から1976（昭和51）年6月まで文化財保護審議会委員、1972（昭和47）年8月から1973（昭和48）年4月まで高松塚古墳総合学術調査会副会長を務める。同年5月アメリカ合衆国フリア美術館よりフリア・メダルを受賞、1974（昭和49）年11月勲二等瑞宝章を受勲。1977（昭和52）年8月国華社編集顧問、その間、女子美術専門学校、日本大学、東北大学、早稲田大学、金沢美術工芸大学、東京大学等の講師および、日本中国文化交流協会、トキワ松学園、中央美術学園、栃木県立美術館、根津美術館、畠山記念館、出光美術館、颯川美術館、山種美術館、致道美術館、博物館明治村、本間美術館等の役員を務める。終始一貫してわが国文化財保護の行政に従事し、主として絵画作品の実査研究を行う。その研究領域は広範にわたり、仏教美術をはじめ、大和絵、絵巻物、水墨画、宋元画、宗達・光琳派、南画にまで及んでいる。そして多くの研究者を養成、指導し、その学恩に浴すものは少なくない。研究業績としては、1920（大正9）年以来、種々の学界誌や書籍に発表されているが、その主要論文は還暦記念出版『日本絵画史の展望』（美術出版社、1958年）古希記念出版『日本絵画史論集』（中央公論美術出版、1966年）に収録されている。また、早くから雑誌『国華』の編集に関与して1965（昭和40）年から1975（昭和50）年にいたる間には主幹として多くの新出作品の紹介に努める。1983（昭和58）年4月19日、老衰のため東京都杉並区の病

院で死去。享年 87。死去に際し従四位に叙せられ、没後、『田中一松絵画史論集』上、下（中央公論美術出版、1985・1986 年）が刊行された。当研究所名誉研究員。

田中喜作（たなかきさく） 1885 年 2 月 7 日～1945 年 7 月 1 日

1885（明治 18）年 2 月 7 日、京都市下京区に醤油醸造業を営む家の三男として生まれる。兄は東洋美術史学者で当研究所長を務めた田中豊蔵。1903（明治 36）年京都市立美術工芸学校に入学、1905（明治 38）年同校退学、鹿子木孟郎の室町画塾に学んだ後、翌年関西美術院に学ぶ。1908（明治 41）年梅原龍三郎と同船で渡欧、パリでアカデミー・ジュリアンに学んだが、病を得たために翌年帰国。帰国後、理論的指導者として京都画壇に刺激を与え、批評活動をはじめ。1913（大正 2）年の終わりに東京に移住。翌年 5 月京橋竹川町に美術店田中屋（日本で最初の本格的な企画画廊）を開店、また美術雑誌『卓上』（田中屋、1914 年 4 月）を創刊する。翌年 6 月美術店田中屋を閉店。美術評論家として、とりわけ西洋美術の新しい動向とその理論の批判的紹介者としての役割は、『ルノアル』（日本美術学院、1921 年）と『マイヨールの芸術』（日本美術学院、1921 年）を刊行したことで示されている。その後、1924（大正 13）年から菱川師宣をはじめとする浮世絵関連の論文を発表するようになり、また翌年には国画創作協会の評議員となる。1927（昭和 2）年 3 月東京美術学校講師を嘱託（～1932 年 5 月）され、美術史研究に専念することとなる。同年 11 月、岸田劉生と共編で『初期浮世絵聚芳』（丹緑堂）刊行。翌年 6 月、東京府美術館にて開催された「御大典記念 徳川時代各派名作浮世絵展覧会」の企画構成を委嘱される。同展では、東京帝国大学を卒業したばかりの尾高鮮之助が助力する。1929（昭和 4）年に『浮世絵概説』（岩波書店）を刊行。当研究所の設立準備段階からかかわっているが、1930（昭和 5）年 6 月、正式に嘱託となる。在職中には、1932（昭和 7）年創刊の『美術研究』の第 2 号から 138 号（1944 年 10 月）までのほか他雑誌におよそ 100 篇を超える論文等を執筆している。その研究領域は、近世美術では浮世絵から狩野派、琳派、洋風画、南画と多岐にわたり、さらには仏教美術、中世美術にまで及ぶ。これは当研究所草創期にあって、一研究者として、他の研究者が未開拓であった日本美術史の分野を意識的に深めようとした結果である。しかしながら、広範な研究活動のなかでも、やがて「蕪村論」をはじめとする南画研究に傾注していく。その成果は、没後に研究所時代に田中から薫陶を受けた菅沼貞三等によって監修された『初期南画の研究』（中央公論美術出版、1972 年）に結実している。戦中末期の 1945（昭和 20）年 7 月 1 日、研究所に勤務していた雨宮幸男をたよって雨宮の縁戚があった山梨県甲州市塩山に疎開していたが、健康がすぐれずに同地にて死去。享年 61。

田中豊蔵（たなかとよぞう） 1881 年 10 月 2 日～1948 年 4 月 26 日

1881（明治 14）年 10 月 2 日、京都市下京区に生まれる。旧制第三高等学校を経て、1905（明治 38）年東京帝国大学文科に入り、中国文学を専攻、1908（明治 41）年卒業。1912（明治 45）年国華社に入り、「南画新論」以下 30 余篇の論文を『国華』誌上に発表する。1920（大正 9）年文部省古社寺保存計画調査を嘱託、翌年慶應義塾大学文学部講師となり、日本および中国美術史を講じる。1926（大正 15）年東京美術学校講師となり、西域美術史を講じる。1927（昭和 2）年在外研究員としてインドおよび欧米に留学、翌年帰国、京城帝国大学教授に任じられ、美学美術史第二講座を担当、1942（昭和 17）年定年退官まで在職。その間、1929（昭和 4）年国宝保存委員会、1930（昭和

5) 年当研究所嘱託、1933(昭和8)年朝鮮総督府宝物古跡名勝天然記念物保存会第一部員、1939(昭和14)年李王家美術館評議員に就任。1937(昭和12)年以来『画説』誌上に多くの論文を発表し、1942(昭和17)年退官の後、重要美術品等調査委員会委員を依頼され、さらに当研究所長事務取扱に就任する。以後『美術研究』誌上に数篇の論文を発表した。1945(昭和20)年5月以降当研究所とともに山形県酒田市に疎開、帰京後の1947(昭和22)年8月16日当研究所長に任じられ、また東京都美術館長を兼ねその逝去まで在任した。主著に『東洋美術談叢』(朝日新聞社、1949年)がある。1948(昭和23)年4月26日、急性肺炎のため東京都世田谷区の自宅で死去。享年66。

谷 信一(たにしんいち) 1905年5月8日～1991年1月21日

1905(明治38)年5月8日、三重県安濃郡安西村に生まれる。本名は信一。^{のふかす}中国文学者駒田信二は実弟にあたる。1930(昭和5)年3月東京帝国大学文学部美術史学科を卒業、同年4月東京帝国大学文学部副手、1932(昭和7)年7月東京帝国大学史料編纂所嘱託を経て、1942(昭和17)年3月京城帝国大学助教授に任官するが、1946(昭和21)年8月同大学の廃止により退官。1947(昭和22)年から1948(昭和23)年当研究所美術部に在職、翌年5月東京藝術大学美術学部講師、1952(昭和27)年神戸大学文理学部教授になり、同年より1958(昭和33)年まで東京藝術大学教授を併任、1966(昭和41)年3月神戸大学を定年退官し、同年4月から1975(昭和50)年3月まで共立女子大学文芸学部教授を務める。その間、1947(昭和22)年から日本歴史学会編集委員となり、のち評議員を務める。また1952(昭和27)年からブリヂストン美術館運営委員、1953(昭和28)年から1966(昭和41)年まで東京都美術館参与、1983(昭和58)年石橋財団理事を務める。その研究領域は広範にわたり、仏教美術から絵巻物、大和絵、室町水墨画、肖像画、狩野派、土佐派、宗達・光琳派、南画にまで及んでいるが、史料編纂所時代に読破した資料にもとづいて、日本中世における中国絵画受容のあり方を明らかにした一連の論は『室町時代美術史論』(東京堂、1942年)に収載されている。他の主著は『近世日本絵画史論』(道統社、1941年)『日本美術史概説』(東京堂、1948年)『御物集成 東山御物・柳営御物』(共編、淡交社、1972年)など。1991(平成3)年1月21日、肺炎のため東京都千代田区の病院で死去。享年85。

戸部銀作(とべぎんさく) 1920年4月25日～2006年1月7日

1920(大正9)年4月25日、東京に生まれる。早稲田大学文学部史学科を卒業後、早稲田大学演劇博物館を経て、1952(昭和27)年10月より1966(昭和41)年3月まで、当研究所芸能部調査研究員として、『日本舞踊譜』(創芸社、1960年)の編纂、国立劇場の開設準備、人間国宝の認定基準作成に従事。1966(昭和41)年7月国立劇場の開場とともに演出室長に就任。その後、2003(平成15)年まで国立劇場参与。演劇評論とともに歌舞伎の演出・台本補綴の第一人者で、1962(昭和37)年6月歌舞伎座公演「大商蛭子島」が初演出。二代目尾上松緑主演の1967(昭和42)年1月国立劇場「雷神不動北山桜」や、三代目市川猿之助が狐忠信の宙乗りを復活させた1968(昭和43)年4月国立劇場「義経千本桜」等の復活狂言の脚本・演出をはじめ、三代目中村鴈治郎(四代目坂田藤十郎)の近松屋や市川猿之助のスーパー歌舞伎、新作歌舞伎の演出を手がけるなど、幅広く活躍。1983(昭和58)年紫綬褒章、その後勲三等瑞宝章を受勲、1998(平成10)年、長年の功績と特に前年1月の国立劇場「壇浦兜軍記」から12月の歌舞伎座「酒井の太鼓」まで数多くの舞

台に関与した功績により、第19回松尾芸能賞特別賞を受賞。日本演劇協会評議員。著書に、『歌舞伎の演技』（演劇出版社、1956年）『歌舞伎のみかた（技法と魅力）』（第一法規、1973年）等がある。2006（平成18）年1月7日、呼吸不全のため東京都千代田区の病院で死去。享年85。

富永惣一（とみながそういち） 1902年9月18日～1980年6月4日

1902（明治35）年9月18日、東京市本所区横網町に生まれる。学習院高等科を経て、1923（大正12）年東京帝国大学文学部フランス文学科に入学、翌年美学美術史学科に転じ、1926（昭和元）年に卒業後同大学院に進む。1927（昭和2）年学習院講師、1929（昭和4）年学習院教授となり、翌年新設の当研究所嘱託を1943（昭和18）年まで兼ねる。1931（昭和6）年から1933（昭和8）年まで、宮内省在外研究員として留学しフランスをはじめ欧米各地で研鑽を重ね、帰国後、翻訳、西洋美術紹介の著述、並びに美術評論活動を展開、啓蒙的役割を果たす。この間、東京美術学校、大正大学の教壇にも立ち、戦後は、1949（昭和24）年、学習院大学設立とともに文学部教授に就任、1957（昭和32）年からは同大文学部長を務め、この間、多摩美術大学、日本大学文学部、早稲田大学文学部、女子美術大学でも教鞭をとり、1954（昭和29）年には創立された日本美術評論家連盟の初代会長に就任する。以後美術の国際交流に努め、ヴェネチア・ビエンナーレ展国際審査員に2回選ばれる。1959（昭和34）年、新設の国立西洋美術館の初代館長に就任、旧松方コレクションの管理、西洋美術作品の収集に努めるとともに、「ミロのビーナス特別公開」（1964年）「ロダン展没後50年記念」（1966年）など積極的な展覧会活動を行う。1968（昭和43）年、同館購入作品の真贋問題が国会で追及された責任をとって辞任するが、同年開催の大阪万国博覧会の美術展示プロデューサー、並びに万博美術館長を務める。また、同年から共立女子大学教授となる。1969（昭和44）年、フランス政府からシュヴァリエ・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章を受章、1974（昭和49）年には勲二等瑞宝章を受勲。この他、国立西洋美術館評議員、国立近代美術館評議員、ブリヂストン美術館運営委員、出光美術館評議員、日仏協会理事、日伊協会評議員をはじめ、数多くの要職を兼ねる。主著に『セザンヌ』（アルス美術文庫、1949年）がある。1980（昭和55）年6月4日、心不全のため東京都新宿区の自宅で死去。享年77。

豊岡益人（とよおかますと） 1909年10月27日～1988年10月29日

1909（明治42）年10月27日、三重県上野市寺町に生まれる。伯父の豊岡博道に養子入りして上京し新宿の専念寺に入る。1931（昭和6）年旧制第一高等学校文科甲類を卒業。1934（昭和9）年東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。同年当研究所に入所し嘱託、助手となり、浄土宗の法類である林真彦、久野真自らとともに、『東洋美術文献目録 附定期行物調査表』（座右宝刊行会、1941年）の編纂に携わる。同年、母方の実家伊賀上野の浄土宗念仏寺住職も兼ね以後50年務める。1940（昭和15）年2月20日東洋美術国際研究会の設立にあたり同研究会の役員となり、“Index of Japanese Painters”（東洋美術国際研究会、1941年）の編纂にも携わる。1940（昭和15）年9月、当研究所長矢代幸雄、所員正木篤三と共に中国における文化美術及工芸視察のため中国へ出張、ライカを持参して撮影調査を行う。同年11月帰国。1942（昭和17）年5月28日助手辞任。1944（昭和19）年応召し、1946（昭和21）年復員後は新宿の専念寺が戦災で焼失したため、念仏寺に居住。1949（昭和24）年、三重県国宝重要美術品調査員となる。1953（昭和28）年から1965（昭和40）

年、三重県上野市長を3期務め、伊賀上野大水害の復興で手腕を発揮する。1965（昭和40）年10月、愛知県立芸術大学教授となり、1977（昭和52）年12月1日から1983（昭和58）年11月30日まで愛知県立芸術大学長を務める。大学では日本画家片岡球子と親交を深める。専門は仏教絵画を中心に近代の作家論まで幅広い。論文は「普賢十羅刹女図考」（『美術研究』41、1935年5月）「栄賀筆涅槃図」（『愛知県立芸術大学紀要』1、1971年3月）など多数。1988（昭和63）年10月29日死去。享年79。

仲井幸二郎（なかいこうじろう） 1926年不明～1998年10月5日

1926（大正15）年、大阪市船場に生まれる。1938（昭和18）年慶應義塾大学法学部予科入学。1947（昭和22）年同大学文学部へ転科し、折口信夫に3年間師事。また池田弥三郎には、その後師が亡くなるまで指導を受ける。1950（昭和25）年文学部国文科卒業。同年4月より同大学中等部教諭として31年間勤務するかたわら、1965（昭和40）年から同大学言語学文化研究所の研究員として、22年間にわたり芸能史、歌謡、民謡を研究する。また1966（昭和41）年に当研究所芸能部非常勤職員となり、22年間の在籍中、公開学術講座では、5回にわたり講師を務め、当研究所刊行の『芸能の科学』に民俗芸能に関する資料集や論考を発表する。1975（昭和50）年より慶應義塾大学文学部、商学部で国語国文の講義を14年にわたり担当。1980（昭和55）年には（財）日本民謡協会の理事となり、7期14年務める。1980（昭和55）年にサンケイ新聞社編の雑誌『みんよう文化』に連載を開始した「口訳民謡集」は、没後『口訳日本民謡集』（蒼洋社、1999年）としてまとめられ、刊行される。1981（昭和56）年洗足学園魚津短期大学教授に就任。1994（平成6）年日本民謡協会理事ならびに洗足学園教授を退職。専門は日本芸能史。主著に『民謡の女：日本民謡考』（実業之日本社、1977年）『日本民謡辞典』（共著、東京堂出版、1972年）『民俗芸能辞典』（共著、東京堂出版、1981年）等。1998（平成10）年10月5日、肝不全により死去。享年72。

永雄ミエ（ながおみえ） 1927年3月15日～1975年5月5日

1927（昭和2）年3月15日、東京に生まれる。1947（昭和22）年3月に日本女子大学文化歴史学科を卒業、1948（昭和23）年9月3日に当研究所に就職。長きにわたり当研究所美術部資料室において資料の受入、閲覧業務、文献目録の作成に従事する。1975（昭和50）年5月5日、癌のため死去。享年48。

中川千咲（なかがわせんさく） 1910年4月3日～1976年12月23日

1910（明治43）年4月3日、中川忠順の次男として東京に生まれる。1934（昭和9）年3月早稲田大学文学部史学科卒業、同年4月当研究所に入り、1972（昭和47）年3月定年退官するまで38年間在職する。この間1941（昭和16）年6月に応召し復員後、1947（昭和22）年5月から1951年（昭和26）年1月まで、官制改正により兼任で東京国立博物館陳列課に勤務するが、再び組織規程の改正によって1951（昭和26）年2月から当研究所に戻る。1955（昭和30）年6月、同所美術部資料室長、1969（昭和44）年4月同部長となるが、一貫して研究資料の充実に尽くし、美術部の運営と発展に不撓の努力を続ける。専門の工芸史の分野では、研究を凝集した『日本の工芸』（吉川弘文館、1963年）の著があり、特に古陶磁を中心とする意匠と文様に関して新分野の開拓に努め、

古九谷、古伊万里、仁清等の色絵から中国陶磁に及ぶ多数の論考が見られる。『明治文化史 8 美術編』（洋々社、1956 年）に執筆した明治の工芸の項は、従来等閑視されていた時代の工芸史に体系的整理を加えた画期的な労作であるが、これを機に伝統的技法による現代陶芸に研究領域を拡げ、『近代の美術 33 板谷波山』（至文堂、1976 年）などの作家論を著わすとともに、1954（昭和 29）年以来日本伝統工芸展の審査委員として、現代工芸の発展と技術者の育成に尽力する。1960（昭和 35）年 11 月には東京都文化財保護審議会専門委員となって都文化財の調査指定に協力し、1961（昭和 36）年 4 月より 1968（昭和 43）年 6 月まで文化財保護委員会事務局に併任、1970（昭和 45）年 3 月文化庁文化財保護審議会臨時専門委員、1972（昭和 47）年 7 月には専門委員として、無形文化財の調査指定、保護活用にあたり、1974（昭和 49）年 12 月からは通産省伝統的工芸品産業審議会専門委員として、伝統産業の育成繁栄に指導的役割を果たす。また 1948（昭和 23）年以来順次早稲田大学、慶應義塾大学、東京藝術大学、武蔵野美術大学、工学院大学、東京造形大学等諸大学の非常勤講師として、1973（昭和 48）年 4 月からは共立女子大学家政学部教授として、長年にわたり広く後進の指導育成にも努める。1976（昭和 51）年 12 月 23 日、肝不全のため東京都豊島区の病院で死去。享年 66。没後、勲四等旭日小綬章の追贈を受けた。

中根 勝（なかねかつ） 1907 年 6 月 1 日～1993 年 9 月 8 日

1907（明治 40）年 6 月 1 日、東京市日本橋区小伝馬町に生まれる。1926（大正 15）年 3 月東京府立第三中学を卒業、同年 4 月東京高等工芸学校印刷工芸科へ入学。1929（昭和 4）年卒業と同時に日新印刷株式会社に技手として採用されるが、翌年依願退職し、7 月 31 日当研究所助手となる。1932（昭和 7）年には東京市立小石川工業高校で教鞭をとり、同年から 1935（昭和 10）年まで東京美術学校の事務嘱託（無給）、文庫課標本掛も務める。1943（昭和 18）年文部省より国宝保存に関する調査を嘱託され、翌年東京工業専門学校講師を勤める。1946（昭和 21）年天理時報社へ転じる。以後同社工務部長、取締役、技術顧問を歴任。また日本印刷学会西支部の役員、顧問を務める。1971（昭和 46）年より『天理図書館善本叢書』和書之部全 80 巻、漢籍之部全 12 巻（天理大学出版部、1971 年～1986 年）を刊行し、オフセット網目版による精巧な影印複製を期し、印刷責任者として完結に至るまで一貫して製本、印刷技術の研鑽に努め、高精度な影印出版の範として高い評価を得る。『神宮古典籍影印叢刊』全 10 巻（皇学館大学、1983 年～1985 年）の刊行は、原本をカラーフィルムで撮影、カラースキャナによりオフセット単色網目版の製版を行う方法を採用し、極めて精緻な仕上がりを得て、影印出版の新たな製版技術の嚆矢となる。常に最良の仕上がりを得られるよう、新たな製版、印刷技術の研究開発とテストを繰り返し、オフセット印刷による影印複製技術の向上を推進する。当研究所で培った眼をもって、その後の研鑽をふまえた仕事に対する姿勢は、妥協を許さない徹底したものであり、必ず自身で製版・印刷の現場の監督するのを常とする。印刷のエキスパートとして現場の最前線に立つ一方で、百万塔陀羅尼について科学的分析・木版による耐刷力実験等の手法を用いた研究を進め、その成果を『百万塔陀羅尼の研究』（百万塔陀羅尼の研究刊行委員会、1987 年）として上梓する。1993 年（平成 5）年 6 月に入院、同年 9 月 8 日死去。享年 86。没後、『日本印刷技術史』（八木書店、1999 年）が刊行された。

中村伝三郎（なかむらでんざぶろう） 1916年10月30日～1994年8月23日

1916（大正5）年10月30日、兵庫県芦屋市西藏町に生まれる。1940（昭和15）年旧制甲南高等学校高等科を卒業、東京帝国大学文学部美学美術史学科へ進み、1942（昭和17）年9月卒業。同年4月陸軍二等兵として入営し、戦後の1946（昭和21）年5月ラバウルから名古屋に帰還、除隊する。翌年5月から兵庫県武庫川学院中学校教諭となるが同年9月に退職、10月当研究所に採用される。1949（昭和24）年文部技官となり、1967（昭和42）年当研究所美術部主任研究官、1972（昭和47）年同部第二研究室長に昇任、1978（昭和53）年4月定年退官。入所当初から日本近代美術、特に従来殆んど未開拓であった明治以降の彫塑史研究に着手し、1951（昭和26）年に「明治末期におけるロダン」（『美術研究』163、1951年11月）を発表。同論文は、日本近代彫刻における西洋彫刻の受容と展開に着目したものであり、この分野における実証的研究に先鞭をつけた論考として注目される。また『明治文化史8 美術編』（洋々社、1956年）のなかで明治の彫刻を担当しまとめた功績は大きい。続いて、ロダンの影響を最初に受け、真に彫刻界に近代をもたらしたとされる荻原守衛の生涯と芸術に関する詳細な研究を続行し、その成果を1958（昭和33）年より『美術研究』誌上に6回にわたって発表する。一方、平櫛田中ら木彫家の作家研究、明治以来の彫塑団体の系統的調査研究を併行し、日本近代彫刻史の史的展開を総合的に把握するに至る。上記研究の主要な論文は、著書『明治の彫塑』（文彩社、1991年）にまとめられ、同書により1991（平成3）年、第45回毎日出版文化賞を受賞。また、彫塑、立体造型を主とする現代美術の動向の調査研究にも従事し、その成果は在職中の『日本美術年鑑』の編集、執筆に生かされている。さらに、日本美術評論家連盟会員として、批評活動も展開し、数多くの美術批評を新聞や雑誌に発表し、作家の創作活動に大きく寄与する。1994（平成6）年8月23日、大腸癌のため千葉県市川市の病院で死去。享年77。当研究所名誉研究員。

橋本弘次（はしもとひろつぐ） 1930年4月14日～1993年12月14日

1930（昭和5）年4月14日、東京に生まれる。1946（昭和21）年6月15日当研究所に就職。仕事のかたわら1950（昭和25）年3月東京育英高校（夜間）を卒業、フォトグラファーとして研究所員の調査に同行し、多くの美術作品の撮影に従事する。1991（平成3）年3月31日定年退職。『適情録』（同朋舎メディアプラン、2004）の復刻では、複写技術を担当する。1993（平成5）年12月14日大腸癌のため死去。享年63。

林 真彦（はやしまさひこ） 1904年1月23日～1977年月日不明

1904（明治37）年1月23日、父林彦明（のちの百万遍知恩寺住職、浄土宗大僧正）、母柳雨の次男として沼津に生まれる。1930（昭和5）年法政大学国文科を卒業。1931（昭和6）年より1935（昭和10）年まで浄土宗総本山知恩院史編纂委員として『知恩院史』（知恩院、1937年）の編纂に関わる。同年当研究所の嘱託となり、経理を務めるかたわら、豊岡益人、久野真自らとともに、『東洋美術文献目録 附定期刊行物調査表』（座右宝刊行会、1941年）の編纂に携わり、刊行後の1942（昭和17）年に退官。同年より1964（昭和39）年まで東京帝国大学経済学部の「明治大正金融史資料編纂室」（第一銀行70年記念事業の一つである明治大正期の金融史資料の収集編纂事業行）に在籍。1948（昭和23）年、飛鳥山渋谷家別邸内に移動して「（財）明治大正金融史資料編纂所」となり、その後「日

本金融史資料編纂所」と改称。現在その機能は「日本銀行金融研究所」に移管されている）に勤務し、土屋喬男教授のもと渋沢栄一伝記資料編纂に携わる。1965（昭和40）年から1977（昭和52）年までは私立芝学園において同学園中学高等学校史編纂と経理に携わる。浄土宗関係では、1934（昭和9）年から1943（昭和18）年まで徳壽院、同年から1977（昭和52）年まで宗源寺（東京都新宿区）の住職を務めている。1977（昭和52）年死去。享年73。

福井利吉郎（ふくいりきちろう） 1886年3月10日～1972年12月1日

1886（明治19）年3月10日、岡久一郎の次男として岡山県児島郡味野町に生まれる。1904（明治37）年大阪府福井彦次郎の養子となり、大阪府立天王寺中学から、1907（明治40）年旧制第一高等学校文科を卒業後、京都帝国大学文科大学哲学科に入学、1910（明治43）年7月卒業。卒業後は、同年9月、同大学副手、1911（明治44）年9月、平子鐸嶺の後任として内務省古社寺保存計画調査に従事、1913（大正2）年6月、文部省古社寺保存計画調査嘱託、1920（大正9）年3月、古社寺保存会委員、同年10月、朝鮮総督府古蹟調査嘱託となり、文化財保護に携わるとともに、聖心女子学院、慶應義塾大学講師などで教鞭をとる。1922（大正11）年6月より1924（大正13）年9月まで、文化史研究のためアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、インドに滞在。帰国後10月、東北帝国大学法文学部教授に就任、1946（昭和21）年9月に退官するまで、今日の東北大学文学部東洋日本美術史研究室の初代教授として、永年教育と研究に尽力する。その間、インド、ドイツに重ねて出張、1931（昭和6）年4月 京都帝国大学文学部講師、翌年9月当研究所嘱託、1935（昭和10）年6月当研究所嘱託、国宝保存会委員、日本学術振興会委員を歴任。東北大学退官後は、国立博物館評議員会評議員、文化財専門審議会専門委員などとして、文化財保護に献身するほか、大阪大学講師も務める。1948（昭和23）年2月、東北大学名誉教授となる。1968（昭和43）年に文化財専門審議会専門委員の再任を辞退するまで、文化財の調査、指定、保存に尽力すること半世紀余に及ぶ。60余年間美術史家の立場から、研究成果の発表による純学究的寄与、大学教授としての教育上の貢献、文化財保護事業に対する献身、の三方面にわたり活躍し、またそれらを緊密に連関させることに努める。内務省入省以来、上司であった中川忠順の薫陶を受け、古社寺保存会委員であり養父の同窓であった岡倉覚三に親炙したことは、美術史家としての研究態度と学風形成に多大の影響を与えたものと思われる。王朝美術史論を卒業論文として学窓を出てから、研究の主題は、仏教美術、光琳・宗達・乾山、絵巻物、水墨画と多方面に及ぶが、それらの研究は、犀利な構想力と透徹した全体観に支えられ、日本美術史の体系構成をめざしたものである。また欧米人の日本に関する研究業績を重視し、日本美術の国際的理解を計り、現代美術にも深い関心を示して、展覧会批評を新聞に寄稿する。講壇における後進の教導は極めて厳格であったが、イギリス在留中、小林古徑、前田青邨に嘱し、東北大学のために伝顧愷之筆「女史箴図巻」の模本を作成したことは、他に類例の少ない教育研究上の貢献と言える。主な業績は『福井利吉郎美術史論集』上、中、下（中央公論美術出版、1998～2000年）まとめられる。1972（昭和47）年12月1日、脳出血のため東京都三鷹市の自宅で死去。享年86。

福原鏡二郎（ふくはらりょうじろう） 1868年6月25日～1932年1月17日

1868年（明治元）年6月25日、三重県桑名郡長島村に生まれる。1883（明治16）年兄と共に上京、

縁戚である水野家に寄宿する。共立学校を卒業後、大学予備門に進み、東京帝国大学法科大学法律学科に入学。1892（明治25）年7月東京帝国大学法科大学を卒業し直ちに官界に入り、40年を一途に文部官僚として過ごす。通信省を振り出しに内務省に転じ、美術界に関係したのは1894年（明治27）年、参事官として奈良県に赴任した時である。当時奈良県には、正木直彦が中学校長兼師範学校長として在任しており、両名は協力して県下の古美術調査および博物館経営に努める。その後文部省入省、1899（明治32）年ヨーロッパに留学する。当時ウィーンにはオーストリア駐割公使として伯爵牧野伸顕が在任しており、また偶然海外に実業教育、美術行政のために視察に来ていた岡田良平、正木直彦等と相会し、牧野公使を中心として、日本におけるヨーロッパ大国の例にならった官設美術展覧会開催の議を論じる。1906（明治39）年牧野伯爵の文部大臣就任と共にこのウィーンにおける座談会が実現し、翌年第1回文展の開催となる。当時牧野文部大臣の下で専門学務局長を務め、文展創設に関し尽力する。文展は日本美術界の枢軸として12回を重ねて帝展となり、1911（明治44）年美術審査委員会長を命じられる。その間、1917（大正6）年10月から1919（大正8）年6月まで東北帝国大学総長、1922（大正11）年11月から学習院長等の要職に就く。1924（大正13）年、黒田清輝のあとを継いで帝国美術院長となり、1931（昭和6）年12月まで名実共に美術界の重鎮として活躍する。また当研究所の創設においては、当時の政府にほとんど唯一の文部省新規事業として当研究所の帰属および経営を認めさせることに尽力し、正木と共にその実現に努め、初めて予定通り完成する。1929（昭和4）年10月学習院長を辞任、1931（昭和6）年11月病床で帝展25周年記念式を終えた後、帝国美術院長を勇退し、療養に努めていたが、1932（昭和7）年1月17日、脳出血のため死去。享年65。

福山敏男（ふくやまとしお） 1905年4月1日～1995年5月20日

1905（明治38）年4月1日、福岡県柳川市に生まれる。1927（昭和2）年京都帝国大学工学部建築学科卒業。同年より造神宮使庁に勤務。1939（昭和14）年5月京都帝国大学より工学博士の学位を受ける。翌年『神宮の建築に関する史的調査』（造神宮使庁、1940年）を刊行。1942（昭和17）年文部技師として宗教局に勤務。翌年『日本建築史の研究』（桑名文星堂、1943年）を刊行。1947（昭和22）年当研究所に勤務となり、1951（昭和26）年同所資料部長、1954（昭和29）年より同所美術部長を務め、1959（昭和34）年京都大学教授となる。1968（昭和43）年同大を退官した後は、京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長を務める。古代仏教寺院や神社建築の調査、研究にあたり、出雲大社、大阪四天王寺、九州観世音寺などの調査発掘を指導して創建当時の事情や建築構造を明らかにし、日本建築史学の基礎を築く。奈良県天理市の石上神宮の七支刀の銘文解釈等、金石文の研究でも知られる。1987（昭和62）年、寺院建築の研究・神社建築の研究（『福山敏男著作集』1～4、中央公論美術出版、1982～1984年）によって第77回日本学士院恩賜賞を受賞、1990（平成2）年日本学士院会員となる。その他の主著に「住宅建築の研究」（『福山敏男著作集』5、中央公論美術出版、1984年）『中国建築と金石文の研究』（中央公論美術出版、1983年）がある。著作については「福山敏男先生著作目録」（『文建協通信』22、1995年）に詳しい。1995（平成7）年5月20日、肺炎のため京都府長岡京市の病院で死去。享年90。当研究所名誉研究員。

藤懸静也（ふじかけしずや） 1881年2月25日～1958年8月5日

1881（明治14）年2月25日、茨城県古河町に生まれる。1905（明治38）年旧制第一高等学校文科を卒業。1910（明治43）年東京帝国大学文科大学史学科国史科を卒業し、直ちに大学院に進み日本美術史を専攻する。1914（大正3）年以来同大学文学部の副手を務めるかたわら『国華』の編集をたすける。また女子美術学校、日本大学の講師、国学院大学教授、帝室博物館学芸委員などを務める。1927（昭和2）年から翌年にわたり海外における日本美術史の資料調査、各国博物館の調査のため欧米を巡歴、帰国後文部技師に任じられ、国宝鑑査官、国宝保存会幹事、同委員、重要美術品等調査委員会委員として国宝等の保存行政に尽くす。1934（昭和9）年東京帝国大学教授に任じられ、1941（昭和16）年定年で退官するまで後進の指導にあたる。この間、1934（昭和9）年に文学博士の学位を受け、1938（昭和13）年の1年間当研究所嘱託を務める。1941（昭和16）年には当研究所内の東洋美術国際研究会の理事も務める。1945（昭和20）年瀧精一の後を継いで国華社主幹となり、『国華』編集の中心となる。戦後、文化財専門審議会の設置と共に専門委員となり、晩年にはその会長を務める。また東京国立博物館評議員を務める。浮世絵版画を歴史的に系統づけた功績は大きく、多くの著書や論文がある。主著に『国史講習録 17 日本美術史』（国史講習会、1924年）『日本美術図説』（朝日新聞社、1950年）がある。1958（昭和33）年8月5日、前立腺疾患のため東京都千代田区の病院で死去。享年77。

藤島武二（ふじしまたけじ） 1867年9月18日～1943年3月19日

1867（慶応3）年9月18日、薩摩国鹿児島郡坂元村に薩摩藩士藤島賢方の三男として生まれる。はじめ四条派の画家平山東岳に就いて絵画を学ぶ。1884（明治17）年上京、翌年川端玉章の門に入り、玉堂と号し日本美術協会に出品して受賞。しかし、1890（明治23）年洋画の研究に転じ、曾山幸彦に、その後中丸精十郎、松岡寿、山本芳翠等に師事する。1891（明治24）年明治美術会員となり、同会第3回展覧会に「無惨」を出品してその技を認められる。1893（明治26）年三重県尋常中学校助教諭として赴任。1896（明治29）年東京美術学校に西洋画科が設置されると黒田清輝の推薦によって助教授に任じられ、以来およそ50年の間後進の指導に尽力する。同年白馬会の創立によってその会員となる。1905（明治38）年文部省より絵画研究のため4年間フランス、イタリアに留学を命じられ、初めパリのグラン・ショーミエールに入り、次いで国立美術学校に入学、フェルナン・コルモンに師事し、その後イタリアに移り、カロリウス・デュランの薫陶を受ける。1910（明治43）年1月帰国し、同年の白馬会展覧会に帰欧作品30点を特別出陳し、同年東京美術学校教授に任じられる。1913（大正2）年第7回文展に「うつつ」を出品して三等賞を受賞、翌年大正博覧会審査員、文部省美術審査委員会委員、臨時博覧会（米國桑港万国博覧会）鑑査官に挙げられる。以後連年文部省美術審査委員会委員を務める。1919（大正8）年帝国美術院の創立と共に同院展覧会審査委員を命じられ、1924（大正13）年帝国美術院会員となる。1924（大正13）年に死去した黒田清輝の遺言執行にあたり、黒田記念室における黒田作品の陳列を久米桂一郎らと共に委嘱される。1934年（昭和9）年帝室技芸員を命じられ、翌年改組された帝国美術院会員となる。1937（昭和12）年多年の功勞により新しく制定された文化勲章を授与される。また同年帝国美術院の創立と共に同院会員となる。同年満洲美術展覧会の審査員として渡満し、蒙古、熱河、北京等に取材をかさね、御物「旭日照六合」を完成する。1938（昭和13）年再び渡満し、軍の依

嘱によつて上海、杭州、蘇州等を旅行し、戦跡を写す。1940（昭和15）年紀元二千六百年記念展覧会に病を押して「蒙古高原」を制作し出品。1942（昭和17）年第2回聖戦美術展覧会の審査委員長を委嘱される。1943（昭和18）年1月勲二等に叙せられる。1943（昭和18）年3月19日、脳出血のため本郷区の自宅で死去。享年76。没後、従三位に叙せられた。

堀井三友（ほりいさんゆう） 1885年4月10日～1942年5月31日

1885（明治18）年4月10日、富山市に生まれる。中学卒業後上京、はじめ英文学に志したが、次いで東洋美術の研究に専念、中川忠順に師事する。1930（昭和5）年から1941（昭和16）年まで当研究所嘱託、1938（昭和13）年には東京高等師範学校で教鞭をとる。この間、古美術の発見、保護に努め、諸種の論文を発表する。主要論文に「山雪の襖絵」（『東洋美術』19、1933年10月）「山楽の襖絵 黒田侯爵藏 図版解説」（『東洋美術』20、1934年6月）「隠れたる襖絵 光浄院と狩野光信、海北友松の襖絵」（『東洋美術』20、1934年6月）「越中国分寺趾」（『史迹と美術』80、1937年7月）がある。胃癌を病んで静養中のところ1942（昭和17）年5月31日死去。享年58。

本間順治（ほんまじゅんじ） 1904年4月16日～1991年8月29日

1904（明治37）年4月16日、山形県酒田市に生まれる。1928（昭和3）年国学院大学国文学科卒業。同年3月文部省嘱託となり、重要美術品等調査委員を兼ねる。1945（昭和20）年当研究所が山形県酒田の本間家に疎開したこともあり、1947（昭和22）年まで当研究所の嘱託として勤める。国立博物館調査課長を経て1950（昭和25）年文化財保護委員会美術工芸品課長となり、1947（昭和22）年日本美術刀剣保存協会を設立、理事に就任。1960（昭和35）年依願退官。翌年文化財専門審議会委員、1968（昭和43）年文化財保護審議会第一分科会兼第四分科会委員に就任する。研究は多くの著書の中に見られ、戦前は『日本刀講座』（雄山閣、1934年）『国宝刀剣図譜』（岩波書店、1936年）などがある。戦後は、日本刀救済のために、魔刀の令に強硬な反論を抱き、佐藤寒山と糾合し強硬なる反旨を唱える。佐藤と共に創立した日本美術刀剣保存協会は、戦後の刀剣界を繁栄に導く原動力となる。学位論文である「日本古刀史」は、日本刀研究を体系づけたものである。1966（昭和41）年から3年間にわたって正倉院刀剣の学術調査を行う。翌年日本美術刀剣保存協会付属刀剣博物館長となり、1970（昭和45）年日本美術刀剣保存協会会長を兼務する。晩年は会長を退くが、今日の刀剣界を築き組織をつくり上げ、刀剣学を確立し、日本刀の持つ美術性、文化性を高め、生涯刀剣界に尽くす。1991（平成3）年8月29日心不全のため自宅で死去。享年87。

牧野伸顕（まきののぶあき） 1861年11月24日～1949年1月25日

1861（文久元）年11月24日、薩摩国鹿兒島城下加治屋町に薩摩藩士大久保利通の次男として生まれる。生後間もなく親戚にあたる牧野吉之丞の養子となる。1871（明治4）年、11歳にして父とともに岩倉遣欧使節団に加わり渡米し、フィラデルフィアの中学を経て、大学（後の東京帝国大学）に入学する。1880（明治13）年、大学を中退して外務省入省。外務書記官を出発点として官界に入り、内政外交の要職を経て、第一次大戦後講和全権委員、宮内大臣、内大臣を歴任する。美術行政にも関心を持ち、1906（明治39）年西園寺公望内閣の文部大臣に任じられ、かねての抱負に従い美術行政家、美術家と考慮し、翌年文部省に美術審査委員会を創立、文部省美術展覧会を開設して美

術の発展に貢献する。また1924（大正13）年黒田清輝の逝去に際しその遺言執行人となり、久米桂一郎、正木直彦、矢代幸雄等と協議して、わが国唯一の美術研究所を創立する。1949（昭和24）年1月25日、千葉県東葛飾郡田中村の自宅で死去。享年89。

正木篤三（まさきとくぞう） 1905年8月19日～1950年10月25日

1905（明治38）年8月19日、正木直彦の三男として東京に生まれる。東京府立第四中学校から、1926（大正15）年旧制第一高等学校文科乙類を卒業後、同年東京帝国大学文学部東洋史学科に入学、のち国文学科に転じ、1930（昭和5）年卒業、同年当研究所嘱託となる。1937（昭和12）年所員に任官。1941（昭和16）年国民精神文化研究所に転じる。1934（昭和9）年から1943（昭和18）年まで東京美術学校講師、1943（昭和18）年官制改正により教学錬成所錬成官となる。終戦後は、繊維貿易公団に勤務するが、病を得て療養に努める。その著書に『本阿弥行状記と光悦』（大雅堂、1945年）があり、発表した論文に「弥勒来迎図考」（『美術研究』5、1932年5月）と「川合家本聖徳太子伝絵考」（『美術研究』7、1932年7月）などがある。1950（昭和25）年10月25日、東京都新宿区の自宅で死去。享年46。

正木直彦（まさきなおひこ） 1862年10月26日～1940年3月2日

1862（文久2）年10月26日、和泉国堺夕栄町に生まれる。号は十三松堂。1892（明治25）年東京帝国大学法律科を卒業。翌年奈良県尋常中学校長に就任、在任中帝国奈良博物館学芸委員、奈良古社寺保存委員などを兼任する。1897（明治30）年6月、文部大臣秘書官となり、次いで視学官、大臣官房秘書課長、文書課長兼美術課長を歴任し、翌年フランス万国博覧会出品調査委員となり、1899（明治32）年11月渡欧、1901（明治34）年3月帰国、同年8月東京美術学校長に任じられる。以来1932（昭和7）年退官に至るまで32年間美術教育に従事し、同年名誉教授となる。1906（明治39）年文部省美術展覧会（文展）創設に参画し、翌年文部省審査委員会主事となり、長年主事として文展に寄与する。1919（大正8）年帝国美術院の創設と共に幹事を務め、1926（昭和元）年当研究所設立準備委員会が組織されると委員長に就任して当研究所設立に尽力し、当研究所主事を務める。1931（昭和6）年帝国美術院長となり、1935（昭和10）年5月帝国美術院改組により院長を退き、同院顧問となり、また同院廃止後は文部省の美術行政顧問となる。また内外博覧会審査長あるいは鑑査官、帝室技芸員詮衡委員、工芸審査委員会委員をはじめ、諸種の委員会委員あるいは会長、理事、顧問として美術の広汎にわたり関与する。美術行政、美術教育にわたって枢要の地位を歩み、絵画彫刻のみならず、工芸美術の分野への理解をたかめることにも尽力する。主著に『回顧70年』（学校美術協会出版部、1937年）『十三松堂閑話録』（相模書房、1937年）がある。1940（昭和15）年3月2日、肺炎により死去。享年79。没後、『十三松堂日記』全4巻（中央公論美術出版、1965～1966年）が刊行された。

松下隆章（まつしたたかあき） 1909年3月31日～1980年9月15日

1909（明治42）年3月31日、長野県飯田市に生まれる。長野県飯田中学校を経て、1927（昭和2）年慶應義塾大学文学部に入学、1933（昭和8）年同大学美学美術史学科卒業。翌年帝室博物館研究員となり、1938（昭和13）年同館鑑査官補に任じられるが、1944（昭和19）年退官、直ちに

新設の根津美術館に入り、同館学芸員として館の発展に努める。1947（昭和22）年当研究所に入り、1952（昭和27）年文化財保護委員会事務局美術工芸課へ転じ、はじめ絵画部門の担当技官として、1959（昭和34）年には美術工芸課長、1965（昭和40）年には文化財鑑査官となって、国宝、重要文化財指定や保護等、わが国文化財行政の中心にあって活躍する。この間、主な出来事として、永仁の壺事件の処理、韓国文化財返還等を手がけ、1955（昭和30）年から1969（昭和44）年まで母校の慶應義塾大学で美術史を講じる。同年奈良国立文化財研究所長に就任したが、1972（昭和47）年京都国立博物館長に転じ、1978（昭和53）年退官するまでの6年間、多くの展覧会を手がけ、また同館に文化財保存修理所を設けるなど館の充実と発展に貢献する。1970（昭和45）年より文化庁の文化財専門調査会絵画彫刻部会専門委員となり、さらに1976（昭和51）年文化財保護審議会委員に任命され、国の文化財行政の助言、指導に当たる。専門は日本絵画史で、仏画や水墨画に多くの論文著書がある。主著に『日本水墨画論集』（中央公論美術出版、1983年）『室町水墨画第1輯』（室町水墨画刊行会、1960年）その他美術に関する随筆等も少なくない。1980（昭和55）年9月15日、脳出血のため神奈川県鎌倉市の自宅で死去。享年71。

松島 健（まつしまけん） 1944年2月27日～1998年2月27日

1944（昭和19）年2月27日、東京に生まれる。慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程において日本彫刻史を専攻。鎌倉彫刻に関心を寄せ、修士論文「運慶の生涯と芸術」を大学に提出する。なお、この修士課程在学中の1968（昭和43）年から2年間、文化庁の調査員となる。1970（昭和45）年4月同大学院後期博士課程に進むが、5月東京国立博物館学芸部資料課資料室に文部技官として採用され、これにともない大学院を退学。翌年4月学芸部美術課彫刻室併任となり、1973（昭和48）年8月文化庁に出向、文化財保護部美術工芸課に転任。1980（昭和55）年10月文化財保護部美術工芸課文化財調査官に昇任する。1982（昭和57）年12月から1986（昭和61）年5月文化財保護部美術工芸課文化財管理指導官を併任し、1990（平成2）年4月文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官に昇任。1996（平成8）年4月当研究所情報資料部長に異動。文化庁時代の仕事は文化財（彫刻）の指定および指定文化財の修理計画の立案と修理指導、保存施設事業計画の立案と実施指導、保存管理、文化財の公開活動など文化財保護行政の多岐にわたる。1990（平成2）年主任文化財調査官に昇任してからは彫刻部門の総括責任者として指定、保存、公開事業に強い指導力を発揮する。一時期中断していた仏像の国宝指定を積極的に推し進め、以後、仏像の国宝指定を再開させた。また、1993（平成5）年まで行われた東大寺南大門金剛力士像の本格的解体修理は主任文化財調査官として監督、監修に携わる。この仕事と金剛力士像、運慶への思いは『仁王像大修理』（朝日新聞社、1997年）、産経新聞の紙面上での中世史学者上横手雅敬との対論「運慶とその時代」をまとめた『運慶の挑戦 中世の幕開けを演出した天才仏師』（共著、文永堂、1999年）において明らかである。また、情報資料部長在任中は研究に専念、その中で新たに取り組んだのは、国宝彫刻のCD-ROM版化と、長野、仏法紹隆寺不動明王像の運慶作の可能性をさぐることであった。1998（平成10）年2月27日、胆嚢癌のため神奈川県鎌倉市の病院で死去。享年54。没後、当研究所時代に立案、監修にあたったCD-ROM版『国宝仏像』全5巻（PFU、1998年）が完成をみた。

松本栄一（まつもとえいいち） 1900年3月10日～1984年7月2日

1900（明治33）年3月10日、台北市に生まれる。1914（大正3）年3月、広島県立第一中等学校卒業。1920（大正9）年7月旧制第一高等学校仏法科を卒業後、東京帝国大学文学部美学美術史学科に進み、1923（大正12）年3月に卒業。翌年9月から1928（昭和3）年3月までは東京帝国大学文学部副手となり、副手を退職後、同年5月から翌年6月まで、研究のためヨーロッパに渡り、ロンドン、パリ、ベルリン、レニングラードなどの美術館、図書館において、スタイン、ペリオ、ル・コックほか西欧の研究者が将来した中央アジアや敦煌の資料を調査する。帰国後の同年7月に当研究所研究事務嘱託に、更に同年10月には東京帝室博物館建築設計調査委員会事務嘱託に転じる。1930（昭和5）年4月からは東方文化学院東京研究所（外務省）の研究員となり、古代中央アジア美術の研究を進める。その研究成果の一部は、『敦煌画の研究』（東方文化学院東京研究所、1937年）として刊行。この著書によって1937（昭和12）年3月から講師を務めていた東京帝国大学より、1939（昭和14）年4月に文学博士の学位を受ける。1941（昭和16）年4月からは同大学文学部助教授となり、翌年5月には、同書に対して日本学士院恩賜賞を受賞。1945（昭和20）年6月、同大学を退官。戦後は、1949（昭和24）年8月から国立博物館附属美術研究所長に就任し、1952（昭和27）年4月に美術研究所が東京文化財研究所と組織替えをしてからは同年10月まで美術部長を務める。その後、1956（昭和31）年に東京大学で、1958（昭和33）年には女子美術大学において講義を行うが、翌年4月からは、東京藝術大学美術学部教授となる。1967（昭和42）年3月に同大学を定年退官後、4月からは再び女子美術大学教授に迎えられ、1984（昭和59）年3月まで東洋美術史を講じる。研究領域は、東洋美術史の中でも仏教を中心にした宗教美術に重点が置かれているが、専門領域と関連のある日本美術に対しても広げられている。また伝統芸能にも詳しい。著書は『敦煌画の研究 図像篇』（東方文化学院東京研究所、1937年）のみであるが、数多くの研究論文を発表している。緻密な研究によって培かれた豊かな学殖は、作品解説、書評、随筆などの記述にうかがわれる。1984（昭和59）年7月2日、心不全のため東京都杉並区の自宅で死去。享年84。当研究所名誉研究員。

松本修自（まつもとしゅうじ） 1951年1月9日～2003年7月2日

1951（昭和26）年1月9日、東京都新宿区に生まれる。1973（昭和48）年3月、早稲田大学工学部建築学科卒業、1975（昭和50）年3月早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。1975（昭和50）年4月奈良国立文化財研究所入所以来、特に7世紀建築遺構の復原研究に尽力するとともに、各地の町並みや近世社寺建築の調査研究にと幅広く活躍する。奈良国立文化財研究所年報に「山田寺金堂復元模型の制作」（1982年11月）他、多くの論文を発表している。1993（平成5）年に当研究所に異動後は、経験をもとに遺跡、建造物の保存修復の理念と実践をテーマとし、ヨーロッパとの文化遺産保護協力を推進する。2002（平成14）年4月に奈良文化財研究所に戻るが、2003（平成15）年7月2日死去。享年52。没後、『松本修自遺稿集』（2003年）が有志により刊行された。

丸尾彰三郎（まるおしょうさぶろう） 1892年9月4日～1980年7月24日

1892（明治25）年9月4日、岡山県に生まれる。1919（大正8）年東京帝国大学文科大学美学美術史科卒業、1921（大正10）年文部省図書館員教習所講師、翌年文部省古社寺保存計画調査嘱託、

1930（昭和5）年から1943（昭和18）年まで当研究所事務嘱託、その間に東京女子高等師範、東京女子大学、慶應義塾大学の講師を務め、1932（昭和7）年文部省国宝鑑査官となり、1946（昭和21）年9月まで任じられる。1933（昭和8）年重要美術品等調査委員会委員、1936（昭和11）年同委員会幹事を務める。1938（昭和13）年から1939（昭和14）年にかけてベルリンで開催された「伯林日本古美術展覧会」のためドイツへ出張、ドイツ政府より「フェルディンスト・クロイツェル・シュソーファードレル」勲章を受章。1944（昭和19）年には勲六等瑞宝章を受勲。戦後1945（昭和20）年、文部省社会教育局に勤務、翌年文部技官並びに国宝調査嘱託となり、1948（昭和23）年国立博物館調査員に任じられ、1950（昭和25）年文化財保護委員会事務局美術工芸課に属し、1956（昭和31）年退官。翌年文化財専門審議会専門委員となり、1966（昭和41）年勲四等を受勲、1968（昭和43）年文化財保護審議会専門委員となり1974（昭和49）年まで任じる。同年11月勲三等瑞宝章を受勲。1922（大正11）年、文部省古社寺保存計画調査嘱託として就任以来、なお草創期にあった日本全国の社寺の古彫刻を主とする文化財の調査と基礎的研究を行い、『南都七大寺大鏡』その他の編纂に関わった業績は大きい。また戦後も文化財専門審議会専門委員として長く国宝指定および文化財保護に貢献する。日本彫刻史研究の基礎的な調査の成果は『日本彫刻史基礎資料集成』（中央公論美術出版）としてまとめられ、没後も刊行が続いている。『国華』『美術研究』『画説』、国立博物館刊行誌、調査報告書等の論文、随筆等は100余を数える。1980（昭和55）年7月24日、静脈血栓症のため、東京都文京区の自宅で死去。享年87。

美澄政博（みすみまさひろ） 1908年月日不明～1938年3月24日

1908（明治41）年、山口県に生まれる。旧制山口高等学校出身、1935（昭和10）年東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業、同年当研究所の嘱託となり、明治大正美術史編纂に従事する。主に京都方面の日本画家伝を研究し、「幸野樸嶺とその業績について」（『美術研究』62、1937年2月）を発表。その他、諸家伝記の研究も進捗中であり続々発表の予定であったが、1938（昭和13）年3月24日に死去。享年30。

宮 次男（みやつぎお） 1928年6月2日～1994年2月20日

1928（昭和3）年6月2日、三重県鈴鹿市南若松町に生まれる。1953（昭和28）年3月、東北大学文学部東洋芸術史学科を卒業し、1954（昭和29）年5月同大学文学部助手となる。1955（昭和30）年9月に当研究所美術部技術員、1958（昭和33）年7月に文部技官となる。1960（昭和35）年5月には当研究所における共同研究『醍醐寺五重塔の壁画』（吉川弘文館、1959年）で日本学士院恩賜賞を受賞する。1972（昭和47）年当研究所主任研究官となり、1977（昭和52）年には同所情報資料部に異動となる。同年6月、金字宝塔曼陀羅の研究により東北大学より文学博士号を授与される。1978（昭和53）年4月には同所美術部第一研究室長に、さらに1982（昭和57）年4月には同所情報資料部長となる。1987（昭和62）年3月に当研究所を退官、同年4月に実践女子大学文学部教授に就任。研究対象は日本中世絵画を中心とするが、その関心は多岐にわたっている。特に絵巻物研究では『新修日本絵巻物全集』（角川書店、1975～1981年）への関与によってもたらされた幅の広さを基礎に、合戦絵、高僧伝絵、寺社縁起絵から御伽草子、奈良絵本や絵解き研究までも視野に入れ、数々の論考を残している。また日本中世期の代表的なジャンルと目される肖像画にお

いても、前後をみわたした肖像画史をこころみるなど、先駆的な足跡を残している。しかし博士論文のテーマに代表される法華経をテーマとした仏教説話画研究への関心は、東北大学での恩師故亀田孜教授への傾倒を示すかのように終始変わることなく、研究のバックボーンを形成している。美術史学会常任委員、民族芸術学会評議員。晩年は「十王経」や「往生要集」に関わる絵画に関心を収斂させていたかに見うけられるが、その成果を世に問いはじめていた途上の1994（平成6）年2月20日、肺癌のため東京都田無市の病院で死去。享年65。当研究所名誉研究員。

毛利 登（もうりのぼる） 1902年12月14日～1987年1月20日

1902（明治35）年12月14日、東京市に生まれる。1927（昭和2）年東京美術学校図案科を卒業、同年宮内省嘱託となり即位大礼用神宝類图案設計を担当する。1928（昭和3）年内務省造神宮使序嘱託となり、1939（昭和14）年同技手、1942（昭和17）年同技師となる。終戦後の1946（昭和21）年文部省国宝調査室に勤務し、1947（昭和22）年東京国立博物館嘱託、翌年同調査員を経て、1949（昭和24）年文部技官として同博物館に勤務。1950（昭和25）年文化財保護委員会美術工芸品課に移り、1951（昭和26）年同記念物課、1952（昭和27）年同無形文化財課を兼務。1962（昭和37）年当研究所保存科学部修理技術研究室長となるが、翌年東京藝術大学教授となり文化財保存修復概論を講ずる。1966（昭和41）年東京藝術大学附属芸術資料館長となる。1970（昭和45）年3月同大学を退官。文様美術、日本文様史を研究し、訳書にフランツ・マイヤー著『装飾のハンドブック』（東京美術、1968年）、著書に『日本の文様美術』（東京美術、1969年）がある。1987（昭和62）年1月20日死去。享年84。

茂木 曙（もぎあきら） 1928年4月8日～1999年1月12日

1928（昭和3）年4月8日生まれ。1945（昭和20）年10月工学院（専修学校）本科建築科卒業。在学中の1944（昭和19）年7月より1948（昭和23）年3月末まで東京帝国大学第一工学部建築学科勤務。その後家業（建築業）に従事。1951（昭和26）年7月奈良県法隆寺国宝保存工事事務所技術員として、保存工事に従事。1954（昭和29）年7月1日当研究所保存科学部の臨時筆生となり、1961（昭和36）年9月1日文部技官として同所保存科学部化学研究室に採用される。その後同所修復技術部第一修復技術研究室へ異動し、木造建造物（社寺等）の彩色剥落止め処置等を多数行う。1989（平成元）年3月31日定年退官。1999（平成11）年1月12日死去。享年70。

望月信成（もちづきしんじょう） 1899年6月14日～1990年5月28日

1899（明治32）年6月14日、京都市に生まれる。父は、『仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、1919～1937年）の著者であり知恩院管長も務めた信亨である。1926（大正15）年3月に東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業し、同年4月京都帝国大学大学院に進み、1929（昭和4）年修了。同年9月に恩賜京都博物館鑑査員となる。その後、1931（昭和6）年4月より当研究所嘱託を務め、1936（昭和11）年に大阪市美術館主事に転じる。以後、1949（昭和24）年9月同美術館長、翌年大阪市立大学教授に任じられる。大阪市立美術館時代の実務行政については、後に自伝として『ひと筋の細い道』（前田清文堂、1984年）で語っている。1964（昭和39）年に大阪市立美術館長、大阪市立大学教授退職の後、1968（昭和43）年から1979（昭和54）年まで帝塚山学院大学教授、

1968（昭和43）年から1985（昭和60）年まで財団法人美術院理事長と、美術教育および文化財保護事業に継続して尽くす。この他後進の教育には、高野山大学、甲南女子大学において関わる。また、理事、評議員として関与した美術館には、藤田美術館、白鶴美術館、逸翁美術館があり、1966（昭和41）年には兵庫県美術館建設委員会委員となっている。また僧籍にあった関係上、1934（昭和9）年知恩院什宝係主任、翌年知恩院保存会委員、1953（昭和28）年浄土宗美術部講師、1956（昭和31）年浄土宗本派審議会委員を務め、1964（昭和39）年浄土宗大僧正となっている。以上の業績に対して、1958（昭和33）年日本博物館協会総裁より長年博物館事業尽力表彰、1964（昭和39）年大阪府社会教育功労者表彰、同年大阪府大阪市文化賞、1970（昭和45）年勲四等旭日章を受勲。1965（昭和40）年第19回毎日出版文化賞を受賞した『仏像 心とかたち』（共著、日本放送出版協会、1965年）をはじめとして仏教美術を中心としたその著作は多い。1990（平成2）年5月28日、肝不全のため大阪市天王寺区の病院で死去。享年90。

持丸一夫（もちまるかずお） 1919年7月7日～1954年3月18日

1919（大正8）年7月7日、神奈川県横浜市に生まれる。旧制静岡高等学校を経て、1942（昭和17）年9月東京大学文学部美学美術史学科卒業、同年10月当研究所内の東洋美術国際研究会に入り、英文日本古美術案内の編集に従事、兼ねて当研究所嘱託として日本美術の研究にあたる。1944（昭和19）年3月応召、中国にて終戦を迎え、俘虜生活を約1年同地で送る。1946（昭和21）年5月帰還し、しばらく旧職の東洋美術国際研究会の残務整理にあたっていたが、1947（昭和22）年6月当研究所に入所。研究所においては、1949（昭和24）年6月文部技官となり、大学の卒業論文「司馬江漢の研究」以来手がけてきた近世絵画史を専攻し、特に桃山時代の障壁画の研究に力を注ぐ。その間、組合運動に、また研究所の事務的な面にも手腕を振るう。研究にはきわめて実証的な方法をとったが、啓蒙的な著述にも力を注ぎ、主著に『狩野永徳』（小山書店、1949年）や『日本美術史要説』（吉川弘文館、1953年）などがある。1954（昭和29）年3月18日、心不全のため東京都大田区の病院で死去。享年34。

守中裕幸（もりなかゆうこう） 1913年3月27日～1998年2月10日

1913（大正2）年3月27日、東京に生まれる。1935（昭和10）年3月東京帝国大学文学部言語学科を卒業、1938（昭和13）年3月に同大学院を修了する。同年4月当研究所嘱託となり、語学力をいかして、当研究所刊行の『美術研究』の翻訳に従事。また日本大学第一外国語学校、国際学友会でも英語の講師を勤める。1939（昭和14）年8月からは、東洋美術国際研究会の業務も兼務。同会の刊行物“Art Guide of Nippon Nara, Mie and Wakayama Prefectures”（1943年）の編集のため、1941（昭和16）年5月には奈良など関西の社寺調査にも加わるが、1941（昭和16）年10月の応召により、翻訳を担当することはかなわなかった。1946（昭和21）年7月まで陸軍主計軍曹の任につき、復員後の1946年7月31日当研究所を退官、その後1995（平成7）年3月まで浄土宗専念寺の住職を務める。また1949（昭和24）年4月より1976（昭和51）年3月まで戸板女子専門学校（のち戸板女子短期大学）で英文科教授として、学生の指導にあたる。日本私立短期大学協会教務研究委員会委員長、東京都私立短期大学協会学校事務研究員会委員、大学設置審議会短期大学基準分科会委員などを歴任。1982（昭和57）年4月戸板女子短期大学名誉教授となる。1998（平

成 10) 年 2 月 10 日死去。享年 84。

森 八郎 (もりはちろう) 1911 年 5 月 7 日～1988 年 7 月 1 日

1911 (明治 44) 年 5 月 7 日生まれ。1937 (昭和 12) 年 3 月旧制第一高等学校理科乙類を卒業。4 月東京帝国大学農学部農学科に入学し、1940 (昭和 15) 年 3 月首席卒業。同年 4 月同大学院に進み、1945 (昭和 20) 年 9 月大学院修了。1946 (昭和 21) 年 5 月慶應義塾大学予科講師、その後教授となり、1977 (昭和 52) 年 3 月同大学定年退職。1973 (昭和 48) 年より 1987 (昭和 62) 年まで当研究所保存科学部生物研究室調査研究員として勤務。専門は応用昆虫学。シロアリの研究では第一人者で、1979 (昭和 54) 年 6 月には、休止状態だった (財) 文化財虫害研究所を再興し、国内外の文化財の保存と修復のために尽力する。また虫害防除のための文化財の燻蒸法の研究・開発・実践については、保存科学部の研究員とともに、文化財方式と言われる燻蒸法の普及定着に尽力する。平泉の藤原三代遺体研究保存委員や宮内庁正倉院御物材質調査委員、古文化財科学会副会長などを務める。主著は、『中尊寺と藤原四代 中尊寺學術調査報告』(共著、朝日新聞社、1950 年)『最新しろありの知識 生態・被害・探知・防除』(共著、森林資源総合対策協議会グリーン・エージ編集室、1961 年)他多数。1979 (昭和 54) 年 4 月紫綬褒章を受勲、1986 (昭和 61) 年 4 月勲三等瑞宝章を受勲。1988 (昭和 63) 年 7 月 1 日死去。享年 77。没後、『森八郎 遺稿と追想』(森百合、1991 年)が刊行された。

矢代幸雄 (やしろうきお) 1890 年 11 月 5 日～1975 年 5 月 25 日

1890 (明治 23) 年 11 月 5 日、神奈川県横浜市に生まれる。横浜市関内境町に育ち、横浜商業学校に進むが、算盤が苦手で神奈川県立第一中学校に転校し、1908 (明治 41) 年に卒業。1911 (明治 44) 年 6 月旧制第一高等学校英法科を卒業し、同年 9 月東京帝国大学法科大学商業学科に入学するが、1912 (大正元) 年 9 月文科大学英文学科に転科する。一高時代から日本水彩画研究所に通って絵を学び、大学時代の 1913 (大正 2) 年第 7 回文展に水彩画「草原の赤い傘」を出品、入選となり、世論の話題となる。1915 (大正 4) 年 7 月、卒業論文「感情主義の芸術論」(Emotional Principles of Art)を提出して東京帝国大学文科大学を首席卒業、下賜の銀時計をうける。同大学院に進むが、同年 9 月東京美術学校講師となり、英語、西洋彫刻史、西洋美術史を担当すると同時に、西洋画科研究科の教室に出入りして黒田清輝に実枝の指導を受ける。1917 (大正 6) 年 3 月、旧制第一高等学校講師となり、翌年 12 月東京美術学校教授、兼旧制第一高等学校教授となる。1921 (大正 10) 年 3 月、西洋美術史研究のためにヨーロッパに留学、初めイギリスに滞在、秋にイタリアへ行きフィレンツェのバーナード・ベレンソン教授に師事、ルネッサンス美術、特にサンドロ・ボッティチェリの研究に従事する。1924 (大正 13) 年 2 月から秋にかけて英文の論文“Sandro Botticelli”を執筆、完成させ、翌年 2 月帰国、東京美術学校に復帰、高等官 6 等、3 月正七位に叙せられる。同年“Sandro Botticelli”全 3 巻 (Medici Society) を刊行。同書は、1929 (昭和 4) 年、1 巻本として普及版が刊行され、その際にイギリスの批評家ロージャ・フライの批判的な書評に対して矢代が反論し、論争が交わされる。1925 (大正 14) 年、最初の欧米留学より帰国したとき、黒田清輝遺産による美術奨励事業の具体化について、当時の東京美術学校長正木直彦に意見を求められ、ロンドンのウィット家の美術資料コレクションなどを例とする美術図書館の設立を提案し、その実現を託される。当

時研究者としてルネッサンス研究をさらに深めていこうとしていたが、日本の美術史研究の基礎的環境整備のために私心を捨てて当研究所設立に向けて尽力する。1927（昭和2）年1月、黒田清輝遺産による事業遂行のための委員会委員となり、当研究所の設立に参画。同年3月ヨーロッパ、アメリカ、カナダへ出張、翌年5月帰国する。第1回滞欧から帰国後は、しだいに日本、東洋美術に対して研究範囲をひろげ、国際的視野に立った観点から日本古美術の対外的紹介にも意を用い、1930（昭和5）年10月再度ヨーロッパへ出張、翌年には、帝国美術院、日独協会、ベルリン東西美術協会、プロシア芸術院共同主催によりドイツとハンガリーでの現代日本画展を実現させる。一方、同年11月正木直彦のあとを受けて、1935（昭和10）年5月まで当研究所主事を務め、同年6月同研究所長に就任し、今日の東京文化財研究所の基礎づくりに尽力する。この間、1932（昭和7）年から1933（昭和8）年、カーネギー財団とハーバード大学に招かれて、「日本絵巻物論」を講義、帰国後に財団法人啓明会主催の会合で「世界における日本美術の位置」を講義する。1935（昭和10）年5月から翌年にかけて、派遣教授としてイギリスへ行き、コートールド・インスティテュート・オブ・アートほかイギリスの諸地方の大学で講演する。1942（昭和17）年春の宣戦の詔勅誤読事件をきっかけとして6月28日に所長を辞任、それ以降は日本交通公社文化担当常任参与となり、1944（昭和19）年に東京美術学校教授を退官した後は、いっさいの公職をはなれて神奈川県大磯町に籠居する。1945（昭和20）年敗戦後の11月、奈良、京都など日本古美術文化の遺蹟が空襲による破壊を免れたのは、ラングトン・ウォーナーなどハーバード・グループの働きかけにより空襲目的地から除外されたのが理由であることなどを朝日新聞紙上（1945年11月11日）に発表し話題をよぶ。1950（昭和25）年8月文化財保護法が制定されると、文化財保護委員に任命される。1951（昭和26）年11月インド経由でイギリス、フランス、イタリアを歴遊してアメリカへ渡り、日本古美術展開催について交渉、翌年帰国、4月当研究所長に就任、翌年10月まで在任する。戦前の日伊学会の創設者の一人であり、1950（昭和25）年の日伊協会発足後はその理事長として、また1961（昭和36）年から1966（昭和41）年まではその会長として日伊文化の交流と協会の発展のために尽くす。この間、1956（昭和31）年5月、日伊文化協定による文化使節としてローマ大学、イタリア中亜極東協会の招きで渡伊し、ヴェネチア・ビエンナーレ展日本館開館式に出席、またパリでフランス、オランダ、イタリア、イギリス巡回の日本古美術展の開催準備会に4カ国代表を集めて協議、その計画は、1958（昭和33）年実現される。これらの功績によって同年10月、イタリア政府より勲章を授与される。こうした対外的な活動と同時に、晩年になって依頼された美術館の設立とそのための作品蒐集に意を注ぎ、1960（昭和35）年10月、奈良市学園前に大和文華館が創設されると初代館長に就任する。1965（昭和40）年9月、フリーア・ギャラリー・オブ・アートより、日本美術および中国美術の理解を進めるうゑに貢献した生涯の仕事に対して、第3回フリーア賞を授けられ、また同年秋に勲二等瑞宝章を受勲。翌年1月『日本美術の特質』第2版（岩波書店、1965年）によって朝日賞を受賞、同年2月15日、文化財保護委員会委員の発足以来5期にわたって重責を果たし任期満了で辞任する。1970（昭和45）年11月文化功労者に選ばれ、同年11月30日大和文華館長を辞して引退する。1975（昭和50）年5月25日、心不全のため神奈川県平塚市の病院で死去。享年84。

柳澤 孝（やなぎさわたか） 1926年1月16日～2003年9月6日

1926（大正15）年1月16日、長野県上田市上田に生まれる。1943（昭和18）年3月、長野県立上田高等女学校を卒業。1945（昭和20）年9月、日本女子大学国文科卒業後、同大学補修科に進学。翌年3月、同大学補修科を修了。その後日本美術史、とくに絵画史の研究のために当研究所において秋山光和の指導を受け、同年9月、当研究所雇となる。1959（昭和34）年9月1日文部技官となり、1972（昭和47）年7月1日に当研究所美術部主任研究官、1982（昭和57）年4月1日同所美術部第一研究室長に昇任。1984（昭和59）年4月1日同所美術部長に就任。1987（昭和62）年3月定年退官する。在職中から非常勤講師として東京大学、同大学東洋文化研究所、慶應義塾大学、学習院大学、東京藝術大学へ出講し、後進の育成にも力を注ぐ。長年にわたって日本仏教絵画史研究に携わり、網羅的かつ綿密な作品調査を行うことで知られ、成果をもとにした多くの著書、論文がある。その研究手法はX線透過撮影、赤外線撮影、双眼実体顕微鏡などの光学的、科学的手法を積極的に用い、それまで解明が困難であった絵画の顔料の種類、描法を明らかにして、仏画研究の手法を開拓するとともにその指針を示し、研究そのものの水準を飛躍的に引き上げるものである。1960（昭和35）年共同研究『醍醐寺五重塔の壁画』（吉川弘文館、1959年）により、日本学士院恩賜賞を受賞。晩年は、園城寺からの要請で修理委員を務め、余人を介さずつぶさに実見した金色不動明王像（いわゆる黄不動）に関心を寄せる。2003（平成15）年9月6日、急性心不全のため死去。享年77。没後、遺稿は「園城寺国宝金色不動明王像（黄不動）に関する新知見—不動明王修理報告—」（『美術研究』385、2005年2月）として上梓された。また代表論文のうち、年月の経過とともに入手困難が予想される雑誌掲載の論文を集成した『柳澤孝仏教絵画史論集』（中央公論美術出版、2006年）が刊行された。当研究所名誉研究員。

山田智三郎（やまだちさぶろう） 1908年10月11日～1984年4月11日

1908（明治41）年10月11日、東京府日本橋本町に生まれる。1926（大正15）年上智大学文学科予科にドイツ文学を志望し入学。この年ターナーの論文を通して矢代幸雄に師事、以後長くその指導を受ける。1927（昭和2）年同大学を中退し渡欧、ミュンヘン大学哲学部に入学し美術史学を専攻するが、翌年ベルリン大学哲学部に入学、同じく美術史学を専攻する。1934（昭和9）年同大学博士課程を卒業し、『17、18世紀に於けるヨーロッパ美術と東亜の影響』（アトリエ社、1942年）を刊行。同年帰国し、7月より当研究所嘱託として勤務、9月より明治大正美術史編纂に従事する。1935（昭和10）年ベルリン大学よりドクトルの学位を授与され、1938（昭和13）年「伯林日本古美術展覧会」開催に際し文化使節随員として兒島喜久雄と共にドイツに赴く。1942（昭和17）年当研究所内の東洋美術国際研究会編集主任、1944（昭和19）年同会主事となり、戦後1946（昭和21）年駐日米軍の東京アーミーエデュケーションセンター勤務を経て、1953（昭和28）年から1968（昭和43）年まで共立女子大学教授を務める。この間1954（昭和29）年フルブライトおよびスミス・マント研究員として1年間渡米、また1958（昭和33）年イスラエルのハイファ市日本美術館長として2年間当地に赴いた後、1962（昭和37）年カリフォルニア州スタンフォード大学客員教授、翌年ニューヨークのホイットニー財団派遣教授としてノースカロライナ大学、アイオワ州ドレーク大学でそれぞれ1年間東洋日本美術史を講義する。国内の大学での講義も数多く、上智大学、東京藝術大学、国際基督教大学、早稲田大学などで講師を務めている。1968（昭和43）年

国立西洋美術館長に就任、そのかわり、1965（昭和40）年ブリヂストン美術館運営委員となり、また評議員として1968（昭和43）年東京国立近代美術館、彫刻の森美術館、1970（昭和45）年ニューヨーク近代美術館、1971（昭和46）年日本美術協会、1974（昭和49）年東京国立博物館、1975（昭和50）年池田20世紀美術館、1977（昭和52）年京都国立近代美術館、山種美術財団、またMOA美術館運営委員を併任、1979（昭和54）年国立西洋美術館長を退官する。同年同美術館評議員、海外芸術交流協会理事、ジャポネズリー研究学会長、1980（昭和55）年岐阜県美術館顧問、日仏美術学会常任委員、1981（昭和56）年財団法人美術文化振興会理事長、1982（昭和57）年財団法人鹿島美術財団理事を歴任し、また安井賞、文化功労者、文化勲章の選考委員も務めるなど、美術文化の振興と国際交流に多大の功績を残す。1974（昭和49）年フランスより芸術文学勲章のオフィシエ章、1975（昭和50）年イギリスより名誉大英勲章（CBE）、1977（昭和52）年オランダよりオランジュ・ナッサウ・コマンダー勲章を受章、1980（昭和55）年勲二等瑞宝章を受勲。1984（昭和59）年4月11日、急性心不全のため横浜市戸塚区の病院で死去。享年75。

吉川逸治（よしかわいつじ） 1908年12月14日～2002年12月5日

1908（明治41）年12月14日、神奈川県横浜市に生まれる。1929（昭和4）年旧制浦和高等学校文科卒業。1933（昭和8）年東京帝国大学美学美術史学科卒業。同年フランスへ留学し、パリ大学でアンリ・フォションに師事してフランス中世美術を研究。1934（昭和9）年よりボアティエ市にあるサン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画を調査し、1939（昭和14）年その成果をまとめた学位論文“Apocalypse de Saint-Savin”（サン・サヴァン教会堂の黙示録画の研究）をパリ大学に提出して博士号を取得。同年8月から9月まで、フランス隊のバーミヤン発掘調査にあわせアフガニスタン、インドを巡遊して帰国する。1939（昭和14）年12月から1942（昭和17）年6月まで当研究所内の東洋美術国際研究会事務嘱託、1940（昭和15）年から1943（昭和18）年まで当研究所嘱託、1941（昭和16）年東京美術学校の講師となり、西洋美術史を講じ、1944（昭和19）年には東方文化研究院（東京）も併任する。1947（昭和22）年同校教授となり同年10月からは1965（昭和40）年5月まで当研究所と兼務する。1949（昭和24）年『中世の美術』（東京堂、1948年）により毎日出版文化賞受賞。1953（昭和28）年東京大学助教授となり、1955（昭和30）年から1969（昭和44）年まで同大学美術史学科教授を務める。その間、1958（昭和33）年から1961（昭和36）年まで大岡昇平、中村光夫らと同人誌『声』（丸善）に参加し、1959（昭和34）年から1961（昭和36）年までパリ国際大学都市日本館長を務める。1969（昭和44）年名古屋大学教授となり1972（昭和47）年退官。この間、1959（昭和34）年から1976（昭和51）年までに3度にわたりフランスのサン・サヴァン教会堂を調査し、その成果の集大成として『サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画』（新潮社、1982年）を刊行。その研究方法は、現地でのフィールド・ワークにもとづく実証的なもので、国際的に高い評価を得る。こうした調査により1975（昭和50）年ボアティエ大学から名誉教授号を授与される。1972（昭和47）年から1981（昭和56）年まで東海大学教授、1981（昭和56）年から1999（平成11）年まで大和文庫館長を務める。1982（昭和57）年日本学士院会員となり、1984（昭和59）年フランス学士院ジャン・レイノー賞を受賞。日本における西洋美術史学研究の上で、徹底的な現地調査と広汎な文献の渉猟を基礎とする方法論を実践した先駆的研究者として位置づけられる。2002（平成14）年12月5日、肺炎のため神奈川県鎌倉市の自宅で死去。享

年 93。

米澤嘉圃（よねざわよしほ） 1906 年 6 月 2 日～1993 年 7 月 29 日

1906（明治 39）年 6 月 2 日、秋田県鹿角郡小坂町に生まれる。本名芳男。1924（大正 13）年 3 月 曉星中学校を卒業。1927（昭和 2）年 3 月旧制福岡高等学校を卒業、翌年 4 月東京帝国大学文学部 美学美術史学科に入学、1931（昭和 6）年 3 月同大学を卒業、同年 4 月より同大学文学部副手となり、同時に同文学部大学院に進む。同年 6 月、父の死去にあたり芳男を嘉圃と改名する。この間、大学において瀧精一の指導をうけ、処女論文「狩野正信の研究」上、中、下を『国華』（494～496、1932 年 1～3 月）に発表。1933（昭和 8）年 5 月、文部省重要美術品等鑑査事務嘱託となり、著名な収集家の所蔵品を調査して鑑識眼を養い、1935（昭和 10）年 6 月、東方文化学院助手に迎えられる。この頃「田能村竹田と護国学派」を『国華』（540、1935 年 11 月）に発表する。以降、中国絵画研究に本格的に没入し、1938（昭和 13）年 3 月、東方文化学院研究員となり、中国上代の作画機構や絵画思想に関する多くの論文を『東方学報東京』『国華』等に発表。1942（昭和 17）年 10 月、『国華』の編集員となり、戦後、東方文化学院が経済的基盤を失うと、1948（昭和 23）年 4 月、東京大学東洋文化研究所研究員へ転じ、1947（昭和 22）年 10 月より 1965（昭和 40）年 5 月まで当研究所美術部研究員を併任する。1949（昭和 24）年 5 月以降、東京大学教授を併任、『国華』編集委員、美術史学会常任委員として、以後、東アジア全般の美術の動向を視野におさめた数々の論文と作品紹介を『国華』を中心に発表し、戦後における東洋、日本の美術史研究を領導する。1967（昭和 42）年 3 月、東京大学を定年退官するまで、国内はもとより海外における中国絵画の調査も精力的に実施。1960（昭和 35）年台湾、1962（昭和 37）年、1966（昭和 41）年に中国、翌年アメリカ、1973（昭和 48）年ヨーロッパを訪れ、各地の博物館、美術館で中国絵画の調査、視察を行う。この間、金沢大学、名古屋大学で教鞭をとる。また 1962（昭和 37）年から 1966（昭和 41）年まで、美術史学会代表として指導力を発揮する。翌年 3 月東京大学を定年退官し、名誉教授となる。同年 4 月から東京藝術大学講師、武蔵野美術大学教授を務める。数々の要職を歴任し、文化財行政にも大きく寄与する。1977（昭和 52）年 4 月勲二等旭日中綬章を受勲。同年 8 月『国華』主幹となって以降、1989（平成元）年の『国華』創刊百年記念事業の実現に尽力し、『国華論攷精選』上、下（朝日新聞社、1989 年）の出版、「室町時代の屏風絵展」（東京国立博物館）の開催、創刊百年記念「特輯東洋美術選」上、下（『国華』1127・1128、1989 年 10・11 月）、「国華賞」の創設を果たし、新たに明治美術を『国華』掲載の対象とする指針を定める。研究対象は中国古代より現代までの絵画全般から朝鮮、日本の絵画におよび、文献を駆使した基礎研究を徹底して行う一方で、作品の実査と鋭い鑑識にもとづいて再検証し、実証的な近代の学としての水準に高める。日本美術についても東アジアを視野におさめた広い観点から検証する必要性を唱える。主著に『東洋美術 1』（朝日新聞社、1967 年）『原色日本の美術 11』（小学館、1970 年）『水墨美術大系』1、11（講談社、1975 年）がある。主要論文はすべて『米澤嘉圃美術史論集』上、下（国華社、1994 年）に収録されている。1993（平成 5）年 7 月 29 日、肝不全のため、東京都新宿区の病院で死去。享年 87。

藤本十九郎（わきもとそくろう）（楽之軒） 1883 年 9 月 19 日～1963 年 2 月 8 日

1883（明治 16）年 9 月 19 日、山口県防府市に生まれる。京都市立美術工芸学校に入学するが中途

退学して上京。1902（明治35）年頃から藤岡作太郎に国文学、中川忠順に美術史を学ぶ。美術史研究のかたわら万朝報、東京朝日新聞に現代美術評論を執筆。1917（大正6）年から1920（大正9）年まで文部省嘱託として国宝調査にあたり、1922（大正11）年から1937（昭和12）年まで『日本国宝全集』全84輯（日本国宝全集刊行会、1923～1938年）の編集に従事。1931（昭和6）年から1933（昭和8）年まで当研究所嘱託となり、『美術研究』に多くの論文を発表。1936（昭和11）年美術攻究会を東京美術研究所と改め機関誌『画説』（のち『美術史学』と改題）を刊行し、絵画、陶磁器等に関する研究論文、作品解説、史料紹介の筆をとる。1945（昭和20）年東京美術研究所を閉鎖、東京美術学校講師、1947（昭和22）年教授となり日本美術史を講じる。1949（昭和24）年国立博物館次長となったが間もなく辞任。1950（昭和25）年東京藝術大学教授となり、1959（昭和34）年定年退官。1962（昭和37）年名誉教授となる。なお、1937（昭和12）年重要美術品等調査委員、1945（昭和20）年国宝保存会委員、1950（昭和25）年文化財専門審議会専門委員を務め、文化財保護行政にも貢献する。1962（昭和37）年古美術研究および現代美術評論に関する業績により紫綬褒章を受章。水墨画、文人画および京焼の研究に業績が大きく、主著に『平安名陶伝』（洛陶会、1921年）がある。1963（昭和38）年2月8日、死去。享年80。逝去に際し正四位勲四等瑞宝章の追贈を受けた。没後、『脇本楽之軒の小伝と追憶』（風濤社、1971年）が刊行された。

和田 新 = 青山 新（わだしん あおやましん） 1899年5月7日～1988年4月5日

1899（明治32）年5月7日、大阪市東区仁右衛門町に生まれる。1912（明治45）年単身上京し、母の兄和田英作宅に寄寓、明治学院中学部卒業後、1919（大正8）年東京美術学校西洋画科に入学し、1924（大正13）年同科を卒業。研究生を経て1925（大正14）年助手、1926（昭和元）年講師となり西洋彫刻史を担当し、矢代幸雄の指導を受ける。1927（昭和2）年1月より当研究所設立準備事業に携わる。1929（昭和4）年東京美術学校助教授となり西洋美術史を講じる。同年より翌年にかけ啓明会の援助により西アジア美術史研究のためヨーロッパ、イラン、イラク等を調査。1930（昭和5）年当研究所嘱託となる。1935（昭和10）年5月東京美術学校教授となるが同8月依願退官。この年青山家より和田家へ転籍。1937（昭和12）年当研究所員となり、1942（昭和17）年退官。1947（昭和22）年日本博物館協会幹事となる。1951（昭和26）年日本美術家連盟事務局長となり1971（昭和46）年まで長きにわたり美術家の国際交流に尽くし、その後も同連盟相談役を務める。また、1971（昭和46）年よりほぼ毎年油絵個展を開催。著書に『イーラーン芸術遺跡』（美術書院、1945年）などがある。1988（昭和63）年4月5日、肺炎のため東京都三鷹市の病院で死去。享年88。

和田英作（わだえいさく） 1874年12月23日～1959年1月3日

1874（明治7）年12月23日、鹿児島県肝属郡垂水村に生まれる。幼くして上京、明治学院に学び、上杉熊松の指導を受ける。1891（明治24）年退学して画業に専心し、洋画を曾山幸彦、原田直次郎に学ぶかたわら日本画を久保田米麿に学び、次いで天真道場に入って黒田清輝、久米桂一郎の指導を受ける。1896（明治29）年東京美術学校助教授となるが、間もなく辞して1897（明治30）年2月同校西洋画科に入学、同年7月修了し同校助手となる。1896（明治29）年白馬会の創立に参加して会員となる。1899（明治32）年ドイツに赴き、同年文部省留学生としてパリに渡り、アカデミー・

コラロッシに入学してラファエル・コラン、クールトア、ユージェーヌ・グラッセ等の指導を受ける。1903（明治36）年、岡田三郎助、浅井忠等と共に帰国し、同年東京美術学校教授に就任。1907（明治40）年文部省美術審査委員会委員、1919（大正8）年帝国美術院会員となる。1921（大正10）年ヨーロッパに出張し、翌年帰国。1932（昭和7）年東京美術学校長に就任。この間、1934（昭和9）年帝室技芸員を拝命し、1935（昭和10）年6月文部省美術研究所長事務取扱を命じられる。翌年6月東京美術学校長を辞し、名誉教授となる。1937（昭和12）年帝国芸術院会員となる。1943（昭和18）年多年の功績に対し文化勲章を授与され、1951（昭和26）年文化功労者となる。1959（昭和34）年1月3日、膀胱癌のため静岡県清水市で死去。享年83。没後、勲一等瑞宝章大綬の追贈を受けた。

渡邊 一（わたなべはじめ） 1904年9月26日～1944年3月23日

1904（明治37）年9月26日、新潟県長岡市に生まれる。県立長岡中学校を経て、1925（大正14）年旧制第一高等学校文科乙類を卒業。同級に石澤正男がいる。1929（昭和4）年東京帝国大学文学部美術史科を卒業と同時に京城帝国大学法文学部に赴任し、田中豊蔵、上野直昭教授の助手となるが、1930（昭和5）年辞職し、1931（昭和6）年当研究所の嘱託となる。その後同所で資料の収集、整理、索引の作成等に努め、創刊当初の機関誌『美術研究』の編輯に力を注ぎ、1935（昭和10）年には九州帝国大学法文学部の依頼をうけて「日本上代絵画史」の講義に赴く。研究題目は中国絵画史の禪宗系統、特に東山水墨画のような枯淡な方面を選び、また当研究所の事業の一つである「東洋美術総目録」の作成に専心。その一端として東山水墨画派の研究を個々の作家について開始し、その成果である、「黙庵」「無等周位」「如拙」「文清」「周文」「秀文」「靈彩」「狩野正信」を『美術研究』に発表。1940（昭和15）年2月応召、中国を経てビルマに転戦、1944（昭和19）年3月23日、インパール戦線において戦死。享年41。没後、『東山水墨画の研究』（座右宝刊行社、1948年）が追悼のため刊行され、毎日出版文化賞を受賞した。その後『東山水墨画の研究 増補版』（中央公論美術出版、1985年）が刊行された。

東京文化財研究所年表

凡 例

1. 本年表の左段に当研究所「事項」を、右段に「関連事項」を年ごとに併記した。
1. 本年表の当研究所の事項は、その前身である帝国美術院附属美術研究所の創設経緯から、開所以後75年にわたる歴史を示すために、1924（大正13）年7月から2007（平成19）年4月1日までを対象に、当研究所の主要な研究、事業活動を編年的に編集したものである。
1. 主要な研究、事業活動とは、国の予算で、独立行政法人化以後は運営交付金によって行われたものであり、文部科学省（旧文部省）による科学研究費補助金、特別研究、ならびに文化庁、地方公共団体等からの受託研究等については、『資料編』13～36頁を参照されたい。
1. 関連事項は、当研究所の研究、事業活動に関連する主要な事項と、時代の動向を示す重要な事項にとどめた。
1. 記述にあたっては、本書巻末の「参考文献一覧」中に挙げた文献を参照した。

1924 (大正 13) 年

- 7 月 黒田清輝は、樺山愛輔、久米桂一郎、打田伝吉の三人を遺言執行人に指名し、不動産の三分の一を美術奨励事業に出捐するよう遺言。
- 7 月 15 日 黒田清輝逝去。
- 11 月 5 日 「黒田清輝先生遺作展覧会」(会場 東京美術学校、15 日まで)。

1925 (大正 14) 年

- 5 月 27 日 黒田子爵記念事業発起会 (会場 共楽倶楽部)。
- 7 月 27 日 正木直彦と矢代幸雄が、黒田子爵遺産の事業案として美術図書館設計について協議。
- 8 月 30 日 福原隼二郎美術院長と正木の両名は、牧野伸顕に遺産事業案を述べる。
- 9 月 12 日 正木は、福原に遺産事業の具体案を提出。
- 9 月 19 日 牧野と福原が、事業案として提出された美術図書館設計について協議。
- 9 月 21 日 牧野と樺山が、福原提出の図書館案について協議。
- 10 月 3 日 樺山、牧野、福原、正木、矢代らの協議で、黒田清輝の遺言に基づく美術奨励事業として、美術図書館と研究所を兼ねた機関の建設を決定。美術研究所構想が成立。
- 12 月 11 日 正木と久米が、遺産事業について協議。

1924 (大正 13) 年

- 10 月 3 日 黒田先生追悼会をバリ在留の矢崎千代治、三宅克巳、藤田嗣治らが、日本人倶楽部で開催。
- 11 月 7 日 中條精一郎らの発起により、黒田清輝子爵追悼会が、148 名の参加で、上野公園精養軒において開催。

1925 (大正 14) 年

- 2 月 14 日 国民美術協会の評議会は、黒田清輝記念事業発起の件につき、東京美術学校倶楽部に 24 名集まり協議。
- 2 月 25 日 国民美術協会の評議会は、黒田清輝記念事業発起の件につき、東京美術学校倶楽部において協議。
- 3 月 山田耕筈、近衛秀麿らにより日本交響楽協会結成。
- 3 月 10 日 国民美術協会の評議会は、黒田清輝記念事業発起の件につき、東京美術学校倶楽部において協議。事業の準備特別委員として、岡田信一郎、和田英作ら 10 名を決定。
- 3 月 17 日 美術奨励金を帝国美術院の美術研究奨励金とし、委任経理する法律が衆議院で可決。今後帝国美術院の管理となる。
- 4 月 1 日 新橋演舞場開場。
- 4 月 2 日 治安維持法公布。
- 5 月 10 日 国民美術協会は、黒田子爵記念事業委員会を、本郷燕楽軒において開催。
- 6 月 16 日 国民美術協会は、黒田子爵記念事業委員会を、永田町永平倶楽部において開催。
- 7 月 15 日 麻布笄町長谷寺で黒田清輝一年祭。
- 7 月 15 日 蜂須賀侯、黒田長成侯、松平、寺島、小笠原、樺山、林伯らが発起人となり、黒田清輝記

念事業として、美術奨励金をあつめ、黒田子爵記念賞を設けて、優秀作品を発表し、また有望な新進作家を海外留学させることとした。

8月 中丸精十郎の発起で、佐藤均揮毫の黒田清輝先生の肖像頒布会。

10月26日 日本青年館の開館式に郷土舞踊と民謡の会開催。

12月23日 国民美術協会の評議会で、黒田清輝子爵記念事業資金を募集して集まった一万円を元金にすることとする。

1926(大正15・昭和元)年

4月 岡田三郎助、和田英作、宮田光雄が発案した故黒田清輝子爵記念事業基金に、一万三千余円が集まり、秋の帝展出品作に黒田賞を与えることに決定。文部当局に建議する。

5月1日 東京府美術館開館(岡田信一郎設計 佐藤慶太郎寄贈)。

6月『歌舞伎研究』創刊。

12月25日 大正天皇崩御。昭和と改元。

1927(昭和2)年

民俗芸術の会設立。

3月 東亜考古学会設立。

4月 三越ホール(後の三越劇場)開場。

6月3日「明治大正名作展覧会開催」(主催 朝日新聞社、会場 東京府美術館、30日まで)。

6月18日 日独文化協会設立(会長 後藤新平)。

1926(大正15・昭和元)年

2月27日 正木と久米が、再度遺産事業について協議。

4月1日 正木は日本画家添田達嶺より、明治大正絵画史編纂の要望を受ける。

7月16日 正木は朝日新聞社坂崎坦より、翌年開催予定の「明治大正名作展覧会」への援助要請を受ける。

12月25日 美術研究所設立準備委員会が組織され、正木が委員長に就任。当研究所事業については矢代、黒田子爵作品陳列については久米、岡田三郎助、和田英作、藤島武二及び大給近清、建物造営については岡田信一郎、会計事務については打田伝吉が担当。建物は黒田記念館と命名。

1927(昭和2)年

1月17日 設立準備委員会(会場 中央亭)。

1月31日 設立準備委員会(会場 日本倶楽部)。

2月1日 当研究所事業を、東京美術学校の矢代の研究室にて開始。矢代、田中喜作、青山新が資料収集、整理を行う。

2月10日 矢代は、正木に黒田子爵寄付記念館建設に関する書類案を提出。

2月16日 打田伝吉が東京美術学校校長正木へ提出した東京美術学校敷地の借用願を、正木が文部省へ提出。

2月24日 矢代は、正木に黒田子爵寄付記念館建設に関する書類案を再提出。同日、正木は文部大臣と、黒田記念館建設の件を協議。

3月1日 2月16日付東京美術学校敷地一部無償使用の件を文部省が認可する。

4月14日 矢代、欧州各国、アメリカおよび英領カナダへ出発。

5月 矢代、出張先の欧米にて、美術研究所用図書・写真の

購入を開始。

8月29日 正木と岡田信一郎が、黒田記念館建築について協議。

10月22日 黒田記念館起工式。

10月28日 竹中工務店、上野公園東京美術学校構内黒田記念館の建築に着手。

1928（昭和3）年

1月26日 設立準備委員会（会場 春日）。

5月 中川忠順文庫購入。

5月20日 和田、正木、矢代が、当研究所所属問題を協議。

6月13日 正木と矢代が、福原美術院長に黒田記念館の帝国美術院附属案を提出。

6月14日 正木は、文部省にて福原美術院長と専門学務局長に、当研究所を美術学校附属ではなく、帝国美術院附属とするよう承認を求める。

6月20日 正木と久米が、当研究所の帝国美術院附属案を協議し、合意。

6月21日 帝国図書館長松本喜一に、当研究所が行う予定の東洋美術文献総目録編纂への協力を依頼。

7月24日 設立準備委員会。樺山、福原、久米、打田、岡田、正木、矢代ら8名が参加（会場 星ヶ岡茶寮）。

8月 『国華』既刊分445冊を2300円で購入。

8月30日 黒田記念館竣工。

9月 矢代研究室から黒田記念館へ引っ越す。

12月1日 黒田記念館落成披露会。

1929（昭和4）年

1月24日 第1回談話会開催。同年12月までに5回開催。
1932（昭和7）年11月22日に復活。

3月6日 田中喜作文庫、矢代幸雄文庫の寄託を受ける。

4月9日 正木、矢代と福原で、黒田記念館政府移管について協議。

4月24日 「東洋美術総目録編纂」事業について啓明会の補助を要請。

5月29日 諸般の準備が整い、樺山は建物、設備、研究資料等一切の他に金15万円を添えて帝国美術院長宛に寄附願を提出し、黒田子爵記念事業が完了。

10月10日 ビニョン氏招聘委員会主催、「英国水彩画展覧会」開催（会期は24日まで）。

10月15日 『黒田清輝作品収蔵目録』を、岩波書店より刊行。

10月29日 ローレンス・ビニョン夫妻、ドイツ大使夫妻、サムソン夫妻、研究者、美術家を招き茶菓を供し、某氏所蔵の文晁画稿数十種を陳列、供覧。

1928（昭和3）年

1月 『民俗芸術』創刊。

3月17日 台北帝国大学設置〔勅〕。

3月31日 工芸指導所官制公布〔勅〕。

4月25日 『日本歌謡集成』の刊行開始。

7月12日 2世市川左団次ら、ソ連政府の招きで歌舞伎公演に出演（8月1日～8月17日モスクワ芸術座で「忠臣蔵」など上演、11月6日帰国）。

10月27日 早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館開館。

11月10日 昭和天皇即位の大礼。

1929（昭和4）年

3月28日 国宝保存法公布。7月1日施行。

4月 東方文化学院設立し、東京、京都に研究所を設置。

7月9日 東京帝国大学資料編纂掛、同史料編纂所に昇格（所長辻善之助）。

1930 (昭和5) 年

- 3月18日 帝国美術院事務打合会にて、「美術研究所官制」案合意。
- 4月9日 帝国美術院総会開催。美術研究所設置について協議。「美術研究所」の名称について質疑有り(会期は10日まで)。
- 6月21日 啓明会は、正木の「東洋美術総目録編纂」に4ヶ年8千円の補助を決定。
- 6月28日 「帝国美術院規程」改正。帝国美術院に附属美術研究所を置く(勅令第125号)。正木直彦が主事となる。
- 7月19日 研究所事業を東京美術学校職員及び美術記者に披露する会を開催。
- 10月 「美術研究所事務分掌規程」制定。経理部、資料部、編輯部を置く。「美術研究所事務分掌規程」、「美術研究所研究資料閲覧規程」、「美術研究所特別資料閲覧規程」制定。
- 10月15日 『帝国美術院附属美術研究所一覧』刊行。
- 10月17日 帝国美術院附属美術研究所開所式を、東京美術学校講堂にて挙行。あわせて開所記念行事として「浮世絵版画展覧会」を開催(会期は19日まで)。

1931 (昭和6) 年

- 11月1日 開所記念行事。「故岡田伊三次郎氏蒐集支那版画(姑蘇板)陳列」を開催(会期は3日まで)。
- 11月21日 美術懇話会創立総会、ならびに記念展覧「岡田三郎助氏蒐集古代衣裳・小裂展覧」を開催。
- 11月25日 正木が帝国美術院長に就任のため、矢代幸雄が主事となる。

1932 (昭和7) 年

- 1月1日 『美術研究』刊行開始。
- 1月20日 帝国美術院連絡委員会開催(会場 美術研究所)。和田英作より、明治大正美術史編纂事業の提案あり、全員一致で賛成。編纂委員指名および事務を、矢代幸雄幹事の手許にて美術研究所員が担当することを決定。
- 1月31日 美術懇話会展覧一般公開 [聆濤閣吉田家収蔵古文書、集古帖類展覧]。
- 2月21日 美術懇話会展覧一般公開 [画法、画譜類]。
- 3月31日 『美術研究資料第1輯』を、美術懇話会より刊行。
- 4月18日 朝日新聞社より、明治大正美術史編纂事業費の寄付申出(1932年以降、1年5千円×5ヶ年=計2万5千円)。
- 5月26日 帝国美術院は、東京朝日新聞社からの寄付申出を受理し、編纂委員会規程を定め、美術研究所にて、明治大正美術史編纂を行うことを決定。

1930 (昭和5) 年

- ローマにて、美術及歴史的記念建造物の保存に関する国際専門家会議開催(主催 国際連盟学芸協力国際学院)。
- 1月1日 大阪四ッ橋の近松座を改装し文楽座開場、櫓下は3世竹本津太夫。
- 1月25日 朝日新聞社創設の、朝日賞第1回授賞式。
- 4月26日 “Esposizione d'arte Giapponese”(主催 大倉喜七郎、後援 イタリア政府、ローマ、6月1日まで)。
- 11月5日 大原美術館開館。
- 12月 講談社レコード事業部発足(11月6日からキングレコード)。

1931 (昭和6) 年

- 2月3日 東京博物館を東京科学博物館と改称(勅)。
- 9月18日 満州事変勃発。
- 12月21日 アテネにて、美術及歴史的記念建造物の保存に関する国際専門家会議開催(主催 国際連盟学芸協力国際学院)。歴史的建造物の保存がテーマ。

1932 (昭和7) 年

- 1月28日 上海事変勃発。
- 3月1日 満州国建国。
- 3月1日 『郷土風景』創刊。
- 5月15日 5.15事件。
- 8月23日 国民精神文化研究所を設置(勅)。
- 9月28日 大阪歌舞伎座新築開場式。

6月 文部省は、明治大正美術史編纂委員会を設け、委員長に正木直彦、委員に和田英作、高村光雲、結城貞松、矢代幸雄、香取秀治郎が囑託される。

6月26日 美術懇話会展覧一般公開「西洋近代絵画展覧会」(会期は28日まで)。

8月 明治大正美術史編纂事業の一環として近現代美術関係資料の購入を開始。

9月25日 美術懇話会展覧一般公開「長崎系洋風画展覧会」(会期は26日まで)。

11月18日 美術懇話会通常総会。展覧[尾高鮮之助氏撮影活動写真等]。講演は尾高鮮之助[インドシナ、インド、アフガニスタン方面の旅行談](会場 上野公園精養軒)。

11月22日 談話会復興第1回開催。福井利吉郎「雲村について」。

11月27日 故黒田清輝子爵記念像(高村光太郎作)除幕、贈呈式(会場 東京美術学校講堂)。

12月11日 美術懇話会展覧一般公開「鞍馬寺経塚出土品」。

12月15日 『美術懇話会叢書第1号』を、美術懇話会より刊行、配布。

12月23日 談話会開催。尾高鮮之助「印度、アフガニスタン旅行談」16mm映写。

1933(昭和8)年

瀧精一の首唱により、原田積善会の援助を得て古美術保存協議会(のち古美術自然科学研究会)が発足。

樺山愛輔より、寄託作品の黒田清輝作「湖畔」が正式に寄贈される。

1月17日 談話会開催。福井利吉郎「常磐光長と其作風」。

2月8日 明治大正美術史編纂事業に関し、京都の美術ならびに美術工芸の資料収集の便宜を得るために、座談会を開催。

2月28日 談話会開催。田中喜作「宗達に就て」。

3月28日 談話会開催。脇本十九郎「我孫子文長」。

5月26日 談話会開催。囑託富永惣一のギリシア旅行についての講話。

6月3日 黒田清輝夫人照子より、黒田清輝作「ブレハの少女」が寄贈、「アトリエ」「赤髪の少女」が寄託される。

7月2日 美術懇話会展覧一般公開「崋山筆肖像画展覧会」。

7月14日 談話会開催。メトロポリタン美術館極東美術部の石沢正男によるメトロポリタン美術館蒐集品の紹介。

7月17日 神崎憲一より、明治大正美術史編纂資料として、日出新聞美術記事(1885〈明治18〉～1892〈明治25〉年)の寄贈を受ける。

11月26日 美術懇話会展覧一般公開「職人尽絵展覧 附 洛中洛外図」。

1933(昭和8)年

3月27日 国際連盟脱退。

4月1日 「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」公布。

5月3日 独建築家ブルーノ・タウト来日。10月12日まで滞在。

8月22日 「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」制定。

11月1日 『郷土風景』が『郷土芸術』に改題。

1934 (昭和9) 年

- 4月15日 美術懇話会展観一般公開 [西村総左衛門氏所蔵
円山応挙筆写生図、帝室博物館所蔵応挙写生帖、滋賀県円
満院蔵難福図巻]。
5月13日 美術懇話会展観一般公開 [西洋絵画素描及彫刻
展観]。
9月25日 美術懇話会展観一般公開 [諸家収蔵故久米桂一
郎氏油画展観]。
10月18日 毎年10月18日を開所記念日と決定する(庶
-101号)。
12月15日 美術懇話会総会(会場 上野精養軒)。

1935 (昭和10) 年

- 1月28日 明治大正美術史編纂委員会を開催。
1月28日 書庫竣工。
4月 『日本美術年鑑』編纂事務の開始。
5月28日 松田源治文部大臣は帝国美術院改組発表。政府
は「帝国美術院官制」及び「美術研究所官制」制定の件を
定例閣議に付議決定、同日正午文部省は内定の院長及び会
員49名の氏名とともにこれを制定。
6月1日 「美術研究所官制」公布。主事は所長となる(勅
令第148号)。
6月1日 和田英作が所長事務取扱となる。
10月27日 美術懇話会展観一般公開 [須賀川所在重政堂
田善作品及び関係資料展観](会期は28日まで)。
12月2日 美術懇話会展観一般公開 [菊池容斎作品画稿そ
の他資料]。
12月13日 明治大正美術史編纂委員会を開催。

1936 (昭和11) 年

- 次年度予算概算要求において、当研究所に科学研究部の設置
を計画。
5月24日 美術懇話会展観一般公開 [法然絵展観]。
6月22日 和田英作、東京美術学校長並びに当研究所長を
免ぜられる。矢代幸雄が所長となる。
7月11日 談話会開催。福井利吉郎「絵巻物雑考」。
9月1日 「研究資料閲覧規程」を制定し、美術研究所所蔵
の図書・写真等資料の閲覧を開始。
10月27日 『日本美術年鑑』刊行開始。
11月29日 美術懇話会展観一般公開 [櫻間青厓作品展観]
(会期は30日まで)。

1934 (昭和9) 年

- 1月1日 東京宝塚劇場開場。
4月2日 法隆寺の昭和大修理始
まる(11月4日まで)。
4月18日 国際文化振興会発会式。
10月20日 『NIPPON』創刊。
12月 日本古文化研究所、藤原宮
跡を発掘。
12月22日 文部省に国語審議会
を設置。

1935 (昭和10) 年

- 1月 1924(大正13)年以降行わ
れていた御物の整理が完了。
7月 著作権審査会設置。7月15
日からの改正著作権法の施行に
伴い著作権審査会を設置。
8月 民間伝承の会結成。
9月18日 『民間伝承』創刊。
10月 徳川美術館開館。
11月28日 “Chinese Art” 展に出
品(会場 Royal Academy of Arts
London、3月7日まで)。

1936 (昭和11) 年

- 2月25日 第1回帝国美術院展覧
会(会場 東京府美術館、3月
25日まで)。
2月26日 2.26事件。
4月21日 聖徳記念絵画館壁画完
成式。
5月 琉球古典芸能大会を開催(会
場 日本青年館)。
6月20日 文部省、東京音楽学校
に能・長唄・箏の邦楽科を開設。
7月15日 東洋音楽学会結成(会
長 田中正平)。
9月10日 “Art Treasures from
Japan” 展(会場 The Museum of
Fine Arts, Boston、10月25日まで)。

1937 (昭和 12) 年

美術研究所敷地は、1940 (昭和 15) 年 5 月 31 日迄の期限を以て東京美術学校敷地の一部 441 坪を借用するものとする。建物は、本館、書庫、写真室。

6 月 尾崎直衛文庫の寄贈を受ける。

6 月 13 日 美術懇話会展覧一般公開 「建部寒葉斎遺墨展覧」 (会期は 14 日まで)。

6 月 24 日 「美術研究所官制」改正。当研究所は文部大臣の管理となる (勅令第 281 号)。

7 月 尾高鮮之助資料の寄贈を受ける。

10 月 24 日 美術懇話会展覧一般公開 「広瀬台山遺墨展覧」 (会期は 25 日まで)。

11 月 29 日 「美術研究所長職務規程」制定、「美術研究所事務分掌規程」一部改正。「美術研究所事務分掌規程」第 1 条により、研究部 (第一部・第二部・第三部)、資料部、写真部及び経理部を置く。

11 月 29 日 美術懇話会展覧一般公開 「満谷家所藏満谷国四郎遺作、習作、素描、写生等陳列」。

11 月 30 日 『美術研究資料第 5 輯 桃山時代金碧障壁画』を、美術懇話会より刊行。

1938 (昭和 13) 年

2 月 12 日 写真室 (写場・第一暗室・準備室・第二暗室) 竣工。

2 月 19 日 美術懇話会展覧一般公開 「岡野繁氏蔵所藏東印度遺存古陶磁展覧」。

3 月 30 日 『日本美術資料第 1 輯』刊行。

5 月 2 日 美術懇話会展覧一般公開 「浅井忠水彩画、素描展覧」。

6 月 21 日 末延財団の援助により、名古屋市公園課の協力をもって、名古屋城御殿襖絵の撮影を開始 (30 日まで)。

8 月 関戸家所蔵の「病草紙」の一類をなすものと推定される「病草紙」絵巻の残欠が、矢代幸雄により京阪地方の美術商の店頭において発見され、某家の収蔵となる。

9 月 11 日 大阪市立美術館開館。

11 月 史蹟名勝天然紀念物調査会官制の公布。

11 月 7 日 黒田子爵記念美術奨励資金買上。二科展出品の木下孝則作「I 氏の肖像」を選定買上げ、帝室博物館に寄贈。

1937 (昭和 12) 年

パリ万国博覧会に、ピカソ作「ゲルニカ」・ミロ・デュフィら参加。

2 月 11 日 日伊学会創立 (会場 華族会館)。

2 月 11 日 文化勲章令公布施行 (勅)。

4 月 28 日 第 1 回文化勲章授与式、芸術関係では佐佐木信綱、幸田露伴、岡田三郎助、竹内栖鳳、横山大観、藤島武二。

6 月 24 日 帝国芸術院官制公布 (勅)、会員に 72 人任命。

7 月 7 日 盧溝橋で日中両軍衝突、日中戦争始まる。

10 月 16 日 第 1 回文部省美術展覧会 (会場 東京府美術館、11 月 20 日まで)。

11 月 10 日 東京帝室博物館本館・庁舎復興、竣工式 (渡辺仁設計)。

12 月 21 日 黒田子爵記念美術奨励資金買上。文展出品の清水良雄作「初秋」を選定買上げ、帝室博物館に寄贈。

1938 (昭和 13) 年

4 月 1 日 国家総動員法公布。

5 月 18 日 「戦争美術展覧会」 (会場 東京府美術館、6 月 5 日まで)。

6 月 5 日 李王家美術館開館。

6 月 27 日 大日本陸軍従軍画家協会結成。

7 月 大同石窟調査。

7 月 15 日 オリンピック東京大会中止。

11 月 10 日 東京帝室博物館開館。

11 月 26 日 日独文化協定公布。

12 月 黒田子爵記念美術奨励資金買上。文展出品の安藤信哉作「画

室にて」を選定買上げ、大礼記念京都美術館に寄贈。

1939 (昭和 14) 年

- 法隆寺壁画保存調査会設置。
2月18日 桑港金門万国博覧会開会 (12月2日まで)。
2月28日 「伯林日本古美術展覧会」開催 (会場 ドイツ・ベルガモン博物館、3月31日まで)。
4月10日 陸軍美術協会結成。
4月12日 「ファシスト伊太利展覧会」 (会場 東京府美術館、5月10日まで)。
4月30日 紐育万国博覧会開会 (10月30日まで)。5月6日に日本館開館式を行う。
5月12日 ノモンハン事件。
6月8日 文部省に法隆寺壁画保存委員会設置 (委員長伊藤忠太)、壁画模写始まる。
7月6日 聖戦美術展 (陸軍美術協会・朝日新聞社共催、会場 東京府美術館、23日まで)。
9月1日 第2次世界大戦始まる。
12月 法隆寺若草伽藍址の発掘。
12月 藤原宮址発掘。

1940 (昭和 15) 年

- 4月12日 勅令により、美術振興調査会官制が公布され、委員が任命された。藤懸静也、児島喜久雄、田中豊蔵、矢代幸雄もメンバーに含まれる。
9月27日 日独伊三国同盟調印。
10月 黒田子爵記念美術奨励資金買上。奉祝展出品の長原坦作「牡丹」を選定買上げ、大礼記念京都美術館に寄贈。
10月1日 「紀元二千六百年奉祝美術展覧会」 (会場 東京府美術館、24日まで)。
11月5日 「紀元二千六百年記念正倉院御物特別展覧」。初の一般公開 (会場 東京帝室博物館、

1939 (昭和 14) 年

- 3月5日 美術懇話会展覧一般公開 「滝沢邦行筆桜花写生図展覧」 (会期は6日まで)。
4月 末延財団の援助により琳派研究 (調査・撮影・図書購入) を開始。
4月22日 雨潤会 (のち陸奥研究費と改称) の援助により絵巻物総覧研究 (調査・撮影・図書購入) を開始。
4月23日 美術懇話会展覧一般公開 「佐々木昌興氏所蔵彭城百川作品展覧」。
6月25日 「東洋美術総目録」第一期事業として足利以降の水墨画総目録約4万枚が完成。
11月12日 美術懇話会展覧一般公開 「阿部幸次郎氏所蔵支那絵画展覧」 伏生授経図巻、五星二十八宿図巻等34点を展覧。

1940 (昭和 15) 年

- 正木直彦蔵書 (十三松堂文庫) の寄託を受ける。
1月21日 美術懇話会展覧一般公開 「石川侃斎遺作展覧」。
2月20日 東洋美術国際研究会が設立され、美術研究所に事務所を置く。発会式及び美術懇話会と合同で "Special Exhibition at the Inauguration" を開催 (会場 華族会館)。
6月25日 "The Albums of Koetsu's Shikishi in the Ostasiatische Sammlung in Berlin" を、東洋美術国際研究会より刊行。
9月12日 矢代幸雄、正木篤三、豊岡益人は文化美術及工芸視察のため、11月13日まで中国へ出張。
10月13日 東洋美術国際研究会、並びに美術懇話会。長尾欽彌邸にて、同氏所蔵の陶器、衣裳、彫像など多数を展覧。

1941 (昭和16) 年

- 2月15日 “Masterpieces of Eastern Art: Japanese Art, Series 1” を、東洋美術国際研究会より刊行。
3月25日 『美術研究索引 自第1号至第百号』刊行。
3月31日 “Index of Japanese Painters” を、東洋美術国際研究会より刊行。
5月27日 美術懇話会・午餐会。東洋美術国際研究会と合同展覧 [牧谿筆瀟湘八景展覧]。矢代幸雄が英語で解説(会場 日本工業倶楽部)。
6月9日 矢代幸雄『対支文化工作ノ目標トソノ方策』印刷出来る。
6月25日 『東洋美術絵端書』(東洋美術国際研究会講義資料1) 刊行。
6月30日 矢代幸雄、中華民國国民政府の嘱託となる。
12月 『東洋美術文献目録(明治～昭和10年) 附定期刊行物調査表』刊行。

1942 (昭和17) 年

- 1月8日 矢代幸雄、美術研究所内で宣戦勅令を読む際、礼服を着用せず。矢代排斥運動の発端となる。
4月24日 岡野猛より、黒田清輝作「自画像」(紙・木炭)の寄贈を受ける。
6月29日 矢代幸雄は所長を免ぜられ、田中豊蔵が所長事務取扱となる。
10月24日 国民精神文化研究所開所十周年記念展覧会を開催。当研究所より黒田清輝作「昔語り下絵」ほか約40点、住友吉左衛門より同作「昔語り」などが出品される。前日23日、高松宮宣仁・同妃喜久子・三笠宮崇仁・同妃百合子が来所し記念展覧会を見学、正木篤三が美術資料について説明。
11月14日 美術懇話会。東洋美術国際研究会と合同で[時代衣裳展覧]を開催(会場 東京美術会館、会期は15日まで)。
12月20日 美術懇話会展覧一般公開 [諸家蔵渡来黄檗画及び日本初期南宗画展覧](会場 美術研究所)。

1943 (昭和18) 年

- “Art Guide of Nippon Vol.1 : Nara, Mie and Wakayama Prefectures” を、東洋美術国際研究会より刊行。執筆分

24日まで)。

- 12月6日 情報局設置。内閣総理大臣の管理下。国家的情報・宣伝活動の一元化および言論・報道に対する統制。

- 12月19日 日本出版文化協会創立。

1941 (昭和16) 年

- 東京美術学校改革運動が起こる。
澤田源一を排斥し、正木、和田新の推薦により、上野直昭が校長に選出される。
7月31日 内務省の勸告により現代美術関係雑誌の第1次統合。
8月30日 統合雑誌8社が集まり、日本美術雑誌協会を結成。
10月 東條内閣成立。
12月8日 英米両国に宣戦布告。

1942 (昭和17) 年

- 1月24日 文部省に国民錬成所を設置[勅]。
3月19日 日本画家報国会結成(全国の日本画家2500人による)。
5月9日 金属回収令により寺院の仏具・梵鐘等、強制提出を命じられる。
5月21日 第1回芸術院賞受賞式(小磯良平作「娘子関を征く」、高村光太郎「道程」、川田順「鷺」「国初聖蹟歌」)。
12月3日 第1回大東亜戦争美術展(会場 東京府美術館、27日まで)。

1943 (昭和18) 年

- 3月26日 日本出版文化協会は改組し、日本出版会となる。

担は大串純夫、倉田文作、立田三朗、金子重隆、梅津次郎。
5月 洋画家田中良より、黒田清輝作「森の中」の寄贈を受ける。

1944（昭和19）年

東京美術学校文庫の図書を、同校書庫の屋根が木造瓦葺だったため美術研究所の書庫へ仮置。

8月10日 太平洋戦争激化のため、黒田清輝の作品並びにガラス原板を、東京都西多摩郡小宮村（現あきる野市）、檜原村に疎開。

11月7日 黒田清輝の作品並びにガラス原板を東京美術学校の文庫と一緒に東京都西多摩郡小宮村養沢へ疎開。

1945（昭和20）年

5月 校舎被災のため、東京外事専門学校（後の東京外国語大学）が、当研究所をはじめ、東京美術学校、帝国図書館等に間借りする。

5月28日 図書・諸資料全部を山形県酒田市本町に疎開。

7月 図書、写真類をさらに奥の酒田市外、牧曾根村・松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開。

9月 酒田滞在職員の順次帰任。

9月以降『東洋美術絵端書』（東洋美術国際研究会講義資料1～3）を教文館より販売。マッカーサー元帥を初め日本文化に関係ある進駐軍将校に寄贈。

11月 疎開した資料類の引き上げに着手。

4月 芸能学会設立。

5月18日 日本美術報国会創立（大政翼賛会文化部・情報局・文部省の指導による。会長横山大観）。

5月18日 日本美術及工芸統制協会創立（絵画など材料の配給を行う）。

10月 美術雑誌の第二次統合。大下正男が日本美術出版を作り、藤本韶三の編集で『美術』、『制作』を創刊。

11月『演劇界』創刊。

11月1日 国民精神文化研究所と国民錬成所を統合、教学錬成所を設立〔勅〕。

1944（昭和19）年

7月20日『日本民謡大観』刊行開始。

9月28日 情報局、美術展覧会取扱要綱発表（公募展禁止など）。

1945（昭和20）年

3月10日 B29、東京大空襲。

4月1日 米軍、沖縄本島に上陸。

5月7日 ランスおよびベルリン（同月8日）にて、独軍、連合国への無条件降伏文書に署名。

6月15日（社）能楽協会設立。8月5日結成式（梅若一門加入し、能楽師協会を改称）。

8月15日 日本、無条件降伏。ポツダム宣言受諾を発表（第2次世界大戦終わる）。

戦災による文化財被害、名古屋城・徳川家康廟など国宝293件、史蹟名勝天然記念物44件、重要美術品134件（7月1日文部省発表）。

9月1日 東京劇場、戦後初興行。大阪歌舞伎座・京都南座なども

1946(昭和21)年

- 1月20日 東洋美術国際研究会が、進駐軍将兵を対象に東山魁夷による日本画の実演を行う(会場 アメリカ赤十字東京クラブ〈旧銀行集会所〉)。
- 3月29日 酒田市の疎開した図書・諸資料等の発送を終了。
- 4月 東洋美術国際研究会は、進駐軍兵士の学校(麴町丸ノ内に特設)にて、日本美術展観を定期開催することになり、その第1回として「長尾家所蔵古代衣裳展観」を計画。
- 4月4日 終戦により、酒田市の疎開中の図書・諸資料等の引き上げを完了。
- 4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引き上げを完了。
- 5月18日 「復興記念速水御舟画稿展」を開催(会期は19日まで)。
- 5月20日 美術研究所復興式を挙行。
- 7月29日 「美術研究所夏期美術講座」開催。テーマは日本美術、東洋美術、西洋美術(31日まで)。
- 7月31日 東洋美術国際研究会解散。写真原版・図書資料・一部備品等が寄贈される。

1947(昭和22)年

- 4月 『美術研究叢書1 日本上代美術』を、美術出版社より刊行。
- 5月 国立博物館に保存修理課保存技術研究室を設置。
- 5月3日 「国立博物館事務分掌規定」第14条により、国立博物館附属美術研究所に、第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七の各研究室を置く。
- 5月3日 「国立博物館官制」制定。当研究所は国立博物館附属となり、「美術研究所官制」廃止(政令8号)。

開場。

- 9月17日 文部省美術展復活。文部省並びに帝国芸術院の懇談会を開催する。
- 11月 GHQ、「寺子屋」ほか歌舞伎の代表的な演目の上演を禁止。
- 11月6日 GHQ、財閥解体。
- 12月17日 衆議院議員選挙法改正公布、婦人参政。

1946(昭和21)年

- 2月1日 大坂四ツ橋文楽座再建。
 - 3月1日 従来の文展に代って第1回日本美術展覧会開催(主催 文部省、会場 東京府美術館、31日まで)。
 - 3月26日 3月以来閉館していた帝室博物館、新たに内容を整えて24、5日の招待日の後、26日から再開する。
 - 4月11日 アメリカの東洋美術研究家ラングドン・P・ウォーナー、連合軍総司令部民間情報部教育局美術記念物課顧問として来日。
 - 5月3日 極東国際軍事裁判所開廷。
 - 8月 帝室博物館館長に安倍能成就任。
 - 9月 『みづゑ』復刊、『三彩』創刊。
 - 9月5日 第1回芸術祭(提唱 文部省芸術課長今日出海、会場 帝劇・東劇等)。
 - 10月21日 戦後初の正倉院御物展(会場 奈良帝室博物館、11月9日まで)。
 - 11月3日 日本国憲法公布。
- #### 1947(昭和22)年
- 3月10日 「泰西名画展覧会」(主催 読売新聞社、会場 東京都美術館、30日まで)。
 - 5月3日 日本国憲法施行。
 - 7月10日 静岡県登呂遺跡の発掘開始。
 - 10月15日 西洋美術名作展開催(会場 国立博物館 11月30日

- 7月28日 [美術研究所夏期美術講座] 開催。テーマは東洋古美術 (31日まで)。
8月16日 田中豊蔵が所長となる。
12月13日 「禅僧墨跡展」を開催。

1948 (昭和23) 年

- 保存修理課保存技術研究室に正式に職員2名配置。
5月11日 田中豊蔵死去につき、福山敏男が所長代理となる。
7月 『近代日本美術資料第1輯』を、国立博物館より刊行。
9月16日 「西洋美術史講座」を開催。講師に、上野直昭、兒島喜久雄、矢代幸雄 (18日まで)。

1949 (昭和24) 年

- 3月 『墨蹟資料集1』を、国立博物館より刊行。
3月25日 『黒田清輝素描集』を、国立博物館より刊行。
4月 光学的方法による美術品の鑑識に関する研究を開始。
日本初的美術品研究用のX線発生装置や紫外線照射装置が研究所に設備される。
8月31日 松本栄一が国立博物館附属美術研究所長となる。
10月 開所記念日に黒田照子夫人来所。記念写真撮影。
12月 「源氏物語絵巻」(徳川黎明会蔵)の大規模な共同調査を行う。

まで)。

- 11月8日 国立劇場設立準備機関として演劇文化委員会発足。
12月4日 帝国芸術院、日本芸術院と改称。
12月4日 帝国図書館は国立図書館、帝国学士院は日本学士院と改称。

1948 (昭和23) 年

- 2月9日 国立国会図書館法を公布 [法]。
3月18日 新橋演舞場、再建開場。
4月1日 「日本美術史総合展」開催 (主催 国立博物館、会場 国立博物館、後援 朝日新聞社、5月31日まで)。
6月 文部省、政府所蔵の作品による近代美術展を始める (岩手県、以後9府県で巡回、2月まで)。
6月8日 国立博物館表慶館に日本と西洋の油画作品を常置陳列することとなる。
7月10日 日本学術会議 (学術会議) 法公布。

1949 (昭和24) 年

- 1月15日 新国宝指定 (絵画14件・彫刻4件・文書典籍書籍53件・工芸11件・刀剣4件・建造物6件の92件) の展覧 (会場 国立博物館、会期は21日まで)。
1月26日 法隆寺金堂内陣漏電で火災、壁画12面焼失。
3月10日 第1回毎日演劇賞 (俳優座・藤原歌劇団・小牧正英・実川延若・宮口精二・河野国夫)。
4月1日 日本民俗学会設立。
4月8日 日本民俗学会発会式 (民間伝承の会を継承、会長柳田国男)。
5月31日 東京美術学校・東京音楽学校が統合し、東京藝術大学として新発足 [法]。
6月 日本演劇学会発足。

1950 (昭和 25) 年

朝日新聞社文化事業団が中尊寺藤原四代遺体研究及び保存事業を企画。実施を古文化資料自然科学研究会に委託。保存技術研究室より 2 名参加。

3 月 X線による彫刻の撮影実験を開始。

5 月 30 日 文化財保護法公布。文化財保護委員会が、文部省の外局として誕生。附属機関として、文化財専門審議会、国立博物館、当研究所が置かれる。

7 月 29 日 文化財保護委員会正式に発足。

8 月 29 日 国立博物館保存修理課と調査課は、文化財保護委員会事務局保存部建造物課に移る。

8 月 29 日 文化財保護法施行。当研究所は文化財保護委員会の附属機関となる。

1951 (昭和 26) 年

1 月 12 日 古文化資料自然科学研究会機関誌『古文化財之科学』発刊。

1 月 31 日 「美術研究所組織規定」により、第一研究部、第二研究部、資料部、庶務室を置く。

5 月 奈良所在の彫刻に対する X線透過撮影を当研究所で開始。

1952 (昭和 27) 年

4 月 1 日 文化財保護法の一部改正により、東京文化財研究所と改称。矢代幸雄が所長事務代理となる。

4 月 1 日 「東京文化財研究所組織規程」を制定し、「美術研

6 月 25 日 美術史学会創立。

6 月 26 日 日本美術家連盟発足。

1950 (昭和 25) 年

6 月 25 日 朝鮮戦争始まる。

7 月 2 日 金閣寺焼失。

11 月 文化財保護委員会では、茂山弥五郎の狂言小謡、富崎春昇の地歌の記録作成を行う。以後毎年名手の記録を作成することとなる。

11 月 2 日 第 1 回全国郷土芸能大会開催 (神田共立講堂、第 5 回文部省芸術祭主催公演)。

1951 (昭和 26) 年

1 月 3 日 歌舞伎座復興開場式。

4 月 (社) 日本演劇協会設立。

5 月 10 日 助成の措置を講ずべき無形文化財の選定基準を告示。

6 月 7 日 文化財保護委員会、第 1 次新国宝 181 件を決定発表。

6 月 21 日 ユネスコ、日本の加盟を正式に承認。

9 月 4 日 サンフランシスコで対日講和会議がひらかれる (9 月 8 日まで)。

9 月 8 日 日米安全保障条約。

10 月 17 日 神奈川県立鎌倉近代美術館開館。

11 月 1 日 第 2 回全国郷土芸能大会開催 (日比谷講堂)。文化財保護委員会が、出演芸能についての伝承内容等の文書記録や舞型譜、採譜、写真等の記録を作成するようになる。

12 月 1 日 博物館法公布 [法] (博物館の性格を明確化、学芸員の設置など 3 月 1 日施行)。

1952 (昭和 27) 年

民俗芸能の会結成。

1 月 11 日 ブリヂストン美術館開館。

3 月 第 1 次助成の措置を講ずべき

研究所組織規定」を廃止。美術部（第一研究室・第二研究室・資料室）、芸能部（演劇研究室・音楽舞踊研究室・郷土芸能研究室）、保存科学部（化学研究室・物理研究室・生物研究室）、庶務室の3部1室を置く。

5月30日 矢代幸雄、欧米の美術界について講演を行う（会場 国立博物館）

7月1日 芸能部発足。東京藝術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始。

8月1日 矢代幸雄「東京文化財研究所の構想」を『博物館ニュース』63号に発表。

10月 保存科学部物理研究室に技官1名増員。

10月 科学研究費を受け、光学研究のための機器類を整備。再び「源氏物語絵巻」の全画面X線透過写真の撮影。

11月4日 アメリカにて翌年開催の“Exhibition of Japanese Painting And Sculpture”（「日本古美術展」）のため、委嘱をうけた保存科学部が出品作品の梱包指導にあたる。

1953（昭和28）年

平等院鳳凰堂の解体に際して行われた総合調査の一環として、光学的方法を駆使した鳳凰堂壁画の調査を行う。

4月26日 保存科学部は東京国立博物館構内の倉庫を研究室として改造し、移転する。化学・物理・生物の各研究室、実験用暗室、写真暗室を設置。

6月1日 秋山光和、久野健、光学的方法による古美術品の鑑識について、研究状況とその成果を、『国立博物館ニュース』に発表。

9月29日 アイソトープによる金銅仏の透過撮影を行う。旧御物の四十八体仏、その他小金銅仏像の撮影に成功した後、奈良薬師寺講堂の月光菩薩像の透過撮影を行う。

11月1日 矢代幸雄は文化財保護委員会委員専任となり、田中一松が所長となる。

11月17日 開所記念行事。「室町時代詩画軸展観」を開催。講演は田中豊蔵「室町時代詩画軸について」。

1954（昭和29）年

2月25日 『東洋美術文献目録（昭和21～25年）』刊行。

3月29日 アイソトープによる金銅仏の透過写真の展観と、公開講演を開催。

7月1日 「東京文化財研究所組織規程」の一部改正により、東京国立文化財研究所と改称。

7月8日 開所記念行事。美術館と共催で、没後30周年を

無形文化財の選定。以後3月の第5次まで、計113件の芸能を選定。

3月29日 文化財保護委員会、無形文化財として工芸技術36件（河面冬山・松波多吉・木内省古・加藤土師萌・加藤唐九郎、黄八丈など）芸能11件（神楽歌・舞楽・歌舞伎・能の型・郷土芸能など）を初めて選定。

4月1日 国庫補助として無形文化財助成金と文化財公開費交付金を措置。

4月1日 文化財保護委員会の付属機関として奈良文化財研究所（庶務室・美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室）を設置。

10月1日 『芸能復興』創刊。

12月1日 国立近代美術館（京橋）開館。フィルム・ライブラリー設置。

1953（昭和28）年

1月13日 文化財保護審議会第3分科会に民俗資料部会を設置。

1月25日 アメリカ5都市で“Exhibition of Japanese Painting and Sculpture”（「日本古美術展」）を開催（12月15日まで）。

5月25日 季刊『日本民俗学』創刊。

7月27日 朝鮮休戦協定調印。

10月31日 第4回全国郷土芸能大会開催（日本青年館）。この年から日本青年館が会場となる。

12月 松方コレクションの日本返還問題起る。

1954（昭和29）年

1月28日 能楽梅若一門、観世流に復帰。

3月16日 第1回無形文化財日本伝統工芸展を開催（会場 三越〈日本橋〉3月21日まで）。

5月29日 文化財保護法の一部を

記念して「黒田清輝展」を開催（会場 国立近代美術館、会期は27日まで）。

7月10日 『黒田清輝作品集』を、美術出版社より刊行。

改正する法律（7月1日施行）により、有形文化財のみならず無形文化財、民俗資料、埋蔵文化財、史跡名勝天然記念物に関する制度の充実を図る。重要無形文化財指定制度発足。民俗資料および埋蔵文化財は有形文化財から独立して保護制度を確立。

7月21日 ジュネーブ協定調印。

8月6日 喜多実ら能楽団ベニス国際演劇祭に初参加、「葵上」など上演（7日まで）。

11月 文化財専門審議会第3分科会、重要民俗資料の指定基準及び無形の民俗資料の選択基準決定。

11月 「日本・ビルマ平和条約及び賠償・経済協力協定」締結。日本から初めてのODA拠出。

11月3日 法隆寺金堂落慶式。20年の歳月（着工）と8億円の国費を費した法隆寺昭和大修理の完了。

11月20日 第1回重要民俗資料指定、第1回記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗資料選択（告示は2月3日）。

12月25日 重要無形文化財の指定及び保持者の認定基準、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択基準、重要民俗資料指定基準、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗資料選択基準を告示。

1955（昭和30）年

保存科学部、「古美術品の変色に関する研究」で科学研究費（機関研究）の交付を受ける。

ICOM 博物館附属研究所委員会研究集会（於ウィーン）に初めて保存科学部より1名出席。

1月 『東京国立文化財研究所要覧』刊行開始。

3月25日 当研究所光学班による『光学的方法による古美術品の研究』刊行。

12月10日 開所記念行事。美術研究所開設25周年を記念

1955（昭和30）年

2月15日 第1次重要無形文化財の指定及び保持者の認定。

3月19日 第1回記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択。

8月 「日本工芸会」発足。

8月1日 奈良国立文化財研究所を中心に平城京跡の発掘を行う。

して「梁楷名作展観」を開催。講演は田中一松「梁楷の芸術」。

1956（昭和31）年

4月7日 芸能部「実演による芸能研究会」の開始。後の公開学術講座の母胎となる。

12月1日 開所記念行事。〔宋元水墨花鳥画展観〕を開催。講演は島田修二郎「宋元の水墨」。

1957（昭和32）年

ヨーロッパ巡回「日本古美術展」の作品輸送の際の湿度調整に、保存科学部登石健三の研究による湿度調整ゲルを作品と一緒に梱包。

3月22日 東京国立博物館構内に、保存科学部の薬品庫竣工。

3月30日 『梁楷』を、便利堂より刊行。

10月14日 開所記念行事。「白描やまと絵展観」を開催。講演は田中一松「白描やまと絵の系譜」。

11月30日 従来の2階建書庫を増築、3階建とする。

1958（昭和33）年

保存科学部は非常勤職員の配置を得て、黴菌類の培養、菌株の同定などを含めた活動を開始。

10月17日 開所記念行事。産経新聞社と沖縄芸能同人会の後援を得て、「日琉舞踊の会」を開催（会場 東京国立博物館大講堂）。

10年計画の第1年目（8月13日まで）。

11月 文化財保護委員会、重要無形文化財技術指定制度第1次、宮内庁雅楽部も指定。

1956（昭和31）年

まつり同好会結成。

1月1日 大阪道頓堀に文楽座（8月朝日座と改称）新築開場、新作も上演。

3月24日 日本学士院法公布〔法〕。

4月 石橋美術館開館。

5月1日 奈良国立文化財研究所、飛鳥寺を発掘（8月まで）。

12月18日 国連総会、日本の国連加盟案を全会一致で可決。

1957（昭和32）年

なべ底不況。

3月 平等院鳳凰堂の修理完成、19日落慶供養を行う。

1958（昭和33）年

岩戸景気。

4月15日 “ART TREASURES FROM JAPAN AN EXHIBITION OF PAINTINGS AND SCULPTURE” をロンドン、アムステルダム、ローマで開催。

7月1日 『日本民俗学会報』創刊。

8月1日 ビクター、初の国産ステレオレコード発売。

10月28日 舞台美術家協会発足。

11月2日 第9回全国民俗芸能大会開催。この年から「全国民俗芸能大会」に改称。

11月2日 日展第1回〔新日展〕（会場 東京都美術館 12月8日まで）。

1959（昭和34）年

- 4月30日 「東京国立文化財研究所研究受託規程」制定。同年度から受託研究を開始。
- 12月12日 開所記念行事。「高野時次氏収集浅井忠水彩画展」を開催。

1960（昭和35）年

- ベルギー王立文化財研究所長コールマン来訪。
- 5月18日 当研究員高田修、伊東卓治、上野アキ、柳澤孝、宮次男及び名古屋大学教授山崎一雄の共同研究『醍醐寺五重塔の壁画』（文部省科学研究費総合報告、吉川弘文館）が、1960（昭和35）年度日本学士院恩賜賞を受賞。
- 7月 『標準日本舞踊譜』を、創芸社より刊行。
- 12月17日 開所記念行事。安原コレクション（安原仙三郎蔵邦楽SPレコード約6千枚）の披露を行う。講演浦山政雄「義太夫節研究資料としての安原コレクション」、実演桐竹紋十郎「文楽人形の型」。「音盤目録」の作成に着手（会場 東京国立博物館講堂）。

1961（昭和36）年

- 修二会、涅槃会などの寺院行事研究を開始。
- 9月16日 「東京国立文化財研究所組織規程」の一部改正により、庶務室は庶務課となる。
- 11月18日 開所記念行事。講演は、田沢坦「鎌倉大仏の歴史」、関野克「鎌倉大仏の最近の修理調査」。
- 11月27日 保存科学部新庁舎の地鎮祭を行う。

1962（昭和37）年

- 3月31日 東京国立博物館内に当研究所保存科学部庁舎竣工。
- 7月1日 「東京国立文化財研究所組織規程」の一部改正により、保存科学部に修理技術研究室を置く。
- 7月20日 保存科学部庁舎竣工披露。芸能部は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転。
- 10月20日 開所記念行事。講演は、関野克「文化財の保存と科学的研究」、江本義理「文化財の非破壊分析」、岩崎友吉「合成樹脂による文化財の保存について」、登石健三「X線透視による金色堂の研究」。

1963（昭和38）年

- 11月15日 開所記念行事。「稀観絵巻物展観」を開催。講演は田中一松「稀観絵巻物の展示品について」（会期は16

1959（昭和34）年

- 5月25日 第1回九州ブロック民俗芸能大会開催。
- 6月10日 国立西洋美術館開館（ル・コルビジエ設計）。
- 9月26日 第1回関東ブロック民俗芸能大会開催。
- 10月21日 第1回北海道・東北ブロック民俗芸能大会開催。
- 11月18日 第1回近畿・北陸ブロック民俗芸能大会開催。

1960（昭和35）年

- 1月28日 第1回中国・四国ブロック民俗芸能大会開催。
- 6月23日 新安条約批准交換、発効。
- 10月 通称「永仁の壺」の偽作問題起る。加藤唐九郎が自作だとパリで表明（3月31日重要文化財の指定取消し）。

1961（昭和36）年

- 8月7日 中尊寺金色堂の調査（8月11日まで）。
- 11月 サントリー美術館開館。
- 11月1日 国立国会図書館新築開館。

1962（昭和37）年

- 民俗資料緊急調査実施。
- 5月1日 『民俗芸能』（『芸能復興』改題）創刊。
- 10月 中尊寺金色堂の修理始まる。7日起工式、4年計画で修理が行われる。
- 11月9日 日本文人画名作展を開催（会場 パリ・プチパレ、12月31日まで）。

1963（昭和38）年

- 国庫補助による有形民俗史料修理事業開始。

日まで)。

1964 (昭和 39) 年

- 3月31日 『保存科学』刊行開始。
- 10月3日 オリンピック東京大会・日本古美術展開催記念特別講演。田中一松「唐絵とやまと絵」。
- 12月12日 開所記念行事。神楽能関連の講演を開催。講演 三隅治雄「神楽能の系譜」、浦山政雄「神楽能と歌舞伎」。実演「鷲宮の神楽」、「東京の里神楽」、「笹川の神楽」(会場 東京文化会館小ホール)。

1965 (昭和 40) 年

- 沖縄の伝統芸能の調査記録をもとに日本コロムビアレコードより刊行された「沖縄音楽総覧」が、芸術祭奨励賞を受賞。
- 3月31日 『美術研究総目録』(創刊号～第230号)刊行。
- 4月1日 関野克が所長となる。
- 10月12日 開所記念行事。当研究所の後援で、「黒田清輝展 生誕百年記念」を開催(会場 プリズストーン美術館、会期は11月14日まで)。
- 10月30日 開所記念行事。講演は、和田三造、坂崎坦、隈元謙次郎鼎談「黒田清輝の思い出」、矢代幸雄「黒田先生の芸術その他」(会場 プリズストーン美術館)。

1966 (昭和 41) 年

- 3月 安原仙三郎蔵邦楽 SP レコードの目録『音盤目録』刊行開始。
- 6月15日 隈元謙次郎著『黒田清輝』を、日本経済新聞社より刊行。
- 10月22日 開所記念行事。近年行った調査研究実績をパネル展示。講演は関野克「中尊寺金色堂の保存修理」、岩崎友吉「発掘遺跡と遺物保存の科学的処置」、登石健三「文化財の輸送と梱包」(会期は26日まで)。
- 11月29日 第1回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

- 1月7日 文楽協会設立。
- 2月10日 芸能史研究会設立。
- 3月 国立近代美術館京都分館設立。
- 4月30日 『芸能史研究』創刊。
- 10月 出光美術館開館。
- 11月11日 ユネスコ国内委員会主催の東西演劇シンポジウム開催(会場 日生会館国際会議場、11月17日まで)。
- 11月23日 初の日米間テレビ宇宙中継受信実験に成功。

1964 (昭和 39) 年

- 4月28日 OECD(経済開発協力機構)に加盟。
- 6月24日 平城宮・朱雀門跡を発見。
- 10月1日 東海道新幹線開業。
- 10月10日 オリンピック東京大会開催。芸術展示に、古典芸能・古美術展・近代名作展など行われる。

1965 (昭和 40) 年

- 8月21日 「ツタンカーメン展」(会場 東京国立博物館、10月10日まで)。

1966 (昭和 41) 年

- いざなぎ景気。
- 1月13日 古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法公布〔法〕同年4月15日施行。
- 5月 文部省に文化局設置。
- 5月 文化大革命始まる。
- 7月1日 特殊法人国立劇場設置(11月開場)。
- 10月 帝国劇場改築こけら落とし。
- 11月1日 国立劇場開場式(岩本

1967 (昭和 42) 年

- 黒川能の調査を、『黒川能』として平凡社より刊行。
1970 年に大阪で開催される万国博覧会に所員が協力。(演出を三隅治雄、美術館の建築計画・文化財の保安全管理を関野克、登石健三が担当)
3 月 『芸能の科学』刊行開始。
3 月 30 日 『高雄曼荼羅』刊行。
4 月 能楽技法研究会の開始。
10 月 19 日 第 1 回芸能部公開学術講座「歌舞伎の技法」(会場 朝日講堂、20 日まで)。
11 月 27 日 開所記念行事。講演は、佐藤道子「雪の王祇祭」、横道萬里雄「黒川能の技法」。実演謡「羽衣」、舞「神舞」(会場 東京国立博物館講堂)。
12 月 6 日 第 2 回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。
12 月 19 日 文化財保存修復研究国際センター (ICCROM) に日本が加入。

1968 (昭和 43) 年

- 1 月 高田修が、「仏像の起源にいたる仏教美術史の研究」により、1967 (昭和 42) 年度第 38 回朝日文化賞を受賞。
6 月 15 日 「文部省設置法」の一部改正により、文化庁が発足し、当研究所は附属機関となる。
10 月 18 日 開所記念行事。「平安木彫展」を開催(会期は 19 日まで)。
11 月 15 日 第 2 回芸能部公開学術講座「おどりの技法」(会場 朝日講堂、16 日まで)。
12 月 4 日 第 3 回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1969 (昭和 44) 年

- 文化財保存修復研究国際センター (ICCROM) 第 5 回総会に保存科学部技官が代表出席。理事に選出される。
3 月 20 日 『日本東洋古美術文献目録 (昭和 11 年～40 年)』刊行。
8 月 23 日 別館庁舎起工式。
10 月 25 日 開所記念行事。講演は、岩崎友吉「出土品の科学的保存処置」、登石健三「美術品撮影時の写真照明」(会場 東京国立博物館講堂)。

博行ほか設計)。

1967 (昭和 42) 年

- 6 月 1 日 国立近代美術館京都分館が独立して、京都国立近代美術館開館。
12 月 1 日 帝国ホテル取りこわし始まる。明治村に一部移築。

1968 (昭和 43) 年

- 5 月 中尊寺金色堂の解体修理工事完了。
5 月 21 日 安田靫彦、前田青邨、橋本明治らによる法隆寺金堂壁面の模写完成し公開(会場 東京国立博物館、6 月 30 日まで)。
6 月 28 日 文化財保護審議会発足(委員 5 名)。
9 月 『月刊文化財』第 1 号発行。
9 月 24 日 ユネスコ主催日本文化研究国際会議開く(東京・京都)、文学・演劇・建築など討議、13ヶ国から 31 人参加(30 日まで)。
10 月 12 日 東京国立博物館東洋館完成(谷口吉郎設計)。

1969 (昭和 44) 年

- 5 月 7 日 東京国立近代美術館新館完成(谷口吉郎設計)。
7 月 20 日 アポロ 11 号、月面着陸。
11 月 1 日 日展第 1 回「日展改組」を開催(会場 東京都美術館、12 月 6 日まで)。

- 11月11日 香取秀真文庫の寄贈を受ける。
 12月3日 第4回美術部公開学術講座（会場 日本経済新聞社）。
 12月23日 第3回芸能部公開学術講座「民俗舞踊の技法」（会場 朝日講堂）。

1970（昭和45）年

- カナダナショナルギャラリー保存研究所長ストロウ来訪。
 デンマーク国立博物館保存科学部長クリステンセン来訪。
 ローマセンター所長ブレンダーリース来訪。
 国際記念物遺跡会議（ICOMOS）会長カゾーラ来訪。
 フリーア美術館保存部主任ゲッテンス来訪。
 3月16日 織田一磨文庫の寄贈を受ける。
 3月25日 別館庁舎竣工。竣工式は5月26日。
 4月22日 芸能部、新営別館に移転。
 5月8日 保存科学部、新営別館に移転。
 9月 保存科学部生物研究室に初の定員研究者1名着任。
 10月15日 保存科学部庁舎の1階模様替工事完了。
 10月31日 第5回美術部公開学術講座（会場 日本経済新聞社）。
 11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転（本館は、美術部庁舎となる）。これにより所在地の表示は「12番53号」から「13番27号」となる。
 11月28日 開所記念行事。東国の文化財に関する講演と映画の会。久野健「東国の彫刻」、三隅治雄「東国の芸能」、関野克「中尊寺金色堂の保存」。映画「よみがえる金色堂」上映。
 12月10日 第4回芸能部公開学術講座「歌舞伎の技法」（会場 朝日講堂）。

1971（昭和46）年

- イラク・クルナ水没文化財調査団に保存科学部より1名参加。
 横道万里雄・佐藤道子の監修・開設でビクターより発売のレコード『東大寺修二会 観音悔過』が芸術祭優秀賞を受賞。
 4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2658㎡を東京国立博物館から移管。
 6月 保存科学部は、所長の部長事務取扱が解かれ、この年より専任の部長が任命される。
 9月9日 第1回文化財保存修復研究協議会「木材を素地とした文化財彩色の保存と修復」（担当 保存科学部）。
 10月30日 第6回美術部公開学術講座（会場 日本経済新聞社）。
 11月13日 開所記念行事。法隆寺に関する講演会を三部合同で開催。猪川和子「法隆寺の彫刻」、佐藤道子「法隆寺の悔過会と舞楽法要」、岩崎友吉「法隆寺における保存科学的処置」（会場 東京国立博物館講堂）。

1970（昭和45）年

- 1月15日 『日本民俗学会報』を『日本民俗学』に改題。
 3月14日 大阪千里丘陵で、万国博覧会開催。万国博覧会美術館開設（9月15日まで）。
 4月7日 戦争記録画153点、米国から無期限貸与として返還、東京国立近代美術館に収蔵。
 6月4日 国立劇場において、国費による歌舞伎俳優研修制度（研修期間2年）発足。5月1日初公募が行われ10人が入所。
 11月4日 文化庁、文化財白書を5年ぶりに発表、重要文化財・無形文化財指定。

1971（昭和46）年

- 重要無形文化財の工芸技術記録映画製作開始。
 6月17日 沖縄返還協定。

12月16日 第5回芸能部公開学術講座「神楽の技法」(会場 朝日講堂)。

1972(昭和47)年

文化財保護専門家会議参加。

2月 東南アジア・太平洋地区保存会議(於インド)に保存科学部より2名参加。

5月25日 『扇面法華経』を、鹿島研究所出版会より刊行。

9月21日 第2回文化財保存修復研究協議会「金属製品の保存」(担当 保存科学部)。

10月21日 第7回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

11月 『美術研究復刻版1』を、吉川弘文館より刊行。

1973(昭和48)年

3月30日 『東京国立文化財研究所20年の歩み』刊行。

4月12日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、保存科学部修理技術研究室を廃止。修復技術部(第一修復技術研究室・第二修復技術研究室)を新設し、4部1課となる。

9月20日 第3回文化財保存修復研究協議会「石造文化財の保存修復」(担当 保存科学部・修復技術部)。

10月27日 第8回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

11月17日 開所記念行事。舞楽に関する講演と映画の会を開催。西川杏太郎「舞楽面とその遺品」、田実栄子「舞楽装束とその遺品」、横道萬里雄「舞楽の楽曲構成」(会場 国立西洋美術館講堂)。

12月6日 第6回芸能部公開学術講座「歌舞伎の技法」(会場 朝日講堂)。

1974(昭和49)年

1月 ユネスコ主催で始まったアジア地域文化財保存修復研修コースで、保存科学部・修復技術部の8名が講師を務める。

9月19日 第4回文化財保存修復研究協議会「木造文化財の保存修復(1)」(担当 保存科学部・修復技術部)。

10月26日 第9回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

11月9日 開所記念行事。「日光東照宮陽明門における絵画」をテーマに開催。講演は登石健三「天井板絵およびの科学的調査」、河野元昭「狩野英信筆袖壁唐油画の美術史的調査」(会場 東京国立近代美術館講堂)。

1972(昭和47)年

3月21日 高松塚古墳発見。

5月15日 沖縄日本復帰。

9月29日 日中国交正常化。日中共同声明。

9月30日 高松塚古墳の総合学術調査始まる。韓国・北朝鮮・フランスの研究者、考古学・歴史学などの専門家参加(10月10日まで)。

10月 高松塚古墳壁画模写を前田青邨、平山郁夫等5名の画家に依頼。

10月2日 国際交流基金発足(理事長今日出海)。

1973(昭和48)年

近松門左衛門没後250年に当り、近松作品の上演多し。

9月12日 茨城県虎塚古墳彩色壁画発見。

10月11日 高松塚古墳の入室調査と保存対策(18日まで)。

10月23日 第1次石油危機始まる、オイル・ショック。

1974(昭和49)年

1月14日 文化庁、2月以降デパートなど臨時施設での国宝・重要文化財の展示を不許可とする方針を決定。

4月 民俗文化財分布調査。

4月11日 埋蔵文化センター、奈良国立文化財研究所に設置[省]。

4月20日 「モナ・リザ展」(会場 東京国立博物館、6月10日まで)。

4月28日 高松塚古墳壁画の模写
公開（会場 奈良国立博物館、5
月25日まで）。

1975（昭和50）年

7月1日 文化財保護法の一部を
改正する法律公布（1975年10
月1日施行）。選定保存技術制
度を創設、民俗文化財指定制度
の整備。
8月18日 平等院鳳凰堂壁画の
修復始まる。
8月30日 文部省、初の学術白書
（わが国の学術）を発表。
9月1日 新東京都美術館開館（前
川国男設計）。
10月9日 文化財保護審議会第4
専門調査会に文化財保存技術部
会を設置、第5専門調査会（民
俗文化財）を設置。
11月20日 重要無形文化財の指
定及び保持者及び保持団体の認
定の基準、記録作成等の措置を
講ずべき無形文化財の選択基準
を告示。重要無形民俗文化財指
定基準、記録作成等の措置を講
ずべき無形の民俗文化財の選択
基準（告示の一部改正）を告示。
12月22日 選定保存技術の選定
並びに保持者及び保存団体の認
定の基準を告示。

1976（昭和51）年

東大大型計算機センター、増大す
る学術情報をオンライン情報検
索サービス（TOOL-IR）により、
全国の大学研究者に提供開始。
5月4日 文化庁、重要無形民俗
文化財第1回指定、早池峯神楽
ほか計30件。
5月6日 鹿島学術振興財団設立。
5月28日 日本建築学会創立90周
年記念（総合研究協議会）で、
初めて「歴史的環境・記念建造物
保全の理念と技法」を主題とする。

1975（昭和50）年

第1回芸能部夏期講座「能楽の技法の基礎」。
文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）第8回総会
及び理事会報告、1973（昭和48）～1974（昭和49）年度
事業活動報告を翻訳印刷し、国内関係機関へ配布。
1月8日 第7回芸能部公開学術講座「法会と芸能・その技法」
（会場 朝日講堂、9日まで）。
6月25日 『芸能の科学6 芸能調査録1 東大寺修二会の
構成と所作 上』刊行。以後4回にわたり調査録を刊行。
7月3日 当番機関として1975（昭和50）年度重要文化資
料選定協議会を開催（5日まで）。
10月9日 第5回文化財保存修復研究協議会「木造文化財
の保存と修復（2）」（担当 保存科学部・修復技術部）。
12月6日 開所記念行事。「九州の文化財」をテーマに開催。
講演は、陰里鉄郎「長崎と洋風画」、柿木吾郎「南九州の
民謡」、江本義理「装飾古墳壁画の保存」（会場 東京国
立博物館講堂）。

1976（昭和51）年

3月15日 永雄ミエ文庫の寄贈を受ける。
3月20日 『金字宝塔曼陀羅』を、吉川弘文館より刊行。
5月10日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、郷土
芸能研究室を廃止。新たに芸能部に民俗芸能研究室を置く。
7月 第2回芸能部夏期講座「南島芸能史」。
10月20日 第6回文化財保存修復研究協議会「文化財の保
存環境（1）」（担当 保存科学部・修復技術部、21日まで）。
11月20日 開所記念行事。講演は、川上涇「中国の水墨画」、
樋口清治「文化財と合成樹脂」、映画解説中村茂子「春日
若宮の御祭り」（会場 東京国立博物館講堂）。
11月27日 第10回美術部公開学術講座（会場 日本経済
新聞社）。

12月16日 第8回芸能部公開学術講座「話芸の技法」(会場 朝日講堂)。

1977(昭和52)年

- 3月30日 『表具の科学』刊行。
- 4月18日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、美術部資料室を廃止。情報資料部(文献資料研究室・写真資料研究室)を新設し、5部1課となる。
- 6月18日 本館構内の写場等を取りこわし、情報資料部研究棟を起工。
- 7月 第3回芸能部夏期講座「民族音楽の業績と方法」。
- 9月21日 第7回文化財保存修復研究協議会「文化財の保存環境(2)」(担当 保存科学部・修復技術部、22日まで)。
- 11月1日 黒田清輝巡回展(会場 鹿児島市立美術館、会期は20日まで)。
- 11月12日 第11回美術部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。
- 11月24日 従来の開所記念行事を発展的に引き継ぎ、第1回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「木の保存」を開催(担当 保存科学部・修復技術部、会場 国立社会教育研修所、28日まで)。
- 12月13日 第9回芸能部公開学術講座「狂言の技法」(会場 矢来能楽堂)。

1978(昭和53)年

- 3月20日 黒田記念館の南西側に情報資料部研究棟竣工。
- 4月1日 伊藤延男が所長となる。
- 4月5日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、修復技術部に第三修復技術研究室を置く。
- 4月27日 黒田清輝巡回展(会場 千葉県立美術館、会期は5月28日まで)。
- 7月3日 第4回芸能部夏期講座「法会と芸能」(7日まで)。
- 8月1日 「招聘研究員規定」を定める。
- 9月26日 「名誉研究員」に関する内規を定める。
- 9月28日 第8回文化財保存修復研究協議会「石造文化財の保存・修復・復元」(担当 保存科学部・修復技術部)。
- 11月11日 第12回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。
- 11月17日 隈元謙次郎文庫の寄贈を受ける。
- 11月27日 第2回文化財の保存及び修復に関する国際研究

- 7月2日 桂離宮解体修理始まる
- 7月23日 文化財保護審議会、「重要伝統的建造物群保存地区」として初めて、秋田角館町侍屋敷、長野木曽路妻籠宿、岐阜白川村萩町、京都市産寧坂・祇園新橋、萩市堀内・平安古の侍屋敷を選ぶ。

1977(昭和52)年

- 9月17日 文化庁主催日本民謡まつり開催。
- 10月15日 国立国際美術館開館。
- 11月15日 東京国立近代美術館工芸館開館。国立民族学博物館開館(黒川紀章設計)。

1978(昭和53)年

- 5月20日 成田開港。
- 6月29日 夕張新二炭鉱閉山。

集会「文化財と分析化学」(担当 保存科学部・修復技術部、会場 国立社会教育研修所、30日まで)。

12月7日 第10回芸能部公開学術講座「箏の技法」(会場 朝日講堂)。

1979(昭和54)年

6月13日 皇太子殿下(今上天皇)の行啓。

7月9日 第5回芸能部夏期講座「狂言の技法概論」(12日まで)。

9月27日 第9回文化財保存修復研究協議会「漆芸品の保存と修復(1)」(担当 保存科学部・修復技術部)。

10月6日 黒田清輝巡回展(会場 山形美術館、会期は11月4日まで)。

11月26日 第3回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「極東の古美術品の保存」(担当 保存科学部・修復技術部、会場 国立社会教育研修所、29日まで)。

12月13日 第11回芸能部公開学術講座「民謡の技法」(会場 朝日講堂)。

12月15日 第13回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1980(昭和55)年

科学研究費(特定研究)に、「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」領域が定められ、当研究所からも所員が参加。

5月17日 黒田清輝巡回展(会場 佐賀県立博物館、会期は6月8日まで)。

8月1日 『東京国立文化財研究所概要』刊行開始。

8月6日 第4回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「伝統芸能の保存と発展」(担当 芸能部、会場 国立社会教育研修所、9日まで)。

10月22日 第10回文化財保存修復研究協議会「漆芸品の保存と修復(2)」(担当 保存科学部・修復技術部)。

12月6日 第14回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1981(昭和56)年

1月16日 第12回芸能部公開学術講座「歌舞伎 女方の技法」(会場 虎ノ門ホール)。

5月16日 黒田清輝巡回展(会場 弘前市立博物館、会期は6月7日まで)。

7月 第6回芸能部夏期講座「田楽芸の様式」。

10月6日 第5回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「東アジアにおける美術交流」(担当 美術部・情報資料部、会場 国立社会教育研修所、9日まで)。

12月10日 第13回芸能部公開学術講座「語りの技法」(会

1979(昭和54)年

3月23日 国立劇場敷地内に国立劇場演芸場完成(佐藤武夫設計)。

4月 民謡緊急調査(～1989年度)。

5月19日 都内初の区立美術館として、板橋区立美術館開館(村田政真設計)。

11月 国立西洋美術館新館完成。

1980(昭和55)年

3月 東大寺大仏殿昭和の大修理完成。10月15日落慶法要。

4月 冷泉家文書の調査始まる。

5月26日 明日香村保存特別措置法公布。

8月 文化財保存修理所開設。

11月15日 古文化財編集委員会編『考古学・美術史の自然科学的研究』刊行(研究代表・江上波夫)。

1981(昭和56)年

2月18日 高松塚古墳壁画の修復終了。昭和の保存技術の粋を集集し、8年間にわたって文化庁が進めてきた高松塚古墳壁画の修復作業が、修了する。

3月16日 東京にて、国際交流基金、シンポジウム「国際交流の理念と政策」開催、米英独仏などから9名参加(20日まで)。

場 朝日ホール)。

1982 (昭和 57) 年

1945 (昭和 20) 年 5 月に戦災で焼失した明治宮殿の杉戸絵 35 組が、宮内庁や東京国立博物館の倉庫に保管されていることが明らかとなり、十余年をかけて当研究所で保存修復と調査研究が行われ、『皇居杉戸絵』(京都書院、解説・関千代)の刊行によりその様相が明らかとなる。

国有文化財保存整備費により、文化庁の依頼を受け重要文化財明治丸御座所板絵修復調査(担当 美術部・保存科学部・修復技術部)。

2 月 10 日 第 11 回文化財保存修復研究協議会「文化財の展示環境」(担当 保存科学部・修復技術部)。

3 月 1 日 『黒田清輝素描集』を、日動 出版部より刊行。

3 月 6 日 第 15 回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

5 月 1 日 黒田清輝巡回展(会場 香川県文化会館、会期は 16 日まで)。

5 月 22 日 黒田清輝巡回展(会場 高知県立郷土文化会館、会期は 6 月 6 日まで)。

7 月 5 日 第 7 回芸能部夏期講座「三味線と三味線音楽」(9 日まで)。

11 月 1 日 第 6 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「木造文化財の保存に関する国際研究集会」(担当 保存科学部・修復技術部、会場 日本学士院・国立婦人教育会館、6 日まで)。

12 月 2 日 第 14 回芸能部公開学術講座「舞楽の音楽 その技法」(会場 朝日ホール)。

12 月 4 日 第 16 回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1983 (昭和 58) 年

3 月 1 日 第 12 回文化財保存修復研究協議会「文化財の紙について」(担当 保存科学部・修復技術部)。

4 月以降 和田新より西アジア遺跡写真 1 千枚の寄贈を受ける。

7 月 4 日 第 8 回芸能部夏期講座「日本の民俗芸能」(7 日まで)。

7 月 18 日 第 1 回美術部・情報資料部夏期学術講座「鎌倉時代の美術 (1)」(19 日まで)。

11 月 12 日 第 17 回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

11 月 17 日 第 7 回文化財の保存及び修復に関する国際研究

4 月 薬師寺西塔再建。

10 月 31 日 昭和天皇の満 80 歳を記念して、22 年ぶりに東京で「正倉院展」を開催(11 月 25 日まで)。

1982 (昭和 57) 年

東北新幹線・上越新幹線開通。

3 月 桂離宮、昭和の大修理完成(7 月着工)。

4 月 2 日 新橋演舞場改築こけら落とし。

5 月 1 日 2 世中村扇雀ら、近松座結成。「心中天網島」上演(会場 国立小劇場、4 日まで)。

11 月 6 日 大阪市立東洋陶磁美術館開館。

12 月 9 日 美術館連絡協議会発会。

1983 (昭和 58) 年

3 月 18 日 国立歴史民俗博物館開館。

5 月 出光美術館、国宝「伴大納言絵詞」3 卷(東京国立博物館保管)を購入。

9 月 15 日 国立劇場に能楽堂設置。
16 日 国立劇場能楽堂開場記念能「翁」ほか。

11 月 7 日 キトラ古墳、ファイバー
スコープによって石槨内に彩色壁

集会「壁画の保存(1)」(担当 保存科学部、会場 国立社会教育研修所、21日まで)。

11月23日 黒田清輝巡回展(会場 福井県立美術館、会期は12月11日まで)。

12月12日 第15回芸能部公開学術講座「声明の技法」(会場 朝日ホール)。

1984(昭和59)年

2月23日 第13回文化財保存修復研究協議会「染織品の保存」(担当 保存科学部・修復技術部)。

4月 情報資料部で、情報処理システムの開発研究に着手。

6月28日 「文部省組織令」改正。当研究所は文化庁施設等機関となる。

7月9日 第9回芸能部夏期講座「悔過会とその周辺」(13日まで)。

7月16日 第2回美術部・情報資料部夏期学術講座「鎌倉時代の美術(2)」(17日まで)。

8月27日 黒田記念室は博物館相当施設にあたるため、学生を対象に、美術部を中心に各部研究員による博物館学実習を開始。2005(平成17)年度まで実施。

11月19日 第8回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「壁画の保存(2)」(担当 修復技術部、会場 国立社会教育研修所、22日まで)。

11月20日 黒田清輝巡回展(会場 広島県立美術館、会期は12月11日まで)。

12月1日 第18回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

12月3日 博物館・美術館等保存担当学芸員研修の開始。

12月6日 第16回芸能部公開学術講座「民謡の技法」(会場 朝日ホール)。

1985(昭和60)年

2月 本館棟暗室取設工事。

2月6日 第14回文化財保存修復研究協議会「彩色文化財の記録保存について(模写)」(担当 保存科学部・修復技術部)。

7月3日 当番機関として1985(昭和60)年度重要文化資料選定協議会を開催(5日まで)。

7月8日 第10回芸能部夏期講座「近代能楽史の諸問題」(12日まで)。

7月15日 第3回美術部・情報資料部夏期学術講座「鎌倉時代の美術(3)」(16日まで)。

10月21日 第15回文化財保存修復研究協議会「近世以降の文化財保存・修復について(1)」(担当 保存科学部・修復技術部)。

画(玄武の絵)のあることを確認。

1984(昭和59)年

諸職関係民俗文化財調査を開始。

3月20日 国立劇場に文楽劇場(黒川紀章設計、大阪)設置。

4月6日 国立文楽劇場開場記念公演。「寿式三番叟」、「義経千本桜」上演(4月22日まで)。

9月 敦煌壁画保存協力へ。

10月8日 日独科学技術協力協定の調印。

11月 民俗芸能学会設立。

1985(昭和60)年

5月20日 『民俗芸能研究』創刊。

10月3日 近鉄劇場開場(大阪市)、この頃、企業劇場・公立小劇場の新設盛ん。

- 10月28日 [開所記念行事]。「廃寺永久寺真言堂伝来真言八祖行状図とその関係資料展」を開催(会期は29日まで)。
- 10月29日 「黒田清輝・藤島武二・和田英作展」(会場 鹿児島市立美術館、会期は11月24日まで)。
- 11月18日 第9回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「各種文化財に関する専門家の養成」(担当 所長伊藤延男、会場 国立社会教育研修所、21日まで)。
- 11月30日 第19回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。
- 12月9日 第17回芸能部公開学術講座「沖縄舞踊の技法」(会場 朝日ホール)。

1986(昭和61)年

- 政府開発援助(ODA)関係経費による特別研究「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」に着手。
- 5月10日 生誕120年黒田清輝展(会場 三重県立美術館、会期は6月8日まで)。
- 6月14日 生誕120年黒田清輝展(会場 高岡市美術館、会期は7月6日まで)。
- 7月7日 第11回芸能部夏期講座「採り物と芸能」(10日まで)。
- 7月11日 生誕120年黒田清輝展(会場 東京都庭園美術館、会期は8月10日まで)。
- 8月16日 生誕120年黒田清輝展(会場 熊本県立美術館、会期は9月15日まで)。
- 9月20日 黒田清輝巡回展(会場 豊橋市美術博物館、会期は10月12日まで)。
- 9月30日 第10回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「アジアの仮面芸能」(担当 芸能部、会場 国立社会教育研修所、10月2日まで)。
- 10月16日 第16回文化財保存修復研究協議会「近代の文化財における保存修復の諸問題」(担当 保存科学部・修復技術部)。
- 11月29日 第20回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1987(昭和62)年

- 4月1日 濱田隆が所長となる。
- 7月6日 第12回芸能部夏期講座「日本音楽研究の視点」(9日まで)。
- 8月1日 黒田清輝巡回展(会場 北九州市立美術館、会期は30日まで)。
- 10月27日 第11回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「東アジア美術における転換期の諸問題」(担当 美術部・情報資料部、会場 東京国立博物館、29日まで)。
- 11月14日 第21回美術部・情報資料部公開学術講座(会

1986(昭和61)年

- 8月 ボストン美術館で北斎らの版木大量に確認。
- 9月1日 国立国会図書館新館開館。
- 9月2日 文化庁、10年がかりで「明月記」((財)冷泉家時雨亭文庫蔵)補修へ。修理の終わった時点で、重要文化財から国宝に指定。
- 10月26日 京都国立近代美術館新館開館(横文彦設計)。

1987(昭和62)年

- 4月25日 ニューヨーク・メトロポリタン美術館日本ギャラリー開館。

場 日本経済新聞社)。

11月25日 第17回文化財保存修復研究協議会「文化財保存・修復のための調査について」(担当 保存科学部・修復技術部)。

12月9日 第18回芸能部公開学術講座「民謡の技法—日本人の一生と歌—」(会場 旧東京音楽学校奏楽堂)。

1988(昭和63)年

7月4日 第13回芸能部夏期講座「顕密法会論」(8日まで)。

8月27日 黒田清輝巡回展(会場 福島県立美術館、会期は10月2日まで)。

9月19日 東京国立文化財研究所が協力して、第12回国際文化財保存科学会議(IIC)の京都大会が、「東洋の文化財の保存」をテーマに開催(会期は23日まで)。

9月29日 第12回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財の画像計測」(担当 保存科学部、会場 社会教育研修所、10月1日まで)。

12月7日 第19回芸能部公開学術講座「能の囃子 その技法」(会場 旧東京音楽学校奏楽堂)。

12月8日 第18回文化財保存修復研究協議会「装飾金工品の保存における問題について」(担当 保存科学部・修復技術部)。

12月10日 第22回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 日本経済新聞社)。

1989(平成元)年

アメリカ・スミソニアン研究機構との国際研究交流が開始される。

アジア文化財保存修復協力センター(仮称)設置のための調査費が認められる。

1月 関野克、国際記念物遺跡会議(ICOMOS)の第3回カゾラ賞を受賞。東京神田の学士会館で授賞式と祝賀会。

4月29日 黒田清輝巡回展(会場 茨城県近代美術館、会期は6月11日まで)。

7月24日 第14回芸能部夏期講座「能楽—新しい潮流—」(27日まで)。

10月4日 第13回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「金属文化財の保存と修復における今日の問題」(担当 修復技術部、会場 国立西洋美術館、6日まで)。

10月12日 第19回文化財保存修復研究協議会「保存科学における生物学的諸問題」(担当 保存科学部・修復技術部)。

12月2日 第23回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立西洋美術館)。

12月21日 第20回芸能部公開学術講座「義太夫節の技法」(会場 矢来能楽堂)。

1988(昭和63)年

1月 敦煌石窟保護へ財団設立。

1月12日 奈良国立文化財研究所、平城京跡の南東隅地点から出土した木簡により、その地が奈良時代初期の政治家長屋王の邸宅跡と判明したと発表。

7月『国華』創刊100周年を記念し、国華賞創設。

7月 宗教法人の美術館入場料などに消費税。

1989(平成元)年

民俗芸能緊急調査を開始。

ユネスコに文化遺産保存日本信託基金創設。

1月7日 昭和天皇崩御。平成と改元、1月8日施行。

2月22日 佐賀県教育委員会、吉野ヶ里遺跡で国内最大の弥生時代後期の環濠集落を発見したと発表。

4月11日 政府、ボストン美術館に100万ドル寄付。

4月11日 政府と三菱銀行、シカゴ美術館にそれぞれ100万ドル寄付。

6月4日 天安門事件。

7月 ギメ・コレクション、里帰り。

7月7日 天皇家の美術品を国に寄贈。「蒙古襲来絵巻」や伝狩野永徳筆「源氏物語図屏風」な

どが含まれる。

10月 文化庁、在外日本美術品実態調査へ。

11月9日 ベルリンの壁崩壊。

11月16日 ユネスコ「伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告」"Recommendation on the Safeguarding of Traditional Culture and Folklore"採択。

1990(平成2)年

奈良国立文化財研究所とともにICCRROMに機関会員として加盟。

3月25日「黒田清輝展」(会場 博物館明治村、会期は5月5日まで)。

4月 古文化財科学研究会が、日本芸術文化振興会より助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を開始。ニューヨーク・メトロポリタン美術館の調査を行う。

7月2日 第15回芸能部夏期講座「採り物と芸能一扇を中心に」(5日まで)。

9月27日 第20回文化財保存修復研究協議会「文化財の保存・修復のための調査について(2) ―とくに有機文化財の試料採取を中心として―」(担当 保存科学部・修復技術部)。

10月1日「文部省設置法施行規則」の一部改正により、アジア文化財保存研究室を新設し、5部1室1課となる。

10月6日 黒田清輝巡回展(会場 八戸市美術館、会期は11月11日まで)。

10月11日 第14回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財と環境」(担当 保存科学部、会場 国立教育会館社会教育研修所、13日まで)。

11月9日 第1回アジア文化財保存セミナー「石造文化財の保存における問題点」(共催 文化庁・奈良国立文化財研究所共催、協力 ユネスコ・アジア文化センター、会場 国立京都国際会館、15日まで)。

12月1日 第24回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立西洋美術館)。

12月25日 第21回芸能部公開学術講座「忠臣蔵一落語と舞踊にみる受容と展開」(会場 矢来能楽堂)。

1991(平成3)年

在外日本古美術品保存修復協力事業の発足。

3月30日『海外所在日本美術品調査報告1 ニューヨーク・メトロポリタン美術館 絵画・彫刻』を、古文化財科学研究会より刊行。

1990(平成2)年

第13回日独科学技術合同交流委員会開催。

1月10日 東京で唯一の寄席、上野〈本牧亭〉廃業。

2月1日 沖縄初の公立美術館、浦添市美術館開館。

2月14日 企業メセナ協議会発足。

3月30日 日本芸術文化振興会発足。

4月6日 大英博物館にジャパン・ギャラリーオープン。

6月6日 美術全集ブーム。講談社、小学館がともに大型美術全集の配本を開始。

7月20日「手塚治虫展」(会場 東京国立近代美術館、9月2日まで)。

10月 ベトナム・ホイアン町の町並み保存、文化庁援助へ。

1991(平成3)年

4月 桂離宮の解体修理終了。

9月 文化庁、日本近代化の文化遺産調査。

- 4月 「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」として、ニューヨークのパーク・コレクションの調査を行う。
- 4月1日 西川杏太郎が所長となる。
- 4月25日 アメリカのスミソニアン研究機構・フリーア美術館所蔵作品を対象とした、文化庁による在外日本古美術品保存修復協力事業開始。
- 7月15日 第16回芸能部夏期講座「絵画資料による近世演劇研究」(18日まで)。
- 8月24日 黒田清輝巡回展(会場 宮崎県総合博物館 会期は9月29日まで)。
- 9月27日 第21回文化財保存修復研究協議会「新設の文化財施設における『アルカリ』発生の原因と対策」(担当 保存科学部)。
- 10月29日 第15回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「能の伝承と再生」(担当 芸能部、会場 国立能楽堂、31日まで)。
- 11月15日 第2回アジア文化財保存セミナー「博物館資料の保存」(会場 国立京都国際会館、21日まで)。
- 12月7日 第25回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立西洋美術館)。
- 12月20日 第22回芸能部公開学術講座「声明の技法—「大懺悔」「三十二相」を中心に—」(会場 旧東京音楽学校奏楽堂)。

1992(平成4)年

- 5月23日 黒田清輝巡回展(会場 北海道立旭川美術館、会期は6月28日まで)。
- 6月9日 前年度の文化庁による在外日本美術品修復事業の成果として、アメリカ・フリーア美術館所蔵「紙本著色斎宮女御図」等6点が、国内での修復を終え、当研究所で報道関係者に公開。
- 7月4日 黒田清輝巡回展(会場 北海道立帯広美術館、会期は8月9日まで)。
- 7月13日 第17回芸能部夏期講座「日本の音楽理論用語」(16日まで)。
- 9月 1990(平成2)年に設立された上野の山文化ゾーン連絡協議会により、上野の山文化ゾーンフェスティバルを開催。黒田記念館、10月20日から11月1日まで特別公開を行う。以降、毎年秋の同フェスティバル期間中に黒田記念館を連日特別公開する。
- 9月29日 第16回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「東アジア美術における〈人のかたち〉」(担当 美術部・情報資料部、会場 国立西洋美術館、10月1日まで)。
- 10月26日 第1回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立

1992(平成4)年

- 第2回国際文化財生物劣化会議(ICBCP-2)開催。
- 6月 『みづゑ』休刊。
- 6月26日 地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律公布。
- 7月 文化庁、「文化財保護企画特別委員会」を設置。文化財保護法の制定以後3回改正されているが、美術工芸品については制定後変化がなかったため、42年ぶりに検討が加えられることとなった。

文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、11月14日まで)。

11月19日 第3回アジア文化財保存セミナー「木造文化財の保存と国際協力」(会場 国立京都国際会館、26日まで)。

11月28日 第26回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立西洋美術館)。

12月10日 第23回芸能部公開学術講座「扇の技法—そのリズムと所作—」(会場 矢来能楽堂)。

1993(平成5)年

2月26日 第22回文化財保存修復研究協議会「文化財保存と環境汚染」(担当 保存科学部・修復技術部)。

4月1日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となる。

7月12日 第18回芸能部夏期講座「能・狂言の演出と技法」(15日まで)。

7月24日 黒田清輝巡回展(会場 秋田市立千秋美術館、会期は8月29日まで)。

10月15日 第23回文化財保存修復研究協議会「古代鉄の保存科学」(担当 保存科学部)。

10月25日 第24回芸能部公開学術講座「歌舞伎の技法—浄瑠璃の継承と展開—」(会場 パンセホール)。

10月29日 第4回アジア文化財保存セミナー「文化財保存における伝統的な材料と技術」(会場 国立京都国際会館、11月4日まで)。

10月30日 「黒田清輝と藤島武二展」(会場 稲沢市荻須記念美術館、会期は11月28日まで)。

11月10日 第17回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「漆文化財の保存」(担当 修復技術部、会場 国立教育会館社会教育研修所、12日まで)。

11月19日 第27回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立教育会館)。

11月24日 第2回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月14日まで)。

1994(平成6)年

1月11日 文化政策推進会議提言。国際的な保存修復協力の拠点として、東京国立文化財研究所のセンター機能を強化することが示される。

3月17日 第1回国際文化財保存修復協力センター〈仮称〉設置に関する調査研究会を開催。

7月11日 第19回芸能部夏期講座「能の囃子—その技法と歴史—」(14日まで)。

10月8日 黒田清輝巡回展(会場 飯田市美術博物館、会

1993(平成5)年

2月26日 明治座、新築開場。

3月27日 江戸東京博物館開館。

5月28日 奈良国立文化財研究所を中心にアンコール文化遺産保護に関する研究協力を開始。

7月 ユネスコに無形文化財保存振興日本信託基金創設。

7月12日 民俗文化財保存活用支援活動国庫補助要項策定。

11月3日 宮内庁三の丸尚蔵館が、皇居内に開館。

12月 第17回世界遺産委員会で、「法隆寺地域の仏教建造物群」と「姫路城」が文化遺産として、鹿児島県の「屋久島」と青森・秋田両県の「白神山地」が自然遺産として、世界遺産に登録される。

12月10日 ユネスコ「人間国宝 Living Human Treasures」制度を確立。

1994(平成6)年

9月12日 近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議発足。

9月27日 在外日本古美術品に係る博物館・美術館研究協力事業を開始。

10月 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委

期は11月6日まで)。

- 10月31日 第18回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財保存における分光学的手法」(担当 保存科学部、会場 国立教育会館社会教育研修所、11月2日まで)。
- 11月11日 第28回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立教育会館)。
- 11月24日 第3回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月14日まで)。
- 12月9日 第25回芸能部公開学術講座「番楽の技法と伝承」(会場 江戸東京博物館)。

1995(平成7)年

- 1月17日 阪神淡路大震災による文化財被害(国宝・重要文化財の被害は128件に及ぶ)。文化庁は当研究所内に「文化財救済委員会」を設置。
- 1月17日 第24回文化財保存修復研究協議会「海外所在の日本美術修復の技術的諸問題」(担当 修復技術部)。
- 4月1日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、国際文化財保存修復協力室を廃止。国際文化財保存修復協力センター(企画室・環境解析研究指導室)を新設し、1センター5部1課となる。
- 4月1日 東京藝術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻(システム保存学)を新設。
- 7月10日 第20回芸能部夏期講座「伝統芸能の鬼」(13日まで)。
- 9月6日 能楽技法講座の開設(1997年6月25日まで)。
- 10月17日 第5回アジア文化財保存セミナー「文化財保存国際協力事業における技術的諸問題」(会場 奈良県新公会堂、19日まで)。
- 11月20日 第25回文化財保存修復研究協議会「有機質文化財に関する調査研究の新しい展開」(担当 保存科学部)。
- 11月24日 第4回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月14日まで)。
- 11月25日 第29回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 国立教育会館)。
- 11月28日 第26回芸能部公開学術講座「語り物の音楽」(会場 江戸東京博物館)。

1996(平成8)年

- 2月1日 第19回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「敦煌莫高窟の保存」(担当 国際文化財保存修復協

員会設置。

- 12月 第18回世界遺産委員会で、「古都京都の文化財群」が文化遺産として世界遺産に登録される。

1995(平成7)年

- 1月21日 東京都写真美術館開館。
- 3月19日 東京都現代美術館開館。
- 3月20日 地下鉄サリン事件。
- 12月 第19回世界遺産委員会で、富山・岐阜両県の「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が文化遺産として世界遺産に登録される。

1996(平成8)年

- 4月 無形民俗文化財記録作成事業「ふるさとの伝承電子図鑑」を

- 力センター、会場 奈良県新公会堂、3日まで)。
- 2月25日 黒田清輝巡回展(会場 米子市美術館、会期は3月24日まで)。
- 4月1日 渡邊明義が所長となる。
- 7月8日 第21回芸能部夏期講座「民俗芸能の棒」(11日まで)。
- 8月2日 新営建物建築工事の着工式を行う。
- 8月19日 東京文化財研究所新館着工。
- 9月30日 第26回文化財保存修復研究協議会「文化財建造物の非破壊調査—現状と展望—」(担当 修復技術部)。
- 10月2日 第27回芸能部公開学術講座「鬼狂言の復曲」(会場 梅若能楽院会館)。
- 10月16日 第6回アジア文化財保存セミナー「考古遺物の保存」(会場 奈良県新公会堂、18日まで)。
- 10月19日 「白馬会—明治洋画の新風展」(会場 プリズトン美術館、会期は11月28日まで)。
- 10月30日 第30回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 東京都美術館)。
- 11月12日 第20回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「歌舞伎—変遷と展望—」(担当 芸能部、会場 江戸東京博物館、14日まで)。
- 11月20日 第5回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月11日まで)。
- 12月 ホームページの運用を開始。
- 12月10日 「白馬会—明治洋画の新風展」(会場 京都国立近代美術館、会期は翌年1月26日まで)。

1997(平成9)年

- 2月7日 「白馬会—明治洋画の新風展」(会場 石橋美術館、会期は3月16日まで)。
- 3月3日 アジア文化財保存修復研究会(のち国際文化財保存修復研究会と改称)の発足。第1回アジア文化財保存修復研究会(会場 東京国立博物館)。
- 4月 在外日本古美術品保存修復協力事業の対象に工芸品を加える。
- 5月12日 第1回海外学術調査員および研究者のための保存修復講座(担当 修復技術部、第1期・第2期・第3期)。
- 7月 笹木繁男主宰現代美術資料センター所蔵資料の寄贈を受ける。
- 7月7日 第22回芸能部夏期講座「翁(式三番)の種々相」(10日まで)。
- 9月19日 第27回文化財保存修復研究協議会「文化財展示収蔵施設における虫害対策の新たな展開とその諸問題」(担当 保存科学部)。

国庫補助事業として開始。

- 6月 文化財保護法改正案成立。新たに文化財登録制度を導入し、保護方法の多様化を図る。
- 7月 旧朝鮮総督府の壁画撤去へ。ソウルの国立中央博物館で、中央ホールの壁画に掲げられている洋画家和田三造作「羽衣」の撤去作業が始まる。
- 10月12日 第1回国際民俗芸能フェスティバル開催。
- 12月 第20回世界遺産委員会で、広島平和記念碑(原爆ドーム)と厳島神社が文化遺産として世界遺産に登録される。

1997(平成9)年

- 無形文化財等を対象とする伝統文化伝承推進事業開始。
- 2月1日 「日本のわざと美—重要無形文化財とそれを支える人々—展」を開始。
- 7月1日 重要文化財公開促進事業開始。
- 7月30日 文化政策推進会議「文化振興マスタープラン・文化立国に向けての緊急提言」提出。
- 10月10日 東京初台に新国立劇場開場。こけら落としは新作オペラ「建・TAKERU」。
- 11月 ユネスコ第29回総会で「人類の口承遺産の傑作の宣言」(後に「人類の口承及び無形遺産の

- 10月1日 「文部省設置法施行規則」の一部改正により、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室を置く。
- 10月13日 第7回アジア文化財保存セミナー「アジア地域の世界文化遺産—その持続的発展と保存」(会場 国立オリンピック記念青少年総合センター、18日まで)。
- 10月22日 第2回アジア文化財保存修復研究会(会場 東京藝術大学)。
- 10月22日 第31回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 東京都美術館)。
- 10月25日 黒田清輝巡回展(会場 佐野美術館、会期は12月8日まで)。
- 10月29日 第28回芸能部公開学術講座「笛の技法」(会場 旧東京音楽学校奏楽堂)。
- 11月10日 政府の行政改革会議が、独立行政法人化への移行の検討対象を公表。文部省所管の国立博物館など13機関・業務が挙げられていることが明らかとなる。独立行政法人は、中央官庁から執行部門のを切り離し、国とは別の法人格を持たせ、業務の効率やサービスの質、透明性の向上を図ることが目的とされる。
- 11月20日 第6回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月11日まで)。
- 12月3日 第21回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」(担当 美術部・情報資料部、会場 東京国立近代美術館、5日まで)。

1998(平成10)年

- 3月3日 第3回国際文化財保存修復研究会(会場 国立教育会館)。
- 5月11日 第2回海外学術調査員および研究者のための保存修復講座(担当 修復技術部、第1期・第2期・第3期)。
- 6月29日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「煉瓦の保存について」。
- 7月7日 第23回芸能部夏期講座「近松門左衛門の浄瑠璃」(10日まで)。
- 9月29日 第4回国際文化財保存修復研究会(会場 国立教育会館)。
- 10月16日 黒田清輝巡回展(会場 成羽町美術館、会期は11月29日まで)。
- 10月21日 第32回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 東京都美術館)。
- 11月4日 第22回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「近代の文化遺産の保存と活用」(担当 修復技術部、会場 東京国立博物館、6日まで)。

傑作の宣言」に名称変更)を決議。

1998(平成10)年

- 3月2日 キトラ古墳で「星宿図」などの壁画発見。
- 9月22日 室生寺五重塔損傷。強風のため、国宝五重塔の一部が損傷を受け、解体修理が必要となる。
- 12月 第22回世界遺産委員会で、「古都奈良の文化財群」が文化遺産として世界遺産に登録される。

11月5日 第29回芸能部公開学術講座「里神楽の技法」(会場 矢来能楽堂)。

11月26日 第1回資料保存地域研修(協力 石川県博物館協議会、会場 地方職員共済組合山中保養所はくりく荘、27日まで)。

12月15日 紙の保存修復国際研修セミナー(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 京都市国際交流会館、18日まで)。

1999(平成11)年

1月14日 第28回文化財保存修復研究協議会「レンガ造文化財の保存修復」(担当 国際文化財保存修復協力センター)。

1月15日 国立博物館・美術館巡回展「名作が生まれる時近代日本洋画5つの結晶」(会場 郡山市立美術館、会期は2月14日まで)。

2月1日 『東京国立文化財研究所年報』刊行開始。

2月3日 第5回国際文化財保存修復研究会(会場 国立教育会館)。

2月23日 第8回アジア文化財保存セミナー「アジア地域の世界文化遺産：考古遺跡の活用しながらの保存」(会場 奈良県新公会堂、27日まで)。

2月25日 国立博物館・美術館巡回展「名作が生まれる時近代日本洋画5つの結晶」(会場 北九州市立美術館、会期は3月22日まで)。

3月10日 第1回民俗芸能研究協議会「復活と継承」(会場 東京国立博物館・江戸東京博物館、会期は11日まで)。

4月28日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 第1回研究会。

5月11日 第3回海外学術調査員および研究者のための保存修復講座(担当 修復技術部、第1期・第2期・第3期)。

7月5日 第24回芸能部夏期講座「狂言の技法」(8日まで)。

8月15日 第1回漆の保存修復国際研修(29日まで)。

9月1日 黒田清輝巡回展(会場 大分市美術館、会期は10月3日まで)。

9月22日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 第2回研究会。

9月27日 第23回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「アジアの文化財生物被害防除対策の今後—2005年臭化メチル全廃を控え—」(担当 保存科学部、会場 国立社会教育会館社会教育研修所、29日まで)。

10月14日 第6回国際文化財保存修復研究会(会場 東京都美術館)。

10月15日 第2回資料保存地域研修(協力 北海道開拓の

1999(平成11)年

3月30日 登録美術品、初の認定。
文化庁は、12月に施行された「美術品の美術館における公開の促進に関する法律」(美術品公開促進法)に基づく登録工芸品5件を発表。

4月1日 民俗文化財伝承・活用等事業国庫補助要項策定。

10月12日 東京国立博物館平成館開館。

12月 第23回世界遺産委員会で、「日光の社寺」が文化遺産として世界遺産に登録される。

村・北海道開拓記念館、会場 北海道開拓記念館講堂)。

10月22日 第33回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 東京都美術館)。

11月14日 第9回アジア文化財保存セミナー「アジアにおける壁画の保存」(会場 国立オリンピック記念青少年総合センター、19日まで)。

11月16日 第30回芸能部公開学術講座「能と日本舞踊の技法」(会場 矢来能楽堂)。

12月7日 第2回民俗芸能研究協議会「学校教育と民俗芸能」(会場 江戸東京博物館)。

2000(平成12)年

1月14日 第29回文化財保存修復研究協議会「近世輸出品の保存と修復」(担当 修復技術部)。

2月4日 新庁舎竣工。

2月21日 別館(庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター)の新庁舎への移転を開始。

3月 『TOBUNKEN NEWS』刊行開始。

3月6日 新営庁舎の竣工にともない、本館(美術部・情報資料部)の移転を開始。

3月22日 建設省関東地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新営庁舎関係の工事が完了。

3月24日 第7回国際文化財保存修復研究会。

3月29日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 第3回研究会。

5月8日 第4回海外学術調査員および研究者のための保存修復講座(担当 修復技術部、第1期・第2期・第3期)。

5月11日 新営庁舎の竣工を記念し、新館開所記念式典を挙げる。

7月17日 第25回芸能部夏期講座「アジアの中の民俗芸能」(19日まで)。

10月25日 第34回美術部・情報資料部公開学術講座(会場 東京都美術館)。

10月31日 第31回芸能部公開学術講座「翁の技法—舞う翁・語る翁—」(会場 矢来能楽堂)。

11月7日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「船舶の保存・修復について(1)」。

11月21日 第8回国際文化財保存修復研究会。

11月28日 第3回民俗芸能研究協議会「芸能用具の保存・修復・新調・活用」。

11月28日 第7回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・文化庁・ICCROM、会場 東京国立文化財研究所・京都国立博物館、12月15日まで)。

2000(平成12)年

10月30日 文化財保護法50年記念式典。

12月 第24回世界遺産委員会で、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が文化遺産として世界遺産に登録される。

11月30日 第3回資料保存地域研修（協力 島根県文化施設連絡協議会・島根県歴史民俗資料館等連絡協議会、会場 いわみーる、12月1日まで）。

12月12日 第4回資料保存地域研修（協力 沖縄県立埋蔵文化財センター・沖縄県立博物館・那覇市歴史資料室、会場 沖縄県立埋蔵文化財センター）。

12月15日 第30回文化財保存修復研究協議会「光学的方法の明日」（担当 保存科学部）。

12月18日 第24回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化の多様性と文化遺産」（担当 国際文化財保存修復協力センター、会場 東京国立博物館、21日まで）。

2001（平成13）年

『保存科学』掲載論文をPDF化し、インターネット配信を開始。

1月13日 黒田清輝巡回展（会場 滋賀県立近代美術館、会期は2月18日まで）。

2月26日 第9回国際文化財保存修復研究会。

3月29日 黒田記念館改修工事が竣工し、展示スペースが黒田記念室及び展示室の2室になる。

4月1日 「独立行政法人文化財研究所法」の施行により、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所と改称。渡邊明義が独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所長となる。

4月1日 「独立行政法人文化財研究所組織規程」により、情報資料部を廃止。管理部、協力調整官—情報調整室、美術部、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターの1センター5部1調整官となる。

5月7日 国立音楽大学附属図書館より竹内道敬旧蔵音楽資料の寄贈を受ける。

6月6日 保存担当学芸員フォローアップ研修の開始（7日まで）。

7月16日 第26回芸能部夏期講座「歌舞伎の基礎資料—研究史と展望—」（19日まで）。

7月19日 黒田清輝巡回展（会場 宮城県美術館、会期は9月2日まで）。

9月5日 第5回資料保存地域研修（協力 神奈川県博物館協議会、会場 神奈川県立歴史博物館）。

9月11日 第4回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の記録作成の方法と活用について」。

10月3日 第2回漆の保存修復国際研修（19日まで）。

10月16日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「船舶の保存・修復について（2）—特に大型金属船に関して—」。

10月18日 第10回国際文化財保存修復研究会「地域社会

2001（平成13）年

4月1日 ふるさと文化再興事業が始まる。

4月3日 キトラ古墳で朱雀の絵が発見され公表、四神がそろった日本初の壁画古墳と判明。

5月18日 第1回ユネスコ「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」で「能楽」が宣言される。

9月2日 「横浜トリエンナーレ2001」開催（11月11日まで）。

9月11日 米国で同時多発テロ。

と文化遺産(1):民族、宗教、政治」。

10月20日 第35回美術部オープンレクチャー「日本における外来美術の受容について」(2日目 10月27日、3日目 11月3日)。

11月13日 第25回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「日本の楽器—新しい楽器学へ向けて—」(担当 芸能部、15日まで)。

11月26日 東京美術商協同組合から寄付金を受入(1回目)。以降、2005年度までに毎年春と夏の計9回の寄付を受ける。

11月28日 第31回文化財保存修復研究協議会「中国・山西省の文化財と文化財保護の現状」(担当 国際文化財保存修復協力センター)。

12月14日 第6回資料保存地域研修(協力 滋賀県博物館協議会・滋賀県教育委員会、会場 滋賀県立琵琶湖博物館)。

12月20日 第32回芸能部公開学術講座「変身の技法—能・浄瑠璃にみる菅原道真—」(会場 矢来能楽堂)。

2002(平成14)年

関野克資料の寄贈を受ける。

1月17日 第7回資料保存地域研修(協力 長野県博物館協議会・長野県教育委員会、会場 長野県立歴史館、8日まで)。

2月22日 第11回国際文化財保存修復研究会「地域社会と文化遺産(2) 民俗、言語、異文化理解」。

3月 情報調整室が研究データベース検索システムを外部公開。

3月18日 第10回アジア文化財保存セミナー「各国の文化遺産保護制度—その国際比較—」(22日まで)。

6月25日 第8回資料保存地域研修(協力 新潟県立博物館協議会、会場 新潟県立近代美術館、26日まで)。

7月1日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第1回「鉄道車両及び鉄道施設の保存修復について(1)」。

7月3日 第32回文化財保存修復研究協議会「近世輸出工芸品の保存と修復」(担当 修復技術部)。

7月18日 黒田清輝巡回展(会場 鹿児島市立美術館、会期は9月1日まで)。

7月23日 第27回芸能部夏期講座「文化財としての民俗芸能」(25日まで)。

9月27日 第12回国際文化財保存修復研究会「“無形の文化財”の保護に関する国際比較」。

10月1日 「独立行政法人等情報公開法」施行にともない、資料閲覧室は一般公開施設となる。

10月1日 第8回紙の保存修復国際研修(主催 東京国立文化財研究所・ICCROM、会場 東京文化財研究所・京都国立博物館、18日まで)。

2002(平成14)年

1月21日 アフガニスタン復興支援会議が東京で開幕、小泉首相は日本の5億ドル拠出を表明。

- 10月18日 第36回美術部オープンレクチャー「日本における外来美術の受容」(19日まで)。
- 11月7日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第2回「欧米における鉄道車両及び鉄道施設の保存修復」。
- 11月11日 第11回アジア文化財保存セミナー「文化遺産の保護制度とその運用—組織、人、資金」(16日まで)。
- 11月21日 第5回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の映像記録作成」。
- 12月4日 第26回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「うごく モノ—時間・空間・コンテクスト—」(担当 美術部、会場 東京国立博物館、6日まで)。
- 12月6日 第9回資料保存地域研修(協力 三重県立博物館・三重県博物館協議会、会場 四日市市立博物館)。
- 12月17日 千原大五郎資料の寄贈を受ける。
- 12月19日 第33回芸能部公開学術講座「話芸と忠臣蔵」(会場 江戸東京博物館)。

2003(平成15)年

- 2月19日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第3回「鉄道車両及び鉄道施設の保存修復について(2)」。
- 3月13日 第13回国際文化財保存修復研究会「アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして」。
- 4月1日 「独立行政法人文化財研究所組織規程」により、国際情報研究室を廃止。新たに国際文化財保存修復協力センターに企画情報研究室を置く。
- 5月14日 第10回資料保存地域研修(協力 高知ミュージアムネットワーク、会場 高知市立自由民権記念館、15日まで)。
- 6月16日 パリのユネスコ本部で第1回アフガニスタン文化遺産救済国際調整委員会(IOC)が開催され、和光大学名誉教授前田耕作と所長渡邊明義が出席。(18日まで)。
- 7月1日 第14回国際文化財保存修復研究会「イラク文化遺産保護の地平線」。
- 7月15日 第28回芸能部夏期講座「能の特殊演出(小書)」(17日まで)。
- 7月19日 黒田清輝巡回展(会場 和歌山県立近代美術館、会期は8月31日まで)。
- 8月27日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第1回「鉄道周辺施設の保存修復と活用」。
- 9月6日 当研究所とアフガニスタン国際文化省との合意書の締結のためアフガニスタンを所長渡邊明義が訪問。
- 9月15日 第3回漆の保存修復国際研修(10月4日まで)。
- 10月17日 第37回美術部オープンレクチャー「日本における外来文化の受容」(18日まで)。

2003(平成15)年

- 3月 文化庁、高松塚古墳壁画に黒カビの発生を発表、「国宝高松塚古墳壁画緊急保存対策検討会」を発足。
- 6月 映像に関する著作権の保護期間を欧米諸国と同じ70年に延長する著作権改正案が国会で成立、翌年から施行。
- 7月9日 国立大学法人法成立。
- 10月17日 ユネスコ無形文化遺産の保護に関する条約。
- 11月 第2回ユネスコ「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」で、「人形浄瑠璃文楽」が宣言される。

- 10月24日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第2回「鉄道周辺施設の保存修復と活用～ヨーロッパにおける事例」。
- 11月20日 第6回民俗芸能研究協議会「民俗芸能に関する情報の発信と共有」。
- 12月3日 第27回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「漆が語る国際交流—海を渡った文化財情報—」(担当 修復技術部、会場 東京国立博物館、5日まで)。
- 12月6日 第34回芸能部公開学術講座「はやり歌撰取の諸相」(会場 早稲田大学大隈講堂)。
- 12月8日 第12回アジア文化財保存セミナー「文化遺産の保護制度と社会—信仰または宗教、民族または民俗、経済—」(12日まで)。

2004(平成16)年

- 1月20日 第11回資料保存地域研修(協力 福井県博物館協議会、会場 福井県立歴史博物館、21日まで)。
- 1月23日 第33回文化財保存修復研究協議会「古墳や洞窟内の水分の影響と保存対策」(担当 保存科学部)。
- 1月30日 第15回国際文化財保存修復研究会「日干し煉瓦の保存」。
- 2月4日 第12回資料保存地域研修(協力 鹿児島県博物館協議会、会場 鹿児島県歴史資料センター黎明館、5日まで)。
- 2月10日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第3回「ヨーク鉄道博物館における文化財保存修復の意義」。
- 2月14日 MOA美術館および美術史学会との共催により、「尾形光琳筆『紅白梅図屏風』の新知見—調査速報とシンポジウム—」を開催(会場 MOA美術館能楽堂)。
- 4月1日 鈴木規夫が所長となる。
- 4月1日 国立大学の法人化により、協定書を見直し、2005(平成17)年度からは大学院生を募集せず、講義・演習等を通じて大学院教育に協力を行うこととする。
- 4月24日 黒田清輝巡回展(会場 新潟県立近代美術館、会期は6月6日まで)。
- 7月12日 第29回芸能部夏期講座「人形浄瑠璃の変遷—演出を主として—」(14日まで)。
- 9月13日 第9回紙の保存修復国際研修(主催 東京文化財研究所・ICCROM、会場 東京文化財研究所・京都国立博物館、10月1日まで)。
- 9月22日 第16回国際文化財保存修復研究会「“文化的景観”の意義—その保全、管理、今後の課題—」。
- 10月4日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第1回「大型建造物の保存修復と活用」。
- 10月25日 第13回アジア文化財保存セミナー「文化遺産

2004(平成16)年

- 7月 第28回世界遺産委員会で、「紀伊山地の霊場と参詣道」が文化遺産として世界遺産に登録される。
- 9月14日 キトラ古墳壁画の剥ぎ取りを決定。
- 11月3日 国立国際美術館、大阪市中之島へ移転開館。

の将来像と保護制度」(29日まで)。

11月5日 第38回美術部オープンレクチャー「日本における外来美術の受容」(6日まで)。

11月17日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第2回「大型構造物の保存修復と活用～ヨーロッパにおける事例」。

11月18日 第7回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の公開をめぐる」。

12月1日 第28回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「文化財の非破壊調査法—X線分析の最前線—」(担当 保存科学部、会場 東京都美術館、3日まで)。

12月26日 第35回芸能部公開学術講座「鹿島踊の諸相」(会場 江戸東京博物館)。

2005(平成17)年

1月27日 第13回資料保存地域研修(協力 静岡県教育委員会・静岡県博物館協議会、会場 静岡県立美術館、28日まで)。

3月18日 第17回国際文化財保存修復研究会「中国石窟寺院の保存修復—その現状と課題—」。

3月24日 第34回文化財保存修復研究協議会「文化財の調査研究および保護に対する地理情報システムの利用」(担当 国際文化財保存修復協力センター)。

3月31日 『日本東洋古美術文獻目録 1966～2000年』刊行。

7月16日 黒田清輝巡回展(会場 徳島県立近代美術館、会期は9月4日まで)。

7月19日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第1回「呉市における近代化遺産の保存修復と活用」。

7月26日 第30回芸能部夏期講座「音の聞こえる芸能史研究」(28日まで)。

7月29日 第35回文化財保存修復研究協議会「伝統的日本画修復材料への科学的アプローチ—近年の動向—」(担当 修復技術部)。

9月11日 第4回漆の保存修復国際研修(10月1日まで)。

9月28日 第18回国際文化財保存修復研究会「文化的景観の成立、その変遷」。

10月24日 第14回アジア文化財保存セミナー「文化遺産とともに生きる—アジア 変革期における展望：その理論と概観」(28日まで)。

11月4日 第39回美術部オープンレクチャー「日本における外来美術の受容」(5日まで)。

11月24日 第8回民俗芸能研究協議会「無形民俗文化財の映像記録作成」。

12月1日 第36回芸能部公開学術講座「中世の寺院と芸能」(会場 江戸東京博物館)。

2005(平成17)年

7月 第29回世界遺産委員会で、「北海道知床」が自然遺産として世界遺産に登録される。

9月8日 文化庁、高松塚古墳壁画の西壁・白虎に、カビの発生を発表。

9月15日 文化庁、キトラ古墳壁画で南壁・朱雀に大量の斑点が発生していると発表。

10月15日 九州国立博物館開館。

11月25日 第3回ユネスコ「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」で、「歌舞伎」が宣言される。

12月16日 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会第2回「近代化遺産の修復のための諸問題」。

12月21日 第19回国際文化財保存修復研究会「文化遺産の公開・活用と保存環境」。

2006（平成18）年

1月24日 第29回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」（担当 国際文化財保存修復協力センター、会場 オリンピック記念総合青少年センター・東京国立博物館、26日まで）。

3月28日 藤間清資料の寄贈を受ける。

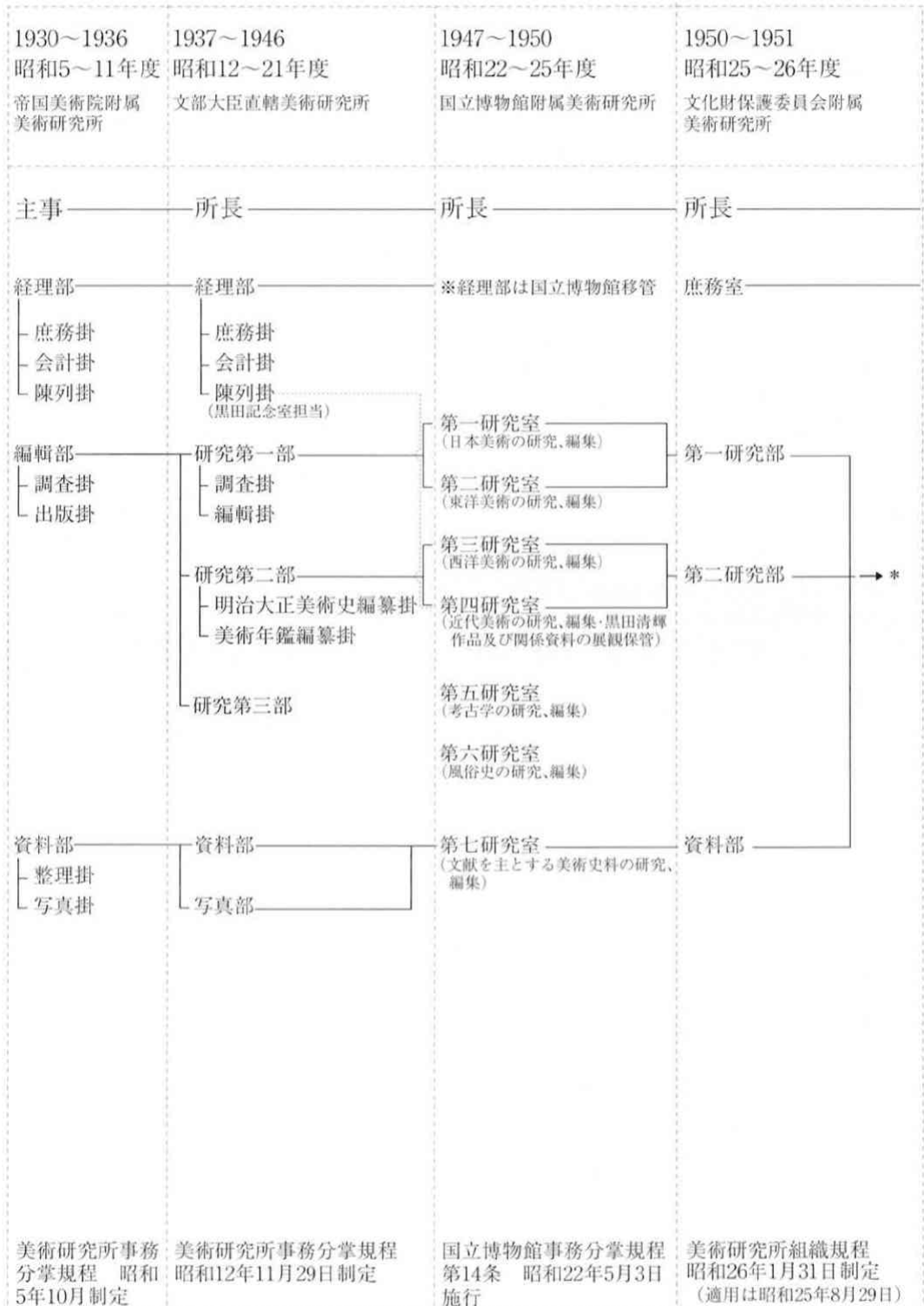
3月29日 柳澤孝資料の寄贈を受ける。

4月1日 「独立行政法人文化財研究所組織規程」の一部改正により、協力調整官・情報調整室は企画情報部、芸能部は無形文化遺産部、国際文化財保存修復協力センターは文化遺産国際協力センターと改称、1センター6部となる。

2007（平成19）年

4月1日 「独立行政法人国立文化財機構法」の施行により、独立行政法人国立文化財機構文化財研究所となる。美術部を廃止し企画情報部に整理統合、保存科学部と修復技術部は廃止・転換し保存修復科学センターとなり、2センター3部となる。

機構変遷図



1952～1953
昭和27～28年度
東京文化財研究所

所長 ————— 所長 —————

庶務室 ————— 庶務室 ————— 庶務課 (1961.9.16) —————
 └ 庶務係 └ 庶務係 └ 庶務係
 └ 会計係 └ 会計係 └ 会計係

*美術部 ————— 美術部 —————
 └ 第一研究室 └ 第一研究室
 └ 第二研究室 └ 第二研究室
 └ 資料室 └ 資料室 ————— 情報資料部 (1977.4.18) —————
 └ 文献資料研究室
 └ 写真資料研究室

芸能部 ————— 芸能部 —————
 └ 演劇研究室 └ 演劇研究室
 └ 音楽舞蹈研究室 └ 音楽舞蹈研究室
 └ 郷土芸能研究室 └ 郷土芸能研究室 ————— 民俗芸能研究室 (1976.5.10)

保存科学部 ————— 保存科学部 —————
 └ 化学研究室 └ 化学研究室
 └ 物理研究室 └ 物理研究室
 └ 生物研究室 └ 生物研究室
 └ 修理技術研究室 (1962.7.1) ————— 修復技術部 (1973.4.12) —————
 └ 第一修復技術研究室
 └ 第二修復技術研究室

東京文化財研究所組織規定
昭和27年4月1日施行

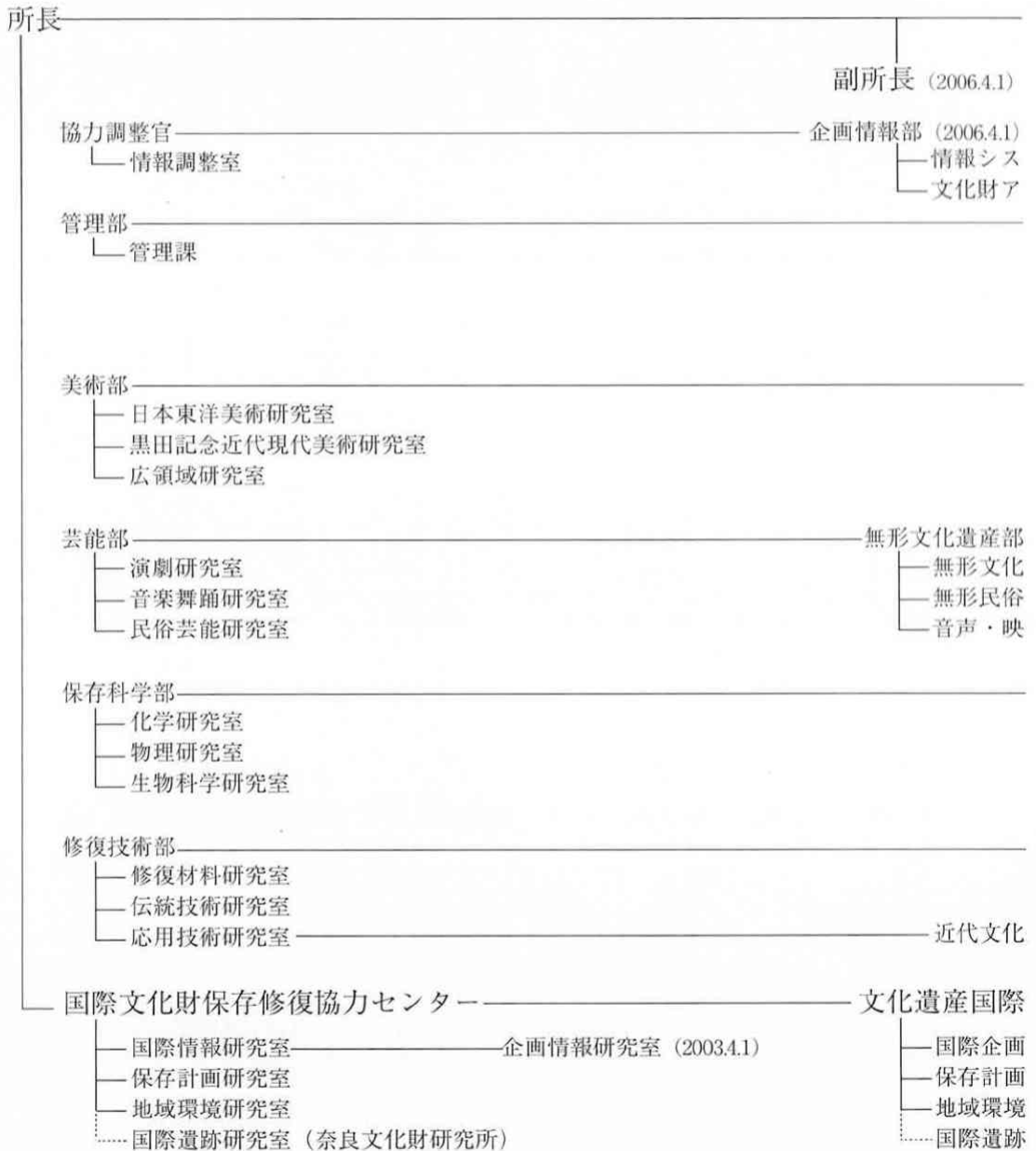
東京国立文化財研究所組織規定
昭和29年7月1日施行

1954～2000
昭和29～平成12年度
東京国立文化財研究所

——第三修復技術研究室
(1978.4.5)

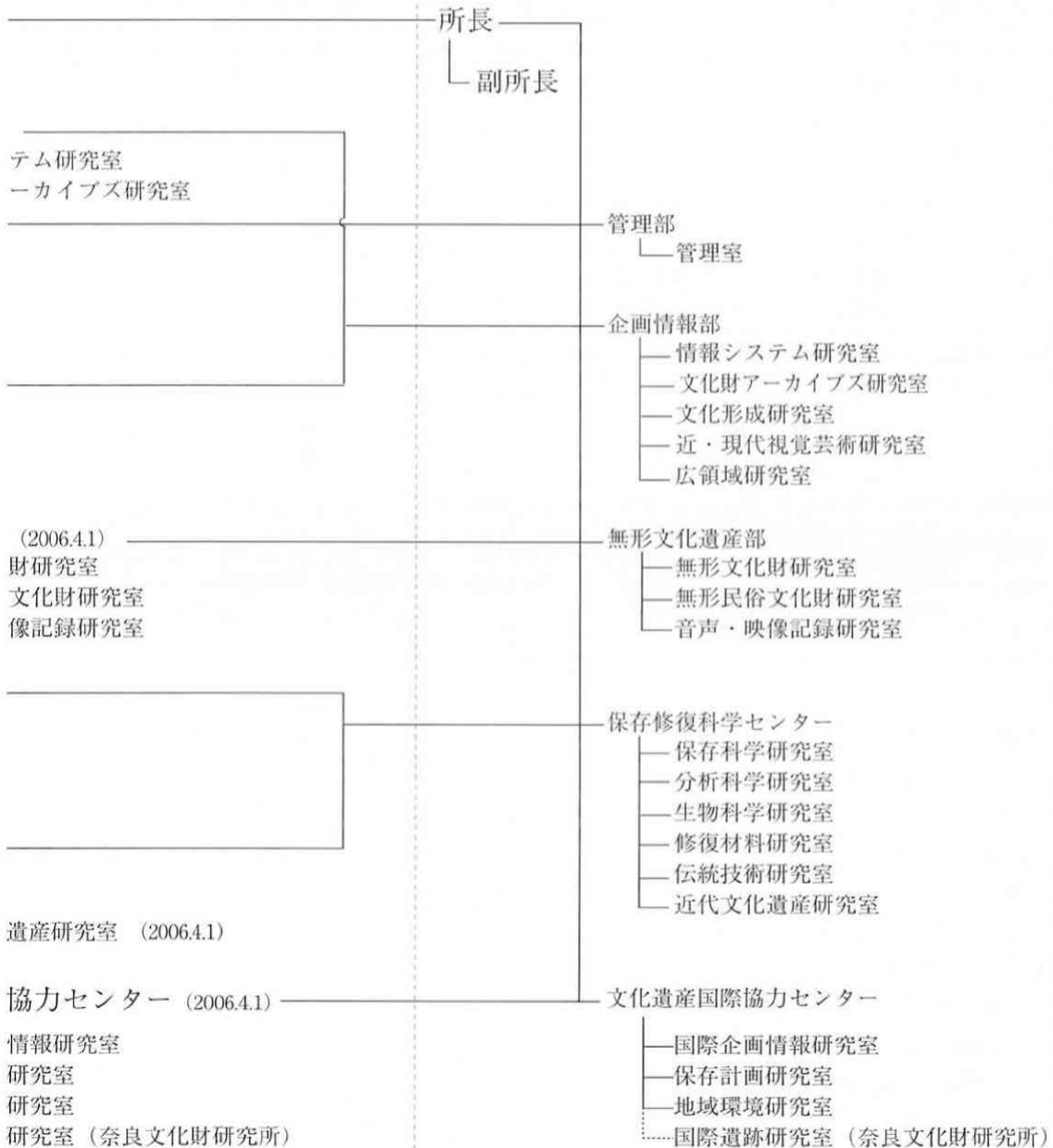
アジア文化財保存研究室——国際文化財保存修復協力室——国際文化財保存修復協力センター——
(1990.10.1) (1993.4.1) (1995.4.1)
—企画室
—環境解析研究指導室
—保存計画研究指導室
(1997.10.1)

2001～2006
平成13～18年度
独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所



文化財研究所規定第1号 平成13年4月1日施行

2007～
平成19年度～
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所



国立文化財機構規定第4号 平成19年4月1日施行

参考文献一覧

東京文化財研究所関係

『TOBUNKEN NEWS』
 『芸能の科学』
 『古文化財之科学』
 『帝国美術院附属美術研究所一覧』
 『東京国立文化財研究所概要』
 『東京国立文化財研究所 20 年のあゆみ』
 『東京国立文化財研究所年報』
 『東京国立文化財研究所要覧』
 『東京文化財研究所蔵書目録』
 『東京文化財研究所要覧』
 『東京文化財研究所七十五年史 資料編』
 『東京文化財研究所年報』
 『日本美術年鑑』
 『美術研究』
 『美術研究所一覧』
 『美術研究所概要』
 『美術研究所年報』
 『文化財保存修復学会誌（古文化財の科学）』
 『保存科学』

その他の刊行物

正木直彦『十三松堂日記』（中央公論美術出版、1965～1966年）
 文化庁監修『文化財保護提要』（第一法規、1970年）
 東京国立博物館編『博物館ノ思出』（東京国立博物館、1972年）
 矢代幸雄『私の美術遍歴』（岩波書店、1972年）
 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史 本文・資料編』（東京国立博物館、1973年）
 井上房子・大久保説子・小野禮子・加藤類子・草薙奈津子他『わたしの美術館 美を想う女性群像』（大日本絵画、1990年）
 牧野伸顕『牧野伸顕日記』（中央公論社、1990年）
 秋山光和『出会いのコラージュ 秋山光和随想

集』（講談社、1994年）
 上野直昭著／芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編『上野直昭日記 東京芸術大学百年史東京美術学校篇第三巻別巻』（ぎょうせい、1997年）
 文化庁『文化財保護法五十年史』（ぎょうせい、2001年）
 岩波書店編集部編『近代日本総合年表第4版』（岩波書店、2001年）
 西川杏太郎『文化財五十年をあゆむ』（竹林舎、2003年）
 関野貞研究会編『関野貞日記』（中央公論美術出版、2009年）
 『絵』（日動 出版部）
 『芸術新潮』237～242（新潮社、1969～1970年）
 『月刊文化財』316・469（第一法規出版、1990年・2002年）
 『校友会会報』（東京美術学校校友会）
 『校友会月報』20-1～31-6（東京藝術大学、1921～1932年）
 『国民精神文化』（国民精神文化研究所）
 青木茂監修『国民美術』（ゆまに書房、1998年）
 『国立博物館ニュース』（国立博物館）
 『古文化財之科学』（古文化資料自然科学研究会）
 『図書館ジャーナル』
 『博物館研究』（博物館事業促進会）
 『博物館ニュース』（日本博物館協会）
 『読売年鑑』（読売新聞社）
 外務省公式サイト「ODA50年のあゆみ」
 OECD 東京センター公式サイト

なお、『資料編』『東京文化財研究所所蔵刊行物一覧』（845～864頁）に掲載された刊行物、及び当研究所所蔵の未公開資料等も参照した。

謝 辞

本書の刊行のために、ご協力いただきました下記の関係諸機関、ならびに関係者の方々に、深く感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)

アジア歴史資料センター、学習院大学図書館、神奈川県立近代美術館、同 葉山館
神奈川県立歴史博物館、京都国立博物館、国立教育政策研究所教育研究情報センター
教育図書館、国立公文書館、国立国会図書館、拓殖大学図書館、致道博物館、
東京藝術大学、東京国立博物館、東京大学史料編纂所、東京大学総合図書館、
東京大学法学部研究室図書室、日本芸術院、文部科学省図書館

青木繁夫、青木茂、朝日美砂子、阿部正子、阿武桂、雨宮秀子、猪川和子、板倉聖哲、
井手誠之輔、伊藤延男、上野アキ、梅沢恵、江上綏、大塚英明、大給温、小栗淑之、
小高根あき子、加藤直子、金井杜男、金澤正剛、金子啓明、川尻秀行、久野真人、見城敏子、
河野元昭、斎藤英俊、酒井英一、篠原和宏、鳥尾新、下村淳、白畑英彌、白畑よし、
鈴木映子、鈴木廣之、関千代、関口正之、滝沢恭司、田口雅代、詫摩眞澄、田澤るり子、
田中一水、辻惟雄、鶴田武良、出井千里、豊岡隼爾、長岡龍作、中川晃、中部義隆、
西浦忠輝、西川杏太郎、野久保昌良、萩原寿郁、濱田隆、林柏樹、蛭川聖二、稗田一穂、
藤原重雄、増田勝彦、馬淵久夫、村岡俊、持丸和久、森登、守中高明、吉田英里子、
吉田千鶴子、米倉迪夫、若月雄二、渡邊明義、バーバラ・トンプソン

編集後記

本書『本文編』は、当研究所 75 年史の『資料編』（2008 年 3 月刊行）に引き続き編集し、当研究所の 75 年に及ぶ「沿革」と研究部門の「調査研究」を中心に構成した。執筆、編集にあたっては、当研究所内に各部、センターから選出された編集委員を中心に編集委員会を設け、作業は分担し、全所内にわたり全面的な協力を得てすすめた。
編集委員会委員、分担執筆者、撮影等は、下記の通りである。

編集委員：井上さやか、岡田健、川野邊渉、佐野千絵、塩谷純、高桑いづみ、高柳明、田中淳、中野照男、中村明子、中村節子、山梨絵美子（五十音順、2009 年 10 月現在）

分担執筆者：石崎武志、稲葉信子、井上さやか、江村知子、岡田健、勝木言一郎、加藤雅人、川野邊渉、北野信彦、朽津信明、佐野千絵、皿井舞、塩谷純、清水真一、高桑いづみ、田中淳、津田徹英、土屋貴裕、中野照男、中村明子、中村節子、中山俊介、早川典子、二神葉子、三浦定俊、森井順之、山内和也、山梨絵美子、綿田稔（五十音順）

建物外観等の撮影：城野誠治、鳥光美佳子

さらに本書のための資料の調査収集、校正等の編集の補助にあたっていただいた非常勤職員、アシスタント等のお名前を挙げて感謝の意を表したい。

資料収集・編集補助：市川久美子、稲基朋子、大橋美織、奥島光穂子、橋本和子、福田幸枝、薬師寺君子（五十音順）

なお 2008（平成 20）年 3 月に『資料編』刊行後、諸事情により本書の編集作業に多大な時間を要し、本年の刊行に至った。この編集中の 3 年以上の間に旧研究員の 8 名の方々が逝去されている。しかし本書の 75 年史を記すという編集方針に基づき、「関連資料」中の「物故研究員等略歴」に、この方々は記載することができなかった。しかしながら、この方々については、本書に生前のインタビューを再録させていただいた故白畑よし氏を除いて、すでに、あるいはこれから刊行される当研究所編『日本美術年鑑』の当該年版の「物故者」の章に経歴及び業績が記載されることになっている。したがって、ここではお名前を挙げるにとどめ、ご冥福をお祈りするとともに、お断りしたい。

秋山光和（2009 年 3 月 10 日没。享年 90。所属：美術部）

久野 健（2007 年 7 月 27 日没。享年 87。所属：美術部、情報資料部）

関 千代（2006 年 12 月 16 日没。享年 86。所属：美術部）

高田 修（2006年10月27日没。享年99。所属：美術部）

田実栄子（2009年1月3日没。享年81。所属：美術部）

鶴田武良（2009年1月18日没。享年71。所属：修復技術部、情報資料部、美術部）

樋口清治（2008年8月17日没。享年82。所属：保存科学部、修復技術部）

（以上、敬称略、五十音順）

最後に、本書刊行のためにご協力願った関係機関等、関係者の方々に感謝の意を表するとともに、多忙を極めるそれぞれの業務のなかで、これまでともに仕事をすすめてきた所員の方々に編集委員会のメンバーとしてお礼を申し上げたい。そして本書が、75年にわたる当研究所の歴史を振り返ることにとどまらず、その歴史を誇りとして共有し、同時に未来にわたる当研究所の活動のひとつの指針として、新たな展望を開く契機になることを願ってやまない。

東京文化財研究所七十五年史
本文編

©

発行
2009年12月25日

編集・発行
独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
東京都台東区上野公園13-43
TEL.03-3823-2241

制作
中央公論美術出版
東京都中央区京橋2-8-7
TEL.03-3561-5993
